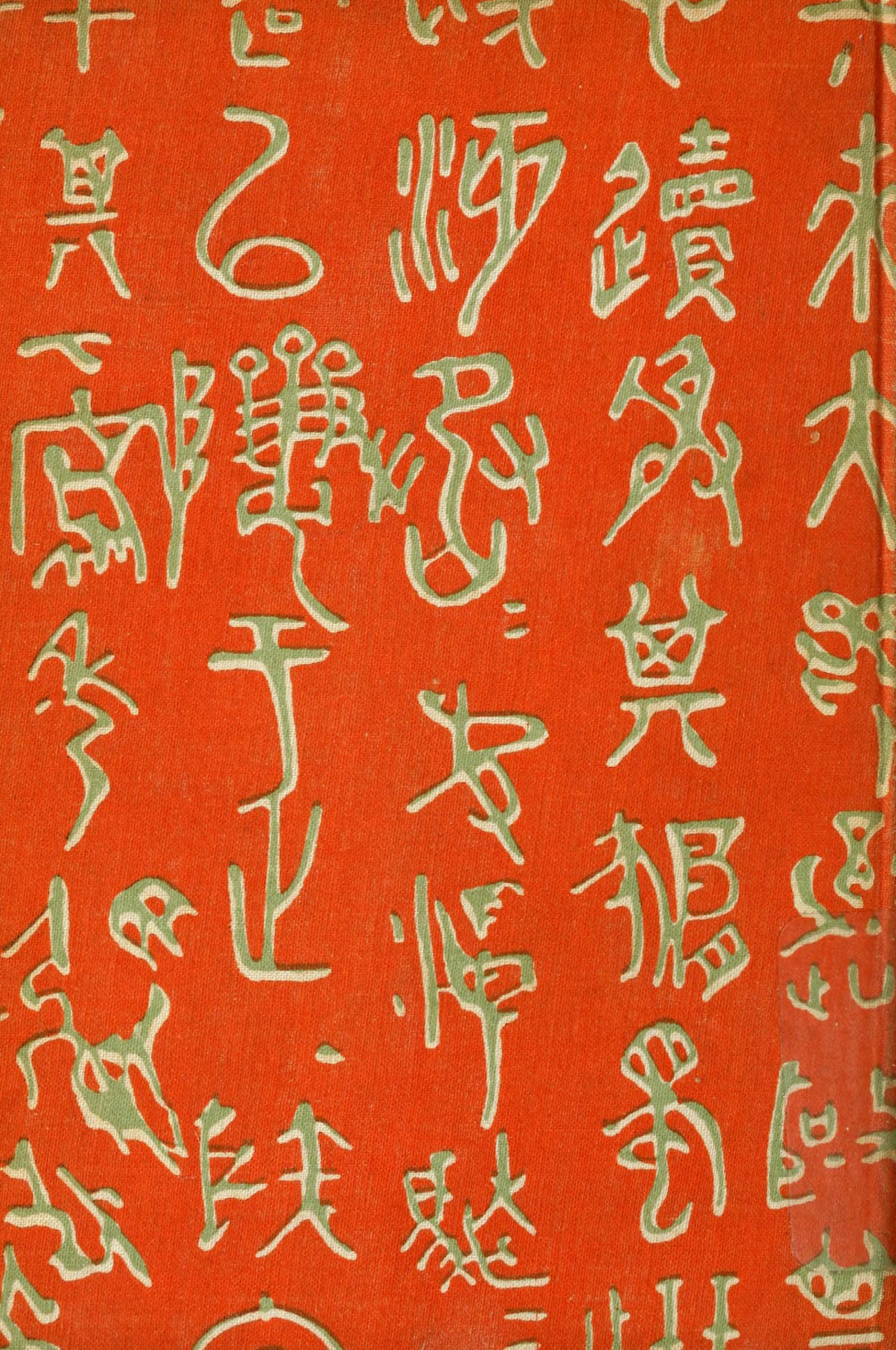

柳井藏書

漱石全集

第十巻

明暗

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

The Library of

Takaichi (T.U.) Umezuki

LIBRARY
OCT 29 1996
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

大正五年十二月二十日朝　（津田龜次郎謹寫）

明暗

五、五、二六——一二、一四

醫者は探りを入れた後で、手術臺の上から津田を下ろした。

「矢つ張り穴が腸迄續いてゐるんでした。此前探つた時は、途中に瘢痕の隆起があつたので、つい其處が行き留りだとばかり思つて、あゝ云つたんですが、今日疏通を好くする爲に、其奴をがり〳〵掻き落として見ると、まだ奥があるんです」

「さうして夫が腸迄續いてゐるんですか」

「さうです。五分位だと思つてゐたのが約一寸程あるんです」

津田の顔には苦笑の裡に淡く盛り上げられた失望の色が見えた。醫者は白いだぶ〳〵した上着の前に兩手を組み合はせた儘、一寸首を傾けた。「御氣の毒ですが事實だから仕方がありません。醫者は自分の職業に對して虚言を吐く譯に行かないんですから」といふ意味に受取れた。

津田は無言の儘帶を締め直して、椅子の背に投げ掛けられた袴を取り上げながら又醫者の方を向いた。

「腸迄續いてゐるとすると、癒りつこないんですか」

「そんな事はありません」

醫者は活潑にまた無雜作に津田の言葉を否定した。併せて彼の氣分をも否定する如くに。

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上がりこはないから、今度は治療法を変へて根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方がありませんね」

「根本的の治療と云ふと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」

津田は黙つて点頭いた。彼の傍には南側の窓下に据ゑられた洋卓の上に一台の顕微鏡が載つてゐた。医者と懇意な彼は先刻診察所へ這入つた時、物珍らしさに、それを覗かせて貰つたのである。其時八百五十倍の鏡の底に映つたものは、丸で図に撮影つたやうに鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であつた。

津田は袴を穿いて仕舞つて、其洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、不図此細菌の事を思ひ出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懐に収めた彼は既に出ようとして又躊躇した。

「もし結核性のものだとすると、仮令今仰やつた様な根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り開いて仕舞つても癒らないんでせう」

「結核性なら駄目です。夫から夫へと穴を掘つて奥の方へ進んで行くんだから、口元丈治療したつて役にや立ちません」

津田は思はず眉を寄せた。

「私のは結核性ぢやないんですか」

「いえ、結核性ぢやありません」
津田は相手の言葉にどれ程の眞實さがあるかを確めようとして、一寸眼を醫者の上に据ゑた。醫者は動かなかつた。
「何うしてそれが分るんですか。たゞの診斷で分るんですか」
「えゝ。診察た樣子で分ります」
其時看護婦が津田の後に廻つた患者の名前を室の出口に立つて呼んだ。待ち構へてゐた其患者はすぐ津田の背後に現はれた。津田は早く退却しなければならなくなつた。
「ぢや何時其根本的手術を遣つて頂けるでせう」
「何時でも。貴方の御都合の好い時で宜う御座んす」
津田は自分の都合を善く考へてから日取りを極める事にして室外に出た。

二

電車に乘つた時の彼の氣分は沈んでゐた。身動きのならない程客の込み合ふ中で、彼は釣革にぶら下がりながら只自分の事ばかり考へた。去年の疼痛があり／＼と記憶の舞臺に上つた。白いベッドの上に横たへられた無殘な自分の姿が明らかに見えた。鎖を切つて逃げる事が出來ない時に犬の出すやうな自分の唸り聲が判然聞こえた。それから冷たい刃物の光と、それが互に觸れ合ふ音と、最後に突然両方の肺臟から一度に空氣を搾り出すやうな恐ろしい力の壓迫と、壓された空氣が壓されながらに收縮する事が出來ない

ために起るとしか思はれない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲つた。

彼は不愉快になつた。急に氣を換へて自分の周圍を眺めた。周圍のものは彼の存在にすら氣が附かずにみんな澄ましてゐた。彼は又考へつゞけた。

「何うしてあんな苦しい目に會つたんだらう」

荒川堤へ花見に行つた歸り途から何等の豫告なしに突發した當時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であつた。其原因はあらゆる想像の外にあつた。不思議といふよりも寧ろ恐ろしかつた。

「此肉體はいつ何時どんな變に會はないとも限らない。それどころか、今現に何んな變が此肉體のうちに起りつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐ろしい事だ」

此所迄働いて來た彼の頭はそこで留まる事が出來なかつた。どつと後から突き落とすやうな勢ひで、彼を前の方に押し遣つた。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう變るか分らない。さうして其變る所を己は見たのだ」

彼は思はず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷つけられた人のやうな眼を彼の周圍に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつゝあるかを丸で知らない車中の乘客は、彼の眼遣ひに對して少しの注意も拂はなかつた。

彼の頭は彼の乘つてゐる電車のやうに、自分自身の軌道の上を走つて前へ進む丈であつた。彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレーの話を思ひ出した。彼の爲に「偶然」の意味を説明して呉れた其友達

は彼に向つて斯う云つた。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だといふ、所謂偶然の出來事といふのは、ポアンカレーの說によると、原因があまりに複雜過ぎて一寸見當が附かない時に云ふのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精蟲の配合が必要で、其必要な配合が出來得るためには、又何んな條件が必要であつたかと考へて見ると、殆ど想像が附かないだらう」

彼は友達の言葉を、單に與へられた新しい知識の斷片として聞き流す譯に行かなかつた。彼はそれをひたりと自分の身の上に當て嵌めて考へた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後に引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はつひぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覺えがなかつた。爲る事はみんな自分の力で爲、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行つたに違ひない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ひない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに。偶然？ポアンカレーの所謂複雜の極致？何だか解らない」

彼は電車を降りて考へながら宅の方へ歩いて行つた。

三

角を曲がつて細い小路へ這入つた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。其細君は此方を見てゐた。然し津田の影が曲り角から出るや否やすぐ正面の方へ向き直つた。さうして白い繊い手を額の所へ翳す樣にあてがつて何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄つて來る迄其態度を改めなかつた。

「おい、何を見てゐるんだ」

細君は津田の聲を聞くと左も驚いた樣に急に此方を振り向いた。

「あゝ吃驚した。――御歸り遊ばせ」

同時に細君は自分の有つてゐるあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた。それから心持腰を曲めて輕い會釋をした。

半ば細君の嬌態に應じようとした津田は半ば逡巡して立ち留まつた。

「そんな所に立つて何をしてゐるんだ」

「待つてたのよ。御歸りを」

「だつて何か一生懸命に見てゐたぢやないか」

「えゝ。あれ雀よ。雀が御向うの宅の二階の庇に巣を食つてるんでせう」

津田は一寸向うの宅の屋根を見上げた。然し其處には雀らしいものの影も見えなかつた。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」

「洋杖」

津田は始めて氣が附いた樣に自分の持つてゐる洋杖を細君に渡した。それを受取つた彼女は又自分で玄關の格子戸を開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫の後に跟いて沓脱から上がつた。

夫に着物を脱ぎ換へさせた彼女は津田が火鉢の前に坐るか坐らないうちに、また勝手の方から石鹸入を手拭に包んで持つて出た。

「一寸今のうち一風呂浴びて入らつしやい。また其處へ坐り込むと億劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭を受取つた。然しすぐ立たうとはしなかつた。

「湯は今日は已めにしようかしら」

「何故。――薩張りするから行つて入らつしやいよ。歸るとすぐ御飯にして上げますから」

津田は仕方なしに又立ち上がつた。室を出る時、彼は一寸細君の方を振り返つた。

「今日歸りに小林さんへ寄つて診て貰つて來たよ」

「さう。さうして何うなの、診察の結果は。大方もう癒つてるんでせう」

「所が癒らない。愈厄介な事になつちまつた」

津田は斯う云つたなり、後を聞きたがる細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。

同じ話題が再び夫婦の間に戻つて來たのは晩食が濟んで津田がまだ自分の室へ引き取らない前の口であつた。

「厭ね、切るなんて、怖くつて。今迄の樣にそつとして置いたつて宜かないの」

「矢つ張り醫者の方から云ふと此儘ぢや危險なんだらうね」

「だけど厭だわ、貴方。もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰好の好い眉を心持ち寄せて夫を見た。津田は取り合はずに笑つてゐた。すると細君が突然氣が附いたやうに訊いた。

「もし手術をするとすれば、又日曜でなくつちや不可ないんでせう」

細君には此次の日曜に夫と共に親類から誘はれて芝居見物に行く約束があつた。

「まだ席を取つてないんだから構やしないさ、斷つたつて」

「でも夫や惡いわ、貴方。切角親切にあゝ云つて吳れるものを斷つちや」

「惡かないよ。相當の事情があつて斷るんなら」

「でもあたし行きたいんですもの」

「御前は行きたければ御出でな」

「だから貴方も入らつしやいな、ね。御厭？」

津田は細君の顏を見て苦笑を洩らした。

四

細君は色の白い女であつた。その所爲で形の好い彼女の眉が一際引立つて見えた。彼女はまた癖のやうによく其眉を動かした。惜しい事に彼女の眼は細過ぎた。御負けに愛嬌のない一重瞼であつた。けれども

其一重瞼の中に輝く瞳子は漆黒であつた。だから非常によく働いた。或時は專横と云つてもいゝ位に表情を恣にした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き附けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。

彼が不圖眼を上げて細君を見た時、彼は刹那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今迄彼女の口にしつゝあつた甘い言葉とは全く釣り合はない妙な輝きであつた。相手の言葉に對して返事をしようとした彼の心の作用が此眼附の爲に一寸遮斷された。すると彼女はすぐ美しい齒を出して微笑した。同時に眼の表情が迹方もなく消えた。

「噓よ。あたし芝居なんか行かなくつても可いのよ。今のはたゞ甘つたれたのよ」

默つた津田は猶しばらく細君から眼を放さなかつた。

「何だつてそんな六づかしい顏をして、あたしを御覽になるの。――芝居はもう已めるから、此次の日曜に小林さんに行つて手術を受けて入らつしやい。それで好いでせう。岡本へは二三日中に端書を出すか、でなければ私が一寸行つて斷つて來ますから」

「御前は行つても可いんだよ。折角誘つて吳れたもんだから」

「いえ私も止しにするわ。芝居よりも貴方の健康の方が大事ですもの」

津田は自分の受けべき手術に就いて猶詳しい話を細君にしなければならなかつた。

「手術つたつて、さう腫物の膿を出すやうに簡單にや行かないんだよ。最初下劑を掛けて先づ腸を綺麗に掃除して置いて、それから愈切開すると、出血の危險があるかも知れないといふので、創口へガーゼ

を詰めた儘、五六日の間は凝として寢てゐるんださうだから。だから假令此次の日曜に行くとした所で、何うせ日曜一日ぢや濟まないんだ。其代り日曜が延びて月曜にならうと火曜にならうと大した違ひにやならないし、又日曜に繰り上げて明日にした所で、明後日にした所で、矢つ張り同じ事なんだ。其處へ行くとまあ樂な病氣だね」

「あんまり樂でもないわ貴方、一週間も寢たぎりで動く事が出來なくつちや」

細君は又ぴく／＼と眉を動かして見せた。津田はそれに全く無頓着であると云つた風に、何か考へながら、二人の間に置かれた長火鉢の縁に右の肘を載せて、其中に掛けてある鐵瓶の蓋を眺めた。朱銅の蓋の下では湯の沸る音が高くした。

「ぢや何うしても御勤めを一週間ばかり休まなくつちやならないわね」

「だから吉川さんに會つて訳を話して見た上で、日取りを極めやうかと思つてゐる所だ。默つて休んでも構はないやうなものゝ、左うも行かないから」

「そりや貴方御話しになる方が可いわ。平生からあんなに御世話になつてゐるんですもの」

「吉川さんに話したら明日からすぐ入院しろつて云ふかも知れない」

入院といふ言葉を聞いた細君は急に細い眼を廣げるやうにした。

「入院？　入院なさるんぢやないでせう」

「まあ入院さ」

「だつて小林さんは病院ぢやないつて何時か仰しやつたぢやないの。みんな外來の患者ばかりだつて」

「病院といふ程の病院ぢやないが、診察所の二階が空いてゐるんだから、其處へ入る事も出來るやうになつてるんだ」

「綺麗?」

津田は苦笑した。

「自宅よりは少しあ綺麗かも知れない」

今度は細君が苦笑した。

三

寢る前の一時間か二時間を机に向つて過ごす習慣になつてゐた津田はやがて立ち上がつた。細君は今迄通りの樂な姿勢で火鉢に倚りかゝつた儘夫を見上げた。

「又御勉强?」

細君は時々立ち上がる夫に向つて斯う云つた。彼女が斯ういふ時には、何時でも其語調のうちに或物足らなさがあるやうに津田の耳に響いた。ある時の彼は進んでそれに媚びようとした。ある時の彼は却て反感的にそれから逃れたくなつた。何方の場合にも、彼の心の奥底には「さう御前のやうな女とばかり遊んぢやゐられない。己には己でする事があるんだから」といふ相手を見縊つた自覺がぼんやり働いてゐた。

彼が默つて間の襖を開けて次の室へ出て行かうとした時、細君は又彼の背後から聲を掛けた。

「ぢや芝居はもう御已めね。岡本へは私から斷つて置きませうね」

津田は一寸振り向いた。

「だからお前は御出でよ、行きたければ。己は今のやうな譯で、何うなるか分らないんだから」

細君は下を向いたぎり夫を見返さなかつた。返事もしなかつた。津田はそれぎり勾配の急な階子段をぎしぎし踏んで二階へ上がつた。

彼の机の上には比較的大きな洋書が一冊載せてあつた。彼は坐るなりそれを開いて、枝折の挿んである頁を目標に其所から讀みにかゝつた。けれども三四日等閑にして置いた咎が祟つて、前後の續き具合がよく解らなかつた。それを考へ出さうとするためには勢ひ前の所をもう一遍讀み返さなければならないので、氣の差した彼は、讀む事の代りに、たゞ頁をばら／＼と翻して書物の厚味ばかりを苦にするやうに眺めた。すると前途遼遠といふ氣が自ら起つた。

彼は結婚後三四ヶ月目に始めて此書物を手にした事を思ひ出した。氣が附いて見るとそれから今日迄にもう二ヶ月以上も經つてゐるのに、彼の讀んだ頁はまだ全體の三分の二にも足らなかつた。彼は平生から世間へ出る多くの人が、出るとすぐ書物に遠ざかつて仕舞ふのを、左も下らない愚物のやうに細君の前で罵つてゐた。それを夫の口癖として聽かされた細君はまた彼を本當の勉强家として認めなければならない程比較的多くの時間が二階で費やされた。前途遼遠といふ氣と共に、面目ないといふ心持が何處からか出て來て、意地悪く彼の自尊心を擽つた。

然し今彼が自分の前に擴げてゐる書物から吸收しようと力めてゐる知識は彼の日々の業務上に必要なものではなかつた。それには餘りに專門的で、又あまりに高尚過ぎた。學校の講義から得た知識ですら滅多

に實際の役に立つた例のない今の勤め向きとは殆ど沒交渉と云つても可い位のものであつた。彼はたゞそれを一種の自信力として貯へて置きたかつた。他の注意を惹く裝飾としても身に着けて置きたかつた。その困難が今の彼に朧氣ながら見えて來た時、彼は彼の己惚れに訊いて見た。

「さう旨くは行かないものかな」

彼は默つて煙草を吹かした。それから急に氣が附いた樣に書物を伏せて立ち上がつた。さうして足早に階子段を又ぎしぎし鳴らして下へ降りた。

六

「おいお延」

彼は襖越しに細君の名を呼びながら、すぐ唐紙を開けて茶の間の入口に立つた。すると長火鉢の傍に坐つてゐる彼女の前に、何時の間にか取り擴げられた美しい帶と着物の色が忽ち彼の眼に映つた。暗い玄關から急に明るい電燈の點いた室を覗いた彼の眼にそれが常よりも際立つて華麗に見えた時、彼は一寸立ち留まつて細君の顏と派出やかな模樣とを等分に見較べた。

「今時分そんなものを出して何うするんだい」

お延は檜扇模樣の丸帶の端を膝の上に載せた儘、遠くから津田を見遣つた。

「たゞ出して見たのよ。あたし此帶まだ一遍も締めた事がないんですもの」

「それで今度その服裝で芝居に出掛けようと云ふのかね」

津田の言葉には皮肉に伴なふ或冷やかさがあつた。お延は何とも答へずに下を向いた。さうして何時もする通り黒い眉をぴくりと動かして見せた。彼女に特異な此所作は時として變に津田の心を唆すと共に、時として妙に彼の氣持を惡くさせた。彼は默つて緣側へ出て厠の戸を開けた。それから又二階へ上らうとした。すると今度は細君の方から彼を呼び留めた。

「貴方、貴方」

同時に彼女は立つて來た。さうして彼の前を塞ぐやうにして訊いた。

「何か御用なの」

彼の用事は今の彼に取つて細君の帶よりも長襦袢よりも寧ろ大事なものであつた。

「御父さんからまだ手紙は來なかつたかね」

「いゝえ、來れば何時もの通り御机の上に載せて置きますわ」

津田は其豫期した手紙が机の上に載つてゐなかつたから、わざ〳〵下りて來たのであつた。

「郵便函の中を探させませうか」

「來れば書留だから、郵便函の中へ投げ込んで行く筈はないよ」

「さうね、だけど念の爲だから、あたし一寸見て來るわ」

お延は玄關の障子を開けて沓脱へ下りようとした。

「駄目だよ。書留がそんな中に入つてる譯がないよ」

「でも書留でなくつて只のが入つてるかも知れないから、一寸待つて入らつしやい」

津田は漸く茶の間へ引き返して、先刻飯を食ふ時に坐つた座蒲團が、まだ火鉢の前に元の通り据ゑてある上に胡坐を掻いた。さうして其所に燦爛と取り亂された濃い友染模様の色を見守つた。

すぐ玄關から取つて返したお延の手には果して一通の書狀があつた。

「あつてよ、一本。ことによると御父さまからかも知れないわ」

斯う云ひながら彼女は明るい電燈の光に白い封筒を照らした。

「あゝ、矢つ張りあたしの思つた通り、御父さまからよ」

「何だ書留ぢやないのか」

津田は手紙を受け取るなり、すぐ封を切つて讀み下した。然しそれを讀んでしまつて、又封筒へ收めるために卷き返した時には、彼の手がたゞ器械的に動く丈であつた。彼は自分の手元も見なければ、またお延の顏も見なかつた。ぼんやり細君の餘所行着の荒い御召の縞柄を眺めながら獨りごとのやうに云つた。

「困るな」

「何うなすつたの」

「なに大した事ぢやない」

見榮の強い津田は手紙の中に書いてある事を、結婚してまだ間もない細君に話したくなかつた。けれどもそれはまた細君に話さなければならない事でもあつた。

七

「今月は何時もの通り送金が出來ないから其方で何うか都合して置けといふんだ。年寄は是だから困るね。そんなら左うともつと早く云つて呉れゝば可いのに、突然金の要る間際になつて、斯んな事を云つて來て……」

「一體何ういふ譯なんでせう」

津田は一旦卷き收めた手紙をまた封筒から出して膝の上で繰り擴げた。

「貸家が二軒先月末に空いちまつたんださうだ。それから塞がつてる分からも家賃が入つて來ないんださうだ。其所へ持つて來て、庭の手入れだの垣根の繕ひだので、大分臨時費が嵩んだから今月は送れないつて云ふんだ」

彼は開いた手紙を、其儘火鉢の向う側にゐるお延の手に渡した。お延は又何とも云はずにそれを受取つたきり、別に讀まうともしなかつた。此冷やかな細君の態度が津田には最初から恐れてゐたのであつた。

「なにそんな家賃なんぞ當てにしないだつて、送つてさへ呉れようと思へば何うにでも都合は附くのさ。垣根を繕ふたつて若干掛かるものかね。煉瓦の塀を一丁も拵へやしまいし」

津田の言葉に僞りはなかつた。彼の父はよし富裕でない迄も、毎月息子夫婦の爲に其生計の不足を補つてやる位の出費に窮する身分ではなかつた。たゞ彼は地味な人であつた。津田から云へば地味過ぎる位質素であつた。津田よりもずつと派出好きな細君から見れば殆ど無意味に近い節儉家であつた。

「御父さまは屹度私達が要らない贅澤をして、無暗に御金をぱつ／＼と遣ふ樣にでも思つていらつしやるのよ。屹度さうよ」

「うん此前京都へ行つた時にも何だかそんな事を云つてたぢやないか。年寄はね、何でも自分の若い時の生計を覺えて居て、同年配の今の若いものも、萬事自分のして來た通りにしなければならない樣に考へるんだからね。そりや御父さんの三十も己の三十も年齒に變りはないかも知れないが、周圍は丸で違つてゐるんだから左うは行かないさ。何時かも會へ行く時會費は幾何だと訊くから五圓だつて云つたら、驚いて恐ろしい樣な顏をした事があるよ」

津田は平生からお延が自分の父を輕蔑する事を恐れてゐた。それでゐて彼は彼女の前にわが父に對する非難がましい言葉を洩らさなければならなかつた。それは本當に彼の感じた通りの言葉であつた。同時にお延の批判に對して先手を打つといふ點で、自分と父の言譯にもなつた。

「で今月は何うするの。たゞでさへ足りない所へ持つて來て、貴方が手術のために一週間も入院なさると、また其方の方でも幾何か掛かるでせう」

夫の手前老人に對する批評を憚つた細君の話頭は、すぐ實際問題の方へ入つて來た。津田の答は用意されてゐなかつた。しばらくして彼は小聲で獨語のやうに云つた。

「藤井の叔父に金があると、彼所へ行くんだが……」

お延は夫の顏を見詰めた。

「もう一遍御父さまの所へ云つて上げる譯にや行かないの。序に病氣の事も書いて」

「書いて遣れない事もないが、また何とか蚊とか云つて來られると面倒だからね。御父さんに捕まると、そりや中々埒は開かないよ」

「でも外に當てがなければ仕方なかないの」
「だから書かないとは云はない。此方の事情が好く向うへ通じるやうにする事はする積りだが、何しろすぐの間には合はないからな」
「さうね」
其時津田は眞ともにお延の方を見た。さうして思ひ切つた樣な口調で云つた。
「何うだ御前岡本さんへ行つて一寸融通して貰つて來ないか」

八

「厭よ、あたし」
お延はすぐ斷つた。彼女の言葉には何の淀みもなかつた。遠慮と斟酌を通り越した其語氣が津田にはあまりに不意過ぎた。彼は相當の速力で走つてゐる自働車を、突然停められた時のやうな衝撃を受けた。彼は自分に同情のない細君に對して氣を惡くする前に、先づ驚いた。さうして細君の顏を眺めた。
「あたし、厭よ。岡本へ行つてそんな話しをするのは」
お延は再び同じ言葉を夫の前に繰り返した。
「さうかい。それぢや強ひて賴まないでも可い。然し……」
津田が斯う云ひ掛けた時、お延は冷やかな（けれども落附いた）夫の言葉を、掬つて追ひ退けるやうに遮つた。

「だつて、あたし極りが惡いんですもの。何時でも行くたんびに、お延は好い所へ嫁に行つて仕合せだ、厄介はなし、生計に困るんぢやなしつて云はれ附けてゐる所へ持つて來て、不意にそんな御金の話しなんかすると、屹度變な顏をされるに極まつてゐるわ」

お延が一概に津田の依賴を斥けたのは、夫に同情がないといふよりも、寧ろ岡本に對する見榮に制せられたのだといふ事が漸く津田の腑に落ちた。彼の眼のうちに宿つた冷やかな光が消えた。

「そんなに樂な身分のやうに吹聽しちや困るよ。買ひ被られるのも可いが、時によると却てそれが爲に迷惑しないとも限らないからね」

「あたし吹聽した覺えなんかないわ。たゞ向うでさう極めてゐる丈よ」

津田は追窮もしなかつた。お延もそれ以上説明する面倒を取らなかつた。二人は一寸會話を途切らした後で又實際問題に立ち戻つた。然し今迄自分の經濟に關して餘り心を痛めた事のない津田には、別に何うしようといふ分別も出なかつた。「御父さんにも困つちまふな」といふ丈であつた。

お延は偶然思ひ附いた樣に、今迄其方除けにしてあつた、自分の晴れ着と帶に眼を移した。

「これ何うかしませうか」

彼女は金の入つた厚い帶の端を手に取つて、夫の眼に映るやうに、電燈の光に翳した。津田には其意味が一寸呑み込めなかつた。

「何うかするつて、何うするんだい」

「質屋へ持つてつたら御金を貸して呉れるでせう」

津田は驚かされた。自分が未だ曾て經驗した事のないやうな遣り繰り算段を、嫁に來たての若い細君が、疾くの昔から承知してゐるとすれば、それは彼に取つて驚くべき價値のある發見に相違なかつた。

「御前自分の着物かなんか質に入れた事があるのかい」

「ないわ、そんな事」

お延は笑ひながら、輕蔑むやうな口調で津田の問を打ち消した。

「ぢや質に入れるにした所で樣子が分らないだらう」

「えゝ。だけどそんな事何でもないでせう。入れると事が極まれば」

津田は極端な場合の外、自分の細君にさうした下卑た眞似をさせたくなかつた。お延は辯解した。

「時が知つてるのよ。あの婢は宅にゐる時分よく風呂敷包を抱へて質屋へ使ひに行つた事があるんですつて。それから近頃ぢや端書さへ出せば、向うから品物を受取りに來て呉れるつていふぢやありませんか」

細君が大事な着物や帶を自分のために提供して呉れるのは津田に取つて嬉しい事實であつた。然しそれを敢てさせるのは又彼に取つての苦痛に外ならなかつた。細君に對して氣の毒といふよりも寧ろ夫の矜りを傷つけるといふ意味に於て彼は躊躇した。

「まあ好く考へて見よう」

彼は金策上何等の解決も與へずに又二階へ上がつて行つた。

九

翌日津田は例の如く自分の勤め先へ出た。彼は午前に一回ひよつくり階子段の途中で吉川に出會つた。然し彼は下りがけ、向うは上りがけだつたので、擦れ違ひに丁寧な御辭儀をしたきり、彼は何も云はなかつた。もう午飯に間もないといふ頃、彼はそつと吉川の室の戸を敲いて、遠慮がちな顔を半分程中へ出した。其時吉川は煙草を吹かしながら客と話をしてゐた。其客は無論彼の知らない人であつた。彼が戸を半分程開けた時、今迄調子づいてゐたらしい主客の會話が突然止まつた。さうして二人とも此方を向いた。

「何か用かい」

吉川から先へ言葉を掛けられた津田は室の入口で立ち留まつた。

「一寸……」

「君自身の用事かい」

津田は固より表向きの用事で、此室へ始終出入すべき人ではなかつた。險の惡さうな顔附をした彼は答へた。

「さうです。一寸……」

「そんなら後にして呉れ給へ。今少し差支へるから」

「はあ。氣が附かない事をして失禮しました」

音のしないやうに戸を締めた津田は又自分の机の前に歸つた。

午後になつてから彼は二遍ばかり同じ戸の前に立つた。然し二遍共吉川の姿は其所に見えなかつた。

「何處かへ行かれたのかい」

津田は下へ降りた序に玄關にゐる給仕に訊いた。眼鼻だちの整つた其少年は、石段の下に寢てゐる毛の長い茶色の犬の方へ自分の手を長く出して、それを段上へ招き寄せる魔術の如くに口笛を鳴らしてゐた。

「えゝ先刻御客さまと一所に御出掛けになりました。ことによると今日はもう此方へは御歸りにならないかも知れませんよ」

毎日人の出入りの番ばかりして暮らしてゐる此給仕は、少なくとも此點にかけて、津田よりも確かな豫言者であつた。津田はだれが伴れて來たか分らない茶色の犬と、それから其犬を友達にしようとして大いに骨を折つてゐる此給仕とを其儘にして置いて、又自分の机の前に立ち戻つた。さうして其所で定刻迄例の如く事務を執つた。

時間になつた時、彼は外の人よりも一足後れて大きな建物を出た。彼は何時もの通り停留所の方へ歩きながら、不圖思ひ出したやうに、又隱袋から時計を出して眺めた。それは精密な時刻を知るためよりも寧ろ自分の歩いて行く方向を決する爲であつた。歸りに吉川の私宅へ寄つたものか、止したものかと考へて、無意味に時計と相談したと同じ事であつた。

彼はとう〳〵自分の家とは反對の方角に走る電車に飛び乘つた。吉川の不在勝ちな事をよく知り拔いてゐる彼は、宅迄行つた所で必ず會へるとも思つてゐなかつた。たまさか居たにした所で、都合が惡ければ會はずに歸される丈だといふ事も承知してゐた。然し彼としては時々吉川家の門を潛る必要があつた。それは禮儀の爲でもあつた。義理の爲でもあつた。又利害の爲でもあつた。最後には單なる虛榮心のためでもあつた。

「津田は吉川と特別の知り合ひである」
彼は時々斯ういふ事實を背中に背負つて見たくなつた。それから其荷を背負つた儘みんなの前に立ちたくなつた。しかも自ら重んずるといつた風の彼の平生の態度を毫も崩さずに、此事實を背負つてゐたかつた。物をなるべく奥の方へ押し隱しながら、其押し隱してゐる所を、却て他に見せたがるのと同じやうな心理作用の下に、彼は今吉川の玄關に立つた。さうして彼自身は飽く迄も用事のためにわざ〳〵此所へ來たものと自分を解釋してゐた。

十

嚴しい表玄關の戸は何時もの通り締まつてゐた。津田は其上半部に透し彫のやうに篏め込まれた厚い格子の中を何氣なく覗いた。中には大きな花崗石の沓脱が靜かに横たはつてゐた。それから天井の眞中から蒼黒い色をした鑄物の電燈笠が下がつてゐた。今迄つひぞ此所に足を踏み込んだ例のない彼はわざとそこを通り越して横手へ廻つた。さうして書生部屋のすぐ傍にある内玄關から案内を頼んだ。
「まだ御歸りになりません」
小倉の袴を着けて彼の前に膝をついた書生の返事は簡單であつた。それですぐ相手が歸るものと呑み込んでゐるらしい彼の樣子が少し津田を弱らせた。津田はたう〳〵折り返して訊いた。
「奥さんは御出でですか」
「奥さんは入らつしやいます」

事實を云ふと津田は吉川よりも却つて細君の方と懇意であつた。足を此所迄運んで來る途中の彼の頭の中には、既に最初から細君に會はうといふ氣分が大分働いてゐた。

「では何うぞ奥さんに」

彼はまだ自分の顔を知らない此新らしい書生に、もう一遍取次を頼み直した。書生は厭な顔もせずに奥へ入つた。それから又出て來た時、少し改まつた口調で、「奥さんが御目に御掛かりになると仰しやいますから何うぞ」と云つて彼を西洋建の應接間へ案内した。

彼が其所にある椅子に腰を掛けるや否や、まだ茶も莨盆も運ばれない先に、細君はすぐ顔を出した。

「今御歸りがけ？」

彼は卸ろした腰を又立てなければならなかつた。

「奥さんは何うなすつて」

津田の挨拶に輕い會釋をしたなり席に着いた細君はすぐ斯う訊いた。津田は一寸苦笑した。何と返事をして可いか分らなかつた。

「奥さんが出來た所爲か近頃はあんまり宅へ入らつしやらなくなつた様ね」

細君の言葉には遠慮も何もなかつた。彼女は自分の前に年齢下の男を見る丈であつた。さうして其年齢下の男はかねて眼下の男であつた。

「まだ嬉しいんでせう」

津田は輕く砂を揚げて來る風を、凝として遣り過ごす時のやうに、大人しくしてゐた。

「だけど、もう餘つ程になるわね、結婚なすつてから」
「え〻もう半歳と少しになります」
「早いものね、つい此間だと思つてゐたのに。——それで何うなの此頃は」
「何がです」
「御夫婦仲がよ」
「別に何うといふ事もありません」
「ぢやもう嬉しい所は通り越しちまつたの。嘘を仰しやい」
「嬉しい所なんか始めからないんですから、仕方がありません」
「ぢや是からよ。もし始めからないなら、是からよ、嬉しい所の出て來るのは」
「難有う、ぢや樂しみにして待つてゐませう」
「時に貴方御いくつ？」
「もう澤山です」
「澤山ぢやないわよ。一寸伺ひたいから伺つたんだから、正直に淡白と仰しやいよ」
「ぢや申上げます。實は三十です」
「すると來年はもう一ね」
「順に行けばまあさうなる勘定です」
「お延さんは？」

「あいつは三です」
「來年？」
「いえ今年」

十一

吉川の細君は斯んな調子でよく津田に調戯つた。機嫌の好い時は猶更であつた。津田も折々は向うを調戯ひ返した。けれども彼の見た細君の態度には、笑談とも眞面目とも片の附かない或物が閃めく事が度々あつた。そんな場合に出會ふと、根強い性質に出來上つてゐる彼は、談話の途中でよく拘泥つた。さうしてもし事情が許すならば、何處迄も話しの根を掘つて、相手の本意を突き留めようとした。遠慮のために其所迄行けない時は、默つて相手の顏色丈を注視した。其時の彼の眼には必然の結果として何時でも輕い疑ひの雲がかゝつた。それが臆病にも見えた。注意深くも見えた。又は自衞的に慢ぶる神經の光を放つかの如くにも見えた。最後に、思慮に充ちた不安、とでも形容して然るべき一種の匂も帶びてゐた。吉川の細君は津田に會ふたんびに、一度か二度屹度彼を其所迄追ひ込んだ。津田は又それと自覺しながら何時の間にか其所へ引き摺り込まれた。

「奥さんは隨分意地が惡いですね」

「何うして？貴方方の御年齒を伺つたのが意地が惡いの」

「さう云ふ譯でもないですが、何だか意味のあるやうな、又ないやうな訊き方をして置いて、わざと其

後を仰しやらないんだから」

「後なんかありやしないわよ。一體貴方はあんまり研究家だから駄目ね。學問をするには研究が必要かも知れないけれども、交際に研究は禁物よ。あなたが其癖を已めると、もつと人好きのする好い男になれるんだけれども」

津田は少し痛かつた。けれどもそれは彼の胸に來る痛さで、彼の頭に應へる痛さではなかつた。彼の頭は此露骨な打撃の前に冷然として相手を見下してゐた。細君は微笑した。

「嘘だと思ふなら、歸つて貴方の奧さんに訊いて御覽遊ばせ。お延さんも屹度私と同意見だから。お延さんばかりぢやないわ、まだ外にもう一人ある筈よ、屹度」

津田の顏が急に堅くなつた。唇の肉が少し動いた。彼は眼を自分の膝の上に落としたぎり何も答へなかつた。

「解つたでせう、誰だか」

細君は彼の顏を覗き込むやうにして訊いた。彼は固より其の誰であるかを能く承知してゐた。けれども細君の云ふ事を肯定する氣は毫もなかつた。再び顏を上げた時、彼は沈默の眼を細君の方に向けた。其眼が無言の裡に何を語つてゐるか、細君には解らなかつた。

「御氣に障つたら堪忍して頂戴。さう云ふ積りで云つたんぢやないんだから」

「いえ何とも思つちやゐません」

「本當に？」

「本當に何とも思つちやゐませんよ」
「それでやつと安心した」
細君はすぐ元の輕い調子を恢復した。
「貴方まだ何處か子供々々した所があるのね、斯うして話してゐると。だから男は損な樣で矢つ張り得なのね。貴方はそら今仰しやつた通り丁度でせう、それからお延さんが今年二十三になるんだから、年齒でいふと、餘つ程違ふんだけれども、樣子からいふと、却て奧さんの方が更けてる位よ。更けてると云つちや失禮に當たるかも知れないけれども、何と云つたら可いでせうね、まあ……」
細君は津田を前に置いてお延の樣子を形容する言葉を思案するらしかつた。津田は多少の好奇心をもつて、それを待ち受けた。
「まあ老成よ。本當に怜悧な方ね、あんな怜悧な方は滅多に見た事がない。大事にして御上げなさいよ」
細君の語勢からいふと「大事にしてやれ」といふ代りに「好く氣を付けろ」と云つても大した變りはなかつた。

十二

其時二人の頭の上に下がつてゐる電燈がぱつと點いた。先刻取次に出た書生がそつと室の中へ入つて來て、音のしないやうにブラインドを卸ろして、又無言の儘出て行つた。瓦斯煖爐の色の段々濃くなつて來るのを、最前から注意して見てゐた津田は、默つて書生の後姿を目送した。もう好い加減に話しを切り上

げて歸らなければならないといふ氣がした。彼は自分の前に置かれた紅茶茶碗の底に冷たく浮いてゐる檸檬の一切れを除けるやうにして其餘りを殘りなく啜つた。さうしてそれを合圖に、自分の持つて來た用事を細君に打ち明けた。用事は固より簡單であつた。けれども細君の諾否丈ですぐ決定されべき性質のものではなかつた。彼の自由に使用したいといふ一週間前後の時日を、月の何處へ置いて可いか、其處は彼女にも丸で解らなかつた。

「何時だつて構やしないんでせう。繰合せさへ附けば」

彼女はさも無雜作な口振で津田に好意を表して吳れた。

「無論繰合せは附くやうにして置いたんですが……」

「ぢや好いぢやありませんか。明日から休んだつて」

「でも一寸伺つた上でないと」

「ぢや歸つたら私からよく話して置きませう。心配する事も何もないわ」

細君は快く引き受けた。恰も自分が他の爲に働いてやる用事が又一つ出來たのを喜ぶやうにも見えた。津田は此機嫌のいゝ、さうして同情のある夫人を自分の前に見るのが嬉しかつた。自分の態度なり所作なりが原動力になつて、相手をさうさせたのだといふ自覺が彼を猶更嬉しくした。

彼はある意味に於て、此細君から子供扱ひにされるのを好いてゐた。それは子供扱ひにされるために二人の間に起る一種の親しみを自分が握る事が出來たからである。さうして其親しみをよく〳〵立ち割つて見ると、矢張り男女兩性の間にしか起り得ない特殊な親しみであつた。例へて云ふと、或人が茶屋女など

に突然背中を打やされた刹那に受ける快感に近い或物であつた。

同時に彼は吉川の細君などが何うしても子供扱ひにする事の出来ない自己を裕かに有つてゐた。彼は其自己をわざと押し蔵して細君の前に立つ用意を忘れなかつた。斯くして彼は心置きなく細君から嬲られる時の軽い感じを前に受けながら、背後は何時でも自分の築いた厚い重い壁に倚りかゝつてゐた。

彼が用事を済まして椅子を離れようとした時、細君は突然口を開いた。

「また子供のやうに泣いたり唸つたりしちや不可ませんよ。大きな體をして」

津田は思はず去年の苦痛を思ひ出した。

「あの時は實際弱りました。唐紙の開閉が局部に應へて、其度にぴくん／＼と身體全體が寢床の上で飛び上がつた位なんですから。然し今度は大丈夫です」

「さう？誰が請合つて呉れたの。何だか解つたもんぢやないわね。餘り口幅つたい事を仰しやると、見届けに行きますよ」

「あなたに見舞ひに來て頂けるやうな所ぢやありません。狭くつて汚くつて變な部屋なんですから」

「一向構はないわ」

細君の様子は本氣なのか調戯ふのか一寸要領を得なかつた。醫者の専門が、自分の病氣以外の或方面に屬するので、婦人などはあまり其所へ近附かない方が可いと云はうとした津田は、少し口籠もつて躊躇した。細君は虚に乘じて肉薄した。

「行きますよ、少し貴方に話す事があるから。お延さんの前ぢや話しにくい事なんだから」

「ぢや其内又私の方から伺ひます」
細君は逃げるやうにして立つた津田を、笑ひ聲と共に應接間から送り出した。

十三

往來へ出た津田の足は次第に吉川の家を遠ざかつた。けれども彼の頭は彼の足程早く今迄居た應接間を離れる譯に行かなかつた。彼は比較的人通りの少ない宵闇の町を歩きながら、やはり明るい室内の光景をちら／＼見た。

冷たさうに燦つく肌合の七寶製の花瓶、其花瓶の滑らかな表面に流れる華麗な模樣の色、卓上に運ばれた銀きせの丸盆、同じ色の角砂糖入れと牛乳入れ、蒼黑い地の中に茶の唐草模樣を浮かした重さうな窓掛、三隅に金箔を置いた裝飾用のアルバム、――斯ういふものの強い刺戟が、既に明るい電燈の下を去つて、暗い戸外へ出た彼の眼の中を不秩序に往來した。

彼は無論此渦まく色の中に坐つてゐる女主人公の幻影を忘れる事が出來なかつた。彼は歩きながら先刻彼女と取り換はせた會話を、ぽつり／＼思ひ出した。さうして其の或部分に來ると恰も炒豆を口に入れた人の樣に、咀嚼しつゝ味はつた。

「あの細君はことによると、まだあの事件に就いて、己に何か話しをする氣かも知れない。其話しを實は己は聞きたくないのだ。然し又非常に聞きたいのだ」

彼は此矛盾した兩面を自分の胸の中で自分に公言した時、忽ちわが弱點を曝露した人のやうに、暗い路

の上で赤面した。彼は其赤面を通り抜ける爲に、わざとすぐ先へ出た。

「若しあの細君があの事件に就いて己に何か云ひ出す氣があるとすると、その主意は果して何處にあるだらう」

今の津田は決して此問題に解決を與へる事が出來なかつた。

「己に調戯ふため？」

それは何とも云へなかつた。彼女は元來他に調戯ふ事の好きな女であつた。さうして二人の間柄は其方面の自由を彼女に與へるに充分であつた。其上彼女の地位は知らず識らずの間に今の彼女を放慢にした。彼を焦らす事から受け得られる單なる快感のために、遠慮の埒を平氣で跨ぐかも知れなかつた。

「もし左うでないとしたら、……己に對する同情のため？己を贔屓にし過ぎるため？」

それも何とも云へなかつた。今迄も彼女は實際彼に對して親切でもあり、又贔屓にもして呉れた。

彼は廣い通へ來て其所から電車へ乘つた。堀端を沿うて走る其電車の窓硝子の外には、黑い水と黑い土手と、それから其土手の上に蟠まる黑い松の木が見える丈であつた。

車内の片隅に席を取つた彼は、窓を透かして此さむ〴〵しい秋の夜の景色に一寸眼を注いだ後、すぐ又外の事を考へなければならなかつた。彼は面倒になつて昨夕は其儘にして置いた金の工面を何うかしなければならない位地にあつた。彼はすぐ又吉川の細君の事を思ひ出した。

「先刻事情を打ち明けて此方から云ひ出しさへすれば譯はなかつたのに」

さう思ふと、自分が氣を利かした積りで、斯う早く席を立つて來てしまつたのが殘り惜しくなつた。と

去つて、今更其用事丈で、また彼女に會ひに行く勇氣は彼には全くなかつた。

電車を下りて橋を渡る時、彼は暗い欄干の下に蹲踞る乞食を見た。其乞食は動く黒い影の樣に彼の前に頭を下げた。彼は身に薄い外套を着けてゐた。季節からいふと寧ろ早過ぎる瓦斯煖爐の温かい焔をもう見て來た。けれども乞食と彼との懸隔は今の彼の眼中には殆ど入る餘地がなかつた。彼は窮した人のやうに感じた。父が例月の通り金を送つて呉れないのが不都合に思はれた。

十四

津田は同じ氣分で自分の宅の門前迄歩いた。彼が玄關の格子へ手を掛けようとすると、格子のまだ開かない先に、障子の方がすうと開いた。さうしてお延の姿が何時の間にか彼の前に現はれてゐた。彼は吃驚したやうに、薄化粧を施した彼女の横顔を眺めた。

彼は結婚後斯んな事でよく自分の細君から驚かされた。彼女の行爲は時として夫の先を越すといふ惡い結果を生む代りに、時としては非常に氣の利いた證據をも擧げた。日常瑣末の事件のうちに、よく此特色を發揮する彼女の所作を、津田は時々自分の眼先にちらつく洋刀の光のやうに眺める事があつた。小さいながら冴えてゐるといふ感じと共に、何處か氣味の惡いといふ心持も起つた。

咄嗟の場合津田はお延が何かの力で自分の歸りを豫感したやうに思つた。けれども其譯を訊く氣にはならなかつた。譯を訊いて笑ひながらはぐらかされるのは、夫の敗北のやうに見えた。

彼は澄まして玄關から上へ上がつた。さうしてすぐ着物を着換へた。茶の間の火鉢の前には黒塗の足の

開いた膳の上に布巾を掛けたのが、彼の歸りを待ち受けた如くに据ゑてあつた。

「今日も何處かへ御廻り？」

津田が一定の時刻に宅へ歸らないと、お延は屹度斯ういふ質問を掛けた。勢ひ津田は何とか返事をしなければならなかつた。然しさう用事ばかりで遲くなるとも限らないので、時によると彼の答は變に曖昧なものになつた。そんな場合の彼は、自分のために薄化粧をしたお延の顏をわざと見ないやうにした。

「中てて見ませうか」

「うん」

今日の津田は如何にも平氣であつた。

「吉川さんでせう」

「能く中たるね」

「大抵容子で解りますわ」

「左うかね。尤も昨夜吉川さんに話しをしてから手術の日取りを極める事にしようつて云つたんだから、中たる譯は譯だね」

「そんな事がなくつたつて、妾中てるわ」

「さうか。偉いね」

津田は吉川の細君に頼んで來た要點丈をお延に傳へた。

「ぢや何時から、その治療に取りかゝるの」

「さういふ譯だから、まあ何時からでも構はないやうなもんだけれども……」

津田の腹には、其治療にとりかゝる前に、是非金の工面をしなければならないといふ屈託があつた。其額は無論大したものではなかつた。然し大した額でない丈に、是といふ簡便な調達方の胸に浮かばない彼を、猶焦つかせた。

彼は神田にゐる妹の事を一寸思ひ浮かべて見たが、其所へ足を向ける氣にはどうしてもなれなかつた。彼が結婚後家計膨脹といふ名義の下に、毎月の不足を京都にゐる父から塡補して貰ふ事になつた一面には、盆暮の賞與で、その何分かを返濟するといふ條件があつた。彼は色々の事情から、此夏その條件を履行しなかつたために、彼の父は既に感情を害してゐた。それを知つてゐる妹は又大體の上に於て寧ろ父の同情者であつた。妹の夫の手前、金の問題などを彼女の前に持ち出すのを最初から屑しとしなかつた彼は、此事情のために、猶更堅くなつた。彼は已むを得なければ、お延の忠告通り、もう一遍父に手紙を出して事情を訴へるより外に仕方がないと思つた。それには今の病氣を、少し手重に書くのが得策だらうとも考へた。父母に心配を掛けない程度で、實際の事實に多少の光澤を着ける位の事は、良心の苦痛を忍ばないで誰にでも出來る手加減であつた。

「お延昨夜御前の云つた通りもう一遍御父さんに手紙を出さうよ」

「さう。でも……」

お延は「でも」と云つたなり津田を見た。津田は構はず二階へ上がつて机の前に坐つた。

十五

西洋流のレターペーパーを使ひつけた彼は、机の抽斗からラヴェンダー色の紙と封筒とを取り出して、其紙の上へ萬年筆で何心なく二三行書きかけた時、不圖氣が付いた。彼の父は洋筆や萬年筆でだらしなく綴られた言文一致の手紙などを、自分の倅から受け取る事を平生からあまり喜こんでゐなかつた。彼は遠くにゐる父の顔を眼の前に思ひ浮かべながら、苦笑して筆を擱いた。手紙を書いて遣つた所で到底駄目だといふ氣が續いて起つた。彼は木炭紙に似たざらつく厚い紙の餘りへ、山羊髯を生やした細面の父の顔をいたづらにスケッチして、何うしようかと考へた。

やがて彼は決心して立ち上がつた。襖を開けて、二階の上り口の所に出て、其處から下にゐる細君を呼んだ。

「お延御前の所に日本の卷紙と狀袋があるかね。あるなら一寸御貸し」

「日本の？」

細君の耳には此形容詞が變に滑稽に聞こえた。

「女のならあるわ」

津田は又自分の前に粹な模様入りの半切を擴げて見た。

「是なら氣に入るかしら」

「中さへ好く解るやうに書いて上げたら紙なんか何うでも可かないの」

「左うは行かないよ。御父さんはあれで中々六づかしいんだからね」
津田は眞面目な顏をして猶半切を見詰めてゐた。お延の口元には薄笑ひの影が差した。
「時を一寸買はせに遣りませうか」
「うん」
津田は生返事をした。白い卷紙と無地の封筒さへあれば、必ず自分の希望が成功するといふ譯にも行かなかつた。
「待つていらつしやい。ぢきだから」
お延はすぐ下へ降りた。やがて潛り戸が開いて下女の外へ出る足音が聞こえた。津田は必要の品物が自分の手に入る迄、何もせずに、たゞ机の前に坐つて煙草を吹かした。
彼の頭は勢ひ彼の父を離れなかつた。東京に生れて東京に育つた其父は、何ぞといふとすぐ上方の惡口を云ひたがる癖に、何時か永住の目的をもつて京都に落ち付いてしまつた。彼が其土地を餘り好まない母に同情して多少不贊成の意を洩らした時、父は自分で買つた土地と自分が建てた家とを彼に示して、「是を何うする氣か」と云つた。今よりもまだ年の若かつた彼は、父の言葉の意味さへよく解らなかつた。處置はどうでも出來るのにと思つた。父は時々彼に向つて、「誰の爲でもない、みんな御前の爲だ」と云つた。「今は其難有味が解らないかも知れないが、己が死んで見ろ、屹度解る時が來るから」とも云つた。彼は頭の中で父の言葉と、其言葉を口にする時の父の態度とを描き出した。子供の未來の幸福を一手に引き受けたやうな自信に充ちた其樣子が近づくべからざる豫言者のやうに、彼には見えた。彼は想像の眼で見る

父に向つて云ひたくなつた。

「御父さんが死んだ後で、一度に御父さんの難有味が解るよりも、御父さんが生きてゐるうちから、毎月正確に御父さんの難有味が少しづゝ解る方が、何の位樂だか知れやしません」

彼が父の機嫌を損ねないやうな卷紙の上へ、成るべく金を送つて呉れさうな文句を、堅苦しい候文で認め出したのは、それから約十分後であつた。彼はぎごちない思ひをして、漸くそれを書き上げた後で、もう一遍讀み返した時に、自分の字の拙い事につくづく愛想を盡かした。文句はとにかく、斯んな字では到底成功する資格がないやうにも思つた。最後に、よし成功しても、此方で要る明日迄に金はとても來ないやうな氣がした。下女にそれを投函させた後、彼は默つて床の中へ潛り込みながら、腹の中で云つた。

「其時は其時の事だ」

十六

翌日の午後津田は呼び附けられて吉川の前に立つた。

「昨日宅へ來たつてね」

「えゝ一寸御留守へ伺つて、奥さんに御目に掛かつて參りました」

「また病氣ださうぢやないか」

「えゝ少し……」

「困るね。さうよく病氣をしちや」

「何實は此前の續きです」
吉川は少し意外さうな顏をして、今迄使つてゐた食後の小楊子を口から吐き出した。それから内隱袋を探つて莨入を取り出さうとした。津田はすぐ灰皿の上にあつた燐寸を擦つた。あまり氣を利かさうと急いたものだから、一本目は役に立たないで直ぐ消えた。彼は周章て二本目を擦つて、それを大事さうに吉川の鼻の先へ持つて行つた。
「何しろ病氣なら仕方がない、休んでよく養生したら可いだらう」
津田は禮を云つて室を出ようとした。吉川は煙の間から訊いた。
「佐々木には斷つたらうね」
「えゝ佐々木さんにも外の人にも話して、繰合せをして貰ふ事にしてあります」
佐々木は彼の上役であつた。
「何うせ休むなら早い方が可いね。早く養生して早く好くなつて、さうしてせつせと働かなくつちや駄目だ」
吉川の言葉は好く彼の氣性を現はしてゐた。
「都合が好ければ明日からにし給へ」
「へえ」
斯う云はれた津田は否應なしに明日から入院しなければならないやうな心持がした。
彼の身體が半分戸の外へ出掛かつた時、彼は又後から呼び留められた。

「おい君、御父さんは近頃何うしたね。相変らず御丈夫かね」

振り返つた津田の鼻を葉巻の好い香が急に冒した。

「へえ、難有う、御蔭さまで達者で御座います」

「大方詩でも作つて遊んでるんだらう。氣樂で好いね。昨夕も岡本と或所で落ち合つて、君の御父さんの噂をしたがね。岡本も羨ましがつてたよ。彼の男も近頃少し閑暇になつたやうなものの矢つ張り、君の御父さんの樣にや行かないからね」

津田は自分の父が決して是等の人から羨ましがられてゐるとは思はなかつた。もし父の境遇に彼等を置いてやらうといふものがあつたなら、彼等は苦笑して、少なくとももう十年は此儘にして置いて呉れと頼むだらうと考へた。それは固より自分の性格から割り出した津田の觀察に過ぎなかつた。同時に彼等の性格から割り出した津田の觀察でもあつた。

「父はもう時勢後れですから、あゝでもして暮らしてゐるより外に仕方が御座いません」

津田は何時の間にか又室の中に戻つて、元通りの位置に立つてゐた。

「何うして時勢後れ所ぢやない、つまり時勢に先だつてるから、あゝした生活が送れるんだ」

津田は挨拶に窮した。向うの口の重寶なのに比べて、自分の口の不重寶さが荷になつた。彼は手持無沙汰の氣味で、緩く消えて行く葉巻の煙を見詰めた。

「御父さんに心配を掛けちや不可ないよ。君の事は何でも此方に分つてるから、もし惡い事があると、僕から御父さんの方へ知らせて遣るぞ。好いかね」

津田は此子供に對するやうな、笑談とも訓戒とも見分けのつかない言葉を、苦笑しながら聞いた後で、漸く室外に逃れ出た。

十七

其日の歸りがけに津田は途中で電車を下りて、停留所から賑やかな通を少し行つた所で横へ曲がつた。質屋の暖簾だの碁會所の看板だの鳶の頭の居さうな格子戸作りだのを左右に見ながら、彼は彎曲した小路の中程にある擦硝子張りの扉を外から押して内へ入つた。扉の上部に取り附けられた電鈴が鋭い音を立てた時、彼は玄關の突き當りの狹い部屋から出る四五人の眼の光を一度に浴びた。窓のない其室は狹いばかりでなく實際暗かつた。外部から急に入つて來た彼には丸で穴藏のやうな感じを與へた。彼は寒さうに長椅子の片隅へ腰を卸ろして、たつた今暗い中から眼を光らして自分の方を見た人達を見返した。彼等の多くは室の眞中に出してある大きな瀨戸物火鉢の周圍を取り卷くやうにして坐つてゐた。其中の二人は腕組の儘、二人は火鉢の縁に片手を翳した儘、ずつと離れた一人は其處に取り散らした新聞紙の上へ甜めるやうに顏を押し附けた儘、又最後の一人は彼の今腰を卸ろした長椅子の反對の隅に、心持ち身體を横にして洋袴の膝頭を重ねた儘。

電鈴の鳴つた時申し合はせた樣に戸口を振り向いた彼等は、一瞥の後又申し合はせた樣に靜かになつてしまつた。みんな默つて何事をか考へ込んでゐるらしい態度で坐つてゐた。其樣子が津田の存在に注意を拂はないといふよりも、却て津田から注意されるのを回避するのだとも取れた。單に津田ばかりでなく、

御互に注意され合ふ苦痛を憚つて、わざとそつぽへ眼を落としてゐるらしくも見えた。

此陰氣な一群の人々は、殆ど例外なしに似たり寄つたりの過去を有つてゐるものばかりであつた。彼等は斯うして暗い控室の中で、靜かに自分の順番の來るのを待つてゐる間に、寧ろ華やかに彩どられたその過去の斷片のために、急に黒い影を投げかけられるのである。さうして明るい所へ眼を向ける勇氣がないので、ぢつと其黒い影の中に立ち竦むやうにして閉ぢ籠もつてゐるのである。

津田は長椅子の肱掛に腕を載せて手を額に中てた。彼は默禱を神に捧げるやうな此姿勢のもとに、彼が去年の暮以來此醫者の家で思ひ掛けなく會つた二人の男の事を考へた。

其一人は事實彼の妹婿に外ならなかつた。此暗い室の中で突然彼の姿を認めた時、津田は吃驚した。そんな事に對して比較的無頓着な相手も、津田の驚き方が反響したために、一寸挨拶に窮したらしかつた。

他の一人は友達であつた。是は津田が自分と同性質の病氣に罹つてゐるものと思ひ込んで、向うから平氣に聲を掛けた。彼等は其時二人一所に醫者の門を出て、晩飯を食ひながら、性と愛といふ問題に就いて六づかしい議論をした。

妹婿の事は一時の驚き丈で、大した影響もなく濟んだが、それぎりで後のなささうに思へた友達と彼との間には、其後異常な結果が生れた。

其時の友達の言葉と今の友達の境遇とを連結して考へなければならなかつた津田は、突然衝撃を受けた人のやうに、眼を開いて額から手を放した。

すると診察所から紺セルの洋服を着た三十恰好の男が出て來て、すぐ藥局の窓の所へ行つた。彼が隱袋

から紙入を出して金を拂はうとする途端に、看護婦が敷居の上に立つた。彼女と見知り越しの津田は、次の患者の名を呼んで再び診察所の方へ引き返さうとする彼女を呼び留めた。

「順番を待つてゐるのが面倒だから一寸先生に訊いて下さい。明日か明後日手術を受けに來て好いかつて」

奥へ入つた看護婦はすぐ又白い姿を暗い室の戸口に現はした。

「今丁度二階が空いて居りますから、何時でも御都合の宜しい時に何うぞ」

津田は逃れるやうに暗い室を出た。彼が急いで靴を穿いて、擦硝子張りの大きな扉を内側へ引いた時、今迄眞暗に見えた控室にぱつと電燈が點いた。

十八

津田の宅へ歸つたのは、昨日よりは稍早目であつたけれども、近頃急に短かくなつた秋の日脚は疾くに傾いて、先刻迄往來に丈殘つてゐた肌寒の餘光が、一度に地上から拂ひ去られるやうに消えて行く頃であつた。

彼の二階には無論火が點いてゐなかつた。玄關も眞暗であつた。今角の車屋の軒燈を明らかに眺めて來たばかりの彼の眼は少し失望を感じた。彼はがらりと格子を開けた。それでもお延は出て來なかつた。昨日の今頃待ち伏せでもするやうにして彼女から毒氣を拔かれた時は、餘り好い心持もしなかつたが、斯うして迎へる人もない眞暗な玄關に立たされて見ると、矢つ張り昨日の方が愉快だつたといふ氣が彼の胸の

何處かでした。彼は立ちながら「お延お延」と呼んだ。すると思ひ掛けない二階の方で「はい」といふ返事がした。それから階子段を踏んで降りて來る彼女の足音が聞こえた。同時に下女が勝手の方から馳け出して來た。

「何をしてゐるんだ」

津田の言葉には多少不審の響があつた。お延は何も云はなかつた。然し其顏を見上げた時、彼は何時もの通り無言の裡に自分を牽き附けようとする彼女の微笑を認めない譯に行かなかつた。白い齒が何よりも先に彼の視線を奪つた。

「二階は眞暗ぢやないか」

「えゝ。何にか恍惚して考へてゐたもんだから、つい御歸りに氣が附かなかつたの」

「寐てゐたな」

「まさか」

下女が大きな聲を出して笑ひ出したので、二人の會話はそれなり切れてしまつた。

湯に行く時、お延は「一寸待つて」と云ひながら、石鹸と手拭を例の通り彼女の手から受取つて火鉢の傍を離れようとする夫を引き留めた。彼女は後向きになつて、重箪笥の一番下の抽斗から、ネルを重ねた銘仙の縕袍を出して夫の前へ置いた。

「一寸着て見て頂戴。まだ壓しが好く利いてゐないかも知れないけれども」

津田は煙に卷かれたやうな顏をして、黑八丈の襟のかゝつた荒い竪縞の縕袍を見守つた。それは自分の

買つた品でもなければ、拵へて呉れと誂へた物でもなかつた。
「何うしたんだい。是は」
「拵へたのよ。貴方が病院へ入る時の用心に。あゝいふ所で、あんまり變な服裝をしてゐるのは見つともないから」
「何時の間に拵へたのかね」
彼が手術のため一週間ばかり家を空けなければならないと云つて、其譯をお延に話したのは、つい二三日前の事であつた。其上彼はその日から今日に至る迄、つひぞ針を持つて裁物板の前に坐つた細君の姿を見た事がなかつた。彼は不思議の感に打たれざるを得なかつた。お延は又夫の此驚きを恰も自分の勞力に對する報酬の如くに眺めた。さうしてわざと說明も何も加へなかつた。
「布は買つたのかい」
「いゝえ、是あたしの御古よ。此冬着ようと思つて洗張りをした儘仕立てずに仕舞つといたの」
成程若い女の着る柄だけに、縞がたゞ荒いばかりでなく、色合も何方かといふと寧ろ派出過ぎた。津田は袖を通したわが姿を、奴凧のやうな風をして、少し極り惡さうに眺めた後でお延に云つた。
「とう／＼明日か明後日遣つて貰ふ事に極めて來たよ」
「さう。それであたしは何うなるの」
「御前は何うもしやしないさ」
「一所に隨いて行つちや不可ないの。病院へ」

お延は金の事などを丸で苦にしてゐないらしく見えた。

十九

津田の明くる朝眼を覺ましたのは何時もよりずつと遲かつた。家の内はもう一片附きかたづいた後のやうにひつそり閑としてゐた。座敷から玄關を通つて茶の間の障子を開けた彼は、其處の火鉢の傍にきちんと坐つて新聞を手にしてゐる細君を見た。穩やかな家庭を代表するやうな音を立てて鐵瓶が鳴つてゐた。

「氣を許して寐ると、寐坊をする積りはなくつても、つい寐過ごすもんだな」

彼は云ひ譯らしい事をいつて、暦の上に懸けてある時計を眺めた。時計の針はもう十時近くの所を指してゐた。

顏を洗つて又茶の間へ戻つた時、彼は何氣なく例の黑塗の膳に向つた。其膳は彼の着席を待ち受けたといふよりも、寧ろ待ち草臥れたといつた方が適當であつた。彼は膳の上に掛けてある布巾を除らうとして不圖氣が附いた。

「是や不可ない」

彼は手術を受ける前日に取るべき注意を、かつて醫者から聞かされた事を思ひ出した。然し今の彼はそれを明らかに覺えてゐなかつた。彼は突然細君に云つた。

「一寸訊いてくる」

「今すぐ?」

お延は吃驚して夫の顏を見た。

「なに電話でだよ。譯やない」

彼は靜かな茶の間の空氣を自分で蹴散らす人のやうに立ち上がると、すぐ玄關から表へ出た。さうして電車通を半丁程右へ行つた所にある自働電話へ馳け附けた。其所から又急ぎ足に取つて返した彼は玄關に立つた儘細君を呼んだ。

「一寸二階にある紙入を取つて呉れ。御前の蟇口でも好い」

「何になさるの」

お延には夫の意味が丸で解らなかつた。

「何でも可いから早く出して呉れ」

彼はお延から受取つた蟇口を懷中へ放り込んだ儘、すぐ大通の方へ引き返した。さうして電車に乘つた。

彼が可なり大きな紙包を抱へて又戻つて來たのは、それから約三四十分後で、もう午に間もない頃であつた。

「あの蟇口の中にや少しつきや入つてゐないんだね。もう少しあるのかと思つたら」

津田はさう云ひながら腋に抱へた包みを茶の間の疊の上へ放り出した。

「足りなくつて?」

お延は細かい事に迄氣を遣はないではゐられないといふ眼附を夫の上に向けた。

「いや足りないといふ程でもないがね」

「だけど何を御買ひになるかあたし些とも解らないんですもの。もしかすると髪結床かと思つたけれども」

津田は二箇月以上手を入れない自分の頭に氣が附いた。永く髪を刈らないと、心持ち番の小さい彼の帽子が、被るたんびに少しづゝきしんで來るやうだといふ、つい昨日の朝受けた新しい感じ迄思ひ出した。

「それに餘り急いでいらつしつたもんだから、つい二階迄取りに行けなかつたのよ」

「實は己の紙入の中にも、さう澤山入つてる譯ぢやないんだから、まあ何方にしたつて大した變りはないんだがね」

彼は蟇口の惡口ばかり云へた義理でもなかつた。

お延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の罐と、麺麭と牛酪を取り出した。

「おや／＼是召しやがるの。そんなら時を取りに御遣りになれば可いのに」

「なに彼奴ぢや分らない。何を買つて來るか知れやしない」

やがて好い香のするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶とがお延の手で用意された。

朝飯とも午飯とも片のつかない、極めて單純な西洋流の食事を濟ました後で、津田は獨りごとのやうに云つた。

「今日は病氣の報知旁無沙汰見舞に、一寸朝の内藤井の叔父の所迄行つて來ようと思つてたのにとう／＼遲くなつちまつた」

彼の意味は仕方がないから午後に此訪問の義務を果たさうといふのであつた。

二十

藤井といふのは津田の父の弟であつた。廣島に三年長崎に二年といふ風に、方々移り歩かなければならない官吏生活を餘儀なくされた彼の父は、教育上津田を連れて任地任地を巡禮のやうに經めぐる不便と不利益とに痛く頭を惱ました揚句、早くから彼を其弟に託して、一切の面倒を見て貰ふ事にした。だから津田は手もなく此叔父に育て上げられたやうなものであつた。從つて二人の關係は普通の叔父甥の域を通り越してゐた。性質や職業の差違を問題の外に置いて評すると、彼等は叔父甥といふよりも寧ろ親子であつた。もし第二の親子といふ言葉が使へるなら、それは最も適切に此二人の間柄を說明するものであつた。

津田の父と違つて此叔父はつひぞ東京を離れた事がなかつた。半生の間始終動き勝ちであつた父に比べると、單に此點丈でも其所に非常な相違があつた。少なくとも非常な相違があるやうに津田の眼には映じた。

「緩慢なる人生の旅行者」

叔父がかつて津田の父を評した言葉のうちに斯ういふ文句があつた。それを何氣なく小耳に挾んだ津田は、すぐ自分の父をさういふ人だと思ひ込んでしまつた。さうして今日迄その言葉を忘れなかつた。然し叔父の使つた文句の意味は、頭の發達しない當時よく解らなかつたと同じやうに、今になつても判然しなかつた。たゞ彼は父の顏を見るたんびにそれを思ひ出した。肉の少ない細面の腮の下に、賣卜者見たやうな疎髯を垂らした其姿と、叔父の此言葉とは、彼に取つて殆ど同じものを意味してゐた。

彼の父は今から十年ばかり前に、突然遠路に倦み果てた人のやうに官界を退いた。さうして實業に從事し出した。彼は最後の八年を神戸で費やした後、其間に買つて置いた京都の地面へ新しい普請をして、二年前にとう／＼其所へ引き移つた。津田の知らない間に、此閑靜な古い都が、彼の父にとつて隱栖の場所と定められると共に、終焉の土地とも變化したのである。其時叔父は鼻の頭へ皺を寄せるやうにして津田に云つた。

「兄貴はそれでも少し金が溜まつたと見えるな。あの風船玉が、ぢつと落ち附けるやうになつたのは、全く金の重みのために違ひない」

然し金の重みの何時迄經つてもかゝらない彼自身は、最初から動かなかつた。彼は始終東京にゐて始終貧乏してゐた。彼は未だかつて月給といふものを貰つた覺えのない男であつた。月給が嫌ひといふよりも、寧ろ呉れ手がなかつた程我儘だつたといふ方が適當かも知れなかつた。規則づくめな事に何でも反對したがつた彼は、年を取つて其考へが少し變つて來た後でも、やはり以前の強情を押し通してゐた。是は今更自分の主義を改めた所で、たゞ人に輕蔑される丈で、一向得にはならないといふ事をよく承知してゐるからでもあつた。

實際の世の中に立つて、端的な事實と組み打ちをして働いた經驗のない此叔父は、一面に於て當然迂濶な人生批評家でなければならないと同時に、一面に於ては甚だ鋭利な觀察者であつた。さうして其鋭利な點は悉く彼の迂濶な所から生み出されてゐた。言葉を換へていふと、彼は迂濶の御蔭で奇警な事を云つたり爲たりした。

彼の知識は豐富な代りに雜駁であつた。從つて彼は多くの問題に口を出したがつた。けれども何時迄行つても傍觀者の態度を離れる事が出來なかつた。それは彼の位地が彼を餘儀なくするばかりでなく、彼の性質が彼を其所に抑へ附けて置く所爲でもあつた。彼は或頭を有つてゐた。けれども彼には手がなかつた。若しくは手があつても、それを使はうとしなかつた。彼は始終懷手をしてゐたがつた。一種の勉強家であると共に一種の不精者に生れ附いた彼は、遂に活字で飯を食はなければならない運命の所有者に過ぎなかつた。

二十一

斯ういふ人にありがちな場末生活を、藤井は市の西北にあたる高臺の片隅で、此六七年續けて來たのである。つい此間迄郊外に等しかつた其高臺の此所彼所に年々建て增される大小の家が、年々彼の眼から蒼い色を奪つて行くやうに感ぜられる時、彼は洋筆を走らす手を止めて、よく自分の兄の身の上を考へた。折々は兄から金でも借りて、自分も一つ住宅を拵へて見ようかしらといふ氣を起した。其金を兄はとても貸して吳れさうもなかつた。自分もいざとなると貸して貰ふ性分ではなかつた。「緩慢なる人生の旅行者」と兄を評した彼は、實を云ふと、物質的に不安なる人生の旅行者であつた。さうして多數の人の場合に於て常に見出される如く、物質上の不安は、彼にとつてある程度の精神的不安に過ぎなかつた。

津田の宅から此叔父の所へ行くには半分道程川沿ひの電車を利用する便利があつた。けれどもみんな步いた所で、一時間と掛からない近距離なので、たまさかの散步がてらには、却て八釜しい交通機關の援け

に依らない方が、彼の勝手であつた。

一時少し前に宅を出た津田は、ぶら／＼河縁を傳つて終點の方に近づいた。空は高かつた。日の光が至る所に充ちてゐた。向うの高みを蔽つてゐる深い木立の色が、浮き出したやうに、くつきり見えた。

彼は道々今朝買ひ忘れたリチネの事を思ひ出した。それを今日の午後四時頃に呑めと醫者から命令された彼には、一寸藥種屋へ寄つて此下劑を手に入れて置く必要があつた。彼は何時もの通り終點を右へ折れて橋を渡らずに、それとは反對な賑やかな町の方へ歩いて行かうとした。すると新しく線路を延長する計畫でもあると見えて、彼の通路に當たる往來の一部分が、最も無遠慮な形式で筋違に切斷されてゐた。彼は殘酷に在來の家屋を掻き挘つて、無理にそれを取り拂つたやうな凸凹だらけの新道路の角に立つて、其片隅に塊まつてゐる一群の人々を見た。群集はまばらではあるが三列もしくは五列位の厚さで、眞中にゐる彼と略同年配な男の周圍に半圓形をかたちづくつてゐた。

小肥りにふとつた其男は雙子木綿の羽織着物に角帶を締めて俎下駄を穿いてゐたが、頭には笠も帽子も被つてゐなかつた。彼の後に取り殘された一本の柳を盾に、彼は綿フラネルの裏の附いた大きな袋を兩手で持ちながら、見物人を見廻した。

「諸君僕がこの袋の中から玉子を出す。此空つぽうの袋の中から屹度出して見せる。驚いちや不可ない、種は懷中にあるんだから」

彼は此種の人間としては寧ろ不相應な位横風な言葉で斯んな事を云つた。夫から片手を胸の所で握つて見せて、其握つた拳をまたぱつと袋の方へぶつけるやうに開いた。「そら玉子を袋の中へ投げ込んだぞ」

と騙さない計りに。然し彼は騙したのではなかつた。彼が手を袋の中へ入れた時は、もう玉子がちやんと其中に入つてゐた。彼はそれを親指と人さし指の間に挟んで、一應半圓形をかたちづくつてゐる見物にとつくり眺めさした後で地面の上に置いた。

津田は輕蔑に嘆賞を交じへた樣な顏をして、一寸首を傾けた。すると突然後から彼の腰のあたりを突つつくもののあるのに氣が附いた。輕い衝擊を受けた彼は殆ど反射作用のやうに後を振り向いた。さうして其所にさも惡戲小僧らしく笑ひながら立つてゐる叔父の子を見出だした。徽章の着いた制帽と、半洋袴と、背中にしよつた背嚢とが、其子の來た方角を彼に語るには充分であつた。

「今學校の歸りか」

「うん」

子供は「はい」とも「えゝ」とも云はなかつた。

二十二

「御父さんは何うした」

「知らない」

「相變らずかね」

「何うだか知らない」

自分が十位であつた時の心理狀態を丸で忘れてしまつた津田には、此返事が少し意外に思へた。苦笑し

た彼は、其所へ氣が附くと共に默つた。子供は又一生懸命に手品遣ひの方ばかり注意しだした。服裝から云ふと一夜作りとも見られる其男は此時精一杯大きな聲を張り揚げた。

「諸君もう一つ出すから見てるたまへ」

彼は例の袋を片手でぐつと締扱いて、再び何か投げ込む眞似を小器用にした後、麗々と第二の玉子を袋の底から取り出した。それでも飽き足らないと見えて、今度は袋を裏返しにして、薄汚い綿フランネルの縞柄を遠慮なく群衆の前に示した。然し第三の玉子は同じ手眞似と共に安々と取り出された。最後に彼は恰も貴重品でも取扱ふやうな樣子で、それを丁寧に地面の上へ竝べた。

「どうだ諸君斯うやつて出さうとすれば、何個でも出せる。然しさう玉子ばかり出しても詰らないから、今度は一つ生きた鷄を出さう」

津田は叔父の子供を振り返つた。

「おい眞事もう行かう。小父さんは是から御前の宅へ行くんだよ」

眞事には津田よりも生きた鷄の方が大事であつた。

「小父さん先へ行つてさ。僕もつと見てるから」

「ありや嘘だよ、何時迄經つたつて生きた鷄なんか出て來やしないよ」

「何うして？だつて玉子はあんなに出たぢやないの」

「玉子は出たが、鷄は出ないんだよ。あゝ云つて嘘を吐いて何時迄も人を散らさないやうにするんだよ」

「さうして何うするの」

さうして何うするのか其後の事は津田にも些とも解らなかつた。面倒になつた彼は、眞事を置き去りにして先へ行かうとした。すると眞事が彼の袂を捉まへた。

「小父さん何か買つてさ」

宅で強請られるたんびに、此次此次といつて逃げて置きながら、其次行く時には、つい買つてやるのを忘れるのが常のやうになつてゐた彼は、例の調子で「うん買つて遣るさ」と云つた。

「ぢや自働車、ね」

「自働車は少し大き過ぎるな」

「なに小さいのさ。七圓五十錢のさ」

七圓五十錢でも津田には慥かに大き過ぎた。彼は何も云はずに歩き出した。

「だつて此前も其前も買つて遣るつていつたぢやないの。小父さんの方があの玉子を出す人より餘つ程嘘吐きぢやないか」

「彼奴は玉子は出すが鷄なんか出せやしないんだよ」

「何うして」

「何うしてつて、出せないよ」

「だから小父さんも自働車なんか買へないの」

「うん。――まあ左右だ。だから何か外のものを買つて遣らう」

「ぢやキッドの靴さ」

毒氣を拔かれた津田は、返事をする前に又默つて一二間歩いた。彼は眼を落として眞事の足を見た。左程見苦しくもない其靴は、茶とも黑とも附かない一種變な色をしてゐた。

「赤かつたのを宅で御父さんが染めたんだよ」

津田は笑ひだした。藤井が子供の赤靴を黑く染めたといふ事柄が、何だか彼には可笑しかつた。學校の規則を知らないで拵へた赤靴を規則通りに黑くしたのだといふ說明を聞いた時、彼は又叔父の窮策を滑稽的に批判したくなつた。さうして其窮策から出た現在の御手際を擽つたいやうな顏をしてぢろ〳〵眺めた。

二十三

「眞事、そりや好い靴だよ、御前」

「だつて斯んな色の靴誰も穿いてゐないんだもの」

「色は何うでもね、御父さんが自分で染めて吳れた靴なんか滅多に穿けやしないよ。難有いと思つて大事にして穿かなくつちや不可ない」

「だつてみんなが尨犬の皮だ皮だつて揶揄ふんだもの」

藤井の叔父と尨犬の皮、此二つの言葉をつなげると、結果は又新しい可笑しみになつた。然し其可笑しみは微かな哀傷を誘つて、津田の胸を通り過ぎた。

「尨犬ぢやないよ、小父さんが請け合つてやる。大丈夫尨犬ぢやない立派な……」

津田は立派な何といつて可いか一寸行き詰まつた。其所を好い加減にして置く眞事ではなかつた。

「立派な何さ」
「立派な――靴さ」
津田はもし懷中が許すならば、眞事のために、望み通りキッドの編上を買つて遣りたい氣がした。それが叔父に對する恩返しの一端になるやうにも思はれた。彼は胸算で自分の懷にある紙入の中を勘定して見た。然し今の彼にそれ丈の都合を附ける餘裕は殆どなかつた。もし京都から爲替が屆くならばとも考へたが、まだ屆くか屆かないか分らない前に、苦しい思ひをして、それ丈の實意を見せるにも及ぶまいといふ世間心も起つた。
「眞事、そんなにキッドが買ひたければね、今度宅へ來た時、小母さんに買つて御貰ひ。小父さんは貧乏だからもつと安いもので今日は負けといて吳れ」
彼は賺すやうに又宥めるやうに眞事の手を引いて廣い往來をぶら〳〵步いた。終點に近い其通には、電車へ乘り降りの必要上、無數の人の穿物で絕えず踏み堅められた結果として、四五年この方町並が生れ變つたやうに立派に整つて來た。所々のショーヰンドーには、一槪に場末ものとして馬鹿に出來ないやうな品が綺麗に飾り立てられてゐた。眞事は其間を向う側へ馳け拔けて、朝鮮人の飴屋の前へ立つかと思ふと、又此方側へ戾つて來て、金魚屋の軒の下に佇立んだ。彼の馳け出す時には、隱袋の中でビー玉の音が屹度ぢやら〳〵した。
「今日學校で斯んなに勝つちやつた」
彼は隱袋の中へ手をぐつと插し込んで掌一杯に其ビー玉を載せて見せた。水色だの紫色だのの丸い硝

子玉が迸る樣に往來の眞中へ轉がり出した時、彼は周章ててそれを追ひ掛けた。さうして後を振り向きながら津田に云つた。

「小父さんも拾つてさ」

最後に此目まぐるしい叔父の子のために一軒の玩具屋へ引き摺り込まれた津田は、とう〳〵其所で一圓五十錢の空氣銃を買つて遣らなければならない事になつた。

「雀なら可いが、無暗に人を狙つちや不可ないよ」

「こんな安い鐵砲ぢや雀なんか取れないだらう」

「そりや御前が下手だからさ。下手ならいくら鐵砲が好くたつて取れないさ」

「ぢや小父さん是で雀打つてくれる？是から宅へ行つて」

好い加減をいふとすぐ後から實行を逼られさうな樣子なので、津田は生返事をしたなり話しを外へそらした。眞事は戸田だの澁谷だの坂口だのと、相手の知りもしない友達の名前を勝手に並べ立てて、其友達を片つ端から批評し始めた。

「あの岡本つて奴、そりや狡猾いんだよ。靴を二足も買つて貰つてるんだもの」

話しは又靴へ戻つて來た。津田はお延と關係の深い其岡本の子と、今自分の前で其子を評してる眞事とを心の中で比較した。

二十四

「御前近頃岡本の所へ遊びに行くかい」
「うゝん、行かない」
「又喧嘩したな」
「うゝん、喧嘩なんかしない」
「ぢや何故行かないんだ」
「何うしてでも――」
眞事の言葉には後がありさうだつた。津田はそれが知りたかつた。
「彼所へ行くと色んなものを呉れるだらう」
「うゝん、そんなに呉れない」
「ぢや御馳走するだらう」
「僕こなひだ岡本の所でライスカレーを食べたら、そりや辛かつたよ」
ライスカレーの辛い位は、岡本へ行かない理由になりさうもなかつた。
「それで行くのが厭になつた譯でもあるまい」
「うゝん。だつて御父さんが止せつて云ふんだもの。僕岡本の所へ行つてぶらんこがしたいんだけども」
津田は小首を傾けた。叔父が子供を岡本へ遣りたがらない理由は何だらうと考へた。肌合の相違、家風の相違、生活の相違、それ等のものがすぐ彼の心に浮かんだ。始終机に向つて沈默の間に活字的の氣焔を天下に散布してゐる叔父は、實際の世間に於て決して筆程の有力者ではなかつた。彼は暗に其距離を自覺

してゐた。其自覺は又彼を多少頑固にもした。幾分か排外的にもした。金力權力本位の社會に出て、他から馬鹿にされるのを恐れる彼の一面には、其金力權力のために、自己の本領を一分でも冒されては大變だといふ警戒の念が絶えず何處かに働いてゐるらしく見えた。

「眞事何故御父さんに訊いて見なかつたのだい。岡本へ行つちや何故不可ないんですつて」

「僕訊いたよ」

「訊いたら御父さんは何と云つた。――何とも云はなかつたらう」

「うゝん、云つた」

「何と云つた」

眞事は少し羞恥んでゐた。しばらくしてから、彼はぽつり／＼句切りを置くやうな重い口調で答へた。

「あのね、岡本へ行くとね、何でも一さんの持つてるものをね、宅へ歸つて來てから、買つて呉れ、買つて呉れつていふから、それで不可ないつて」

津田は漸く氣が附いた。富の程度に多少等差のある二人の生活向きは、彼等の子供が持つ玩具の末に至る迄に、多少等差を附けさせなければならなかつたのである。

「それで此奴自働車だのキッドの靴だのつて、無暗に高いものばかり強請るんだな。みんな一さんの持つてるのを見て來たんだらう」

津田は揶揄ひ半分手を擧げて眞事の背中を打たうとした。眞事は跋の悪い眞相を曝露された大人に近い表情をした。けれども大人の樣に言譯がましい事は丸で云はなかつた。

「嘘だよ。嘘だよ」

彼は先刻津田に買つてもらつた一圓五十錢の空氣銃を擔いだ儘どん〳〵自分の宅の方へ逃げ出した。彼の隱袋の中にあるビー玉が珠數を劇しく揉むやうに鳴つた。背嚢の中では辨當箱だか教科書だかが互に打つかり合ふ音がごとり〳〵と聞こえた。

彼は曲り角の黑板塀の所で一寸立ち留まつて鼬のやうに津田を振り返つた儘、すぐ小さい姿を小路のうちに隱した。津田が其小路を行き盡くして突き中りにある藤井の門を潛つた時、突然ドンといふ銃聲が彼の一間ばかり前で起つた。彼は右手の生垣の間から大事さうに彼を狙擊してゐる眞事の黑い姿を苦笑をもつて認めた。

二十五

座敷で誰かと話しをしてゐる叔父の聲を聞いた津田は、格子の間から一足の客靴を覗いて見たなり、わざと玄關を開けずに、茶の間の緣側の方へ廻つた。もと植木屋でもあつたらしい其庭先には木戸の用心も竹垣の仕切りもないので、同じ地面の中に近頃建て增された新しい貸家の勝手口を廻ると、すぐ緣鼻迄歩いて行けた。目隱しにしては少し低過ぎる高い茶の樹を二三本通り越して、彼の記憶に何時迄も殘つてゐる柿の樹の下を潛つた津田は、型の如く其所に叔母の姿を見出だした。障子の嵌入硝子に映る其橫顏が彼の眼に入つた時、津田は外部から聲を掛けた。

「叔母さん」

叔母はすぐ障子を開けた。

「今日は何うしたの」

彼女は子供が買つて貰つた空氣銃の禮も云はずに、不思議さうな眼を津田の上に向けた。四十の上をもう二つか四つ越した此叔母の態度には、殆ど愛想といふものがなかつた。其代り時と場合によると世間並の遠慮を超越した自然が出た。其中には殆ど性の感じを離れた自然さへあつた。津田は何時でも此叔母と吉川の細君とを腹の中で比較した。さうして何時でも其相違に驚いた。同じ女、しかも年齒のさう違はない二人の女が、何うして斯んなに違つた感じを他に與へる事が出來るかといふのが、第一の疑問であつた。

「叔母さんは相變らず色氣がないな」

「此年齒になつて色氣があつちや氣狂だわ」

津田は緣側へ腰を掛けた。叔母は上がれとも云はないで、膝の上に載せた紅絹の片へ輕い火熨斗を當てゝゐた。すると次の間からほどき物を持つて出て來たお金さんといふ女が津田に御辭儀をしたので、彼はすぐ言葉を掛けた。

「お金さん、まだ御嫁の口は極まりませんか。まだなら一つ好い所を周旋しませうか」

お金さんはえへへと人の好ささうに笑ひながら少し顏を赧らめて、彼の爲に座蒲團を緣側へ持つて來ようとした。津田はそれを手で制して、自分から座敷の中に上がり込んだ。

「ねえ叔母さん」

「えゝ」

氣のなささうな生返事をした叔母は、お金さんが生溫い番茶を形式的に津田の前へ注いで出した時、一寸首をあげた。

「お金さん由雄さんによく賴んで御置きなさいよ。此男は親切で噓を吐かない人だから」

お金さんはまだ逃げ出さずにもぢ〳〵してゐた。津田は何とか云はなければ濟まなくなつた。

「御世辭ぢやありません、本當の事です」

叔母は別に取り合ふ樣子もなかつた。其時裏で眞事の打つ空氣銃の音がほん〳〵したので叔母はすぐ聽き耳を立てた。

「お金さん、一寸見て來て下さい。バラ丸を入れて打つと危險いから」

叔母は餘計なものを買つて吳れたと云はんばかりの顏をした。

「大丈夫ですよ。好く云ひ聞かしてあるんだから」

「いえ不可ません。屹度あれで面白半分に御隣の鷄を打つに違ひないから。構はないから丸丈取り上げて來て下さい」

お金さんはそれを好い機に茶の間から姿をかくした。叔母は默つて火鉢に插し込んだ鏝を又取り上げた。皺だらけな薄い綢が、彼女の膝の上で、綺麗に平たく延びて行くのを何氣なく眺めて居た津田の耳に、客間の話し聲が途切れ〳〵に聞こえて來た。

「時に誰です、御客は」

叔母は驚いたやうに又顏を上げた。

「今迄氣が附かなかつたの。妙ね貴方の耳も隨分。此所で聞いてたつて好く解るぢやありませんか」

二十六

津田は客間にゐる聲の主を、坐つたまゝ突き留めようと力めて見た。やがて彼は輕く膝を拍つた。

「あゝ、解つた。小林でせう」

「えゝ」

叔母は嫣然ともせずに、簡單な答へを落附いて與へた。

「何だ小林か。新しい赤靴なんか穿き込んで厭に御客さん振つてるもんだから誰かと思つたら。そんなら僕も遠慮しずに彼方へ行けば可かつた」

想像の眼で見るには餘りに陳腐過ぎる彼の姿が津田の頭の中に出て來た。此夏會つた時の彼の異な服裝もおのづと思ひ出された。白縮緬の襟のかゝつた襦袢の上へ薩摩絣を着て、茶の千筋の袴に透綾の羽織をはおつた其拵へは、丸で傘屋の主人が町内の葬式の供に立つた歸りがけで、強飯の折でも懷に入れてゐるとしか受け取れなかつた。其時彼は泥棒に洋服を盗まれたといふ言譯を津田にした。それから金を七圓程貸して呉れと頼んだ。是はある友達が彼の盗難に同情して、若し自分の質に入れてある夏服を受け出す餘裕が彼にあるならば、それを彼に遣つても可いと云つたからであつた。

津田は微笑しながら叔母に訊いた。

「彼奴又何だつて今日に限つて座敷なんかへ通つて、堂々と御客振を發揮してゐるんだらう」

「少し叔父さんに話しがあるのよ。それが此所ぢや一寸云ひ惡い事なんでね」

「いゝえ、小林にもそんな眞面目な話しがあるのかな。金の事か、それでなければ……」

斯う云ひ掛けた津田は、不圖眞面目な叔母の顏を見ると共に、後を引つ込ましてしまつた。叔母は少し聲を低くした。其聲は寧ろ彼女の落ち付いた調子に釣り合つてゐた。

「お金さんの緣談の事もあるんだからね。此所であんまり何かいふと、彼の子が極りを惡くするからね」

何時もの高調子と違つて、茶の間で聞いてゐると一寸誰だか分らない位な紳士風の聲を、小林が出してゐるのは全くそれがためであつた。

「もう極まつたんですか」

「まあ旨く行きさうなのさ」

叔母の眼には多少の期待が輝いた。少し乾燥ぎ氣味になつた津田はすぐ附け加へた。

「ぢや僕が骨を折つて周旋しなくつても、もう可いんだな」

叔母は默つて津田を眺めた。たとひ輕薄とまで行かないでも、斯ういふ巫山戲た空虚な彼の態度は、今の叔母の生活氣分と丸で懸け離れたものらしく見えた。

「由雄さん、御前さん自分で奧さんを貰ふ時、矢つ張りそんな料簡で貰つたの」

叔母の質問は突然であると共に、何ういふ意味で掛けられたのかさへ津田には見當が附かなかつた。

「そんな料簡つて、叔母さん丈承知してゐるぎりで、當人の僕にや分らないんだから、一寸返事のしやうがないがな」

「何も返事も聞かなくつたつて、叔母さんは困りやしないけれどもね。――女一人を片附ける方の身になつて御覽なさい。大抵の事ぢやないから」

　藤井には四年前長女を片附ける時、仕度をして遣る餘裕がないので既に相當の借金をした。其借金が漸く片附いたと思ふと、今度はもう次女を嫁に遣らなければならなくなつた。だから此所でもしお金さんの緣談が纏まるとすれば、それは正に三人目の出費に違ひなかつた。娘とは格が違ふからといふ意味で、出來る丈儉約した所で、現在の生計向きに多少苦しい負擔の暗影を投げる事は慥かであつた。

二十七

　斯ういふ時に、切めて費用の半分でも、津田が進んで受け持つ事が出來たなら、年頃彼の世話をしてきた藤井夫婦に取つては定めし滿足な報酬であつたらう。けれども今の所財力の上で叔父叔母に捧げ得る彼の同情は、高々眞事の穿きたがつてゐるキツドの靴を買つて遣る位なものであつた。それさへ彼は、懷都合で見合はせなければならなかつたのである。まして京都から多少の融通を仰いで、彼等の經濟に幾分の潤澤を附けて遣らう抔といふ親切氣は天で起らなかつた。是は自分が事情を報告した所で動く父でもなし、父が動いた所で借りる叔父でもないと頭から極めてかゝつてゐる所爲でもあつた。それで彼はたゞ自分の所へさへ早く爲替が屆いて呉れゝば可いといふ期待に縛られて、叔母の言葉には餘り感激した樣子も見せなかつた。すると叔母が「由雄さん」と云ひ出した。

「由雄さん、ぢや何んな料簡で奥さんを貰つたの、御前さんは」

「まさか冗談に貰やしません。いくら僕だつて左う浮ついた所ばかりから出來上がつてるやうに解釋されちや可哀相だ」

「そりや無論本氣でせうよ。無論本氣には違ひなからうけれどもね、其本氣にも亦色々段等があるもんだからね」

相手次第では侮辱とも受け取られる此叔母の言葉を、津田は却て好奇心で聞いた。

「おや叔母さんの眼に僕は何う見えるんです。遠慮なく云つて下さいな」

叔母は下を向いて、ほどき物をいぢくりながら薄笑ひをした。それが津田の顔を見ないせゐだか何だか、急に氣味の惡い心持を彼に與へた。然し彼は叔母に對して少しも退避ぐ氣はなかつた。

「是でもいざとなると、中々眞面目な所もありますからね」

「そりや男だもの、何處かちやんとした所がなくつちや、毎日會社へ出たつて、勤まりつこありやしないからね。だけども――」

斯う云ひ掛けた叔母は、そこで急に氣を換へたやうに附け足した。

「まあ止しませう。今更云つたつて始まらない事だから」

叔母は先刻火熨斗を掛けた紅絹の片を丁寧に重ねて、濃い澁を引いた疊紙の中へ仕舞ひ出した。それから何となく拍子拔けのした、しかも何所かに物足らなさうな不安の影を宿してゐる津田の顔を見て、不圖氣が附いたやうな調子で云つた。

「由雄さんは一體贅澤過ぎるよ」

學校を卒業してから以來の津田は、叔母に始終斯う云はれ附けてゐた。自分でも亦さう信じて疑はなかつた。さうしてそれを大した惡い事のやうにも考へてゐなかつた。

「えゝ少し贅澤です」

「服裝や食物ばかりぢやないのよ。心が派出で贅澤に出來上がつてゐるんだから困るつていふのよ。始終御馳走はないかないかつて、きよろ／＼其所いらを見廻してゐる人見た樣で」

「おや贅澤所か丸で乞食ぢやありませんか」

「乞食ぢやないけれども、自然眞面目さが足りない人のやうに見えるのよ。人間は好い加減な所で落ち附くと、大變見つとも好いもんだがね」

此時津田の胸を掠めて、自分の從妹に當る叔母の娘の影が突然通り過ぎた。其娘は二人とも既婚の人であつた。四年前に片附いた長女は、其後夫に從つて臺灣に渡つたぎり、今でも其所に暮してゐる。彼の結婚と前後して、つい此間嫁に行つた次女に、式が濟むとすぐ連れられて福岡へ立つてしまつた。其福岡は長男の眞弓が今年から籍を置いた大學の所在地でもあつた。

此二人の從妹の何方も、貰はうとすれば容易く貰へる地位にあつた津田の眼から見ると、決して自分の細君として適當の候補者ではなかつた。だから彼は知らん顏をして過ぎた。當時彼の取つた態度を、叔母の今の言葉と結び附けて考へた津田は、別に是ぞと云つて疚しい點も見出だし得なかつたので、何氣ない風をして叔母の動作を見守つてゐた。其叔母はついと立つて戸棚の中にある支那鞄の蓋を開けて、手に持つた疊紙を其中に仕舞つた。

二十八

奥の四疊半で先刻からお金さんに學課の復習をして貰つてゐた眞事が、突然お金さんには丸で解らない佛蘭西語の讀本を浚ひ始めた。ジユ、シユイ、ポリ、とか、チユ、エ、マラード、とか、一字一字の間にわざと長い句切りを置いて讀み上げる小學二年生の頓狂な聲を、例ながら可笑しく聞いてゐる津田の頭の上で、今度は柱時計がボン〳〵と鳴つた。彼はすぐ鉢に入れてあるリチネを取り出して、飲みにくさうに、どろ〳〵した油の色を眺めた。すると、客間でも時計の音に促された樣な叔父の聲がした。

「ぢや彼方へ行かう」

叔父と小林は縁傳ひに茶の間へ入つて來た。津田は一寸居住居を直して叔父に挨拶をしたあとで、すぐ小林の方を向いた。

「小林君大分景氣が好いやうだね、立派な服を拵へたぢやないか」

小林はホームスパン見た樣なざら〳〵した地合の背廣を着てゐた。何時もと違つて其洋袴の折り目がまだ少しも崩れてゐないので、誰の眼にも仕立卸しとしか見えなかつた。彼は變り色の靴下を後へ隱すやうにして、津田の前に坐り込んだ。

「へゝ、冗談云つちや不可ない。景氣の好いのは君の事だ」

彼の新調は何處かのデパートメント、ストアの窓硝子の中に飾つてある三つ揃に括り附けてあつた正札を見附けて、其價段通りのものを彼が注文して拵へたのであつた。

「是で君二十六圓だから、隨分安いものだらう。君見たいな贅澤やから見たら何うか知らないが、僕なんぞにや是で澤山だからね」

津田は叔母の手前重ねて惡口を云ふ勇氣もなかつた。默つて茶碗を借り受けて、八の字を寄せながらリチネを飮んだ。其所にゐるものがみんな不思議さうに彼の所作を眺めた。

「何だいそれは。變なものを飮むな。藥かい」

今日迄病氣といふ病氣をした例のない叔父の醫藥に對する無知は又特別のものであつた。彼はリチネといふ名前を聞いてすら、それが何の爲に服用されるのか知らなかつた。あらゆる疾病と殆ど沒交渉な此叔父の前に、津田が手術だの入院だのといふ言葉を使つて、自分の現在を說明した時に、叔父は少しも感動しなかつた。

「それで其報知にわざ〳〵遣つて來た譯かね」

叔父は御苦勞さまと云はぬばかりの顏をして、胡麻鹽だらけの髯を撫でた。生やしてゐると云ふよりも寧ろ生えてゐると云つた方が適當な其髯は、植木屋を入れない庭のやうに、彼の顏を所々爺むさく見せた。

「一體今の若いものは、から駄目だね。下らん病氣ばかりして」

叔母は津田の顏を見てにやりと笑つた。近頃急に「今の若いものは」といふ言葉を、癖のやうに使ひ出した叔父の歷史を心得てゐる津田も笑ひ返した。餘程以前此叔父から惑病は同源だの疾患は罪惡だのと、さも偉さうに云ひ聞かされた事を憶ひ出すと、それが病氣に罹らない自分の自慢とも受け取れるので、猶のこと滑稽に感ぜられた。彼は薄笑ひと共に又小林の方を見た。小林はすぐ口を出した。けれども津田の

豫期とは全くの反對を云つた。

「何今の若いものだつて病氣をしないものもあります。現に私なんか近頃ちつとも寢た事がありません。私考へるに、人間は金が無いと病氣にや罹らないもんだらうと思ひます」

津田は馬鹿々々しくなつた。

「詰らない事をいふなよ」

「いゝえ全くだよ。現に君なんかがよく病氣をするのは、する丈の餘裕があるからだよ」

此不論理な斷案は、云ひ手が眞面目な丈に、津田を猶失笑させた。すると今度は叔父が贊成した。

「さうだよ此上病氣にでも罹つた日にや何うにも斯うにも遣り切れないからね」

薄暗くなつた室の中で、叔父の顏が一番薄暗く見えた。津田は立つて電燈のスヰツチを捩ぢつた。

二十九

何時の間にか勝手口へ出て、お金さんと下女を相手に皿小鉢の音を立てゝゐた叔母が又茶の間へ顏を出した。

「由雄さん久し振だから御飯を食べておいで」

津田は明日の治療を控へてゐるので斷つて歸らうとした。

「今日は小林と一所に飯を食ふ筈になつてゐる所へ御前が來たのだから、ことによると御馳走が足りないかも知れないが、まあ附合つて行くさ」

叔父に斯んな事を云はれつけない津田は、妙な心持がして、又尻を据ゑた。

「今日は何事かあるんですか」

「何ね、小林が今度――」

叔父はそれ丈云つて、一寸小林の方を見た。小林は少し得意さうににや／＼してゐた。

「小林君何うかしたのか」

「何、君、なんでもないんだ。いづれ極まつたら君の宅へ行つて詳しい話しをするがね」

「然し僕は明日から入院するんだぜ」

「なに構はない病院へ行くよ。見舞ひかた／＼」

小林は追ひ掛けて、其病院のある所だの醫者の名だのを、左も自分に必要な知識らしく訊いた。醫者の名が自分と同じ小林なので「はあそれぢやあの堀さんの」と云つたが急に黙つてしまつた。堀といふのは津田の妹婿の姓であつた。彼がある特殊な病氣のために、つい近所にゐる其醫者の許へ通つたのを小林はよく知つてゐたのである。

彼の詳しい話しといふのを津田は一寸訊いて見たい氣がした。それは先刻叔母の云つたお金さんの結婚問題らしくもあつた。又さうでないらしくも見えた。此思はせ振な小林の態度から、多少の好奇心を唆られた津田は、それでも彼に病院へ遊びに来いとは明言しなかつた。

津田が手術の準備だと云つて、折角叔母の拵へて呉れた肉にも肴にも、日頃大好きな茸飯にも手を附けないので、流石の叔母も氣の毒がつて、お金さんに頼んで、彼の口にする事の出来る麪麭と牛乳を買つて

來させようとした。ねと〳〵して無暗に歯の間に挾まる此所いらの麵麭に内心辟易しながら、叉贅澤だと云はれるのが少し怖いので、津田はたゞ大人しく茶の間を立つお金さんの後姿を見送つた。

お金さんの出て行つた後で、叔母はみんなの前で叔父に云つた。

「何うかまあ彼の子も今度の縁が纒まるやうになると仕合せですがね」

「纒まるだらうよ」

叔父は苦のなささうな返事をした。

「至極宜ささうに思ひます」

小林の挨拶も氣輕かつた。默つてゐるのは津田と眞事丈であつた。

相手の名を聞いた時、津田は其男に一二度叔父の家で會つたやうな心持もしたが、殆ど何等の記憶も殘つてゐなかつた。

「お金さんは其人を知つてるんですか」

「顏は知つてるよ。口は利いた事がないけれども」

「ぢや向うも口を利いた事なんかないんでせう」

「當り前さ」

「それでよく結婚が成立するもんだな」

津田は斯ういつて然るべき理窟が十分自分の方にあると考へた。それをみんなに見せるために、彼は馬鹿馬鹿しいといふよりも寧ろ不思議であるといふ顏附をした。

「ぢや何うすれば好いんだ。誰でもみんな御前が結婚した時のやうにしなくつちや不可ないといふのかね」

叔父は少し機嫌を損じたらしい語氣で津田の方を向いた。津田は寧ろ叔母に對する積りでゐたので、少し氣の毒になつた。

「さういふ譯ぢやないんです。さういふ事情のもとにお金さんの結婚が成立しちや不都合だなんていふ氣は全くなかつたのです。たとひ何んな事情だらうと結婚が成立さへすれば、無論結構なんですから」

三十

それでも座は白けてしまつた。今迄心持よく流れて居た談話が、急に堰き止められたやうに、誰も津田の言葉を受け繼いで、順々に後へ送つて呉れるものがなくなつた。

小林は自分の前にある麥酒の洋盃を指して、内所のやうな小さい聲で、隣にゐる眞事に訊いた。

「眞事さん、御酒を上げませうか。少し飲んで御覽なさい」

「苦いから僕厭だよ」

眞事はすぐ跳ね附けた。始めから飲ませる氣のなかつた小林は、それを機には〻と笑つた。好い相手が出來たと思つたのか眞事は突然小林に云つた。

「僕一圓五十錢の空氣銃を有つてるよ。持つて來て見せようか」

すぐ立つて奥の四疊半へ馳け込んだ彼が、其所から新しい玩具を茶の間へ持ち出した時、小林は行きが

かり上、ぴかぴかする空氣銃の嘆賞者とならなければ濟まなかつた。叔父も叔母も嬉しがつてゐるわが子のために、一言の愛嬌を義務的に添へる必要があつた。

「何うも時計を買への、萬年筆を買へのつて、貧乏な阿爺を責めて困る。それでも近頃馬丈は何うか斯うか諦めたやうだから、まだ始末が好い」

「馬も存外安いもんですな。北海道へ行きますと、一頭五六圓で立派なのが手に入ります」

「見て來たやうな事を云ふな」

空氣銃の御蔭で、みんなが又滿遍なく口を利くやうになつた。結婚が再び彼等の話頭に上つた。それは途切れた前の續きに相違なかつた。けれどもそれを口にする人々は、少しづゝ前と異つた氣分によつて、彼等の表現を支配されてゐた。

「是ばかりは妙なものでね。全く見ず知らずのものが、一所になつたところで、屹度不縁になるとも限らないしね、又いくら此人ならばと思ひ込んで出來た夫婦でも、末始終和合するとは限らないんだから」

叔母の見て來た世の中を正直に纏めると斯うなるより外に仕方なかつた。此大きな事實の一隅にお金さんの結婚を安全に置かうとする彼女の態度は、辯護的といふよりも寧ろ說明的であつた。さうして其說明は津田から見ると最も不完全で又最も不安全であつた。結婚に就いて津田の誠實を疑ふやうな口振を見せた叔母こそ、此點にかけて根本的な眞面目さを缺いてゐるとしか彼には思へなかつた。

「そりや樂な身分の人の云ひ草ですよ」と叔母は開き直つて津田に云つた。「やれ交際だの、やれ婚約だのつて、そんな贅澤な事を、我々風情が云つてられますか。貰つて呉れ手、來て呉れ手があれば、それ

で難有いと思はなくつちやならない位のものです」

津田はみんなの手前今のお金さんの場合に就いて彼是云ひたくなかつた。それをいふ程の深い關係もなく又興味もない彼は、たゞ叔母が自分に對して有つ、不眞面目といふ疑念を塗り潰すために、向うの不眞面目さを啓發して置かなくては不可ないといふ心持に制せられるので、默つて仕舞ふ譯に行かなかつた。彼は首を捻つて考へ込む樣子をしながら云つた。

「何もお金さんの場合を兎や角批評する氣はないんだが、一體結婚を、さう容易く考へて構はないものか知ら。僕には何だか不眞面目な樣な氣がして不可ないがな」

「だつて行く方で眞面目に行く氣になり、貰ふ方でも眞面目に貰ふ氣になれば、何所と云つて不眞面目な所が出て來よう筈がないぢやないか。由雄さん」

「さういふ風に手つとり早く眞面目になれるかが問題でせう」

「なれゝばこそ叔母さんなんぞは此藤井家へ御嫁に來て、ちやんと斯うしてゐるぢやありませんか」

「そりや叔母さんは左右でせうが、今の若いものに……」

「今だつて昔だつて人間に變りがあるものかね。みんな自分の決心一つです」

「さう云つた日にや丸で議論にならない」

「議論にならなくつても、事實の上で、あたしの方が由雄さんに勝つてるんだから仕方がない。色々選り好みをした揚句、御嫁さんを貰つた後でも、まだ選り好みをして落ち附かずにゐる人よりも、此方の方が何の位眞面目だか解りやしない」

先刻から肉を突つついてゐた叔父は、自分の口を出さなければならない時機に到着した人のやうに、皿から眼を放した。

三十一

「大分八釜しくなつて來たね。默つて聞いてゐると、叔母甥の對話とは思へないよ」

二人の間に斯う云つて割り込んで來た叔父は其實行司でも審判官でもなかつた。

「何だか雙方敵愾心を以て云ひ合つてるやうだが、喧嘩でもしたのかい」

彼の質問は、單に質問の形式を具へた注意に過ぎなかつた。眞事を相手にビー珠を轉がしてゐた小林が偸むやうにして此方を見た。叔母も津田も一度に默つてしまつた。叔父は遂に調停者の態度で口を開かなければならなくなつた。

「由雄、御前見たやうな今の若いものには、一寸理解出來惡いかも知れないがね、叔母さんは嘘を吐いてるんぢやないよ。知りもしない己の所へ來るとき、もうちやんと覺悟を極めてゐたんだからね。叔母さんは本當に來ない前から來た後と同じやうな眞面目だつたのさ」

「そりや僕だつて伺はないでも承知してゐます」

「所がさ、其叔母さんがだね。何ういふ譯でそんな大決心をしたかといふとだね」

そろ〳〵醉ひの廻つた叔父は、炎熱つた顏へ水分を供給する義務を感じた人のやうに、又洋盃を取り上げて麥酒をぐいと飲んだ。

「實を云ふと其譯を今日迄まだ誰にも話した事がないんだが、どうだ一つ話して聞かせようか」

「えゝ」

津田も半分は眞面目であつた。

「實はだね。此叔母さんはこれでこの己に意があつたんだ。つまり初めから己の所へ來たかつたんだね。だからまだ來ないうちから、もう猛烈に自分の覺悟を極めてしまつたんだ。――」

「馬鹿な事を仰しやい。誰が貴方のやうな醜男に意なんぞあるもんですか」

津田も小林も吹き出した。獨りきよとんとした眞事は叔母の方を向いた。

「御母さん意があるつて何」

「御母さんは知らないから御父さんに伺つて御覧」

「ぢや御父さん、何さ、意があるつてのは」

叔父はにや〳〵しながら、禿けた頭の眞中を大事さうに撫で廻した。氣の所爲か其禿が普通の時よりは少し赤いやうに、津田の眼に映つた。

「眞事、意があるつてえのはね。――つまりそのね。――まあ、好きなのさ」

「ふん。ぢや好いぢやないか」

「だから誰も惡いと云つてやしない」

「だつて皆笑ふぢやないか」

此問答の途中へお金さんが丁度歸つて來たので、叔母はすぐ眞事の床を敷かして、彼を寢間の方へ追ひ

遣つた。興に乘つた叔父の話しは益發展するばかりであつた。

「そりや昔だつて戀愛事件はあつたよ。いくらお朝が怖い顏をしたつてあつたに違ひないが、だね。其所にまた今の若いものには到底解らない方面もあるんだから、妙だらう。昔は女の方で男に惚れたけれども、男の方では決して女に惚れなかつたもんだ。――ねえお朝さうだつたらう」

「何うだか存じませんよ」

叔母は眞事の立つた後へ坐つて、さつさと松茸飯を手盛りにして食べ始めた。

「さう怒つたつて仕方がない。其所に事實があると同時に、一種の哲學があるんだから。今己が其哲學を講釋してやる」

「もうそんな六づかしいものは、伺はなくつても澤山です」

「ぢや若いもの丈に教へてやる。由雄も小林も參考のためによく聽いとくが可い。一體御前達は他の娘を何だと思ふ」

「女だと思つてます」

津田は交ぜ返し半分わざと返事をした。

「さうだらう。たゞ女だと思ふ丈で、娘とは思はないんだらう。それが己達とは大違ひだて。己達は父母から獨立したたゞの女として他人の娘を眺めた事が未だ曾てない。だから何處の御孃さんを拜見しても、その御孃さんには、父母といふ所有者がちやんと食つ附いてるんだと初めから觀念してゐる。だからいくら惚れたくつても惚れられなくなる義理ぢやないか。何故と云つて御覽、惚れるとか愛し合ふとかいふの

は、つまり相手を此方が所有してしまふといふ意味だらう。既に所有權の附いてるものに手を出すのは泥棒ぢやないか。さういふ譯で義理堅い昔の男は決して惚れなかつたね。尤も女は慥かに惚れたよ。現に其所で松茸飯を食つてるお朝なぞも實は己に惚れたのさ。然し己の方ぢやかつて彼女を愛した覺えがない」

「何うでも可いから、もう好い加減にして御飯になさい」

眞事を寢かし附けに行つたお金さんを呼び返した叔母は、彼女にいひつけて、みんなの茶碗に飯をよそはせた。津田は仕方なしに、ひとり不味い食麵麭をにちや〳〵嚙んだ。

三十二

食後の話しはもうはずまなかつた。と云つて、別にしんみりした方面へ落ちて行くでもなかつた。人々の興味を共通に支配する題目の柱が折れた時のやうに、彼等はてんでんばら〳〵に口を利いた後で、誰もそれを會話の中心に纏めようと努力するもののないのに氣が附いた。

卓袱臺の上に兩肱を突いた叔父が醉後の欠を續けざまに二つした。叔母が下女を呼んで殘物を勝手へ運ばした。先刻から重苦しい空氣の影響を少しづゝ感じてる津田の胸に、今夜聞いた叔父の言葉が、月の面を過ぎる浮雲のやうに、時々薄い影を投げた。そのたびに他人から見ると、麥酒の泡と共に消えてしまふべき筈の言葉を、津田は却て意味ありげに自分で追ひ掛けて見たり、又自分で追ひ戻して見たりした。其所に氣の附いた時、彼は我ながら不愉快になつた。

同時に彼は自分と叔母との間に取り換はされた言葉の投げ合ひも思ひ出さずにはゐられなかつた。其投

げ合ひの間、彼は始終自分を抑へ附けて、成るべく心の色を外へ出さないやうにしてゐた。其所に彼の誇りがあると共に、其所に一種の不快も潜んでゐたことは、彼の氣分が彼に敎へる事實であつた。半日以上の暇を潰した此久し振の訪問を、單に斯ういふ快不快の立場から眺めた津田は、すぐ其對照として活潑な吉川夫人と其綺麗な應接間とを記憶の舞臺に躍らした。つゞいて近頃漸く丸髷に結ひ出したお延の顔が眼の前に動いた。

彼は座を立たうとして小林を顧た。

「君はまだゐるかね」

「いや。僕ももう御暇しよう」

小林はすぐ吸ひ殘した敷島の袋を洋袴の隱袋へねぢ込んだ。すると彼等の立ち際に、叔父が偶然らしく又口を開いた。

「お延は何うしたい。行かう行かうと思ひながら、つい貧乏暇なしだもんだから、御無沙汰をしてゐる。宜しく云つて呉れ。御前の留守にや閑で困るだらうね、彼の女も。一體何をして暮らしてゐるかね」

「何つて別にする事もないでせうよ」

斯う散漫に答へた津田は、何と思つたか急に後から附け足した。

「病院へ一所に入りたいなんて氣樂な事をいふかと思ふと、やれ髮を刈れの湯に行けのつて、叔母さんよりも餘つ程八釜しい事を云ひますよ」

「感心ぢやないか。御前のやうな御洒落にそんな注意をしてくれるものは外にありやしないよ」

「難有い仕合せだな」
「芝居は何うだい。近頃行くかい」
「えゝ時々行きます。此間も岡本から誘はれたんだけれども、生憎此病氣の方の片を附けなけりやならないんでね」
津田は其所で一寸叔母の方を見た。
「何うです、叔母さん、近い内帝劇へでも御案内しませうか。偶にやあゝいふ所へ行つて見るのも藥ですよ、氣がはれ〴〵してね」
「えゝ難有う。だけど由雄さんの御案内ぢや――」
「御厭ですか」
「厭より、何時の事だか分らないからね」
芝居場などを餘り好まない叔母の此返事を、わざと正面に受けた津田は頭を掻いて見せた。
「さう信用がなくなつた日にや僕もそれ迄だ」
叔母はふゝんと笑つた。
「芝居は何うでも可いが、由雄さん京都の方は何うして、それから」
「京都から何とか云つて來ましたか此方へ」
津田は少し眞劍な表情をして、叔父と叔母の顔を見比べた。けれども二人は何とも答へなかつた。
「實は僕の所へ今月は金を送れないから、そつちで何うでも爲ろつて、御父さんが云つて來たんだが、

隨分亂暴ぢやありませんか」
　叔父は笑ふ丈であつた。
「兄貴は怒つてるんだらう」
「一體お秀が又餘計な事を云つて遣るから不可ない」
津田は少し忌々しさうに妹の名前を口にした。
「お秀に咎はありません。始めから由雄さんの方が惡いに極まつてるんだもの」
「そりや左うかも知れないけれども、何國の國にあなた阿爺から送つて貰つた金を、きちん〳〵返す奴があるもんですか」
「ぢや最初からきちん〳〵返すつて約束なんかしなければ可いのに。それに……」
「もう解りましたよ、叔母さん」
津田はとても敵はないといふ心持を其樣子に見せて立ち上がつた。然し敗北の結果急いで退却する自分に景氣を添へるため、促すやうに小林を引張つて、一所に表へ出る事を忘れなかつた。

三十三

戸外には風もなかつた。靜かな空氣が足早に歩く二人の頰に冷たく觸れた。星の高く輝く空から、眼に見えない透明な露がしと〳〵降りてるらしくも思はれた。津田は自分で外套の肩を撫でた。其外套の裏側に滲み込んでくるひんやりした感じを、はつきり指先で味はつて見た彼は小林を顧た。

「日中は暖かだが、夜になると矢つ張り寒いね」

「うん。何と云つてももう秋だからな。實際外套が欲しい位だ」

小林は新調の三つ揃の上に何も着てゐなかつた。ことさらに爪先を厚く四角に拵へたいかつい亞米利加型の靴をごと／＼鳴らして、太い洋杖をわざとらしく振り廻す彼の態度は、丸で冷たい空氣に抵抗する示威運動者に異ならなかつた。

「君學校にゐた時分作つたあの自慢の外套は何うした」

彼は突然意外な質問を津田に掛けた。津田は彼に其外套を見せびらかした當時を思ひ出さない譯に行かなかつた。

「うん、まだあるよ」

「まだ着てゐるのか」

「いくら僕が貧乏だつて、書生時代の外套を、さう大事さうに何時迄着てゐるものかね」

「さうか、それぢや丁度好い。あれを僕に呉れ」

「欲しければ遣つても好い」

津田は寧ろ冷やかに答へた。靴足袋まで新しくしてゐる男が、他の着古した外套を貰ひたがるのは少し矛盾であつた。少なくとも、其人の生活に横たはる、不規則な物質的の凸凹を證據立ててゐた。しばらくしてから、津田は小林に訊いた。

「何故其背廣と一所に外套も拵へなかつたんだ」

「君と同じやうに僕を考へちや困るよ」
「ぢや何うして其背廣だの靴だのが出來たんだ」
「訊き方が少し手酷し過ぎるね。なんぼ僕だつてまだ泥棒はしないから安心して呉れ」
津田はすぐ口を閉ぢた。
二人は大きな坂の上に出た。廣い谷を隔てて向うに見える小高い岡が、怪獸の背のやうに黑く長く横たはつてゐた。秋の夜の燈火が所々に點々と少量の暖かみを滴らした。
「おい、歸りに何處かで一杯遣らうぢやないか」
津田は返事をする前に、まづ小林の樣子を窺つた。彼等の右手には高い土手があつて、其土手の上には蓊鬱した竹藪が一面に生ひ被さつてゐた。風がないので竹は鳴らなかつたけれども、眠つたやうに見える其笹の葉の梢は、季節相應な蕭索の感じを津田に與へるに充分であつた。
「此所は厭に陰氣な所だね。何所かの大名華族の裏に當たるんで、何時迄も斯うして放つてあるんだらう。早く切り開いちまへば可いのに」
津田は斯ういつて當面の挨拶を胡魔化さうとした。然し小林の眼に竹藪なぞは丸で入らなかつた。
「おい行かうぢやないか、久し振で」
「今飲んだばかりだのに、もう飲みたくなつたのか」
「今飲んだばかりつて、あれつぱかり飲んだんぢや飲んだ部へ入らないからね」
「でも君はもう充分ですつて斷つてゐたぢやないか」

「先生や奥さんの前ぢや遠慮があつて醉へないから、仕方なしにあゝ云つたんだね。丸つきり飲まないんなら兎も角も、あの位飲ませられるのは却て毒だよ。後から適當の程度迄醉つて置いて止めないと身體に障るからね」

自分に都合の好い理窟を勝手に拵へて、何でも津田を引張らうとする小林は、彼に取つて少し迷惑な伴侶であつた。彼は冷やかし半分に訊いた。

「君が奢るのか」

「うん奢つても好い」

「さうして何處へ行く積りなんだ」

「何處でも構はない。おでん屋でも可いぢやないか」

二人は默つて坂の下迄降りた。

三十四

順路からいふと、津田は其所を右へ折れ、小林は眞直に行かなければならなかつた。然し體よく分かれようとして帽子へ手を掛けた津田の顏を、小林は覗き込むやうに見て云つた。

「僕も其方へ行くよ」

彼等の行く方角には飲み食ひに都合のいゝ町が二三町續いてゐた。其中程にある酒場めいた店の硝子戸が、暖かさうに内側から照らされてゐるのを見附けた時、小林はすぐ立ち留まつた。

「此所が好い。此所へ入らう」
「僕は厭だよ」
「君の氣に入りさうな上等の宅は此所いらにないんだから、此所で我慢しようぢやないか」
「僕は病氣だよ」
「構はん、病氣の方は僕が請け合つてやるから、心配するな」
「冗談云ふな。厭だよ」
「細君には僕が辯解してやるから可いだらう」
面倒になつた津田は、小林を其所へ置き去りにした儘、さつさと行かうとした。すると彼とすれ〴〵に歩を移して來た小林が、少し改まつた口調で追究した。
「そんなに厭か、僕と一所に酒を飲むのは」
實際そんなに厭であつた津田は、此言葉を聞くとすぐ留まつた。さうして自分の傾向とは丸で反對な決斷を外部へ現はした。
「ぢや飲まう」
二人はすぐ明るい硝子戸を引いて中へ入つた。客は彼等の外に五六人居たぎりであつたが、店があまり廣くないので、比較的込み合つてるやうに見えた。割合ひ樂に席の取れさうな片隅を擇んで、差し向ひに腰を卸ろした二人は、通した注文の來る間、多少物珍らしさうな眼を周圍へ向けた。服裝から見た彼等の相客中に、社會的地位のありさうなものは一人もなかつた。湯歸りと見えて、縞の

半纏の肩へ濡れ手拭を掛けたのだの、木綿物に角帶を締めて、わざとらしく平打の羽織の紐の眞中へ擬物の翡翠を通したのだのは寧ろ上等の部であつた。ずつと非道いのは、丸で紙屑買としか見えなかつた。腹掛股引も一人交じつてゐた。

「何うだ平民的で可いぢやないか」

小林は津田の猪口へ酒を注ぎながら斯う云つた。其言葉を打ち消すやうな新調したての派出な彼の背廣が、すぐ殊更らしく津田の眼に映つたが、彼自身は丸で其所に氣が附いてゐないらしかつた。

「僕は君と違つて何うしても下等社會の方に同情があるんだからな」

小林は恰もそこに自分の兄弟分でも揃つてゐるやうな顔をして、一同を見廻した。

「見玉へ。彼等はみんな上流社會より好い人相をしてゐるから」

挨拶をする勇氣のなかつた津田は、一同を見廻す代りに、却て小林を熟視した。小林はすぐ讓歩した。

「少なくとも陶然としてゐるだらう」

「上流社會だつて陶然とするからな」

「だが陶然としかたが違ふよ」

津田は昂然として兩者の差違を訊かなかつた。それでも小林は少しも悄氣ずに、ぐい〳〵杯を重ねた。

「君は斯ういふ人間を輕蔑してゐるね。同情に價しないものとして、初めから見縊つてゐるんだ」

斯ういふや否や、彼は津田の返事も待たずに、向うにゐる牛乳配達見たやうな若ものに聲を掛けた。

「ねえ君。さうだらう」

出し抜けに呼び掛けられた若者は倔強な頸筋を曲げて一寸此方を見た。すると小林はすぐ杯をそつちの方へ出した。

「まあ君一杯飲みたまへ」

若者はにや〳〵と笑つた。不幸にして彼と小林との間には一間程の距離があつた。立つて杯を受ける程の必要を感じなかつた彼は、微笑する丈で動かなかつた。しかしそれでも小林には滿足らしかつた。出した杯を引込めながら、自分の口へ持つて行つた時、彼は又津田に云つた。

「そらあの通りだ。上流社會のやうな高慢ちきな人間は一人も居やしない」

三十五

インヴネスを着た小作りな男が、半纏の角刈と入れ違ひに這入つて來て、二人から少し隔たつた所に席を取つた。廂を深く卸ろした鳥打を被つたまゝ、彼は一應ぐるりと四邊を見廻した後で、懷へ手を入れた。さうして其所から取り出した薄い小型の帳面を開けて、讀むのだか考へるのだか、ぢつと見詰めてゐた。彼は何時迄經つても、古ぼけたとんびを脱がうとしなかつた。帽子も頭へ載せた儘であつた。併し帳面はそんなに長くひろげてゐなかつた。大事さうにそれを懷へ仕舞ふと、今度は飮みながら、じろり〳〵と他の客を、見ない樣にして見始めた。其相間々々には、ちんちくりんな外套の羽根の下から手を出して、薄い鼻の下の髭を撫でた。

先刻から氣を附けるともなしに此樣子に氣を附けてゐた二人は、自分達の視線が彼の視線に行き合つた

時、ぴたりと眞向きになつて互に顏を見合はせた。小林は心持ち前へ乘り出した。

「何だか知つてるか」

津田は元の通りの姿勢を崩さなかつた。殆ど返事に價しないといふ口調で答へた。

「何だか知るもんか」

小林は猶聲を低くした。

「彼奴は探偵だぜ」

津田は答へなかつた。相手より酒量の强い彼は、却つて相手程平生を失はなかつた。默つて自分の前にある猪口を干した。小林はすぐそれへなみ〳〵と注いだ。

「あの眼附を見ろ」

薄笑ひをした津田は漸く口を開いた。

「君見たいに無暗に上流社會の惡口をいふと早速社會主義者と間違へられるぞ。少し用心しろ」

「社會主義者？」

小林はわざと大きな聲を出して、ことさらにインヴネスの男の方を見た。

「笑かせやがるな。此方や、かう見えたつて、善良なる細民の同情者だ。僕に比べると、乙に上品振つて取り繕つてる君達の方が餘つ程の惡者だ。何方が警察へ引つ張られて然るべきだか好く考へて見ろ」

鳥打の男が默つて下を向いてるので、小林は津田に食つてかゝるより外に仕方がなかつた。

「君は斯うした土方や人足をてんから人間扱ひにしない積りかも知れないが」

小林は又斯う云ひ掛けて、其所いらを見廻したが、生憎どこにも土方や人足はゐなかつた。夫でも彼は一向構はずに喋舌りつゞけた。

「彼等は君や探偵よりいくら人間らしい崇高な生地をうぶの儘有つてるか解らないぜ。たゞ其人間らしい美しさが、貧苦といふ塵埃で汚れてゐる丈なんだ。つまり湯に入れないから穢いんだ。馬鹿にするな」

小林の語氣は、貧民の辯護といふよりも寧ろ自家の辯護らしく聞こえた。然し無暗に取り合つて此方の體面を傷つけられては困るといふ用心が頭に働くので、津田はわざと議論を避けてゐた。すると小林がなほ追つ懸けて來た。

「君は默つてるが僕のいふ事を信じないね。たしかに信じない顔附をしてゐる。そんなら僕が說明してやらう。君は露西亞の小說を讀んだらう」

露西亞の小說を一冊も讀んだ事のない津田は矢張り何とも云はなかつた。

「露西亞の小說、ことにドストエヴスキの小說を讀んだものは必ず知つてる筈だ。如何に人間が下賤であらうとも、又如何に無教育であらうとも、時として其人の口から、淚がこぼれる程難有い、さうして少しも取り繕はない、至純至精の感情が、泉のやうに湧き出して來る事を誰でも知つてる筈だ。君はあれを虛僞と思ふか」

「僕はドストエヴスキを讀んだ事がないから知らないよ」

「先生に訊くと、先生はありや噓だと云ふんだ。あんな高尚な情操をわざと下劣な器に盛つて、感傷的に讀者を刺激する策略に過ぎない、つまりドストエヴスキが中たつた爲に、多くの摸倣者が續出して、無

暗に安つぽくしてしまつた一種の藝術的技巧に過ぎないといふんだ。然し僕はさうは思はない。先生からそんな事を聞くと腹が立つ。先生にドストエヴスキは解らない。いくら年齒を取つたつて、先生は書物の上で年齒を取つた丈だ。いくら若からうが僕は……」

小林の言葉は段々逼つて來た。仕舞に彼は感慨に堪へんといふ顏をして、涙をぽたぽた卓布の上に落とした。

三十六

不幸にして津田の心臓には、相手に釣り込まれる程の醉ひが廻つてゐなかつた。同化の埒外から此興奮狀態を眺める彼の眼は遂に批判的であつた。彼は小林を泣かせるものが酒であるか、叔父であるかを疑つた。ドストエヴスキであるか、日本の下層社會であるかを疑つた。其の何方にした所で、自分とあまり交渉のない事もよく心得てゐた。彼は詰らなかつた。又不安であつた。感激家によつて彼の前に振り落とされた涙の痕を、たゞ迷惑さうに眺めた。

探偵として物色された男は、懷から又薄い手帳を出して其中へ鉛筆で何かしきりに書き附け始めた。猫のやうに物靜かでありながら、猫のやうに凡てを注意してゐるらしい彼の擧動が、津田を變な氣持にした。けれども小林の醉ひは、もうそんな所を通り越して居た。探偵などは丸で眼中になかつた。彼は新調の背廣の腕をいきなり津田の鼻の先へ持つて來た。

「君は僕が汚い服裝をすると、汚いと云つて輕蔑するだらう。又會に綺麗な着物を着ると、今度は綺麗

だと云つて輕蔑するだらう。ぢや僕は何うすれば可いんだ。何うすれば君から尊敬されるんだ。後生だから教へて呉れ。僕はこれでも君から尊敬されたいんだ」

津田は苦笑しながら彼の腕を突き返した。不思議にも其腕には抵抗力がなかつた。最初の勢ひが急に何處かへ拔けたやうに、大人しく元の方角へ戻つて行つた。けれども彼の口は彼の腕程素直ではなかつた。手を引込ました彼はすぐ口を開いた。

「僕は君の腹の中をちやんと知つてる。君は僕が是程下層社會に同情しながら、自分自身貧乏な癖に、新しい洋服なんか拵へたので、それを矛盾だと云つて笑ふ氣だらう」

「いくら貧乏だつて、洋服の一着位拵へるのは當り前だよ。拵へなけりや赤裸で往來を歩かなければなるまい。拵へたつて結構ぢやないか。誰も何とも思つてやしないよ」

「所がさうでない。君は僕を唯めかすんだと思つてる。御洒落だと解釋してゐる。それが惡い」

「さうか。そりや惡かつた」

もう遣り切れないと觀念した津田は、とう〳〵降參の便利を悟つたので、好い加減に調子を合はせ出した。すると小林の調子も自然と變つて來た。

「いや僕も惡い。惡かつた。僕にも洒落氣はあるよ。そりや僕も充分認める。認めるには認めるが、僕が何故今度この洋服を作つたか、其譯を君は知るまい」

そんな特別の理由を津田は固より知らう筈がなかつた。又知りたくもなかつた。けれども行き掛り上訊いて遣らない譯にも行かなかつた。兩手を左右へひろげた小林は自分で自分の服裝を見廻しながら、寧ろ

心細さうに答へた。

「實はこの着物で近々都落ちをやるんだよ。朝鮮へ落ちるんだよ」

津田は始めて意外な顔をして相手を見た。序に先刻から苦になつてゐた襟飾の横つちよに曲がつてゐるのを注意して直させた後で、又彼の話しを聽きつゞけた。

長い間叔父の雜誌の編輯をしたり、校正をしたり、其間には自分の原稿を書いて、金を呉れさうな所へ方々持つて廻つたりして、始終忙しさうに見えた彼は、とう〳〵東京に居たたまれなくなつた結果、朝鮮へ渡つて、其所の或新聞社へ雇はれる事に、略相談が極まつたのであつた。

「斯う苦しくつちや、いくら東京に辛抱してゐたつて、仕方がないからね。未來のない所に住んでるのは實際厭だよ」

其未來が朝鮮へ行けば、あらゆる準備をして自分を待つてゐさうな事をいふ彼は、すぐ又前言を取り消すやうな口も利いた。

「要するに僕なんぞは、生涯漂浪して歩く運命を有つて生れて來た人間かも知れないよ。何うしても落ち附けないんだもの。たとひ自分が落ち附く氣でも、世間が落ち附かせて呉れないから殘酷だよ。駈落者になるより外に仕方がないぢやないか」

「落ち附けないのは君ばかりぢやない。僕だつてちつとも落ち附いてゐられやしない」

「勿體ない事をいふな。君の落ち附けないのは贅澤だからさ。僕のは死ぬ迄麵麭を追つ懸けて歩かなければならないんだから苦しいんだ」

「然し落ち附けないのは、現代人の一般の特色だからね。苦しいのは君ばかりぢやないよ」
小林は津田の言葉から何等の慰藉を受ける氣色もなかつた。

三十七

先刻から二人の樣子を眺めてゐた下女が、いきなり來て、わざとらしく食卓の上を片附け始めた。それを合圖のやうに、インヴネスを着た男がすうと立ち上がつた。疾うに酒をやめて、たゞ話しばかりしてゐた二人も澄ましてゐる譯に行かなかつた。津田は機會を捉へてすぐ腰を上げた。小林は椅子を離れる前に、先づ彼等の間に置かれたM. C. の箱を取つた。さうして其中から又新しい金口を一本出してそれに火を點けた。行き掛けの駄賃らしい此所作が、煙草の箱を受け取つて袂へ入れる津田の眼を、皮肉に擽つたくした。

時刻はそれ程でなかつたけれども、秋の夜の往來は意外に更け易かつた。晝は耳に附かない一種の音を立てて電車が遠くの方を走つてゐた。別々の氣分に働き懸けられてゐる二人の黑い影が、まだ離れずに河の縁をつたつて動いて行つた。

「朝鮮へは何時頃行くんだね」

「ことによると君の病院へ入つてゐるうちかも知れない」

「そんなに急に立つのか」

「いやさうとも限らない。もう一遍先生が向うの主筆に會つて吳れてからでないと、判然した事は分ら

ないんだ」

「立つ日がかい、或は行く事がかい」

「うん、まあ――」

彼の返事は少し曖昧であつた。津田がそれを追求もしないで、さつさと行き出した時、彼は又云ひ直した。

「實を云ふと、僕は行きたくもないんだがなあ」

「藤井の叔父が是非行けとでも云ふのかい」

「なにさうでもないんだ」

「ぢや止したら可いぢやないか」

津田の言葉は誰にでも解り切つた理窟な丈に、同情に飢ゑてゐさうな相手の氣分を殘酷に射貫いたと一般であつた。數歩の後、小林は突然津田の方を向いた。

「津田君、僕は淋しいよ」

津田は返事をしなかつた。二人は又默つて歩いた。淺い河床の眞中を、少しばかり流れてゐる水が、ぼんやり見える橋杭の下で黑く消えて行く時、幽かに音を立てて、電車の通る相間々々に、ちよろ／＼と鳴つた。

「僕は矢つ張り行くよ。何うしても行つた方が可いんだからね」

「ぢや行くさ」

「うん、行くとも。斯んな所にゐて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か臺灣に行つた方がよつぽど增しだ」

彼の語氣は癇走つてゐた。津田は急に穩やかな調子を使ふ必要を感じた。

「あんまりさう悲觀しちや不可ないよ。年齒さへ若くつて身體さへ丈夫なら、何所へ行つたつて立派に成功出來るぢやないか。――君が立つ前一つ送別會を開かう、君を愉快にするために」

今度は小林の方が可い返事をしなかつた。津田は重ねて跋を合はせる態度に出た。

「君が行つたらお金さんの結婚する時困るだらう」

小林は今迄頭のなかになかつた妹の事を、はつと思ひ出した人のやうに津田を見た。

「うん、彼奴も可哀相だけれども仕方がない。詰り斯んなやくざな兄貴をもつたのが不仕合せだと思つて、諦めて貰ふんだ」

「君がゐなくつたつて、叔父や叔母が何うかして呉れるんだらう」

「まあそんな事になるより外に仕方がないからな。でなければ此結婚を斷つて、何時迄も下女代りに、先生の宅で使つて貰ふんだが、――そいつは先あ何方にしたつて同じやうなもんだらう。それより僕はまだ先生に氣の毒な事があるんだ。もし行くとなると、先生から旅費を借りなければならないからね」

「向うぢや呉れないのか」

「呉れさうもないな」

「何うにかして出させたら好いだらう」

「さあ」

一分ばかりの沈默を破つた時、彼は又獨り言のやうに云つた。

「旅費は先生から借りる、外套は君から貰ふ、たつた一人の妹は置いてき堀にする、世話はないや」

是が其晩小林の口から出た最後の臺詞であつた。二人は遂に分かれた。津田は後をも見ずにさつさと宅の方へ急いだ。

三十八

彼の門は例の通り締まつてゐた。彼は潜り戸へ手を掛けた。所が今夜は其潜り戸も亦開かなかつた。立て附けの惡い所爲かと思つて、二三度遣り直した揚句、力任せに戸を引いた時、ごとりといふ重苦しい鍵の抵抗力を裏側に聞いた彼は漸く斷念した。

彼は此豫想外の出來事に首を傾けて、しばらく戸の前に佇立んだ。新しい世帶を持つてから今日に至る迄、一度も外泊した覺えのない彼は、たまに夜遲く歸る事があつても、まだ斯うした經驗には出會はなかつたのである。

今日の彼は灯點し頃から早く宅へ歸りたがつてゐた。叔父の家で名ばかりの晩飯を食つたのも仕方なしに食つたのであつた。進みもしない酒を少し飲んだのも小林に對する義理に過ぎなかつた。夕方以後の彼は、寧ろお延の面影を心に置きながら外で暮らしてゐた。其薄ら寒い外から歸つて來た彼は、丁度暖かい家庭の燈火を慕つて、それを目標に足を運んだのと一般であつた。彼の身體が土塀に行き當たつた馬のや

うに留まると共に、彼の期待も急に門前で喰ひ留められなければならなかつた。さうしてそれを喰ひ留めたものがお延であるか、偶然であるかは、今の彼に取つて決して小さな問題でなかつた。

彼は手を擧げて開かない潛り戸をとん／＼と二つ敲いた。「此所を開けろ」といふよりも「此所を何故締めた」といつて詰問する樣な音が、更け渡りつゝある往來の暗がりに響いた。すると內側ですぐ「はい」といふ返事がした。殆ど反響に等しい位早く彼の鼓膜を打つた其聲の主は、下女でなくてお延であつた。急に靜まり返つた彼は戸の此方側で耳を澄ました。用のある時丈使ふ事にしてある玄關先の電燈のスヰッチを捩る音が明らかに聞こえた。格子がすぐがらりと開いた。入口の開き戸がまだ閉ててない事は慥かであつた。

「どなた？」

潛りのすぐ向う側迄來た足音が止まると、お延は先づ斯う云つて誰何した。彼は猶の事急き込んだ。

「早く開けろ、己だ」

お延は「あらつ」と叫んだ。

「貴方だつたの。御免遊ばせ」

ごと／＼云はして鏁を外した後で夫を內へ入れた彼女は何時もより少し蒼い顏をしてゐた。彼はすぐ玄關から茶の間へ通り拔けた。

茶の間は何時もの通りきちんと片附いてゐた。鐵瓶が約束通り鳴つてゐた。長火鉢の前には例によつて厚いメリンスの座蒲團が、彼の歸りを待ち受ける如くに敷かれてあつた。お延の坐りつけた其向うには、

彼女の座蒲團の外に、女持ちの硯箱が出してあつた。青貝で梅の花を散らした螺鈿の蓋は傍へ取り除けられて、梨地の中に嵌め込んだ小さな硯がつや／＼と濡れてゐた。持主が急いで座を立つた證據に、細い筆の穂先が、卷紙の上へ墨を滲ませて、七八寸書きかけた手紙の末を汚してゐた。

戸締りをして夫の後から入つてきたお延は寢卷の上へ平生着の羽織を引つ掛けた儘其所へぺたりと坐つた。

「何うも濟みません」

津田は眼を上げて柱時計を見た。時計は今十一時を打つたばかりの所であつた。結婚後彼が此位な刻限に歸つたのは、例外にした所で、決して初めてではなかつた。

「何だつて締め出しなんか喰はせたんだい。もう歸らないとでも思つたのか」

「いゝえ、さつきから、もう御歸りか、もう御歸りかと思つて待つてたの。仕舞にあんまり淋しくつて堪らなくなつたから、とう／＼宅へ手紙を書き出したの」

お延の兩親は津田の父母と同じやうに京都にゐた。津田は遠くから其書きかけの手紙を眺めた。けれどもまだ納得が出來なかつた。

「待つてたものがなんで門なんか締めるんだ。物騷だからかね」

「いゝえ。――あたし門なんか締めやしないわ」

「だつて現に締まつてゐたぢやないか」

「時が昨夕締めつ放しにしたまんまなのよ、屹度。いやな人」

斯う云つたお延は何時もする癖の通り、ぴく／＼彼女の眉を動かして見せた。日中用のない潜り戸の鍵を、朝外し忘れたといふ辯解は、決して不合理なものではなかつた。

「時は何うしたい」

「もう先刻寢かしてやつたわ」

下女を起してまで責任者を調べる必要を認めなかつた津田は、潜り戸の事を其儘にして寢た。

三十九

あくる朝の津田は、顔も洗はない先から、昨夜寢る迄全く豫想してゐなかつた不意の觀物によつて驚かされた。

彼の床を離れたのは九時頃であつた。彼は何時もの通り玄關を拔けて茶の間から勝手へ出ようとした。すると婢娟に盛粧したお延が澄まして其所に坐つてゐた。津田ははつと思つた。寢起きの顔へ水を掛けられたやうな夫の樣子に滿足したらしい彼女は微笑を洩らした。

「今御眼覺め？」

津田は眼をぱちつかせて、赤い手絡をかけた大丸髷と、派出な刺繡をした半襟の模樣と、それから其眞中にある化粧後の白い顔とを、さも珍らしい物でも見るやうな新しい眼附で眺めた。

「一體何うしたんだい。朝つぱらから」

お延は平氣なものであつた。

「何うもしないわ。――だつて今日は貴方が御醫者樣へ入らつしやる日ぢやないの」

昨夜遲く其所へ脫ぎ捨てて寢た筈の彼の袴も羽織も、疊んだなり、ちやんと取り揃へて、澁紙の上へ載せてあつた。

「御前も一所に行く積りだつたのかい」

「えゝ無論行く積りだわ。行つちや御迷惑なの」

「迷惑つて譯はないがね。――」

津田は又改めて細君の服裝を吟味する樣に見た。

「餘りおつくりが大袈裟だからね」

彼はすぐ心の中で此間見た薄暗い控室の光景を思ひ出した。其所に坐つてゐる患者の一群と此着飾つた若い奧樣とは、とても調和すべき性質のものでなかつた。

「だつて貴方今日は日曜よ」

「日曜だつて、芝居や御花見に行くのとは少し違ふよ」

「だつて妾……」

津田に云はせれば、日曜は猶の事患者が朝から込み合ふ丈であつた。

「何うも左右いふでこ／＼な服裝をして、あの御醫者樣へ夫婦御揃ひで乘り込むのは、少し――」

「辟易？」

お延の漢語が突然津田を擽つた。彼は笑ひ出した。一寸眉を動かしたお延はすぐ甘垂れるやうな口調を

使つた。

「だつて是から着物なんか着換へるのは時間が掛かつて大變なんですもの。折角着ちまつたんだから、今日は是で堪忍して頂戴よ、ね」

津田はとう／＼敗北した。顔を洗つてゐるとき、彼は下女に俥を一臺云ひ附けるお延の聲を、恰も自分が急き立てられでもするやうに世話しなく聞いた。

普通の食事を取らない彼の朝飯は殆ど五分とかゝらなかつた。楊枝も使はないで立ち上がつた彼はすぐ二階へ行かうとした。

「病院へ持つて行くものを纏めなくつちや」

津田の言葉と共に、お延はすぐ自分の後にある戸棚を開けた。

「此所に拵へてあるから一寸見て頂戴」

餘所行着を着た細君を勞らなければならなかつた津田は、稍重い手提鞄と小さな風呂敷包を、自分の手で戸棚から引き摺り出した。包の中には試しに袖を通したばかりの例の縕袍と平絎の寢卷紐が這入つてゐる丈であつたが、鞄の中からは、楊枝だの齒磨粉だの、使ひつけたラヹンダー色の書翰用紙だの、同じ色の封筒だの、萬年筆だの、小さい鋏だの、毛拔だのが雜然と現はれた。そのうちで一番重くて嵩張つた大きな洋書を取り出した時、彼はお延に云つた。

「是は置いて行くよ」

「さう、でも何時でも机の上に乘つてゐて、枝折が挾んであるから、御讀みになるのかと思つて入れと

いたのよ」

津田は何も云はずに、二箇月以上もかゝつて未だ讀み切れない經濟學の獨逸書を重さうに疊の上に置いた。

「寢てゐて讀むにや重くつて駄目だよ」

斯う云つた津田は、それが此大部の書物を殘して行く正當の理由であると知りながら、餘り好い心持がしなかつた。

「さう、本は何れが要るんだか妾分らないから、貴方自分で御好きなのを擇つて頂戴」

津田は二階から輕い小說を二三册持つて來て、經濟書の代りに鞄の中へ詰め込んだ。

四十

天氣が好いので幌を疊ました二人は、鞄と風呂敷包を、各自の俥の上に一つづゝ乘せて家を出た。小路の角を曲がつて電車通を一二丁行くと、お延の車夫が突然津田の車夫に聲を掛けた。俥は前後ともすぐ留まつた。

「大變。忘れものがあるの」

車上で振り返つた津田は、何も云はずに細君の顏を見守つた。念入りに身仕舞をした若い女の口から出る刺激性に富んだ言葉のために引き附けられたものは夫ばかりではなかつた。車夫も梶棒を握つた儘、等しくお延の方へ好奇の視線を向けた。傍を通る往來の人さへ一瞥の注意を夫婦の上へ與へないではゐられ

なかつた。

「何だい。何を忘れたんだい」

お延は思案するらしい様子をした。

「一寸待つてて頂戴。すぐだから」

彼女は自分の俥丈を元へ返した。中ぶらりんの心的状態で其所に取り残された津田は、黙つて其後姿を見送つた。一旦小路の中に隠れた俥がやがて又現はれると、劇しい速力で又彼の待つてる所迄馳けて来た。それが彼の眼の前で留まつた時、車上のお延は帯の間から一尺ばかりの鐵製の鎖を出して長くぶら下げて見せた。其鎖の端には環があつて、環の中には大小五六個の鍵が通してあるので、鎖を高く示さうとしたお延の所作と共に、ぢやら〳〵といふ音が津田の耳に響いた。

「是忘れたの。箪笥の上に置きつ放しにした儘」

夫婦以外に下女しか居ない彼等の家庭では、二人揃つて外出する時の用心に、大事なものに錠を卸ろして置いて、何方かが鍵丈持つて出る必要があつた。

「御前預かつておいで」

ぢやら〳〵するものを再び帯の間に押し込んだお延は、平手でぽんと其上を敲きながら、津田を見て微笑した。

「大丈夫」

俥は再び走け出した。

彼等の醫者に着いたのは豫定の時刻より少し後れてゐた。然し午迄の診察時間に間に合はない程でもなかつた。夫婦して控室に並んで坐るのが苦になるので、津田は玄關を上がると、すぐ藥局の口へ行つた。

「すぐ二階へ行つても可いでせうね」

藥局にゐた書生は奧から見習の看護婦を呼んで呉れた。まだ十六七にしかならない其看護婦は、何の造作もなく笑ひながら津田に御辭儀をしたが、傍に立つてゐるお延の姿を見ると、少し物々しさに打たれた氣味で、一體此孔雀は何處から入つて來たのだらうといふ顏付をした。お延が先を越して、「御厄介になります」と此方から挨拶をしたので、始めて氣が附いたやうに、看護婦も頭を下げた。

「君、此奴を一つ持つて呉れ玉へ」

津田は車夫から受取つた鞄を看護婦に渡して、二階の上り口の方へ廻つた。

「お延此方だ」

控室の入口に立つて、患者のゐる部屋の中を覗き込んでゐたお延は、すぐ津田の後に随いて階子段を上がつた。

「大變陰氣な室ね、あすこは」

南東の開いた二階は幸ひに明るかつた。障子を開けて縁側へ出た彼女は、つい鼻の先にある西洋洗濯屋の物干を見ながら、津田を顧た。

「下と違つて此所は陽氣ね。さうして一寸可い御部屋ね。疊は汚れてゐるけれども」

もと請負師か何かの妾宅に手を入れて出來上がつた其醫院の二階には、何所となく粹な昔の面影が残つ

てゐた。
「古いけれども宅の二階より増しかも知れないね」
日に照らされてきらくする白い洗濯物の色を、秋らしい氣分で眺めてゐた津田は、斯う云つて、時代のために多少燻ぶつた天井だの床柱だのを見廻した。

四十一

其所へ先刻の看護婦が急須へ茶を淹れて持つて來た。
「今仕度をして居りますから、少しの間何うぞ」
二人は仕方なしに行儀よく差向ひに坐つたなり茶を飲んだ。
「何だか氣がそはくして落ち附かないのね」
「丸で御客さまに行つたやうだらう」
「えゝ」
お延は帶の間から女持ちの時計を出して見た。津田は時間の事よりも是から受ける手術の方が氣になつた。
「一體何分位で濟むのかなあ。眼で見ないでもあの刃物の音丈聞いてゐると、好い加減變な心持になるからな」
「あたし怖いわ、そんなもの見るのは」

お延は實際怖さうに眉を動かした。

「だから御前は此所に待つといでよ。わざ〳〵手術臺の傍迄來て、穢い所を見る必要はないんだから」

「でも斯んな場合には誰か身寄のものが立ち合はなくつちや惡いんでせう」

津田は眞面目なお延の顏を見て笑ひ出した。

「そりや死ぬか生きるかつていふやうな重い病氣の時の事だね。誰がこれしきの療治に立合人なんか呼んで來る奴があるものかね」

津田は女に穢いものを見せるのが嫌ひな男であつた。ことに自分の穢い所を見せるのは厭であつた。もつと押し詰めていふと、自分で自分の穢い所を見るのでさへ、普通の人以上に苦痛を感ずる男であつた。

「おや止しませう」と云つたお延は又時計を出した。

「御午迄に濟むでせうか」

「濟むだらうと思ふがね。どうせ斯うなりや何時だつて同じこつちやないか」

「そりや左右だけど……」

お延は後を云はなかつた。津田も訊かなかつた。

看護婦が又階子段の上へ顏を出した。

「支度が出來ましたから何うぞ」

津田はすぐ立ち上がつた。お延も同時に立ち上がらうとした。

「御前は其所に待つといでと云ふのに」

「診察室へ行くんぢやないのよ。一寸此所の電話を借りるのよ」

「何所かへ用があるのかね」

「用ぢやないけど、――一寸お秀さんの所へ貴方の事を知らせて置かうと思つて」

同じ區内にある津田の妹の家は其所から餘り遠くはなかつた。今度の病氣に就いて妹の事を餘り頭の中に入れてゐなかつた津田は、立たうとするお延を留めた。

「可いよ、知らせないでも。お秀なんかに知らせるのはあんまり仰山過ぎるよ。それに彼奴が來ると八釜しくつて不可ないからね」

年は下でも、性質の違ふ此妹は、津田から見たある意味の苦手であつた。

お延は中腰の儘答へた。

「でも後でまた何か云はれると、あたしが困るわ」

強ひて留める理由も見出だし得なかつた津田は仕方なしに云つた。

「掛けても構はないが、何も今に限つた事はないだらう。彼奴は近所だから、屹度すぐ來るよ。手術をしたばかりで、神經が過敏になつてる所へもつて來て、兄さんが何とかで、御父さんがかんとかだと云はれるのは實際樂ぢやないからね」

お延は微かな聲で階下を憚るやうな笑ひ方をした。然し彼女の露はした白い齒は、氣の毒だといふ同情よりも、滑稽だといふ單純な感じを明らかに夫に物語つてゐた。

「ぢやお秀さんへ掛けるのは止すから」

斯う云つたお延は、とう／＼津田と一所に立ち上がつた。

「まだ外に掛ける所があるのかい」

「ええ、岡本へ掛けるのよ。午迄に掛けるつて約束があるんだから、可いでせう、掛けても」

前後して階子段を下りた二人は、其所で別々になつた。一人が電話口の前に立つた時、一人は診察室の椅子へ腰を卸ろした。

四十二

「リチネは御飲みでしたらうね」

醫者は糊の強い洗ひ立ての白い手術着をごわ／＼させながら津田に訊いた。

「飲みましたが思つた程效目がないやうでした」

昨日の津田にはリチネの效目を氣にする丈の暇さへなかつた。夫から夫へと忙しく心を使はせられた彼が此下劑から受けた影響は、殆ど精神的に零であつたのみならず、生理的にも案外微弱であつた。

「ぢやもう一度浣腸しませう」

浣腸の結果も充分でなかつた。

津田はそれなり手術臺に上つて仰向けに寐た。冷たい防水布がぢかに皮膚に觸れた時、彼は思はず冷りとした。堅い括り枕に着けた彼の頭とは反對の方角からばかり光線が差し込むので、彼の眼は明りに向つて寐る人のやうに、少しも落ち付けなかつた。彼は何度も瞬きをして、何度も天井を見直した。すると看

護婦が手術用の器械を入れたニツケル製の四角な淺い盆みたやうなものを持つて彼の横を通つたので、白い金屬性の光がちら〳〵と動いた。仰向けに寐てゐる彼には、それが自分の眼を掠めて通り過ぎるとしか思はれなかつた。見てならない氣味の悪いものを、ことさらに偸み見たのだといふ心持が猶のこと募つた。其時表の方で鳴る電話のベルが突然彼の耳に響いた。彼は今迄忘れてゐたお延の事を急に思ひ出した。彼女の岡本へ掛けた用事がやつと濟んだ時に、彼の療治は漸く始まつたのである。

「コカイン丈で遣ります。なに大して痛い事はないでせう。もし注射が駄目だつたら、奥の方へ薬を吹き込みながら進んで行く積りです。それで多分出來さうですから」

局部を消毒しながら斯んな事を云ふ醫者の言葉を、津田は恐ろしいやうな又何でもないやうな一種の心持で聽いた。

局部魔睡は都合よく行つた。まじ〳〵と天井を眺めてゐる彼は、殆ど自分の腰から下に、何んな大事件が起つてゐるか知らなかつた。たゞ時々自分の肉體の一部に、遠い所で誰かが壓迫を加へてゐるやうな氣がする丈であつた。鈍い抵抗が其所に感ぜられた。

「どんなです。痛かないでせう」

醫者の質問には充分の自信があつた。津田は天井を見ながら答へた。

「痛かありません。然し重い感じ丈はあります」

其重い感じといふのを、何う云ひ現はして可いか、彼には適當な言葉がなかつた。無神經な地面が人間の手で掘り割られる時、ひよつとしたら斯んな感じを起しはしまいかといふ空想が、ひよつくり彼の頭の

中に浮かんだ。

「何うも妙な感じです。說明の出來ないやうな」

途中で腦貧血でも起されては困ると思つたらしい醫者の言葉つきが、何でもない彼を却て不安にした。

「さうですか。我慢出來ますか」

斯ういふ場合豫防のために葡萄酒などを飮まされるものか何うか彼は全く知らなかつたが、何しろ特別の手當を受ける事は厭であつた。

「大丈夫です」

「さうですか。もう直です」

斯ういふ會話を患者と取り換はせながら、間斷なく手を動かせてゐる醫者の態度には、熟練からのみ來る手際が閃めいてゐるやうに思はれた。けれども手術は彼の言葉通りさう早くは片附かなかつた。切れ物の皿に當たつて鳴る音が時々した。鋏で肉をじよき〳〵切るやうな響が、强く誇張されて鼓膜を威嚇した。津田は其度にガーゼで拭き取られなければならない赤い血潮の色を、想像の眼で腥さうに眺めた。ぢつと寢かされてゐる彼の神經はぢつとしてゐるのが苦になる程緊張して來た。むづ痒い蟲のやうなものが、彼の身體を不安にするために、氣味惡く血管の中を這ひ廻つた。

彼は大きな眼を開いて天井を見た。其天井の上には綺麗に着飾つたお延がゐた。其お延が今何を考へてゐるか、何をしてゐるか、彼には丸で分らなかつた。彼は下から大きな聲を出して、彼女を呼んで見たくなつた。すると足の方で醫者の聲がした。

「やつと濟みました」
無暗にガーゼを詰め込まれる、こそばゆい感じのした後で、醫者は又云つた。
「瘢痕が案外堅いんで、出血の恐れがありますから、當分凝としてゐて下さい」
最後の注意と共に、津田は漸く手術臺から下ろされた。

四十三

診察室を出るとき、後から隨いて來た看護婦が彼に訊いた。
「いかゞです。氣分の御惡いやうな事は御座いませんか」
「いゝえ。――蒼い顏でもしてるかね」
自分自身に多少懸念のあつた津田は斯う云つて訊き返さなければならなかつた。
創口に出來る丈多くのガーゼを詰め込まれた彼の感じは、他が想像する倍以上に重苦しいものであつた。
彼は仕方なしにのそ〳〵歩いた。それでも階子段を上がる時には、割かれた肉とガーゼとが擦れ合つてざらざらするやうな心持がした。
お延は階段の上に立つてゐた。津田の顏を見ると、すぐ上から聲を掛けた。
「濟んだの？何うして？」
津田ははつきりした返事も與へずに室の中に這入つた。其所には彼の豫期通り、白いシーツに裹まれた蒲團が、彼の安臥を待つべく長々と延べてあつた。羽織を脱ぎ捨てるが早いか、彼はすぐ其上へ横になつ

た。鼠色のネルを重ねた銘仙の縕袍を後から着せる積りで、両手で襟の所を持ち上げたお延は、拍子抜けのした苦笑と共に、またそれを袖畳みにして床の裾の方に置いた。

「御薬は頂かなくつて可いの」

彼女は傍にゐる看護婦の方を向いて訊いた。

「別に内用の御薬は召し上らないでも差支へないので御座います。御食事の方は只今拵へて此方から持つて参ります」

看護婦は立ち掛けた。黙つて寐てゐた津田は急に口を開いた。

「お延、御前何か食ふなら看護婦さんに頼んだら可いだらう」

「左右ね」

お延は躊躇した。

「あたし何うしようかしら」

「だつて、もう昼過だらう」

「えゝ。十二時二十分よ。貴方の手術は丁度二十八分掛かつたのね」

時計の蓋を明けたお延は、それを眺めながら精密な時間を云つた。津田が手術台の上で俎へ乗せられた魚のやうに、大人しく我慢してゐる間、お延は又彼の見詰めなければならなかつた天井の上で、時計と睨めつ競でもするやうに、手術の時間を計つてゐたのである。

津田は再び訊いた。

「今から宅へ歸つたつて仕方がないだらう」

「えゝ」

「ぢや此所で洋食でも取つて貰つて食つたら可いぢやないか」

「えゝ」

お延の返事は何時迄經つても捗々しくなかつた。看護婦はとう〳〵下へ降りて行つた。津田は疲れた人が光線の刺激を避けるやうな氣分で眼をねむつた。するとお延が頭の上で、「あなた、あなた」といふので、又眼を開かなければならなかつた。

「心持が惡いの？」

「いゝや」

念を押したお延はすぐ後を云つた。

「岡本でよろしくつて。いづれ其内御見舞に上がりますからつて」

「さうか」

津田は輕い返事をしたなり、又眼をつぶらうとした。するとお延が左右させなかつた。

「あの岡本でね、今日是非芝居へ一所に來いつて云ふんですが、行つちや不可なくつて」

氣の好く廻る津田の頭に、今朝からのお延の所作が一度に閃めいた。病院へ隨いて來るにしては派出過ぎる彼女の衣裳といひ、出る前に日曜だと斷つた彼女の注意といひ、此所へ來てから、そは〳〵して岡本へ電話をかけた彼女の態度といひ、悉く芝居の一字に向つて注ぎ込まれてゐるやうにも取れた。さういふ

眼で見ると、手術の時間を精密に計つた彼女の動悸さへ疑惑の種にならないでは濟まなかつた。津田は默つて橫を向いた。床の間の上に取り揃へて積み重ねてある、封筒だの書翰用紙だの鋏だの書物だのが彼の眼に附いた。それは先刻鞄へ入れて彼が此所へ持つて來たものであつた。

「看護婦に小さい机を借りて、其上へ載せようと思つたんですけれども、まだ持つて來て呉れないから、しばらくの間、あゝして置いたのよ。本でも御讀みになつて」

お延はすぐ立つて床の間から書物を卸ろした。

四十四

津田は書物に手を觸れなかつた。

「岡本へは斷つたんぢやないのか」

不審よりも不平な顏をした彼が、向きを變へて寐返りを打つた時に、堅固に出來てゐない二階の床が、彼の意を迎へるやうに、づしんと鳴つた。

「斷つたのよ」

「斷つたのに是非來いつていふのかね」

此時津田は始めてお延の顏を見た。けれども其所には彼の豫期した何物も現はれて來なかつた。彼女は却て微笑した。

「斷つたのに是非來いつていふのよ」

「然し……」
彼は一寸行き詰まつた。彼の胸には云ふべき事がまだ残つてゐるのに、彼の頭は自分の思はく通り迅速に働いて呉れなかつた。
「然し――断つたのに是非来いなんていふ筈がないぢやないか」
「それを云ふのよ。岡本も餘つ程の没分曉漢ね」
津田は默つてしまつた。何といつて彼女を追窮して可いか見當が附かなかつた。
「貴方まだ何かあたしを疑つていらつしやるの。あたし厭だわ、あなたからそんなに疑られちや」
彼女の眉がさも〳〵厭さうに動いた。
「疑りやしないが、何だか變だからさ」
「さう。ぢや其變な所を云つて頂戴な、いくらでも説明するから」
不幸にして津田には其變な所が明瞭に云へなかつた。
「やつぱり疑つていらつしやるのね」
津田ははつきり疑つてゐないと云はなければ、何だか夫として自分の品格に關るやうな氣がした。と云つて、女から甘く見られるのも、彼に取つて少なからざる苦痛であつた。二つの我が我を張り合つて、彼の心のうちで鬪ふ間、餘所目に見える彼は、比較的冷靜であつた。
「あゝ」
お延は微かな溜息を洩らしてそつと立ち上がつた。一旦閉て切つた障子をまた開けて、南向きの縁側へ

出た彼女は、手摺の上へ手を置いて、高く澄んだ秋の空をぼんやり眺めた。隣の洗濯屋の物干に隙間なく吊るされたワイ襯衣だのシーツだのが、先刻見た時と同じ樣に、強い日光を浴びながら、乾いた風に搖れてゐた。

「好い御天氣だ事」

お延が小さな聲で獨りごとのやうに斯う云つた時、それを耳にした津田は、突然籠の中にゐる小鳥の訴へを聞かされたやうな心持がした。弱い女を自分の傍に縛り附けて置くのが少し可哀相になつた。彼はお延に言葉を掛けようとして、接穗のないのに困つた。お延も欄干に身を倚せた儘すぐ座敷の中へ戻つて來なかつた。

其所へ看護婦が二人の食事を持つて下から上がつて來た。

「何うも御待ち遠さま」

津田の膳には二個の鷄卵と一合のソツプと麪麭が附いてゐる丈であつた。其麪麭も半斤の二分一と分量は何時のまにか定められてゐた。

津田は床の上に腹這ひになつた儘、むしや〳〵口を動かしながら、機會を見計らつて、お延に云つた。

「行くのか、行かないのかい」

お延はすぐ肉匙の手を休めた。

「あなた次第よ。あなたが行けと仰しやれば行くし、止せと仰しやれば止すわ。」

「大變柔順だな」

「何時でも柔順だわ。――岡本だつてあなたに伺つて見た上で、もし可いと仰しやつたら連れて行つて遣るから、御病氣が大した事でなかつたら、訊いて見ろつて云ふんですもの」

「だつて御前の方から岡本へ電話を掛けたんぢやないか」

「えゝそりや左右よ、約束ですもの。一遍斷つたけれども、模樣次第では行けるかも知れないだらうから、もう一遍其日の午迄に電話で都合を知らせろつて云つて來たんですもの」

「岡本からさういふ返事が來たのかい」

「えゝ」

然しお延は其手紙を津田に示してゐなかつた。

「要するに、御前は何うなんだ。行きたいのか、行きたくないのか」

津田の顏色を見定めたお延はすぐ答へた。

「そりや行きたいわ」

「とう〱白狀したな。ぢや御出でよ」

二人は斯ういふ會話と共に午飯を濟ました。

四十五

手術後の夫を、やつと安靜狀態に寢かして置いて、自分一人下へ降りた時、お延はもう約束の時間を大分後らせてゐた。彼女は自分の行先を車夫に教へるために、たゞ一口劇場の名を云つたなり、すぐ俥に乘

つた。門前に待たせて置いた其俥は、角の帳場にある四五臺のうちで一番新しいものであつた。小路を出た護謨輪は電車通ばかり走つた。何の意味なしに、たゞ賑やかな方角へ向けてのみ速力を出すといつた風の、景氣の好い車夫の駈け方が、お延に感染した。ふつくらした厚い席の上で、彼女の身體が浮つきながら早く搖くと共に、彼女の心にも柔らかで輕快な一種の動搖が起つた。それは自分の左右前後に紛として活躍する人生を、容赦なく横切つて目的地へ行く時の快感であつた。

車上の彼女は宅の事を考へる暇がなかつた。機嫌よく病院の二階へ寢かして來た津田の影像が今日一日位安心して彼を忘れても差支へないといふ保證を彼女に與へるので、夫の事も丸で苦にならなかつた。たゞ目前の未來が彼女の俥とともに動いた。芝居其物に大した嗜好を始めから有つてゐない彼女は、時間が後れたのを氣にするよりも、たゞ早く其所に行き着くのを氣にした。斯うして新しい俥で走つてゐる道中が現に刺激であると同樣の意味で、其所へ行き着くのは更に一層刺激であつた。

俥は茶屋の前で留まつた。挨拶をする下女にすぐ「岡本」と答へたお延の頭には、提灯だの暖簾だの、紅白の造り花などがちら〳〵した。彼女は俥が降りる時一度に眼に入つた是等の色と形の影を、まだ片附ける暇もないうちに、すぐ廊下傳ひに案内されて、それよりも何層倍か錯綜した、又何層倍か濃厚な模樣を、縱横に織り擴げてゐる、海のやうな場内へ、ひよつこり顏を出した。それは茶屋の男が廊下の戸を開けて「此方へ」と云つた時、その隙間から遠くに前の方を眺めたお延の感じであつた。好んで斯ういふ場所へ出入したがる彼女に取つて、別に珍らしくもない此感じは、彼女に取つて、永久に新しい感じであつた。だから又永久に珍らしい感じであるとも云へた。彼女は暗闇を通り抜けて、急に明海へ出た人の樣に

眼を覺ました。さうして此氛圍氣の片隅に身を置いた自分は、眼の前に動く生きた大きな模樣の一部分となつて、擧止動作共悉く是から其中に織り込まれて行くのだといふ自覺が、緊張した彼女の胸にはつきり浮かんだ。

席には岡本の姿が見えなかつた。細君に娘二人を入れても三人にしかならないので、お延の坐るべき餘地は充分あつた。それでも姉娘の繼子は、お延の座が生憎自分の陰になるのを氣遣ふ樣に、後を向いて筋違に身體を延ばしながらお延に訊いた。

「見えて？少し此處と換つて上げませうか」

「難有う。此處で澤山」

お延は首を振つて見せた。

お延のすぐ前に坐つてゐた十四になる妹娘の百合子は左利きなので、左の手に輕い小さな象牙製の雙眼鏡を持つた儘、其肱を、赤い布で裹んで手摺の上に載せながら、後を振り返つた。

「遲かつたのね。あたし宅の方へ入らつしやるのかと思つてたのよ」

年の若い彼女は、まだ津田の病氣に就いて挨拶かた〴〵お延に何か云ふ程の智慧を有たなかつた。

「御用があつたの？」

「えゝ」

お延はたゞ簡單な返事をしたぎり舞臺の方を見た。それは先刻から姉妹の母親が傍目も振らず熱心に見詰めてゐる方角であつた。彼女とお延は最初顏を見合はせた時に、一寸默禮を取り替はせた丈で、拍子木

の鳴る迄つひに一言も口を利かなかつた。

四十六

「能く來られたのね。ことによると今日は六づかしいんぢやないかつて、先刻繼と話してたの」

幕が引かれてから、始めて打ち寛いだ樣子を示した細君は、漸くお延に口を利き出した。

「そら御覧なさい、あたしの云つた通りぢやなくつて」

誇り顔に母の方を見て斯う云つた繼子はすぐお延に向つて其後を云ひ足した。

「あたし御母さまと賭をしたのよ。今日あなたが來るか來ないかつて。御母さまはことによると來ないだらうつて仰しやるから、あたし屹度入らつしやるに違ひないつて請け合つたの」

「さう。又御神籤を引いて」

繼子は長さ二寸五分幅六分位の小さな神籤箱の所有者であつた。黒塗の上へ篆書の金文字で神籤と書いた其箱の中には、象牙を平たく削つた精巧の番號札が數通り百本納められてゐた。彼女はよく「一寸見て上げませうか」と云ひながら、小楊枝入れを取り扱ふやうな手附で、短冊形の薄い象牙札を振り出しては、箱の大きさと釣り合ふ樣に出來た文句入りの折手本を繰りひろげて見た。さうして其所に書いてある蠅の頭程な細かい字を讀むために、是も附屬品として始めから添へてある小さな蟲眼鏡を、羽二重の裏をつけた更紗の袋から取り出して、勿體らしく其上へ翳したりした。お延が津田と淺草へ遊びに行つた時、玩具としては高過ぎる四圓近くの代價を拂つて、仲見世から買つて歸つた精巧な此贈物は、來年二十一になる

繼子に取つて、處女の空想に神祕の色を遊戲的に着けて吳れる無邪氣な裝飾品であつた。彼女は時として帙入の儘それを机の上から取つて帶の間に挾んで外出する事さへあつた。

「今日も持つて來たの？」

お延は調戲半分彼女に訊いて見たくなつた。彼女は苦笑しながら首を振つた。母が傍から彼女に代つて返事をする如くに云つた。

「今日の豫言は御神籤ぢやないのよ。御神籤よりもつと偉い豫言なの」

「さう」

お延は後が聞きたさうにして、母子を見比べた。

「繼はね……」と母が云ひかけたのを、娘はすぐ追つ被せるやうに留めた。

「止して頂戴よ、御母さま。そんな事此所で云つちや惡いわよ」

今迄默つて三人の會話を聽いてゐた妹娘の百合子が、くすく笑ひ出した。

「あたし云つて上げても可いわ」

「御止しなさいよ、百合子さん。そんな意地の惡い事するのは。可いわ、そんなら、もうピアノを浚つて上げないから」

母は隣にゐる人の注意を惹かないやうに、小さな聲を出して笑つた。お延も可笑しかつた。同時に猶譯が聞きたかつた。

「話して頂戴よ、御姉さまに怒られたつて構はないぢやないの。あたしが附いてゐるから大丈夫よ」

百合子はわざと腮を前へ突き出すやうにして姉を見た。心持ち小鼻をふくらませた其態度は、話す話さないの自由を我に握つた人の勝利を、ものものしく相手に示してゐた。

「可いわ、百合子さん。何うでも勝手になさい」

斯う云ひながら立つと、繼子は後の戸を開けてすぐ廊下へ出た。

「御姉さま怒つたのね」

「怒つたんぢやないよ。極りが悪いんだよ」

「だつて極りの悪い事なんかなかないの。あんな事云つたつて」

「だから話して頂戴よ」

年齒の六つ程下な百合子の子供らしい心理狀態を觀察したお延は、それを旨く利用しようと試みた。けれども不意に座を立つた姉の擧動が、もう既に其狀態を崩してゐたので、お延の慫慂は何の效目もなかつた。母はとうとう凡てに對する責任を一人で背負はなければならなかつた。

「なに何でもないんだよ。繼がね、由雄さんはあゝいふ優しい好い人で、何でも延子さんのいふ通りになるんだから、今日は屹度來るに違ひないつて云つた丈なんだよ」

「さう。由雄が繼子さんにはそんなに賴母しく見えるの。難有いわね。御禮を云はなくつちやならないわ」

「さうしたら百合子が、そんなら御姉様も由雄さん見たやうな人の所へ御嫁に行くと可いつて云つたんでね、それを御前の前で云はれるのが恥づかしいもんだから、あゝやつて出て行つたんだよ」

「まあ」

お延は弱い感投詞を寧ろ淋しさうに投げた。

四十七

手前勝手な男としての津田が不意にお延の胸に上つた。自分の朝夕盡くしてゐる親切は、隨分精一杯な積りでゐるのに、夫の要求する犠牲には際限がないのかしらんといふ、不斷からの疑念が、濃い色でぱつと頭の中へ出た。彼女はその疑念を晴らして呉れる唯一の責任者が今自分の前にゐるのだといふ自覺と共に、岡本の細君を見た。其細君は、遠くに離れてゐる兩親を有つた彼女から云へば、東京中で頼りにするたつた一人の叔母であつた。

「良人といふものは、たゞ妻の情愛を吸ひ込むためにのみ生存する海綿に過ぎないのだらうか」

是がお延のとうから叔母にぶつかつて、質して見たい問であつた。不幸にして彼女には持つて生れた一種の氣位があつた。見方次第では痩我慢とも虚榮心とも解釋の出來る此氣位が、叔母に對する彼女を、此一點で強く牽制した。ある意味からいふと、毎日土俵の上で顔を合はせて相撲を取つてゐるやうな夫婦關係といふものを、内側の二人から眺めた時に、妻は何時でも夫の相手であり、又會には夫の敵であるにした所で、一旦世間に向つたが最後、何處迄も夫の肩を持たなければ、體よく夫婦として結び附けられた二人の弱味を表へ曝すやうな氣がして、恥づかしくてゐられないといふのがお延の意地であつた。だから打明け話しをして、何か訴へたくて堪らない時でも、夫婦から見れば矢つ張り「世間」といふ他人の部類に

入れべき此叔母の前へ出ると、敏感のお延は外聞が惡くつて何も云ふ氣にならなかつた。

其上彼女は、自分の豫期通り、夫が親切に親切を返して呉れないのを、足りない自分の不行屆からでも出たやうに、傍から解釋されてはならないと日頃から懸念してゐた。凡ての噂のうちで、愚鈍といふ非難を、彼女は火のやうに恐れてゐた。

「世間には津田よりも何層倍か氣六づかしい男を、すぐ手の內に丸め込む若い女さへあるのに、二十三にもなつて、自分の思ふやうに良人を綾なして行けないのは、畢竟智惠がないからだ」

智惠と德とを殆ど同じやうに考へてゐたお延には、叔母から斯う云はれるのが、何よりの苦痛であつた。女として男に對する腕を有つてゐないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白する位の屈辱として、お延の自尊心を傷つけたのである。時と場合が、斯ういふ立ち入つた談話を許さない劇場でないにした所で、お延は默つてゐるより外に仕方がなかつた。意味ありげに叔母の顏を見た彼女は、すぐ眼を外らせた。

舞臺一面に垂れてゐる幕がふは〱動いて、繼ぎ目の少し切れた間から誰かが見物の方を覗いた。氣の所爲かそれがお延の方を見てゐるやうなので、彼女は今向け換へたばかりの眼を又餘所に移した。下は席を出る人、座へ戻る人、途中を歩く人で、一度にざわつき始めてゐた。坐つたぎりの大多數も、前後左右に思ひ〱の姿勢を取つたり崩したりして、片時も休まなかつた。無數の黑い頭が渦のやうに見えた。彼等の或者の派出な扮裝が、色彩の運動から來る落ち附かない快感を、亂雜にちら〱させた。

土間から眼を放したお延は、つひに谷を隔てた向う側を吟味し始めた。すると丁度其時後を振り向いた

百合子が不意に云つた。
「彼所に吉川さんの奥さんが來てゐてよ。見えたでせう」
お延は少し驚かされた眼を、教はつた通りの見當へ附けて、其所に容易く吉川夫人らしい人の姿を發見した。
「百合子さん、眼が早いのね、何時見附けたの」
「見附けやしないのよ。先刻から知つてるのよ」
「叔母さんや繼子さんも知つてるの」
「えゝ皆知つてるのよ」
知らないのは自分丈だつたのに漸く氣の附いたお延が、猶其方を百合子の陰から見守つてゐると、故意だか偶然だか、いきなり吉川夫人の手にあつた雙眼鏡が、お延の席に向けられた。
「あたし厭だわ。あんなにして見られちや」
お延は隱れるやうに身を縮めた。それでも向う側の雙眼鏡は、中々お延の見當から離れなかつた。
「そんなら可いわ。逃げ出しちまふ丈だから」
お延はすぐ繼子の後を追つ懸けて廊下へ出た。

四十八

其所から見渡した外部の光景も場所柄丈に賑はつてゐた。裏へ貫を打つて取り除しの出來る樣に拵へた

透しの板敷を、絶間なく知らない人が往つたり來たりした。廊下の端に立つて、半ば柱に身を靠せたお延が、繼子の姿を見出だす迄には多少の時間が掛かつた。それを向う側に竝んでゐる賣店の前に認めた時、彼女はすぐ下へ降りた。さうして輕く足早に板敷を踏んで、目指す人のゐる方へ渡つた。

「何を買つてるの」

後から覗き込むやうにして訊いたお延の顏と、驚いて振り返つた繼子の顏とが、殆んど擦れ／＼になつて、微笑み合つた。

「今困つてる所なのよ。一さんが何か御土産を買つて來て呉れつて云ふから、見てゐるんだけれども、生憎何もないのよ、あの人の喜びさうなものは」

癇違ひをして、男の子の玩具を買はうとした繼子は、夫から夫へと色々なものを竝べられて、買ふには買はれず、止すには止されず、弱つてゐる所であつた。役者に緣故のある紋などを着けた花簪だの、紙入だの、手拭だのの前に立つて、もぢ／＼してゐた彼女は、何うしたら可からうといふ訴への眼をお延に向けた。お延はすぐ口を利いて遣つた。

「駄目よ、彼の子は、拳銃とか木劍とか、人殺しの出來さうなものでなくつちや氣に入らないんだから。そんな物こんな粹な所にあらう筈がないわ」

賣店の男は笑ひ出した。お延はそれを機に年下の女の手を取つた。

「兎に角叔母さんに訊いてからになさいよ。――どうも御氣の毒さま、ぢや何れ又後程」

斯う云つたなりさつさと歩き出した彼女は、氣の毒さうにしてゐる繼子を、廊下の端迄引張るやうにし

て連れて來た。其所で留まつた二人は、又一本の軒柱を盾に立ち話しをした。
「叔父さんは何うなすつたの。今日は何故入らつしやらないの」
「來るのよ、今に」
お延は意外に思つた。四人でさへ窮屈な所へ、あの大きな男が割り込んで來るのはたしかに一事件であつた。
「あの上叔父さんに來られちや、あたし見たいに薄つぺらなものは、壓されてへしやげちまふわ」
「百合子さんと入れ代るのよ」
「何うして」
「何うしてでも其方が都合が好いんでせう。百合子さんは居ても居なくつても構はないんだから」
「さう。おやもし、由雄が病氣でなくつて、あたしと一所に來たら何うするの」
「其時は其時で、また何うかする積りなんでせう。もう一間取るとか、それでなければ、吉川さんの方と一所になるとか」
「吉川さんとも前から約束があつたの」
「えゝ」
繼子は其後を云はなかつた。岡本と吉川の家族がそれ程接近してゐるとも考へてゐなかつたお延は、其所に何か意味があるのではないかと、一寸不審を打つて見たが、時間に餘裕のある人の間に起り勝ちな、單に娯樂のための約束として、それを眺める餘地も充分あるので、彼女は遂に何も訊かなかつた。二人の

話しはたゞ吉川夫人の雙眼鏡に觸れた丈であつた。お延はわざと手眞似迄して見せた。

「斯うやつて眞ともに向けるんだから、敵はないわね」

「隨分無遠慮でせう。だけど、あれ西洋風なんだつて、宅の御父さまがさう仰しやつてよ」

「あら西洋ぢや構はないの。ぢやあたしの方でも奧さんの顏をあゝ遣つてつけ〳〵見ても好い譯ね。あたし見て上げようかしら」

「見て御覽なさい、屹度嬉しがつてよ。延子さんはハイカラだつて」

二人が聲を出して笑ひ合つてゐる傍に、何處からか來た一人の若い男が一寸立ち留まつた。無地の羽織に友禪の紋を附けて、セルの行燈袴を穿いた其青年紳士は、彼等と顏を見合はせるや否や、「失禮」と挨拶でもして通り過ぎるやうに、鄭重な態度を無言のうちに示して、板敷へ下りて向うへ行つた。繼子は赧くなつた。

「もう這入りませうよ」

彼女はすぐお延を促して内へ入つた。

四十九

場中の樣子は先刻見た時と何の變りもなかつた。土間を歩く男女の姿が、丸で人の頭の上を渡つてゐるやうに煩はしく眺められた。出來る丈多くの注意を惹かうとする浮誇の活動さへ至る所に出現した。さうして次の色彩に席を讓るべくすぐ消滅した。眼中の小世界はたゞ動搖であつた、亂雜であつた、さうして

何時でも粉飾であつた。

比較的靜かな舞臺の裏側では、道具方の使ふ金槌の音が、一般の豫期を唆るべく折々場内へ響き渡つた。合間々々には幕の後で拍子木を打つ音が、攪き廻された注意を一點に纏めようとする警柝の如に聞こえた。不思議なのは觀客であつた。何もする事のない此長い幕間を、少しの不平も云はず、かつて退屈の色も見せず、さも太平らしく、空疎な腹に散漫な刺激を盛つて、他愛なく時間のために流されてゐた。彼等は穩和であつた。彼等は樂しさうに見えた。御互の吐く呼息に醉つ拂つた彼等は、少し醒めかけると、すぐ眼を轉じて誰かの顏を眺めた。さうしてすぐ其所に陶然たる或物を認めた。すぐ相手の氣分に同化する事が出來た。

席に戻つた二人は愉快らしく四邊を見廻した。それから申し合はせたやうに問題の吉川夫人の方を見た。夫人の雙眼鏡はもう彼等を覘つてゐなかつた。其代り雙眼鏡の主人も何處かへ行つて仕舞つた。

「あら入らつしやらないわ」

「本當ね」

「あたし探して上げませうか」

百合子はすぐ自分の手に持つた此方のオペラグラスを眼へ宛てがつた。

「居ない、居ない、何處かへ行つちまつた。あの奧さんなら二人前位肥つてゐるんだから、すぐ分る筈だけれども、矢つ張り居ないわよ」

さう云ひながら百合子は象牙の眼鏡を下へ置いた。綺麗な友染模樣の背中が隱れる程、帶を高く背負つ

た令孃としては、言葉が少し餘所行でないので、妹は可笑しさを堪へるやうな口元に、年上らしい威嚴を示して、姉を窘めた。

「百合子さん」

妹は少しも應へなかつた。例の通り一寸小鼻を膨らませて、それが何うしたんだといつた風の表情をしながら、わざと繼子を見た。

「あたしもう歸りたくなつたわ。早く御父さまが來てくれると好いんだけどな」

「歸りたければ御歸りよ。御父さまが入らつしやらなくつても構はないから」

「でも居るわ」

百合子は矢つ張り動かなかつた。子供でなくつては振舞ひにくい此腕白らしい態度の傍に、お延が年相應の分別を出して叔母に向つた。

「あたし一寸行つて吉川さんの奧さんに御挨拶をして來ませうか。澄ましてゐちや惡いわね」

實を云ふと彼女は此夫人をあまり好いてゐなかつた。向うでも此方を嫌つてゐるやうに思へた。しかも最初先方から自分を嫌ひ始めたために、此不愉快な現象が二人の間に起つたのだといふ朧氣な理由さへあつた。自分が嫌はれるべき何等のきつかけも與へないのに、向うで嫌ひ始めたのだといふ自信も伴なつてゐた。先刻雙眼鏡を向けられた時、既に挨拶に行かなければならないと氣の附いた彼女は、卽座にそれを斷行する勇氣を起し得なかつたので、内心の不安を質問の形に引き直して叔母に相談しかけながら、腹の中では其義務を容易く果たさせるために、叔母が自分と連れ立つて、夫人の所へ行つて呉れはしまいかと

暗に頷つてゐた。
叔母はすぐ返事をした。
「あゝ行つた方が可いよ。行つといでよ」
「でも今入らつしやらないから」
「なに屹度廊下にでも出ておいでなんだよ。行けば分るよ」
「でも、――ぢや行くから叔母さんも一所に入らつしやいな」
「叔母さんは――」
「入らつしやらない？」
「行つても可いがね。何うせ今に御飯を食べる時に、一所になる筈になつてるんだから、御免蒙つて其時にしようかと思つてるのよ」
「あらそんな御約束があるの。あたしちつとも知らなかつたわ。誰と誰が一所に御飯を召上がるの」
「みんなよ」
「あたしも？」
「あゝ」
意外の感に打たれたお延は、しばらくしてから答へた。
「そんならあたしも其時にするわ」

五十

岡本の來たのはそれから間もなくであつた。茶屋の男に開けて貰つた戸の隙間から中を覗いた彼は、御出で御出でをして百合子を廊下へ呼び出した。其所で二人がみんなの邪魔にならないやうな小聲の立談を、二言三言取り交はした後で、百合子は約束通り男に送られてすぐ場外へ出た。さうして入れ交りに入つて來た彼が其後へ窮屈さうに坐つた。こんな場所では一寸身體の位置を變へるのさへ億劫さうに見える肥滿た彼は、坐つてしまつてから不圖氣の附いたやうに、半分ばかり背後を向いた。

「お延、代つてやらうか。あんまり大きいのが前を塞いで邪魔だらう」

一夜作りの山が急に出來上がつたやうな心持のしたお延は、舞臺へ氣を取られてゐる周邊へ遠慮して動かなかつた。毛織ものを肌へ着けた例のない岡本は、毛だらけな腕を組んで、是も御附合だと云つた風に、みんなの見てゐる方角へ視線を向けた。そこでは色の生つ白い變な男が柳の下をうろ/\してゐた。荒い縞の着物をぞろりと着流して、博多の帶をわざと下の方へ締めた其色男は、素足に雪駄を穿いてゐるので、歩く度にちやら/\いふ不愉快な音を岡本の耳に響かせた。彼は柳の傍にある橋と、橋の向うに並んでゐる土藏の白壁を見廻して、それから其序に觀客の方へ眼を移した。然るに觀客の顔は悉く緊張してゐた。雪駄をちやら/\鳴らして舞臺の上を往つたり來たりする此若い男の運動に、非常な重大の意味でもあるやうに、滿場は靜まり返つて、咳一つするものがなかつた。急に表から入つて來た彼に取つてすぐ此特殊な空氣に感染する事が困難であつたのか、叉馬鹿らしかつたのか、少時すると彼は叉窮屈さうに半分後を

向いて、小聲でお延に話しかけた。
「何うだ面白いかね。――由雄さんは何うだ。――」
簡單な質問を次から次へと三つ四つ掛けて、一口づゝの返事をお延から受け取つた彼は、最後に意味ありげな眼をして更に訊いた。
「今日はどうだつたい。由雄さんが何とか云やしなかつたかね。大方愚圖々々云つたんだらう。己が病氣で寐てゐるのに貴樣一人芝居へ行くなんて不埒千萬だとか何とか。え？屹度さうだらう」
「不埒千萬だなんて、そんな事云やしないわ」
「でも何か云はれたらう。岡本は不都合な奴だ位云はれたに違ひあるまい。電話の樣子が何うも變だつたぜ」
小聲でさへ話しをするものが周圍に一人もない所で、自分丈長い受け答へをするのは極りが惡かつたので、お延はたゞ微笑してゐた。
「構はないよ。叔父さんが後で話しをして遣るから、そんな事は心配しないでも可いよ」
「あたし心配なんかしちやゐないわ」
「さうか、それでも少しや氣がゝりだらう。結婚早々旦那樣の御機嫌を損じちや」
「大丈夫よ。御機嫌なんか損じちやゐないつて云ふのに」
お延は煩ささうに眉を動かした。面白半分に調戯つて見た岡本は少し眞面目になつた。
「實は今日御前を呼んだのはね、たゞ芝居を見せるためばかりぢやない、少し呼ぶ必要があつたんだよ。

それで由雄さんが病氣の所を無理に來て貰つた樣な譯だが、其譯さへ由雄さんに後から話して置けば何でもない事さ。叔父さんがよく話して置くよ」

お延の眼は急に舞臺を離れた。

「理由つて一體何」

「今此處ぢや話し惡いがね。いづれ後で話すよ」

お延は默るより外に仕方なかつた。岡本は附け足すやうに云つた。

「今日は吉川さんと一所に食堂で晩食を食べる事になつてるんだよ。知つてるかね。そら吉川も彼所へ來てるだらう」

先刻迄眼に附かなかつた吉川の姿がすぐお延の眼に入つた。

「叔父さんと一所に來たんだよ。倶樂部から」

二人の會話は其處で途切れた。お延は又眞面目に舞臺の方を見出した。然し十分經つか經たないうちに、彼女の注意が又そつと後の戸を開ける茶屋の男によつて亂された。男は叔母に何か耳語いた。叔母はすぐ叔父の方へ顏を寄せた。

「あのね吉川さんから、食事の用意を致させて置きましたから、此次の幕間に何うぞ食堂へ御出で下さいますやうにつて」

叔父はすぐ返事を傳へさせた。

「承知しました」

男は又戸をそつと閉てて出て行つた。是から何が始まるのだらうかと思つたお延は、默つて會食の時間を待つた。

五十一

彼女が叔父叔母の後に隨いて、繼子と一所に、二階の片隅にある奥行の深い食堂に入るべく席を立つたのは、それから小一時間後であつた。彼女は自分と肩を並べて、すれ〳〵に廊下を歩いて行く從妹に小聲で訊いて見た。

「一體是から何が始まるの」

「知らないわ」

繼子は下を向いて答へた。

「たゞ御飯を食べるぎりなの」

「左右なんでせう」

訊かうとすれば訊かうとする程、繼子の返事が曖昧になつてくるやうに思はれたので、お延はそれぎり口を閉ぢた。繼子は前に行く父母に遠慮があるのかも知れなかつた。又自分は何も承知してゐないのかも分らなかつた。或は承知してゐても、お延に話したくないので、わざと短かい返事を小さな聲で與へないとも限らなかつた。

鋭い一瞥の注意を彼等の上に拂つて行きがちな、廊下で出逢ふ多數の人々は、みんなお延よりも繼子の

方に餘分の視線を向けた。忽然お延の頭に彼女と自分との比較が閃めいた。姿恰好は繼子に立ち優つてゐても、服裝や顏形で是非ひけを取らなければならなかつた彼女は、何時迄も子供らしく羞恥んでゐるやうな、又何處迄も氣苦勞のなささうに初々しく出來上がつた、處女としては水の滴る許りの、此從妹を輕い嫉妬の眼で視た。其所にはたとひ氣の毒だといふ侮蔑の意が全く打ち消されてゐないにした所で、一寸彼我の地位を易へて立つて見たい位な羨望の念が、著しく働いてゐた。お延は考へた。

「處女であつた頃、自分にもかつて斯んな御孃さんらしい時期があつたらうか」

幸か不幸か彼女は其時期を思ひ出す事が出來なかつた。平生繼子を標準に置かないで、何とも思はずに暮らしてゐた彼女は、今其從妹と肩を竝べながら、賑やかな電燈で明るく照らされた廊下の上に立つて、また嘗て感じた事のない一種の哀愁に打たれた。それは輕いものであつた。然し涙に變化し易い性質のものであつた。さうして今嫉妬の眼で眺めたばかりの相手の手を、固く握り締めたくなるやうな種類のものであつた。彼女は心の中で繼子に云つた。

「あなたは私より純潔です。私が羨ましがる程純潔です。けれどもあなたの純潔は、あなたの未來の夫に對して、何の役にも立たない武器に過ぎません。私のやうに手落なく仕向けてすら夫は、決して此方の思ふ通りに感謝して呉れるものではありません。あなたは今に夫の愛を繫ぐために、其貴い純潔な生地を失はなければならないのです。それ丈の犧牲を拂つて夫の爲に盡くしてすら、夫はことによるとあなたに辛く中たるかも知れません。私はあなたが羨ましいと同時に、あなたが御氣の毒です。近いうちに破壞しなければならない貴い寶物を、あなたはそれと心づかずに、無邪氣に有つてゐるからです。幸か不幸か

始めから私には今あなたの有つてゐるやうな天然其儘の器が完全に具はつて居りませんでしたから、それ程の損失もないのだと云へば、云はれないこともないでせうが、あなたは私と違ひます。あなたは父母の膝下を離れると共に、すぐ天眞の姿を傷つけられます。あなたは私よりも可哀相です」

二人の歩き方は遲かつた。先に行つた岡本夫婦が人に遮られて見えなくなつた時、叔母はわざ〳〵取つて返した。

「早く御出でなね。何を愚圖々々してゐるの。もう吉川さんの方ぢや先へ來て待つて入らつしやるんだよ」

叔母の眼は繼子の方にばかり注がれてゐた。言葉もとくに彼女に向つて掛けられた。けれども吉川といふ名前を聞いたお延の耳には、それが今迄の氣分を一度に吹き散らす風のやうに響いた。彼女は自分のあまり好いてゐない、又向うでも自分をあまり好いてゐないらしい、吉川夫人の事をすぐ思ひ出した。彼女は自分の夫が、平生から一方ならぬ恩顧を受けてゐる勢力家の細君として、今其人の前に、能ふ限りの愛嬌と禮儀とを示さなければならなかつた。平靜のうちに一種の緊張を包んだ彼女は、知らん顔をして、みんなの後に隨いて食堂に入つた。

五十二

叔母の云つた通り、吉川夫婦は自分達より一足早く約束の場所へ來たものと見えて、お延の目標にする其夫人は、入口の方を向いて叔父と立談をしてゐた。大きな叔父の後姿よりも、向う側に食み出してゐる

大々した夫人のかつぷくが、まつお延の眼に入つた。それと同時に、肉附きの豐かな頬に笑ひを漲らしてゐた夫人の方でも、すぐ眸をお延の上に移した。然し咄嗟の電火作用は起ると共に消えたので、二人は正式に挨拶を取り換はす迄、遂に互を認め合はなかつた。

夫人に投げかけた一瞥について、お延は更に其傍に立つてゐる若い紳士を見ない譯に行かなかつた。それが閒違ひもなく、先刻廊下で繼子と一所になつて彼是半分夫人の雙眼鏡をはしたなく批評し合つた時に、自分達を驚かした無言の男なので、彼女は思はずひやりとした。

簡單な挨拶が各自の閒に行はれる閒、控へ目にみんなの後に立つてゐた彼女は、やがて自分の番が廻つて來た時、たゞ三好さんとして此未知の人に紹介された。紹介者は吉川夫人であつたが、夫人の用ひる言葉が、叔父に對しても、叔母に對しても、又繼子に對しても、みんな自分に對するのと同じ事で、其閒に少しも變りがないので、お延は遂に其三好の何人であるかを知らずに仕舞つた。

席に着くとき、夫人は叔父の隣に坐つた。一方の隣には三好が坐らせられた。叔母の席は食卓の角であつた。繼子のは三好の前であつた。餘つた一脚の椅子へ腰を下ろすべく餘儀なくされたお延は、少し躊躇した。隣には吉川がゐた。さうして前には吉川夫人であつた。

「何うです掛けたら」

吉川は催促するやうにお延を横から見上げた。

「さあ何うぞ」と氣輕に云つた夫人は正面から彼女を見た。

「遠慮しずに御掛けなさいよ。もうみんな坐つてるんだから」

お延は仕方なしに夫人の前に着席した。先を越す積りでゐたのに、却て先を越されたといふ拙い感じが胸の何處かにあつた。自分の態度を禮儀から出た本當の遠慮と解釋して貰ふやうに、是から仕向けて行かなければならないといふ意志もすぐ働いた。其意志は自分と正反對な繼子の初心らしい樣子を、食卓越しに眺めた時、益強固にされた。

繼子は又何時もより大人し過ぎた。碌々口も利かないで、下ばかり向いてゐる彼女の態度の中には、殆ど苦痛に近い或物が見透かされた。氣の毒さうに彼女を一目見遣つたお延は、すぐ前にゐる夫人の方へ、彼女の特有な愛嬌のある眼を移した。社交に慣れ切つた夫人も默つてゐる人ではなかつた。調子の好い會話の斷片が、二三度二人の間を往つたり來たりした。然しそれ以上に發展する餘地のなかつた題目は、其所でぴたりと留まつてしまつた。二人の間に共通な津田を話しの種にしようと思つたお延が、それを自分から持ち出したものか何うかと遲疑してゐるうちに、夫人はもう自分を置き去りにして、遠くにゐる三好に向つた。

「三好さん、默つてゐないで、ちつと彼地の面白い話でもして繼子さんに聞かせて御上げなさい」

丁度叔母と話しを途切らしてゐた三好は夫人の方を向いて靜かに云つた。

「えゝ何でも致しませう」

「えゝ何でもなさい。默つてちや不可ません」

命令的な此言葉がみんなを笑はせた。

「又獨逸を逃げ出した話でもするがいゝ」

吉川はすぐ細君の命令を具體的にした。

「獨逸を逃げ出した話も、何度となく繰返すんでね、近頃はもう他よりも自分の方が陳腐になつてしまひました」

「あなたの樣な落附いた方でも、少しは周章てたでせうね」

「少し所なら好いですが、殆ど夢中でしたらう。自分ぢやよく分らないけれども」

「でも殺されるとは思はなかつたでせう」

「左樣」

三好が少し考へてゐると、吉川はすぐ隣から口を出した。

「まさか殺されるとも思ふまいね。ことに此人は」

「何故です。人間がづう／＼しいからですか」

「といふ譯でもないが、兎に角非常に命を惜しがる男だから」

繼子が下を向いた儘くす／＼笑つた。戰爭前後に獨逸を引き上げて來た人だといふ事丈がお延に解つた。

五十三

三好を中心にした洋行談が一仕切り彈んだ。相間々々に巧みなきつかけを入れて話しの後を釣り出して行く吉川夫人の御手際を、默つて觀察してゐたお延は、夫人が何んな努力で、彼等四人の前に、此未知の青年紳士を押し出さうと試みつゝあるかを見拔いた。穩和といふよりも寧ろ無口な彼は、自分でさうと氣

が附かないうちに、彼に好意を有つた夫人の口車に乘せられて、最も有利な方面から自分をみんなの前に說明してゐた。

彼女は此談話の進行中、殆ど一言も口を挾む餘地を與へられなかつた。自然の勢ひ沈默の謹聽者たるべき地位に立つた彼女には批判の力ばかり多く働いた。率直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫も技巧の臭味なしに、着々成功して行く段取りを、一歩ごとに眺めた彼女は、自分の天性と夫人のそれとの間に非常の距離がある事を認めない譯に行かなかつた。然しそれは上下の距離でなくつて、平面の距離だといふ氣がした。では恐るゝに足りないかといふと決して左右でなかつた。一部分は得意な現在の地位からも出て來るらしい命令的の態度の外に、夫人の技巧には時として恐るべき破壞力が伴なつて來はしまいかといふ危險の感じが、お延の胸の何處かでした。

「此方の氣の所爲かしらん」

お延が斯う考へてゐると、問題の夫人が突然彼女の方に注意を移した。

「延子さんが呆れていらつしやる。あたしが餘り饒舌るもんだから」

お延は不意を打たれて退避いだ。津田の前でかつて挨拶に困つた事のない彼女の智惠が、何う働いて可いか分らなくなつた。たゞ空疎な薄笑ひが瞬間の虛を充たした。然しそれは御役目にもならない僞りの愛嬌に過ぎなかつた。

「いゝえ、大變面白く伺つて居ります」と後から附け足した時は、お延自身でももう時機の後れてゐる事に氣が附いてゐた。又遣り損なつたといふ苦い感じが彼女の口の先迄湧いて出た。今日こそ夫人の機嫌

を取り返して遣らうといふ氣込みが一度に萎えた。夫人は殘酷に見える程早く調子を替へて、すぐ岡本に向つた。

「岡本さんあなたが外國から歸つて入らしつてから、もう餘つ程になりますね」

「えゝ、何しろ一昔前の事ですからな」

「一昔前つて何年頃なの、一體」

「左樣西曆……」

自然だか偶然だか叔父は勿體ぶつた考へ方をした。

「普佛戰爭時分？」

「馬鹿にしちや不可ません。是でもあなたの旦那樣を案內して倫敦を連れて歩いて上げた覺えがあるんだから」

「ぢや巴里で籠城した組ぢやないのね」

「冗談ぢやない」

三好の洋行談を一仕切りで切り上げた夫人は、すぐ話頭を、それと關係の深い他の方面へ持つて行つた。自然吉川は岡本の相手にならなければ濟まなくなつた。

「何しろ自働車の出來たてで、あれが通ると、みんな振り返つて見た時分だつたからね」

「うん、あの鈍臭いバスがまだ幅を利かしてゐた時代だよ」

其鈍臭いバスが、さういふ交通機關を自分で利用した記憶のない外の者に取つて、何の思ひ出にならな

かつたにも關らず、當時を回顧する二人の胸には、矢つ張り淡い一種の感慨を惹き起すらしく見えた。繼子と三好を見較べた岡本は、苦笑しながら吉川に云つた。

「御互に年を取つたもんだね。不斷はちつとも氣が附かずに、まだ若い積りかなんかで、頻りに乾燥ぎ廻つてゐるが、斯うして娘の隣に坐つて見ると、少し考へるね」

「ぢや始終その子の傍に坐つていらつしつたら可いでせう」

叔母はすぐ叔父に向つた。叔父もすぐ答へた。

「全くだよ。外國から歸つて來た時にや、この子がまだ」と云ひかけて一寸考へた彼は、「幾つだつけかな」と訊いた。叔母がそんな呑氣な人に返事をする義務はないといはぬばかりの顏をして默つてゐるので、吉川が傍から口を出した。

「今度は御爺さま御爺さまつて云はれる時機が、もう眼前に逼つて來たんだ。油斷は出來ません」

繼子が顏を赧くして下を向いた。夫人はすぐ夫の方を見た。

「でも岡本さんにや自分の年齒を計る生きた時計が附いてるから、まだ可いんです。あなたと來たら何も反省器械を持つていらつしやらないんだから、全く手に餘る丈ですよ」

「其代り御前だつて何時迄も御若くつていらつしやるぢやないか」

みんなが聲を出して笑つた。

五十四

彼等ほど多人數でない、從つて比較的靜かな外の客が、丸で舞臺を餘所にして、氣樂さうな話しばかりしてゐるお延の一群を折々見た。時間を儉約するため、わざと輕い食事を取つたものたちが、珈琲も飮まずに、そろ／＼立ち掛ける時が來ても、お延の前には夫から夫へと新しい皿が運ばれた。彼等は中途で拭巾を放り出す譯に行かなかつた。又そんな世話しない眞似をする氣もないらしかつた。芝居を觀に來たといふよりも、芝居場へ遊びに來たといふ態度で、何處迄もゆつくり構へてゐた。

「もう始まつたのかい」

急に靜かになつた食堂を見廻した叔父は、斯う云つて白服のボイに訊いた。ボイは彼の前に溫かい皿を置きながら、丁寧に答へた。

「たゞ今開きました」

「いゝや開いたつて。此際眼よりも口の方が大事だ」

叔父はすぐ皮附きの鷄の股を攻擊し始めた。向うにゐる吉川も、舞臺で何が起つてゐようと丸で頓着しないらしかつた。彼はすぐ叔父の後へついて、劇とは全く無關係な食物の挨拶をした。

「君は相變らず旨さうに食ふね。――奧さん此岡本君が今よりもつと食つて、もつと肥つてた時分、西洋人の肩車へ乘つた話を御聞きですか」

叔母は知らなかつた。吉川はまた同じ問を繼子に掛けた。繼子も知らなかつた。

「さうでせうね。餘り外聞の好い話ぢやないから、屹度隱してゐるんですよ」

「何が？」

叔父は漸く皿から眼を上げて、不思議さうに相手を見た。すると吉川の夫人が傍から口を出した。
「大方重過ぎて其外國人を潰したんでせう」
「そんならまだ自慢になるが、みんなに變な顏をしてじろ〱見られながら、倫敦の群衆の中で、大男の肩の上へ噛り附いてゐたんだ。行列を見るためにね」
叔父はまだ笑ひもしなかつた。
「何を捏造する事やら。一體そりや何時の話だね」
「エドワード七世の戴冠式の時さ。行列を見ようとしてマンションハウスの前に立つてた所が、日本と違つて向うのものがあんまり君より脊丈が高過ぎるもんだから、苦し紛れに一所に行つた下宿の亭主に賴んで、肩車に乘せて貰つたつて云ふぢやないか」
「馬鹿を云つちや不可ない。そりや人違ひだ。肩車へ乘つた奴はちやんと知つてるが、僕ぢやない、あの猿だ」
叔父の辯解は寧ろ眞面目であつた。其眞面目な口から猿といふ言葉が突然出た時、みんなは一度に笑つた。
「成程あの猿なら好く似合ふね。いくら英吉利人が大きいたつて、どうも君ぢや辻褄が合はな過ぎると思つたよ。――あの猿と來たら又隨分矮小だからな」
知つてるながらわざと間違へた振をして見せたのか、或は最初から事實を知らなかつたのか、とにかく吉川はやつと腑に落ちたらしい言葉遣ひをして、猶其當人の猿といふ綽名を、一座を賑はせる滑稽の餘音

の如く繰返した。夫人は半ば好奇的で、半ば戒飭的な態度を取つた。

「猿だなんて、一體誰の事を仰しやるの」

「なに御前の知らない人だ」

「奥さん心配なさらないでも好ござんす。たとひ猿が此席にゐようとも、我々は表裏なく、彼を猿猿と呼び得る人間なんだから。其代り向うぢや私の事を豚豚つていつてるから、同じ事です」

斯んな他愛もない會話が取り換はされてゐる間、お延は遂に社交上の一員として相當の分け前を取る事が出來なかつた。自分を吉川夫人に賣り附ける機會は何時迄經つても來なかつた。夫人は彼女を眼中に置いてゐなかつた。或は寧ろ彼女を回避してゐた。さうして特に自分の一軒置いて隣に坐つてゐる繼子にばかり話しかけた。たとひ一分間でも此從妹を、注意の中心として、みんなの前に引き出さうとする努力の迹さへあり〳〵と見えた。それを利用する事の出來ない繼子が、感謝とは反對に、却て迷惑さうな表情を、遠慮なく外部に示すたびに、すぐ彼女と自分とを比較したくなるお延の心には羨望の漣漪が立つた。

「自分がもしあの從妹の地位に立つたなら」

會食中の彼女は屢斯う思つた。さうして其後から暗に人馴れない繼子を憐んだ。最後には何といふ氣の毒な女だらうといふ輕侮の念が例の通り起つた。

五十五

彼等の席を立つたのは、男達の燻らし始めた食後の葉巻に、白い灰が一寸近くも溜まつた頃であつた。

る前の一瞬間を捉へた夫人は突然お延に話しかけた。

「延子さん。津田さんは何うなすつて」

いきなり斯う云つて置いて、お延の返事も待たずに、夫人はすぐ其後を自分で云ひ足した。

「先刻から何はう何はうと思つてた癖に、つい自分の勝手な話しばかりして――」

此云ひ譯をお延は腹の中で嘘らしいと考へた。それは相手の使ふ當座の言葉つきや態度から出た疑ひでなくつて、彼女に云はせると、もう少し深い根據のある推定であつた。彼女は食堂へ這入つて夫人に挨拶をした時、自分の使つた言葉をよく覺えてゐた。それは自分のためといふよりも、寧ろ自分の夫のために使つた言葉であつた。彼女は此夫人を見るや否や、恭しく頭を下げて、「毎度津田が御厄介になりまして」と云つた。けれども夫人は其時其津田については一言も口を利かなかつた。自分が挨拶を交換した最後の同席者である以上、其所にはそれ丈の口を利く餘裕が充分あつたにも關らず、夫人はすぐ、餘所を向いてしまつた。さうして二三日前津田から受けた訪問などは、丸で忘れてゐるやうな風をした。

お延は夫人の此擧動を、自分が嫌はれてゐるからだとばかり解釋しなかつた。嫌はれてゐる上に、まだ何か理由があるに違ひないと思つた。でなければ、いくら夫人でも、とくに津田の名前を回避するやうな素振を、彼の妻たるものに示す筈がないと思つた。彼女は自分の夫が此夫人の氣に入つてゐるといふ事實をよく承知してゐた。然し單に夫を贔屓にして呉れるといふ事が、何で其人を妻の前に談話の題目として憚られるのだらう。お延は解らなかつた。彼女が會食中、當然他に好かれべき女性としての自己の天分

を、夫人の前に發揮するために、二人の間に存在する唯一の共通點とも見られる津田から出立しようと試みて、遂に出立し得なかつたのも、一つは是が胸に痞へてゐたからであつた。それを愈〻席を立たうとする間際になつて、向うから切り出された時のお延には、たゞ夫人の云ひ譯に對してのみ、嘘らしいといふ疑ひを抱く丈では濟まなかつた。今頃になつて夫の病氣の見舞をいつてくれる夫人の心の中には、已むを得ない社交上の辭令以外に、まだ何か存在してゐるのではなからうかと考へた。

「難有う御座います。御蔭さまで」

「もう手術をなすつたの」

「えゝ今日」

「今日？それであなた能く斯んな所へ來られましたね」

「大した病氣でも御座いませんものですから」

「でも寢ていらつしやるんでせう」

「寢ては居ります」

夫人はそれで構はないのかといふ樣子をした。少なくとも彼女の默つてゐる樣子がお延にはさう見えた。他に對して男らしく不遠慮に振舞つてゐる夫人が、自分に丈は、丸で別な人間として出てくるのではないかと思はれた。

「病院へ御入りになつて」

「病院と申す程の所では御座いませんが、丁度御醫者樣の二階が空いて居るので、五六日其所へ置いて

頂く事にして居ります」
夫人は醫者の名前と住所とを訊いた。見舞に行く積りだとも何とも云はなかつたけれども、實はそのために、わざ〳〵津田の話しを持ち出したのぢやなからうかといふ氣のしたお延は、始めて夫人の意味が多少自分に呑み込めたやうな心持もした。
夫人と違つて最初から津田の事をあまり念頭に置いてゐなかつたらしい吉川は、此時始めて口を出した。
「當人に聞くと、去年から病氣を持ち越してゐるんだつてね。今の若さにさう病氣ばかりしちや仕方がない。休むのは五六日に限つた事もないんだから、癒る迄よく養生するやうに、さう云つて下さい」
お延は禮を云つた。
食堂を出た七人は、廊下で又二組に分かれた。

五十六

殘りの時間を叔母の家族とともに送つたお延には、それから何の波瀾も來なかつた。たゞ縕袍を着て横臥した寢卷姿の津田の面影が、熱心に舞臺を見詰めてゐる彼女の頭の中に、不意に出て來る事があつた。其面影は今迄讀み掛けてゐた本を伏せて、此所に坐つてゐる彼女を、遠くから眺めてゐるらしかつた。然しそれは、彼女が喜んで彼を見返さうとする刹那に、「いや疳違ひをしちや不可ない、何をしてゐるか一寸覗いて見た丈だ。御前なんかに用のある己ぢやない」といふ意味を、眼附で知らせるものであつた。騙されたお延は何だ馬鹿らしいといふ氣になつた。すると同時に津田の姿も幽靈のやうにすぐ消えた。二度目

にはお延の方から「もう貴方のやうな方の事は考へて上げません」と云ひ渡した。三度目に津田の姿が眼に浮かんだ時、彼女は舌打をしたくなつた。

食堂へ入る前の彼女は未だかつて夫の事を念頭に置いてゐなかつたので、お延に云はせると、斯ういふ不可抗な心の作用は、すべて食後に起つた新しい經驗に外ならなかつた。彼女は默つて前後二樣の自分を比較して見た。さうして此急劇な變化の責任者として、腹のうちで、吉川夫人の名前を繰り返さない譯に行かなかつた。今夜もし夫人と同じ食卓で晩餐を共にしなかつたならば、こんな變な現象は決して自分に起らなかつたらうといふ氣が、彼女の頭の何處かでした。然し夫人の如何なる言動が、此苦い酒を釀す醱酵分子となつて、何んな具合に彼女の頭のなかに入り込んだのかと訊かれると、彼女はとても判然した返事を與へる事が出來なかつた。彼女はたゞ不明瞭な材料をもつてゐた。さうして比較的明瞭な斷案に到着してゐた。材料に不足な懸念を抱かない彼女が、其斷案を不備として疑ふ筈はなかつた。彼女は總ての原因が吉川夫人にあるものと固く信じてゐた。

芝居が了ねて一旦茶屋へ引き上げる時、お延は其所で又夫人に會ふ事を恐れた。然し會つてもう少し突つ込んで見たいやうな氣もした。歸りを急ぐ混雜した間際に、そんな機會の來る筈もないと、始めから諦めてゐた癖に、さうした好奇の心が、會ひたくないといふ回避の念の蔭から、ちよい〳〵首を出した。

茶屋は幸ひにして異つてゐた。吉川夫婦の姿は何處にも見えなかつた。襟に毛皮の附いた重さうな二重廻しを引掛けながら岡本がコートに袖を通してゐるお延を顧た。

「今日は宅へ來て泊つて行かないかね」

「え、難有う」
泊るとも泊らないとも片附かない挨拶をしたお延は、微笑しながら叔母を見た。叔母は又「貴方の氣樂さ加減にも呆れますね」といふ表情で叔父を見た。其所に氣が附かないのか、或は氣が附いても無頓着なのか、彼は同じ事を、前よりはもつと眞面目な調子で繰り返した。
「泊つて行くなら、泊つといでよ。遠慮は要らないから」
「泊つていけつたつて、貴方、宅にや下女がたつた一人で、此子の歸るのを待つてるんですもの。そんなこと無理ですわ」
「はあ、左右かね、成程。下女一人ぢや不用心だね」
そんなら止すが好からうと云つた風の樣子をした叔父は、無論最初から何方でも構はないものを一寸問題にして見た丈であつた。
「あたし是でも津田へ行つてからまだ一晩も御厄介になつた事はなくつてよ」
「はあ、左右だつたかね。それは感心に品行方正の至りだね」
「厭だ事。――由雄だつて外へ泊つた事なんか、まだ有りやしないわ」
「いや結構ですよ。御夫婦御揃ひで御堅くつていらつしやるのは――」
「何よりもつて恐悦至極」
先刻聞いた役者の言葉を、小さな聲で後へ附け足した繼子は、さう云つた後で、自分ながら其大膽さに呆れたやうに、薄赤くなつた。叔父はわざと大きな聲を出した。

「何ですつて」

繼子は極りが惡いので、聞こえない振をして、どん／＼門口の方へ歩いて行つた。みんなも其後に隨いて表へ出た。

車へ乘る時、叔父はお延に云つた。

「御前宅へ泊れなければ泊らないで可いから、其代り何時か御出でよ、二三日中にね。少し訊きたい事があるんだから」

「あたしも叔父さんに伺はなくつちやならない事があるから、今日の御禮旁是非上がるわ。もしか都合が出來たら明日にでも伺つてよ、好くつて」

「オー、ライト」

四人の車は此英語を合圖に走け出した。

五十七

津田の宅と略同じ方角に當たる岡本の住居は、少し道程が遠いので、三人の後に隨いたお延の護謨輪は、小路へ曲がる例の角迄一所に來る事が出來た。其所で別かれる時、彼女は幌の中から、前に行く人達に聲を掛けた。けれどもそれが向うへ通じたか通じないか分らないうちに、彼女の俥はもう電車通を横に切れてゐた。しんとした小路の中で、急に一種の淋しさが彼女の胸を打つた。今迄團體的に旋回してゐたものが、我知らず調子を踏み外して、一人圈外に振り落とされた時のやうに、淡いながら頼りを失つた心持で、

彼女は自分の宅の玄關を上がつた。

下女は格子の音を聞いても出て來なかつた。茶の間には電燈が明るく輝いてゐる丈で、鐵瓶さへ何時ものやうに快い音を立てなかつた。今朝見たと何の變りもない室の中を、彼女は今朝と違つた眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い氣分を抱擁し始めた。その瞬間が過ぎて、たゞの淋しさが不安の念に變りかけた時、歡樂に疲れた身體を、長火鉢の前に投げ掛けようとした彼女は、突然勝手口の方を向いて「時、時」と下女の名前を呼んだ。同時に勝手の横に附いてゐる下女部屋の戸を開けた。

二疊敷の眞中に縫物をひろげて、其上に他愛なく突つ伏してゐたお時は、急に顏を上げた。さうしてお延を見るや否や、いきなり「はい」といふ返事を判然して立ち上がつた。それと共に、針仕事のため、わざと低目にした電燈の笠へ、崩れかゝつた束髪の頭を打つけたので、あらぬ方へ波をうつた電球が、猶の事彼女を狼狽させた。

お延は笑ひもしなかつた。叱る氣にもならなかつた。斯んな場合に自分ならといふ彼我の比較さへ胸へ浮かばなかつた。今の彼女には寐ほけたお時でさへ、其所にゐて呉れるのが賴母しかつた。

「早く玄關を締めて御寐。潛りの鐉はあたしが掛けて來たから」

下女を先へ寐かしたお延は、着物も着換へずに又火鉢の前へ坐つた。彼女は器械的に灰をほじくつて消えかゝつた火種に新しい炭を繼ぎ足した。さうして家庭としては缺くべからざる要件のごとくに、湯を沸かした。然し夜更に鳴る鐵瓶の音に、一人耳を澄ましてゐる彼女の胸に、何處からともなく逼つてくる孤獨の感が、先刻歸つた時よりも猶劇しく募つて來た。それが平生遲い夫の戻りを待ちあぐんで起す淋しみ

に比べると、遙かに程度が進んでるので、お延は思はず病院に寐てゐる夫の姿を懐かしさうに心の眼で眺めた。

「矢つ張りあなたが入らつしやらないからだ」

彼女は自分の頭の中に描き出した夫の姿に向つて斯う云つた。さうして明日は何を置いても先づ病院へ見舞に行かなければならないと考へた。然し次の瞬間には、お延の胸がもうぴたりと夫の胸に食附いて居なかつた。二人の間に何だか挾まつてしまつた。此方で寄り添はうとすればする程、中間にある其邪魔ものが彼女の胸を突つついた。しかも夫は平氣で澄ましてゐた。半ば意地になつた彼女の方でも、そんなら宜しう御座いますといつて、夫に背中を向けたくなつた。

斯ういふ立場迄來ると、彼女の空想は會釋なく吉川夫人の上に飛び移らなければならなかつた。芝居場で一度考へた通り、もし今夜あの夫人に會はなかつたなら、最愛の夫に對して、是程不愉快な感じを抱かずに濟んだらうにといふ氣ばかり強くした。

仕舞に彼女は何處かにゐる誰かに自分の心を訴へたくなつた。昨夜書きかけた里へ遣る手紙の續きを書かうと思つて、筆を執りかけた彼女は、何時迄經つても、夫婦仲よく暮らしてゐるから安心して呉れといふ意味より外に、自分の思ひを卷紙の上に運ぶ事が出來なかつた。それは彼女が常に兩親に對して是非云ひたい言葉であつた。然し今夜は、何うしてもそれ丈では物足らない言葉であつた。自分の頭を纏める事に疲れ果てた彼女は、とう／＼筆を投げ出した。着物も其所へ脱ぎ捨てた儘、彼女は遂に床へ入つた。長い間眼に映つた劇場の光景が、斷片的に幾通りもの強い色になつて、興奮した彼女の頭をちら／＼刺激するので、彼女は焦らされる人のやうに、何時迄も眠りに落ちる事が出來なかつた。

五十八

彼女は枕の上で一時を聞いた。二時も聞いた。それから何時だか分らない朝の光で眼を覺ました。雨戸の隙間から射し込んで來る其光は、明らかに例より寐過ごした事を彼女に物語つてゐた。

彼女は其光で枕元に取り散らされた昨夕の衣裳を見た。上着と下着と長襦袢と重なり合つて、すぽりと脫ぎ捨てられたまゝ、疊の上に崩れてゐるので、其所には上下裏表の、しだらなく一度に入り亂れた色の塊りがある丈であつた。その色の塊りの下から、細長く、折れ目の附いた端を出した金絲入りの檜扇模樣の帶は、彼女の手の屆く距離迄延びてゐた。

彼女は此亂雜な有樣を、聊か呆れた眼で眺めた。是がかねてから、几帳面を女德の一つと心掛けて來た自分の所作かと思ふと、少し淺間しいやうな心持にもなつた。津田に嫁いで以後、かつて斯んな不體裁を夫に見せた覺えのない彼女は、其夫が今自分と同じ室の中に寐てゐないのを見て、ほつと一息した。

だらしのないのは着物の事ばかりではなかつた。もし夫が入院しないで、例の通り宅にゐたならば、たとひ何んなに夜更しをしようとも、斯う遲く迄、氣を許して寐てゐる筈がないと思つた彼女は、眼が覺めると共に跳ね起きなかつた自分を、何うしても怠けものとして輕蔑しない譯に行かなかつた。

それでも彼女は容易に起き上がらなかつた。昨夕の不首尾を償ふためか、自分の知らない間に起きて吳れたお時の足音が、先刻から臺所に聞こえるのを好い事にして、彼女は何時迄も肌觸りの暖かい夜具の中に包まれてゐた。

其内眼を開けた瞬間に感じた、濟まないといふ彼女の心持が段々弛んで來た。彼女はいくら女だつて、年に一度や二度此位の事をしても差支へなからうと考へ直すやうになつた。彼女の關節が樂々しだした。彼女は何時にない暢びりした氣分で、結婚後始めて經驗する事の出來た此自由を難有く味はつた。是も畢竟夫が留守の御蔭だと氣の附いた時、彼女は當分一人になつた今の自分を、寧ろ祝福したい位に思つた。さうして毎日夫と寐起きを共にしてゐながら、つい心にも留めず、今日迄見過ごしてきた窮屈といふものが、彼女にとつて存外重い負擔であつたのに驚かされた。然し偶發的に起つた此瞬間の覺醒は無論長く續かなかつた。一旦解放された自由の眼で、やきもきした昨夕の自分を嘲るやうに眺めた彼女が床を離れた時は、もう既に違つた氣分に支配されてゐた。

彼女は主婦として何時も遣る通りの義務を遲いながら綺麗に片附けた。津田がゐないので、大分省ける手數を利用して、下女も煩はさずに、自分で自分の着物を疊んだ。それから輕い身仕舞をして、すぐ表へ出た彼女は、寄り道もせずに、通から半丁程行つた所にある、新しい自働電話の箱の中に入つた。

彼女は其所で別々の電話を三人へ掛けた。其三人のうちで一番先に擇ばれたものは、やはり津田であつた。然し自分で電話口へ立つ事の出來ない横臥狀態にある彼の消息は、間接に取次の口から聞くより外に仕方がなかつた。たゞ別に異狀のある筈はないと思つてゐた彼女の豫期は外れなかつた。彼女は「順當で御座います、御變りは御座いません」といふ保證の言葉を、看護婦らしい人の聲から聞いた後で、何の位津田が自分を待ち受けてゐるかを知るために、今日は見舞に行かなくつても可いかと尋ねて貰つた。すると津田が何故かと云つて看護婦に訊き返させた。夫の聲も顏も分らないお延は、判斷に苦しんで電話口で

首を傾けた。こんな場合に彼は是非來てくれと頼むやうな男ではなかつた。然し行かないと、機嫌を惡くする男でもなかつた。それでは行けば喜ぶかといふと左右でもなかつた。彼はお延に親切の仕損をさせて置いて、それが女の義務ぢやないかといつた風に、取り澄ました顏をしないとも限らなかつた。不圖斯んな事を考へた彼女は、昨夕吉川夫人から受け取つたらしく自分では思つてゐる、夫に對する一種の感情を、つい電話口で洩らしてしまつた。

「今日は岡本へ行かなければならないから、其方へは參りませんつて云つて下さい」

それで病院の方を切つた彼女は、すぐ岡本へ掛け易へて、今に行つても可いかと聞き合はせた。さうして最後に呼び出した津田の妹へは、彼の現狀を一口報告的に通じた丈で、又宅へ歸つた。

五十九

お時の御給仕で朝食兼帶の午の膳に着くのも、お延にとつては、結婚以來始めての經驗であつた。津田の不在から起る此變化が、女王らしい氣持を新しく彼女に與へると共に、毎日の習慣に反して貪り得た此自由が、何時もよりは却て彼女を囚へた。身體の悠くりした割合に、心の落付けなかつた彼女は、お時に向つて云つた。

「旦那樣が入らつしやらないと何だか變ね」

「へえ、御淋しう御座います」

お延はまだ云ひ足りなかつた。

「こんな寐坊をしたのは始めてね」

「えゝ、其代り何時でも御早いんだから、偶には朝と御午と一所でも、宜しう御座いませう」

「旦那樣が入らつしやらないと、すぐあの通りだなんて、思やしなくつて」

「誰がで御座います」

「御前がさ」

「飛んでもない」

お時のわざとらしい大きな聲は、下手な話し相手よりも非道くお延の趣味に應へた。彼女はすぐ默つてしまつた。

三十分ほど經つて、お時の沓脱に揃へた餘所行の下駄を穿いて又表へ出る時、お延は玄關迄送つて來た彼女を顧た。

「よく氣を附けて御呉れよ。昨夕見たいに寐てしまふと、不用心だからね」

「今夜も遲く御歸りになるんで御座いますか」

お延は何時歸るか丸で考へてゐなかつた。

「あんなに遲くはならない積りだがね」

たまさかの夫の留守に、ゆつくり岡本で遊んで來たいやうな氣がお延の胸の何處かでした。

「成るたけ早く歸つて來て上げるよ」

斯う云ひ捨てて通へ出た彼女の足は、すぐ約束の方角へ向つた。

岡本の住居は藤井の家と略同じ見當にあるので、途中迄は例の川沿ひの電車を利用する事が出來た。終點から一つか二つ手前の停留所で下りたお延は、其所に掛け渡した小さい木の橋を横切つて、向う側の通を少し歩いた。其通は二三日前の晩、酒場を出た津田と小林とが、二人の境遇や性格の差違から來る縺れ合つた感情を互に抱きながら、朝鮮行きだの、お金さんだのを問題にして歩いた往來であつた。それを津田の口から聞かされてゐなかつた彼女は、二人の樣子を想像する迄もなく、彼等とは反對の方角に無心で足を運ばせた後で、叔父の宅へ行くには是非共上らなければならない細長い坂へ掛かつた。すると偶然向うから來た繼子に言葉をかけられた。

「昨日は」

「何處へ行くの」

「御稽古」

去年女學校を卒業した此從妹は、餘暇に任せて色々なものを習つてゐた。ピアノだの、茶だの、花だの、水彩畫だの、料理だの、何へでも手を出したがる其人の癖を知つてゐるので、御稽古といふ言葉を聞いた時、お延は、つい笑ひたくなつた。

「何の御稽古？トーダンス？」

彼等は斯んな樂屋落の笑談をいふ程親しい間柄であつた。然しお延から見れば、自分より餘裕のある相手の境遇に對して、多少の皮肉を意味しないとも限らない此笑談が、肝心の當人には、一向諷刺としての音響を傳へずに濟むらしかつた。

「まさか」

彼女はたゞ斯う云つて機嫌よく笑つた。さうして彼女の笑ひは、如何に鋭敏なお延でも、無邪氣其物だと許さない譯に行かなかつた。けれども彼女は遂に何處へ何の稽古に行くかをお延に告げなかつた。

「冷やかすから厭よ」

「又何か始めたの」

「何うせ慾張りだから、何を始めるか分らないわ」

稽古事の上で、繼子は慾張といふ異名を取つてゐる事も、彼女の宅では隱れない事實であつた。最初妹から附けられて、忽ち家族のうちに傳播した此惡口は、近頃彼女自身によつて平氣に使用されてゐた。

「待つていらつしやい。ぢき歸つて來るから」

輕い足でさつさと段を下りに行く繼子の後姿を一度振り返つて見たお延の胸に、又尊敬と輕侮とを搗き交ぜた其人に對する何時もの感じが起つた。

六十

岡本の邸宅へ着いた時、お延は又偶然叔父の姿を玄關前に見出だした。羽織も着ずに、兵兒帶をだらりと下げて、其結び目の所に、後へ廻した兩手を重ねた彼は、傍で鍬を動かしてゐる植木屋と、しきりに何か話しをしてゐたが、お延を見るや否や、すぐ向うから聲を掛けた。

「來たね。今庭いぢりを遣つてる所だ」

植木屋の横には、大きな通草の蔓が卷いた儘、地面の上に投げ出されてあつた。

「そいつを今その庭の入口の門の上へ這はせようといふんだ。一寸好いだらう」

お延は網代組の竹垣の中程にある其茅門を支へてゐる釿なぐりの柱と丸太の桁を見較べた。

「へえ。あの袖垣の所にあつたのを拔いて來たの」

「うん其代り彼所へは玉縁をつけた目關垣を拵へたよ」

近頃身體に暇が出來て、自分の意匠通り住居を新築した此叔父の建築に關する單語は、何時の間にか殖えてゐた。言葉を聞いた丈ではとても解らない其目關垣といふものをお延はたゞ「へえ」と云つて應答つてゐるより外に仕方がなかつた。

「食後の運動には好いわね。御腹が空いて」

「笑談ぢやない、叔父さんはまだ午飯前なんだ」

お延を引張つて、わざ〳〵庭先から座敷へ上がつた叔父は「住、住」と大きな聲で叔母を呼んだ。

「腹が減つて仕方がない、早く飯にして呉れ」

「だから先刻みんなと一所に召上がれば好いのに」

「所が、さう勝手元の御都合の可いやうにばかりは參らんです、世の中といふものはね。第一物に區切りのあるといふ事をあなたは御承知ですか」

自業自得な夫に對する叔母の態度が澄ましたものであると共に、叔父の挨拶も相變らずであつた。久し振で故鄕の空氣を吸つたやうな感じのしたお延は、心のうちで自分の目の前にゐる此一對の老夫婦と、結

婚してからまだ一年と經たない、云はゞ新生活の門出にある彼等二人とを比較して見なければならなかつた。自分達も長の月日さへ踏んで行けば、斯うなるのが順當なのだらうか、又はいくら永く一所に暮らした所で、性格か違へば、互の立場も末始終違つて行かなければならないのか、年の若いお延には、それが智惠と想像で解けない一種の疑問であつた。お延は今の津田に滿足してはゐなかつた。然し未來の自分も、此叔母のやうに脊氣が拔けて行くだらうとは考へられなかつた。もしそれが自分の未來に横たはる必然の運命だとすれば、何時迄も現在の光澤を持ち續けて行かうとする彼女は、何時か一度悲しい此打擊を受けなければならなかつた。女らしい所がなくなつて仕舞つたのに、まだ女として此世の中に生存するのは、眞に恐ろしい生存であるとしか若い彼女には見えなかつた。

そんな距離の遠い感想が、此若い細君の胸に湧いてゐるとは夢にも氣の附きよう筈のない叔父は、自分の前に据ゑられた膳に向つて胡坐を搔きながら、彼女を見た。

「おい何をぼんやりしてゐるんだ。しきりに考へ込んでゐるぢやないか」

お延はすぐ答へた。

「久し振に御給仕でもしませう」

飯櫃が生憎其所にないので、彼女が座を立ちかけると叔母が呼び留めた。

「御給仕をしたくつたつて、麵麭だから出來ないよ」

下女が皿の上に狐色に焦げたトーストを持つて來た。

「お延、叔父さんは情ない事になつちまつたよ。日本に生れて來の飯が食へないんだから可哀相だらう」

糖尿病の叔父は既定の分量以外に澱粉質を攝取する事を主治醫から嚴禁されてしまつたのである。

「斯うして豆腐ばかり食つてるんだがね」

叔父の膳には到底一人では平げ切れない程の白い豆腐が生の儘で供へられた。むく〳〵と肥え太つた叔父の、わざとする情なさゝうな顏を見たお延は、大して氣の毒にならないばかりか、却つて笑ひたくなつた。

「少しや斷食でもした方が可いんでせう。叔父さんみたいに肥つて生きてるのは、誰だつて苦痛に違ひないから」

叔父は叔母を顧た。

「お延は元から惡口やだつたが、嫁に行つてから一層達者になつたやうだね」

六十一

小さいうちから彼の世話になつて成長したお延は、色々の角度で出沒する此叔父の特色を他人より好く承知してゐた。

肥つた身體に釣り合はない神經質の彼には、時々自分の室に入つたぎり、半日位默つて口を利かずにゐる癖がある代りに、他の顏さへ見ると、また何かしら喋舌らないでは片時も居られないといつた氣作な風があつた。それが元氣の遣り場所に困るからといふよりも、成るべく相手を不愉快にしたくないといふ對人的な想ひ遣りや、又は客を前に置いて、唯のつそつしてゐる自分の手持無沙汰を避けるためから起る場

合が多いので、用件以外の彼の談話には、彼の平生の心掛から來る一種の興味的中心があつた。彼の成功に少なからぬ貢獻をもたらしたらしく思はれる、社交上極めて有利な彼のこの話術は、其所有者の天から稟けた諧謔趣味のために、一層派出な光彩を放つ事が屢あつた。さうして夫が子供の時分から彼の傍にゐたお延の口に、何時の間にか乘り移つてしまつた。機嫌のいゝ時に、彼を向うへ廻して輕口の吐き競をやる位は、今の彼女に取つて何の努力も要らない第二の天性のやうなものであつた。然し津田に嫁いでからの彼女は、嫁ぐとすぐに此態度を改めた。所が最初愼みのために控へた惡口は、二ヶ月經つても、三ヶ月經つても中々出て來なかつた。彼女は遂に此點に於て、岡本に居た時の自分とは別個の人間になつて、彼女の夫に對しなければならなくなつた。彼女は物足らなかつた。同時に夫を欺いてゐるやうな氣がしてならなかつた。偶に來て、故に變らない叔父の樣子を見ると、其所に昔の自由を憶ひ出させる或物があつた。彼女は生豆腐を前に、胡坐を搔いてゐる剽輕な彼の顏を、過去の記念のやうに懷かし氣に眺めた。

「だつてあたしの惡口は叔父さんの御仕込みぢやないの。津田に教はつた覺えなんか、ありやしないわ」

「ふん左右でもあるめえ」

わざと江戸つ子を使つた叔父は、さういふ種類の言葉を、一切家庭に入れてはならないものの如くに忌み嫌ふ叔母の方を見た。傍から注意すると猶面白がつて使ひたがる癖をよく知つてゐるので、叔母は素知らぬ顏をして取り合はなかつた。すると目標が外れた人のやうに叔父は又お延に向つた。

「一體由雄さんはそんなに嚴格な人かね」

お延は返事をしずに、唯にや／＼してゐた。

「はゝあ、笑つてる所を見ると、矢つ張り嬉しいんだな」

「何がよ」

「何がよつて、そんなに白ばつくれなくつても、分つてるらあな。――だが本當に由雄さんはそんなに嚴格な人かい」

「何うだかあたしよく解らないわ。何故またそんな事を眞面目腐つて御訊きになるの」

「少し此方にも料簡があるんだ、返答次第では」

「おゝ怖い事。ぢや云つちまふわ。由雄は御察しの通り嚴格な人よ。それが何うしたの」

「本當にかい」

「えゝ、隨分叔父さんも苦呶いのね」

「ぢや此方でも簡潔に結論を云つちまふ。果して由雄さんが、御前のいふ通り嚴格な人ならばだ。到底惡口の達者な御前には向かないね」

斯う云ひながら叔父は、其所に默つて坐つてゐる叔母の方を、顎でしやくつて見せた。

「此叔母さんなら丁度御誂へ向きかも知れないがね」

淋しい心持が遠くから來た風のやうに、不意にお延の胸を撫でた。彼女は急に悲しい氣分に囚へられた自分を見て驚いた。

「叔父さんは何時でも氣樂さうで結構ね」

津田と自分とを、好過ぎる程仲の好い夫婦と假定してかゝつた、調戯半分の叔父の笑談をたゞ座興から

來た出鱈目として笑つてしまふには、お延の心にあまり隙があり過ぎた。と云つて、其隙を飽く迄取り繕つて、他人の前に、何一つ不足のない夫を持つた妻としての自分を示さなければならないとのみ考へてゐる彼女は、心に感じた通りの何物をも叔父の前に露出する自由を有つてゐなかつた。もう少しで涙が眼の中に溜まらうとした所を、彼女は瞬きで胡魔化した。

「いくら御誂へ向きでも、斯う年を取つちや仕方がない。ねえお延」

年の割に何處へ行つても若く見られる叔母が、斯う云つて水々しい光澤のある眼をお延の方に向けた時、お延は何も云はなかつた。けれども自分の感情を隱すために、第一の機會を利用する事は忘れなかつた。彼女はたゞ面白さうに聲を出して笑つた。

六十二

親身の叔母よりも却て義理の叔父の方を、心の中で好いてゐたお延は、其報酬として、自分も此叔父から特別に可愛がられてゐるといふ信念を常に有つてゐた。洒落でありながら神經質に生れ附いた彼の氣合をよく呑み込んで、その兩面に行き渡つた自分の行動を、寸分違はず叔父の思ひ通りに樂々と運んで行く彼女には、何時でも年齡の若さから來る柔軟性が伴なつてゐたので、殆ど苦痛といふものなしに、叔父を喜ばし、又自分に滿足を與へる事が出來た。叔父が鑑賞の眼を向けて、常に彼女の所作を眺めてゐて呉れるやうに考へた彼女は、時とすると、變化に乏しい叔母の骨は何うしてあんなに堅いのだらうと怪しむ事さへあつた。

如何にして異性を取り扱ふべきかの修養を、斯うして叔父からばかり學んだ彼女は、何處へ嫁に行つても、それを其儘夫に應用すれば成功するに違ひないと信じてゐた。津田と一所になつた時、始めて少し勝手の違ふやうな感じのした彼女は、此生れて始めての經驗を、成程といふ眼附で眺めた。彼女の努力は、新しい夫を叔父のやうな人間に熟しつけるか、又は既に出來上がつた自分の方を、新しい夫に合ふやうに改造するか、何方かにしなければならない場合によく出合つた。彼女の愛は津田の上にあつた。然し彼女の同情は寧ろ叔父型の人間に注がれた。斯んな時に、叔父なら嬉しがつて呉れるものをと思ふ事がしばしば出て來た。すると自然の勢ひが彼女にそれを逐一叔父に話してしまへと命令した。其命令に背くほど意地の強い彼女は、今迄何うか斯うか我慢して通して來たものを、今更告白する氣には到底なれなかつた。

斯うして叔父夫婦を欺いてきたお延には、叔父夫婦がまた何の懸念もなく彼女のために騙されてゐるといふ自信があつた。同時に敏感な彼女は、叔父の方でも亦彼女に打ち明けたくつて、しかも打ち明けられない、津田に對する、自分のと同程度位なある祕密を有つてゐるといふ事をよく承知してゐた。有體に見透かした叔父の腹の中を、お延に云はせると、彼は決して彼女に大切な夫としての津田を好いてゐなかつたのである。それが二人の間に横たはる氣質の相違から來る事は、たとひ二人を比較して見た上でなくても、あまり想像に困難のかゝらない假定であつた。少なくとも結婚後のお延はぢき其所に氣が附いた。然し彼女はまた其上に材料を有つてゐた。粗放のやうで一面に緻密な、無頓着のやうで同時に鋭敏な、口先は冷淡でも腹の中には親切氣のある此叔父は、最初會見の當時から、既に直觀的に津田を嫌つてゐたらしかつた。「御前はあゝいふ人が好きなのかね」と訊かれた裏側に、「ぢや己のやうなものは嫌ひだつたんだ

ね」といふ言葉が、ともに響いたらしく感じた時、お延は思はずはつとした。然し「叔父さんの御意見は」と此方から問ひ返した時の彼は、もう其氣不味い關を通り越してゐた。

「御出でよ、御前さへ行く氣なら、誰にも遠慮は要らないから」と親切に云つて呉れた。

お延の材料はまだ一つ殘つてゐた。自分に對して何も云はなかつた叔父の、津田に關するもつと露骨な批評を、彼女は叔母の口を通して聞く事が出來たのである。

「あの男は日本中の女がみんな自分に惚れなくつちやならないやうな顏附をしてゐるぢやないか」

不思議にも此言葉はお延にとつて意外でも何でもなかつた。彼女には自分が津田を精一杯愛し得るといふ信念があつた。同時に、津田から精一杯愛され得るといふ期待も安心もあつた。又叔父の例の惡口が始まつたといふ氣が何より先に起つたので、彼女は聲を出して笑つた。さうして、此惡口はつまり嫉妬から來たのだと一人腹の中で解釋して得意になつた。叔母も「自分の若い時の己惚れは、もう忘れてゐるんだからね」と云つて、彼女に相槌を打つて呉れた。……

叔父の前に坐つたお延は自分の後にある斯んな過去を憶ひ出さない譯に行かなかつた。すると「嚴格」な津田の妻として、自分が向くとか向かないとかいふ下らない彼の笑談のうちに、何か眞面目な意味があるのではなからうかといふ氣さへ起つた。

「己の云つた通りぢやないかね。なければ仕合せだ。然し萬一何かあるなら、又今ないにした所で、是から先ひよつと出て來たなら遠慮なく打ち明けなけりや不可ないよ」

お延は叔父の眼の中に、斯うした慈愛の言葉さへ讀んだ。

六十三

感傷的の氣分を笑ひに紛らした彼女は、その苦痛から逃れるために、すぐ自分の持つて來た話題を叔父叔母の前に切り出した。

「昨日の事は全體何ういふ意味なの」

彼女は約束通り叔父に說明を求めなければならなかつた。すると返答を與へる筈の叔父が却て彼女に反問した。

「御前は何ふ思ふ」

特に「御前」といふ言葉に力を入れた叔父は、お延の腹でも讀むやうな眼遣ひをして彼女を凝と見た。

「解らないわ。藪から棒にそんな事訊いたつて。ねえ叔母さん」

叔母はにやりと笑つた。

「叔父さんはね、あたしの樣な空疎ものには解らないが、お延になら屹度解る。あいつは貴樣より氣が利いてるからつて仰しやるんだよ」

お延は苦笑するより外に仕方なかつた。彼女の頭には無論朧氣ながらある臆測があつた。けれども強ひられないのに、悧巧振つてそれを口外する程、彼女の教育は蓮葉でなかつた。

「あたしにだつて解りつこないわ」

「まあ中てて御覽。大抵見當は附くだらう」

何うしてもお延の方から先に何か云はせようとする叔父の氣色を見て取つた彼女は、二三度押し問答の末、とう／＼推察の通りを云つた。

「見合ぢやなくつて」

「何うして。――御前には左右見えるかね」

お延の推測を首肯ふ前に、彼女の叔父から受けた反問が夫から夫へと續いた。仕舞に彼は大きな聲を出して笑つた。

「中たつた、中たつた。矢つ張り御前の方が住より悧巧だね」

斯んな事で、二人の間に優劣を附ける氣樂な叔父を、住とお延が馬鹿にして冷評した。

「ねえ、叔母さんだつて其位の事なら大抵見當が附くわね」

「御前も御賞めにあづかつたつて、あんまり嬉しくないだらう」

「えゝ、些とも難有かないわ」

お延の頭に、一座を切り舞はした吉川夫人の斡旋振が又描き出された。

「何うもあたし左右だらうと思つたの。あの奥さんが始終繼子さんと、それからあの三好さんて方を、引き立てよう、引き立てようとして、骨を折つていらつしやるんですもの」

「所があのお繼と來たら、又引き立たない事夥しいんだからな。引き立てようとすれば、却て引き下がる丈で、丸で紙袋を被つた猫見たいだね。其所へ行くと、お延のやうなのは何うしても得だよ。少なくとも當世向きだ」

「厭にしやあ〳〵してゐるからでせう。何だか賞められてるんだか、惡く云はれてるんだか分らないわね。あたし繼子さんのやうな大人しい人を見ると、何うかしてあんなになりたいと思ふわ」

斯う答へたお延は、叔父の所謂當世向きを發揮する餘地の自分に與へられなかつた、從つて自分から見れば寧ろ不成功に終つた、昨夕の會合を、不愉快と不滿足の眼で眺めた。

「何で又あたしがあの席に必要だつたの」

「御前は繼子の從姉ぢやないか」

たゞ親類だからといふのが唯一の理由だとすれば、お延の外にも出席しなければならない人がまだ澤山あつた。其上相手の方では當人がたつた一人出て來た丈で、紹介者の吉川夫婦を除くと、向うを代表するものは誰もゐなかつた。

「何だか變ぢやないの。さうすると若し津田が病氣でなかつたら、やつぱり親類として是非出席しなければ惡い譯になるのね」

「それや又別口だ。外に意味があるんだ」

叔父の目的中には、昨夜の機會を利用して、津田とお延を、一度でも餘計吉川夫妻に接近させて遣らうといふ好意が含まれてゐたのである。それを叔父の口から判切聽かされた時、お延は日頃自分が考へてゐる通りの叔父の氣性が其所に現はれてゐるやうに思つて、暗に彼の親切を感謝すると共に、そんなら何故あの吉川夫人ともつと親しくなれるやうに仕向けて呉れなかつたのかと恨んだ。二人を近づけるために同じ食卓に坐らせたには坐らせたが、結果は却て近づけない前より惡くなるかも知れないといふ特殊な心理

を、叔父は丸で承知してゐないらしかつた。お延はいくら行き屆いても男はやつぱり男だと批評したくなつた。然し其後から、吉川夫人と自分との間に横たはる一種微妙な關係を知らない以上は、誰か出て來ても畢竟何うする事も出來ないのだから仕方がないといふ、嘆息を交へた寛恕の念も起つて來た。

六十四

お延はその問題を其所へ放り出した儘、まだ自分の胸に落ちずに殘つてゐる要點を片附けようとした。

「成程さういふ意味合ひだつたの。あたし叔父さんに感謝しなくつちやならないわね。だけどまだ外に何かあるんでせう」

「あるかも知れないが、假令ないにした所で、單にそれ丈でも、あゝして御前を呼ぶ價値は充分あるだらう」

「えゝ、有るには有るわ」

お延は斯う答へなければならなかつた。然しそれにしては勸誘の仕方が少し猛烈過ぎると腹の中で思つた。叔父は果して最後の一物を胸に藏ひ込んでゐた。

「實は御前に御婿さんの眼利きをして貰はうと思つたのさ。御前は能く人を見拔く力を有つてるから相談するんだが、何うだらう彼の男は。お繼の未來の夫として可いだらうか惡いだらうか」

叔父の平生から推して、お延は何所迄が眞面目な相談なのか、一寸判斷に迷つた。

「まあ大變な御役目を承はつたのね。光榮の至りだ事」

斯う云ひながら、笑つて自分の横にゐる叔母を見たが、叔母の樣子が案外沈着なので、彼女はすぐ調子を抑へた。

「あたしの樣なものが眼利きをするなんて、少し生意氣よ。それにたゞ一時間位あゝして一所に坐つてゐた丈ぢや、誰だつて解りつこないわ。千里眼でもなくつちや」

「いや御前には一寸千里眼らしい所があるよ。だから皆が訊きたがるんだよ」

「冷評しちや厭よ」

お延はわざと叔父を相手にしない振をした。然し腹の中では自分に媚びる一種の快感を味はつた。それは自分が實際他に左右思はれてゐるらしいといふ把捉から來る得意に外ならなかつた。けれどもそれは同時に彼女を失意にする覿面の事實で破壞されべき性質のものであつた。彼女は反對に近い例證としてその裏面にすぐ自分の夫を思ひ浮かべなければならなかつた。結婚前千里眼以上に彼の性質を見拔き得たとばかり考へてゐた彼女の自信は、結婚後今日に至る迄の間に、明らかな太陽に黑い斑點の出來るやうに、思ひ違ひ癇違ひの痕迹で、既に其所此所汚れてゐた。畢竟夫に對する自分の直覺は、長い月日の經驗によつて、訂正されべく、補修されべきものかも知れないといふ心細い眞理に、漸く頭を下げ掛けてゐた彼女は、叔父に煽られてすぐ圖に乘る程若くもなかつた。

「人間はよく交際つて見なければ實際解らないものよ。叔父さん」

「其位な事は御前に教はらないだつて、誰だつて知つてらあ」

「だからよ。一度會つた位で何も云へる譯がないつていふのよ」

「そりや男の云ひ草だらう。女は一目見ても、すぐ何かいふぢやないか。又よく旨い事を云ふぢやないか。それを云つて御覧といふのさ、たゞ叔父さんの參考迄に。何も御前に責任なんか持たせやしないから大丈夫だよ」

「だつて無理ですもの。そんな豫言者見たいな事。ねえ叔母さん」

叔母は何時ものやうにお延に加勢しなかつた。されば と云つて、叔父の味方にもならなかつた。彼女の豫言を強ひる氣色を見せない代りに、叔父の惡強ひも留めなかつた。始めて嫁にやる可愛い長女の未來の夫に關する批判の材料なら、それが何んなに輕からうと、耳を傾ける値打は充分あるといつた風も見えた。お延は當り障りのない事を一口二口云つて置くより外に仕方がなかつた。

「立派な方ぢやありませんか。さうして若い割に大變落ち附いていらつしやるのね。……」

其後を待つてゐた叔父は、お延が何も云はないので、又催促するやうに訊いた。

「それつ切りかね」

「だつて、あたし彼の方の一軒置いて御隣へ坐らせられて、碌々御顔も拜見しなかつたんですもの」

「豫言者をそんな所へ坐らせるのは惡かつたかも知れないがね。――何かありさうなもんぢやないか。そんな平凡な觀察でなしに、もつと御前の特色を發揮するやうな、たゞ一言で、ずばりと向うの急所へ中たるやうな……」

「六づかしいのね。――何しろ一度位ぢや駄目よ」

「然し一度丈で何か云はなければならない必要があるとしたら何うだい。何か云へるだらう」

「云へないわ」
「云へない？ぢや御前の直覺は近頃もう役に立たなくなつたんだね」
「え〻、御嫁に行つてから、段々直覺が擦り減らされて仕舞つたの。近頃は直覺ぢやなくつて鈍覺丈よ」

六十五

口先で斯んな押し問答を長たらしく繰り返してゐたお延の頭の中には、又別の考へが絶えず並行して流れてゐた。

彼女は夫婦和合の適例として、叔父から認められてゐる津田と自分を疑はなかつた。けれども初對面の時から津田を好いて呉れなかつた叔父が、其後彼の好惡を改める筈がないといふ事もよく承知してゐた。だから睦ましさうな津田と自分とを、彼は始終不思議な眼で眺めてゐるに違ひないと思つてゐた。それを他の言葉で云ひ換へると、何うしてお延のやうな女が、津田を愛し得るのだらうといふ疑問の裏に、叔父は何時でも、彼自身の先見に對する自信を持ち續けてゐた。人間を見損なつたのは、自分でなくて、却てお延なのだといふ斷定が、時機を待つて外部に搖曳するために、彼の心の下層にいつも沈澱してゐるらしかつた。

「それだのに叔父は何故三好に對する自分の評を、こんなに執拗く聽かうとするのだらう」

お延は解しかねた。既に自分の夫を見損なつたものとして、暗に叔父から目指されてゐるらしい彼女に、其自覺を差し置いて、おいそれと彼の要求に應ずる勇氣はなかつた。仕方がないので、彼女は仕舞に默つ

てしまつた。然し年來遠慮のなさ過ぎる彼女を見慣れて來た叔父から見ると、此際彼女の沈默は、不思議に近い現象に外ならなかつた。彼はお延を措いて叔母の方を向いた。

「この子は嫁に行つてから、少し人間が變つて來たやうだね。大分臆病になつた。それもやつぱり旦那樣の感化かな。不思議なもんだな」

「貴方が餘り苛めるからですよ。さあ云へ、さあ云へつて、責めるやうに催促されちや、誰だつて困りますよ」

叔母の態度は、叔父を窘めるよりも寧ろお延を庇護ふ方に傾いてゐた。然しそれを嬉しがるには、彼女の胸が、あまり自分の感想で、一杯になり過ぎてゐた。

「だけど是や第一が繼子さんの問題ぢやなくつて。繼子さんの考へ一つで極まる丈だとあたし思ふわ、あたしなんかが餘計な口を出さないだつて」

お延は自分の夫を擇んだ當時の事を憶ひ起さない譯に行かなかつた。津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。さうして其許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を餘所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覺えはいまだ嘗てなかつた。

「一體繼子さんは何と仰しやるの」

「何とも云はないよ。あいつは御前より猶臆病だからね」

「肝心の當人がそれぢや、仕方がないぢやありませんか」

「うん、あゝ臆病ぢや實際仕方がない」

「臆病ぢやないのよ、大人しいのよ」

「何方にしたつて仕方がない、何も云はないんだから。或は何も云へないのかも知れないね、種がなくつて」

さういふ二人が漫然として結び附いた時に、夫婦らしい關係が、果して兩者の間に成立し得るものかといふのが、お延の胸に横たはる深い疑問であつた。「自分の結婚ですら斯うだのに」といふ論理がすぐ彼女の頭に閃めいた。「自分の結婚だつて畢竟は似たり寄つたりなんだから」といふ風に、此場合を眺める事の出來なかつた彼女は、一直線に自分の眼を附けた方ばかり見た。馬鹿らしいよりも恐ろしい氣になつた。なんといふ氣樂な人だらうとも思つた。

「叔父さん」と呼び掛けた彼女は、呆れたやうに細い眼を強く張つて彼を見た。

「駄目だよ。あいつは初めつから何も云ふ氣がないんだから。元來はそれで御前に立ち合つて貰つたやうな譯なんだ、實を云ふとね」

「だつてあたしが立ち合へば何うするの」

「兎に角繼が是非さうして呉れつて己達に賴んだんだ。つまりあいつは自分より御前の方を餘つ程悧巧だと思つてるんだ。さうしてたとひ自分は解らなくつても、御前なら後から色々云つて呉れる事があるに違ひないと思ひ込んでゐるんだ」

「ぢや最初からさう仰しやれば、あたしだつて其氣で行くのに」

「所が又それは厭だといふんだ。是非默つてて呉れといふんだ」
「何故でせう」
お延は一寸叔母の方を向いた。「極りが惡いからだよ」と答へる叔母を、叔父は遮つた。
「なに極りが惡いばかりぢやない。成心があつちや、好い批評が出來ないといふのが、あいつの主意なんだ。つまりお延の公平に得た第一印象を聞かして貰ひたいといふんだらう」
お延は初めて叔父に強ひられる意味を理解した。

六十六

お延から見た繼子は特殊の地位を占めてゐた。此方の利害を心に掛けて呉れるといふ點に於て、彼女は叔母に及ばなかつた。自分と氣が合ふといふ意味では叔父よりもずつと緣が遠かつた。其代り血統上の親和力や、異性に基づく牽引性以外に、年齡の相似から來る有利な接觸面を有つてゐた。
若い女の心を共通に動かす色々な問題の前に立つて、興味に充ちた眼を見張る時、自然の勢ひとして、彼女は叔父よりも叔母よりも、繼子に近づかなければならなかつた。さうして其場合に於ける彼女は、天分から云つて、いつでも繼子の優者であつた。經驗から推せば、勿論繼子の先輩に違ひなかつた。少なくとも左右いふ人として、繼子から一段上に見られてゐるといふ事を、彼女はよく承知してゐた。
此小さな嘆美者には、お延のいふ凡てを何でも眞に受ける癖があつた。お延の自覺から云へば、一つ家に寢起きを共にしてゐる長い間に、自分の優越を示す浮誇の心から、柔軟性に富んだ此從妹を、何時の間

にかさう育て上げてしまつたのである。

「女は一目見て男を見拔かなければ不可ない」

彼女はかつて斯んな事を云つて、無邪氣な繼子を驚かせた。彼女は又充分それを遣り終せるだけの活きた眼力を自分に具へてゐるものとして繼子に對した。さうして相手の驚きが、羨みから嘆賞に變つて、仕舞に崇拜の間際迄近づいた時、偶然彼女の自信を實現すべき、津田と彼女との間に起つた相思の戀愛事件が、恰も神祕の焰の如く、繼子の前に燃え上がつた。彼女の言葉は繼子にとつて遂に永久の眞理其物になつた。一般の世間に向つて得意であつた彼女は、とくに繼子に向つて得意でなければならなかつた。

お延の見た通りの津田が、すぐ繼子に傳へられた。日常接觸の機會を自分自身に有つてゐない繼子は、わが眼わが耳の範圍外に食み出してゐる未知の部分を、すべて彼女から與へられた間接の知識で補つて、容易に津田といふ理想的な全體を造り上げた。

結婚後半年以上を經過した今のお延の津田に對する考へは變つてゐた。けれども繼子の彼に對する考へは毫も變らなかつた。彼女は飽く迄もお延を信じてゐた。お延も今更前言を取り消すやうな女ではなかつた。何處迄も先見の明によつて、天の幸福を享ける事の出來た少數の果報者として、繼子の前に自分を標榜してゐた。

過去から持ち越した斯ういふ二人の關係を、餘儀なく記憶の舞臺に躍らせて、此事件の前に坐らなければならなくなつたお延は、辛いよりも寧ろ快くなかつた。それは皆が寄つてたかつて、今迄糊塗して來た自分の弱點を、早く自白しろと間接に責めるやうに思へたからである。此方の「我」以上に相手が意地の

悪い事をするやうに見えたからである。

「自分の過失に對しては、自分が苦しみさへすれば夫で澤山だ」

彼女の腹の中には、平生から貯藏してある斯ういふ辯解があつた。けれどもそれは何事も知らない叔父や叔母や繼子に向つて叩き附ける事の出來ないものであつた。もし叩き附けるとすれば、彼等三人を無心に使嗾して、自分に當て擦りを遣らせる天に向つてするより外に仕方がなかつた。

膳を引かせて、叔母の新しく淹れて來た茶をがぶ〳〵飮み始めた叔父は、お延の心にこんな交み入つた蟠りが蜿蜒つてゐようと思ふ筈がなかつた。造りたての平庭を見渡しながら、晴々した顏附で、叔母と二言三言、自分の考案になつた樹や石の配置に就いて批評しあつた。

「來年はあの松の横の所へ楓を一本植ゑようと思ふんだ。何だか此所から見ると、あすこ丈穴が開いてるやうで可笑しいからね」

お延は何の氣なしに叔父の指してゐる見當を見た。隣家と地續きになつてゐる塀際の土をわざと高く盛り上げて、其所へ小さな孟宗藪をこんもり繁らした根の邊が、叔父のいふ通り疎らに隙いてゐた。先刻から問題を變へよう變へようと思つて、暗に機會を待つてゐた彼女は、すぐ氣轉を利かした。

「本當ね。彼所を塞がないと、さも〳〵藪を拵へましたつて云ふやうで變ね」

談話は彼女の豫期した通り餘所の溝へ流れ込んだ。然しそれが再び故の道へ戻つて來た時は、前より急な傾斜面を通らなければならなかつた。

六十七

それは叔父が先刻玄關先で鍬を動かしてゐた出入りの植木屋に呼ばれて、一寸席を外した後、また庭口から座敷へ上がつて來た時の事であつた。

まだ學校から歸らない百合子や一の噂に始まつた叔母とお延の談話は、其時また偶然にも繼子の方に滑り込みつゝあつた。

「慾張屋さん、もう好い加減に歸りさうなもんだのにね、何をしてゐるんだらう」

叔母はわざ〳〵百合子の命けた渾名で繼子を呼んだ。お延はすぐ其慾張屋の樣子を思ひ出した。自分に許された小天地のうちでは飽く迄放恣な癖に、其處から一歩踏み出すと、急に謹愼の模型を見たやうに竦んでしまふ彼女は、丸で父母の監督によつて仕切られた家庭といふ籠の中で、さも愉快らしく囀る小鳥のやうなもので、一旦戸を開けて外へ出されると、却て何う飛んで可いか、何う鳴いて可いか解らなくなる丈であつた。

「今日は何の御稽古に行つたの」

叔母は「中てて御覽」と云つた後で、すぐ坂の途中から持つて來たお延の好奇心を滿足させて吳れた。然しその稽古の題目が近頃熱心に始め出した語學だと聞いた時に、彼女は又改めて從妹の多慾に驚かされた。そんなに色々なものに手を出して一體何にする積りだらうといふ氣さへした。

「それでも語學丈には少し特別の意味があるんだよ」

叔母は斯う云つて、辯護かた〴〵繼子の意味をお延に說明した。それが間接ながら矢張り今度の結婚問題に關係してゐるので、お延は叔母の手前殊勝らしい顏をして成程と首肯かなければならなかつた。夫の好むもの、でなければ夫の職業上妻が知つてゐると都合の好いもの、それ等を豫想して結婚前に習つて置かうといふ女の心掛けは、未來の良人に對する親切に違ひなかつた。或は單に男の氣に入るためとしても有利な手段に違ひなかつた。けれども繼子にはまだそれ以上に、人間として又細君としての大事な稽古がいくらでも殘つてゐた。お延の頭に描き出された其稽古は、不幸にして女を善くするものではなかつた。然し女を鋭敏にするものであつた。惡く摩擦するには相違なかつた。然し怜悧に研ぎ澄ますものであつた。彼女は其初步を叔母から習つた。叔父の御蔭でそれを今日に發達させて來た。二人はさういふ意味で育て上げられた彼女を、滿足の眼で眺めてゐるらしかつた。

「それと同じ眼が何うしてあの繼子に滿足出來るだらう」

從妹の何處にも不平らしい素振さへ見せた事のない叔父叔母は、此點に於てお延に不可解であつた。強ひて解釋しようとすれば、彼等は姪と娘を見る眼に區別をつけるとでも云ふより外に仕方がなかつた。斯ういふ考へに襲はれると、お延は突然口惜しくなつた。さういふ考へが又時々發作のやうにお延の胸を攫んだ。然し城府を設けない行き屆いた叔父の態度や、取扱ひに公平を缺いた事のない叔母の親切で、それは何時でも燃え上がる前に吹き消された。彼女は人に見えない袖を顏へ中てて內部の赤面を隱しながら、矢つ張り不思議な眼をして、二人の心持を解けない謎のやうに不斷から見詰めてゐた。

「でも繼子さんは仕合せね。あたし見たいに心配性でないから」

「あの子は御前よりもずつと心配性だよ。たゞ宅にゐると、いくら心配したくつても心配する種がないもんだから、あゝして平氣でゐられる丈なのさ」

「でもあたしなんか、叔父さんや叔母さんの御世話になつてた時分から、もつと心配性だつたやうに思ふわ」

「そりや御前と繼とは……」

中途で止めた叔母は何をいふ氣か解らなかつた。性質が違ふといふ意味にも、身分が違ふといふ意味にも、また境遇が違ふといふ意味にも取れる彼女の言葉を追究する前に、お延ははつと思つた。それは今迄氣の附かなかつた或物に、突然ぶつかつたやうな動悸がしたからである。

「昨日の見合に引き出されたのは、容貌の劣者として暗に從妹の器量を引き立てるためではなかつたらうか」

お延の頭に石火のやうな此暗示が閃めいた時、彼女の意志も平常より倍以上の力をもつて彼女に逼つた。彼女は遂に自分を抑へ附けた。どんな色をも顔に現はさなかつた。

「繼子さんは得な方ね。誰にでも好かれるんだから」

「左右も行かないよ。けれども是は人の好き〳〵だからね。あんな馬鹿でも……」

叔父が縁側へ上がつたのと、叔母が斯う云ひ掛けたのとは、殆ど同時であつた。彼は大きな聲で、「繼が何うしたつて」と云ひながら又座敷へ入つて來た。

六十八

すると今迄抑へ附けてゐた一種の感情がお延の胸に盛り返して來た。飽く迄機嫌の好い、飽く迄元氣に充ちた、さうして飽く迄樂天的に肥え太つた其顔が、瞬間のお延を咄嗟に刺激した。

「叔父さんも隨分人が惡いのね」

彼女は藪から棒に斯う云はなければならなかつた。今日迄二人の間に何百遍となく取り換はされた此常套な言葉を使つたお延の聲は、何時もと違つてゐた。表情にも特殊な所があつた。けれども先刻からお延の腹の中に何んな潮の滿干があつたか、其所に丸で氣の附かずにゐた叔父は、平生の細心にも似ず、全く無邪氣であつた。

「そんなに人が惡うがすかな」

例の調子でわざと空つとぼけた彼は、澄まして刻烟草を雁首へ詰めた。

「おれの留守に又叔母さんから何か聽いたな」

お延はまだ默つてゐた。叔母はすぐ答へた。

「あなたの人の惡い位今更私から聽かないでもよく承知してるさうですよ」

「成程ね。お延は直覺派だからな。左右かも知れないよ。何しろ一目見て此男の懷中には金が幾干あつて、彼はそれを犢鼻褌のミツへ挾んでゐるか、又は胴卷へ入れて臍の上に乘つけてゐるか、ちやんと見分ける女なんだから、中々油斷は出來ないよ」

叔父の笑談は決して彼の豫期したやうな結果を生じなかつた。お延は下を向いて眉と睫毛を一所に動かした。其睫毛の先には知らない間に涙が一杯溜まつた。勝手を違へた叔父の惡口もぱたりと留まつた。變な壓迫が一度に三人を抑へ附けた。

「お延何うかしたのかい」

斯う云つた叔父は無言の空虛を充たすために、烟管で灰吹を叩いた。叔母も何とか其場を取り繕はなければならなくなつた。

「何だね子供らしい。此位な事で泣くものがありますか。何時もの笑談ぢやないか」

叔母の小言は、義理のある叔父の手前を兼ねた挨拶とばかりは聞こえなかつた。二人の關係を知り拔いた彼女の立場を認める以上、何處から見ても公平なものであつた。お延はそれをよく承知してゐた。けれども叔母の小言を尤もと思へば思ふ程、彼女は猶泣きたくなつた。彼女の唇が顫へた。抑へ切れない涙が後から後からと出た。それにつれて、今迄堰き留めてゐた口の關も破れた。彼女はつひに泣きながら聲を出した。

「何もそんなに迄して、あたしを苛めなくつたつて……」

叔父は當惑さうな顏をした。

「苛めやしないよ。賞めてるんだ。そら御前が由雄さんの所へ行く前に、あの人を評した言葉があるだらう。あれを皆陰で感心してるるんだ。だから……」

「そんな事うかゞはなくつても、もう澤山です。つまりあたしが芝居へ行つたのが惡いんだから。……」

沈默がすこし續いた。

「何だか飛んだ事になつちまつたんだね。叔父さんの調戯ひ方が惡かつたのかい」

「いゝえ。皆あたしが惡いんでせう」

「さう皮肉を云つちや不可ない。何處が惡いか解らないから訊くんだ」

「だから皆あたしが惡いんだつて云つてるぢやありませんか」

「だが譯を云はないからさ」

「譯なんかないんです」

「譯がなくつて、たゞ悲しいのかい」

お延は猶泣き出した。叔母は苦々しい顔をした。

「何だね此人は。駄々つ子ぢやあるまいし。宅にゐた時分、いくら叔父さんに調戯はれたつて、そんなに泣いた事なんか、ありやしない癖に。御嫁に行きたてで、少し旦那から大事にされると、すぐ左右なるから困るんだよ。若い人は」

お延は唇を嚙んで默つた。凡ての原因が自分にあるものとのみ思ひ込んだ叔父は却て氣の毒さうな樣子を見せた。

「そんなに叱つたつて仕樣がないよ。おれが少し冷評し過ぎたのが惡かつたんだ。――ねえお延さうだらう。屹度さうに違ひない。よし〳〵叔父さんが泣かした代りに、今に好い物を遣る」

漸く發作の去つたお延は、叔父から斯んな風に子供扱ひにされる自分を何う取り扱つて、跋の惡い此場

面に、平靜な一轉化を與へたものだらうと考へた。

六十九

所へ何も知らない繼子が、語學の稽古から歸つて來て、ひよつくり顏を出した。

「只今」

和解の心棒を失つて困つてゐた三人は、突然それを見出した人のやうに喜んだ。さうして殆ど同時に挨拶を返した。

「御歸んなさい」

「遲かつたのね。先刻から待つてたのよ」

「いや大變な御待ち兼ねだよ。繼子さんは何うしたらう、何うしたらうつて」

神經質な叔父の態度は、先刻の失敗を取り戾す意味を帶びてゐるので、平生よりは一層快豁であつた。

「何でも繼子さんに逢つて、是非話したい事があるんださうだ」

斯んな餘計な事迄云つて、自分の目的とは反對な影を、お延の上に逆さまに投げて置きながら、彼は却て得意になつてゐるらしかつた。

然し下女が襖越しに手を突いて、風呂の沸いた事を知らせに來た時、彼は急に思ひ附いたやうに立ち上がつた。

「まだ湯なんかに入つちやゐられない。少し庭に用が殘つてるから。――御前達先へ入るなら入るがい

い」

彼は氣に入りの植木屋を相手に、殘りの秋の日を土の上に費やすべく、再び庭へ下り立つた。けれども一旦背中を座敷の方へ向けた後で又振り返つた。

「お延、湯に入つて晩飯でも食べておいで」

斯う云つて二三間歩いたかと思ふと彼は又引き返して來た。お延は頭のよく働くその世話しない樣子を、如何にも彼の特色らしく感心して眺めた。

「お延が來たから晩に藤井でも呼んで遣らうか」

職業が違つても同じ學校出だけに古くから知り合ひの藤井は、津田との關係上、今では以前より餘程叔父に緣の近い人であつた。是も自分に對する好意からだと解釋しながら、お延は別に嬉しいと思ふ氣にもなれなかつた。藤井一家と津田、二つのものが離れてゐるよりも、はるか餘計に、彼女は彼等より離れてゐた。

「然し來るかな」といつた叔父の顏は、正にお延の腹の中を物語つてゐた。

「近頃みんなおれの事を隱居隱居つていふが、あの男の隱居主義と來たら、遠い昔からの事で、到底おれ抔の及ぶ所ぢやないんだからな。ねえ、お延、藤井の叔父さんは飯を食ひに來いつたら、來るかい」

「そりや何うだかあたしにや解らないわ」

叔母は婉曲に自己を表現した。

「大方入らつしやらないでせう」

「うん、中々おいそれと遣つて來さうもないね。おや止すか。――だがまあ試しに一寸掛けて見るが可い」

お延は笑ひ出した。

「掛けて見るつたつて、あすこにや電話なんかありやしないわ」

「おや仕方がない。使でも遣るんだ」

手紙を書くのが面倒だつたのか、時間が惜しかつたのか、叔父はさう云つたなりさつさと庭口の方へ歩いて行つた。叔母も「ぢやあたしは御免蒙つて御先へ御湯に入らう」と云ひながら立ち上がつた。

叔父の潔癖を知つて、みんなが遠慮するのに、自分丈は平氣で、こんな場合に、叔父の言葉通り斷行して顧みない叔母の態度は、お延に取つて羨ましいものであつた。又忌まはしいものであつた。女らしくない厭なものであると同時に、男らしい好いものであつた。あゝ出來たら嬉しからうといふ感じと、いくら年を取つてもあゝは遣りたくないといふ感じが、彼女の心に何時もの通り交錯した。

立つて行く叔母の後姿を彼女がぼんやり目送してゐると、一人殘つた繼子が突然誘つた。

「あたしの御部屋へ來なくつて」

二人は火鉢や茶器で取り散らされた座敷を其儘にして外へ出た。

七十

繼子の居間は取りも直さず津田に行く前のお延の居間であつた。其處に机を並べて二人ゐた昔の心持が、

まだ壁にも天井にも殘つてゐた。硝子戸を篏めた小さい棚の上に行儀よく置かれた木彫の人形も其儘であつた。薔薇の花を刺繍にした籃入りのピンクッションも其儘であつた。二人して御對に三越から買つて來た唐草模樣の染附けの一輪插も其儘であつた。

四方を見廻したお延は、從妹と共に暮らした處女時代の匂を至る處に嗅いだ。甘い空想に充ちた其匂が津田といふ對象を得て遂に實現された時、忽然鮮やかな焰に變化した自己の感情の前に抃舞したのは彼女であつた。眼に見えないでも、瓦斯があつたから、はつと火が點いたのだと考へたのは彼女であつた。空想と現實の間には何等の差違を置く必要がないと論斷したのは彼女であつた。顧ると其時からもう半年以上經過してゐた。何時か空想は遂に空想に留まるらしく見え出して來た。何所迄行つても現實化されないものらしく思はれた。或は極めて現實化され惡いものらしくなつて來た。お延の胸の中には微かな溜息さへ宿つた。

「昔は淡い夢のやうに、次第々々に確實な自分から遠ざかつて行くのではなからうか」

彼女は斯ういふ觀念の眼で、自分の前に坐つてゐる從妹を見た。多分は自分と同じ徑路を踏んで行かなければならない、又ひよつとしたら自分よりもつと豫期に外れた未來に突き當らなければならない此處女の運命は、叔父の手にある諾否の賽が、疊の上に轉がり次第、今明日中にでも、永久に片附けられてしまふのであつた。

お延は微笑した。

「繼子さん、今日はあたしが御神籤を引いて上げませうか」

「なんで？」

「何でもないのよ。たゞよ」

「だつて唯ぢや詰らないわ。何か極めなくつちや」

「さう。ぢや極めませう。何が可いでせうね」

「何が可いか、そりやあたしには解らないわ。あなたが極めて下さらなくつちや」

繼子は容易に結婚問題を口へ出さなかつた。お延の方から無暗に云ひ出されるのも苦痛らしかつた。けれども間接に何處かで其處に觸れて貰ひたい樣子があり〳〵と見えた。お延は從妹を喜ばせて遣りたかつた。と云つて、後で自分の迷惑になるやうな責任を持つのは厭であつた。

「ぢやあたしが引くから、あなた自分で御極めなさい、ね。何でも今あなたの御腹の中で、一番知りたいと思つてる事があるでせう。それにするのよ、あなたの方で、自分勝手に。可くつて」

お延は例の通り繼子の机の上に乘つてる彼等夫婦の贈物を取らうとした。すると繼子が急に其手を抑へた。

「厭よ」

お延は手を引込めなかつた。

「何が厭なの。可いから一寸御借しなさいよ。あなたの嬉しがるのを出して上げるから」

神籤に何の執着もなかつたお延は、突然斯うして繼子と戲れたくなつた。それは結婚以前の處女らしい自分を、彼女に憶ひ起させる良い媒介であつた。弱いものの虚を衝くために用ひられる腕の力が、彼女を

男らしい、活潑に[illegible]へ、[illegible]た手を膝に返した後では、もう最初の目的を忘れてゐた。たゞ[illegible]子の机の上に、[illegible]を奪ひ取りたかつた。[illegible]はそれを[illegible]前に、たゞ継子と争ひたかつた。二人は争つた。同時に女性の本能で来る[illegible]を恐れながら、[illegible]出して、[illegible]的に[illegible]へた。[illegible]の前に飾つてある大事な一輪挿を引ッ繰り返した。[illegible]出した[illegible]、中にある水は[illegible]に落ちた。二人は[illegible]手を引いた。さうして自然の位置で不意に放り出された可哀さうな花瓶を、同じやうに黙つて眺めた。それから改めて顔を見合はせるや否や、急に抵抗する事の出来ない衝動を受けた人のやうに、一度に笑ひ出した。

七十一

[illegible]、自分に[illegible]しくした、津田の前にかつて見せた事のない自由な[illegible]に復活した。彼の女は全く現在の自分を忘れた。

「継子さん早く雑巾を取つて入らつしやい」

「厭よ、あなたが零したんだから、あなたが取つて入らつしやいな」

二人はわざと譲り合つた。わざと押問答をした。

「ぢやジヤン拳よ」と云ひ出したお延は、繊い手を握つて勢ひよく継子の前に出した。継子はすぐ応じた。宝石の光る指が二人の間にちら／＼した。二人は其たんびに笑つた。

「狡猾いわ」

「あなたこそ狡猾いわ」
仕舞にお延が負けた時には零れた水がもう机掛と疊の目の中へ綺麗に吸ひ込まれてゐた。彼女は、膝を拂つて袂から出した手巾で、濡れた所を上から抑へ附けた。
「雑巾なんか要りやしない。斯うして置けば、それで澤山よ。みんなもう引いちまつたんだから」
彼女は轉がつた花瓶を元の位置に直して、拔けかゝつた花を丁寧に其中へ挿し込んだ。さうして今迄の頓興を丸で忘れた人のやうに澄まし返つた。それが又堪らなく可笑しいと見えて、継子は何時迄も一人で笑つて居た。
發作が靜まつた時、継子は帶の間に隠した疊入の御籤を取り出して、傍にある本箱の抽斗へ仕舞ひ込んだ。それから其上からぴちんと錠を下ろして、わざとお延の方を見た。
けれども継子に取つて何時迄も續く事の出來るらしい此無意味な遊戲的感興は、さう長くお延を支配する譯に行かなかつた。一仕切り我を忘れた彼女は、以前より早く醒めて仕舞つた。
「継子さんは何時でも氣樂で好いわね」
彼女は斯う云つて継子を見返した。當り障りのない彼女の言葉は迚も継子に通じなかつた。
「じや延子さんは氣樂でないの」
自分だつて氣樂な癖にと云はんばかりの語氣のうちには、誰からでも、世間見ずの御孃さん扱ひにされる兼ての不平も交じつてゐた。
「あなたとあたしと一體何處が違ふんでせう」

二人は年齡が違つた。性質も違つた。然し氣兼苦勞といふ點にかけて二人の何處に何んな違ひがあるか、それは繼子のまだ考へた事のない問題であつた。

「お父延子さん何んな心配があるの。少し話して頂戴な」

「心配なんかないわ」

「そら御覽なさい。あなただつて矢つ張り氣樂ぢやないの」

「そりや氣樂は氣樂よ。だけどあなたの氣樂さとは少し譯が違ふのよ」

「何うしてでせう」

お延は說明する譯に行かなかつた。又說明する氣になれなかつた。

「今に解るわ」

「だけど延子さんとあたしとは三つ違ひよ、たつた」

繼子は結婚前と結婚後の差違を丸で勘定に入れてゐなかつた。

「たゞ年齡ばかりぢやないのよ。境遇の變化よ。娘が人の奧さんになるとか、奧さんがまた旦那樣を亡くなして、未亡人になるとか」

繼子は少し怪訝な顏をしてお延を見た。

「延子さんは宅にゐた時と、由雄さんの所へ行つてからと、何方が氣樂なの」

「そりや……」

お延は口籠もつた。繼子は彼女に返答を拵へる餘地を與へなかつた。

「今の方が氣樂なんでせう。それ御覽なさい」

お延は仕方なしに答へた。

「さうばかりにも行かないわ。是で」

「だつてあなたが御自分で望んで入らしつた方ぢやないの、津田さんは」

「えゝ、だからあたし幸福よ」

「幸福でも氣樂ぢやないの」

「氣樂な事も氣樂よ」

「ぢや氣樂は氣樂だけれども、心配があるの」

「さう繼子さんの樣に押し詰めて來ちや敵はないわね」

「押し詰める氣ぢやないけれども、解らないから、ついさうなるのよ」

七十二

段々勾配の急になつて來た會話は、何時の間にか繼子の結婚問題に滑り込んで行つた。成るべくそれを避けたかつたお延には、今迄の行き掛り上、またそれを避ける事の出來ない義理があつた。經驗に乏しい處女の期待するやうな豫言は兎も角も、男女關係に一日の長ある年上の女として、相當の注意を與へて遣りたい親切もないではなかつた。彼女は差し障りのない際どい筋の上を婉曲に渡つて歩いた。

「そりや駄目よ。津田の時は自分の事だから、自分によく解つたんだけれども、他の事になると丸で勝

手が違つて、些とも解らなくなるのよ」

「そんなに遠慮しないだつて可かないの」

「遠慮ぢやないのよ」

「おや冷淡なの」

お延は答へる前に少時間を置いた。

「継子さん、あなた知つてて。女の眼は自分に一番縁故の近い事に出會つた時、始めて鋭く働らく事が出來るのだといふ事を。眼が一秒で十年以上の手間をするのは、其時に限るのよ。しかもそんな事は誰だつて生涯にさう澤山ありやしないわ。ことによると生涯に一遍も來ないで濟んでしまふかも分らないわ。だからあたしなんかの眼はまあ盲目同然よ。少なくとも平生は」

「だつて延子さんは左右いふ眼をちやんと持つていらつしやるんぢやないの。そんなら何故それをあたしの場合に使つて下さらなかつたの」

「使はないんぢやない、使へないのよ」

「だつて岡目八目つて云ふぢやありませんか。傍にゐるあなたには、あたしより餘計公平に分る筈だわ」

「ぢや継子さんは岡目八目で生涯の運命を極めてしまふ氣なの」

「さうぢやないけれども、參考にやなるでせう。ことに延子さんを信用してゐるあたしには」

お延は又少時默つてゐた。それから少し前よりは改まつた態度で口を利き出した。

「継子さん、あたし今あなたに御話ししたでせう、あたしは幸福だつて」

「えゝ」
「何故あたしが幸福だかあなた知つてて—」
お延は其所で句切りを置いた。さうして継子の何かいふ前に、すぐ後を継ぎ足した。
「あたしが幸福なのは、外に何も意味はないのよ。たゞ自分の眼で自分の夫を撰ぶ事が出来たからよ。岡目八目で御嫁に行かなかつたからよ。解つて」
継子は心細さうな顔をした。
「ぢやあたしのやうなものは、とても幸福になる望はないのね」
お延は何とか云はなければならなかつた。然しすぐには何とも云へなかつた。仕舞に突然興奮したやうな急な調子が思はず彼女の口から迸り出した。
「あるのよ、あるのよ。たゞ愛するのよ、さうして愛させるのよ。さうさへすれば幸福になる見込は幾何でもあるのよ」
斯う云つたお延の頭の中には、自分の相手としての津田が明瞭に動いた。彼女は継子に話し掛けながら、殆んど三好の影さへ思ひ浮かべなかつた。幸ひそれを自分のためといふ解釈した継子は、真ともにお延の調子を受ける程感激しなかつた。
「誰を」と云つた彼女は少し呆れたやうにお延の顔を見た。「昨夕御目に掛つたあの方の事？」
「誰でも構はないのよ。たゞ自分で斯うと思ひ込んだ人を愛するのよ。さうして是非其人に自分を愛させるのよ」

平生包み藏してゐるお延の利かない氣性が、次第に鋒鋩を露はして來た。大人しい繼子はそのたびに少しづゝ後へ退がつた。仕舞に近寄りにくい二人の間の距離を悟つた時、彼女は微かな溜息さへ吐いた。するとお延が忽然また調子を張り上げた。

「あなたあたしの云ふ事を疑つていらつしやるの。本當よ。あたし噓なんか吐いちやゐないわ。本當よ。本當にあたし幸福なのよ。解つたでせう」

斯う云つて絕對に繼子を首肯はせた彼女は、後から又獨り言のやうに附け足した。

「誰だつて左右よ。たとひ今其人が幸福でないにした所で、其人の料簡一つで、未來は幸福になれるのよ。屹度なれるのよ。屹度なつて見せるのよ。ねえ繼子さん、左右でせう」

お延の腹の中を知らない繼子は、此豫言をたゞ漠然と自分の身の上に應用して考へなければならなかつた。然しいくら考へても其意味は殆ど解らなかつた。

七十三

其時廊下傳ひに聞こえた忙しい足音の主ががらりと室の入口を明けた。さうして學校から歸つた百合子が、遠慮なくつか〳〵入つて來た。彼女は重さうに肩から釣るした袋を取つて、自分の机の上に置きながら、たゞ一口「只今」と云つて姉に挨拶した。

彼女の机を据ゑた場所は、丁度もとお延の坐つてゐた右手の隅であつた。お延が津田へ片附くや否や、すぐ其後へ入る事の出來た彼女は、從姉のゐなくなつたのを、自分にとつて大變な好都合のやうに喜んだ。

お延はそれを知つてるので、わざと言葉を掛けた。

「百合子さん、あたしまた御邪魔に上がりましたよ。可くつて」

百合子は「よく入らつしやいました」とも云はなかつた。机の角へ右の足を載せて、少し穴の開きさうになつた黒い靴足袋の親指の先を、手で撫でてゐたが、足を疊の上へ卸ろすと共に答へた。

「好いわ、來ても。追ひ出されたんでなければ」

「まあ非道い事」と云つて笑つたお延は、少し間を置いてから、また彼女を相手にした。

「百合子さん、もしあたしが津田を追ひ出されたら、少しは可哀相だと思つて下さるでせう」

「えゝ、そりや可哀相だと思つて上げても可いわ」

「そんなら、其時は又此御部屋へ置いて下すつて」

「さうね」

百合子は少し考へる樣子をした。

「可いわ、置いて上げても。御姉さまが御嫁に行つた後なら」

「いえ繼子さんが御嫁にいらつしやる前よ」

「前に追ひ出されるの？そいつは少し――まあ我慢して成る可く追ひ出されないやうにしたら可いでせう。此方の都合もある事だから」

斯う云つた百合子は年上の二人と共に聲を揃へて笑つた。さうして袴も脱がずに、火鉢の傍へ來て其間に坐りながら、下女の持つてきた木皿を受取つて、すぐ其中にある餅菓子を食べ出した。

「今日は御八つ？此木皿を見ると思ひ出すのね」

お延は自分が百合子位であつた當時を回想した。學校から歸ると、待ちかねて各自の前に置かれる木皿へ手を出した其頃の樣子があり／＼と目に浮かんだ。旨さうに食べる妹の顔を覗き込んで見てゐた繼子も同じ昔を思ひ出すらしかつた。

「繼子さんあなた今でも御八つ召しやがつて」

「食べたり食べなかつたりよ。わざ／＼買ふのは面倒だし、さうかつて宅に何かあつても、昔のやうに旨しくないのね、もう」

「お八つが足りないからでせう」

かう話してゐるうちに、百合子は綺麗に木皿を空にした。さうして木に竹を接いだやうな調子で二人の間に割り込んで來た。

「本當よ、御嬢さまはもうぢき御嫁に行くのよ」

「さう、何處へ入らつしやるの」

「何處だか知らないけれども行く事は行くのよ」

「ぢや何といふ方の所へ入らつしやるの」

「何といふ名だか知らないけれども、行くのよ」

お延は根氣よく三度目の問を掛けた。

「それは何んな方なの」

百合子は平氣で答へた。
「大方由雄さん見たいな方なんでせう、御姉さまは由雄さんが大好きなんだから。何でも延子さんの云ふ通りになつて、大變好い人だつて、さう云つてゝよ」
薄赤くなつた繼子は、急に妹の方へ掛かつて行つた。百合子は頓興な聲を出してすぐ其所を飛び退いた。
「繼子さん大變大變」
入口の所で一寸立ち留まつて斯う云つた彼女は、お延と繼子を其所へ殘した儘、一人で室を逃げ出して行つた。

七十四

お延が下女から食事の催促を受けて、二返目に繼子と共に席を立つたのは、それから間もなくであつた。一家のものは同じ室に晴れ／＼しい顏を揃へた。先刻何かに拗ねて縁の下へ這入つたなり容易に出て來なかつたといふ一さんさへ、機嫌よく叔父と話しをしてゐた。
「一さんは犬見たいよ」と百合子がわざ／＼知らせに來た時、お延は此小さい從弟から、彼がはゝりと口を開いて上から鼻の先へ出された餅菓子に食ひ付いたといふ話を聞いたのであつた。
お延は微笑しながら所謂犬見たいな男の子の談話に耳を傾けた。
「御父さま彗星が出ると何か惡い事があるんでせう」
「うん昔の人はさう思つてゐた。然し今は學問が開けたから、そんな事を考へるものは、もう一人もな

くなつちまつた」
「西洋では」
西洋にも同じ迷信が古代に行はれたものか何うだか、叔父は知らないらしかつた。
「西洋？西洋にや昔からない」
「でもシーザーの死ぬ前に彗星が出たつていふぢやないの」
「うんシーザーの殺される前か」と云つた彼は、胡魔化するより外に仕方がないらしかつた。
「ありや羅馬の時代だからな。たゞの西洋とは譯が違ふよ」
一はそれで納得して黙つた。然しすぐ第二の質問を掛けた。前よりは一層奇抜な其質問は立派に三段論法の形式を具へてゐた。井戸を掘つて水が出る以上、地面の下は水でなければならない。地面の下が水である以上、地面は落つこちなければならない。然るに地面は何故落つこちないか。是が彼の要旨であつた。それに對する叔父の答辯が又頗るしどろもどろなので、傍のものはみんな可笑しがつた。
「そりや御前落ちないさ」
「だつて下が水なら落ちる譯ぢやないの」
「さう旨くは行かないよ」
女連が一度に笑ひ出すと、一は忽ち第三の問題に飛び移つた。
「御父さま、僕此家が軍艦だと好いな。御父さまは？」
「御父さまは軍艦よりたゞの家の方が好いね」

「だつて地震の時家なら潰れるぢやないの」

「はゝあ軍艦ならいくら地震があつても潰れないか。成程こいつは氣が附かなかつた。ふうん、成程」

本式に感服してる叔父の顏を、お延は微笑しながら眺めた。先刻藤井を晩餐に招待するといつた彼は、もう其事を念頭に置いてゐないらしかつた。叔母も忘れたやうに澄ましてゐた。お延はつい一に訊いて見たくなつた。

「一さん藤井の眞事さんと同級なんでせう」

「あゝ」と云つた一は、すぐ眞事に就いてお延の好奇心を滿足させた。彼の話しは、到底子供でなくては云へない、觀察だの、批評だの、事實だのに富んでゐた。食卓は一時彼の力で賑はつた。

みんなを笑はせた眞事の逸話の中に、下のやうなのがあつた。

ある時學校の歸りに、彼は一と一所に大きな深い穴を覗き込んだ。土木工事のために深く掘り返されて、往來の眞中に出來上がつた其穴の上には、一本の杉丸太が掛け渡してあつた。一は眞事に、其丸太の上を渡つたら百圓遣ると云つた。すると無鐵砲な眞事は、背嚢を背負つて、尨犬の皮で拵へたといはれる例の靴を穿いた儘、「屹度呉れる？」と云ひながら、殆ど平たい幅を有つてゐない、つる〳〵滑りさうな材木を渡り始めた。最初は今に落ちるだらうと思つて見てゐた一は、相手が一歩々々と、危ないながらゆつくりゆつくり自分に近づいて來るのを見て急に怖くなつた。彼は深い穴の眞上にある友達を其所へ置き去りにして、どん〳〵逃げだした。眞事は又始終足元に氣を取られなければならないので、丸太を渡り切つてしまふ迄は、一が何處へ行つたか全く知らずにゐた。漸く冒險を仕遂げて、約束通り百圓貰はうと思つて始め

て眼を上げると、相手は何時の間にか逃げてしまつて、其姿も形も丸で見えなかつたといふのである。

「一の方が少し小悧巧のやうだな」と叔父が評した。

「藤井さんは近頃あんまり遊びに來ないやうね」と叔母が云つた。

七十五

子供が一つ學校の同級にゐる事の外に、お延の關係から近頃岡本と藤井の間に起つた交際には多少の特色があつた。否でも顔を合はせなければならない親類不和合の所へ未來に控へてゐる利害に、事情の許す限り、雙方から接近して置く便宜を、平生から認めない譯にも行かなかつた。ことに女の利害を代表する岡本の方は、藤井よりも餘計此必要を認めなければならない地位に立つてゐた。其上岡本は叔父には普通の成功者に附隨する一種の臭味があつた。持つて生れた樂天的な横着面もあつた。神經質な彼はまた誤解を恐れた。ことに生計向きに不自由のないものが、比較的貧しい階級から受けがちな誤解を恐れた。多年の多忙と勉強のために損はれた健康を回復するために、當分閑地に就いた昨今の彼には、時間の餘裕も充分あつた。その時間の空虚な所を、自分の趣味に適つた樂細工で毎日埋めて行く彼は、今迄自分と全く縁故のないものとして、平氣で通り過ぎた人や物に段々接近して見ようといふ意志も有つてゐた。

是等の原因が困絡がつて、叔父は時々藤井の宅へ自分の方から出掛けて行く事があつた。排外的に見える藤井は、律義に叔父の訪問を返さうともしなかつたが、左右かと云つて彼を厭がる樣子も見せなかつた。

彼等は寧ろ快く談じた。底迄打ち解けた話しは出來ないにした所で、たゞ相互の世界を交換する丈でも、多少の興味にはなつた。其世界は又妙に食ひ違つてゐた。一方から見ると如何にも迂濶なものが、他方から眺めると如何にも高尚であつたり、片側で卑俗と解釋しなければならないものを、向うでは是非とも實際的に考へたがつたりする所に、思はざる發見がひよい〳〵出て來た。

「つまり批評家つて云ふんだらうね、あゝ云ふ人の事を。然しあれぢや仕事は出來ない」

お延は批評家といふ意味をよく理解しなかつた。實際の役に立たないから、口先で偉さうな事を云つて他を胡魔化すんだらうと思つた。「仕事が出來なくつて、たゞ理窟を弄んでゐる人、さういふ人に世間は何んな用があるだらう。さういふ人が物質上相當の報酬を得ないで困るのは當然ではないか」それ以上進む事の出來なかつた彼女は微笑しながら訊いた。

「近頃藤井さんへ入らしつて」

「うん此間も一寸散歩の歸りに寄つたよ。草臥れた時、休むには丁度都合の好い所にある宅だからね、彼所は」

「又何か面白い御話しでもあつて」

「相變らず妙な事を考へてるね、あの男は。此間は、男が女を引張り女がまた男を引張るつて話をさかんに遣つて來た」

「あら厭だ」

「馬鹿らしい、好い年をして」

お延と叔母はこも〴〵呆れたやうな言葉を出す間に、繼子丈は餘所を向いた。

「いや妙な事があるんだよ。大將中々調べてゐるから感心だ。大將のいふ所によると、斯うなんだ。何處の宅でも、男の子は女親を慕ひ、女の子はまた反對に男親を慕ふのが當り前だといふんだが、成程左う云へば、さうだね」

親身の叔母よりも義理の叔父を好いてゐたお延は少し眞面目になつた。

「それで何うしたの」

「それで斯うなんだ。男と女は始終引張り合はないと、完全な人間になれないんだ。つまり自分に不足な所が何處かにあつて、一人ぢやそれを何うしても充たす譯に行かないんだ」

お延の興味は急に退き掛けた。叔父の云ふ事は、自分の疾うに知つてゐる事實に過ぎなかつた。

「昔から陰陽和合つていふぢやありませんか」

「所が陰陽和合が必然でありながら、其反對に陰陽不和がまた必然なんだから面白いぢやないか」

「何うして」

「いゝかい、男と女が引張り合ふのは、互に違つた所があるからだらう。今云つた通り」

「えゝ」

「ぢや其違つた所は、つまり自分ぢやない譯だらう。自分とは別物だらう」

「えゝ」

「それ御覧。自分と別物なら、何うしたつて一所になれつこないぢやないか。何時迄經つたつて、離れ

てゐるより外に仕方がないぢやないか」
叔父はお延を征服した人のやうに呵々と笑つた。お延は負けなかつた。
「だけどそりや理窟よ」
「無論理窟さ。何處へ出ても立派に通る理窟さ」
「駄目よ、そんな理窟は。何だか變ですよ。丁度藤井の叔父さんが振り廻しさうな屁理窟よ」
お延は叔父を遣り込める事が出來なかつた。けれども叔父のいふ通りを信ずる氣にはなれなかつた。又何うあつても信ずるのは厭であつた。

七十六

叔父は面白半分まだ色々な事を云つた。
男が女を得て成佛する通りに、女も男を得て成佛する。然しそれは結婚前の善男善女に限られた眞理である。一度夫婦關係が成立するや否や、眞理は急に寢返りを打つて、今迄とは正反對の事實を我々の眼の前に突き附ける。卽ち男は女から離れなければ成佛出來なくなる。女も男から離れなければ成佛し惡くなる。今迄の牽引力が忽ち反撥性に變化する。さうして、昔から云ひ習はして來た通り、男はやはり男同志、女は何うしても女同志といふ諺を永久に認めたくなる。つまり人間が陰陽和合の實を擧げるのは、やがて來るべき陰陽不和の理を悟るために過ぎない。……
叔父の言葉の何處迄が藤井の受賣りで、何處からが自分の考へなのか、又其考への何處迄が眞面目で、

何處から來た笑談なのか、お延にはよく分らなかつた。筆を持つ術を知らない叔父は恐ろしく口の達者な人であつた。一寸した心棒があると、其上に幾枚でも手製の着物を着せる事の出來る人であつた。俗にいふ警句といふ種類のものが、いくらでも彼の口から出た。お延が反對すればする程、膏が乘つて留め度なく出て來た。お延はとう／＼好い加減にして切り上げなければならなかつた。

「隨分のべつね、叔父さんも」

口ぢやとても敵ひつこないから御止しよ。此方で何かいふと、猶意地になるんだから」

「えゝ、わざ／＼陰陽不和を釀すやうに仕向けるのね」

お延が叔母と斯んな批評を取り換はせてゐる間、叔父はにこ／＼して二人を眺めてゐたが、やがて會話の途切れるのを待つて、徐ろに宣告を下した。

「とう／＼降參しましたかな。降參したなら、降參したで宜しい。敗けたものを追窮はしないから。――其處へ行くと男には又弱いものを憐れむといふ美點があるんだからな、斯う見えても」

彼は左も勝利者らしい顏を粧つて立ち上がつた。障子を開けて室の外へ出ると、勿體振つた足音が書齋の方に向いて段々遠ざかつて行つた。しばらくして戻つて來た時、彼は片手に小型の薄つぺらな書物を四五冊持つてゐた。

「おいお延好いものを持つて來た。御前明日にでも病院へ行くなら、是を由雄さんの所へ持つて行つて御遣り」

「何よ」

お延はすぐ書物を受け取つて表紙を見た。英語の標題が、外國語に熟しない彼女の眼を少し惱ませた。彼女は拾ひ讀みにほつ〱讀み下した。ブック、オフ、ジョークス。イングリッシ、ヰット、エンド、ヒユモア。……

「へえ」

「みんな滑稽なもんだ。洒落だとか、謎だとかね。寢てゐて讀むには丁度手頃で好いよ、肩が凝らなくつてね」

「成程叔父さん向きのものね」

「叔父さん向きでも此位な程度なら差支へあるまい。いくら由雄さんが嚴格だつて、まさか怒りやしまい」

「怒るなんて、……」

「まあ可いや、是も陰陽和合のためだ。試しに持つてつて見るさ」

お延が禮を云つて書物を膝の上に置くと、叔父は又片方の手に持つた小さい紙片を彼女の前に出した。

「是は先刻御前を泣かした賠償金だ。約束だから序に持つて御出で」

お延は叔父の手から紙片を受取らない先に、その何であるかを知つた。叔父はことさらにそれを振り廻した。

「お延、是は陰陽不和になつた時、一番よく利く藥だよ。大抵の場合には一服呑むとすぐ平癒する妙藥だ」

お延は立つてゐる叔父を見上げながら、弱い調子で抵抗した。

「陰陽不和ぢやないのよ。あたし達のは本當の和合なのよ」

「和合なら猶結構だ。和合の時に呑めば、精神が益健全になる、さうして身體は愈強壯になる。何方へ轉んでも間違ひのない妙藥だよ」

叔父の手から小切手を受け取つて、ぢつとそれを見詰めてゐたお延の眼に涙が一杯溜まつた。

七十七

お延は叔父を送らせるといふ伴を斷つた。然し停留所迄自身で送つて遣るといふ彼の好意を斷りかねた。二人は遂に連れ立つて長い坂を河緣の方へ下りて行つた。

「叔父さんの病氣には運動が一番可いんだからね。――なに歩くのは自分の勝手さ」

肥つてゐて呼息が短かいので、坂を上るとき可笑しい程苦しがる彼は、丸で歸りを忘れたやうな事を云つた。

二人は途々夜の更けた昨夕の話をした。假寐をして突つ伏してゐた時の樣子などがお延の口に上つた。もと叔父の家にゐたといふ緣故で、新夫婦二人限りの家庭に住み込んだ此下女に對して、叔父は幾分か周旋者の責任を感じなければならなかつた。

「ありや叔母さんがよく知つてゐるが、正直で好い女なんだよ。留守なんぞさせるには持つて來いだつて請合つた位だからね。だが獨りで寢ちまつちや困るね、不用心で。尤もまだ年齒が年齒だからな。眠い事

「も眠いだらうよ」
　いくら若くつても、自分ならそんな場合にぐつすり寝込まれる譯のものでないといふ事をよく承知してゐたお延は、叔父の此想ひ遣りをたゞ笑ひながら聽いてゐた。彼女に云はせれば斯うして早く歸るのも、あんなに遲くなつた昨日の結果を、今夜は繰り返させたくないといふ注意からであつた。
　彼女は急いで其處へ來た電車に乘つた。さうして車の中から叔父に向つて「左樣なら」といつた。叔父は「左樣なら、由雄さんによろしく」といつた。二人が辛うじて別れの挨拶を交換するや否や、一種の音と動搖がすぐ彼女を支配し始めた。
　車内のお延は別に纏まつた事を考へなかつた。入れ替り立ち替り彼女の眼の前に浮かぶ、昨日から關係者の顏や姿は、自分の乘つてゐる電車のやうに早く廻轉する丈であつた。然し彼女にはさうした目眩しい影像を一貫してゐる或物を心のうちに認めた。若しくは其或物が根調で、さうした斷片的な影像が眼の前に飛び廻るのだとも云へた。彼女は其或物を拈定しなければならなかつた。然し彼女の努力は容易に成效をもつて酬いられなかつた。團子を認めた彼女は、遂に個々を貫いてゐる串を見定める事の出來ないうちに電車を下りてしまつた。
　玄關の格子を開ける音と共に、臺所の方から驅け出して來たお時は、彼女の豫期通り「御歸り」と云つて丁寧な頭を疊の上に押し附けた。お延は昨日に違つた下女の判切した態度を、左も自分の手柄ででもあるやうに感じた。
「今日は早かつたでせう」

下女は左程遲いとも思つてゐないらしかつた。得意なお延の顏を見て、仕方なささうに「へえ」と答へたので、お延は又讓歩した。

「もつと早く歸らうと思つたんだけれども、つい日が短かいもんだから」

自分の脫ぎ棄てた着物をお時に疊ませる時、お延は彼女に訊いた。

「あたしの居ない留守に何も用はなかつたらうね」

お時は「いゝえ」と答へた。お延は念のためもう一遍問を改めた。

「誰も來やしなかつたらうね」

するとお時が急に忘れたものを思ひ出したやうに調子高な返事をした。

「あ、入らつしやいました。あの小林さんと仰しやる方が」

夫の知人としての小林の名はお延の耳に初めてではなかつた。彼女には二三度其人に口を利いた記憶があつた。然し彼女はあまり彼を好いてゐなかつた。彼が夫から甚だ輕く見られてゐるといふ事も、ちやんと呑み込んでゐた。

「何しに來たんだらう」

斯んなぞんざいな言葉さへ、つい口先へ出さうになつた彼女は、それでも尋常な調子で、お時に訊き返した。

「何か御用でもおありだつたの」

「えゝ、あの外套を取りに入らつしやいました」

夫から何も聞かされてゐないお延に、此言葉は丸で通じなかつた。

「外套？　誰の外套？」

周密なお延は色々な問をお時に掛けて、小林の意味を知らうとした。けれどもそれは全くの徒勞であつた。お延が訊けば訊く程、お時が答へれば答へる程、二人は迷宮に入る丈であつた。仕舞に自分達より小林の方が變だといふ事に氣の附いた二人は、聲を出して笑つた。津田の時々使ふノンセンスと云ふ英語がお延の記憶に蘇生つた。「小林たノンセンス」斯う結び附けて考へると、お延は堪らなく可笑しくなつた。發作のやうに込み上げてくる滑稽感に遠慮なく自己を託した彼女に、電車の中から持ち越して歸つて來た、氣掛りな宿題を、しばらく忘れてゐた。

七十八

お延は其晩京都にゐる自分の兩親へ宛てて手紙を書いた。一昨日も昨日も書き掛けて止めにしたその音信を、今日は是非共片附けて仕舞はなければならないと思ひ立つた彼女の頭の中には、決して兩親の事ばかり働いてゐるのではなかつた。

彼女は落附けなかつた。不安から逃れようとする彼女には注意を一つ所に集める必要があつた。先刻からの疑問を解決したいといふ切な希望もあつた。要するに京都へ手紙を書けばざわ／＼しがちな自分の心持を纏めて見る事が出來さうに思へたのである。

筆を取り上げた彼女は、例の通り時候の挨拶から始めて、無沙汰の申し譯迄を器械的に書き了つた後で、

少時考へた。京都へ何か書いてやる以上は、是非共自分と津田との消息を的に置かなければならなかつた。それはどの親も新婚の娘から聞きたがる事項であつた。どの娘も亦生家の父母に知らせなくつては濟まない事項であつた。それを差し措いて里へ手紙を遣る必要は殆どあるまいと迄平生から信じてゐたお延は、筆を持つた儘、目下自分と津田との間柄が、果して何んな所に何ういふ風に關係してゐるかを考へなければならなかつた。彼女は有りの儘其物を父母に報知する必要に逼られてはゐなかつた。けれどもある男に嫁いだ一個の妻として、それを見極めて置く要求を痛切に感じた。彼女は凝と考へ込んだ。筆は其所で留まつたぎり動かなくなつた。その動かなくなつた筆の事さへ忘れて、彼女は考へなければならなかつた。しかも知らうとすればする程、確とした所は手に掴めなかつた。

手紙を書く迄の彼女は、さわ〳〵した散漫な不安に惱まされてゐた。手紙を書き始めた今の彼女は、漸く一つ所に落附いた。さうして又一つ所に落附いた不安に惱まされ始めた。先刻電車の中で、ちら〳〵眼先に附き出した色々の影像は、みんな此一點に向つて集注するのだといふ事を、前後兩樣の比較から發見した彼女は、やつと自分を苦しめる不安の大根に辿り着いた。けれども其大根の正體は何うしても分らなかつた。勢ひ彼女は問題を未來に繰り越さなければならなかつた。

「今日解決が出來なければ、明日解決するより外に仕方がない。明日解決が出來なければ明後日解決するより外に仕方がない。明後日解決が出來なければ……」

是が彼女の論法であつた。又希望であつた。最後の決心であつた。さうして其決心を彼女は既に繼子の前で公言してゐたのである。

「誰でも構はない、自分の斯うと思ひ込んだ人を飽く迄愛する事によつて、其人に飽く迄自分を愛させなければ已まない」

彼女は此所迄行く事を改めて心に誓つた。此所迄行つて落附く事を自分の意志に命令した。

彼女の氣分は少し輕くなつた。彼女は再び筆を動かした。成るべく父母の喜びさうな津田と自分の現況を憚りなく書き連ねた。幸福さうに暮らしてゐる二人の趣が、それからそれへと描出された。感激に充ちた筆の穗先がさら〳〵と心持よく紙の上を走るのが彼女には面白かつた。長い手紙がたゞ一息に出來上がつた。其一息が何の位の時間に相當してゐるかといふ事を、彼女は丸で知らなかつた。

仕舞に筆を擱いた彼女は、もう一遍自分の書いたものを最初から讀み直して見た。彼女の手を支配したと同じ氣分が、彼女の眼を支配してゐるので、彼女は訂正や添削の必要を何處にも認めなかつた。日頃苦にして、使ふ時には屹度言海を引いて見る、うろ覺えの字さへ其儘で少しも氣に掛からなかつた。てには違ひのために意味の通じなくなつた所を、二三ヶ所ちよい〳〵と取り繕つた丈で、彼女は手紙を卷いた。さうして心の中でそれを受取る父母に斷つた。

「この手紙に書いてある事は、何處から何處迄本當です。噓や、氣休めや、誇張は、一字もありません。もしそれを疑ふ人があるなら、私は其人を憎みます、輕蔑します、唾を吐き掛けます。其人よりも私の方が眞相を知つてゐるからです。私は上部の事實以上の眞相を此所に書いてゐます。それは今私に丈解つてゐる眞相なのです。然し未來では誰にでも解らなければならない眞相なのです。私は決してあなた方を欺いては居りません。私があなた方を安心させるために、わざと欺騙の手紙を書いたのだといふものがあ

つたなら、其人は眼の明いた盲目です。其人こそ嘘吐きです。どうぞ此手紙を上げる私を信用して下さい。神樣は既に信用していらつしやるのですから—

お延は封書を枕元へ置いて寐た。

七十九

始めて京都で津田に會つた時の事が思ひ出された。久し振に父母の顔を見に歸つたお延は、着いてから二三日して、父に使を頼まれた。一通の封書と一帙の唐本を持つて、彼女は五六町隔たつた津田の宅迄行かなければならなかつた。輕い神經痛に惱まされて、寐たり起きたりぶら／＼してゐた彼女の父は、病中の徒然を慰めるために折々津田の父から書物を借り受けるのだといふ事を、お延は其時始めて彼の口から聞かされた。古いのを返して新らしいのを借りて來るのが彼女の用向きであつた。彼女は津田の玄關に立つて案内を乞うた。玄關には大きな衝立が立ててあつた。白い紙の上に躍つてゐるやうに見える變な字を、彼女が驚いて眺めてゐると、其衝立の後から取次に現はれたのは、下女でも書生でもなく、丁度其時彼女と同じ樣に京都の家へ來てゐた由雄であつた。

二人は固よりそれ迄に顔を合はせた事がなかつた。お延の方ではたゞ噂で由雄を知つてゐる丈であつた。近頃家へ歸つて來たとか、又は歸つてゐるとかいふ話は、其朝始めて父から聞いた位のものであつた。それも父に新しく本を借りようといふ氣が起つて、彼がそのための手紙を書いた、事の序に過ぎなかつた。

由雄は其時お延から帙入の唐本を受取つて、何故だか、明詩別裁といふ嚴めしい字で書いた表題を長ら

くの間見詰めてゐた。其見詰めて居る彼を、お延は又何時迄も眺めてゐなければならなかつた。すると彼が急に顔を上げたので、お延が今迄熱心に彼を見てゐた事がすぐ發覺してしまつた。然し由雄の返事を待ち受ける位地に立たせられたお延から見れば、是も已むを得ない所作に違ひなかつた。顔を上げた由雄は、「父は生憎今留守ですが」と云つた。お延はすぐ歸らうとした。すると由雄が又呼び留めて、自分の父宛の手紙を、お延の見てゐる前で、斷りも何もせずに、開封した。此平氣な擧動がまたお延の注意を惹いた。彼の遣り口は不作法であつた。けれども果斷に違ひなかつた。彼女は何うしても彼を粗野とか亂暴とかいふ言葉で評する氣にならなかつた。

手紙を一目見た由雄は、お延を玄關先に待たせた儘、入り用の書物を探しに奥へ這入つた。然し不幸にして父の借らうとする漢籍は彼の眼の附く所になかつた。十分ばかりして又出て來た彼は、お延を空しく引き留めて置いた詫びを述べた。指定の本は一寸見附からないから、彼の父の歸り次第、此方から屆けるやうにすると云つた。お延は失禮だといふので、それを斷つた。自分が又明日にでも取りに來るからと約束して家へ歸つた。

すると其日の午後由雄が向うから望みの本をわざ〳〵持つて來て呉れた。偶然にもお延が其取次に出た。二人は又顔を見合はせた。さうして今度はすぐ兩方で兩方を認め合つた。由雄の手に提げた書物は、今朝お延の返しに云つたものに比べると、約三倍の量があつた。彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、恰も鳥籠でもぶら下げてゐるやうな具合にしてお延に示した。

彼は招ぜられるまゝに座敷へ上がつてお延の父と話をした。お延から云へば、とても若い人には堪へ

られさうもない老人向きの雜談を、別に迷惑さうな樣子もなく、方角違ひの父と取り換はせた。彼は自分の持つて來た本に就いては何事も知らなかつた。お延の返しに行つた本に就いては猶知らなかつた。畫の多い四角な字の重なつてゐる書物は全く讀めないのだと斷つた。それでも此方から借りに行つた呉梅村詩といふ四文字を的に、書棚を彼方此方と探して呉れたのであつた。父はあつく彼の好意を感謝した。……

お延の眼には其時の彼がちら／＼した。其時の彼は今の彼と別人ではなかつた。といつて、今の彼と同人でもなかつた。平たく云へば、同じ人が變つたのであつた。最初無關心に見えた彼は、段々自分の方に牽き附けられるやうに變つて來た。一旦牽き附けられた彼は、また次第に自分から離れるやうに變つて行くのではなからうか。彼女の疑ひは殆ど彼女の事實であつた。彼女は其疑ひを拭ひ去るために、其事實を引つ繰り返さなければならなかつた。

八十

強い意志がお延の身體全體に充ち渡つた。朝になつて眼を覺ました時の彼女には、怯懦ほど自分に縁の遠いものはなかつた。寢起きの惡過ぎた前の日の自分を忘れたやうに、彼女はすぐ飛び起きた。夜具を跳ね退けて、床を離れる途端に、彼女は自分で自分の腕の力を感じた。朝寒の刺激と共に、締まつた筋肉が一度に彼女を緊縮させた。

彼女は自分の手で雨戸を手繰つた。戸外の模樣は何時もよりまだ餘つ程早かつた。昨日に引き換へて、今日は津田の居る時よりも却て早く起きたといふ事が、何故だか彼女には嬉しかつた。怠けて寢過ごした

昨日の償ひ、それも滿足の一つであつた。

彼女は自分で床を上げて座敷を掃き出した後で鏡臺に向つた。さうして結つてから四日目になる髪を解いた。油で汚れた所へ二三度櫛を通して、癖が附いて自由にならないのを、無理に廂に束ね上げた。それが濟んでから始めて下女を起した。

食事の出來る迄の時間を、下女と共に働いた彼女は、膳に着いた時、下女から「今日は大變御早う御座いましたね」と云はれた。何も知らないお時には、彼女の早起きを驚いてゐるらしかつた。また自分が主人より遲く起きたのを濟まない事でもしたやうに考へてゐるらしかつた。

「今日は旦那樣の御見舞に行かなければならないからね」

「そんなに御早く入らつしやるんで御座いますか」

「えゝ。昨日行かなかつたから今日は少し早く出掛けませう」

お延の言葉遣ひは平生より丁寧で片附いてゐた。其所に或落附きがあつた。さうして其落附きを裏切る意氣があつた。意氣に伴なふ果斷も遠くに見えた。彼女の中にある心の調子がおのづと態度にあらはれた。

それでも彼女はすぐ出掛けようとはしなかつた。襷を外して盆を持つたお時を相手に、しばらく岡本の話などをした。もと世話になつた覺えのある其家族は、お時にとつても、興味に充ちた題目なので、二人は同じ事を繰り返すやうにして迄、よく彼等に就いて語り合つた。ことに津田のゐない時はさうであつた。といふのは、もし津田がゐると、ある場合には、彼一人が除外物にされたやうな變な結果に陷るからであつた。不圖した拍子からそんな氣不味い思ひを一二度經驗した後で、其所に氣を附け出したお延は、その

外にまだ、富裕な自分の身内を自慢らしく吹聴したがる女と夫から解釋される不快を避けなければならない理由もあつたので、お時にもかねて其旨を言ひ含めて置いたのである。

「御嬢さまはまだ何處へも御極りになりませんので御座いますか」

「何だかそんな話もあるやうだけれども、まだ何うなるかよく解らない樣子だよ」

「早く好い所へ入らつしやるやうになると、結構で御座いますがね」

「大方もう直きでせう。叔父さんはあんな性急だから。それに繼子さんはあたしと違つて、ああいふ器量好しだしね」

お時は何か云はうとした。お延は下女の御世辭を受けるのが苦痛だつたので、すぐ自分で其後を附けた。

「女は何うしても器量が好くないと損ね。いくら悧巧でも、氣が利いてゐても、顏が惡いと男には嫌はれる丈ね」

「そんな事は御座いません」

お時が辯護するやうに強く斯ういつたので、お延は猶自分を主張したくなつた。

「本當よ。男はそんなものなのよ」

「でも、それは一時の事で、年を取ると左うは參りますまい」

お延は答へなかつた。然し彼女の自信はそんな弱いものではなかつた。

「本當にあたしのやうな不器量なものは、生れ變つてでも來なくつちや仕方がない」

お時は呆れた顏をしてお延を見た。

「奥様が不器量なら、わたくしなんか何といへば可いので御座いませう」
お時の言葉は御世辭でもあり、眞實でもあつた。兩方の度合をよく心得てゐたお延は、それで滿足して立ち上がつた。
彼女が外出のため着物を着換へてゐると、戸外から誰か來たらしい足音がして玄關の號鈴が鳴つた。取次に出たお時に、「一寸奥さんに」といふ聲が聞こえた。お延は其聲の主を判斷しようとして首を傾けた。

八十一

袖を口へ當ててくす／＼笑ひながら茶の間へ馳け込んで來たお時は、容易に客の名を云はなかつた。彼女はたゞ可笑しさを嚙み殺さうとして、お延の前で悶え苦しんだ。わづか「小林」といふ言葉を口へ出すのでさへ餘程手間取つた。
此の不時の訪問者を何う取り扱つて可いか、お延は解らなかつた。厚い帶を締めかけてゐるので、自分がすぐ玄關へ出る譯に行かなかつた。といつて、掛取りでも待たせて置くやうに、何時迄も彼を其所に立たせるのも不作法であつた。姿見の前に立ち竦んだ彼女は當惑の眉を寄せた。仕方がないので、今出掛けだからゆつくり會つてはゐられないがとわざ／＼斷らした後で、彼を座敷へ上げた。然し會つて見ると、滿更知らない顏でもないので、用丈聽いてすぐ歸つて貰ふ事も出來なかつた。其上小林は眞劍だの遠慮だのを知らない點にかけて、大抵の人に引けを取らないやうに、天から生み附けられた男であつた。お延の時間が逼つてゐるのを承知の癖に、彼は相手さへ惡い顏をしなければ、何時迄坐り込んでゐても差支へな

いものと獨りで合點してゐるらしかつた。

彼は津田の病氣をよく知つてゐた。彼は自分が今度地位を得て朝鮮に行く事を話した。彼のいふ所によれば、其地位は未來に希望のある重要のものであつた。彼は又探偵に跟けられた話をした。それは津田と一所に藤井から歸る晩の出來事だと云つて、驚いたお延の顏を面白さうに眺めた。彼は探偵に跟けられるのが自慢らしかつた。大方社會主義者として目指されてゐるのだらうといふ說明迄して聽かせた。

彼の談話には氣の弱い女に衝撃を與へるやうな部分があつた。津田から何も聞いてゐないお延は、怖々ながらつい其所に釣り込まれて大切な時間を度外に置いた。然し彼の云ふ事を素直にはい〳〵聽いてゐると何處迄行つても果てしがなかつた。仕舞には此方から催促して、早く向うに用事を切り出させるやうに仕向けるより外に途がなくなつた。彼は少し極りの惡さうな樣子をして漸く用向きを述べた。それは昨夕お延とお時をさんざ笑はせた外套の件に外ならなかつた。

「津田君から貰ふつていふ約束をしたもんですから」

彼の主意は朝鮮へ立つ前一寸其外套を着て見て、もしあんまり自分の身體に合はないやうだつたら今のうちに直させたいといふのであつた。

お延はすぐ入り用の品を簞笥の底から出して遣らうかと思つた。けれども彼女はまだ津田から何も聞いてゐなかつた。

「何うせもう着る事なんかなからうとは思ふんですが」といつて逡巡つた彼女は、こんな事に案外八釜しい夫の氣性をよく知つてゐた。着古した外套一つが本で、他日細君の手落ち呼はりなどをされた日には

耐らないと思つた。

「大丈夫ですよ、呉れるつて云つたに違ひないんだから。嘘なんか吐きやしませんよ」

出して遣らないと小林を嘘吐きとしてしまふやうなものであつた。

「いくら醉拂つてゐたつて氣は確かなんですからね。どんな事があつたつて貰ふ物を忘れるやうな僕ぢやありませんよ」

お延はとう〳〵決心した。

「ぢや少時待つてゝ下さい。電話で一寸病院へ聞き合はせに遣りますから」

「奥さんは實に几帳面ですね」と云つて小林は笑つた。けれどもお延の暗に恐れてゐる不愉快さうな表情は、彼の顏の何處にも認められなかつた。

「たゞ念のためにですよ。あとでわたくしが又何とか云はれると困りますから」

お延はそれでも小林が氣を惡くしない用心に、斯んな辯解がましい事を附け加へずにはゐられなかつた。

お時が自働電話へ馳け附けて津田の返事を持つて來る間、二人は猶對坐した。さうして彼女の歸りを待ち受ける時間を談話で繫いだ。所が其談話は突然な閃きで、何も豫期してゐなかつたお延の心臟を躍らせた。

八十二

「津田君は近頃大分大人しくなつたやうですね。全く奥さんの影響でせう」

お時が出て行くや否や、小林は藪から棒に斯んな事を云ひ出した。お延に相手が相手なので、當らず障らずの返事をして置くに限ると思つた。

「さうですか。私自身ぢや影響なんか丸でないやうに思つて居りますがね」

「何うして、何うして。丸で人間が生れ變つたやうなものです」

小林の云ひ方が餘り大袈裟なので、お延は却て相手を冷評し返して遣りたくなつた。然し彼女の氣位がそれを許さなかつたので、彼女はわざと默つてゐた。小林はまたそんな事を顧慮する男ではなかつた。秩序も段落も構はない彼の話題は、突飛に此處彼所を驅け回る代りに、時としては不作法な位一直線に進んだ。

「矢つ張り細君の力には敵ひませんね、何んな男でも。――僕のやうな獨身ものには、殆ど想像が附かないけれども、何かあるんでせうね、其所に」

お延はとう／＼自分を抑へる事が出來なくなつた。彼女は笑ひ出した。

「えゝあるわ。小林さんなんかには迚も見當の附かない神祕的なものが澤山あるわ、夫婦の間には」

「あるなら一つ敎へて頂きたいもんですね」

「獨りものが敎はつたつて何にもならないぢやありませんか」

「參考になりますよ」

お延は細い眼のうちに、賢さうな光を見せた。

「それよりあなた御自分で奧さんを御貰ひになるのが、一番捷徑ぢやありませんか」

小林は頭を掻く眞似をした。

「貰ひたくつても貰へないんです」

「何故」

「來て呉れ手がなければ、自然貰へない譯ぢやありませんか」

「日本は女の餘つてる國よ、あなた。御嫁なんか何んなのでも其所いらにごろ〱轉がつてるぢやありませんか」

お延は斯う云つたあとで、是は少し云ひ過ぎたと思つた。然し相手は平氣であつた。もつと強くて烈しい言葉に平生から慣れ拔いてゐる彼の神經は全く無感覺であつた。

「いくら女が餘つてゐても、是から駈落をしようといふ矢先ですからね、來つこありませんよ」

駈落といふ言葉が不圖芝居で遣る男女二人の道行をお延に想ひ起させた。左右した濃厚な戀愛を象どる艶めかしい歌舞伎姿を、ちらりと胸に描いた彼女は、それと全く縁の遠い、他の着古した外套を貰ふために、今自分の前に坐つてゐる小林を見て微笑した。

「駈落をなさるのなら、一層二人でなすつたら可いでせう」

「誰とです」

「そりや極まつてゐますわ。奥さんの外に誰も伴れて入らつしやる方はないぢやありませんか」

「へえ」

小林は斯う云つたなり畏まつた。その態度が全くお延の豫期に外れてゐたので、彼女は少し驚かされた。

さうして却て豫期以上可笑しくなつた。けれども小林は眞面目であつた。しばらく間を置いてから獨り言のやうな口調で、彼は妙なことを云ひ出した。

「僕だつて朝鮮三界迄駈落の御供をして呉れるやうな、實のある女があれば、斯んな變な人間にならないで濟んだかも知れませんよ。實を云ふと僕には細君がないばかりぢやないんです。何もないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もつと廣く云へば人間がないんだとも云はれるでせうが」

お延は生れて初めての人に會つたやうな氣がした。斯んな言葉をまだ誰の口からも聞いた事のない彼女は、其表面上の意味を理解する丈でも困難を感じた。相手を何う捌して可いかの點になると、全く方角が立たなかつた。すると小林の態度は猶感慨を帯びて來た。

「奥さん、僕にはたつた一人の妹があるんです。外に何もない僕には、其妹が非常に貴重に見えるのです。普通の人の場合より何の位貴重だか分りやしません。それでも僕は其妹を置いて行かなければならないのです。妹は僕のあとへ何處迄も喰つ附いて來たがります。然し僕はまた妹をどうしても伴れて行く事が出來ないのです。二人一所に居るよりも、二人離れ／＼になつてゐる方が、まだ安全だからです。人に殺される危險がまだ少ないからです」

お延は少し氣味が悪くなつた。早く歸つて來て呉れゝばいゝと思ふお時はまだ歸らなかつた。仕方なしに彼女は話題を變へて此壓迫から逃れようと試みた。彼女はすぐ成功した。然しそれがために彼女はまた飛んでもない結果に陷つた。

八十三

特殊の經過を有つた其時の問答は、まづお延の言葉から始まつた。

「然し貴方の仰しやる事は本當なんでせうかね」

小林は果して沈痛らしい今迄の態度をすぐ改めた。さうしてお延の思はく通り向うから訊き返して來た。

「何がです、今僕の云つた事がですか」

「いゝえ、そんな事ぢやないの」

お延は巧みに相手を岐路に誘ひ込んだ。

「貴方先刻仰しやつたでせう。近頃津田が大分變つて來たつて」

小林は元へ戻らなければならなかつた。

「えゝ云ひました。それに違ひないから、さう云つたんです」

「本當に津田はそんなに變つたでせうか」

「えゝ變りましたね」

お延は腑に落ちないやうな顏をして小林を見た。小林はまた何か證據でも握つてゐるらしい樣子をしてお延を見た。二人がしばらく顏を見合はせてゐる間、小林の口元には始終薄笑ひの影が射してゐた。けれどもそれは終に本式の笑ひとなる機會を得ずに消えてしまはなければならなかつた。お延に小林なんぞに調戲はれる自分ぢやないといふ態度を見せたのである。

「奥さん、あなた自分だつて大概氣が附きさうなものぢやありませんか」

今度は小林の方から斯う云つてお延に働き掛けて來た。お延はたしかに其所に氣が附いてゐた。けれども彼女の氣が附いてゐる夫の變化は、全く別ものであつた。小林の考へてゐる、少なくとも彼の口にしてゐる變化とは丸で反對の傾向を帶びてゐた。津田と一所になつてから、朧氣ながら次第々々に明るくなりつゝあるやうに感ぜられる其變化は、非常に見分けにくい色調の階段をそろ／＼と動いて行く微妙なものであつた。何んな鋭敏な觀察者が外部から覗いても到底判りこない性質のものであつた。さうしてそれが彼女の祕密であつた。愛する人が自分から離れて行かうとする毫釐の變化、もしくは前から離れてゐたのだといふ悲しい事實を、今になつて、そろ／＼認め始めたといふ心持の變化、それが何で小林如きものに知れよう。

「一向氣が附きませんね。あれで何處か變つた所でもあるんでせうか」

「奥さんは中々空つ惚ける事が上手だから、僕なんざあとても敵はない」

小林は大きな聲を出して笑つた。

「空つ惚けるつていふのはあなたの事ぢやありませんか」

「ぢや、まあ、そんなら左右にして置きませう。――然し奥さんはさういふ旨い御手際を有つてゐられるんですね。漸く解つた。それで津田君があゝ變化して來るんですね、何うも不思議だと思つたら」

お延はわざと取り合はなかつた。と云つて別に煩い顏もしなかつた。愛嬌を見せた平氣とでもいふやうな態度をとつた。小林はもう一歩前へ進み出した。

「藤井さんでもみんな驚いてゐますよ」
「何を」
藤井といふ言葉を耳にした時、お延の細い眼が忽ち相手の上に動いた。誘き出されると知りながら、彼女はつい斯ういつて訊き返さなければならなかつた。
「あなたの御手際にです。津田君を手のうちに丸め込んで自由にするあなたの霊妙な御手際にです」
小林の言葉は露骨過ぎた。然し露骨な彼は、わざと愛嬌半分にそれをお延の前で披露するらしかつた。お延はつんとして答へた。
「さうですか。わたくしに夫丈の力があるんですかね。自分にや解りませんが、藤井の叔父さんや叔母さんがさう云つて下さるなら、大方本當なんでせうよ」
「本當ですとも。僕が見たつて、誰が見たつて本當なんだから仕方がないぢやありませんか」
「難有う」
お延は左も輕蔑した調子で禮を云つた。其禮の中に含まれてゐた苦々しい響は、小林にとつて全く豫想外のものであるらしかつた。彼はすぐ彼女を宥めるやうな口調で云つた。
「奥さんは結婚前の津田君を御承知ないから、それで自分の津田君に及ぼした影響を自覺なさらないんでせうが、――」
「わたくしは結婚前から津田を知つて居ります」
「然し其前は御存じないでせう」

「當り前ですわ」

「所が僕は其前をちやんと知つてゐるんですよ」

話しは斯んな具合にして、とう／＼津田の過去に溯つて行つた。

八十四

自分のまだ知らない夫の領分に這入り込んで行くのはお延にとつて多大の興味に違ひなかつた。彼女は喜んで小林の談話に耳を傾けようとした。所がいざ聽かうとすると、小林は決して要領を得た事を云はなかつた。云つても肝心の所はわざと略してしまつた。例へば二人が深夜非常線にかゝつた時の光景には、一口觸れるが、さういふ出來事に出合ふ迄、彼等が何處で夜深しをしてゐたかの點になると、彼は故意に暈し去つて、全く語らないといふ風を示した。それを訊けば意味ありげににや／＼笑つて見せる丈であつた。お延は彼が特に斯うして自分を焦燥らしてゐるのではなからうかといふ氣さへ起した。

お延は平生から小林を輕く見てゐた。半ば夫の評價を標準に置き、半ば自分の直覺を信用して成り立つた此侮蔑の裏には、まだ他に向つて公言しない大きな因子があつた。それは單に小林が貧乏であるといふ事に過ぎなかつた。彼に地位がないといふ點に外ならなかつた。賣れもしない雜誌の編輯、そんなものは極まつた職業として彼女の眼に映る筈がなかつた。彼女の見た小林は、常に無籍もののやうな顏をして、世の中をうろ／＼してゐた。宿なしらしい愚痴を零して、厭がらせに其所いらをまご附き歩く丈であつた。然し此の種の輕蔑に、ある程度の不氣味は何時でも附き物であつた。殊にさういふ階級に馴らされない

女。しかも經驗に乏しい若い女には、猶更の事でなければならなかつた。少なくとも小林の前に坐つたお延はさう感じた。彼女は今迄に彼位な貧しさの程度の人に出合はないとは云へなかつた。然し岡本の宅へ出入りをするそれらの人々は、みんな其分を辨へてゐた。身分には段等があるものと心得て、みんな己に許された範圍内に於てのみ行動を敢てした。彼女は未だかつて小林のやうに横着な人間に接した例がなかつた。彼のやうに無遠慮に自分に近附いて來るもの、富も位地もない癖に、彼のやうに大きな事を云ふもの、彼のやうに無暗に上流社會の惡體を吐くものには決して會つた事がなかつた。

お延は突然氣が附いた。

自分の今相手にしてゐるのは、平生考へてゐた通りの馬鹿でなくつて、或は手に餘る擦れ枯らしぢやなからうか――

輕蔑の裏に潛んでゐる不氣味な方面が強く頭を持上げた時、お延の態度は急に改まつた。すると小林はそれを見屆けた證據にか、又はそれに全くの無頓着でか、あはゝと笑ひ出した。

「奧さんまだ色々殘つてますよ。あなたの知りたい事がね」

「さうですか。今日はもう其位で澤山でせう。あんまり一度きに伺つてしまふと、是から先の樂しみがなくなりますから」

「さうですね、ぢや今日は是で切り上げときますかな。あんまり奧さんに氣を揉ませて、歇斯的里でも起されると、後でまた僕の責任だなんて、津田君に恨まれる丈だから」

お延は後を向いた。後は壁であつた。それでも茶の間に近い其見當に、彼女はお時の消息を聞かうとす

る努力を見せた。けれども勝手口は今迄通り靜かであつた。疾うに歸るべき筈のお時はまだ歸つて來なかつた。

「何うしたんでせう」

「なに今に歸つて來ますよ。心配しないでも迷兒になる氣遣ひはないから大丈夫です」

小林は動かうともしなかつた。お延は仕方がないので、茶を淹れ代へるのを口實に、席を立たうとした。小林はそれさへ遮つた。

「奧さん、時間があるなら、退屈凌ぎに幾らでも先刻の續きを話しますよ。喋舌つて潰すのも、默つて潰すのも、何うせ僕見たいな穀潰しにや、同じ時間なんだから、ちつとも御遠慮には及びません。何うです、津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないやうな水臭い所が大分あるんでせう」

「あるかも知れませんね」

「あゝ見えて中々淡泊でないからね」

お延ははつと思つた。腹の中で小林の批評を首肯はない譯に行かなかつた彼女は、それが中たつてゐる丈に猶の事感情を害した。自分の立場を心得ない何といふ不作法な男だらうと思つて小林を見た。小林は平氣で前の言葉を繰り返した。

「奧さんあなたの知らない事がまだ澤山ありますよ」

「あつても宜しいぢや御座いませんか」

「いや、實はあなたの知りたいと思つてる事がまだ澤山あるんですよ」

「あつても構ひません」
「ぢや、あなたの知らなければならない事がまだ澤山あるんだと云ひ直したら何うです。それでも構ひませんか」
「えゝ、構ひません」

八十五

小林の顔には皮肉の渦が漲つた。進んでも退いても此方のものだといふ勝利の表情があり〳〵と見えた。彼は其瞬間の得意を永久に引き延ばして、何時迄も自分で眺め暮らしたいやうな素振さへ示した。
「何といふ陋劣な男だらう」
お延は腹の中で斯う思つた。さうして少時の間凝と彼と睨めつ竸をしてゐた。すると小林の方から又口を利き出した。
「奥さん津田君が變つた例證として、是非あなたに聽かせなければならない事があるんですが餘りおびえていらつしやる樣だから、それは後廻しにして、其反對の方、即ち津田君がちつとも變らない所を少し御參考迄に御話しして置きますよ。是は厭でも私の方で是非奥さんに聽いて頂きたいのです。――何うです聽いて下さいますか」
お延は冷淡に「何うともあなたの御隨意に」と答へた。小林は「難有い」と云つて笑つた。
「僕は昔から津田君に輕蔑されてゐました。今でも津田君に輕蔑されてゐます。先刻からいふ通り津田

君は大變變りましたよ。けれども津田君の僕に對する輕蔑丈は昔も今も同樣なのです。毫も變らないのです。是丈はいくら怜悧な奧さんの感化力でも何うする譯にも行かないと見えますね。尤もあなた方から見たら、それが理の當然なんでせうけれどもね」

小林は其所で言葉を切つて、少し苦しさうなお延の笑ひ顏に見入つた。それから又續けた。

「いや別に變つて貰ひたいといふ意味ぢやありませんよ。其點について奧さんの御盡力を仰ぐ氣は毛頭ないんだから、御安心なさい。實をいふと、僕は津田君にばかり輕蔑されてゐる人間ぢやないんです。誰にでも輕蔑されてゐる人間なんですよ。下らない女に迄輕蔑されてゐるんです。有體に云へば世の中全體が寄つてたかつて僕を輕蔑してゐるんです」

小林の眼は据わつてゐた。お延は何といふ事も出來なかつた。

「まあ」

「それは事實です。現に奧さん自身でもそれを腹の中で認めていらつしやるぢやありませんか」

「そんな馬鹿な事があるもんですか」

「そりや口の先では、さう仰しやらなければならないでせう」

「あなたも隨分僻んでいらつしやるのね」

「え丶僻んでゐるかも知れません。僻まうが僻むまいが、事實は事實ですからね。然しそりや何うでも可いんです。もと／＼無能に生れ附いたのが惡いんだから、いくら輕蔑されたつて仕方がありますまい。誰を恨む譯にも行かないのでせう。けれども世間からのべつにさう取り扱はれ附けて來た人間の心持を、

あなたは御承知ですか」

小林は何時迄もお延の顔を見て返事を待つてゐた。お延には何もいふ事がなかつた。丸つ切り同情の起り得ない相手の心持、それが自分に何の關係があらう。自分には又自分で考へなければならない問題があつた。彼女は小林のために想像の翼さへ伸ばして遣る氣にならなかつた。其樣子を見た小林はまた「奧さん」と云ひ出した。

「奧さん、僕は人に厭がられる爲に生きてゐるんです。わざ〳〵人の厭がるやうな事を云つたり爲たりするんです。左うでもしなければ苦しくつて堪らないんです。生きてゐられないのです。僕の存在を人に認めさせる事が出來ないんです。僕は無能です。幾ら人から輕蔑されても存分な復讐が出來ないんです。仕方がないから切めて人に嫌はれてでも見ようと思ふのです。それが僕の志願なのです」

お延の前に丸で別世界に生れた人の心理狀態が描き出された。誰からでも愛されたい、又誰からでも愛されるやうに仕向けて行きたい、ことに夫に對しては、是非共左右しなければならない、といふのが彼女の腹であつた。さうしてそれは例外なく世界中の誰にでも當て嵌まつて、毫も悖らないものだと、彼女は最初から信じ切つてゐたのである。

「吃驚した樣ぢやありませんか。奧さんはまだそんな人に會つた事がないんでせう。世の中には色々の人がありますからね」

小林は多少溜飲の下りたやうな顏をした。

「奧さんは先刻から僕を厭がつてゐる。早く歸れば可い、歸れば可いと思つてゐる。所が何うした譯か、

下女が歸つて來ないもんだから、仕方なしに僕の相手になつてゐる。それがちやんと僕には分るんです、けれども奧さんはたゞ僕を厭な奴だと思ふ丈で、何故僕がこんな厭な奴になつたのか、其原因を御承知ない。だから僕が一寸其所を說明して上げたのです。僕だつてまさか生れたてから斯んな厭な奴でもなかつたでせうよ、よくは分りませんけれどもね」

小林は又大きな聲を出して笑つた。

八十六

お延の心は此不思議な男の前に入り亂れて移つて行つた。一には理解が起らなかつた。二には同情が出なかつた。三には彼の眞面目さが疑はれた。反抗、畏怖、輕蔑、不審、馬鹿らしさ、嫌惡、好奇心、――雜然として彼女の胸に交錯した色々なものは決して一點に纏まる事が出來なかつた。從つてたゞ彼女を不安にする丈であつた。彼女は仕舞に訊いた。

「ぢやあなたは私を厭がらせるために、わざ／＼此所へ入らしつたと言明なさるんですね」

「いや目的は左右ぢやありません。目的は外套を貰ひに來たんです」

「ぢや外套を貰ひに來た序に、私を厭がらせようと仰しやるんですか」

「いや左右でもありません。僕は是で天然自然の積りなんですからね。奧さんよりも餘程技巧は少ないと思つてるんです」

「そんな事は何うでも、私の問にはつきり御答へになつたら可いぢやありませんか」

「だから僕は天然自然だと云ふのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるやうになるといふ丈なのです」

「詰りそれがあなたの目的でせう」

「目的ぢやありません。然し本望かも知れません」

「目的と本望と何處が違ふんです」

「違ひませんかね」

お延の細い眼から憎惡の光が射した。女だと思つて馬鹿にするなといふ氣性があり〳〵と瞳子の裏に宿つた。

「怒つちや不可ません」と小林が云つた。「僕は自分の小さな料簡から敵打をしてるんぢやないといふ意味を、奥さんに說明して上げた丈です。天がこんな人間になつて他を厭がらせて遣れと僕に命ずるんだから仕方がないと解釋して頂きたいので、わざ〳〵さう云つたのです。僕には僕に惡い目的がちつともない事をあなたに承認して頂きたいのです。僕自身は始めから無目的だといふ事を知つて置いて頂きたいのです。然し天には目的があるかも知れません。さうして其目的が僕を動かしてゐるかも知れません。それに動かされる事が又僕の本望かも知れません」

小林の筋の運び方は、少し困絡かり過ぎてゐた。お延は彼の論理の間隙を突く丈に頭が練れてゐなかつた。といつて無條件で受け入れて可いか惡いかを見分ける程整つた腦力も有たなかつた。それでゐて彼女は相手の吹き掛ける議論の要點を攫む丈の才氣を充分に具へてゐた。彼女はすぐに小林の主意を一口に纏

めて見せた。

「ぢやあなたは人を厭がらせる事は、いくらでも厭がらせるが、それに對する責任は決して負はないといふんでせう」

「えゝ其所です。其所が僕の要點なんです」

「そんな卑怯な――」

「卑怯ぢやありません。責任のない所に卑怯はありません」

「ありますとも。第一此私があなたに對して何んな惡い事をした覺えがあるんでせう。まあそれから伺ひますから、云つて御覽なさい」

「奥さん、僕は世の中から無籍もの扱ひにされてゐる人間ですよ」

「それが私や津田に何の關係があるんです」

小林は待つてたと云はぬばかりに笑ひ出した。

「あなた方から見たら大方ないでせう。然し僕から見れば、あり過ぎる位あるんです」

「何うして」

小林は急に答へなくなつた。其意味は宿題にして自分でよく考へて見たら可からうと云ふ顔附をした彼は、默つて煙草を吹かし始めた。お延は一層の不快を感じた。もう好い加減に歸つて呉れと云ひたくなつた。同時に小林の意味もよく突き留めて置きたかつた。それを見拔いて、わざと高を括つたやうに落附いてゐる小林の態度がまた癪に障つた。其所へ先刻から心待ちに待ち受けてゐたお時が漸く歸つて來たので、

お延の蟠りは、一定した樣式の下に表現される機會の來ない先に又崩されて仕舞はなければならなかつた。

八十七

お時は緣側へ坐つて外部から障子を開けた。

「只今。大變遲くなりました。電車で病院迄行つて參りましたものですから」

お延は少し腹立たしい顏をしてお時を見た。

「ぢや電話は掛けなかつたのかい」

「いゝえ掛けたんで御座います」

「掛けても通じなかつたのかい」

問答を重ねてゐるうちに、お時の病院へ行つた意味が漸くお延に呑み込めるやうになつて來た。——始め通じなかつた電話は、仕舞に通じる丈は通じても用を辨ずる事が出來なかつた。看護婦を呼び出して用事を取次いで貰はうとしたが、それすらお時の思ふやうにはならなかつた。書生だか藥局員だかが始終相手になつて、何か云ふけれども、それが又ちつとも要領を得なかつた。第一言語が不明瞭であつた。それから判切聞こえる所も辻褄の合はない事だらけだつた。要するに其男はお時の用事を津田に取次いで呉れなかつたらしいので、彼女はとう〳〵諦めて、電話箱を出てしまつた。然し義務を果たさないで其儘宅へ歸るのが厭だつたので、すぐ其足で電車へ乘つて病院へ向つた。

「一旦歸つて、伺つてからにしようかと思ひましたけれども、たゞ時間が長く掛かるぎりで御座います

し、それに御客さまが斯うして待つておいでの事をなまじひ存じて居るもので御座いますから」

お時のいふ事は尤もであつた。お延に禮を云はなければならなかつた。然しそのために、小林から散々厭な思ひをさせられたのだと思ふと、氣を利かした下女が却て恨めしくもあつた。

彼女は立つて茶の間へ入つた。すぐ其所に据ゑられた銅の金具の光る重ね箪笥の一番下の抽斗を開けた。さうして底の方から問題の外套を取り出して來て、それを小林の前へ置いた。

「是でせう」

「えゝ」と云つた小林はすぐ外套を手に取つて、品物を改める古着屋のやうな眼で、それを引つ繰り返した。

「思つたより大分汚れてゐますね」

「あなたにやそれで澤山だ」と云ひたかつたお延は、何も答へずに外套を見詰めた。外套は小林のいふ通り少し色が變つてゐた。襟を返して日に當たらない所を他の部分と比較して見るとそれが著しく目立つた。

「何うせたゞ貰ふんだからさう贅澤も云へませんかね」

「御氣に召さなければ、何うぞ御遠慮なく」

「置いて行けと仰しやるんですか」

「えゝ」

小林は矢つ張り外套を放さなかつた。お延は痛快な氣がした。

「奥さん一寸此所で着て見ても可ござんすか」
「えゝ、えゝ」
お延はわざと反對を答へた。さうして窮屈さうな袖へ、藻掻くやうにして手を通す小林を、坐つたまゝ皮肉な眼で眺めた。
「何うですか」
小林は斯う云ひながら、背中をお延の方に向けた。見苦しい疊の皺が幾筋もお延の眼に入つた。アイロンの注意でもして遣るべき所を、彼女は又逆に行つた。
「丁度好いやうですね」
彼女は誰も自分の傍にゐないので、折角出來上がつた滑稽な後姿を、眼と眼で笑つて遣る事が出來ないのを物足りなく思つた。
すると小林がまたぐるりと向き直つて、外套を着たなり、お延の前にどつさり胡坐をかいた。
「奥さん、人間はいくら變な着物を着て人から笑はれても、生きてゐる方が可いものなんですよ」
「さうですか」
お延は急に口元を締めた。
「奥さんのやうな窮つた事のない方にや、まだ其意味が解らないでせうがね」
「さうですか。私はまた生きてて人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひます」
小林は何も答へなかつた。然し突然云つた。

「難有う。御蔭で此冬も生きてゐられます」
彼は立ち上がつた。お延も立ち上がつた。然し二人が前後して座敷から縁側へ出ようとする時、小林は忽ち振り返つた。
「奥さん、あなたさういふ考へなら、よく氣を附けて他に笑はれないやうにしないと不可ませんよ」

八十八

二人の顔は一尺足らずの距離に接近した。お延が前へ出ようとする途端、小林が後を向いた拍子、二人は其所で急に運動を中止しなければならなかつた。二人はぴたりと止まつた。さうして顔を見合はせた。といふよりも寧ろ眼と眼に見入つた。
其時小林の太い眉が一層際立つてお延の視覺を侵した。下にある黒瞳は凝と彼女の上に据ゑられた儘動かなかつた。それが何を物語つてゐるかは、此方の力で動かして見るより外に途はなかつた。お延は口を切つた。
「餘計な事です。あなたからそんな御注意を受ける必要はありません」
「注意を受ける必要がないのぢやありますまい。大方注意を受ける覺えがないと仰しやる積りなんでせう。そりやあなたは固より立派な貴婦人に違ひないかも知れません。然し――」
「もう澤山です。早く歸つて下さい」
小林は應じなかつた。問答が咫尺の間に起つた。

「然し僕のいふのは津田君の事です」
「津田が何うしたといふんです。わたくしは貴婦人だけれども、津田は紳士でないと仰しやるんですか」
「僕は紳士なんて何んなものか丸で知りません。第一そんな階級が世の中に存在してゐる事を僕は認めてゐないのです」
「認めようと認めまいと、そりやあなたの御随意です。然し津田が何うしたといふんです」
「聞きたいですか」
鋭い稲妻がお延の細い眼からまともに迸つた。
「津田はわたくしの夫です」
「さうです。だから聞きたいでせう」
お延は歯を噛んだ。
「早く帰つて下さい」
「えゝ帰ります。今帰る所です」
小林は斯う云つたなりすぐ向き直つた。玄関の方へ行かうとして縁側を二足ばかりお延から遠ざかつた。
其後姿を見て堪らなくなつたお延は又呼び留めた。
「御待ちなさい」
「何ですか」
小林はのつそり立ち留まつた。さうして裄の長過ぎる古外套を着た両手を前の方に出して、ポンチ繪に

似た自分の姿を鑑賞でもするやうに眺め廻した後で、にや／＼と笑ひながらお延を見た。お延の聲は猶鋭くなつた。

「何故默つて歸るんです」

「御禮は先刻云つた積りですがね」

「外套の事ぢやありません」

小林はわざと空々しい樣子をした。はてなと考へる程度迄進んで見せた。お延は詰責した。

「あなたは私の前で説明する義務があります」

「何をですか」

「津田の事をです。津田は私の夫です。妻の前で夫の人格を傷けるやうな言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗に説明するのは、あなたの義務ぢやありませんか」

「でなければそれを取消す丈の事でせう。僕は義務だの責任だのつて感じの少ない人間だから、あなたの要求通り説明するのは困難かも知れないけれども、同時に恥を恥と思はない男として、一旦云つた事を取り消す位は何でもありません。――おや津田君に對する失言を取消しませう。さうしてあなたに謝りませう。左右したら可いでせう」

お延は默然として答へなかつた。小林は彼女の前に姿勢を正しくした。

「こゝに改めて言明します。津田君は立派な人格を具へた人です。紳士です。（もし社會にさういふ特別な階級が存在するならば）」

お延は依然として下を向いた儘口を利かなかつた。小林は語を續けた。

「僕は先刻奥さんに、人から笑はれないやうによく氣を御附けになつたら可からうといふ注意を與へました。奥さんは僕の注意などを受ける必要がないと云はれました。それで僕も其後を話す事を遠慮しなければならなくなりました。考へると是も僕の失言でした。併せて取消します。其他もし奥さんの氣に障つた事があつたら、總て取消します。みんな僕の失言です」

小林は斯う云つた後で、沓脱に揃へてある自分の靴を穿いた。さうして格子を開けて外へ出る最後に、また振り向いて「奥さんさよなら」と云つた。

微かに默禮を返したぎり、お延は何時迄もぼんやり其所に立つてゐた。それから急に二階の梯子段を馳け上がつて、津田の机の前に坐るや否や、其上に突つ伏してわつと泣き出した。

八十九

幸ひにお時が下から上がつて來なかつたので、お延は憚りなく當座の目的を達する事が出來た。彼女は他に顏を見られずに思ふ存分泣けた。彼女が滿足する迄自分を泣き盡くした時、涙はおのづから乾いた。濡れた手巾を袂へ丸め込んだ彼女は、いきなり机の抽斗を開けた。抽斗は二つ附いてゐた。然しそれを順々に調べた彼女の眼には別段目新しい何物も映らなかつた。それも其筈であつた。彼女は津田が病院へ入る時、彼に入り用の手荷物を纏めるため、二三日前既に其所を搜したのである。彼女は殘された封筒だの、物指だの、會費の受取だのを見て、それを又一々丁寧に揃へた。パナマや麥藁製の色々な帽子が石版

で印刷されてゐる廣告用の小冊子めいたものか、二人で銀座へ買物に行つた初夏の夕暮を思ひ出させた。其時夏帽を買ひに立寄つた店から津田が貰つて歸つた此見本には、眞赤に咲いた日比谷公園の躑躅だの、突き當りに霞ヶ關の見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂はせてゐる高い柳などが、離れにくい過去の匂ひのやうに、聯想として附き纏はつてゐた。お延はそれを開いた儘、しばらく凝と考へ込んだ。それから急に思ひ立つたやうに机の抽斗をがちやりと閉めた。

机の横には同じく直線の多い様式で造られた本箱があつた。其處にも抽斗が二つ附いてゐた。机を棄てたお延は、すぐ本箱の方に向つた。然しそれを開けようとして、手を環に掛けた時、抽斗は雙方とも何の抵抗もなく、する／＼と拔け出したので、お延は中を調べない先に、まづ失望した。手應へのない所に、新しい發見のある筈はなかつた。彼女は書き古したノートブックのやうなものをいたづらに攪き廻した。それを一々讀んで見るのは大變であつた。讀んだ所で自分の知らうと思ふ事が、そんな筆記の底に潜んでゐようとは想像出來なかつた。彼女は用心深い夫の性質をよく承知してゐた。鍵を卸ろさない祕密を其所いらへ放り出して置くには、あまりに細か過ぎるのが彼の持ち前であつた。

お延は戸棚を開けて、錠を掛けたものが何處かにないかといふ眼附をした。けれども中には何もなかつた。上には殺風景な我樂多が、無器用に積み重ねられてゐる丈であつた。下は長持で一杯になつてゐた。

再び机の前に取つて返したお延は、其上に乘せてある狀差の中から、津田宛で來た手紙を拔き取つて、一々調べ出した。彼女はそんな所に、何も怪しいものが落ちてゐる筈がないとは思つた。然し一番最初眼に附きながら、手さへ觸れなかつた幾通の書信は、矢つ張り最後に眼を通すべき性質を帶びて、彼女の注

意を誘ひつゝ、何時迄も其所に殘つてゐたのである。彼女はつい念のためといふ口實の下に、それへ手を出さなければならなくなつた。

　封筒が次から次へと裏返された。中身が順々に繰りひろげられた。或は四半分、或は半分、殘るものは全部、悉くお延によつて默讀された。しかる後彼女はそれを元通りの順で、元通りの位置に復した。突然疑惑の焰が彼女の胸に燃え上がつた。一束の古手紙へ油を濺いで、それを綺麗に庭先で燒き盡くしてゐる津田の姿が、ありありと彼女の眼に映つた。其時めらめらと火に化して舞ひ上る紙片を、津田は恐ろしさうに、竹の棒で抑へ附けてゐた。それは初秋の冷たい風が肌を吹き出した頃の出來事であつた。さうしてある日曜の朝であつた。二人差向ひで食事を濟ましてから、五分と經たないうちに起つた光景であつた。箸を置くと、すぐ二階から細い紐で絡げた包を抱へて下りて來た津田は、急に勝手口から庭先へ廻つたと思ふと、もう其包に火を點けてゐた。お延が縁側へ出た時には、厚い上包が既に焦げて、中にある手紙が少しばかり見えてゐた。お延は津田に何でそれを燒き捨てるのかと訊いた。津田は嵩ばつて始末に困るからだと答へた。何故反故にして、自分達の髪を結ふ時などに使はせないのかと尋ねたら、津田は何とも云はなかつた。たゞ底から現はれて來る手紙を無暗に竹の棒で突つついた。突つつくたびに、火になり切れない濃い煙が渦を卷いて棒の先に起つた。渦は青竹の根を隱すと共に、抑へつけられてゐる手紙をも隱した。津田は煙に咽ぶ顏をお延から背けた。……

　お時が午飯の催促に上がつて來る迄、お延は斯んな事を考へつゞけて作りつけの人形のやうに凝と坐り込んでゐた。

九十

時間はいつか十二時を過ぎてゐた。お延は又お時の給仕で獨り膳に向つた。それは津田の會社へ出た留守に、二人が毎日繰り返す日課に外ならなかつた。けれども今日のお延は何時ものお延ではなかつた。彼女の樣子は剛張つてゐた。其癖心は纏りなく動いてゐた。先刻出掛けようとして着換へた着物迄、平生と違つた餘所行きの氣持を餘分に添へる媒介となつた。

若し今の自分に觸れる問題が、お時の口から洩れなかつたなら、お延は遂に一言も云はずに食事を濟ましてしまつたかも知れなかつた。其食事さへ、實を云ふと、丸で氣が進まなかつたのを、お時に疑はれるのが厭さに、ほんの形式的に片附けようとして、膳に着いた丈であつた。

お時も何だか遠慮でもするやうに、わざと談話を控へてゐた。然しお延が一膳で箸を置いた時、漸く「何うか遊ばしましたか」と訊いた。さうしてたゞ「いゝえ」といふ返事を受けた彼女は、すぐ膳を引いて勝手へ立たなかつた。

「何うも濟みませんでした」

彼女は自分の專斷で病院へ行つた詫びを述べた。お延はお延で又彼女に尋ねたい事があつた。

「先刻は隨分大きな聲を出したでせう。下女部屋の方まで聞こえたかい」

「いゝえ」

お延は疑りの眼をお時の上に注いだ。お時はそれを避けるやうにすぐ云つた。

「あの御客さまは、隨分――」

然しお延は何も答へなかつた。靜かに後を待つてゐる丈なので、お時は自分の方で後を附けなければならなかつた。二人の談話は之が緒口で先へ進んだ。

「旦那樣は驚いていらつしやいました。隨分非道い奴だつて。此方から取りに來いとも何とも云はないのに、斷りもなく奧樣と直談判を始めたり何かして、しかも自分が病院に入つてゐる事をよく承知してゐる癖につて」

お延は輕蔑んだ笑ひを微かに洩らした。然し自分の批評は加へなかつた。

「まだ外に何か仰しやりやしなかつたかい」

「外套丈遣つて早く返せつて仰しやいました。それから奧さんと話しをしてゐるかと御訊きになりますから、話しをしていらつしやいますと申し上げましたら、大變厭な顏をなさいました」

「さうかい。それぎりかい」

「いゝえ、何を話してゐるのかと御訊きになりました」

「それで御前は何と御答へをしたの」

「別に御答へをしやうが御座いませんから、それは存じませんと申し上げました」

「さうしたら」

「さうしたら、猶厭な顏をなさいました。一體座敷なんかへ無暗に上がり込ませるのが間違つてる――」

「そんな事を仰しやつたの。だつて昔からの御友達だもの仕方がないぢやないの」
「だから私もさう申し上げたので御座いました。それに奥さまは丁度御召換へをしていらつしやいましたので、すぐ玄關へ御出になる譯に行かなかつたのだから已むを得ませんて」
「さう。さうしたら」
「さうしたら、御前はもと岡本さんにゐた丈あつて、奥さんの事といふと、何でも熱心に辯護するから感心だつて、冷評されました」
お延は苦笑した。
「何うも御氣の毒さま。それつきり」
「いゝえ、まだ御座います。小林は酒を飲んでやしなかつたかと御訊きになるんです。私はよく氣が附きませんでしたけれども、御正月でもないのに、まさか朝つぱらから醉拂つて、他の家へ御客に入らつしやる方もあるまいと思ひましたから、――」
「醉つちやいらつしやらないと云つたの」
「えゝ」
お延にはまだ後があるだらうといふ樣子を見せた。お時は果して話した其所で切り上げなかつた。
「奥さま、あの旦那樣が、歸つたらよく奥さまに左右云へと仰しやいました」
「なんと」
「あの小林つて奴は何をいふか分らない奴だ、殊に醉ふとあぶない男だ。だから、あいつが何を云つて

も決して取り合つちや不可ない。まあみんな嘘だと思つてゐれば間違ひはないんだからつて」
「さう」
お延は是以上何も云ふ氣にならなかつた。お時は一人でげら／＼笑つた。
「堀の奥さまも傍で笑つていらつしやいました」
お延は始めて津田の妹が今朝病院へ見舞に來てゐた事を知つた。

九十一

お延より一つ年上の其妹は、もう二人の子持ちであつた。長男は既に四年前に生れてゐた。單に母であるといふ事實が、彼女の自覺を呼び醒ますには充分であつた。彼女の心は四年以來何時でも母でない日はたゞの一日もなかつた。
彼女の夫は道樂ものであつた。さうして道樂ものによく見受けられる寛大の氣性を具へてゐた。自分が自由に遊び廻る代りに、細君にも六づかしい顏を見せない、と云つて無暗に可愛がりもしない。是が彼のお秀に對する態度であつた。彼はそれを得意にしてゐた。道樂の修業を積んで始めてさういふ境界に達せられるもののやうに考へてゐた。人生觀といふ嚴しい名を附けて然るべきものを、もし彼が有つてゐるとすれば、それは取りも直さず、物事に生溫く觸れて行く事であつた。微笑して過ぎる事であつた。何にも執着しない事であつた。呑氣に、づぼらに、淡泊に、鷹揚に、善良に、世の中を歩いて行く事であつた。それが彼の所謂通であつた。金に不自由のない彼は、今迄それ丈で押し通して來た。又何處へ行つても不

足を感じなかつた。此好成績が益彼を樂天的にした。誰からでも好かれてゐるといふ自信を有つた彼は、無論お秀からも好かれてゐるに違ひないと思ひ込んでゐた。さうしてそれは間違ひでも何でもなかつた。實際彼はお秀から嫌はれてゐなかつたのである。

器量望みで貰はれたお秀は、堀の所へ片附いてから始めて夫の性質を知つた。放蕩の酒で臟腑を洗濯されたやうな彼の趣も漸く解する事が出來た。斯んなに拘泥の少ない男が、また何の必要があつて、是非自分を貰ひたいなどと、眞面目になつて言ひ出したものだらうかといふ不審さへ、すぐ有耶無耶のうちに葬られてしまつた。お延ほど根強くない彼女は、其意味を覺る前に、もう妻としての興味を夫から離して、母らしい輝いた始めての眼を、新しく生れた子供の上に注がなければならなくなつた。

お秀のお延と違ふ所は是丈ではなかつた。お延の新世帶が夫婦二人ぎりで、家族は雙方とも遠い京都に離れてゐるのに反して、堀には母があつた。弟も妹も同居してゐた。親類の厄介者迄ゐた。自然の勢ひ彼女は夫の事ばかり考へてゐる譯に行かなかつた。中でも母には、他の知らない氣苦勞をしなければならなかつた。

器量望みで貰はれた丈あつて、外側から見たお秀は何時迄經つても若かつた。一つ年下のお延に比べて見ても矢つ張り若かつた。四歳の子持ちとは何うしても考へられない位であつた。けれどもお延と違つた家庭の事情の下に、過去の四五年を費やして來た彼女は、何處かにまたお延と違つた心得を有つてゐた。お延よりも若く見られないとも限らない彼女は、ある意味から云つて、慥かにお延よりも老けてゐた。言語態度が老けてゐるといふよりも、心が老けてゐた。いはば、早く世帶染みたのである。

斯ういふ世帶染みた眼で兄夫婦を眺めなければならないお秀には、常に彼等に對する不滿があつた。其不滿が、何か事さへあると、兎角彼女を京都にゐる父母の味方にしたがつた。彼女はそれでも成るべく兄と衝突する機會を避けるやうにしてゐた。ことに嫂に氣不味い事をいふのは、直接兄に當たるよりも猶惡いと思つて、平生から愼んでゐた。然し腹の中は寧ろ反對であつた。何かいふ兄よりも何も云はないお延の方に、彼女はいつでも餘分の非難を投げ掛けてゐた。兄がもしあれ程派手好きな女と結婚しなかつたならばといふ氣が、始終胸の底にあつた。さうしてそれは身贔屓に過ぎない、お延に氣の毒な批判であるといふ事には、かつて思ひ至らなかつた。

お秀は自分の立場をよく承知してゐる積りでゐた。兄夫婦から烟たがられない迄も決して快く思はれてゐない位の事には、氣が附いてゐた。然し自分の立場を改めようといふ考へは、彼女の頭の何處にも入つて來なかつた。第一には二人が厭がるから猶改めないのであつた。自分の立場を厭がるのが、結局自分を厭がるのと同じ事に歸着してくるので、彼女は其處に反抗の意地を出したくなつたのである。第二には正しいといふ良心が働いてゐた。是はいくら厭がられても兄の爲だと思へば構はないといふ主張であつた。第三は單に派手好きなお延が嫌ひだといふ一點に纏められて仕舞はなければならなかつた。お延より餘裕のある、又お延より贅澤の出來る彼女にして、其點では自分以下のお延が何故氣に喰はないのだらうか。それはお秀にとつて何の問題にもならなかつた。但しお秀には姑があつた。さうしてお延は夫を除けば全く自分自身の主人公であつた。然しお秀は此問題に關聯して此相違すら考へなかつた。

お秀がお延から津田の消息を電話で聞かされて、其翌日病院へ見舞に出掛けたのは、お時の行く小一時

間前、丁度小林が外套を受取らうとして、彼の座敷へ上がり込んだ時分であつた。

九十二

前の晩よく寢られなかつた津田は、其朝看護婦の運んで來て呉れた膳に一寸手を出したぎり、又仰向けになつて、昨夕の不足を取り返すために、重たい眼を閉つてゐた。お秀の入つて來たのは、丁度彼がうと〳〵と半睡狀態に入り掛けた間際だつたので、彼は襖の音ですぐ眼を覺ました。さうして病人に斟酌を加へる積りで、わざとそれを靜かに開けたお秀と顏を見合はせた。

斯ういふ場合に彼等は決して愛嬌を賣り合はなかつた。嬉しさうな表情も見せ合はなかつた。彼等からいふと、それは寧ろ陳腐過ぎる社交上の形式に過ぎなかつた。それから一種の虛僞に近い努力でもあつた。彼等には自分等兄妹でなくては見られない、又自分等以外の他人には通用し惡い默契があつた。何うせ御互に好く思はれよう、好く思はれようと意識して、上部の所作丈を人並に盡くしたところで、今更始まらないんだから、一層下手に騙し合ふ手數を省いて、良心に背かない顏其儘で、面と向き合はうぢやないかといふ無言の相談が、多年の間に何時か成立して仕舞つたのである。さうして其良心に背かない顏といふのは、取りも直さず、愛嬌のない顏といふ事に過ぎなかつた。

第一に彼等は普通の兄妹として親しい間柄であつた。だから遠慮の要らないといふ意味で、不愛嬌な挨拶が苦にならなかつた。第二に彼等は何處かに調子の合はない所を有つてゐた。それが災の元で互の顏を見ると、互に彈き合ひたくなつた。

不圖首を上げて其所にお秀を見出だした津田の眼には、正に斯うした二重の意味から來る不精と不關心があつた。彼は何物をか待ち受けてるやうに、一旦きつと上げた首を又枕の上に橫たへて仕舞つた。お秀は又お秀で、それには一向頓着なく、言葉も掛けずに、そつと室の內に入つて來た。

彼女は何より先にまづ、枕元にある膳を眺めた。膳の上は汚らしかつた。橫倒しに引つ繰り返された牛乳の壜の下に、鷄卵の殼が一つ、其重みで押し潰されて居る傍に、齒痕の附いた燒麵麭が食ひ缺けの儘投げ出されてあつた。しかも外にまだ一枚手を附けないのが綺麗に皿の上に載つてゐた。玉子もまだ一つ殘つてゐた。

「兄さん、こりやもう濟んだの。まだ食べ掛けなの」

實際津田の片附けかたは、何方にでも取れる樣な、だらしのないものであつた。

「もう濟んだんだよ」

お秀は眉をひそめて、膳を階子段の上り口迄運び出した。看護婦の手が隙かなかつたためか、何時迄も兄の枕元に取り散らかされてゐる朝食の殘骸は、掃除の行き屆いた自分の家を今出掛けて來たばかりの彼女に取つて、餘り見つとも好いものではなかつた。

「汚らしい事」

彼女は誰に小言を云ふともなく、たゞ一人斯う云つて元の座に歸つた。然し津田は默つて取り合はなかつた。

「何うして己の此所に居る事が知れたんだい」

「電話で知らせて下すつたんです」
「お延がかい」
「えゝ」
「知らせないでも可いつて云つたのに」
今度はお秀の方が取り合はなかつた。
「すぐ來ようと思つたんですけれども、生憎昨日は少し差支へがあつて――」
お秀はそれぎり後を云はなかつた。結婚後の彼女には、斯ういふ風に物を半分ぎりしか云はない癖が何時の間にか出て來た。場合によると、それが津田には變に受取れた。「嫁に行つた以上、兄さんだつても う他人ですからね」といふ意味に解釋される事が時々あつた。自分達夫婦の間柄を考へて見ても、其所に無理はないのだと思ひ返せない程理窟の徹らない頭を有つた津田では無論なかつた。それどころか、彼は此妹のやうな態度で、お延が外へ對して振舞つて吳れゝば好いがと、暗に希望してゐた位であつた。けれども自分が、お秀にさうした素振を見せられて見ると決して好い氣持はしなかつた。さうして自分こそ絕えずお秀に對してさういふ素振を見せてゐるのにと反省する暇も何もなくなつて仕舞つた。
津田は後を訊かずに思ふ通りを云つた。
「なに今日だつて、忙しい所をわざ〳〵來て吳れるには及ばないんだ。大した病氣ぢやないんだから」
「だつて嫂さんが、もし閑があつたら行つて上げて下さいつて、わざ〳〵電話で仰しやつたから」
「さうかい」

「それにあたし少し兄さんに話したい用があるんですの」
津田は漸く頭をお秀の方へ向けた。

九十三

手術後局部に起る變な感じが彼を襲つて來た。それはガーゼを詰め込んだ創口の周圍にある筋肉が一時に收縮するために起る特殊な心持に過ぎなかつたけれども、一旦始まつたが最後、恰も呼吸か脈搏のやうに、規則正しく進行して已まない種類のものであつた。

彼は一昨日の午後始めて第一の收縮を感じた。芝居へ行く許諾を彼から得たお延が、階子段を下へ降りて行つた拍子に起つた此經驗は、彼に取つて全然新しいものではなかつた。此前療治を受けた時、既に同じ現象の發見者であつた彼は、思はず「又始まつたな」と心の中で叫んだ。すると苦い記憶をわざと彼の爲に繰り返して見せるやうに、收縮が規則正しく進行し出した。最初に肉が縮む、詰め込んだガーゼで荒々しく其肉を擦られた氣持がする、次にそれが段々緩和されて來る、やがて自然の狀態に戻らうとする、途端に一度引いた浪が又磯へ打ち上げるやうな勢ひで、收縮感が猛烈に振り返してくる。すると彼の意志は其局部に對して全く平生の命令權を失つてしまふ。止めさせようと焦慮れば焦慮る程、筋肉の方で猶云ふ事を聞かなくなる。――是が過程であつた。

津田は此變な感じとお延との間に何んな連絡があるか知らなかつた。彼は籠の中の鳥見たやうに彼女を取扱ふのが氣の毒になつた。何時迄も彼女を自分の傍に引き附けて置くのを男らしくないと考へた。それ

で快く彼女を自由な空氣の中に放して遣つた。然し彼女が彼の好意を感謝して、彼の病床を去るや否や、急に自分丈一人取り殘されたやうな氣がし出した。彼は物足りない耳を傾けて、お延の下へ降りて行く足音を聞いた。彼女が玄關の扉を開ける時、烈しく鳴らした號鈴の音さへ彼には餘り無遠慮過ぎた。彼が局部から受ける厭な筋肉の感じは丁度此時に再發したのである。彼はそれを一種の刺激に歸した。さうして其刺激は過敏にされた神經の御蔭に外ならないと考へた。ではお延の行爲が彼の神經をそれ程過敏にしたのだらうか。お延の所作に對して突然不快を感じ出した彼も、其所迄は論斷する事が出來なかつた。然し全く偶然の暗合でない事も、彼に云はせると、自明の理であつた。彼は自分丈の料簡で、二つの間にある關係を拵へた。同時に其關係を後から、お延に云つて聞かせて遣りたくなつた。單に彼女を氣の毒がらせるために、病氣で寢てゐる夫を捨てて、一日の歡樂に走つた結果の惡かつた事を、彼女に後悔させるために。けれども彼はそれを適當に云ひ現はす言葉を知らなかつた。たとひ云ひ現はしても彼女に通じない事は慥かであつた。通じるにしても、自分の思ひ通りに感じさせる事は六づかしかつた。彼は默つて心持を惡くしてゐるより外に仕方がなかつた。

　お秀の方を向き直つた咄嗟に、又感じ始めた局部の收縮が、すぐ津田に是丈の顚末を思ひ起させた。彼は苦い顏をした。

　何も知らないお秀にそんな細かい意味の分る筈はなかつた。彼女はそれを兄が何時でも自分に丈して見せる例の表情に過ぎないと解釋した。

「御厭なら病院を御出になつてから後にしませうか」

別に同情のある態度も示さなかつた彼女は、それでも幾分か斟酌しなければならなかつた。
「何處か痛いの」
津田はたゞ首肯いて見せた。お秀はしばらく默つて彼の樣子を見てゐた。同時に津田の局部で收縮が規則正しく繰り返され始めた。沈默が二人の間に續いた。其沈默の續いてゐる間彼は苦い顏を改めなかつた。
「そんなに痛くつちや困るのね。嫂さんは何うしたんでせう。昨日の電話ぢや痛みも何もないやうな御話しだつたのにね」
「お延は知らないんだ」
「ぢや嫂さんが歸つてから後で痛み始めたの」
「なに本當はお延の御蔭で痛み始めたんだ」とも云へなかつた津田は、此時急に自分が自分に駄々つ子らしく見えて來た。上部は兎に角、腹の中が如何にも兒らしくないのが恥づかしくなつた。
「一體御前の用といふのは何だい」
「なに、そんなに痛い時に話さなくつても可いのよ。又にしませう」
津田は優に自分を僞る事が出來た。しかし其時の彼は僞るのが厭であつた。彼はもう局部の感じを忘れてゐた。收縮は忘れゝば已み、已めば忘れるのを其特色にしてゐた。
「構はないから御話しよ」
「何うせあたしの話しだから碌な事ぢやないのよ。可くつて」
津田にも大よその見當は附いてゐた。

九十四

「またあの事だらう」
津田はしばらく間を置いて、仕方なしに斯う云つた。然し其時の彼はもう例の通り聽きたくもないといふ顏附に返つてゐた。お秀は心で此矛盾を腹立たしく感じた。
「だからあたしの方ぢや先刻から用は今度の次にしようかと云つてるんぢやありませんか。それを兄さんがわざ／＼催促するやうに仰しやるから、つい御話しする氣にもなるんですわ」
「だから遠慮なく話したら可いぢやないか。どうせ御前は其積りで來たんだらう」
「だつて、兄さんがそんな厭な顏をなさるんですもの」
お秀は少なくとも兄に對してなら厭な顏位で會釋を加へる女ではなかつた。從つて津田も氣の毒になる筈がなかつた。却て妹の癖に餘計な所で自分を非難する奴だ位に考へた。彼は取り合はずに先へ通り過した。
「また京都から何か云つて來たのかい」
「えゝまあそんな所よ」
津田の所へは父の方から、お秀の許へは母の側から、京都の消息が重に傳へられる事に略極まつてゐたので、彼は文通の主を改めて聞く必要を認めなかつた。然し目下の境遇から云つて、お秀の母から受取つたといふ手紙の中味にはまた冷淡であり得る筈がなかつた。二度目の請求を京都へ出してから以後の彼は、

絶えず送金の有無を心のうちで氣遣つてゐたのである。兄妹の間に「あの事」として通用する事件は、成るべく聞くまいと用心しても、月末の仕拂や病院の入費の出所に多大の利害を感じない譯に行かなかつた津田は、また此二つのものが互に困絡かつて離す事の出來ない事情の下にある意味合を、お秀よりもよく承知してゐた。彼は何うしても積極的に自分から押して出なければならなかつた。

「何と云つて來たい」

「兄さんの方へも御父さんから何か云つて來たでせう」

「うん云つて來た。そりや話さないでも大抵御前に解つてるだらう」

お秀は解つてるともゐないとも答へなかつた。たゞ微かに薄笑ひの影を締りの好い口元に寄せて見せた。それが如何にも兄に打ち勝つた得意の色をほのめかすやうに見えるのが津田には癪だつた。平生は單に妹であるといふ因縁づくで、少しも自分の眼に附かないお秀の器量が、斯う云ふ時に限つて、惡く彼を刺激した。なまじひ容色が十人並以上なので、此女は餘計他の感情を害するのではなからうかと思ふ疑惑さへ、彼に取つては一度や二度の經驗ではなかつた。「御前は器量望みで貰はれたのを、生涯自慢にする氣なんだらう」と云つて遣りたい事も屢あつた。

お秀はやがてきちりと整つた眼鼻を揃へて兄に向つた。

「それで兄さんは何うなすつたの」

「何うも仕樣がないぢやないか」

「御父さんの方へは何も云つて御上げにならなかつたの」

津田はしばらく默つてゐた。それから左も已むを得ないといつた風に答へた。

「云つて遣つたさ」

「さうしたら」

「さうしたら、まだ何とも返事がないんだ。尤も宅へはもう來てゐるかも知れないが、何しろお延が來て見なければ、其所も分らない」

「然し御父さんが何んな御返事を御寄こしになるか、兄さんには見當が附いて」

津田は何とも答へなかつた。お延の拵へて呉れた縕袍の襟を手探りに探つて、黑八丈の下から拔き取つた小楊枝で、頻りに前齒をほじくり始めた。彼が何時迄も默つてゐるので、お秀は同じ意味の質問を外の言葉で掛け直した。

「兄さんは御父さんが快く送金をして下さると思つていらつしやるの」

「知らないよ」

津田はぶつきら棒に答へた。さうして腹立たしさうに後を附け加へた。

「だから御母さんは御前の所へ何と云つて來たかつて先刻から訊いてるぢやないか」

お秀はわざと眼を反らして緣側の方を見た。それは彼の前であゝ、あゝと嘆息して見せる所作の代りに過ぎなかつた。

「だから云はない事ぢやないのよ。あたし始めから斯うなるだらうと思つてたんですもの」

九十五

津田は漸くお秀宛で來た母の手紙の中に、何んな事柄が書いてあるかを聞いた。妹の口から傳へられた其内容によると、父の怒りは彼の豫期以上に烈しいものであつた。月末の不足を自分で才覺するなら格別、もしそれさへ出來ないといふなら、是から先の送金も、見せしめのため、當分見合はせるかも知れないといふのが父の實際の考へらしかつた。して見ると、此間彼の所へさう云つて來た垣根の繕ひだとか家賃の滯りだとかいふのは噓でなければならなかつた。よし噓でないにした所で、單に口先の云ひ前と思はなければならなかつた。父がまた何で彼に對してそんなしら〴〵しい他人行儀を云つて寄こしたものだらう。叱るならもつと男らしく叱つたら宜ささうなものだのに。

彼は沈吟して考へた。山羊髯を生やして、萬事に勿體を附けたがる父の顏、意味もないのに束髮を嫌つて髷にばかり結ひたがる母の頭、その位の特色は此場合を解釋する何の手掛りにもならなかつた。

「一體兄さんが約束通りになさらないから惡いのよ」とお秀が云つた。事件以後何度となく彼女によつて繰り返される此言葉ほど、津田の聞きたくないものはなかつた。約束通りにしないのが惡い位は、妹に教はらないでも、よく解つてゐた。彼はたゞ其必要を認めなかつた丈なのである。さうして其立場を他からも認めて貰ひたかつたのである。

「だつてそりや無理だわ」とお秀が云つた。「いくら親子だつて約束は約束ですもの。それに御父さんと兄さんと丈の事なら、何うでも可いでせうけれども」

お秀には自分の良人の堀がそれに關係してゐるといふ事が一番重要な問題であつた。

「良人でも困るのよ。あんな手紙を御母さんから寄こされると」

學校を卒業して、相當の職にありついて、新しく家庭を構へた以上、曲りなりにも親の厄介にならずに、獨立した生計を營んで行かなければならないといふ父の意見を翻させたものは堀の力であつた。津田から頼まれて、また無雜作にそれを引き受けた堀は、物價の騰貴、交際の必要、時代の變化、東京と地方との區別、色々都合の好い材料を勝手に並べ立てて、勤儉一方の父を口說き落したのである。其代り盆暮に津田の手に渡る賞與の大部分を割いて、月々の補助を一度に幾分か償却させるといふ方針を立てたのも彼であつた。其案の成立と共に責任の出來た彼は又至極呑氣な男であつた。約束の履行などといふ事は、最初から深く考へなかつたのみならず、遂行の時期が來た時分には、もうそれを忘れてゐた。詰責に近い手紙を津田の父から受取つた彼は、殆ど此事件を念頭に置いてゐなかつた丈に、驚かされた。然し現金の綺麗に消費されてしまつた後で、氣が附いた所で、何うする譯にも行かなかつた。樂天的な彼はたゞ申し譯の返事を書いて、それを終了と心得てゐた。所が世間は自分のづぼらに適當するやうに出來上がつてゐないといふ事を、彼は津田の父から教へられなければならなかつた。津田の父は何時迄經つても彼を責任者扱ひにした。

同時に津田の財力には不相應と見える位な立派な指輪がお延の指に輝き始めた。さうして始めにそれを見付け出したものはお秀であつた。女同志の好奇心が彼女の神經を鋭敏にした。彼女はお延の指輪を賞めた。賞めた序にそれを買つた時と所とを突き留めようとした。堀が保證して成立した津田と父との約束を

丸で知らなかつたお延は、平生の用心にも似ず、其點にかけて全く無邪氣であつた。自分が何の位津田に愛されてゐるかを、お秀に示さうとする努力が、凡ての顧慮に打ち勝つた。彼女は有りの儘をお秀に物語つた。

不斷から派手過ぎる女としてお延を多少惡く見てゐたお秀は、すぐ其顚末を京都へ報告した。しかもお延が盆暮の約束を承知してゐる癖に、わざと夫を唆して、返される金を返さないやうにさせたのだといふ風な手紙の書き方をした。津田が自分の細君に對する虛榮心から、內狀をお延に打ち明けなかつたのを、お秀はお延自身の虛榮心ででもあるやうに、頭から極めてかゝつたのである。さうして自分の誤解を其儘京都へ傳へてしまつたのである。今でも彼女は其誤解から逃れる事が出來なかつた。從つて此事件に關係していふと、彼女の相手は兄の津田よりも寧ろ嫂のお延だと云つた方が適切かも知れなかつた。

「一體嫂さんは何ういふ積りでいらつしやるんでせう。こんだの事に就いて」

「お延に何も關係なんかありやしないぢやないか。あいつにや何も話しやしないんだもの」

「さう。ぢや嫂さんが一番氣樂で可いわね」

お秀は皮肉な微笑を見せた。津田の頭には、芝居に行く前の晚、これを質にでも入れようかと云つて、ぴか〳〵する厚い帶を電燈の光に差し突けたお延の姿が、鮮やかに見えた。

九十六

「一體何うしたら可いんでせう」

お秀の言葉は不謹愼な兄を困らせる意味にも取れるし、又自分の當惑を洩らす表現にもなつた。彼女には夫の手前といふものがあつた。夫よりも猶遠慮勝ちな姑さへ其奧には控へてゐた。

「そりや良人だつて兄さんに頼まれて、口は利いたやうなもの丶、其所迄責任を有つ積りでもなかつたんでせうからね。と云つて、何もあれは無責任だと今更御斷りをする氣でもないでせうけれども。兎に角萬一の場合には斯う致しますからつて證文を入れた譯でもないんだから、さう御父さんの樣に、法律づくめに解釋されたつて、あたしが良人へ對して困る丈だわ」

津田は少なくとも表面上妹の立場を認めるより外に道がなかつた。然し腹の中では彼女に對して氣の毒だといふ料簡が何處にも起らないので、彼の態度は自然お秀に反響して來た。彼女は自分の前に甚だ横着な兄を見た。其兄は自分の便利より外に殆ど何も考へてゐなかつた。もし考へてゐるとすれば新しく貰つた細君の事丈であつた。さうして彼は其細君に甘くなつてゐた。寧ろ自由にされてゐた。細君を滿足させるために、外部に對しては、前よりは一層手前勝手にならなければならなかつた。

兄を斯う見てゐる彼女は、津田に云はせると、最も同情に乏しい妹らしからざる態度を取つて兄に向つた。それを遠慮のない言葉で云ひ現はすと、「兄さんの困るのは自業自得だから仕樣がないけれども、あたしの方の始末は何う附けて呉れるのですか」といふやうな露骨千萬なものになつた。

津田は何うするとも云はなかつた。又何うする氣もなかつた。却て想像に困難なものとして父の料簡を、お秀の前に問題とした。

「一體御父さんこそ何ういふ積りなんだらう。突然金を送らないとさへ宣告すれば、由雄は工面するに

違ひないとでも思つてゐるのか知ら」

「其所なのよ、兄さん」

お秀は意味ありげに津田の顔を見た。さうして又附け加へた。

「だからあたしが良人に對して困るつて云ふのよ」

微かな暗示が津田の頭に閃めいた。秋口に見る稻妻のやうに、それは遠いものであつた。けれども鋭いものに違ひなかつた。それは父の品性に關係してゐた。今迄全く氣が附かずにゐたといふ意味で遠いといふ事も云へる代りに、一旦氣が附いた以上、父の平生から推して、それを是認したくなるといふ點では、子としての津田に、隨分鋭く切り込んで來る性質のものであつた。心のうちで劈頭に「まさか」と叫んだ彼は、次の瞬間に「ことによると」と云ひ直さなければならなくなつた。

臆斷の鏡によつて照らし出された、父の心理狀態は、下のやうな順序で、豫期通りの結果に到着すべく仕組まれてゐた。――最初に體よく送金を拒絶する。津田が困る。今迄の行き掛り上堀に譯を話す。京都に對して責任を感ずべく餘儀なくされてゐる堀は、津田の窮を救ふ事によつて、始めて父に對する保證の義務を果たす事が出來る。それで否應なしに例月分を立替へて呉れる。父はたゞ禮を云つて濟ましてゐる。斯う段落を附けて考へて見ると、そこには或種の用心があつた。相當な理窟もあつた。或程度の手腕は無論認められた。同時に何等の淡泊さがそこには存在してゐなかつた。下劣と迄行かないでも、狐臭い狡猾な所も少しはあつた。少額の金に對する度外れの執着心が殊更に目立つて見えた。要するに凡てが父らしく出來てゐた。

外の點で何う衝突しようとも、父の斯うした遣り口に感心しないのは、津田と雖もお秀に讓らなかつた。有らゆる意味で父の同情者でありながら、此一點になると、流石のお秀も津田と同じやうに眉を顰めなければならなかつた。父の品性。それは寧ろ別問題であつた。津田はお秀の補助を受ける事を快く思はなかつた。お秀は又兄夫婦に對して好い感情を有つてゐなかつた。其上夫や姑への義理もつらく考へさせられた。二人はまづ實際問題を何う片附けて可いかに苦しんだ。其癖口では雙方とも底の底迄突き込んで行く勇氣がなかつた。互の忖度から成り立つた父の料簡は、たゞ會話の上で默認し合ふ程度に發展した丈であつた。

九十七

感情と理窟の縺れ合つた所を解しながら前へ進む事の出來なかつた彼等は、何處迄もうね〳〵歩いた。局所に觸るやうな又觸らないやうな雙方の態度が、心のうちで雙方を焦烈たくした。然し彼等は兄妹であつた。二人共ねち〳〵した性質を共通に具へてゐた。相手の淡泊しない所を暗に非難しながらも、自分の方から爆發するやうな不體裁は演じなかつた。たゞ津田は兄丈に、又男丈に、話しを一點に括る手際をお秀より餘計に有つてゐた。

「つまり御前は兄さんに對して同情がないと云ふんだらう」

「左右ぢやないわ」

「でなければお延に同情がないといふんだらう。そいつはまあ何方にしたつて同じ事だがね」

「あら、嫂さんの事をあたし何とも云つてやしませんわ」
「要するに此事件に就いて一番惡いものは己だと、結局斯うなるんだらう。そりや今更說明を伺はなくつてもよく兄さんには解つてる。だから好いよ。兄さんは甘んじて其罰を受けるから。今月は御父さんから御金を貰はないで生きて行くよ」
「兄さんにそんな事が出來て」
お秀の兄を冷笑るやうな調子が、すぐ津田の次の言葉を喚び起した。
「出來なければ死ぬ迄の事さ」
お秀は遂にきりゝと緊まつた口元を少し緩めて、白い齒を微かに見せた。津田の頭には、電燈の下で光る厚帶を弄くつてゐるお延の姿が、再び現はれた。
「いつそ今迄の經濟事情を殘らずお延に打ち明けてしまはうか」
津田に取つてそれ程容易い解決法はなかつた。然し行き掛りから云ふと、是程また困難な自白はなかつた。彼はお延の虛榮心をよく知り拔いてゐた。それに出來る丈の滿足を與へる事が、また取りも直さず彼の虛榮心に外ならなかつた。お延の自分に對する信用を、女に大切な其一角に於て突き崩すのは、自分で自分に打撲傷を與へるやうなものであつた。お延に氣の毒だからといふ意味よりも、細君の前で自分の器量を下げなければならないといふのが彼の大きな苦痛になつた。其位の事をと他から笑はれるやうな斯んな小さな場合ですら、彼はすぐ動く氣になれなかつた。家には現に金がある。お延に對して自己の體面を保つには有り餘る程の金がある。のにといふ勝手な事實の方が何うしても先に立つた。

其上彼は何んな時にでもむかつ腹を立てる男ではなかつた。己を忘れるといふ事を非常に安つぽく見る彼は、また容易に己を忘れる事の出來ない性質に父母から生み附けられてゐた。

「出來なければ死ぬ迄さ」と放り出すやうに云つた後で、彼はまだお秀の樣子を窺つてゐた。腹の中に言葉通りの斷乎たる何物も出て來ないのが恥づかしいとも何とも思へなかつた。彼は寧ろ冷やかに胸の天秤を働かし始めた。彼はお延に事情を打ち明ける苦痛と、お秀から補助を受ける不愉快とを商量した。さうして一層二つのうちで後の方を冒したら何んなものだらうかと考へた。それに應ずる力を充分有つてゐたお秀は、第一兄の心から後悔してゐないのを慊らなく思つた。兄の後に御本尊のお延が澄まして控へてゐるのを惡んだ。夫の堀を此事件の責任者でもあるやうに見做して、京都の父が遠廻しに持ち掛けて來るのが如何にも業腹であつた。そんなこんなの蟠りから、津田の意志が充分見え透いて來た後でも、彼女は容易に自分の方で積極的な好意を示す事を敢てしなかつた。

同時に、器量望みで比較的富裕な家に嫁に行つたお秀に對する津田の態度も、また一種の自尊心に充ちてゐた。彼は成上りものに近いある臭味を結婚後の此妹に見出だした。或は見出だしたと思つた。何時か兄といふ嚴めしい具足を着けて彼女に對するやうな氣分に支配され始めた。だから彼と雖も妄りにお秀の前に頭を下げる譯には行かなかつた。

二人はそれで何方からも金の事を云ひ出さなかつた。さうして兩方共兩方で云ひ出すのを待つてゐた。其煮え切らない不徹底な内輪話の最中に、突然下女のお時が飛び込んで來て、二人の拵へ掛けてゐた局面を、一度に崩してしまつたのである。

九十八

然しお時のぢかに來る前に、津田へ電話の掛かつて來た事も慥かであつた。彼は階子段の途中で藥局生の面倒臭さうに取り次ぐ「津田さん電話ですよ」といふ聲を聞いた。彼はお秀との對話を一寸已めて、「何處からです」と訊き返した。藥局生は下りながら、「大方御宅からでせう」と云つた。冷淡な此挨拶が、つい込み入つた話しに身を入れ過ぎた津田の心を横着にした。芝居へ行つたぎり、昨日も今日も姿を見せないお延の仕うちを暗に快く思つてゐなかつた彼を猶不愉快にした。

「電話で釣るんだ」

彼はすぐ斯う思つた。昨日の朝も掛け、今日の朝も掛け、ことによると明日の朝も電話だけ掛けて置いて、散々人の心を自分の方に惹き着けた後で、ひよつくり本當の顔を出すのが手だらうと鑑定した。お延の彼に對する平生の素振から推して見ると、此類測に滿更な無理はなかつた。彼は不用意の際に、突然としてしかも靜肅に自分を驚かしに這入つて來るお延の笑顏さへ想像した。その笑顏が又變に彼の心に影響して來る事も彼にはよく解つてゐた。彼女は一刹那に閃めかす其鋭い武器の力で、何時でも卽座に彼を征服した。今迄持ち應へに持ち應へ抜いた心機をひらりと轉換させられる彼から云へば、見す〳〵彼女の術中に落ち込むやうなものであつた。

彼はお秀の注意にも拘らず、電話を其儘にして置いた。

「なに何うせ用ぢやないんだ。構はないよ。放つて置け」

此挨拶が又お秀には丸で意外であつた。第一はづぼらを忌む兄の性質に釣り合はなかつた。第二には何でもお延の云ひなり次第になつてゐる兄の態度でなかつた。彼女は兄が自分の手前を憚つて、不斷の甘い所を押し隱すために、わざと嫂に對して無頓着を粧ふのだと解釋した。心のうちで多少それを小氣味よく感じた彼女も、下から電話の催促をする藥局生の大きな聲を聞いた時には、それでも兄の代りに立ち上がらない譯に行かなかつた。彼女はわざ〳〵下迄降りて行つた。然しそれは何の役にも立たなかつた。藥局生が好い加減にあしらつて、荒らし拔いた後の受話器はもう不通になつてゐた。

形式的に義務を濟ました彼女が元の座に歸つて、再び二人に共通な話題の緒口を取り上げた時、一方では急き込んだお時が、とう〳〵我慢し切れなくなつて自働電話を棄てて電車に乘つたのである。それから十五分と經たないうちに、津田は又豫想外な彼女の口から豫想外な用事を聞かされて驚いたのである。

お時の歸つた後の彼の心は容易に元へ戻らなかつた。小林の性格はよく知り拔いてゐるといふ自信はありながら、不意に自分の留守宅に押し掛けて來て、それ程懇意でもないお延を相手に、話し込まうとも思はなかつた彼は、驚かざるを得ないのみならず、又考へざるを得なかつた。それは外套を遣る遣らないの問題ではなかつた。問題は、外套とは丸で縁のない、しかし他の外套を、平氣でよく知りもしない細君の手からぢかに貰ひ受けに行くやうな彼の性格であつた。もしくは彼の境遇が必然的に生み出した彼の第二の性格であつた。もう一歩押して行くと、其性格がお延に向つて何う働き掛けるかが彼の問題であつた。其所には突飛があつた。自暴があつた。滿足の人間を常に不滿足さうに眺める白い眼があつた。新しく結婚した彼等二人は、彼の接觸し得る滿足した人間のうちで、得意な代表者として彼から選擇される恐れが

あつた。平生から彼を輕蔑する事に於て、何の容赦も加へなかつた津田には、又さういふ素地を作つて置いた自覺が充分あつた。

「何をいふか分らない」

津田の心には突然一種の恐怖が湧いた。お秀はまた反對に笑ひ出した。何時迄も其小林といふ男を何とか彼とか批評したがる兄の意味さへ彼女には殆ど通じなかつた。

「何を云つたつて、構はないぢやありませんか、小林さんなんか。あんな人のいふ事なんぞ、誰も本氣にするものはありやしないわ」

お秀も小林の一面をよく知つてゐた。然しそれは多く彼が藤井の叔父の前で出す一面丈に限られてゐた。さうして其一面は酒を呑んだ時抔とは、生れ變つたやうに打つて違つた穩やかな一面であつた。

「左右でないよ、中々」

「近頃そんなに人が惡くなつたの。あの人が」

お秀は矢つ張り信じられないといふ顔附をした。

「だつて燐寸一本だつて、大きな家を燒かうと思へば、燒く事も出來るぢやないか」

「其代り火が移らなければそれ迄でせう、幾箱燐寸を抱へ込んでゐたつて。嫂さんはあんな人に火を附けられるやうな女ぢやありませんよ。それとも……」

九十九

津田はお秀の口から出た下半句を聞いた時、わざと眼を動かさなかつた。餘所を向いた儘、凝と其後を待つてゐた。然し彼の聴かうとする其後は遂に出て來なかつた。お秀は彼の氣になりさうな事を半分云つたぎりで、すぐ句を改めてしまつた。

「何だつて兄さんは又今日に限つて、そんな詰らない事を心配していらつしやるの。何か特別な事情でもあるの」

津田は矢張り元の所へ眼を附けてゐた。それは成る可く妹に自分の心を氣取られないためであつた。眼の色を彼女に讀まれないためであつた。さうして現に其不自然な所作から來る影響を受けてゐた。彼は何となく臆病な感じがした。彼は漸くお秀の方を向いた。

「別に心配もしてゐないがね」

「たゞ氣になるの」

此調子で押して行くと彼はたゞお秀から冷笑されるやうなものであつた。彼はすぐ口を閉ぢた。同時に先刻から催してゐた收縮感が又彼の局部に起つた。彼は二三度それを不愉快に經驗した後で、或は今度も規則正しく一定の時間中繰り返さなければならないのかといふ懸念に制せられた。

そんな事に氣の附かないお秀は、何故だか同じ問題を何時迄も放さなかつた。彼女は一旦緒口を失つた其問題を、すぐ別の形で彼の前に現はして來た。

「兄さんは一體嫂さんを何んな人だと思つていらつしやるの」

「何故改まつて今頃そんな質問を掛けるんだい。馬鹿らしい」

「そんなら可いわ、伺はないでも」
「然し何故訊くんだよ。其譯を話したら可いぢやないか」
「一寸必要があつたから伺つたんです」
「だから其必要を御云ひな」
「必要は兄さんのためよ」
津田は變な顏をした。お秀はすぐ後を云つた。
「だつて兄さんが餘り小林さんの事を氣になさるからよ。何だか變ぢやありませんか」
「そりや御前にや解らない事なんだ」
「どうせ解らないから變なんでせうよ。ぢや一體小林さんが何んな事を何んな風に嫂さんに持ち掛けるつて云ふの」
「持ち掛けるとも何とも云つてゐやしないぢやないか」
「持ち掛ける恐れがあるといふ意味です。云ひ直せば」
津田は答へなかつた。お秀は穴の開くやうに其顏を見た。
「丸で想像が附かないぢやありませんか。たとへばいくらあの人が人が惡くなつたにした所で何も云ひやうがないでせう。一寸考へて見ても」
津田はまだ答へなかつた。お秀は何うしても津田の答へる所迄行かうとした。
「よしんば、あの人が何か云ふにした所で、嫂さんさへ取り合はなければそれ迄ぢやありませんか」

「そりや聞かないでも解つてるよ」

「だからあたしが何ふんです。兄さんは一體嫂さんを何う思つていらつしやるかつて。兄さんは嫂さんを信用していらつしやるんですか、いらつしやらないんですか」

お秀は急に疊みかけて來た。津田には其意味がよく解らなかつた。然し其所に相手の拍子を拔く必要があつたので、彼は判然した返事を避けて、わざと笑ひ出さなければならなかつた。

「大變な權幕だね。丸で詰問でも受けてる樣ぢやないか」

「胡魔化さないで、ちやんとした所を仰しやい」

「云へば何うするといふんだい」

「私はあなたの妹です」

「それが何うしたといふのかね」

「兄さんは淡泊でないから駄目よ」

津田は不思議さうに首を傾けた。

「何だか話しが大變六づかしくなつて來たやうだが、御前少し痛違ひをしてるるんぢやないかい。僕はそんな深い意味で小林の事を云ひ出したんでも何でもないよ。たゞ彼奴は僕の留守にお延に會つて何をいふか分らない困つた男だといふ丈なんだよ」

「たゞそれ丈なの」

「うんそれ丈だ」

お秀は急に的の外れたやうな樣子をした。けれども默つてはゐなかつた。
「だけど兄さん、もし堀のゐない留守に誰かあたしの所へ來て何か云ふとするでせう。それを堀が知つて心配すると思つていらつしつて」
「堀さんの事は僕にや分らないよ。御前は心配しないと斷言する氣かも知れないがね」
「えゝ斷言します」
「結構だよ。――それで？」
「あたしの方もそれだけよ」
二人は默らなければならなかつた。

百

然し二人はもう因果づけられてゐた。何うしても或物を或所迄、會話の手段で、互の胸から敲き出さなければ承知が出來なかつた。ことに津田には目前の必要があつた。當座に逼る金の工面、彼は今其財源を自分の前に控へてゐた。さうして一度取り逃せば、それは永久彼の手に戻つて來さうもなかつた。勢ひ彼は其點だけでもお秀に對する弱者の形勢に陷つてゐた。彼は失はれた話頭を、何んな風にして取り返したものだらうと考へた。
「お秀病院で飯を食つて行かないか」
時間が丁度こんな愛嬌をいふに適してゐた。ことに今朝母と子供を連れて横濱の親類へ行つたといふ堀

の家族は留守なので、彼は此愛嬌に特別な意味を有たせる便宜もあつた。

「何うせ家へ歸つたつて用はないんだらう」

お秀は津田のいふ通りにした。話しは容易く二人の間に復活する事が出來た。然しそれは單に兄妹らしい話しに過ぎなかつた。さうして單に兄妹らしい話しは此場合彼等に取つて些とも腹の足しにならなかつた。彼等はもつと相手の胸の中へ潛り込まうとして機會を待つた。

「兄さん、あたし此所に持つてゐますよ」

「何を」

「兄さんの入り用のものを」

「左右かい」

津田は殆ど取り合はなかつた。其冷淡さは正に彼の自尊心に比例してゐた。彼は精神的にも形式的にも此妹に頭を下げたくなかつた。然し金は取りたかつた。お秀はまた金は何うでも可かつた。然し兄に頭を下げさせたかつた。勢ひ兄の欲しがる金を餌にして、自分の目的を達しなければならなかつた。結果は何うしても兄を焦らす事に歸着した。

「上げませうか」

「ふん」

「御父さんは何うしたつて下さりつこありませんよ」

「ことによると、呉れないかも知れないね」

「だつて御母さんが、あたしの所へちやんと左右云つて來ていらつしやるんですもの。今日其手紙を持つて來て、御目に懸けようと思つて、つい忘れてしまつたんですけれども」

「そりや知つてるよ。先刻もう御前から聞いたぢやないか」

「だからよ。あたしが持つて來たつて云ふのよ」

「僕を焦らすためにかい、又は僕に呉れるためにかい」

お秀は打たれた人のやうに突然默つた。さうして見る〳〵うちに、美しい眼の底に涙を一杯溜めた。津田にはそれが口惜し涙としか思へなかつた。

「どうして兄さんは此頃そんなに皮肉になつたんでせう。何うして昔のやうに人の誠を受け入れて下さる事が出來ないんでせう」

「兄さんは昔とちつとも違つてやしないよ。近頃御前の方が違つて來たんだよ」

今度は呆れた表情がお秀の顏にあらはれた。

「あたしが何時何んな風に變つたと仰しやるの。云つて下さい」

「そんな事は他に訊かなくつても、よく考へて御覽、自分で解る事だから」

「いゝえ、解りません。だから云つて下さい。どうぞ云つて聞かして下さい」

津田は寧ろ冷やかな眼をして、鋭く切り込んで來るお秀の樣子を眺めてゐた。此所迄來ても、彼には相手の機嫌を取り返した方が得か、又はくしやりと一度に押し潰した方が得かといふ利害心が働いてゐた。其中間を行かうと決心した彼は徐ろに口を開いた。

「お秀、御前にや解らないかも知れないがね、兄さんから見ると、御前は堀さんの所へ行つてつから以來、大分變つたよ」

「そりや變る筈ですわ、女が嫁に行つて子供が二人も出來れば誰だつて變るぢやありませんか」

「だからそれで可いよ」

「けれども兄さんに對して、あたしが何んなに變つたと仰しやるんです。そこを聞かして下さい」

「そりや……」

津田は全部を答へなかつた。けれども答へられないのではないといふ事を、語勢からお秀に解るやうにした。お秀は少し間を置いた。それからすぐ押し返した。

「兄さんの御腹の中には、あたしが京都へ告げ口をしたといふ事が始終あるんでせう」

「そんな事は何うでも可いよ」

「いゝえ、それで屹度あたしを眼の敵にして入らつしやるんです」

「誰が」

不幸な言葉は二人の間に伏字の如く潛在してゐたお延といふ名前に點火したやうなものであつた。お秀はそれを松明のやうに兄の眼先に振り廻した。

「兄さんこそ違つたのです。嫂さんを御貰ひになる前の兄さんと、嫂さんを御貰ひになつた後の兄さんとは、丸で違つてゐます。誰が見たつて別の人ですわ」

百一

、津田から見たお秀は彼に對する僻見で武裝されてゐた。ことに最後の攻撃は誤解其物の活動に過ぎなかつた。彼には「嫂さん、嫂さん」を繰り返す妹の聲が如何にも耳障りであつた。寧ろ自己を滿足させるための行爲を、悉く細君を滿足させるために起つたものとして解釋する妹の前に、彼は尠からぬ不快を感じた。

「己は御前の考へてるやうな二本棒ぢやないよ」

「そりや左右かも知れません。嫂さんから電話が掛かつて來ても、あたしの前ぢやわざと冷淡を裝つて、打つちやつて御置きになる位ですから」

斯ういふ言葉が所嫌はずお秀の口からひよい〳〵續發して來るやうになつた時、津田は殆ど眼前の利害を忘れるべく餘儀なくされた。彼は一二度腹の中で舌打ちをした。

「だから此奴に電話を掛けるなと、あれ丈お延に注意して置いたのに」

彼は神經の亢奮を紛らす人のやうに、しきりに短かい口髭を引張つた。次第々々に苦い顏をし始めた。

さうして段々言葉少なになつた。

津田の此態度が意外の影響をお秀に與へた。お秀は兄の弱點が自分のために一皮づゝ赤裸にされて行くので、仕舞に彼は恥ぢ入つて、默り込むのだとばかり考へたらしく、猶猛烈に進んだ。恰ももう一息で彼を全然自分の前に後悔させる事が出來でもするやうな勢ひで。

「嫂さんと一所になる前の兄さんは、もつと正直でした。少なくとももつと淡泊でした。私は證據のない事を云ふと思はれるのが厭だから、有體に事實を申します。だから兄さんも淡泊に私の質問に答へて下さい。兄さんは嫂さんを御貰ひになる前、今度のやうな嘘を御父さんに吐いた覺えがありますか」

此時津田は始めて弱つた。お秀の云ふ事は明らかな事實であつた。然し其事實は決してお秀の考へてゐるやうな意味から起つたのではなかつた。津田に云はせると、たゞ偶然の事實に過ぎなかつた。

「それで御前は此事件の責任者はお延だと云ふのかい」

お秀は左右だと答へたい所をわざと外らした。

「いゝえ、嫂さんの事なんか、あたし些とも云つてやしません。たゞ兄さんが變つた證據にそれ丈の事實を主張するんです」

津田は表向き何うしても負けなければならない形勢に陷つて來た。

「御前がそんなに變つたと主張したければ、變つたで可いぢやないか」

「可かないわ。御父さんや御母さんに濟まないわ」

すぐ「左右かい」と答へた津田は冷淡に「そんならそれでも可いよ」と附け足した。

お秀は是でもまだ後悔しないのかといふ顏附をした。

「兄さんの變つた證據はまだあるんです」

津田は素知らぬ風をした。お秀は遠慮なく其證據といふのを擧げた。

「兄さんは小林さんが兄さんの留守へ來て、嫂さんに何か云やしないかつて、先刻から心配してゐるぢ

やありませんか」
「煩いな。心配ぢやないつて先刻說明したぢやないか」
「でも氣になる事は慥かなんでせう」
「何うでも勝手に解釋するが可い」
「えゝ。――何方でも、兎に角、それが兄さんの變つた證據ぢやありませんか」
「馬鹿を云ふな」
「いゝえ、證據よ。慥かな證據よ。兄さんはそれ丈嫂さんを恐れていらつしやるんです」
津田は不圖眼を轉じた。さうして枕に頭を載せた儘、下からお秀の顏を覗き込むやうにして見た。それから好い恰好をした鼻柱に冷笑の皺を寄せた。此餘裕がお秀には全く突然であつた。もう一息で懺悔の深谷へ眞つ逆さまに突き落とす積りでゐた彼女は、まだ兄の後に平坦な地面が殘つてゐるのではなからうかといふ疑ひを始めて起した。然し彼女は行ける所迄行かなければならなかつた。
「兄さんはつい此間迄小林さんなんかを、丸で鼻の先であしらつて入らつしつたぢやありませんか。何を云つても取り合はなかつたぢやありませんか。それを今日に限つて何故そんなに怖がるんです。高が小林なんかを怖がるやうになつたのは、其相手が嫂さんだからぢやありませんか」
「そんならそれで可いさ。僕がいくら小林を怖がつたつて、御父さんや御母さんに對する不義理になる譯でもなからう」
「だからあたしの口を出す幕ぢやないと仰しやるの」

「まあ其見當だらうね」
お秀は赫とした。同時に一筋の稻妻が彼女の頭の中を走つた。

百二

お秀は鋭い聲で斯う云ひ放つた。然し彼女の改まつた切り口上は外面上何の變化も津田の上に持ち來さなかつた。彼はもう彼女の挑戰に應ずる氣色を見せなかつた。
「解りました」
「解りましたよ、兄さん」
お秀は津田の肩を搖ぶるやうな具合に、再び前の言葉を繰り返した。津田は仕方なしに又口を開いた。
「何が」
「何故嫂さんに對して兄さんがそんなに氣を置いて入らつしやるかといふ意味がです」
津田の頭に一種の好奇心が起つた。
「云つて御覽」
「云ふ必要はないんです。たゞ私に其意味が解つたといふ事丈を承知して頂けば澤山なんです」
「そんならわざ〳〵斷る必要はないよ。默つて獨りで解つたと思つてゐるが可い」
「いゝえ可くないんです。兄さんは私を妹と見做していらつしやらない。御父さんや御母さんに關係する事でなければ、私には兄さんの前で何もいふ權利がないものとしていらつしやる。だから私も云ひま

せん。然し云はなくつても、眼はちやんと附いてゐます。知らないで云はないと思つて御出でだと間違ひますから、一寸御斷り致したのです」

津田は話しを此所いらで切り上げて仕舞ふより外に道はないと考へた。なまじひ掛かり合へば掛かり合ふ程、事は面倒になる丈だと思つた。然し彼には妹に頭を下げる氣が些ともなかつた。彼女の前に後悔するなどといふ芝居じみた眞似は夢にも思ひ附けなかつた。その位の事を敢てし得る彼は、平生から低く見てゐる妹に丈は、思ひの外高慢であつた。さうして其高慢な所を、他人に對してよりも、比較的遠慮なく外へ出した。從つていくら口先が和解的でも大して役に立たなかつた。お秀にはたゞ彼の中心にある輕蔑が、微温い表現を通して傳はる丈であつた。彼女はもう遣り切れないと云つた樣子を先刻から見せてゐる津田を毫も容赦しなかつた。さうして又「兄さん」と云ひ出した。

其時津田はそれ迄にまだ見出だし得なかつたお秀の變化に氣が附いた。今迄の彼女は彼を通して常に鋒先をお延に向けてゐた。兄を攻撃するのも嘘ではなかつたが、矢面に立つ彼を餘所にしても、背後に控へてゐる嫂丈は是非射留めなければならないといふのが、彼女の眞劍であつた。それが何時の間にか變つて來た。彼女は勝手に主客の位置を改めた。さうして一直線に兄の方へ向いて進んで來た。

「兄さん、妹は兄の人格に對して口を出す權利がないものでせうか。よし權利がないにした所で、もし左右した疑ひを妹が少しでも有つてゐるなら、綺麗にそれを晴らして呉れるのが兄の義務――義務は取り消します、私には不釣合な言葉かも知れませんから。――少なくとも兄の人情でせう。私は今其人情を有つていらつしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲しみます」

「何を生意氣な事を云ふんだ。默つてゐろ、何も解りもしない癖に」

津田の癇癪は始めて破裂した。

「御前に人格といふ言葉の意味が解るか。高が女學校を卒業した位で、そんな言葉を己の前で人並に使ふのからして不都合だ」

「私は言葉に重きを置いてゐやしません。事實を問題にしてゐるのです」

「事實とは何だ。己の頭の中にある事實が御前のやうな教養に乏しい女に捕まへられると思ふのか。馬鹿め」

「さう私を輕蔑なさるなら、御注意迄に申します。然し可ござんすか」

「可いも悪いも答へる必要はない。人の病氣の所へ來て何だ、其態度は。それでも妹だといふ積りか」

「あなたが兄さんらしくないからです」

「默れ」

「默りません。云ふ丈の事は云ひます。兄さんは嫂さんに自由にされてゐます。御父さんや、御母さんや、私などよりも嫂さんを大事にしてゐます」

「妹より妻を大事にするのは何處の國へ行つたつて當り前だ」

「それ丈なら可いんです。然し兄さんのはそれ丈ぢやないんです。嫂さんを大事にしてゐながら、まだ外にも大事にしてゐる人があるんです」

「何だ」

「それだから兄さんは嫂さんを怖がるのです。しかも其怖がるのは――」
お秀が斯う云ひかけた時、病室の襖がすうと開いた。さうして蒼白い顔をしたお延の姿が突然二人の前に現はれた。

百三

彼女が醫者の玄關へ掛かつたのは其三四分前であつた。醫者の診察時間は午前と午後に分かれてゐて、午後の方は、役所や會社へ勤める人の便宜を計るため、四時から八時迄の規定になつてゐるので、お延は比較的閑靜な扉を開けて内へ入る事が出來たのである。

實際彼女は三四日前に來た時のやうに、編上だの疊附きだのといふ雜然たる穿物を、一足も沓脱の上に見出さなかつた。患者の影は無論の事であつた。時間外といふ考へを少しも頭の中に入れてゐなかつた彼女には、それが如何にも不思議であつた位四圍は寂寞してゐた。

彼女はその森とした玄關の沓脱の上に、行儀よく揃へられたたゞ一足の女下駄を認めた。價段から云つても看護婦杯の穿きさうもない新しい其下駄が突然彼女の心を躍らせた。下駄は正しく若い婦人のものであつた。小林から受けた疑念で胸が一杯になつてゐた彼女は、しばらくそれから眼を放す事が出來なかつた。彼女は猛烈にそれを見た。

右手にある小さい四角な窓から書生が顏を出した。さうして其所に動かないお延の姿を認めた時、誰何でもする人のやうな表情を彼女の上に注いだ。彼女はすぐ津田への來客があるかないかを確めた。それが

若い女であるかないかも訊いた。それからわざと取次を斷つて、ひとりで階子段の下迄來た。さうして上を見上げた。

上では絶えざる話し聲が聞こえた。然し普通雜談の時に、言葉が對話者の間を、淀みなく往つたり來たり流れてゐるのとは大分趣を異にしてゐた。其所には強い感情があつた。亢奮があつた。しかもそれを抑へ附けようとする努力の痕がありありと聞こえた。他聞を憚るとしか受取れない其談話が、お延の神經を針のやうに鋭くした。下から見詰めた時より以上の猛烈さが其所に現はれた。彼女は一倍猛烈に耳を傾けた。

津田の部屋は診察室の眞上にあつた。家の構造から云ふと、階子段を上がつてすぐ取附きが壁で、其右手が四疊半の小さい部屋になつてゐるので、此部屋の前を廊下傳ひに通り越さなければ、津田の寐てゐる所へは出られなかつた。從つてお延の聽かうとする談話は、聽くに都合の好くない見當、即ち彼女の後の方から洩れて來るのであつた。

彼女はそつと階子段を上つた。柔婉な體格を有つた彼女の足音は猫のやうに靜かであつた。さうして猫と同じやうな成效をもつて酬いられた。

上り口の一方には、落ちない用心に、一間程の手欄が拵へてあつた。お延はそれに倚つて、津田の樣子を窺つた。すると忽ち鋭いお秀の聲が彼女の耳に入つた。ことに嫂さんがといふ特殊な言葉が際立つて鼓膜に響いた。見事に豫期の外れた彼女は、又はつと思はせられた。硬い緊張が弛む暇なく再び彼女を襲つて來た。彼女は津田に向つてお秀の口から拋げ附けられる嫂さんといふ其言葉が、何んな意味に用ひられ

てるかを知らなければならなかつた。彼女は耳を澄ました。

二人の語勢は聽いてゐるうちに急になつて來た。二人は明らかに喧嘩をしてゐた。其喧嘩の渦中には、知らない間に、自分が引き込まれてゐた。或は自分が此喧嘩の主な原因かも分らなかつた。然し前後の關係を知らない彼女は、たゞそれ丈で自分の位置を極める譯に行かなかつた。それに二人の使ふ、といふよりも寧ろお秀の使ふ言葉は霰のやうに忙しかつた。後から後から落ちてくる單語の意味を、一粒づゝ拾つて吟味してゐる閑などは到底なかつた。「人格」「大事にする」「當り前」斯んな言葉が夫から夫へと其所に佇んでゐる彼女の耳朶を叩きに來る丈であつた。

彼女は事件が分明になる迄凝と動かずに立つてゐようかと考へた。すると其時お秀の口から最後の砲撃のやうに出た「兄さんは嫂さんより外にもまだ大事にしてゐる人があるのだ」といふ句が、突然彼女の心を震はせた。際立つて明暸に聞こえた此一句ほどお延に取つて大切なものはなかつた。同時に此一句程彼女にとつて不明暸なものもなかつた。後を聞かなければ、それ丈で獨立した役にはとても立てられなかつた。お延は何んな犧牲を拂つても、其後を聽かなければ氣が濟まなかつた。然し其後は又何うしても聽いてゐられなかつた。先刻から一言葉毎に一調子づゝ高まつて來た二人の遣り取りは、此所で絶頂に達したものと見做すより外に途はなかつた。もう一歩も先へ進めない極端迄來てゐた。もし強ひて先へ出ようとすれば、何方かで手を出さなければならなかつた。從つてお延は不體裁を防ぐ緩和劑として、何うしても病室へ入らなければならなかつた。

彼女は兄妹の中をよく知つてゐた。彼等の不和の原因が自分にある事も彼女には平生から解つてゐた。

其所へ顔を出すには、出す丈の手際が要つた。然し彼女には其自信がないでもなかつた。彼女は際どい刹那に覺悟を極めた。さうしてわざと靜かに病室の襖を開けた。

百四

二人は果してぴたりと默つた。然し暴風雨が是から荒れようとする途中で、急に其進行を止められた時の沈默は、決して平和の象徵ではなかつた。不自然に押へつけられた無言の瞬間には寧ろ物凄い或物が潛んでゐた。

二人の位置關係から云つて、最初にお延を見たものは津田であつた。南向きの縁側の方を枕にして寐てゐる彼の眼に、反對の側から入つて來たお延の姿が一番早く映るのは順序であつた。其刹那に彼は二つのものをお延に握られた。一つは彼の不安であつた。一つは彼の安堵であつた。困つたといふ心持と、助かつたといふ心持が、包み藏す餘裕のないうちに、一度に彼の顔に出た。さうしてそれが突然入つて來たお延の豫期とぴたりと一致した。彼女は此時夫の面上に現はれた表情の一部分から、或物を疑つても差支へないといふ證左を、永く心の中に攫んだ。然しそれは祕密であつた。咄嗟の場合、彼女はたゞ夫の他の半面に應ずるのを、此所へ來た刻下の目的としなければならなかつた。彼女は蒼白い頰に無理な微笑を湛へて津田を見た。さうしてそれが丁度お秀の振り返るのと同時に起つた所作だつたので、お秀にはお延が自分を出し拔いて、津田と默契を取り換はせてゐるやうに取れた。薄赤い血潮が覺えずお秀の頰に上つた。

「おや」

「今日は」
輕い挨拶が二人の間に起つた。然しそれが濟むと話しは何時ものやうに續かなかつた。二人とも手持無沙汰に壓迫され始めなければならなかつた。滅多な事の云へないお延は、脇に抱へて來た風呂敷包を開けて、岡本の貸して呉れた英語の滑稽本を出して津田に渡した。其指の先にはお秀が始終腹の中で問題にしてゐる例の指輪が光つてゐた。

津田は薄い小型な書物を一つ〳〵取り上げて、さら〳〵頁を飜して見たぎりで、再びそれを枕元へ置いた。彼はその一行さへ讀む氣にならなかつた。批評を加へる勇氣などは何處からも出て來なかつた。彼は默つてゐた。お延は其間に又お秀と二言三言ほど口を利いた。それもみんな彼女の方から話し掛けて、必要な返事丈を、云はば相手の咽喉から壓し出したやうなものであつた。

お延は又懷中から一通の手紙を出した。

「今來掛けに郵便函の中を見たら入つて居りましたから、持つて參りました」

お延の言葉は几帳面に改まつてゐた。津田と差向ひの時に比べると、丸で別人のやうに禮儀正しかつた。彼女は其形式的な餘所々々しい所を暗に嫌つてゐた。けれども他人の前、ことにお秀の前では、さうした不自然な言葉遣ひを、一種の意味から餘儀なくされるやうにも思つた。

手紙は夫婦の間に待ち受けられた京都の父からのものであつた。是も前便と同じやうに書留になつてゐないので、眼前の用を辨ずる中味に乏しいのは、お秀からまだ何にも聞かせられないお延にも略見當丈は附いてゐた。

津田は封筒を切る前に彼女に云つた。

「お延駄目だとさ」

「さう、何が」

「御父さんはいくら頼んでももう御金を呉れないんださうだ」

津田の云ひ方は珍らしく眞摯の氣に充ちてゐた。お秀に對する反抗心から、彼は何時の間にかお延に對して平たい旦那樣になつてゐた。しかも其所に自分は丸で氣が附かずにゐた。衒ひ氣のない其態度がお延には嬉しかつた。彼女は慰めるやうな温味のある調子で答へた。言葉遣ひさへ吾知らず、平生の自分に戻つてしまつた。

「可いわ、そんなら。此方で何うでもするから」

津田は默つて封を切つた。中から出た父の手紙は左程長いものではなかつた。其上一目見ればすぐ要領を得られる位な大きな字で書いてあつた。それでも女二人は滑稽本の場合のやうに口を利き合はなかつた。ひとしく注意の視線を卷紙の上に向けてゐる丈であつた。だから津田がそれを讀み了つて、元通りに封筒の中へ入れたのを、其儘枕元へ投げ出した時には、二人にも大體の意味はもう呑み込めてゐた。それでもお秀はわざと訊いた。

「何と書いてありますか、兄さん」

氣のない顔をしてゐた津田は輕く「ふん」と答へた。お秀は一寸餘所を向いた。それから又訊いた。

「あたしの云つた通りでせう」

手紙には果して彼女の推察する通りの事が書いてあつた。然しそれ見た事かといつた樣な妹の態度が、津田には如何にも氣に喰はなかつた。それでなくつても先刻からの行き掛り上、彼は天然自然の返事をお秀に與へるのが業腹であつた。

百五

お延には夫の氣持がありくと讀めた。彼女は心の中で再度の衝突を恐れた。と共に、夫の本意をも疑つた。彼女の見た平生の夫には自制の念が何處へでも附いて廻つた。自制ばかりではなかつた。腹の奧で相手を下に見る時の冷やかさが、それに何時でも附け加はつてゐた。彼女はたゞ此特色中に、まだ自分の手に餘る或物が潛んでゐる事をも信じてゐた。それは未だに彼女に取つての未知數であるにも拘らず、其所さへ明暸に抑へれば、苦もなく彼を滿足に扱ひ得るものと迄彼女は思ひ込んでゐた。然し外部に現はれる丈の夫なら一口で評するのも夫程六づかしい事ではなかつた。彼は容易に怒らない人であつた。英語で云へば、テンパーを失はない例にもならうといふ其人が、また何うして自分の妹の前に斯う破裂し掛かるのだらう。もつと、嚴密に云へば、彼女が室に入つて來る前に、何うしてあれ程露骨に破裂したのだらう。兎に角彼女は退き掛けた波が再び寄せ返す前に、二人の間に割り込まなければならなかつた。彼女は喧嘩の相手を自分に引き受けようとした。

「秀子さんの方へも御父さまから何か御音信があつたんですか」

「いゝえ母から」

「さう、矢つ張り此事に就いて」

「えゝ」

お秀はそれぎり何も云はなかつた。お延は後を附けた。

「京都でも色々御物費が多いでせうからね。それに元々此方が悪いんですから」

お秀には此時程お延の指にある寶石が光つて見えた事はなかつた。さうしてお延は又左も無邪氣らしくその光る指輪をお秀の前に出してゐた。お秀は云つた。

「さういふ譯でもないんでせうけれどもね。年寄は變なもので、兄さんを信じてゐるんですよ。其位の工面は何うにでも出來る位に考へて――」

お延は微笑した。

「そりや、いざとなれば何うにか斯うにかなりますよ、ねえ貴方」

斯う云つて津田の方を見たお延は、「早くなると仰しやい」といふ意味を眼で知らせた。然し津田には、彼女のして見せる眼の働きが解つても、意味は全く通じなかつた。彼は何時も繰り返す通りの事を云つた。

「ならん事もあるまいがね、己には何うも御父さんの云ふ事が變でならないんだ。垣根を繕つたの、家賃が滯つたのつて、そんな費用は元來些細なものぢやないか」

「さうも行かないでせう、貴方。是で自分の家を一軒持つて見ると」

「我々だつて一軒持つてるぢやないか」

お延は彼女に特有な微笑を今度はお秀の方に見せた。お秀も同程度の愛嬌を惜しまずに答へた。

「兄さんは其底に何か魂膽があるかと思つて、疑つていらつしやるんですよ」
「そりや貴方悪いわ、御父さまを疑るなんて。御父さまに魂膽のある筈はないぢやありませんか、ねえ秀子さん」
「いゝえ、父や母よりもね、外にまだ魂膽があると思つてるんですのよ」
「外に？」
お延は意外な顔をした。
「えゝ、外にあると思つてるに違ひないのよ」
お延は再び夫の方に向つた。
「貴方、そりや又何ういふ譯なの」
「お秀がさう云ふんだから、お秀に訊いて御覧よ」
お延は苦笑した。お秀の口を利く順番が又廻つて来た。
「兄さんはあたし達が陰で、京都を突つ附いたと思つてるんですよ」
「だつて――」
お延はそれより以上云ふ事が出来なかつた。さうして其云つた事は殆ど意味をなさなかつた。お秀はすぐ其虚を充たした。
「それで先刻から大變御機嫌が悪いのよ。尤もあたしと兄さんと寄ると屹度喧嘩になるんですけれどもね。ことに此事件このかた」

「困るのね」とお延は溜息交りに答へた後で、又津田に訊き掛けた。

「然しそりや本當の事なの、貴方。貴方だつて眞逆そんな男らしくない事を考へていらつしやるんぢやないでせう」

「何うだか知らないけれども、お秀にはさう見えるんだらうよ」

「だつて秀子さん達がそんな事をなさると、一體何の役に立つと、貴方思つていらつしやるの」

「大方見せしめの爲だらうよ。己にはよく解らないけれども」

「何の見せしめなの？一體何んな惡い事を貴方なすつたの」

「知らないよ」

津田は蒼蠅さうに斯う云ひ切つた。お延は猶聞き足らないといつた風にお秀を見た。何うか助けて下さいといふ表情が彼女の細い眼と眉の間に現はれた。

百六

「なに兄さんの强情なんですよ」とお秀が云ひ出した。嫂に對して何とか説明しなければならない位地に追ひ詰められた彼女は、斯う云ひながら腹の中で猶の事其嫂を憎んだ。彼女から見た其時のお延ほど、空々しい又づう／＼しい女はなかつた。

「えゝ良人は强情よ」と答へたお延はすぐ夫の方を向いた。

「あなた本當に强情ね。秀子さんの仰しやる通りよ。其癖だけは是非御已めにならないと不可ませんわ」

「一體何が強情なんだ」
「そりやあたしにも好く解らないけれども」
「何でもかでも御父さんから金を取らうとするからかい」
「さうね」
「取らうとも何とも云つてゐやしないぢやないか」
「さうね。そんな事仰しやる筈がないわね。又仰しやつた所で效目がなければ仕方がありませんからね」
「ぢや何處が強情なんだ」
「何處がつて御訊きになつても駄目よ。あたしにも好く解らないんですから。だけど、何處かにあるのよ、強情な所が」
「馬鹿」
馬鹿と云はれたお延は却て心持好ささうに微笑した。お秀は堪らなくなつた。
「兄さん、あなた何故あたしの持つて來たものを素直に御取りにならないんです」
「素直にも義剛にも、取るにも取らないにも、御前の方で天から出さないんぢやないか」
「あなたの方で御取りになると仰しやらないから、出せないんです」
「此方から云へば、御前の方で出さないから取らないんだ」
「然し取るやうにして取つて下さらなければ、あたしの方だつて厭ですもの」
「ぢや何うすれば可いんだ」

「解つてるぢやありませんか」

二人は少時黙つてゐた。

突然津田が云ひ出した。

「お延御前お秀に詫つたら何うだ」

お延は呆れたやうに夫を見た。

「なんで」

「御前さへ詫つたら、持つて來たものを出すといふ積りなんだらう。お秀の料簡では」

「あたしが詫るのは何でもないわ。貴方が詫れと仰しやるなら、いくらでも詫るわ。だけど――」

お延は此所で訴への眼をお秀に向けた。お秀は其後を遮つた。

「兄さん、あなた何を仰しやるんです。あたしが何時嫂さんに詫つて貰ひたいと云ひました。そんな言ひ掛りを捏造されては、あたしが嫂さんに對して面目なくなる丈ぢやありませんか」

沈黙が又三人の上に落ちた。津田はわざと口を利かなかつた。お延には利く必要がなかつた。お秀は利く準備をした。

「兄さん、あたしは是でもあなた方に對して義務を盡くしてゐる積りです。――」

お秀がやつと是丈云ひ掛けた時、津田は急に質問を入れた。

「一寸御待ち。義務かい、親切かい、御前の云はうとする言葉の意味は」

「あたしには何方だつて同じ事です」

「さうかい。そんなら仕方がない。それで」

「それでぢやありません。だからです。あたしがあなた方の陰へ廻つて、御父さんや御母さんを突つ附いた結果、兄さんや嫂さんに不自由をさせるのだと思はれるのが、あたしには如何にも辛いんです。だからその額丈を何うかして上げようと云ふ好意から、今日わざ〳〵此所へ持つて來たと云ふんです。實は昨日嫂さんから電話が掛かつた時、すぐ來ようと思つたんですけれども、朝のうちは宅に用があつたし、午からはその用で銀行へ行く必要が出來たものですから、つい來損なつちまつたんです。元々僅かな金額ですから、それについて兎や角云ふ氣は些ともありませんけれども、あたしの方の心遣ひは、丸で兄さんに通じてゐないんだから、それがたゞ殘念だと云ひたいんです」

お延は緘默つてゐる津田の顏を覗き込んだ。

「貴方何とか仰しやいよ」

「何て」

「何てつて、御禮をよ。秀子さんの親切に對しての御禮よ」

「高がこれしきの金を貰ふのに、そんなに恩に着せられちや厭だよ」

「恩に着せやしないつて今云つたぢやありませんか」とお秀が少し癇走つた聲で辯解した。お延は元通りの穩やかな調子を崩さなかつた。

「だから強情を張らずに、御禮を仰しやいと云ふのに。もし御金を拜借するのが御厭なら、御金は頂かないで可いから、たゞ御禮丈を仰しやいよ」

お秀は變な顔をした。津田は馬鹿を云ふなといふ態度を示した。

百七

三人は妙な羽目に陷つた。行き掛り上一種の關係で因果づけられた彼等は次第に話しを餘所へ持つて行く事が困難になつてきた。席を外す事は無論出來なくなつた。彼等は其所へ坐つたなり、何うでも斯うでも、此問題を解決しなければならなくなつた。

しかも傍から見た其問題は決して重要なものとは云へなかつた。遠くから冷靜に彼等の身分と境遇を眺める事の出來る地位に立つ誰の眼にも、小さく映らなければならない程度のものに過ぎなかつた。彼等は他から注意を受ける迄もなくよくそれを心得てゐた。けれども彼等は爭はなければならなかつた。彼等の背後に背負つてゐる因縁は、他人に解らない過去から複雜な手を延ばして、自由に彼等を操つた。

仕舞に津田とお秀の間に下のやうな問答が起つた。

「始めから默つてゐれば、それ迄ですけれども、一旦云ひ出して置きながら、持つて來た物を渡さずに此儘歸るのも心持が惡う御座んすから、何うか取つて下さいよ。兄さん」

「置いて行きたければ置いといでよ」

「だから取るやうにして取つて下さいな」

「一體何うすれば御前の氣に入るんだか、僕には解らないがね、だから其條件をもつと淡泊に云つちまつたら可いぢやないか」

「あたし條件なんてそんな六づかしいものを要求してやしません。たゞ兄さんが心持よく受取つて下されば、それで宜いんです。詰り兄妹らしくして下されば、それで宜いといふ丈です。それから御父さんに濟まなかつたと本氣に一口仰しやりさへすれば、何でもないんです」

「御父さんには、とつくの昔にもう濟まなかつたと云つちまつたよ。御前も知つてるぢやないか。しかも一口や二口ぢやないやね」

「けれどもあたしの云ふのは、そんな形式的の御詫びぢやありません。心からの後悔です」

津田は高が是しきの事にと考へた。後悔などとは思ひも寄らなかつた。

「僕の詫び樣が空々しいとでも云ふのかね、なんぼ僕が金を欲しがるつたつて、是でも一人前の男だよ。さうぺこ〳〵頭を下げられるものか、考へても御覽な」

「だけれども、兄さんは實際御金が欲しいんでせう」

「欲しくないとは云はないさ」

「それで御父さんに謝罪つたんでせう」

「でなければ何も謝る必要はないぢやないか」

「だから御父さんが下さらなくなつたんですよ。兄さんは其所に氣が附かないんですか」

津田は口を閉ぢた。お秀はすぐ乘し掛かつて行つた。

「兄さんがさういふ氣で入らつしやる以上、御父さんばかりぢやないわ、あたしだつて上げられないわ」

「ぢや御止しよ。何も無理に貰はうとは云はないんだから」

「所が無理にでも貰はうと仰しやるぢやありませんか」

「何時」

「先刻からさう云つて入らつしやるんです」

「言ひ掛りを云ふな、馬鹿」

「言ひ掛りぢやありません。先刻から腹の中でさう云ひ續けに云つてるぢやありませんか。兄さんこそ淡泊でないから、それが口へ出して云へないんです」

津田は一種嶮しい眼をしてお秀を見た。其中には憎惡が輝いた。けれども良心に對して恥づかしいといふ光は何處にも宿らなかつた。さうして彼が口を利いた時には、お延でさへ其意外なのに驚かされた。彼は彼に支配出來る最も冷靜な調子で、彼女の豫期とは丸で反對の事を云つた。

「お秀御前の云ふ通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんには御前の持つて來た金が絶對に入り用だ。兄さんは又改めて公言する。御前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんは御前の親切を感謝する。だから何うぞ其金を此枕元へ置いて行つて呉れ」

お秀の手先が怒りで顫へた。兩方の頬に血が差した。其血は心の何處からか一度に顏の方へ向けて動いて來るやうに見えた。色が白いのでそれが一層鮮やかであつた。然し彼女の言葉遣ひ丈は夫程變らなかつた。怒りの中に微笑さへ見せた彼女は、不意に兄を捨てて、輝いた眼をお延の上に注いだ。

「嫂さん何うしませう。折角兄さんがあゝ仰しやるものですから、置いて行つて上げませうか」

「さうね、そりや秀子さんの御隨意で可ござんすわ」

「さう。でも兄さんは絶對に必要だと仰しやるのね」
「えゝ良人には絶對に必要かも知れませんわ。だけどあたしには必要でも何でもないのよ」
「ぢや兄さんと嫂さんとは丸で別つこなのね」
「それでゐて、些とも別つこぢやないのよ。是でも夫婦だから、何から何迄一所くたよ」
「だつて――」
お延は皆迄云はせなかつた。
「良人に絶對に必要なものは、あたしがちやんと拵へる丈なのよ」
彼女は斯う云ひながら、昨日岡本の叔父に貰つて來た小切手を帶の間から出した。

百八

彼女がわざとらしくそれをお秀に見せるやうに取り扱ひながら、津田の手に渡した時、彼女には夫に對する一種の注文があつた。前後の行き掛りと自分の性格から割り出された其注文といふのは外でもなかつた。彼女は夫が自分としつくり呼吸を合はせて、それを受け取つて呉れゝば好いがと心の中で祈つたのである。會心の微笑を洩らしながら首肯いて、それを鷹揚に枕元へ放り出すか、でなければ、ごく簡單な、然し細君に對して最も滿足したらしい禮をたゞ一口述べて、再びそれをお延の手に戻すか、何れにしても此小切手の出所に就いて、夫婦の間に夫婦らしい氣脈が通じてゐるといふ事實を、お秀に見せればそれで足りたのである。

不幸にして津田にはお延の所作も小切手もあまりに突然過ぎた。其上斯んな場合に適る彼の戯曲的技巧が、細君とは少し趣を異にしてゐた。彼は不思議さうに小切手を眺めた。それから緩くり訊いた。

「こりや一體何うしたんだい」

此冷やかな調子と等しく冷やかな反問とが、登場の第一歩に於て既にお延の意氣込みを恨めしく挫いた。彼女の豫期は外れた。

「何うもしないわ。たゞ要るから拵へた丈よ」

斯う云つた彼女は、腹の中でひや／＼した。彼女は津田が眞直に其後を訊く事を非常に恐れた。それは夫婦の間に何等の氣脈の通じてゐない證據を、お秀の前に暴露するに過ぎなかつたから。

「譯なんか病氣中に訊かなくつても可いのよ。何うせ後で解る事なんだから」

是丈云つた後でもまだ不安心でならなかつたお延は、津田がまだ何とも答へない先に、すぐ其次を附け加へてしまつた。

「よし解らなくつたつて構はないぢやないの。高が此位の御金なんですもの、拵へようと思へば、何處からでも出て來るわ」

津田は漸く手に持つた小切手を枕元へ投げ出した。彼は金を欲しがる男であつた。然し金を珍重する男ではなかつた。使ふために金の必要を他人より餘計痛切に感ずる彼は、其金を輕蔑する點に於て、お延の言葉を心から肯定するやうな性質を有つてゐた。それで彼は默つてゐた。然しそれだから又お延に一口の禮も云はなかつた。

彼女は物足らなかつた。たとひ自分に何とも云はない迄も、お秀には溜飲の下がるやうな事を一口でいいから云つて呉れゝば可いのにと、腹の中で思つた。

先刻から二人の樣子を見てゐた其お秀は此時急に「兄さん」と呼んだ。さうして懷から綺麗な女持ちの紙入を出した。

「斯うして置けば夫で可いでせう」

彼女は紙入の中から白紙で包んだものを拔いて小切手の傍へ置いた。

「兄さん、あたし持つて來たものを此所へ置いて行きます」

津田に話し掛けたお秀は暗にお延の返事を待ち受けるらしかつた。お延はすぐ應じた。

「秀子さんそれぢや濟みませんから、何うぞそんな心配はしないで置いて下さい。此方で出來ないうちは、兎も角もですけれども、もう間に合つたんですから」

「だけどそれぢやあたしの方が又心持が惡いのよ。斯うして折角包んで迄持つて來たんですから、何うかそんな事を云はずに受取つて置いて下さいよ」

二人は讓り合つた。同じやうな問答を繰り返し始めた。津田は又辛抱強く何時迄もそれを聽いてゐた。仕舞に二人はとう〳〵兄に向はなければならなくなつた。

「兄さん取つといて下さい」

「貴方頂いてもよくつて」

津田はにや〳〵と笑つた。

「お秀妙だね。先刻はあんなに強硬だつたのに、今度は又馬鹿に安つぽく貰はせようとするんだね。一體何方が本當なんだい」

お秀は屹となつた。

「何方も本當です」

此答は津田に突然であつた。さうして其強い調子が、何處迄も冷笑的に構へようとする彼の機鋒を挫いた。お延には猶更であつた。彼女は驚いてお秀を見た。其顏は先刻と同じやうに火熱つてゐた。けれども涼しい彼女の眼に宿る光りは、たゞの怒りばかりではなかつた。口惜しいとか無念だとかいふ敵意の外に、まだ認めなければならない或物が其所に陽炎つた。然しそれが何であるかは、彼女の口を通して聽くより外に途がなかつた。二人は惹き附けられた。今迄持續して來た心の態度に角度の轉換が必要になつた。彼等は遮る事なしに、その輝きの説明を、彼女の言葉から聽かうとした。彼等の豫期と同時に、其言葉はお秀の口を衝いて出た。

百九

「實は先刻から云はうか止さうかと思つて、考へてゐたんですけれども、そんな風に兄さんから冷笑されて見ると、私だつて默つて歸るのが厭になります。だから云ふ丈の事は此所で云つて仕舞ひます。けれども一應御斷りして置きますが、是から申し上げる事は今迄のとは少し意味が違ひますよ。それを今迄通りの態度で聽いてゐられると、私だつて少し迷惑するかも知れません、といふのは、たゞ私が誤解される

のが厭だといふ意味でなくつて、私の心持があなた方に通じなくなるといふ譯合からです」
お秀の說明は斯ういふ言葉で始まつた。それが既に自分の態度を改めかゝつてゐる二人の豫期に一倍の角度を與へた。彼等は默つて其後を待つた。然しお秀はもう一遍念を押した。
「少しや眞面目に聽いて下さるでせうね。私の方が眞面目になつたら」
斯う云つたお秀は其强い眼を津田の上からお延に移した。
「尤も今迄が不眞面目といふ譯でもありませんけれどもね。何しろ嫂さんさへ此所にゐて下されば、まあ大丈夫でせう。何時もの兄妹喧嘩になつたら、其時に止めて頂けばそれ迄ですから」
お延は微笑して見せた。然しお秀は應じなかつた。
「私は何時かつから兄さんに云はう云はうと思つてゐたんです。嫂さんのいらつしやる前でですよ。だけど、其機會がなかつたから、今日迄云はずにゐました。それを今改めてあなた方の御揃ひになつた所で申してしまふのです。それは外でもありません。よござんすか、あなた方御二人は御自分達の事より外に何も考へていらつしやらない方だといふ事丈なんです。自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」
此斷案を津田は寧ろ冷靜に受ける事が出來た。彼はそれを自分の特色と認める上に、一般人間の特色とも認めて疑はなかつたのだから。然しお延には又是程意外な批評はなかつた。彼女はたゞ呆れるばかりであつた。幸か不幸かお秀は彼女の口を開く前にすぐ先へ行つた。
「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂さんは又兄さんに可愛がられる丈なんです。あなた方の眼に

は外に何もないんです。妹などは無論の事、御父さんも御母さんももうないんです」

此所迄來たお秀は急に後を繼ぎ足した。二人の中の一人が自分を遮りはしまいかと恐れでもするやうな樣子を見せて。

「私はたゞ私の眼に映つた通りの事實を云ふ丈です。それを何うして貰ひたいといふのではありません。もう其時機は過ぎました。有體にいふと其時機は今日過ぎたのです。實はたつた今過ぎました。あなた方の氣の附かないうちに、過ぎました。私は何事も因緣づくと諦めるより外に仕方がありません。然し其事實から割り出される結果丈は是非共あなた方に聽いて頂きたいのです」

お秀は又津田からお延の方に眼を移した。二人はお秀の所謂結果なるものに就いて、判然した觀念がなかつた。從つてそれを聽く好奇心があつた。だから默つてゐた。

「結果は簡單です」とお秀が云つた。「結果は一口で云へる程簡單です。然し多分あなた方には解らないでせう。あなた方は決して他の親切を受ける事の出來ない人だといふ意味に、多分御自分ぢや氣が附いていらつしやらないでせうから。斯う云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一遍繰り返します。自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失つていらつしやるといふのが、私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出來ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。あなた方はそれで澤山だと思つていらつしやるかも知れません。何處にも不足はないと考へておいでなのかも分りません。然し私から見ると、それはあなた方自身に取つて飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しがる能力を天から奪はれたと同樣に見えるのです。兄さん、あなたは

私の出した此御金は欲しいと仰しやるのでせう。然し私の此御金を出す親切は不用だと仰しやるのでせう。私から見ればそれが丸で逆です。人間として丸で逆なのです。だから大變な不幸なのです。さうして兄さんは其不幸に氣が附いていらつしやらないのです。嫂さんは又私の持つて來た此御金を兄さんが貰はなければ可いと思つていらつしやるんです。さつきから貰はせまい貰はせまいとしていらつしやるんです。つまり此御金を斷ることによつて、併せて私の親切をも排斥しようとなさるのです。さうしてそれが嫂さんには大變な御得意になるのです。嫂さんも逆です。嫂さんは妹の實意を素直に受けるために感じられる好い心持が、今の御得意より何層倍人間として愉快だか、丸で御存じない方なのです」

お延は默つてゐられなくなつた。然しお秀はお延より猶默つてゐられなかつた。彼女を遮ぎらうとするお延の出鼻を抑へ附けるやうな熱した語氣で、自分の云ひたい事丈云つて仕舞はなければ氣が濟まなかつた。

百十

「嫂さん何か仰しやる事があるなら、後で緩くり伺ひますから、御迷惑でも我慢して私に云ふ丈云はせてしまつて下さい。なにもう直きです。そんなに長く掛かりやしません」

お秀の斷り方は妙に落ち附いてゐた。先刻津田と衝突した時に比べると、彼女は丸で反對の傾向を帶びて、激昂から沈靜の方へ推し移つて來た。それが此場合如何にも案外な現象として二人の眼に映つた。

「兄さん」とお秀が云つた。「私は何故もつと早く此包んだ物を兄さんの前に出さなかつたのでせう。さうして今になつて又何で極りが惡くもなく、それをあなた方の前に出されたのでせう。考へて下さい。

考へる迄もなく、二人にはそれがお秀の詭辯としか受取れなかつた。ことにお延にはさう見えた。然しお秀は眞面目であつた。

「兄さん私は是であなたを兄さんらしくしたかつたのです。高がそれ程の金でかと兄さんはせゝら笑ふでせう。然し私から云へば金額は問題ぢやありません。少しでも兄さんを兄さんらしく出來る機會があれば、私は何時でもそれを利用する氣なのです。私は今日此所で出來る丈の努力をしました。さうして見事に失敗しました。ことに嫂さんが御出でになつてから以後、私の失敗は急に目立つて來ました。私が妹として兄さんに對する執着を永久に放り出さなければならなくなつたのは其時です。――嫂さん後生ですから、もう少し我慢して聽いてゐて下さい」

お秀は又斯う云つて何か云はうとするお延を制した。

「あなた方の態度はよく私に解りました。あなた方から一時間二時間の說明を伺ふより、今此所で拜見した丈で、私が勝手に判斷する方が、却つてよく解るやうに思はれますから、私はもう何も伺ひません。然し私には自分を說明する必要がまだあります。其所は是非聽いて頂かなければなりません」

お延は隨分手前勝手な女だと思ひながら默つてゐた。然し初手から勝利者の餘裕が附着してゐる彼女には、默つてゐても大した不足はなかつた。

「兄さん」とお秀が云つた。「是を見て下さい。ちやんと紙に包んであります。お秀が宅から用意して持つて來たといふ證據にはなるでせう。其所にお秀の意味はあるのです」

お秀はわざ／＼枕元の紙包を取り上げて見せた。

「是が親切といふものです。あなた方には何うしても其意味が御解りにならないから、仕方なしに私が自分で説明します。さうして兄さんが兄さんらしくして下さらなくつても、私は宅から持つて來た親切を此所へ置いて行くより外に途はないのだといふ事も一所に説明します。兄さん、是は妹の親切ですか義務ですか。兄さんは先刻さういふ問を私に御掛けになりました。私は何方も同じだと云ひました。兄さんが妹の親切を受けて下さらないのに、妹はまだ其親切を盡くす氣でゐたら、その親切は義務と何所が違ふんでせう。私の親切を兄さんの方で義務に變化させてしまふ丈ぢやありませんか」

「お秀もう解つたよ」と津田が漸く云ひ出した。彼の頭に妹のいふ意味は判然入つた。けれども彼女の豫期する感情は少しも起らなかつた。彼は先刻から蒼蠅いのを我慢して彼女の云ひ草を聽いてゐた。彼から見た妹は、親切でもなければ、誠實でもなかつた。愛嬌もなければ氣高くもなかつた。たゞ厄介な丈であつた。

「もう解つたよ。それで可いよ。もう澤山だよ」

已に諦めてゐたお秀は、別に恨めしさうな顔もしなかつた。たゞ斯う云つた。

「これは良人が立て替へて上げる御金ではありませんよ。兄さん、良人が京都へ保證して成り立つた約束を、兄さんが御破りになつたために、良人では御父さんの方へ義理が出來て、仕方なしに立て替へた事になるとしたら、なんぼ兄さんだつて、心持よく受け取る氣にはなれないでせう。私もそんな事で良人を煩はせるのは厭です。だから御斷りをして置きますが、是は良人とは關係のない御金です。私のです。だ

から兄さんも黙つて御取りになれるでせう。私の親切は御受けにならないでも、御金丈は御取りになれるでせう。今の私はなまじひ御禮を云つて頂くより、たゞ黙つて受取つて置いて下さる方が、却つて心持が好くなつてゐるのです。問題はもう兄さんの爲ぢやなくなつてゐるんです。單に私の爲です。兄さん、私の爲に何うぞそれを受取つて下さい」

お秀は是丈云つて立ち上がつた。お延は津田の顔を見た。其顔には何といふ合圖の表情も見えなかつた。彼女は仕方なしにお秀を送つて階子段を降りた。二人は玄關先で尋常の挨拶を取り換はせて別かれた。

百十一

單に病院でお秀に出會ふといふ事は、お延に取つて意外でも何でもなかつた。けれども出會つた結果からいふと、又意外以上の意外に歸着した。自分に對するお秀の態度を平生から心得てゐた彼女も、まさか斯んな場面で其相手にならうとは思はなかつた。相手になつた後でも、それが偶然の廻り合せのやうに解釋される丈であつた。その必然性を認めるために、過去の因果を迹附けて見ようといふ氣さへ起らなかつた。この心理狀態をもつと砕けた言葉で云ひ直すと、事件の責任は全く自分にないといふ事に過ぎなかつた。凡てお秀が背負つて立たなければならないといふ意味であつた。從つてお延の心は存外平靜であつた。少なくとも、良心に對して疚しい點は容易に見出だされなかつた。

此會見からお延の得た收穫は二つあつた。一つは事後に起る不愉快さであつた。その不愉快さのうちには、お秀を通して今後自分達の上に持ち來されさうに見える葛藤さへ織り込まれてゐた。彼女は充分それ

を切り拔けて行く覺悟を有つてゐた。但しそれには、津田が飽く迄自分の肩を持つて呉れなければ駄目だといふ條件が附帶してゐた。其所へ行くと彼女には七分通りの安心と、三分方の不安があつた。其三分方の不安を、今日の自分が、どの位の程度に減らしてゐるかは、彼女に取つて重大な問題であつた。少なくとも今日の彼女は、夫の愛を買ふために、もしくはそれを買ひ戻すために、出來る丈の實を津田に見せたといふ意味で、幾分かの自信を其方面に得た積りなのである。

是はお延自身に解つてゐる側の消息中で、最も必要と認めなければならない一端であるが、其外にまだ彼女の一向知らない間に、自然自分の手に入るやうに仕組まれた收穫が出來た。無論それは一時的のものに過ぎなかつた。けれども當然自分の上に向けらるべき夫の猜疑の眼から、彼女は運よく免かれたのである。といふのは、お秀といふ相手を引き受ける前の津田と、それに惱まされ出した後の彼とは、心持から云つても、意識の焦點になるべき對象から見ても、丸で違つてゐた。だから此變化の強く起つた際どい瞬間に姿を現はして、其變化の波を自然のまゝに擴げる役を勤めたお延は、吾知らず儲けものをしたのと同じ事になつたのである。

彼女は何故岡本が強ひて自分を芝居へ誘つたか、又何故その岡本の宅へ昨日行かなければならなくなつたか、そんな內情に關する凡ての自分を津田の前に說明する手數を省く事が出來た。寧ろ自分の方から云ひ出したい位な小林の言葉に就いてすら、彼女は一口も語る餘裕を有たなかつた。お秀の歸つたあとの二人は、お秀の事で全く頭を占領されてゐた。

二人はそれを二人の顏附から知つた。さうして二人の顏を見合はせたのは、お秀を送り出したお延が、

階子段を上がつて、又室の入口に其すらりとした姿を現はした刹那であつた。お延は微笑した。すると津田も微笑した。其所には外に何もなかつた。たゞ二人がゐる丈であつた。さうして互の微笑が互の胸の底に沈んだ。少なくともお延は久し振に本來の津田を其所に認めたやうな氣がした。彼女は肉の上に浮び上がつた其微笑が何の象徴であるかを殆ど知らなかつた。たゞ一種の恰好を取つて動いた肉其物の形が、彼女には嬉しい記念であつた。彼女は大事にそれを心の奥に仕舞ひ込んだ。

其時二人の微笑は俄に變つた。二人は齒を露はす迄に口を開けて、一度に聲を出して笑ひ合つた。

「驚いた」

お延は斯う云ひながら又津田の枕元へ坐つた。津田は寧ろ落ち附いて答へた。

「だから彼奴に電話なんか掛けるなつて云ふんだ」

二人は自然お秀を問題にしなければならなかつた。

「秀子さんは、まさか基督教ぢやないでせうね」

「何故」

「何故でも——」

「金を置いて行つたからかい」

「そればかりぢやないのよ」

「眞面目腐つた說法をするからかい」

「えゝまあ左右よ。あたし始めてだわ。秀子さんのあんな六づかしい事を仰しやる所を拜見したのは」

「彼奴は理窟屋だよ。つまりあゝ捏ね返さなければ氣が濟まない女なんだ」

「だつてあたし始めてよ」

「御前は始めてさ。おれは何度だか分りやしない。一體何でもないのに高尙がるのが彼奴の癖なんだ。さうして生じひ藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」

「何うして」

「何うしてつて、藤井の叔父の傍にゐて、あの叔父の議論好きな所を、始終見てゐたもんだから、とう〳〵あんなに口が達者になつちまつたのさ」

津田は馬鹿らしいといふ風をした。お延も苦笑した。

百十二

久し振に夫と直かに向き合つたやうな氣のしたお延は嬉しかつた。二人の間に何時の間にか懸けられた薄い幕を、急に切つて落とした時の晴々しい心持になつた。

彼を愛する事によつて、是非共自分を愛させなければ已まない。――是が彼女の決心であつた。其決心は多大の努力を彼女に促した。彼女の努力は幸ひ徒勞に終らなかつた。彼女は遂に酬いられた。少なくとも今後の見込を立て得る位の程度に於て酬いられた。彼女から見れば不慮の出來事と云はなければならない此破綻は、取りも直さず彼女に取つて復活の曙光であつた。彼女は遠い地平線の上に、薔薇色の空を、薄明るく眺める事が出來た。さうして其暖かい希望の中に、此破綻から起る凡ての不愉快を忘れた。小林

の殘酷に殘して行つた正體の解らない黑い一點、それはいまだに彼女の胸の上にあつた。お秀の口から迸るやうに出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍い瞬きを見せた。然しそれらはもう遠い距離に退いた。少なくとも左程苦にならなかつた。耳に入れた刹那に起つた昂奮の記憶さへ、再び呼び戻す必要を認めなかつた。

「若し萬一の事があるにしても、自分の方は大丈夫だ」

夫に對する斯ういふ自信さへ、其時のお延の腹には出來た。從つて、いざといふ場合に、何うでも臨機の處置を附けて見せるといふ餘裕があつた。相手を片附ける位の事なら譯はないといふ氣持も手傳つた。

「相手？何んな相手ですか」と訊かれたら、お延は何と答へただらう。それは朧氣に薄墨で描かれた相手であつた。さうして女であつた。さうして津田の愛を自分から奪ふ人であつた。お延はそれ以外に何も知らなかつた。然し何處かに此相手が潜んでゐるとは思へた。お秀と自分等夫婦の間に起つた波瀾が、あゝ迄際どくならずに濟んだなら、お延は行き掛り上、是非共津田の腹のなかにゐる此相手を、遠くから探らなければならない順序だつたのである。

お延は其プログラムを狂はせた自分を顧みて、寧ろ幸福だと思つた。氣掛りを後へ繰り越すのが辛くて耐らないとは決して考へなかつた。それよりも此機會を緊張出來る丈緊張させて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んで置く方が得策だと思案した。

斯う決心するや否や彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であつた。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の兩面に亙つて、窮地から救ひ出したものは、自分が持つて來た小切手だといふ事を、深く信じて

疑はなかつた彼女には、寧ろ重大な意味を有つてゐた。
其時津田は小切手を取り上げて、再びそれを眺めてゐた。其所に書いてある額は彼の要求するものより却て多かつた。然しそれを問題にする前、彼はお延に云つた。
「お延難有う。御蔭で助かつたよ」
お延の嘘は此感謝の言葉の後に隨いて、すぐ彼女の口を滑つて出てしまつた。
「昨日岡本へ行つたのは、それを叔父さんから貰ふためなのよ」
津田は案外な顏をした。岡本へ金策をしに行つて來いと夫から頼まれた時、それを斷然跳ね附けたものは、此小切手を持つて來たお延自身であつた。一週間と經たないうちに、何處からそんな好意が急に湧いて出たのだらうと思ふと、津田は不思議でならなかつた。それをお延は斯う說明した。
「そりや厭なのよ。此上叔父さんに御金の事なんかで迷惑を掛けるのは。けれども仕方がないわ、あなた。いざとなればその位の勇氣を出さなくつちや、妻としてのあたしの役目が濟みませんもの」
「叔父さんに譯を話したのかい」
「えゝ、そりや隨分辛かつたの」
お延は津田へ來る時の支度を大部分岡本に拵へて貰つてゐた。
「其上御金なんかには、些とも困らない顏を今日迄して來たんですもの。だから猶極りが惡いわ」
自分の性格から割り出して、斯ういふ場合の極りの惡さ加減は、津田にもよく呑み込めた。
「能く出來たね」

「云へば出来るわ、あなた。無いんぢやないんですもの。たゞ云ひ悪い丈よ」
「然し世の中には又御父さんだのお秀だのつていふ、六づかしやも揃つてるからな」
津田に却て自尊心を傷つけられたやうな顔付をした。お延はそれを取り繕ふやうに云つた。
「なにさう云ふ意味ばかりで貰つて来た訳でもないのよ。叔父さんにはあたしに指環を買つて呉れる約束があるのよ。御嫁に行くとき買つて遣らない代りに、今に買つて遣るつて、此間から左右云つてたのよ。だから其積りで呉れたんでせう大方。心配しないでも可いわ」
津田はお延の指を眺めた。其所には自分の買つて遣つた宝石がちやんと光つてゐた。

百十三

二人は何時になく融け合つた。
今迄お延の前で体面を保つために武装してゐた津田の心が我知らず弛んだ。自分の父が鄙吝らしく彼女の眼に映りはしまいかといふ懸念、或は自分の豫期以下に彼女が父の財力を見縊りはしまいかといふ恐れ、二つのものが原因になつて、成る可く京都の方面に曖昧な幕を張り通さうとした警戒が解けた。さうして彼はそれに気附かずにゐた。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力で其所へ押し流されて来た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所迄運んで来て呉れたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉しかつた。改めようとする決心なしに、改まつた夫の態度には自然があつた。
同時に津田から見たお延にも、亦それと同様の趣が出た。餘事は暫く問題外に措くとして、結婚後彼等

の間には、常に財力に關する妙な暗鬪があつた。さうしてそれは斯う云ふ因果から來た。普通の人のやうに富を誇りとしたがる津田に、其點に於て、自分を成る可く高くお延から評價させるために、父の財産を實際より遙か餘計な額に見積つた所を、彼女に向つて吹聽した。それ丈ならまだ可かつた。彼の弱點はもう一歩先へ乘り越す事を忘れなかつた。彼のお延に匂はせた自分は、今より大變樂な身分にゐる若旦那であつた。必要な場合には、幾何でも父から補助を仰ぐ事が出來た。たとひ仰がないでも月々の支出に困る氣色は決してなかつた。お延と結婚した時の彼は、もう是丈の言責を彼女に對して背負つて立つてゐたのと同じ事であつた。利巧な彼は、財力に重きを置く點に於て、彼に優るとも劣らないお延の性質をよく承知してゐた。極端に云へば、黃金の光から愛其物が生れると迄信ずる事の出來る彼には、何うかしてお延の手前を取り繕はなければならないといふ不安があつた。ことに彼は此點に於てお延から輕蔑されるのを深く恐れた。堀に依賴して每月父から助けて貰ふやうにしたのも、實は必要以外に斯んな魂膽が潛んでゐたからでもあつた。それでさへ彼は何處かに烟たい所を有つてゐた。少なくとも彼女に對する內と外には大分の距離があつた。眼から鼻へ拔けるやうなお延にはまた其距離が手に取る如くに分つた。必然の勢ひ彼女は其所に不滿を抱かざるを得なかつた。然し彼女は夫の虛僞を責めるよりも寧ろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はたゞ水臭いと思つた。何故男らしく自分の弱點を妻の前に曝け出して吳れないのかを苦にした。仕舞には、それを敢てしないやうな隔りのある夫なら、此方にも覺悟があると一人腹の中で極めた。すると其態度がまた木精のやうに津田の胸に反響した。二人は何處迄行つても、直かに向き合ふ譯に行かなかつた。しかも遠慮があるので、成るべく其所には觸れないやうに愼んでゐた。所がお秀との悶着が、

偶然にもお延の胸にある此扉を一度にがらりと敲き破つた。しかもお延自身毫も其所に氣が附かなかつた。彼女は自分を夫の前に開放しようといふ努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまつた。だから津田にも丸で別人のやうに快く見えた。

二人は斯ういふ風で、何時になく融け合つた。すると二人が融け合つた所に妙な現象がすぐ起つた。二人は今迄回避してゐた問題を平氣で取り上げた。二人は一所になつて、京都に對する善後策を講じ出した。二人には同じ豫感が働いた。此事件は是丈で片附くまいといふ不安が雙方の心を引き締めた。屹度お秀が何かするだらう。すれば直接京都へ向つて遣るに違ひない。さうして其結果は自然二人の不利益となるに極まつてゐる。――此所迄は二人の一致する點であつた。それから先が肝心の善後策になつた。然し其所へ來ると意見が區々で、容易に纏まらなかつた。

お延は仲裁者として第一に藤井の叔父を指名した。然し津田は首を掉つた。彼は叔父も叔母もお秀の味方である事をよく承知してゐた。次に津田の方から岡本は何うだらうと云ひ出した。けれども岡本は津田の父とそれ程深い交際がないと云ふ理由で、今度はお延が反對した。彼女は一層簡單に自分が和解の目的で、お秀の所へ行つて見ようかといふ案を立てた。是には津田も大した異存はなかつた。たとひ今度の事件の爲でなくとも、絶交を希望しない以上、何等かの形式のもとに、兩家の交際は復活されべき運命を有つてゐたからである。然しそれはそれとして、彼等はもう少し有效な方法を同時に講じて見たかつた。彼等は考へた。

仕舞に吉川の名が二人の口から同じやうに出た。彼の地位、父との關係、父から特別の依頼を受けて津

田の面倒を見て呉れてゐる目下の事情、――數へれば數へる程、彼には有利な條件が具はつてゐた。けれども其所には又一種の困難があつた。それ程親しく近附き悪い吉川に口を利いて貰はうとすれば、是非共其前に彼の細君を口説き落とさなければならなかつた。所が其細君はお延に取つて大の苦手であつた。お延は津田の提議に同意する前に、少し首を傾けた。細君と仲善しの津田は又充分成功の見込が其所に見えてゐるので、熱心にそれを主張した。仕舞にお延はとう〳〵我を折つた。

事件後の二人は打ち解けて斯んな相談をした後で心持よく別かれた。

百十四

前夜よく寐られなかつた疲勞の加はつた津田は其晩案外氣易く眠る事が出來た。翌日も亦透き通るやうな日差を眼に受けて、晴々しい空氣を硝子の外に眺めた彼の耳には、隣の洗濯屋で例の通りごし〳〵云はす音が、何處となしに秋の情趣を唆つた。

「……へ行くなら着て行かしやんせ。シツシツシ」

洗濯屋の男は、俗歌を唄ひながら、區切々々へシツシツシといふ言葉を入れた。それが如何にも忙しさうに手を働かせてゐる彼等の姿を津田に想像させた。

彼等は突然變な穴から白い物を擔いで屋根へ出た。それから物干へ上つて、其白いものを隙間なく秋の空へ廣げた。此所へ來てから、日毎に繰り返される彼等の所作は單調であつた。しかし勤勉であつた。それが果して何を意味してゐるか津田には解らなかつた。

彼は今の自分にもつと親切な事を頭の中で考へなければならなかつた。彼は吉川夫人の姿を憶ひ浮かべた。彼の未來、それを眼の前に描き出すのは、餘りに漠然過ぎた。それを纏めようとすると、何時でも吉川夫人が現はれた。平生から自分の未來を代表して呉れる此焦點には、此際特別な意味が附着してゐた。

一には此間訪問した時からの引掛りがあつた。其時二人の間に封じ込められたある問題を、ぽたりと彼の頭に點じたのは彼女であつた。彼には其後を聽くまいとする努力があつた。又聽かうとする意志も動いた。旣に封を切つたものが彼女であるとすれば、中味を披く權利は自分にあるやうにも思はれた。

二には京都の事が氣になつた。輕重を別にして考へると、此方が寧ろ急に逼つてゐた。一日も早く彼女に會ふのが得策のやうにも見えた。まだ四五日は何うしても動く事の出來ない身體を持ち扱つた彼は、昨日お延の歸る前に、彼女を自分の代りに夫人の所へ遣らうとした位であつた。それはお延に斷られたので、成立しなかつたけれども、彼は今でも其方が適當な遣り口だと信じてゐた。

お延が何故斯ういふ用向きを帶びて夫人を訪ねるのを嫌つたのか、津田は不思議でならなかつた。默つてゐてもそんな方面へ出入りをしたがる女の癖に。と彼は其時考へた。夫人の前へ出られるためにわざと用事を拵へて貰つたのと同じ事だのにと迄、自分の動議を強調して見た。然し何うしても引き受けたがらないお延を、たつて強ひる氣も亦其場合の彼には起らなかつた。それは夫婦打ち解けた氣分にも起因してゐたが、一方から見ると、またお延の辭退しやうにも關係してゐた。彼女は自分が行くと必ず失敗するからと云つた。然し其理由を述べる代りに、津田なら屹度成功するに違ひないからと云つた。成功するにしても、病院を出た後でなければ會ふ譯に行かないんだから、遲くなる虞れがあると津田が注意した時、お

延は又意外な返事を彼に與へた。彼女は夫人が屹度病院へ見舞に來るに違ひないと斷言した。其時機を利用しさへすれば、一番自然に又一番簡單に事が運ぶのだと主張した。

津田は洗濯屋の干し物を眺めながら、昨日の問答を斯んな風に、夫から夫へと手元へ手繰り寄せて點檢した。すると吉川夫人は見舞に來て呉れさうでもあつた。又來て呉れさうにもなかつた。つまりお延が何故來る方をさう堅く主張したのか解らなくなつた。彼は芝居の食堂で晩餐の卓に着いたといふ大勢を眼先に想像して見た。お延と吉川夫人の間に何んな會話が取り換はされたかを、小説的に組み合はせても見た。けれども其會話の何處から此豫言が出て來たかの點になると、自分に解らないものとして投げて仕舞ふより外に手はなかつた。彼は既に幾分の直覺、不幸にして天が彼に與へて呉れなかつた幾分の直覺を、お延に許してゐた。其點で何時でも彼女を少し畏れなければならなかつた彼には、杜撰に其所へ觸れる勇氣がなかつた。と同時に、全然其直覺に信頼する事の出來ない彼は、何とかして此方から吉川夫人を病院へ呼び寄せる工夫はあるまいかと考へた。彼はすぐ電話を思ひ附いた。横着にも見えず、殊更でもなし、自然に彼女が此所迄出向いて來るやうな電話の掛け方はなからうかと苦心した。然し其苦心は水の泡を製造する努力と略似たものであつた。いくら骨を折つて拵へても、すぐ後から消えて行く丈であつた。根本的に無理な空想を實現させようと巧らんでゐるのだから仕方がないと氣が附いた時、彼は一人で苦笑して又硝子越しに表を眺めた。

表に何時か風立つた。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干し物と一所になつて輕く搖れてゐた。それを掠めるやうに懸け渡された三本の電線も、餘所と調子を合はせるやうにふら〱と動いた。

百十五

下から上がつて來た醫者には、其時の津田が如何にも退屈さうに見えた。顏を合はせるや否や彼は、「如何です」と訊いた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるやうに云つた。それから彼は津田のためにガーゼを取り易へて呉れた。

「まだ創口の方はそつとして置かないと、危險ですから」

彼は斯う注意して、ぢかに局部を抑へ附けてゐる個所を少し緩めて見たら、血が滲染み出したといふ話を用心のためにして聽かせた。

取り易へられたガーゼは一部分に過ぎなかつた。要所を剝がすと、血が迸るかも知れないといふ事情では、津田も無理をして宅へ歸る譯に行かなかつた。

「矢つ張り豫定通りの日數は動かずにゐるより外に仕方がないでせうね」

醫者は氣の毒さうな顏をした。

「なに經過次第ぢや、それ程大事を取るにも及ばないんですがね」

それでも醫者は、時間と經濟に不足のない、何處から見ても餘裕のある患者として、津田を取扱つてゐるらしかつた。

「別に大した用事が御有りになる譯でもないんでせう」

「えゝ一週間位は此所で暮らしても可いんです。然し臨時に一寸事件が起つたので……」

「はあ。――然しもう直きです。もう少しの辛防です」

是より外に云ひ様のなかつた醫者は、外來患者の方がまだ込み合はないためか、其所へ坐つて二三の雜談をした。中で、彼がまだ助手としてある大きな病院に勤めてゐる頃に起つたといふ一口話が、思はず津田を笑はせた。看護婦が藥を間違へたために患者が死んだのだといふ嫌疑をかけて、是非其看護婦を殴らせろと、醫局へ逼つた人があつたといふ其話は、津田から見ると如何にも滑稽であつた。斯ういふ性質の人と正反對に生み附けられた彼は、其所に馬鹿らしさ以外の何物をも見出す事が出來なかつた。平たく云ひ直すと、彼は向うの短所ばかりに氣を奪られた。さうして其裏側へ暗に自分の長所を點綴して喜んだ。だから自分の短所には決して思ひ及ばなかつたと同一の結果に歸着した。

醫者の診察が濟んだ後で、彼は下らない病氣のために一週間も一つ所に括り附けられなければならない現在の自分を悲觀したくなつた。氣の所爲か彼には其現在が大變貴重に見えた。もう少し治療を後廻しにすれば好かつたといふ後悔さへ腹の中には起つた。

彼は又吉川夫人の事を考へ始めた。何うかして彼女を此所へ呼び附ける工夫はあるまいかと思ふよりも、何うかして彼女が此所へ來て呉れゝば可いがと思ふ方に、心の調子が段々移つて行つた。自分を見破られるといふ意味で、平生からお延の直覺を惡く評價してゐたにも拘らず、例外な此場合丈には、それが中つて欲しいやうな氣も何處かでした。

彼はお延の置いて行つた書物の中から、其一冊を抽いた。岡本の所藏にかゝる丈あるなと首肯かせる樣な趣が其所此所に見えた。不幸にして彼は諧謔を解する事を知らなかつた。中に書いてある活字の意味は、

頭に通じても胸にはそれ程應へなかつた。頭にさへ呑み込めないのも續々出て來た。責任のない彼は、自分に手頃なのを見附けようとして、どし／＼飛ばして行つた。すると偶然下のやうなのが彼の眼に觸れた。

「娘の父が青年に向つて、あなたは私の娘を愛して御出でなのですかと訊いたら、青年は、愛するの愛さないのつていふ段ぢやありません、御嬢さんの爲なら死なうと迄思つてゐるんです。あの懐かしい眼で、優しい眼遣ひをたゞの一度でもして頂く事が出來るなら、僕はもうそれ丈で死ぬのです。すぐあの二百尺もあらうといふ巖の上から、岩の上へ落ちて、滅茶苦茶な血だらけな塊りになつて御覽に入れます。と答へた。娘の父は首を掉つて、實を云ふと、私も少し噓を吐く性分だが、私の家のやうな小人數な家族に、噓吐きが二人出來るのは、少し考へものですからね。と答へた」

噓吐きといふ言葉が何時もより皮肉に津田を苦笑させた。彼は腹の中で、噓吐きな自分を肯ふ男であつた。同時に他人の噓をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならない男であつた。寧ろ其反對に生活する事の出來るために、噓が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人世觀の下に生きて來ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はたゞ行つたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなる丈であつた。

「愛と虛僞」

自分の讀んだ一口噺から此二字を暗示された彼は、二つのものの關係を何う說明して可いかに迷つた。彼は自分に大事なある問題の所有者であつた。內心の要求上是非共それを解決しなければならない彼は、實驗の機會が彼に與へられない限り、頭の中で徒らに考へなければならなかつた。哲學者でない彼は、自

身に今迄行つて來た人世觀をすら、組織正しい形式の下に、わが眼の前に並べて見る事が出來なかつたのである。

百十六

津田は纏らない事をそれからそれへと考へた。其うち何時か午過ぎになつてしまつた。彼の頭は疲れてゐた。もう一つ事を長く思ひ續ける勇氣がなくなつた。然し秋とは云ひながら、獨り寐てゐるには日が餘りに長過ぎた。彼は退屈を感じ出した。さうして又お延の方に想ひを馳せた。彼女の姿を今日も自分の眼の前に豫期してゐた彼は横着であつた。今迄彼女の手前憚らなければならないやうな事ばかりを、散々考へ拔いた揚句、それが厭になると、すぐお延はもう來さうなものだと思つて平氣でゐた。自然頭の中に湧いて出るものに對して、責任は有てないといふ辯解さへ其時の彼にはなかつた。彼の見たお延に不可解な點がある代りに、自分もお延の知らない事實を、腕の中に納めてゐるのだ位の料簡は、遠くの方で働いてゐたかも知れないが、それさへ、いざとならなければ判然した言葉になつて、彼の頭に現はれて來る筈がなかつた。

お延は中々來なかつた。お延以上に待たれる吉川夫人は固より姿を見せなかつた。津田は面白くなかつた。先刻から近くで誰かが謠つてゐる、彼の最も嫌ひな謠の聲が、不快に彼の耳を刺激した。彼の記憶にある謠曲指南といふ細長い看板が急に思ひ出された。それは洗濯屋の筋向うに當たる二階建の家であつた。二階が稽古をする座敷にでもなつてゐると見えて、距離の割に聲の方が無暗に大きく響いた。他が勝手に

遣つてゐるものを止めさせる權利を何處にも見出だし得ない彼は、彼の不平を何うする事も出來なかつた。彼はたゞ早く退院したいと思ふ丈であつた。

　柳の木の後にある赤い煉瓦造りの倉に、山形の下に一を引いた屋號のやうな紋が附いてゐて、其左右に何の爲とも解らない、大きな折釘に似たものが壁の中から突き出してゐる所を、津田が見るとも見ないとも片付かない眼で、ぼんやり眺めてゐた時、遠慮のない足音が急に聞こえて、誰かが階子段を、どしどし上つて來た。津田はおやと思つた。此足音の調子から、其主がもう七分通り、彼の頭の中では推定されてゐた。

　彼の豫覺はすぐ事實になつた。彼が室の入口に眼を轉ずると、殆どおつつかつつに、小林は貰ひ立ての外套を着た儘つか／＼入つて來た。

「何うかね」

　彼はすぐ胡坐をかいた。津田は寧ろ苦しさうな笑ひを挨拶の代りにした。何しに來たんだといふ心持が、顏を見ると共にもう起つてゐた。

「是だ」と彼は外套の袖を津田に突き附けるやうにして見せた。

「難有う、御蔭で此冬も生きて行かれるよ」

　小林はお延の前で云つたと同じ言葉を津田の前で繰り返した。然し津田はお延からそれを聽かされてゐなかつたので、別に皮肉とも思はなかつた。

「奥さんが來たらう」

小林は又斯う訊いた。
「來たさ。來るのは當り前ぢやないか」
「何か云つてたらう」
津田は「うん」と答へようか、「いゝや」と答へようかと思つて、少し躊躇した。彼は小林が何んな事をお延に話したか、それを知りたかつた。それを彼の口から此所で繰り返させさへすれば、自分の答は「うん」だらうが、「いゝえ」だらうが、同じ事であつた。然し何方が成功するか其所は咄嗟の際に極める譯に行かなかつた。所が其態度が意外な意味になつて小林に反響した。
「奥さんが怒つて來たな。屹度そんな事だらうと、僕も思つてたよ」
容易に手掛りを得た津田は、すぐそれに縋り附いた。
「君があんまり苛めるからさ」
「いや苛めやしないよ。たゞ少し調戯ひ過ぎたんだ、可哀相に。泣きやしなかつたかね」
津田は少し驚いた。
「泣かせる樣な事でも云つたのかい」
「なに何うせ僕の云ふ事だから出鱈目さ。つまり奥さんは、岡本さん見たいな上流の家庭で育つたので、天下に僕のやうな愚劣な人間が存在してる事をまだ知らないんだ。それで一寸した事迄苦にするんだらうよ。あんな馬鹿に取り合ふなと君が平生から教へて置きさへすれば夫で可いんだ」
「さう教へてゐる事はゐるよ」と津田は負けずに遣り返した。小林はは〻と笑つた。

「まだ少し訓練が足りないんぢやないか」
津田は言葉を改めた。
「然し君は一體何んな事を云つて、彼奴に調戯つたのかい」
「そりやもうお延さんから聽いたらう」
「いゝや聽かない」
二人は顔を見合はせた。互の腹を忖度しようとする試みが、同時に其所に現はれた。

百十七

津田が小林に本音を吹かせようとする所には、ある特別の意味があつた。彼はお延の性質を其著しい斷面に於てよく承知してゐた。お秀と正反對な彼女は、飽く迄素直に、飽く迄閑雅な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、何うしても亦彼の自由にならない點を、同様な程度でちやんと有つてゐた。彼女の才は一つであつた。けれども其應用は兩面に亙つてゐた。是は夫に知らせてならないと思ふ事、又は隱して置く方が便宜だと極めた事、さういふ場合になると、彼女は全く津田の手に餘る細君であつた。彼女が柔順であればある程、津田は彼女から何も掘り出す事が出來なかつた。彼女と小林の間に昨日何んな遣り取りが起つたか、それはお秀の騷ぎで委細を訊く暇がないうちに、時間が經つてしまつたのだから、事實已むを得ないとしても、もし左右いふ交渉のない時に、津田から詳しい有りの儘を問はれたら、お延はおいそれと彼の希望通り、綿密な返事を惜しまずに、彼の要求を滿足させたらうかと考へると、其所に

は大きな疑問があつた。お延の平生から推して、津田は寧ろ胡魔化されるに違ひないと思つた。ことに彼がもしやと思つてゐる點を、小林が遠慮なく喋舌つたとすれば、お延は猶の事、それを聽かない振をして、默つて夫の前を通り拔ける女らしく見えた。少なくとも津田の觀察した彼女にはそれ丈の餘裕が充分あつた。既にお延の方を諦めなければならないとすると、津田は自分に必要な知識の出所を、小林に向つて求めるより外に仕方がなかつた。

小林は何だか其所を承知してゐるらしかつた。

「なに何も云やしないよ。嘘だと思ふなら、もう一遍お延さんに訊いて見給へ。尤も僕は歸りがけに惡いと思つたから、詫つて來たがね。實を云ふと、何で詫つたか、僕自身にも解らない位のものさ」

彼は斯う云つて嘯いた。それからいきなり手を延べて、津田の枕元にある讀み掛けの書物を取り上げて、一分ばかりそれを默讀した。

「斯んなものを讀むのかね」と彼は左も輕蔑した口調で津田に訊いた。彼はぞんざいに頁を剝繰りながら、終りの方から逆に始めへ來た。さうして其所に岡本といふ小さい見留印を見出した時、彼は「ふん」と云つた。

「お延さんが持つて來たんだな。道理で妙な本だと思つた。――時に君、岡本さんは金持だらうね」

「そんな事は知らないよ」

「知らない筈はあるまい。だつてお延さんの里ぢやないか」

「僕は岡本の財産を調べた上で、結婚なんかしたんぢやないよ」

「さうか」

此單純な「さうか」が變に津田の頭に響いた。「岡本の財産を調べないで、君が結婚するものか」といふ意味にさへ取れた。

「岡本はお延の叔父だぜ、君知らないのか、里でも何でもありやしないよ」

「さうか」

小林は又同じ言葉を繰り返した。津田は猶不愉快になつた。

「そんなに岡本の財産が知りたければ、調べて遣らうか」

小林は「えへゝ」と云つた。「貧乏すると他の財産迄苦になつて仕樣がない」

津田は取り合はなかつた。それで其問題を切り上げるかと思つてゐると、小林はすぐ元へ歸つて來た。

「然し幾何位あるんだらう、本當の所」

斯う云ふ態度は正しく彼の特色であつた。さうして何時でも二樣に解釋する事が出來た。頭から向うを馬鹿だと認定して仕舞へばそれ迄であると共に、一度此方が馬鹿にされてゐるのだと思ひ出すと、又際限もなく馬鹿にされてゐる譯にもなつた。彼に對する津田は、實の所半信半疑の眞中に立つてゐた。だから其所に幾分でも自分の弱點が潛在する場合には、馬鹿にされる方の解釋に傾かざるを得なかつた。たゞ相手を附け上がらせない用心をするより外に仕方がなかつた彼は、たゞ微笑した。

「少し借りて遣らうか」

「借りるのは厭だ。貰ふなら貰つても可いがね。――いや貰ふのも御免だ、何うせ呉れる氣遣ひはない

んだから。仕方がなければ、まあ取るんだな」小林ははゝと笑つた。「一つ朝鮮へ行く前に、面白い秘密でも提供して、岡本さんから少し取つて行くかな」

津田はすぐ話しを其朝鮮へ持つて行つた。

「時に何時立つんだね」

「まだ確り判らない」

「然し立つ事は立つのかい」

「立つ事は立つ。君が催促しても、しなくつても、立つ日が來ればちやんと立つ」

「僕は催促をするんぢやない、時間があつたら君の爲に送別會を開いて遣らうといふのだ」

今日小林から充分な事が聽けなかつたら、其送別會でも利用して遣らうと思ひ附いた津田は、斯う云つて豫備としての第二の機會を暗に作り上げた。

百十八

故意だか偶然だか、津田の持つて行かうとする方面へは中々持つて行かれない小林に對して、此注意は寧ろ必要かも知れなかつた。彼は何時迄も津田の問に應ずるやうな又應じないやうな態度を取つた。さうして執着く自分自身の話題にばかり纏綿はつた。それが又津田の訊かうとする事と、間接ではあるが深い關係があるので、津田には蒼蠅くもあり、焦れつたくもあつた。何となく遠廻しに痛振られるやうな氣もした。

「君吉川と岡本とは親類かね」と小林が云ひ出した。

津田には此質問が無邪氣とは思へなかつた。

「親類ぢやない、たゞの友達だよ。何時かも君が訊いた時に、さう云つて話したぢやないか」

「さうか、あんまり僕に關係の遠い人達の事だもんだから、つい忘れちまつた。然し彼等は友達にしても、たゞの友達ぢやあるまい」

「何を云つてるんだ」

津田はつい其後へ馬鹿野郎と附け足したかつた。

「いや、餘程の親友なんだらうといふ意味だ。そんなに怒らなくつても可からう」

吉川と岡本とは、小林の想像する通りの間柄に違ひなかつた。單なる事實はたゞそれ丈であつた。然し其裏に、津田とお延を貼り附けて、裏表の意味を同時に眺める事は自由に出來た。

「君は仕合せな男だな」と小林が云つた。「お延さんさへ大事にしてゐれば間違ひはないんだから」

「だから大事にしてゐるよ。君の注意がなくつたつて、其位の事は心得てゐるんだ」

「さうか」

小林は又「さうか」といふ言葉を使つた。此眞面目腐つた「さうか」が重なるたびに、津田は彼から脅やかされるやうな氣がした。

「然し君は僕などと違つて聰明だから可い。他はみんな君がお延さんに降參し切つてゐるやうに思つてるぜ」

「他とは誰の事だい」
「先生でも奥さんでもさ」
藤井の叔父や叔母から、さう思はれてゐる事は、津田にも略見當が附いてゐた。
「降參し切つてゐるんだから、さう見えたつて仕方がないさ」
「さうか。――然し僕のやうな正直者には、迚も君の眞似は出來ない。君は矢つ張りえらい男だ」
「君が正直で僕が僞物なのか。其僞物が又偉くつて正直者は馬鹿なのか。君は何時又そんな哲學を發明したのかい」
「哲學は餘程前から發明してゐるんだがね。今度改めてそれを發表しようと云ふんだ、朝鮮へ行くに就いて」
津田の頭に妙な暗示が閃めかされた。
「君旅費はもう出來たのか」
「旅費は何うでも出來る積りだがね」
「社の方で出して呉れる事に極まつたのかい」
「いゝや。もう先生から借りる事にしてしまつた」
「さうか。そりや好い具合だ」
「些とも好い具合ぢやない。僕は是でも先生の世話になるのが氣の毒で堪らないんだ」
斯ういふ彼は、平氣で自分の妹のお金さんを藤井に片附けて貰ふ男であつた。

「いくら僕が恥知らずでも、此上金の事で、先生に迷惑を懸けては濟まないからね」

津田は何とも答へなかつた。小林は無邪氣に相談でもするやうな調子で云つた。

「君何處かに強奪る所はないかね」

「まあないね」と云ひ放つた津田は、わざとそつぽを向いた。

「ないかね、何處かにありさうなもんだがな」

「ないよ。近頃は不景氣だから」

「君は何うだい。世間は兎に角、君丈は何時も景氣が好ささうぢやないか」

「馬鹿云ふな」

岡本から貰つた小切手も、お秀の置いて行つた紙包も、みんなお延に渡してしまつた後の彼の財布は空と同じ事であつた。よしそれが手元にあつたにした所で、彼は此場合小林のために金錢上の犧牲を拂ふ氣は起らなかつた。第一事が其所迄切迫して來ない限り、彼は相談に應ずる必要を毫も認めなかつた。不思議に小林の方でも、それ以上津田を押さなかつた。其代り突然妙な所へ話しを切り出して彼を驚かした。

其朝藤井へ行つた彼は、其所で例もするやうに晝飯の馳走になつて、長い時間を原稿の整理で過ごしてゐるうちに、玄關の格子が開いたので、ひよいと自分で取次に出た。さうして其所に偶然お秀の姿を見出だしたのである。

小林の話しを其所迄聽いた時、津田は思はず腹の中で「畜生つ先廻りをしたな」と叫んだ。然しただそ

れ丈では濟まなかつた。小林の頭にはまだ津田を驚かせる材料が殘つてゐた。

百十九

然し彼の驚かし方には、また彼一流の順序があつた。彼は一番始めに斯んな事を云つて津田に調戲つた。

「兄妹喧嘩をしたんだつて云ふぢやないか。先生も奧さんも、お秀さんに喋舌り附けられて弱つてたぜ」

「君はまた傍でそれを聽いてゐたのか」

小林は苦笑しながら頭を搔いた。

「なに聽かうと思つて聽いた譯でもないがね。まあ天然自然耳へ入つたやうなものだ。何しろ喋舌る人がお秀さんで、喋舌らせる人が先生だからな」

お秀には何處か片意地で一本調子な趣があつた。それに一種の刺激が加はると、平生の落附さが全く無くなつて、不斷と打つて變つた猛烈さをひよつくり出現させる所に、津田とは丸で違つた特色があつた。叔父は又叔父で、何でも構はず底の底迄突き留めなければ承知の出來ない男であつた。單に言葉の上丈でも可いから、前後一貫して俗にいふ辻褄が合ふ最後迄行きたいといふのが、斯ういふ場合相手に對する彼の態度であつた。筆の先で思想上の問題を始終取り扱ひ附けてゐる癖が、活字を離れた彼の日常生活にも憑り移つてしまつた結果は、其所によく現はれた。彼は相手に幾何でも口を利かせた。其代り又幾何でも質問を掛けた。それが或程度迄行くと、質問といふ性質を離れて、詰問に變化する事さへ屢あつた。

津田は心の中で、此叔父と妹と對坐した時の樣子を想像した。ことによると其所で又一波瀾起したので

はあるまいかといふ疑ひさへ出た。然し小林に對する手前もあるので、上部はわざと高く出た。

「大方滅茶苦茶に僕の惡口でも云つたんだらう」

小林は御挨拶にたゞ高笑ひをした後で、斯んな事を云つた。

「だが君にも似合はないね、お秀さんと喧嘩をするなんて」

「僕だからしたのさ。彼奴だつて堀の前なら、もつと遠慮するあね」

「成程さうかな。世間ぢやよく夫婦喧嘩つていふが、夫婦喧嘩より兄妹喧嘩の方が普通なものかな。僕はまだ女房を持つた經驗がないから、其方のはうの消息は丸で解らないが、是でも妹はあるから兄妹の味ならよく心得てる積りだ。君何だぜ。僕のやうな兄でも、妹と喧嘩なんかした覺えはまだないぜ」

「そりや妹次第さ」

「けれども其所は又兄次第だらう」

「いくら兄だつて、少しは腹の立つ場合もあるよ」

小林はにや〳〵笑つてゐた。

「だが、いくら君だつて、今お秀さんを怒らせるのが得策だとは思つてやしまい」

「そりや當り前だよ。好んで誰が喧嘩なんかするもんか。あんな奴と」

小林は益笑つた。彼は笑ふたびに一調子づゝ餘裕を生じて來た。

「蓋し已むを得なかつた譯だらう。然しそれは僕の云ふ事だ。僕は誰と喧嘩したつて構はない男だ。誰と喧嘩したつて損をしつこない境遇に沈淪してる人間だ。喧嘩の結果がもし何處かにあるとすれば、そ

れは、僕の損にやならない。何となれば、僕は未だ曾て損になるべき何物をも最初から有つてゐないんだからね。要するに喧嘩から起り得る凡ての變化は、みんな僕の得になる丈なんだから、僕は寧ろ喧嘩を希望しても可い位なものだ。けれども君は違ふよ。君の喧嘩に決して得にやならない。さうして君程又損得利害をよく心得てゐる男は世間にたんとないんだ。たゞ心得てるばかりぢやない、君はさうした心得の下に、朝から晩迄寐たり起きたりしてゐられる男なんだ。少なくとも左右しなければならないと始終考へてゐる男なんだ。好いかね。其君にして――」

津田は面倒臭さうに小林を遮つた。

「よし解つた。解つたよ。つまり他と衝突するなと注意して呉れるんだらう。ことに君と衝突しちや僕の損になる丈だから、成るべく事を穩便にしろといふ忠告なんだらう。君の主意は」

小林は惚けた顔をして澄まし返つた。

「何僕とり？僕はちつとも君と喧嘩をする氣はないよ」

「もう解つたといふのに」

「解つたらそれで可いがね。誤解のないやうに注意して置くが、僕は先刻からお秀さんの事を問題にしてゐるんだぜ、君」

「それも解つてるよ」

「解つてるつて、そりや京都の事だらう。彼方が不首尾になるといふ意味だらう」

「勿論さ」

「所が君それ丈ぢやないぜ。まだ外にも響いて來るんだぜ、氣を附けないと」

小林は其所で句を切つて、自分の言葉の影響を試驗するために、津田の顏を眺めた。津田は果して平氣でゐる事が出來なかつた。

百二十

小林はこゝだといふ時機を捕まへた。

「お秀さんはね君」と云ひ出した時の彼は、もう津田を擒にしてゐた。

「お秀さんはね君、先生の所へ來る前に、もう一軒外へ廻つて來たんだぜ。其一軒といふのは何處の事だか、君に想像が附くか」

津田には想像が附かなかつた。少なくとも此事件に就いて彼女が足を運びさうな所は、藤井以外にある筈がなかつた。

「そんな所は東京にないよ」

「いやあるんだ」

津田は仕方なしに、頭の中で又あれかこれかと物色して見た。然しいくら考へても、見當たらないものは矢つ張り見當たらなかつた。仕舞に小林が笑ひながら、其宅の名を云つた時に、津田は果して驚いたやうに大きな聲を出した。

「吉川？吉川さんへ又何うして行つたんだらう。何も關係がないぢやないか」

津田は不思議がらざるを得なかつた。

たゞ吉川と堀を結び附ける丈の事なら、津田にも容易に出來た。強い空想の援けに依る必要も何もなかつた。津田夫婦の結婚するとき、表向き媒妁の勞を取つて呉れた吉川夫婦と、彼の妹にあたるお秀と、其夫の堀とが社交的に關係を有つてゐるのは、誰の眼にも明らかであつた。然しその緣故で、此問題を提げたお秀が、とくに吉川の門に向ふ理由は何處にも發見出來なかつた。

「たゞ訪問のために行つた丈だらう。單に敬意を拂つたんだらう」

「所が左右でないらしいんだ。お秀さんの話しを聽いてゐると」

津田は俄に其話しが聽きたくなつた。小林は彼を滿足させる代りに注意した。

「然し君といふ男は、非常に用意周到なやうで何處か拔けてるね。あんまり拔けまい拔けまいとするから、自然手が廻りかねる譯かね。今度の事だつて、左右ぢやないか、第一お秀さんを怒らせる法はないよ、君の立場として。それから怒らせた以上、吉川の方へ突つ走らせるのは愚だよ。其上吉川の方へ向いて行く筈がないと思ひ込んで、初手から高を括つてゐるなんぞは、君の平生にも似合はないぢやないか」

結果の上から見た津田の隙間を探し出す事は小林にも容易であつた。

「一體君のファーザーと吉川とは友達だらう。さうして君の事はファーザーから吉川に萬事宜しく願つてあるんだらう。其所へお秀さんが馳け込むのは當り前ぢやないか」

津田は病院へ來る前、社の重役室で吉川から聽かされた「年寄に心配を掛けては不可ない。君が東京で何をしてゐるか、ちやんと此方で解つてゐるんだから、もし不都合な事があれば、京都へ知らせて遣る丈だ。

用心しろ」といふ意味の言葉を思ひ出した。それは今から解釋して見ても冗談半分の訓戒に過ぎなかつた。然しもしそれを此所で眞面目一式な文句に轉倒するものがあるとすれば、其作者はお秀であつた。

「隨分突飛な奴だな」

突飛といふ性格が彼の家傳にない丈彼の批評には意外といふ觀念が含まれてゐた。

「一體何を云やがつたらう、吉川さんで。――彼奴の云ふ事を眞向に受けてゐると、可いのは自分丈で、外のものはみんな惡くなつちまふんだから困るよ」

津田の頭には直接の影響以上に、もつと遠くの方にある大事な結果がちら〳〵した。吉川に對する自分の信用、吉川と岡本との關係、岡本とお延との緣合、それ等のものがお秀の遣り口一つで何う變化して行くか分らなかつた。

「女は淺墓なもんだからな」

此言葉を聽いた小林は急に笑ひ出した。今迄笑つたうちで一番大きな其笑ひ方が、津田をはつと思はせた。彼は始めて自分が何を云つてゐるかに氣が附いた。

「そりや何うでも可いが。お秀が吉川へ行つて何んな事を喋舌つたのか、叔父に話してゐた所を君が聽いたのなら、教へて呉れ玉へ」

「何かしきりに云つてたがね。實をいふと、僕は面倒だから碌に聽いちやゐなかつたよ」

斯う云つた小林は肝心な所へ來て、知らん顏をして圏外へ出てしまつた。津田は失望した。其失望を暫く味はつた後で、小林は又圏内へ歸つて來た。

「しかしもう少し待つて玉へ。否でも應でも聽かされるよ」

津田はまさかお秀が又來る譯でもなからうと思つた。

「なにお秀さんぢやない。お秀さんは直かに來やしない。其代りに吉川の細君が來るんだ。噓ぢやないよ。此耳で慥かに聽いて來たんだもの。お秀さんは細君の來る時間迄明言した位だ。大方もう少ししたら來るだらう」

お延の豫言は中たつた。津田が何うかして呼び附けたいと思つてゐる吉川夫人は、何時の間にか來る事になつてゐた。

百二十一

津田の頭に二つのものが相繼いで閃めいた。一つは是から此所へ來る其吉川夫人を旨く取扱はなければならないといふ事前の暗示であつた。彼女の方から病院迄足を運んで呉れる事は、豫定の計畫から見ても、彼の最も希望する所には違ひなかつたが、來訪の意味がこゝに新しく附け加へられた以上、それに對する彼の應答振も變へなければならなかつた。此場合に於ける夫人の態度を想像に描いて見た彼は、多少の不安を感じた。お秀から偏見を注ぎ込まれた後の夫人と、まだ反感を煽られない前の夫人とは、彼の眼に映る所丈でも、大分違つてゐた。けれども其所には平生の自信も亦伴なつてゐた。彼には夫人の持つてくる偏見と反感を、一場の會見で、充分引繰り返して見せるといふ覺悟があつた。少なくとも此所で夫丈の事をして置かなければ、自分の未來が危なかつた。彼は三分の不安と七分の信力をもつて、彼女の來訪を待ち

受けた。

殘る一つの閃きが、お延に對する態度を、もう一遍臨時に變更する便宜を彼に教へた。先刻迄の彼は退屈の餘り彼女の姿を刻々に待ち設けてゐた。然し今の彼には別途の緊張があつた。彼は全然異なつた方面の刺激を豫想した。お延はもう不用であつた。といふよりも、來られては却て迷惑であつた。其上彼はただ二人、夫人と差向ひで話して見たい特殊な問題も控へてゐた。彼はお延と夫人が此所で一所に落ち合ふ事を、是非共防がなければならないと思ひ定めた。

附帶條件として、小林を早く追拂ふ手段も必要になつて來た。然るに其小林は今にも吉川夫人が見えるやうな事を云ひながら、自分の歸る氣色を何處にも現はさなかつた。彼は他の邪魔になる自分を苦にする男ではなかつた。時と場合によると、それと知つて、わざ／＼邪魔迄しかねない人間であつた。しかも其所迄行つて、實際氣が附かずに迷惑がらせるのか、又は心得があつて故意に困らせるのか、其判斷を確と他に與へずに平氣で切り拔けてしまふ焦慮れつたい人物であつた。

津田は欠伸をして見せた。彼の心持と全く釣り合はない此所作が彼を二つに割つた。何處かそは／＼しながら如何にも所在なささうに小林と應對する所に、中斷された氣分の特色が斑になつて出た。それでも小林は澄ましてゐた。枕元にある時計を又取り上げた津田は、それを置くと同時に、已むを得ず質問を掛けた。

「君何か用があるのか」

「ない事もないんだがね。なにそりや今に限つた譯でもないんだ」

津田には彼の意味が略解つた。然しまだ降參する氣にはなれなかつた。と云つて、すぐ擊退する勇氣は猶更なかつた。彼は仕方なしに默つてゐた。すると小林が斯んな事を云ひ出した。

「僕も吉川の細君に會つて行かうかな」

冗談ぢやないと津田は腹の中で思つた。

「何か用があるのかい」

「君はよく用用つて云ふが、何も用があるから人に會ふとは限るまい」

「然し知らない人だからさ」

「知らない人だから一寸會つて見たいんだ。何んな樣子だらうと思つてね。一體僕は金持の家庭へ入つた事もないし、又そんな人と交際つた例もない男だから、つい斯ういふ機會に、一寸でも可いから、會つて置きたくなるのさ」

「見世物ぢやあるまいし」

「いや單なる好奇心だ。それに僕は閑だからね」

津田は呆れた。彼は小林のやうなみすぼらしい男を、友達の内に有つてゐるといふ證據を、夫人に見せるのが厭でならなかつた。あんな人と附合つてゐるのかと輕蔑された日には、自分の未來に迄關係すると考へた。

「君も餘程呑氣だね。吉川の奧さんが今日此所へ何しに來るんだか、君だつて知つてるぢやないか」

「知つてる。――邪魔かね」

津田は最後の引導を渡すより外に途がなくなつた。

「邪魔だよ。だから來ないうちに早く歸つて呉れ」

小林は別に怒つた樣子もしなかつた。

「さうか、ぢや歸つても可い。歸つても可いが、其代り用丈は云つて行かう、折角來たものだから」

面倒になつた津田は、とう〳〵自分の方から其用を云つてしまつた。

「金だらう。僕に相當の御用なら承はつても可い。然し此所には一文も持つてゐない。と云つて、又外套のやうに留守へ取りに行かれちや困る」

小林はにや〳〵笑ひながら、おや何うすれば可いんだといふ問を顏色で掛けた。まだ小林に聽く事の殘つてゐる津田は、出立前もう一遍彼に會つて置く方が便宜であつた。けれども彼とお延と落ち合ふ懸念のある病院では都合が惡かつた。津田は送別會といふ名の下に、彼等の出會ふべき日と時と場所とを指定した後で、漸く此厄介者を退去させた。

百二十二

津田はすぐ第二の豫防策に取り掛かつた。彼は床の上に置かれた小型の化粧箱を取り除けて、其下から例のレターペーパーと同じラヹンダー色の封筒を引き拔くや否や、すぐ萬年筆を走らせた。今日は少し都合があるから、見舞に來るのを見合せて呉れといふ意味を、簡單に書き下した手紙は一分掛かるか掛からないうちに出來上がつた。氣の急いた彼には、それを讀み直す暇さへ惜しかつた。彼はすぐ封をしてしま

つた。さうして中味の不完全なために、お延が何んな疑ひを起すかも知れないといふ事には、少しの顧慮も拂はなかつた。平生の用心を彼から奪つた此場合は、彼を忽卒しくしたのみならず彼の心を一直線にしなければ已まなかつた。彼は手紙を持つた儘、すぐ二階を下りて看護婦を呼んだ。

「一寸急な用事だから、すぐ是を持たせて車夫を宅迄遣つて下さい」

看護婦は「へえ」と云つて封書を受け取つたなり、何處に急な用事が出來たのだらうといふ顏をして、宛名を眺めた。津田は腹の中で往復に費やす車夫の時間さへ考へた。

「電車で行くやうにして下さい」

彼は行き違ひになる事を恐れた。手紙を受け取らない前にお延が病院へ來ては折角の努力も無駄になる丈であつた。

二階へ歸つて來た後でも、彼はそればかりが苦になつた。さう思ふと、お延がもう宅を出て、電車へ乘つて、此方の方角へ向いて動いて來るやうな氣さへした。自然それと一所に頭の中に纒附はるのは小林であつた。もし自分の目的が達せられない先に、細君が階子段の上に、すらりとした其姿を現はすとすれば、それは全く小林の罪に相違ないと彼は考へた。貴重な時間を無駄に費やさせられた揚句、賴むやうにして歸つて貰つた彼の後姿を見送つた津田は、それでももう少しで刻下の用を辨ずるために、小林を利用する所であつた。「面倒でも歸りに一寸宅へ寄つて、今日來てはいけないとお延に注意して呉れ。」斯ういふ言葉がつい口の先へ出掛かつたのを、彼は驚いて、引つ込ましてしまつたのである。もし是が小林でなかつたなら、此際何んなに都合が好かつたらうにとさへ實は思つたのである。

津田が神經を鋭くして、今來るか今來るかといふ細かい豫期に支配されながら、吉川夫人を刻々に待ち受けてゐる間に、彼の看護婦に渡したお延への手紙は、また彼のいまだ想ひ到らない運命に到着すべく餘儀なくされた。

手紙は彼の命令通り時を移さず車夫の手に渡つた。車夫は又看護婦の命令通り、それを手に持つた儘すぐ電車へ乘つた。それから教へられた通りの停留所で下りた。其所を少し行つて、大通を例の細い往來へ切れた彼は、何の苦もなく又名宛の苗字を小綺麗な二階建の一軒の門札に見出だした。彼は玄關へ掛かつた。其所で手に持つた手紙を取次に出たお時に渡した。

此所迄は凡ての順序が津田の思ひ通りに行つた。然し其後には、書面を認める時、丸で彼の頭の中に入つてゐなかつた事實が横たはつてゐた。手紙はすぐお延の手に落ちなかつた。

然し津田の懸念したやうに、宅にゐなかつたお延は、彼の懸念したやうに病院へ出掛けたのではなかつた。彼女は別に行く先を控へてゐた。しかもそれは際どい機會を旨く利用しようとする敏捷な彼女の手腕を充分に發揮した結果であつた。

其日のお延は朝から通例のお延であつた。彼女は不斷のやうに起きて、不斷のやうに動いた。津田のゐる時と萬事變りなく働いた彼女は、それでも夫の留守から必然的に起る、時間の餘裕を持て餘す程樂な午前を過ごした。午飯を食べた後で、彼女は洗湯に行つた。病院へ顏を出す前一寸綺麗になつて置きたい考へのあつた彼女は、其所で隨分念入りに時間を費やした後、晴々した好い心持を湯上りの光澤しい皮膚に包みながら歸つて來ると、お時から嘘ではないかと思はれるやうな報告を聞いた。

「堀の奥さんが入らつしやいました」

お延は下女の言葉を信ずる事が出來ない位に驚いた。昨日の今日、お秀の方からわざ〳〵自分を尋ねて來る。そんな意外な訪問があり得べき筈はなかつた。彼女は二遍も三遍も下女の口を確めた。何で來たかをさへ訊かなければ氣が濟まなかつた。何故待たせて置かなかつたかも問題になつた。然し下女は何も知らなかつた。たゞ藤井の歸りに通り路だから一寸寄つた迄だといふ事丈が、お秀の下女に殘して行つた言葉で解つた。

お延は既定のプログラムを咄嗟の間に變更した。病院は拔いて、お秀の方へ行く先を轉換しなければならないといふ覺悟を極めた。それは津田と自分との間に取り換はされた約束に過ぎなかつた。何等の不自然に陷る痕迹なしに其約束を履行するのは今であつた。彼女はお秀の後を追つ掛けるやうにして宅を出た。

百二十三

堀の家は大略の見當から云つて、病院と同じ方角にあるので、電車を二つばかり手前の停留所で下りて、下りた處から、すぐ右へ切れさへすれば、つい四五町の道を歩く丈で、すぐ門前へ出られた。藤井や岡本の住居と違つて、郊外に遠い彼の邸には、殆ど庭といふものがなかつた。車廻し、馬車廻しは無論の事であつた。往來に面して建てられたと云つても可い其二階作りと門の間には、たゞ三間足らずの餘地がある丈であつた。しかもそれが石で敷き詰められてゐるので、地面の色は何處にも見えなかつた。市區改正の結果、餘程以前に取り廣げられた往來には、比較的餘所で見られない幅があつた。それでゐる

て商賣をしてゐる店は、町内に殆ど一軒も見當たらなかつた。辯護士、醫者、旅館、そんなものばかりが並んでゐるので、四邊が繁華な割に、通は何時も閑靜であつた。

其上路の左右には柳の立木が行儀よく植ゑ附けられてゐた。從つて時候の好い時には、殺風景な市内の風も、兩側に搖く綠の裡に一種の趣を見せた。中で一番大きいのが、丁度堀の堺際から斜に門の上へ長い枝を差し出してゐるので、餘所目にはそれが家と調子を取るために、わざと其所へ移されたやうに體裁が好かつた。

其他の特色を云ふと、玄關の前に大きな鐵の天水桶があつた。丸で下町の質屋か何かを聯想させる此長物と、そのすぐ横にある玄關の構とがまたよく釣り合つてゐた。比較的間口の廣い其玄關の入口は悉く細い格子で仕切られてゐる丈で、唐戸だの扉だのの裝飾は何處にも見られなかつた。

一口でいふと、ハイカラな仕舞うた屋と評しさへすれば、それですぐ首肯かれる此家の職業は、少なくとも系統的に、家の樣子を見た丈で外部から判斷する事が出來るのに、不思議なのは其主人であつた。彼は自分が何んな家へ入つてゐるか未だ曾て知らなかつた。そんな事を苦にする神經を有たない彼は、他から自分の家業柄を何とあけつらはれても一向平氣であつた。道樂者だが、滿更無教育なたゞの金持とは違つて、人柄からいへば、斯んな役者向きの家に住まふのは寧ろ不適當かも知れない位な彼は、極めて我の少ない人であつた。惡く云へば自己の缺乏した男であつた。何でも世間の習俗通りにして行く上に、わが家庭に特有な習俗も亦改めようとしない氣樂ものであつた。斯くして彼は、彼の父、彼の母に云はせると即ち先代、の建てた土藏造りのやうな、さうして何處かに藝人趣味のある家に住んで滿足してゐるのであ

つた。もし彼の美點がそこにもあるとすれば、わざとらしく得意がつてゐない彼の態度を賞めるより外に仕方がなかつた。然し彼は又得意がる筈もなかつた。彼の眼に映る彼の住宅は、得意がるにしては、彼に取つて餘りに陳腐過ぎた。

お延は堀の家を見るたびに、自分と家との間に存在する不調和を感じた。家へ入つてからも其距離を思ひ出す事が屢あつた。お延の考へによると、一番そこに落附いてぴたりと坐つてゐられるものは堀の母丈であつた。所が此母は、家族中でお延の最も好かない女であつた。好かないといふよりも、寧ろ應對しにくい女であつた。時代が違ふ、殘酷に云へば隔世の感がある、もしそれが當たらないとすれば、肌が合はない、出が違ふ、其他評する言葉は幾何でもあつたが、結果は何時でも同じ事に歸着した。

次には堀其人が問題であつた。お延から見た此主人は、此家に釣り合ふやうでもあり、又釣り合はないやうでもあつた。それをもう一歩進めていふと、彼は何んな家へ行つても、釣り合ふやうでもあり、釣り合はないやうでもあるといふのと殆ど同じ意味になるので、始めから問題にしないのと、大した變りはなかつた。此曖昧な所が又お延の堀に對する好惡の感情を其儘に現はしてゐた。事實をいふと、彼女は堀を好いてゐるやうでもあり、又好いてゐないやうでもあつた。

最後に來るお秀に關しては、たゞ要領を一口でいふ事が出來た。お延から見ると、彼女は此家の構造に最も不向きに育て上げられてゐた。此斷案にもう少し勿體をつけ加へて、心理的に飜譯すると、彼女と此家庭の空氣とは何時迄行つても一致しつこなかつた。堀の母とお秀、お延は頭の中に此二人を並べて見るたびに一種の矛盾を强ひられた。然し矛盾の結果が悲劇であるか喜劇であるかは容易に判斷が出來なかつ

た。
　家と人とを斯う組み合はせて考へるお延の眼に、不思議と思はれる事がたゞ一つあつた。
「一番家と釣り合ひの取れてゐる堀の母が、最も彼女を手古摺らせると同時に、其反對に出來上がつてゐるお秀が又別の意味で、最も彼女に苦痛を與へさうな相手である」
　玄關の格子を開けた時、お延の頭に平生からあつた斯んな考へを一度に蘇らせるべく號鈴がはげしく鳴つた。

百二十四

　昨日孫を伴れて横濱の親類へ行つたといふ堀の母がまだ歸つてゐなかつたのは、座敷へ案内されたお延に取つて、意外な機會であつた。見方によつて、好い都合にもなり、又惡い跋にもなる此機會は、彼女から話しのしにくい年寄を追ひ除けて呉れたと同時に、たゞ一人面と向き合つて、當の敵のお秀と應對しなければならない不利をも與へた。
　お延に知れてゐない此情實は、訪問の最初から彼女の勝手を狂はせた。毎時なら何を置いても小さな髷に結つた母が一番先へ出て來て、義理づくめにちやほやして呉れる所を、今日に限つて、劈頭にお秀が顏を出したばかりか、待ち設けた老女は其後からも現はれる樣子を一向見せないので、お延は何時もの豫期から出てくる自然の調子を先づ外させられた。其時彼女はお秀を一目見た眼の中に、當惑の色を示した。然しそれは濟まなかつたといふ後悔の記念でも何でもなかつた。單に昨日の戰爭に勝つた得意の反動から

くる一種の極り惡さであつた。何んな敵を打たれるかも知れないといふ微かな恐怖であつた。此場を何う切り拔けたら可いか知らといふ思慮の惱亂でもあつた。

お延は此一瞥をお秀に與へた瞬間に、もう今日の自分を相手に握られたといふ氣がした。然しそれは自分の有つてゐる技巧の何うする事も出來ない高い源から此一瞥が突如として閃めいてしまつた後であつた。自分の手の屆かない暗中から不意に來たものを、喰ひ止める威力を有つてゐない彼女は、甘んじて其結果を待つより外に仕方がなかつた。

一瞥は果してお秀の上によく働いた。然しそれに反應してくる彼女の樣子は、又如何にも豫想外であつた。彼女の平生、其平生が破裂した昨日、津田と自分と寄つてたかつて其破裂を料理した始末、此等の段取りを、不斷から一貫して傍の人の眼に着く彼女の性格に結び附けて考へると、何うしても無事に納まる筈はなかつた。大なり小なり次の波瀾が呼び起されずに片が附かうとは、如何に自分の手際に重きを置くお延にも信ぜられなかつた。

だから彼女は驚いた。座に着いたお秀が案に相違して何時もより愛嬌の好い挨拶をした時には、殆どわれを疑ふ位に驚いた。其疑ひをまた少しも後へ繰り越させないやうに、手拔りなく仕向けて來る相手の態度を眼の前に見た時、お延は寧ろ氣味が惡くなつた。何といふ變化だらうといふ驚きの後から、何ういふ意味だらうといふ不審が湧いて起つた。

けれども肝心な其意味を、お秀はまた何時迄もお延に說明しようとしなかつた。そればかりか、昨日病院で起つた不幸な行き違ひに就いても、遂に一言も口を利く樣子を見せなかつた。

相手に心得があつてわざと際どい問題を避けてゐる以上、お延の方からそれを切り出すのは變なものであつた。第一好んで痛い所に觸れる必要は何處にもなかつた。と云つて、何處かで區切りを附けて、雙方薩張りして置かないと、自分は何のために、今日此所迄足を運んだのか、主意が立たなくなつた。然し和解の形式を通過しないうちに、もう和解の實を擧げてゐる以上、それを兎や角表面へ持ち出すのも馬鹿げてゐた。

怜悧なお延は弱らせられた。會話が滑らかにすべつて行けば行く程、一種の物足りなさが彼女の胸の中に頭を擡げて來た。仕舞に彼女は相手の何處かを突き破つて、其内側を覗いて見ようかと思ひ出した。斯んな點にかけると、頗る冒險的な所のある彼女は、萬一遣り損なつた曉に、此場合から起り得る危險を知らないではなかつた。けれども其所には自分の腕に對する相當の自信も伴なつてゐた。

其上もし機會が許すならば、お秀の胸の格別なある一點に、打診を試みたいといふ希望が、お延の方にはあつた。其所を敲かせて貰つて局部から自然に出る本音を充分に聽く事は、津田と打ち合せを濟ました訪問の主意でも何でもなかつたけれども、お延自身からいふと、うまく媾和の役目を遣り終せて歸るよりも遙かに重大な用向きであつた。

津田に隱さなければならない此用向きは、津田がお延に内所にしなければならない事件と、其性質の上に於てよく似通つてゐた。さうして津田が自分の居ない留守に、小林がお延に何を話したかを氣にする如く、お延も亦自分のゐない留守に、お秀が津田に何を話したかを確と突き留めたかつたのである。

何處に引掛りを拵へたものかと思案した末、彼女は仕方なしに、藤井の歸りに寄つて呉れたといふお秀

の訪問をまた問題にした。けれども座に着いた時既に、「先刻入らしつて下すつたさうですが、生憎御湯に行つてゐて」といふ言葉を、會話の口切りに使つた彼女が、今度は「何か御用でもおありだつたの」といふ質問で、それを復活させに掛かつた時、お秀はたゞ簡單に「いゝえ」と答へた丈で、綺麗にお延を跳ね附けてしまつた。

百二十五

お延は次に藤井から入つて行かうとした。今朝此叔父の所を訪ねたといふお秀の自白が、話しを其方へ持つて行くに都合のいゝ便利を與へた。けれどもお秀の門構は依然として此方面にも嚴重であつた。彼女は必要の起るたびに、わざ／＼其門の外へ出て來て、愛想よくお延に應對した。お秀が此叔父の世話で人となつた事實は、お延にもよく知れてゐた。彼女が精神的に其感化を受けた點もお延に解つてゐた。それでお延は順序として先づ此叔父の人格やら生活やらに就いて、お秀の氣に入りさうな言辭を弄さなければならなかつた。所がお秀から見ると、それが又一々誇張と虛僞の響を帶びてゐるので、彼女は眞面目に取り合ふ緒口を何處にも見出だす事が出來ないのみならず、長く同じ筋道を辿つて行くうちには自然氣色を惡くした樣子を外に現はさなければ濟まなくなつた。敏捷なお延は、相手を見縊り過ぎてゐた事に氣が附くや否や、すぐ取つて返した。するとお秀の方で、今度は岡本の事を喋々し始めた。お秀對藤井と丁度同じ關係にある其叔父は、お延に取つて大事な人であると共に、お秀からいふと、親しみも何も感じられない、あかの他人であつた。從つて彼女の言葉には滑つこい皮膚がある丈で、肝心の中味に血も肉も盛られ

てゐなかつた。それでもお延はお秀の手料理になる此御世辭の返禮を左も旨さうに鵜呑みにしなければならなかつた。

然し再度自分の番が廻つて來た時、お延は二遍目の愛嬌を手古盛りに盛り返して、惡くお秀に强ひる程愚かな女ではなかつた。時機を見て器用に切り上げた彼女は、次に吉川夫人から煽つて行かうとした。然し前と同じ手段を用ひて、たゞ賞めそやす丈では、同じ不成績に陷るかも知れないといふ恐れがあつた。そこで彼女は善惡の標準を度外に置いて、たゞ夫人の名前丈を二人の間に點出して見た。さうして其影響次第で後の段取りを極めようと覺悟した。

彼女はお秀が自分の風呂の留守へ藤井の歸りがけに廻つて來た事を知つてゐた。けれども藤井へ行く前に、彼女がもう既に吉川夫人を訪問してゐる事には丸て想ひ到らなかつた。しかも昨日病院で起つた波瀾の結果として、彼女がわざ／＼其所迄足を運んでゐようとは、夢にも知らなかつた。此一點に掛けると、津田と同じ程度に無邪氣であつた彼女は、津田が小林から驚かされたと同じ程度に、又お秀から驚かされなければならなかつた。然し驚かせられ方は二人共丸で違つてゐた。小林のは明らさまな事實の報告であつた。お秀のは意味のありさうな無言であつた。無言と共に來た薄赤い彼女の顏色であつた。

最初夫人の名前がお延の唇から洩れた時、彼女は二人の間に一滴の靈藥が天から落とされたやうな氣がした。彼女はすぐ其效果を眼の前に眺めた。然し不幸にしてそれは彼女に取つて何の役にも立たない效果に過ぎなかつた。少なくとも何う利用して可いか解らない效果であつた。其豫想外な性質は彼女をはつと思はせる丈であつた。彼女は名前を口へ出すと共に、或は其場ですぐ失言を謝さなければならないかしら

と迄考へた。

すると第二の豫想外が繼いで起つた。お秀が一寸顏を背けた樣子を見た時に、お延は何うしても最初に受けた印象を改正しなければならなくなつた。血色の變化は決して怒りのためでないといふ事が其時始めて解つた。年來陳腐な位見飽きてゐる單純な極りの惡さだと評するより外に仕方のない此表情は、お延を更に驚かさゞるを得なかつた。彼女は此表情の意味をはつきり確めた。然し其意味の因つて來る所は、お秀の說明を待たなければまた確められる筈がなかつた。

お延が何うしようかと迷つてゐるうちに、お秀は丸で木に竹を接いだやうに、突然話題を變化した。行き掛り上全然今迄と關係のない其話題は、三度目に又お延を驚かせるに充分な位突飛であつた。けれどもお延には自信があつた。彼女はすぐそれを受けて立つた。

百二十六

お秀の口を洩れた意外な文句のうちで、一番初めにお延の耳を打つたのは「愛」といふ言葉であつた。此陳腐な有り來りの一語が、如何にお延の前に伏兵のやうな新し味をもつて起つたかは、前後の連絡を缺いて單獨に突發したといふのが重な原因に相違なかつたが、一つにはまた、そんな言葉がまだ會話の材料として、二人の間に使はれてゐなかつたからである。

お延に比べるとお秀は理窟つぽい女であつた。けれどもさういふ結論に達する迄には、多少の說明が要つた。お延は自分で自分の理窟を行爲の上に運んで行く女であつた。だから平生彼女の議論をしないのは、

出來ないからではなくつて、する必要がないからであつた。其代り他から注ぎ込まれた知識になると、大した貯蓄も何もなかつた。女學生時代に讀み馴れた雜誌さへ近頃は滅多に手にしない位であつた。それでゐて彼女は未だ曾て自分を貧弱と認めた事がなかつた。虚榮心の強い割に、其方面の欲望があまり刺激されずに濟んでゐるのは、暇が乏しいからでもなく、競爭の話し相手がないからでもなく、全く自分に大した不足を感じないからであつた。

所がお秀は教育からして第一違つてゐた。讀書は彼女を彼女らしくする殆ど凡てであつた。少なくとも、凡てでなければならないやうに考へさせられて來た。書物に縁の深い叔父の藤井に教育された結果は、善惡兩樣の意味で、彼女の上に妙な結果を生じた。彼女は自分より書物に重きを置くやうになつた。然しいくら自分を書物より輕く見るにした所で、自分は自分なりに、書物と獨立したまんまで、活きて働いて行かなければならなかつた。だから勢ひ本と自分とは離れ離れになる丈であつた。それをもつと適切な言葉で云ひ現はすと、彼女は折々柄にもない議論を主張するやうな弊に陷つた。然し自分が議論のために議論をしてゐるのだから詰らないと氣が附く迄には、彼女の反省力から見て、まだ大分の道程があつた。意地の方から行くと、餘りに我が強過ぎた。平たく云へば、其我がつまり自分の本體であるのに、其本體に副ぐはないやうな理窟を、わざ〳〵自分の尊敬する書物の中から引張り出して來て、其所に書いてある言葉の力で、それを守護するのと同じ事に歸着した。自然彈丸を込めて打ち出すべき大砲を、九寸五分の代りに、振り廻して見るやうな滑稽も時々は出て來なければならなかつた。

問題は果して或雜誌から始まつた。月の發行にかゝる其雜誌に發表された諸家の戀愛觀を讀んだお秀の

質問は、實をいふとお延にとつてそれ程興味のあるものでもなかつた。然しまだ眼を通してゐない事實を自白した時に、彼女の好奇心が突然起つた。彼女は此抽象的な問題を、何處かで自分の思ひ通り活かして遣らうと決心した。

彼女は動ともすると空論に流れやすい相手の弱點を可なりよく呑み込んでゐた。際どい實際問題に是から飛び込んで行かうとする彼女に、これ程都合の惡い態度はなかつた。たゞ議論のために議論をされる位なら、最初から取り合はない方が餘つ程増しだつた。それで彼女には何うしても相手を地面の上に縛り附けて置く必要があつた。所が不幸にして此場合の相手は、最初からもう地面の上にゐなかつた。お秀の口にする愛は、津田の愛でも、堀の愛でも、乃至お延、お秀の愛でも何でもなかつた。たゞ漫然として空裏に飛揚する愛であつた。從つてお延の努力は、風船玉のやうなお秀の話しを、まづ下へ引き摺り卸ろさなければならなかつた。

子供が既に二人もあつて、萬事自分より世帶染みてゐるお秀が、此意味に於て、遙かに自分より着實でない事を發見した時に、お延は口ではい〳〵向うのいふ通りを首肯ひながら、腹の中では、焦慮れつたがつた。「そんな言葉の先でなく、裸で入らつしやい、實力で相撲を取りますから」と云ひたくなつた彼女は、何うしたら此議論家を裸にする事が出來るだらうと思案した。

やがてお延の胸に分別が附いた。分別とは外でもなかつた。此問題を活かすためには、お秀を犠牲にするか、又は自分を犠牲にするか、何方かにしなければ、到底思ふ壺に入つて來る譯がないといふ事であつた。相手を犠牲にするのに困難はなかつた。たゞ何處からか向うの弱點を突つ附きさへすれば、それで事

は足りた。其弱點が事實であらうとも假設的であらうとも、それはお延の意とする所ではなかつた。單に自然の反應を目的にして試みる刺激に對して、眞僞の吟味などは、要らざる斟酌であつた。然し其所には又それ相應の危險もあつた。お秀は怒るに違ひなかつた。所がお秀を怒らせるといふ事は、お延の目的であつて、さうして目的でなかつた。だからお延は迷はざるを得なかつた。

最後に彼女はある時機を掴んで起つた。さうして其起つた時には、もう自分を犠牲にする方に決心してゐた。

百二十七

「さう云はれると、何と云つて可いか解らなくなるわ、あたしなんか。津田に愛されてゐるんだか、愛されてゐないんだか、自分ぢや丸で夢中でゐるんですもの。秀子さんは仕合せね、そこへ行くと。最初から御自分にちやんとした保證が附いていらつしやるんだから」

お秀の器量望みで貰はれた事は、津田と一所にならない前から、お延に知れてゐた。それは一般の女、ことにお延のやうな女に取つては、羨ましい事實に違ひなかつた。始めて津田から其話を聽かされた時、お延にお秀を見ない先に、まづ彼女に對する輕い嫉妬を感じた。中味の薄つぺらな事實に過ぎなかつたといふ意味があとで解つた時には、淡い冷笑のうちに、復讐をしたやうな快感さへ覺えた。それより以後、愛といふ問題に就いて、お秀に對するお延の態度は、いつも輕蔑であつた。それを表向きさも嬉しい消息ででもあるやうに取扱つて、彼我に共通する如くに見せ掛けたのは、無論一片の御世辭に過ぎなかつた。

もつと悪く云へば、一種の嘲弄であつた。

幸ひお秀は其所に氣が附かなかつた。さうして氣が附かない譯であつた。と云ふのは、言葉の上は兎に角、實際に愛を體得する上に於て、お秀はとてもお延の敵でなかつた。猛烈に愛した經驗も、生一本に愛された記憶も有たない彼女は、此能力の最大限が何の位強く大きなものであるかといふ事をまだ知らずにゐる女であつた。それでゐて夫に滿足してゐる細君であつた。知らぬが佛といふ諺が正に此場合の彼女をよく說明してゐた。結婚の當時、自分の未來に夫の手で押し附けられた愛の判を、普通の證文のやうな積りで、何時迄も胸の中へ仕舞ひ込んでゐた彼女は、お延の言葉を、其胸の中で、眞面目に受ける程無邪氣だつたのである。

本當に愛の實體を認めた事のないお秀は、彼女のいたづらに使ふ胡亂な言葉を通して、鋭いお延からよく見透かされたのみではなかつた。彼女は津田とお延の關係を、自分達夫婦から割り出して平氣でゐた。それはお延の言葉を聞いた彼女が實際驚いた顏をしたのでも解つた。津田がお延を愛してゐるかゐないかが今頃何うして問題になるのだらう。しかもそれが細君自身の口から出るとは何事だらう。況してそれを夫の妹の前へ出すに至つては、何處に何んな意味があるのだらう。――是がお秀の表情であつた。

實際お秀から見たお延は、現在の津田の愛に滿足する事を知らない横着者か、さもなければ、自分が充分津田を手の中へ丸め込んで置きながら、わざと其所に氣の附かないやうな振をする、空々しい女に過ぎなかつた。彼女は「あら」と云つた。

「まだ其上に愛されて見たいの」

此挨拶は平生のお延の注文通りに來た。然し今の場合に於けるお延に滿足を與へる筈はなかつた。彼女は又何とか云つて、自分の意志を明らかにしなければならなかつた。所がそれを判然表現すると、「津田があたしの外にまだ思つてる人が別にあるとするなら、あたしだつて到底今のまゝで滿足出來る譯がないぢやありませんか」といふ露骨な言葉になるより外に途はなかつた。思ひ切つて、さう打つて出れば、自分で自分の計畫をぶち毀すのと一般だと感づいた彼女は、「だつて」と云ひ掛けた儘、其所で逡巡つたなり動けなくなつた。

「まだ何か不足があるの」

斯う云つてお秀は眼を集めてお延の手を見た。其所には例の指環が遠慮なく輝いてゐた。然しお秀の鋭い一瞥は何の影響もお延に與へる事が出來なかつた。指輪に對する彼女の無邪氣さは昨日と毫も變る所がなかつた。お秀は少しもどかしくなつた。

「だつて延子さんは仕合せぢやありませんか。欲しいものは、何でも買つて貰へるし、行きたい所へは、何處へでも連れて行つて貰へるし――」

「えゝ。其所丈はまあ仕合せよ」

他に向つて自分の仕合せと幸福を主張しなければ、わが弱味を外へ現はすやうになつて、不都合だとばかり考へ附けて來たお延は、平生から持ち合せの挨拶をつい此場合にも使つて仕舞つた。さうして又行き詰まつた。芝居に行つた翌日、岡本へ行つて繼子と話しをした時用ひた言葉を、其儘繰り返した後で、彼女は相手のお秀であるといふ事に氣が附いた。其お秀は「そこ丈が仕合せなら、それで澤山ぢやないか」

といふ顔附をした。

お延は自分がかりそめにも津田を疑つてるといふ形迹をお秀に示したくなかつた。さうかと云つて、何事も知らない風を粧つて、見す〳〵お秀から馬鹿にされるのは猶厭だつた。從つて應對に非常な呼吸が要つた。目的地へ漕ぎ附ける迄には中々骨が折れると思つた。然し彼女は到底見込のない無理な努力をしてるといふ事には、つひに氣が附かなかつた。彼女は又態度を一變した。

百二十八

彼女は思ひ切つて一足飛びに飛んだ。情實に絡まれた窮屈な云ひ廻し方を打ち遣つて、面と向き合つたまゝお秀に相見しようとした。其代り言葉は何うしても抽象的にならなければならなかつた。それでも論戰の刺激で、事實の面影を突き留める方が、まだ增しだと彼女は思つた。

「一體一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事が出來るものでせうか」

此質問を基點として步を進めに掛かつた時、お秀はそれに對してあらかじめ準備された答を一つも有つてゐなかつた。書物と雜誌から受けた彼女の知識は、たゞ一般戀愛に關する丈で、毫も此特殊な場合に利用するに足らなかつた。腹に何の貯へもない彼女は、考へる風をした。さうして正直に答へた。

「そりや一寸解らないわ」

お延は氣の毒になつた。「此人は生きた研究の材料として、堀といふ夫を既に有つてゐるではないか。其夫の婦人に對する態度も、朝夕傍にゐて、見てゐるではないか。」お延が斯う思ふ途端に、第二句がお

秀の口から落ちた。

「解らない筈ぢやありませんか。此方が女なんですもの」

お延は是も愚答だと思つた。もしお秀の有りの儘が斯うだとすれば、彼女の心の働きの鈍さ加減が想ひ遣られた。しかしお延はすぐ此愚答を活かしに掛かつた。

「ぢや女の方から見たら何うでせう。自分の夫が、自分以外の女を愛してゐるといふ事が想像できるでせうか」

「延子さんにはそれが出来ないの？」と云はれた時、お延はおやと思つた。

「あたしは今そんな事を想像しなければならない地位にゐるんでせうか」

「そりや大丈夫よ」とお秀はすぐ請け合つた。お延は直ちに相手の言葉を繰り返した。

「大丈夫!?」

疑問とも間投詞とも片の附かない其語尾は、お延にも何といふ意味だか解らなかつた。

「大丈夫よ」

お秀も再び同じ言葉を繰り返した。其瞬間にお延は冷笑の影をちらりとお秀の唇のあたりに認めた。然し彼女はすぐそれを切つて捨てた。

「そりや秀子さんは大丈夫に極まつてるわ。もと〳〵堀さんへ入らつしやる時の條件が條件ですもの」

「ぢや延子さんは何うなの。矢つ張り津田に見込まれたんぢやなかつたの」

「嘘よ。そりやあなたの事よ」

お秀は急に應じなくなつた。お延も獲物のない同じ脈をそれ以上掘る徒勞を省いた。

「一體津田は女に關して何んな考へを有つてるんでせう」

「それは妹より奥さんの方がよく知つてる筈だわ」

お延は叩き附けられた後で、自分もお秀と同じやうな愚問を掛けた事に氣が附いた。

「だけど兄妹としての津田は、あたしより秀子さんの方がよく解つてるでせう」

「えゝ、だけど、いくら解つてたつて、延子さんの參考にやならないわ」

「參考に無論なるのよ。然し其事ならあたしだつて疾うから知つてるわ」

お延の鎌は際どい所で投げ掛けられた。お秀は果して掛かつた。

「けれども大丈夫よ。延子さんなら大丈夫よ」

「大丈夫だけれども危險いのよ。何うしても秀子さんから詳しい話を聽かして頂かないと」

「あら、あたし何も知らないわ」

斯ういつたお秀は急に赧くなつた。それが何の羞恥の爲に起つたのかは、いくら緊張したお延の神經でも、判斷できなかつた。しかも彼女は此訪問の最初に、同じ現象から受けた初度の記憶をまだ忘れずにゐた。吉川夫人の名前を點じた時に見た其赧い顏と、今彼女の面前に再現した此赤面の間に何んな關係があるのか、それはいくら物の異同を嗅ぎ分ける事に妙を得た彼女にも見當が附かなかつた。彼女は此場合無理にも二つのものを繫いで見たくつて堪らなかつた。けれどもそれを繫ぎ合はせる綱は、何處から何う探したつて、金輪際出て來つこなかつた。お延に取つて最も不幸な點は、現在の自分の力に餘る此二つのものの

間に、屹度或聯絡が存在してゐるに相違ないといふ推測であつた。さうして其聯絡が、今の彼女に取つて、頗る重大な意味を有つてゐるに相違ないといふ一種の豫覺であつた。自然彼女は其所をもつと突ついて見るより他に仕方がなかつた。

百二十九

咄嗟の衝動に支配されたお延は、自分の口を衝いて出る嘘を抑へる事が出來なかつた。

「吉川の奥さんからも伺つた事があるのよ」

斯う云つた時、お延は始めて自分の大膽さに氣が附いた。彼女は其所へ留まつて、冒險の結果を眺めなければならなかつた。するとお秀が今迄の赤面とは打つて變つた不思議さうな顏をしながら訊き返した。

「あら何を」

「その事よ」

「その事つて、何んな事なの」

お延にはもう後がなかつた。お秀には先があつた。

「嘘でせう」

「嘘ぢやないのよ。津田の事よ」

お秀は急に應じなくなつた。其代り冷笑の影を締りの好い口元にわざと寄せて見せた。それが先刻より著しく目立つて外へ現はれた時、お延は路を誤つて一歩深田の中へ踏み込んだやうな氣がした。彼女に

特有な負け嫌ひな精神が強く働かなかつたなら、彼女はお秀の前に頭を下げて、もう救ひを求めてゐたかも知れなかつた。お秀は云つた。

「變ね。津田の事なんか、吉川の奥さんが御話しになる譯がないのにね。何うしたんでせう」

「でも本當よ、秀子さん」

お秀は始めて聲を出して笑つた。

「そりや本當でせうよ。誰も嘘だと思ふものなんかありやしないわ。だけど何んな事なの、一體」

「津田の事よ」

「だから兄の何よ」

「そりや云へないわ。あなたの方から云つて下さらなくつちや」

「隨分無理な御注文ね。云へつたつて、見當が附かないんですもの」

お秀は何處からでも入らつしやいといふ落附きを見せた。お延の腋の下から膏汗が流れた。彼女は突然飛びかゝつた。

「秀子さん、あなたは基督教信者ぢやありませんか」

お秀は驚いた樣子を現はした。

「いゝえ」

「でなければ、昨日の樣な事を仰しやる譯がないと思ひますわ」

昨日と今日の二人は、丸で地位を易へたやうな形勢に陷つた。お秀は何處迄も優者の餘裕を示した。

「さう。おやそれでも可いわ。延子さんは大方基督教が御嫌ひなんでせう」

「いゝえ好きなのよ。だから御詫びするのよ。だから昨日のやうな氣高い心持になつて、此小さいお延を憐んで頂きたいのよ。もし昨日のあたしが悪かつたら、斯うしてあなたの前に手を突いて詫るから」

お延は光る寶石入りの指輪を穿めた手を、お秀の前に突いて、口で云つた通り、實際に頭を下げた。

「秀子さん、何うぞ隱さずに正直にして下さい。さうしてみんな打ち明けて下さい。お延は此通り正直にしてゐます。此通り後悔してゐます」

持ち前の癖を見せて、眉を寄せた時、お延の細い眼から涙が膝の上へ落ちた。

「津田はあたしの夫です。あなたは津田の妹です。あなたに津田が大事なやうに、津田はあたしにも大事です。たゞ津田のためです。津田のために、みんな打ち明けて話して下さい。津田はあたしを愛してゐます。津田の妹としてあなたを愛してゐるやうに、妻としてあたしを愛してゐるのです。だから津田から愛されてゐるあたしは津田のために凡てを知らなければならないのです。津田から愛されてゐるあなたも亦、津田のために萬事をあたしに打ち明けて下さるでせう。それが妹としてのあなたの親切です。あなたがあたしに對する親切を、此場合御感じにならないでも、あたしは一向恨みとは思ひません。けれども兄さんとしての津田には、まだ盡くして下さる親切を有つていらつしやるでせう。あなたがそれを充分有つていらつしやるのはあなたの顏附でよく解ります。あなたはそんな冷刻な人では決してないのです。あなたはあなたが昨日御自分で仰しやつた通り親切な方に違ひないのです」

お延が是丈云つて、お秀の顏を見た時、彼女は其所に特別な變化を認めた。お秀は赧くなる代りに少し

蒼白くなつた。さうして度外れに急き込んだ調子で、お延の言葉を一刻も早く否定しなければならないといふ意味に取れる言葉遣ひをした。

「あたしはまだ何も悪い事をした覚えはないんです。兄さんに對しても嫂さんに對しても、有つてるのは好意丈です。悪意はちつとも有りません。何うぞ誤解のないやうにして下さい」

百三十

お秀の言譯はお延に取つて意外であつた。又突然であつた。其言譯が何處から出て來たのか、また何の爲であるか丸で解らなかつた。お延はたゞはつと思つた。天惠の如く彼女の前に露出された此時のお秀の背後に何か潜んでゐるのだらう。お延はすぐ其暗闇を衝かうとした。三度目の噓が安々と彼女の口を滑つて出た。

「そりや解つてるのよ。あなたのなすつた事も、あなたのなすつた精神も、あたしにはちやんと解つてるのよ。だから隱し立てをしないで、みんな打ち明けて頂戴な。御厭？」

斯う云つた時、お延は出來得る限りの愛嬌を其細い眼に湛へて、お秀を見た。然し異性に對する場合の效果を豫想した此所作は全く外れた。お秀は驚かされた人のやうに、卒爾な質問を掛けた。

「延子さん、あなた今日此所へ御出でになる前、病院へ行つて入らしつたの」

「いゝえ」

「ぢや何處か外から廻つて入らしつたの」

「いゝえ。宅からすぐ上がつたの」
お秀は漸く安心したらしかつた。其代り後は何も云はなかつた。お延はまだ縋り附いた手を放さなかつた。
「よう、秀子さん何うぞ話して頂戴よ」
其時お秀の涼しい眼のうちに殘酷な光が射した。
「延子さんは隨分勝手な方ね。御自分獨り精一杯愛されなくつちや氣が濟まないと見えるのね」
「無論よ。秀子さんは左右でなくつても構はないの」
「良人を御覽なさい」
お秀はすぐ斯う云つて退けた。お延は話頭からわざと堀を追ひ除けた。
「堀さんは問題外よ。堀さんは何うでも可いとして、正直の云ひつ競よ。なんぼ秀子さんだつて、氣の多い人が好きな譯はないでせう」
「だつて自分より外の女は、有れども無きが如しつてやうな素直な夫が世の中にゐる筈がないぢやありませんか」
雜誌や書物からばかり知識の供給を仰いでゐたお秀は、此時突然卑近な實際家となつてお延の前に現はれた。お延は其矛盾を注意する暇さへなかつた。
「あるわよ、あなた。なけりやならない筈ぢやありませんか、苟も夫と名が附く以上」
「さう、何處にそんな好い人がゐるの」

お秀はまた冷笑の眼をお延に向けた。お延は何うしても津田といふ名前を大きな聲で叫ぶ勇氣がなかつた。仕方なしに口の先で答へた。

「それがあたしの理想なの。其所迄行かなくつちや承知が出來ないの」

お秀が實際家になつた通り、お延も何時の間にか理論家に變化した。今迄の二人の位地は顚倒した。さうして二人とも丸で其所に氣が附かずに、勢の運ぶが儘に前の方へ押し流された。あとの會話は理論とも實際とも片の附かない、出たとこ勝負になつた。

「いくら理想だつてそりや駄目よ。その理想が實現される時は、細君以外の女といふ女が丸で女の資格を失つてしまはなければならないんですもの」

「然し完全の愛は其所へ行つて始めて味はれるでせう。其所迄行き盡くさなければ、本式の愛情は生涯經つたつて、感ずる譯に行かないぢやありませんか」

「そりや何うだか知らないけれども、あなた以外の女を女と思はないで、あなた丈を世の中に存在するたつた一人の女だと思ふなんて事は、理性に訴へて出來る筈がないでせう」

お秀はとう〳〵あなたといふ字に點火した。お延は一向構はなかつた。

「理性は何うでも、感情の上で、あたし丈をたつた一人の女と思つてゐて呉れゝば、それで可いんです」

「あなた丈を女と思へと仰しやるのね。そりや解るわ。けれども外の女を女と思つちや不可ないとなると丸で自殺と同じ事よ。もし外の女を女と思はずにゐられる位な夫なら、肝心のあなただつて、矢つ張り女とは思はないでせう。自分の宅の庭に咲いた花丈が本當の花で、世間にあるのは花ぢやない枯草だとい

ふのと同じ事ですもの」

「枯草で可いと思ひますわ」

「あなたには可いでせう。けれども男には枯草ぢやないんだから仕方がありませんわ。それよりか好きな女が世の中にいくらでもあるうちで、あなたが一番好かれてゐる方が、嫂さんに取つても却つて滿足ぢやありませんか。それが本當に愛されてゐるといふ意味なんですもの」

「あたしは何うしても絶對に愛されて見たいの。比較なんか始めから嫌ひなんだから」

お秀の顔に輕蔑の色が現はれた。其奥には何といふ理解力に乏しい女だらうといふ意味があり／＼と見透かされた。お延はむら／＼とした。

「あたしは何うせ馬鹿だから理窟なんか解らないのよ」

「たゞ實例を御見せになる丈なのね。其方が結構だわね」

お秀は冷然として話を切り上げた。お延は腹の奥で地團太を踏んだ。折角の努力は是以上何物をも彼女に與へる事が出來なかつた。留守に彼女を待つ津田の手紙が來てゐるとも知らない彼女は、其儘堀の家を出た。

百三十一

お延とお秀が對坐して戰つてゐる間に、病院では病院なりに、また獨立した豫定の事件が進行した。

津田の待ち受けた吉川夫人が其所へ顔を出したのは、お延宛で書いた手紙を持たせて遣つた車夫がまだ

歸つて來ないうちで、時間からいふと、丁度小林の出て行つた十分程後であつた。

彼は看護婦の口から夫人の名前を聞いた時、此異人種に近い二人が、狹い室で鉢合せをしずに濟んだ好都合を、何より先にまづ祝福した。其時の彼は此都合を附けるために拂ふべく餘儀なくされた物質上の犧牲を殆ど顧る暇さへなかつた。

彼は夫人の姿を見るや否や、すぐ床の上に起き返らうとした。夫人は立ちながら、それを止めた。さうして彼女を案内した看護婦の兩手に、抱へるやうにして持たせた植木鉢を一寸振り返つて見て、「何處へ置きませう」と相談するやうに訊いた。津田は看護婦の白い胸に映る紅葉の色を美しく眺めた。小さい鉢の中で、窮屈さうに三本の幹が調子を揃へて並んでゐる下に、恰好の好い手頃な石さへあしらつた其盆栽が床の間の上に置かれた後で、夫人は始めて席に着いた。

「どうです」

先刻から彼女の樣子を見てゐた津田は、此時始めて彼に對する夫人の態度を確める事が出來た。もしやと思つて、暗に心配してゐた彼の懸念の半分は、此一語で吹き晴らされたと同じ事であつた。夫人は何時も晴陽氣ではなかつた。其代り何時も程上つ調子でもなかつた。要するに彼女は、津田が未だ曾て彼女に於て發見しなかつた一種の氣分で、彼の室に入つて來たらしかつた。それは一方で彼女の落附きを極度に示してゐると共に、他方では彼女の鷹揚さを矢張り最高度に現はすものらしく見えた。津田は少し驚かされた。然し好い意味で驚かされた丈に、氣味も惡くしなければならなかつた。たとひ此態度が、彼に對する反感を代表してゐないにせよ、其奥には何があるか解らなかつた。今其奥に恐るべき何物がないにして

も、是から先話しをしてゐるうちに、向うの心持は何う變化して來るか解らなかつた。津田は他から機嫌を取られ附けてゐる夫人の常として、手前勝手にいくらでも變つて行く、若しくは變つて行つても差支へないと自分で許してゐる、此夫人を、一種の意味で、女性の暴君と奉らなければならない地位にあつた。漢語でいふと彼女の一顰一笑が津田には悉く問題になつた。此際の彼にはことに左右であつた。

「今朝秀子さんが入らしつてね」

お秀の訪問はまづ第一の議事の如くに彼女の口から投げ出された。津田は固より相手に應じなければならなかつた。さうして其應じ方は夫人の來ない前からもう考へてゐた。彼はお秀の夫人を訪ねた事を知つて、知らない風をする積りであつた。誰から聞いたと問はれた場合に、小林の名を出すのが厭だつたからである。

「へえ、左右ですか。平生あんまり御無沙汰をしてゐるので、たまには御詫びに上がらないと惡いとでも思つたのでせう」

「いえ左右ぢやないの」

津田は夫人の言葉を聞いた後で、すぐ次の嘘を出した。

「然しあいつに用のある譯もないでせう」

「所があつたんです」

「へえゝ」

津田は斯う云つたなり其後を待つた。

「何の用だか中てて御覽なさい」
津田は空つ惚けて、考へる眞似をした。
「左右ですね、お秀の用事といふと、——さあ何でせうかしら」
「分りませんか」
「ちよつと何うも。——元來私とお秀とは兄妹でゐながら大分質が違ひますから」
津田は此所で餘計な兄妹關係をわざと仄めかした。それは事の來る前に、自分を遠くから辯護して置くためであつた。それから自分の言葉を、夫人が何う受けて吳れるか、其反響を一寸聽いて見るためであつた。
「少し理窟つぽいのね」
此一語を聞くや否や、津田は得たり賢しと虛に附け込んだ。
「あいつの理窟と來たら、兄の私でさへ惱まされる位ですもの。誰だつて、とても大人しく辛抱して聽いてゐられたものぢや御座いません。だから私はあいつと喧嘩をすると、何時でも好い加減にして投げてしまひます。するとあいつは好い氣になつて、勝つた積りか何かで、自分の都合の好い事ばかりを方々へ行つて觸れ散らかすのです」
夫人は微笑した。津田はそれを確かに自分の方に同情を有つた微笑と解釋する事が出來た。すると夫人の言葉が、却つて彼の思はくとは逆の見當を向いて出た。
「まさか左右でもないでせうけれどもね。——然し中々筋の通つた好い頭を有つた方ぢやありませんか。

あたしあの方は好きよ」

津田は苦笑した。

「そりや御宅なんぞへ上がつて、無暗に地金を出す程の馬鹿でもないでせうがね」

「いえ正直よ、秀子さんの方が」

誰よりお秀が正直なのか、夫人は説明しなかつた。

百三十二

津田の好奇心は動いた。想像も略附いた。けれども其所へ折れ曲がつて行く事は彼の主意に背いた。彼はたゞ夫人對お秀の關係を掘り返せば可かつた。病氣見舞を兼ねた夫人の用向きも、無論それに就いての懇談に極まつてゐた。けれども彼女にはまた彼女に特有な趣があつた。時間に制限のない彼女は、頼まれるまでもなく、機會さへあれば、他の内輪に首を突つ込んで、なにかと眼下、ことに自分の氣に入つた眼下の世話を焼きたがる代りに、到る所で又道樂本位の本性を露はして平氣であつた。或時の彼女は無暗に急いて事を纏めようと焦慮つた。さうかと思ふと、ある時の彼女は、又正反對であつた。わざ／＼ぐん／＼と引つ張る所に、左も興味でもあるらしい樣子を見せて濟ましてゐた。鼠を弄ぶ猫のやうな此時の彼女の態度が、たとひ傍から見て何うあらうとも、自分では、閑散な時間に曲折した波瀾を與へるために必要な優者の特權だと解釋してゐるらしかつた。此手に掛かつた時の相手には、何よりも辛抱が大切であつた。其代り辛抱をし拔いた御禮は屹度來た。又來る事を以て彼女は相手を奬勵した。のみならずそれを自分の

倫理上の誇りとした。彼女と津田の間に取り換はされた此默契のために、津田の蒙つた重大な損失が、今迄にたつた一つあつた。其點で彼女が腹の中で如何に彼に對する責任を感じてゐるかは、怜悧な津田の見逃す所でなかつた。何事にも夫人の御意を主眼に置いて行動する彼と雖も、暗に此強味丈は恃みにしてゐた。然しそれはいざといふ萬一の場合に保留された彼の利器に過ぎなかつた。平生の彼は甘んじて猫の前の鼠となつて、先方の思ふ通りにじやらされてゐなければならなかつた。此際の夫人も中々要點へ來る前に時間を費やした。

「昨日秀子さんが來たでせう。此所へ」

「えゝ。參りました」

「延子さんも來たでせう」

「えゝ」

「今日は？」

「今日はまだ參りません」

「今に入らつしやるんでせう」

津田には何うだか分らなかつた。先刻來るなといふ手紙を出した事も、夫人の前では云へなかつた。返事を受け取らなかつた勝手違ひも、實は氣に掛かつてゐた。

「何うですかしら」

「入らつしやるか、入らつしやらないか分らないの」

「えゝ、よく分りません。多分來ないだらうとは思ふんですが」
「大變冷淡ぢやありませんか」
夫人は嘲るやうな笑ひ方をした。
「私がですか」
「いゝえ、兩方がよ」
苦笑した津田が口を閉ぢるのを待つて、夫人の方で口を開いた。
「延子さんと秀子さんは昨日此所で落ち合つたでせう」
「えゝ」
「それから何かあつたのね、變な事が」
「別に」
「空つ惚けちや不可ません。あつたらあつたと、判然仰しやいな、男らしく」
夫人は漸く持ち前の言葉遣ひと特色とを、發揮し出した。津田は挨拶に困つた。默つて少し樣子を見るより外に仕方がないと思つた。
「秀子さんを散々苛めたつて云ふぢやありませんか。二人して」
「そんな事があるものですか。お秀の方が怒つてぷん／＼腹を立てて歸つて行つたのです」
「さう。然し喧嘩はしたでせう。喧嘩といつたつて毆り合ひぢやないけれども」
「それだつてお秀のいふやうな大袈裟なものぢやないんです」

「かも知れないけれども、多少にしろ有つたには有つたんですね」
「そりや一寸した行き違ひなら御座いました」
「其時あなた方は二人掛りで秀子さんを苛めたでせう」
「苛めやしません。あいつが耶蘇教のやうな氣焔を吐いた丈です」
「兎に角貴方がたは二人、向うは一人だつたに違ひないでせう」
「そりや左右かも知れません」
「それ御覽なさい。それが惡いぢやありませんか」
夫人の斷定には意味も理窟もなかつた。從つて何處が惡いんだか津田には一向通じなかつた。けれども斯ういふ場合に斯んな風になつて出て來る夫人の特色は、決して逆らへないものとして、もう津田の頭に叩き込まれてゐた。素直に叱られてゐるより外に彼の途はなかつた。
「さういふ積りでもなかつたんですけれども、自然の勢で、何時かさうなつて仕舞つたんでせう」
「でせうぢや不可ません。ですと判然仰しやい。一體斯ういふと失禮なやうですが、貴方があんまり延子さんを大事になさり過ぎるからよ」
津田は首を傾けた。

百三十三

怜悧な性分に似合はず夫人對お延の關係は津田によく呑み込めてゐなかつた。夫人に津田の手前がある

やうに、お延にも津田に置く氣兼ねがあつたので、それが眞向に雙方を了解出來る聰明な彼の頭を曇らせる原因になつた。女中の挨拶に相當の割引をして見る彼も、其所にはつい氣が附かなかつたため、彼は自分の前でする夫人のお延評を眞に受けると同時に、自分の耳に聞こえるお延の夫人評も亦疑はなかつた。さうして其評は雙方共に美しいものであつた。

二人の女性が二人丈で心の内に感じ合ひながら、今迄それを外に現はすまいとのみ力めて來た微妙な軋轢が、必然の要求に逼られて、次第々々に晴れ渡る霧のやうに、津田の前に展開されなければならなくなつたのは此時であつた。

津田は夫人に向つて云つた。

「別段大事にする程の女房でもありませんから、その邊の御心配は御無用です」

「いゝえ左右でないやうですよ。世間ぢやみんな左右思つてますよ」

世間といふ仰山な言葉が津田を驚かせた。夫人は仕方なしに說明した。

「世間つて、みんなの事よ」

津田にはそのみんなさへ明瞭に意識する事が出來なかつた。然し世間だのみんなだのといふ誇張した言葉を強める夫人の意味は、決して推察に困難なものではなかつた。彼女は何うしても其點を津田の頭に叩き込まうとする積りらしかつた。津田はわざと笑つて見せた。

「みんなつて、お秀の事なんでせう」

「秀子さんは無論其内の一人よ」

「其内の一人でさうして又代表者なんでせう」
「かも知れないわ」
津田は再び大きな聲を出して笑つた。然し笑つた後ですぐ氣が附いた。惡い結果になつて夫人の上に反響して來た其笑ひはもう取り返せなかつた。文句を云はずに伏罪する事の便宜を悟つた彼は、忽ち容を改めた。
「兎に角是からよく氣を附けます」
然し夫人はそれでもまだ滿足しなかつた。
「秀子さんばかりだと思ふと間違ひですよ。貴方の叔父さんや叔母さんも、同じ考へなんだから其積りでいらつしやい」
「はあ左右ですか」
藤井夫婦の消息が、お秀の口から夫人に傳へられたのも明らかであつた。
「外にもまだあるんです」と夫人が又附け加へた。津田はたゞ「はあ」と云つて相手の顏を見た拍子に、彼の豫期した通りの言葉がすぐ彼女の口から洩れた。
「實を云ふと、私も皆さんと同じ意見ですよ」
權威でもあるやうな調子で、最後に斯う云つた夫人の前に、彼は勿論反抗の聲を揚げる勇氣を出す必要を認めなかつた。然し腹の中では同時に妙な思はく違ひに想ひ到つた。彼は疑つた。
「何で此人が急に斯んな態度になつたのだらう。自分のお延を鄭重に取扱ひ過ぎるのが惡いといつて非

難する上に、お延自身をも其非難のうちに含めてゐるのではなからうか」

此疑ひは津田にとつて全く新しいものであつた。夫人の本意に到着する想像上の過程を描き出す事さへ彼には困難な位新しいものであつた。彼は此疑問に立ち向ふ前に、まだ自分の頭の中に殘つてゐる一つの質問を掛けた。

「岡本さんでも、そんな評判があるんでせうか」

「岡本は別よ。岡本の事なんか私の關係する所ぢやありません」

夫人が澄まして斯う云ひ切つた時、津田は思はずおやと思つた。「ぢや岡本とあなたの方は別つこだつたんですか」といふ次の問が、自然の順序として、彼の咽喉を滑り出掛かつた。

實を云ふと、彼は「世間」の取沙汰通り、お延を大事にするのではなかつた。誤解交りの此評判が、何處から何うして起つたかを、他に說明しようとすれば、隨分複雜な手數が掛かるにしても、彼の頭の中にはちやんとした明晰な觀念があつて、それを一々掌に指す事の出來る程に、事實の縞柄は解つてゐた。

第一の責任者はお延其人であつた。自分が何の位津田から可愛がられ、又津田を何の位自由にしてゐるかを、最も曲折の多い角度で、あらゆる方面に反射させる手際を到る所に發揮して憚らないものは彼女に違ひなかつた。第二の責任者はお秀であつた。既に一種の誇張がある彼女の眼を、一種の嫉妬が手傳つて染めた。其嫉妬が何處から出て來るのか津田は知らなかつた。結婚後始めて小姑といふ意味を悟つた彼は、折角悟つた意味を、解釋の出來ないために持て餘した。第三の責任者は藤井の叔父夫婦であつた。此所には誇張も嫉妬もない代りに、浮華に對する嫌惡があまり強く働き過ぎた。だから結果は矢張り誤解と同じ

事に歸着した。

百三十四

津田には此誤解を誤解として通して置く特別な理由があつた。さうしてその理由は既に小林の看破した通りであつた。だから彼は此誤解から生じ易い岡本の好意を、出來る丈自分の便宜になるやうに保留しようと試みた。お延を丁寧に取扱ふのは、つまり岡本家の機嫌を取るのと同じ事で、其岡本と吉川とは、兄弟同様に親しい間柄である以上、彼の未來は、お延を大事にすればする程確かになつて來る道理であつた。利害の論理に拔け目のない機敏さを誇りとする彼は、吉川夫妻が表向きの媒妁人として、自分達二人の結婚に關係して呉れた事實を、單なる名譽として喜ぶ程の馬鹿ではなかつた。彼は其所に名譽以外の重大な意味を認めたのである。

然し是は寧ろ一般的の内情に過ぎなかつた。もう一皮剝いて奧へ入ると、底にはまだ底があつた。津田と吉川夫人とは、事件が此所へ來る迄に、他人の關知しない因果でもう結び附けられてゐた。彼等に丈特有な内外の曲折を經過して來た彼等は、他人より少し複雜な眼をもつて、半年前に成立した此新しい關係を眺めなければならなかつた。

有體にいふと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛してゐた。さうして其女を愛させるやうに仕向けたものは吉川夫人であつた。世話好きな夫人は、此若い二人を喰つ附けるやうな、又引き離すやうな閑手段を縱に弄して、そのたびに迷兒々々したり、又は逆せ上がつたりする二人を眼の前に見て樂しんだ。

けれども津田は固く夫人の親切を信じて疑はなかつた。夫人も最後に來るべき二人の運命を斷言して憚らなかつた。のみならず時機の熟した所を見計らつて、二人を永久に握手させようと企てた。所がいざといふ間際になつて、夫人の自信は見事に鼻柱を挫かれた。津田の高慢も助かる筈はなかつた。夫人の自信と共に一棒に撲殺された。肝心の鳥はふいと逃げたぎり、遂に夫人の手に戻つて來なかつた。

夫人は津田を責めた。津田は夫人を責めた。夫人は責任を感じた。然し津田は感じなかつた。彼は今日迄其意味が解らずに、まだ五里霧中に彷徨してゐた。其所へお延の結婚問題が起つた。夫人は再び第二の戀愛事件に關係すべく立ち上がつた。さうして夫と共に、表向きの媒妁人として、綺麗な段落を其所へ附けた。

其時の夫人の樣子を細かに觀察した津田は成程と思つた。

「おれに對する賠償の心持だな」

彼は斯う考へた。彼は未來の方針を大體の上に於て此心持から割り出さうとした。お延と仲善く暮らす事は、夫人に對する義務の一端だと思ひ込んだ。喧嘩さへしなければ、自分の未來に間違ひはあるまいといふ鑑定さへ下した。

斯ういふ心得に萬遺算のある筈はないと初手から極めて掛かつて吉川夫人に對してゐる津田が、たとひ遠廻しにでもお延を非難する相手の匂ひを嗅ぎ出した以上、おやと思ふのは當然であつた。彼は夫人に氣に入るやうに自分の立場を改める前に、先づ確める必要があつた。

「私がお延を大事にし過ぎるのが惡いと仰しやる外に、お延自身に何か缺點でもあるなら、御遠慮なく

忠告して頂きたいと思ひます」

「實はそれで上がつたのよ、今日は」

此言葉を聽いた時、津田の胸は夫人の口から何が出て來るかの好奇心に充ちた。夫人は語を繼いだ。

「是は私でないと面と向つて誰も貴方に云へない事だと思ふから云ひますがね。――お秀さんに智惠を附けられて來たと思つては困りますよ。また後でお秀さんに迷惑を掛けるやうだと、私が濟まない事になるんだから、可ござんすか。そりやお秀さんも其事でわざ／＼來たには違ひないのよ。然し主意は少し違ふんでせう。お秀さんは重に京都の方を心配してゐるの。無論京都は貴方から云へば御父さんだから、決して疎略には出來ますまい。ことに良人でもあゝして御父さんに貴方の世話を頼まれてゐて見ると、默つて放つても置く譯には行かないでせう。けれどもね、詰り其方は枝で、根は別にあるんだから、私は根から先へ療治した方が遙かに有效だと思ふんです。でないと今度のやうな行き違ひが又屹度出て來ますよ。ただ出て來る丈なら可ござんすけれども、そのたんびにお秀さんが遣つて來るやうだと、私も口を利くのに骨が折れる丈ですからね」

夫人のいふ禍の根といふのは慥かにお延の事に違ひなかつた。では其根を何うして療治しようといふのか、肉體上の病氣でもない以上、離別か別居を除いて療治といふ言葉は容易く使へるものでもないのにと津田は考へた。

百三十五

津田は已むを得ず訊いた。

「要するに何うしたら可いんです」

夫人は此子供らしい質問の前に晴らしい得意の色を見せた。けれどもすぐ要點へは來なかつた。彼女は其所だと云はぬばかりにたゞ微笑した。

「一體貴方は延子さんを何う思つていらつしやるの」

同じ問が同じ言葉で昨日掛けられた時、お秀に何と答へたかを津田は思ひ出した。彼は夫人に對する特別な返事を用意して置かなかつた。其代り何とでも答へられる自由な地位にあつた。腹藏のない所をいふと、何うなりとあなたの好きな御返事を致しますといふのが彼の胸中であつた。けれども夫人の頭にある其好きな返事は、全く彼の想像の外にあつた。彼はへどもどするうちにや〳〵した。勢ひ夫人は一歩前へ進んで來る事になつた。

「あなたは延子さんを可愛がつていらつしやるでせう」

此所でも津田の備へは手薄であつた。彼は冗談半分に夫人をあしらふ事なら幾通りでも出來た。然し眞面目に改まつた、責任のある答を、夫人の氣に入る樣な形で與へようとすると、其答は決してさうすらすら出て來なかつた。彼に取つて最も都合の好い事で、又最も都合の惡い事は、何方にでも自由に答へられる彼の心の狀態であつた。といふのは、事實彼はお延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐなかつたからである。

夫人は愈眞劍らしく構へた。さうして三度目の質問をのつぴきさせぬ調子で掛けた。

「私と貴方丈の間の秘密にして置くから正直に云つとしまひなさい。私の聽きたいのは何でもないんです。たゞ貴方の思つた通りの所を一口伺へばそれで可いんです」

見當の立たない津田は愈迷附いた。夫人は云つた。

「貴方も隨分焦慮れつたい方ね。云へる事は男らしく、さつさと云つちまつたら可いでせう。そんな六づかしい事を誰も訊いてるやしないんだから」

津田はとう／＼口を開くべく餘儀なくされた。

「御返事が出來ない譯でもありませんけれども、あんまり問題が漠然としてるものですから……」

「ぢや仕方がないから私の方で云ひませうか。可ござんすか」

「何うぞさう願ひます」

「貴方は」と云ひ掛けた夫人は此時一寸言葉を切つて又繼いだ。

「本當によござんすか。――あたしは斯ういふ無遠慮な性分だから、よく自分の思つたまゝをずば／＼云つちまつた後で、取り返しの附かない事をしたと後悔する場合がよくあるんですが」

「なに構ひません」

「でも若しか、貴方に怒られると夫つ切りですからね。後でいくら詫つても追附かないなんて馬鹿はしたくありませんもの」

「然し私の方で何とも思はなければそれで可いでせう」

「そこさへ確かなら無論可いのよ」

「大丈夫です。僞だらうが本當だらうが、奥さんの仰しやる事なら決して腹は立てませんから、遠慮なさらずに云つて下さい」
凡ての責任を向うに背負はせてしまふ方が遙かに樂だと考へた津田は、斯う請け合つた後で、催促するやうに夫人を見た。何度となく駄目を押して保險を附けた夫人は其時漸く口を開いた。
「もし間違つたら御免遊ばせよ。貴方はみんなが考へてゐる通り、腹の中ではそれ程延子さんを大事にしていらつしやらないでせう。秀子さんと違つて、あたしは疾うからさう睨んでるんですが、何うです、あたしの觀測は中たりませんかね」
津田は何ともなかつた。
「無論です。だから先刻申し上げたぢやありませんか。そんなにお延を大事にしちやゐませんて」
「然しそれは御挨拶に仰しやつた丈ね」
「いゝえ私は本當の所を云つた積りです」
夫人は斷々乎として首肯はなかつた。
「胡魔化しつこなしよ。ぢや後を云つても可ござんすか」
「えゝ何うぞ」
「貴方は延子さんをそれ程大事にしていらつしやらない癖に、表では如何にも大事にしてゐるやうに、他から思はれよう思はれようと掛かつてゐるぢやありませんか」
「お延がそんな事でも云つたんですか」

「いゝえ」と夫人は切つ張り否定した。「貴方が云つてる丈よ。貴方の樣子なり態度なりがそれ丈の事をちやんとあたしに解るやうにして下さる丈よ」

夫人は其所で一寸休んだ。それから後を附けた。

「何うです中たつたでせう。あたしは貴方が何故そんな體裁を作つてゐるんだか、其原因迄ちやんと知つてるんですよ」

百三十六

津田は今日迄斯ういふ種類の言葉をまだ夫人の口から聞いた事がなかつた。自分達夫婦の仲を、夫人が裏側から何んな眼で觀察してゐるだらうといふ問題に就いて、左程神經を遣つてゐなかつた彼は、漸く其所に氣が附いた。そんならさうと早く注意して吳れゝば可いのにと思ひながら、彼は兎に角夫人の鑑定なり料簡なりを大人しく結末迄聽くのが上分別だと考へた。

「何うぞ御遠慮なく何でもみんな云つて下さい。私の向後の心得にもなる事ですから」

途中迄來た夫人は、たとひ津田から誘はれないでも、もう其所で止まる譯に行かないので、すぐ殘りのものを津田の出に投げ出した。

「貴方は良人や岡本の手前があるので、それであんなに延子さんを大事になさるんでせう。もつと露骨なのが御望みなら、まだ露骨にだつて云へますよ。貴方は表向き延子さんを大事にする樣な風をなさるのね、內側は其程でなくつても。左右でせう」

津田は相手の觀察が眞逆是程皮肉な點へ切り込んで來てゐようとは思はなかつた。

「私の性質なり態度なりが奧さんにさう見えますか」

「見えますよ」

津田は一刀で斬られたと同じ事であつた。彼は斬られた後で其理由を訊いた。

「何うして？何うして左右見えるんですか」

「隱さないでも可いぢやありませんか」

「別に隱す積りでもないんですが……」

夫人は自分の推定が十の十迄中たつたと信じて掛かつた。心の中で其穴丈を首肯つた津田の挨拶は、自然何處かに曖昧な節を殘さなければならなかつた。それが此場合誤解の種になるのは見易い道理であつた。夫人は何處迄も同じ言葉を繰り返して、津田を自分の好きな方角へのみ追ひ込んだ。

「隱しちや駄目よ。貴方が隱すと後が云へなくなる丈だから」

津田は是非其後を聽きたかつた。其後を聽かうとすれば、夫人の認定を一から十迄承知するより外に仕方がなかつた。夫人は「それ御覽なさい」と津田を遣り込めた後で歩を進めた。

「貴方には天から誤解があるのよ。貴方は私を良人と一所に見てゐるんでせう。それから良人と岡本をまた一所に見てゐるんでせう。それが大間違ひよ。岡本と良人を一所に見るのはまだしも、私を良人や岡本と一所にするのは可笑しいぢやありませんか、此事件に就いて。學問をした方にも似合はないのね貴方も、そんな所へ行くと」

津田は漸く夫人の立場を知る事が出來た。然し其立場の位置及びそれが自分に對して何んな關係になつてるのかまだ解らなかつた。夫人は云つた。

「解り切つてるぢやありませんか。私丈は貴方と特別の關係があるんですもの」

特別の關係といふ言葉のうちに、何んな内容が盛られてゐるか、津田にはよく解つた。然しこれは目下の問題ではなかつた。何故と云へば、其特別な關係をよく呑み込んでゐればこそ、今日迄の自分の行動にも、それ相當な一種の色と調子を與へて來た積りだと彼は信じてゐたのだから。此特別な關係が夫人を何う支配してゐるか、そこをもつと明らかに突き留めた所に、新しい問題は始めて起るのだと氣が附いた彼は、たゞ自分の誤解を認める丈では濟まされなかつた。

夫人は一口に云ひ拂つた。

「私は貴方の同情者よ」

津田は答へた。

「それは今迄つひぞ疑つて見た例もありません。私は信じ切つてゐます。さうして其點で深くあなたに感謝してゐるものです。然し何ういふ意味で？何ういふ意味で同情者になつて下さる積りなんですか、此場合。私は迂闊ものだから奥さんの意味がよく呑み込めません。だからもつと判然話して下さい」

「此場合に同情者として私が貴方にして上げる事がたゞ一つあると思ふんです。然し貴方は多分――」

夫人は是丈云つて津田の顔を見た。津田はまた焦らされるのかと思つた。然しさうでないと斷言した夫人の問は急に變つた。

「私の云ふ事を聽きますか、聽きませんか」

津田にはまだ常識が殘つてゐた。彼は此所へ押し詰められた何人も考へなければならない事を考へた。然し考へた通りを夫人の前で公然明言する勇氣はなかつた。勢ひ彼の態度は煮え切らないものであつた。聽くとも聽かないとも云ひかねた彼は躊躇した。

「まあ云つて見て下さい」

「まあおや不可ません。あなたがもつと判然しなくつちや、私だつて云ふ氣にはなれません」

「だけれども――」

「だけれどもでも駄目よ。聽きますと男らしく云はなくつちや」

百三十七

何んな注文が夫人の口から出るか見當の附かない津田は、ひそかに恐れた。請け合つた後で撤回しなければならないやうな窮地に陷ればそれぎりであつた。彼は其場合の夫人を想像して見た。地位から云つても、性質から見ても、また彼に對する特別な關係から判斷しても、夫人は決して彼を赦す人ではなかつた。永久夫人の前に赦されない彼は、恰も蘇生の活手段を奪はれた假死の形骸と一般であつた。用心深い彼は生還の望みの確としない危地に入り込む勇氣を有たなかつた。

其上普通の人と違つて夫人は何んな難題を持ち出すか解らなかつた。自由の利き過ぎる境遇、そこに長く住み馴れた彼女の眼には、殆ど自分の無理といふものが映らなかつた。云へば大抵の事は通つた。たま

に通らなければ、意地で通す丈であつた。ことに困るのは、自分の動機を明瞭に解剖して見る必要に逼られない彼女の餘裕であつた。餘裕といふよりも寧ろ放慢な心の持ち方であつた。他の世話を燒く時にする自分の行動は、すべて親切と好意の發現で、其外に何の私もないものと、天から極めて掛かる彼女に、不安の來る筈はなかつた。自分の批判は殆ど當初から働かないし、他の批判は耳へ入らず、また耳へ入れようとするものもないとなると、此所へ落ちて來るのは自然の結果でもあつた。

夫人の前に押し詰められた時、津田の胸に、是丈の考へが蜿蜒くり廻つたので、埒は益開かなかつた。彼の樣子を見た夫人は、遂に笑ひ出した。

「何をそんなに六づかしく考へてるんです。大方私が又無理でも云ひ出すんだと思つてるんでせう。なんぼ私だつて貴方に出來つこないやうな不法は考へやしませんよ。あなたが遣らうとさへ思へば、譯なく出來る事なんです。さうして結果は貴方の得になる丈なんです」

「そんなに雜作なく出來るんですか」

「えゝまあ笑談見たいなものです。ごく／＼大袈裟に云つた所で、面白半分の惡戲よ。だから思ひ切つて遣ると仰しやい」

津田には凡てが謎であつた。けれども高が惡戲ならといふ氣が漸く彼の腹に起つた。彼は遂に決心した。

「何だか知らないがまあ遣つて見ませう。話して見て下さい」

然し夫人はすぐ其惡戲の性質を說明しなかつた。津田の保證を摑んだ後で、また話題を變へた。所がそれは、あらゆる意味で惡戲とは全く懸け離れたものであつた。少なくとも津田には重大な關係を有つてる

た。

夫人は下のやうな言葉で、まづそれを二人の間に紹介した。

「貴方は其後清子さんに御會ひになつて」

「いゝえ」

津田の少し吃驚したのは、たゞ問題の唐突なばかりではなかつた。不意に自分を棄てた女の名が、逃がした責任を半分背負つてゐる夫人の口から急に洩れたからである。夫人は落ち着いた。

「おや今何うしていらつしやるか、御存知ないでせう」

「丸で知りません」

「丸で知らなくつて可いの」

「可くないつたつて仕方がないぢやありませんか。もう餘所へ嫁に行つてしまつたんだから」

「清子さんの結婚の御披露の時に貴方は御出でになつたんでしたかね」

「行きません。行かうたつて一寸行き悪いですからね」

「招待狀は來たの」

「招待狀は來ました」

「貴方の結婚の御披露の時に、清子さんは入らつしやらなかつたやうね」

「えゝ來やしません」

「招待狀は出したの」

「招待狀丈は出しました」
「ぢやそれつ切りなのね、兩方共」
「無論それつ切りです。もしそれつ切りでなかつたら問題ですもの」
「さうね。然し問題にも寄り切りでせう」
津田には夫人の云ふ意味がよく解らなかつた。夫人はそれを說明する前に又外の道へ移つた。
「一體延子さんは清子さんの事を知つてるの」
津田は塞へた。小林を研究し盡くした上でなければ確とした返事は與へられなかつた。夫人は再び訊き直した。
「貴方が自分で話した事はなくつて」
「ありやしません」
「ぢや延子さんは丸で知らずにゐるのね、あの事を」
「えゝ、少なくとも私からは何も聽かされちやゐません」
「さう。ぢや全く無邪氣なのね。それとも少しは勘附いてる所があるの」
「さうですね」
津田は考へざるを得なかつた。考へても斷案丈は控へざるを得なかつた。

百三十八

話してゐるうちに、津田は又思ひ掛けない相手の心理に突き當たつた。今迄清子の事をお延に知らせないで置く方が、自分の都合でもあり、また夫人の意志でもあるとばかり解釋して疑はなかつた彼は、此時始めて氣が附いた。夫人は何う考へてもお延にそれを氣どつてゐて貰ひたいらしかつたからである。

「大抵の見當は附きさうなものですがね」と夫人は云つた。津田はお延の性質を知つてゐる丈に猶答へ惡くなつた。

「其所が分らないと不可ないんですか」

「えゝ」

津田は何故だか知らなかつた。けれども答へた。

「もし必要なら話しても好ござんすが……」

夫人は笑ひ出した。

「今更貴方がそんな事をしちや打ち壞しよ。貴方は仕舞迄知らん顏をしてゐなくつちや」

夫人は是丈云つて、言葉に區切りを附けた後で、新たに出直した。

「私の判斷を云ひませうか。延子さんはあゝいふ怜悧な方だから、もう屹度感づいてゐるに違ひないと思ふのよ。何、みんな判る筈もないし、又みんな判つちや此方が困るんです。判つたやうで又判らないやうなのが、丁度持つて來いといふ一番結構な頃合なんですからね。そこで私の鑑定から云ふと、今の延子さんは、都合よく私の御誂へ通りの所にいらつしやるに違ひないのよ」

津田は「左右ですか」といふより外に仕方がなかつた。然しさういふ結論を夫人に與へる材料は殆どな

からうにと、腹の中では思つた。然るに夫人はあると云ひ出した。
「でなければ、あゝ虚勢を張る譯がありませんもの」
お延の態度を虚勢と評したのは、夫人が始めてであつた。此二字の前に怪訝な思ひをしなければならなかつた津田は、一方から見て、また其皮肉を第一に首肯はなければならない人であつた。それにも拘らず彼は躊躇なしに應諾を與へる事が出來なかつた。夫人はまた事もなげに笑つた。
「なに構はないのよ。萬一全く氣が附かずにゐるやうなら、其時は又其時で此方にいくらでも手があるんだから」
津田は默つて其後を待つた。すると後は出ずに、急に清子の方へ話しが逆轉して來た。
「貴方は清子さんにまだ未練がおありでせう」
「ありません」
「ちつとも？」
「ちつともありません」
「それが男の嘘といふものです」
嘘を云ふ積りでもなかつた津田は、全然本當を云つてゐるのでもないといふ事に氣が附いた。
「是でも未練があるやうに見えますか」
「そりや見えないわ、貴方」
「ぢや何うしてさう鑑定なさるんです」

「だからよ。見えないからさう鑑定するのよ」

夫人の論議は普通のそれと丸で反對であつた。と云つて、支離滅裂は何處にも含まれてゐなかつた。彼女は得意にそれを引き延ばした。

「外の人には外側も内側も同じとしか見えないでせう。然し私には外側へ出られないから、仕方なしに未練が内へ引込んでゐるとしか考へられませんもの」

「奥さんは初手から私に未練があるものとして、極めて掛かつていらつしやるから、さう仰しやるんでせう」

「極めて掛かるのに何處に無理がありますか」

「さう勝手に認定されてしまつちや堪りません」

「私がいつ勝手に認定しました。私のは認定ぢやありませんよ。事實ですよ。貴方と私丈に知れてゐる事實を云ふのですよ。事實ですもの、それをちやんと知つてる私に隱せる譯がないぢやありませんか、いくら外の人を騙す事が出來たつて。それもあなた丈の事實ならまだしも、二人に共通な事實なんだから、兩方で相談の上、何處かへ埋めちまはないうちは、記憶のある限り、消えつこないでせう」

「ぢや相談づくで此所で埋めちや何うです」

「何故埋めるんです。埋める必要が何處かにあるんですか。それより何故それを活かして使はないんです」

「活かして使ふ？私は是でもまだ罪惡には近寄りたくありません」

「罪惡とは何です。そんな手荒な事をしろと私が何時云ひました」
「然し……」
「貴方はまだ私の云ふ事を仕舞迄聽かないぢやありませんか」
津田の眼は好奇心をもつて輝いた。

百三十九

夫人はもう未練のある證據を眼の前に突き附けて津田を抑へたと同じ事であつた。自白後に等しい彼の態度は二人の仕合に一段落を附けたやうに夫人を強くした。けれども彼女は津田が最初に考へた程此點に於て獨斷的な暴君ではなかつた。彼女は思つたより細緻な注意を拂つて、津田の心理狀態を觀察してゐるらしかつた。彼女は其實券を、一旦勝つた後で彼に示した。

「たゞ未練未練つて、雲を掴むやうな騷ぎを遣るんぢやありませんよ。私には私で又ちやんと握つてる所があるんですからね。是でも貴方の未練を斯んなものだといつて他に説明する事が出來る積りでゐるんですよ」

津田には何が何だか薩張り譯が解らなかつた。

「一寸説明して見て下さいませんか」
「御望みなら説明しても可ござんす。けれどもさうすると詰り貴方を説明する事になるんですよ」
「えゝ構ひません」

夫人は笑ひ出した。

「さう他の云ふ事が通じなくつちや困るのね。現在自分がちやんと其所に控へてゐながら、其自分が解らないで、他に説明して貰ふなんてえのは馬鹿氣てゐるぢやありませんか」

果して夫人の云ふ通りなら馬鹿氣てゐるに違ひなかつた。津田は首を傾けた。

「然し解りませんよ」

「いゝえ解つてるのよ」

「ぢや氣が附かないんでせう」

「いゝえ氣も附いてゐるのよ」

「ぢや何うしたんでせう。――つまり私が隱してゐる事にでも歸着するんですか」

「まあ左右よ」

津田は投げ出した。此所迄追ひ詰められながら、まだ隱し立てをしようとは流石の自分にも道理と思へなかつた。

「馬鹿でも仕方がありません。馬鹿の非難は甘んじて受けますから、何うぞ説明して下さい」

夫人は微かに溜息を吐いた。

「あゝあ、張合ひがないのね、それぢや。折角私が丹精して拵へて來て上げたのに、肝心の貴方がそれぢや、丸で無駄骨を折つたと同然ね。一層何も話さずに歸らうか知ら」

津田は迷宮に引き込まれる丈であつた。引き込まれると知りながら、彼は夫人の後を追懸けなければな

らなかつた。其所には自分の好奇心が強く働いた。夫人に對する義理と氣兼ねも、決して輕い因子ではなかつた。彼は何度も同じ言葉を繰り返して夫人の說明を促した。

「ぢや云ひませう」と最後に應じた時の夫人の樣子は寧ろ得意であつた。「其代り訊きますよ」と斷つた彼女は、果して劈頭に津田の意氣を挫いた。

「貴方は何故淸子さんと結婚なさらなかつたんです」

問は不意に來た。津田は俄に息塞まつた。默つてゐる彼を見た上で夫人は言葉を改めた。

「ぢや質問を易へませう。――淸子さんは何故貴方と結婚なさらなかつたんです」

今度は津田が響の聲に應ずる如くに答へた。

「何故だか些とも解らないんです。たゞ不思議なんです。いくら考へても何も出て來ないんです」

「突然關さんへ行つちまつたのね」

「えゝ、突然。本當を云ふと、突然なんてものは疾くの昔に通り越してゐましたね。あつと云つて後を向いたら、もう結婚してゐたんです」

「誰があつと云つたの」

此質問程津田に取つて無意味なものはなかつた。誰があつと云はうと餘計な御世話としか彼には見えなかつた。然るに夫人は其所へ留まつて動かなかつた。

「あなたがあつと云つたんですか。淸子さんがあつと云つたんですか。或は兩方であつと云つたんですか」

「さあ」

津田は已むなく考へさせられた。夫人は彼より先へ出た。

「清子さんの方は平氣だつたんぢやありませんか」

「さあ」

「さあぢや仕方がないわ、貴方。貴方には何う見えたのよ、其時の清子さんが。平氣には見えなかつたの」

「何うも平氣のやうでした」

夫人は輕蔑の眼を彼の上に向けた。

「隨分氣樂ね、貴方も。清子さんの方が平氣だつたから、貴方があつと云はせられたんぢやありませんか」

「或は左右かも知れません」

「そんなら其時のあつの始末は何う附ける氣なの」

「別に附けやうがないんです」

「附けやうがないけれども、實は附けたいんでせう」

「えゝ。だから色々考へたんです」

「考へて解つたの」

「解らないんです。考へれば考へる程解らなくなる丈なんです」

「それだから考へるのはもう已めちまつたの」
「いゝえ矢つ張り已められないんです」
「ぢや今でもまだ考へてるのね」
「さうです」
「それ御覧なさい。それが貴方の未練ぢやありませんか」
夫人はとう〳〵津田を自分の思ふ所へ押し込めた。

百四十

準備は略出來上がつた。要點はそろ〳〵津田の前に展開されなければならなかつた。夫人は機を見て次第に其所へ入つて行つた。
「そんならもつと男らしくしちや何うです」といふ漠然たる言葉が、最初に夫人の口を出た。其時津田は又かと思つた。先刻から「男らしくしろ」とか「男らしくない」とかいふ文句を聞かされる度に、彼は心の中で暗に夫人を冷笑した。夫人の男らしいといふ意味は果して何處にあるのだらうと疑つた。批判的な眼を拭つて見る迄もなく、彼女は自分の都合ばかりを考へて、津田を遣り込めるために、勝手な所へ矢鱈に此言葉を使ふとしか解釋出來なかつた。彼は苦笑しながら訊いた。
「男らしくするとは？――何うすれば男らしくなれるんですか」
「貴方の未練を晴らす丈でさあね。分り切つてるぢやありませんか」

「何うして」

「全體何うしたら晴らされると思つてるんです、貴方は」

「そりや私には解りません」

夫人は急に勢ひ込んだ。

「貴方は馬鹿ね。その位の事が解らないで何うするんです。會つて訊く丈ぢやありませんか」

津田は返事が出來なかつた。會ふのがそれ程必要にした所で、何んな方法で何處で何うして會ふのか。その方が先決問題でなければならなかつた。

「だから私が今日わざ／＼此所へ來たんぢやありませんか」と夫人が云つた時、津田は思はず彼女の顏を見た。

「實は疾うから、貴方の料簡をよく伺つて見たいと思つてた所へね、今朝お秀さんがあの事で來たもんだから、それで丁度好い機會だと思つて出て來たやうな譯なんですがね」

腹に支度の整はない津田の頭はたゞ迷兒々々する丈であつた。夫人はそれを見澄まして斯ういつた。

「誤解しちや不可ませんよ。私は私、お秀さんはお秀さんなんだから。何もお秀さんに頼まれて來たからつて、屹度あの方の肩ばかり持つとは限らない位は、貴方にだつて解るでせう。先刻も云つた通り、私は是でも貴方の同情者ですよ」

「えゝそりやよく心得てゐます」

此所で問答に一區切りを附けた夫人は、時を移さず要點に達する第二の段落に這入り込んで行つた。

「清子さんが今何處にいらつしやるか、貴方知つてらつしつて」
「關の所にゐるぢやありませんか」
「そりや不斷の話よ。私のいふのは今の事よ。今何處にいらつしやるかつていふのよ。東京か東京でないか」
「存じません」
「中てて御覧なさい」
津田は中てつ子をしたつて詰らないといふ風をして默つてゐた。すると思ひ掛けない場所の名前が突然夫人の口から點出された。一日掛りで東京から行かれる可なり有名な其溫泉場の記憶は、津田に取つても夫程舊いものではなかつた。急に其邊の景色を思ひ出した彼は、たゞ「へえゝ」と云つたぎり、後をいふ智慧が出なかつた。
　夫人は津田のために親切な說明を加へて吳れた。彼女の云ふ所によると、目的の人は靜養のため、當分其所に逗留してゐるのであつた。夫人は何で靜養が其人に必要であるかをさへ知つてゐた。流產後の身體を回復するのが主眼だと云つて聞かせた夫人は、津田を見て意味ありげに微笑した。津田は腹の中で略其微笑を解釋し得たやうな氣がした。けれどもそんな事は、夫人に取つても彼に取つても、目前の問題ではなかつた。一口の批評を加へる氣にもならなかつた彼は、默つて夫人の聽き手になる積りで大人しくしてゐた。同時に夫人は第三の段落に飛び移つた。
「貴方も入らつしやいな」

津田の心は此言葉を聞く前から既に搖いてゐた。然し行かうといふ決心は、此言葉を聞いた後でも附かなかつた。夫人は一煽りに煽つた。

「入らつしやいよ。行つたつて誰の迷惑になる事でもないぢやありませんか。行つて澄ましてゐれば夫迄でせう」

「それは左右です」

「貴方は貴方で始めつから獨立なんだから構つた事はないのよ。遠慮だの氣兼ねだのつて、なまじ餘計なものを荷にし出すと、事が面倒になる丈ですわ。それに貴方の病氣には、此所を出た後で、あゝいふ所へ一寸行つて來る方が可いんです。私に云はせれば、病氣の方丈でも行く必要は充分あると思ふんです。だから是非入らつしやい。行つて天然自然來たやうな顏をして澄ましてゐるんです。さうして男らしく未練の片を附けて來るんです」

夫人は旅費さへ出して遣ると云つて津田を促した。

百四十一

旅費を貰つて、勤向きの都合を附けて貰つて、病後の身體を心持の好い溫泉場で靜養するのは、誰に取つても望ましい事に違ひなかつた。ことに自己の快樂を人間の主題にして生活しようとする津田には滅多にない誂へ向きの機會であつた。彼に云はせると、見す〳〵それを取り外すのは愚の極であつた。然し此場合に附帶してゐる一種の條件は決して尋常のものではなかつた。彼は顧慮した。

彼を引き留める心理作用の性質は一目瞭然であつた。けれども彼は其働きの顯著な力に氣が附いてゐる丈で、其意味を返照する遑がなかつた。此點に於ても夫人の方が、彼自身よりも却て確りした心理の觀察者であつた。二つ返事で斷行を誓ふと思つた津田が何處か澁つてゐる樣子を見た夫人は斯う云つた。

「貴方は內心行きたがつてる癖に、もぢ〱していらつしやるのね。それが私に云はせると、男らしくない貴方の一番惡い所なんですよ」

男らしくないと評されても大した苦痛を感じない津田は答へた。

「左右かも知れませんけれども、少し考へて見ないと……」

「其考へる癖が貴方の人格に祟つて來るんです」

津田は「へえ？」と云つて驚いた。夫人は澄ましたものであつた。

「女は考へやしませんよ。そんな時に」

「ぢや考へる私は男らしい譯ぢやありませんか」

此答を聞いた時、夫人の態度が急に嶮しくなつた。

「そんな生意氣な口應へをするもんぢやありません。言葉丈で他を遣り込めれば何處が何うしたといふんです、馬鹿らしい。貴方は學校へ行つたり學問をしたりした方の癖に、丸で自分が見えないんだから御氣の毒よ。だから畢竟淸子さんに逃げられちまつたんです」

津田は又「えつ！」と云つた。夫人は構はなかつた。

「貴方に分らなければ、私が云つて聽かせて上げます。貴方が何故行きたがらないか、私にはちやんと

分つてるんです。貴方は臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」

「左右ぢやありません。私は……」

「御待ちなさい。」貴方は勇氣はあるといふ氣なんでせう。然し出るのは見識に拘るといふんでせう。私から云へば、さう見識ばるのが取りも直さず貴方の臆病な所なんですよ、好ござんすか。何故と云つて御覧なさい。そんな見識はたゞの見榮ぢやありませんか。好く云つた所で、上つ面の體裁ぢやありませんか。世間に對する手前と氣兼ねを引いたら後に何が殘るんです。花嫁さんが誰も何とも云はないのに、自分で極りを惡くして、三度の御飯を控へるのと同じ事よ」

津田は呆氣に取られた。夫人の小言はまだ續いた。

「つまり色氣が多過ぎるから、そんな入らざる所に我を立てゝ見たくなるんでせう。さうしてそれが貴方の己惚れに生れ變つて變な所へ出て來るんですよ」

津田は仕方なしに默つてゐた。夫人は容赦なく一歩進んで其己惚れを説明した。

「貴方は何時迄も品よく默つてゐようといふんです。ぢつと動かずに濟まさうとなさるんです。それでゐて内心ではあの事が始終苦になるんですよ。そこをもう少し押して御覧なさいな。おれが斯うしてゐるうちには、今に清子の方から何か説明して來るだらう來るだらうと思つて――」

「そんな事を思つてるもんですか、なんぼ私だつて」

「いゝえ、思つてるのと同じだといふのです。實際何處にも變りがなければ、さう云はれたつて仕樣がないぢやありませんか」

津田にはもう反抗する勇氣がなかつた。機敏な夫人は其所へ附け込んだ。

「一體貴方は圖迂々々しい性質ぢやありませんか。さうして圖迂々々しいのも世渡りの上ぢや一德だ位に考へてるんです」

「まさか」

「いゝえ、左右です。其所がまだ私に解らないと思つたら、大間違ひです。好いぢやありませんか、圖迂々々しいで、私は圖迂々々しいのが好きなんだから。だから此所で持ち前の圖迂々々しい所を男らしく充分發揮なさいな。そのために私が折角骨を折つて拵へて來たんだから」

「圖迂々々しさの活用ですか」と云つた津田は言葉を改めた。

「あの人は一人で行つてるんですか」

「無論一人です」

「關は！」

「關さんは此方よ。此方に用があるんですもの」

津田は漸く行く事に覺悟を極めた。

百四十二

然し夫人と津田の間には結末の附かないまだ一つの問題が殘つてゐた。二人は其所を振り返らないで話しを切り上げる譯に行かなかつた。夫人が踵を回らさないうちに、津田は歸つた。

「それで私が行くとしたら、何うなるんです。先刻仰しやつた事は」

「其所です。其所を今云はうと思つてゐたのよ。私に云はせると、是程好い療治はないんですがね。何うでせう。貴方の御考へは」

津田は答へなかつた。夫人は念を押した。

「解つたでせう。後は云はなくつても」

夫人の意味は説明を待たないでも略津田に呑み込めた。然しそれを何んな風にして、お延の上に影響させる積りなのか、其所へ行くと彼には確とした觀念がなかつた。夫人は笑ひ出した。

「貴方は知らん顏をしてゐれば可いんですよ。後は私の方で遣るから」

「左右ですか」と答へた津田の頭には疑惑があつた。後を擧げて夫人に一任するとなると、お延の運命を他人に委ねると同じ事であつた。多少夫人の手腕を恐れてゐる彼は危んだ。何をされるか解らないといふ懸念に制せられた。

「御任せしても可いんですが、手段や方法が解つてゐるなら伺つて置く方が便利かと思ひます」

「そんな事は貴方が知らないでも可いのよ。まあ見て入らつしやい、私がお延さんをもつと奥さんらしい奥さんに屹度育て上げて見せるから」

津田の眼に映るお延は無論不完全であつた。けれども彼の氣に入らない缺點が、必ずしも夫人の難の打ち所とは限らなかつた。それをちやんぽんに混同してゐるらしい夫人は、少なくとも自分に都合の可いお延を鍛へ上げる事が、即ち津田のために最も適當な細君を作り出す所以だと誤解してゐるらしかつた。そ

れのみか、もう一歩夫人の胸中に立ち入つて、其眞底を探ると、飛んでもない結論になるかも知れなかつた。彼女はたゞお延を好かないために、ある手段を拵へて、相手を苛めに掛かるのかも分らなかつた。氣に喰はない丈の根據で、敵を打ち懲らす方法を講じてゐるのかも分らなかつた。幸ひに自分で其所を認めなければならない程に、世間からも己からも反省を强ひられてゐない境遇にある彼女は、氣樂であつた。お延の教育。――斯ういふ言葉が臆面なく彼女の口を洩れた。夫人とお延の間柄を、內面から看破る機會に出會つた事のない津田には又其言葉を疑ふ資格がなかつた。彼は大體の上で夫人の實意を信じて掛かつた。然し實意の作用に至ると、勢ひ危惧の念が伴なはざるを得なかつた。

「心配する事があるもんですか。細工はりう／＼仕上げを御覽じろつて云ふぢやありませんか」

いくら津田が訊いても詳しい話しをしなかつた夫人は、斯んな高を括つた挨拶をした後で、敎へるやうに津田に云つた。

「あの方は少し己惚れ過ぎてる所があるのよ。それから內側と外側がまだ一致しないのね。上部が大變叮寧で、御腹の中は確かりし過ぎる位確りしてゐるんだから。それに利巧だから外へは出さないけれども、あれで中々慢氣が多いのよ。だからそんなものを皆取つちまはなくつちや……」

夫人が無遠慮な評をお延に加へてゐる最中に、階子段の中途で足を止めた看護婦の聲が二人の耳に入つた。

「吉川の奧さんへ堀さんと仰しやる方から電話で御座います」

夫人は「はい」と應じてすぐ立つたが、敷居の所で津田を顧た。

「何の用でせう」

津田に解らなかつた其用を足すために下へ降りて行つた夫人は、すぐ又上がつて来ていきなり云つた。

「大變々々」

「何が？何うかしたんですか」

夫人は笑ひながら落附いて答へた。

「秀子さんがわざ／＼注意して呉れたの」

「何をです」

「今迄延子さんが秀子さんの所へ来て話してゐたんですつて。歸りに病院の方へ廻るかも知れないから、一寸御知らせするつて云ふのよ。今秀子さんの門を出た許の所だつて。――まあ好かつた。悪口でも云つてる所へ来られようもんなら、大恥を掻かなくつちやならない」

一旦坐つた夫人は、間もなくまた立つた。

「ぢや私はもう御暇にしますからね」

斯んな打ち合せをした後でお延の顔を見るのは、彼女に取つても極りが好くないらしかつた。

「入らつしやらないうちに、早く退却しませう。何うぞよろしく」

一言の挨拶を彼女に殘したまゝ、夫人はつひに病室を出た。

百四十三

此時お延の足は既に病院に向つて動いてゐた。

堀の宅から醫者の所へ行くには、門を出て一二丁町東へ歩いて、其所にＴ字形を描いてゐる大きな往來を又一つ向うへ越さなければならなかつた。彼女が此曲り角へ掛かつた時、北から來た一臺の電車が丁度彼女の前、方角から云へば少し筋違の所で留まつた。何氣なく首を上げた彼女は見るともなしに此所側の窓を見た。すると窓硝子を通して映る乘客の中に一人の女がゐた。位地の關係から、お延はたゞ其女の横顔の半分若しくは三分一を見た丈であつたが、見た丈ですぐはつと思つた。吉川夫人ぢやないかといふ氣が忽ち彼女の頭を刺激したからである。

電車はぢきに動き出した。お延は自分の物色に滿足な時間を與へずに走り去つた其後影を少時見送つたあとで、通を東側へ横切つた。

彼女の歩く往來はもう横町丈であつた。其邊の地理に詳しい彼女は、幾何かの小路を右へ折れたり左へ曲がつたりして、一番近い道をはやく病院へ行き着く積りであつた。けれども電車に會つた後の彼女の足は急に重くなつた。距離にすればもう二三丁といふ所迄來た時、彼女は病院へ寄らずに、一旦宅へ歸らうかと思ひ出した。

彼女の心は堀の門を出た折から既に重かつた。彼女は無暗にお秀を突つ附いて、却て遣り損なつた不快を胸に包んでゐた。そこには大事を明らさまに握る事が出來ずに、裏からわざ〳〵匂はせられた羽痒さがあつた。なまじひそれを嗅ぎ附けた不安の色も、前よりは一層濃く染め附けられた丈であつた。何よりも先だつのは、此方の弱點を見拔かれて、逆さまに相手から翻弄されはしなかつたかといふ疑惑であつた。

お延はそれ以上にまだ鋭い氣を遠くの方迄迸してゐた。彼女は自分に對して仕組まれた謀計が、内密に何處かで進行してゐるらしいと迄感附いた。主謀者は誰にしろ、お秀が其一人である事は確かであつた。吉川夫人が關係してゐるのも明らかに推測された。――斯う考へた彼女は急に心細くなつた。知らないうちに重圍のうちに自分を見出だした孤軍のやうな心境が、遠くから彼女を襲つて來た。彼女は周圍を見廻した。然し其所には夫を除いて便りになるものは一人もゐなかつた。彼女は何を置いてもまづ津田に走らなければならなかつた。其津田を疑つてゐる彼女にも、まだ信力は殘つてゐた。如何な事があらうとも、夫丈は共謀者の仲間入りはよもしまいと念じた彼女の足は、堀の門を出るや否や、ひとりでにすぐ病院の方へ向いたのである。

その心理作用が今喰ひ留められなければならなくなつた時、通で會つた電車の影をお延は腹の底から呪つた。もし車中の人が吉川夫人であつたとすれば、もし吉川夫人が津田の所へ見舞に行つたとすれば、もし見舞に行つた序に、――。如何に怜悧なお延にも考へる自由の與へられてゐない其後は容易に出て來なかつた。けれども結果は一つであつた。彼女の頭は急にお秀から吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた。彼女は何がなしに、此三人を巴のやうに眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電氣を通はせ合つてゐるかも知れない」

今迄避難場の積りで夫の所へ驅け込まうとばかり思つてゐた彼女は考へざるを得なかつた。

「此分ぢや、たゞ行つたつて不可ない。行つて何うしよう」

彼女は何うしようといふ分別なしに歩いて來た事に氣が附いた。すると何んな態度で、何んな風に津田

に會ふのが、此場合最も有效だらうといふ問題が、左も重要らしく彼女に見え出して來た。夫婦の癖に、そんな餘所行の支度なんぞして何になるといふ非難を何處にも聽かなかつたので、一旦宅へ歸つて、よく氣を落ち附けて、それから又出直すのが一番の上策だと思ひ極めた彼女は、遂にもう五六分で病院へ行き着かうといふ小路の中程から取つて返した。さうして柳の木の植わつてゐる大通から賑やかな往來迄歩いてすぐ電車へ乘つた。

百四十四

お延は日のとぼ／＼頃に宅へ歸つた。電車から降りて一丁程の所を、身に染みるやうな夕暮の靄に包まれた後の彼女には、何よりも火鉢の傍が戀しかつた。彼女はコートを脱ぐなりまつ其所へ坐つて手を翳した。

然し彼女には殆ど一分の休憩時間も與へられなかつた。坐るや否や彼女はお時の手から津田の手紙を受け取つた。手紙の文句は固より簡單であつた。彼女は封を切る手數と殆ど同じ時間で、それを讀み下す事が出來た。けれども讀んだ後の彼女は、もう讀む前の彼女ではなかつた。僅か二三行ばかりの言葉は一冊の書物より強く彼女を動かした。一度に外から持つて歸つた氣分に火を點けた其書翰の前に彼女の心は躍つた。

「今日病院へ來て不可ないといふ意味は何處にあるだらう」

それでなくつても、もう一遍出直す筈であつた彼女は、時間に關ふ餘裕さへなかつた。彼女は臺所から

膳を運んで來たお時を驚かして、すぐ立ち上がつた。

「御飯は歸つてからにするよ」

彼女は今脱いだばかりのコートを又羽織つて、門を出た。然し電車通迄歩いて來た時、彼女の足は、又小路の角で留まつた。彼女は何故だか病院へ行くに堪へないやうな氣がした。此樣子では行つた所で、役に立たないといふ思慮が不意に彼女に働き掛けた。

「夫の性質では、とても率直に此手紙の意味を説明しては呉れまい」

彼女は心細くなつて、自分の前を右へ行つたり左へ行つたりする電車を眺めてゐた。其電車を右へ利用すれば病院で、左へ乘れば岡本の宅であつた。いつそ當初の計畫をやめて、叔父の所へでも行かうかと考へ附いた彼女は、考へ附くや否や、すぐ其方面に横たはる困難をも想像した。岡本へ行つて相談する以上、彼女は打ち明け話しをしなければならなかつた。今迄隱してゐた夫婦關係の奧底を、曝け出さなければ、一歩も前へ出る譯には行かなかつた。叔父と叔母の前に、自分の眼が利かなかつた自白を綺麗にしなければならなかつた。お延はまだそれ程の恥を忍ぶ迄に事件は迫つてゐないと考へた。復活の見込が充分立たないのに、醉興で自分の虚榮心を打ち殺すやうな正直は、彼女の最も輕蔑する所であつた。

彼女は決しかねて右と左へ少しづゝ搖れた。彼女が斯んなに迷つてゐるとは丸で氣の附かない津田は、此時床の上に起き上がつて、平氣で看護婦の持つて來た膳に向ひつゝあつた。先刻お秀から電話の掛かつた時、既にお延の來訪を豫想した彼は、吉川夫人と入れ代りに細君の姿を病室に見るべく暗に心の調子を整へてゐた所が、其細君は途中から引き返してしまつたので、輕い失望の間に、夕食の時間が來る迄、待

ち草臥れた所爲か、看護婦の顏を見るや否や、すぐ話し掛けた。
「漸く飯か。何うも一人でゐると日が長くつて困るな」
看護婦は體の小さい血色の好くない女であつた。然し年頃は何うしても、津田に鑑定の附かない妙な顏をしてゐた。何時でも白い服を着けてゐるのが、猶更彼女を普通の女の群から遠ざけた。津田はつねに疑つた。——此人が通常の着物を着る時に、まだ肩上げを附けてゐるだらうか、又は除つてゐるだらうか。彼はいつか眞面目に斯んな質問を彼女に掛けて見た事があつた。其時彼女はにやりと笑つて、「私はまだ見習です」と答へたので、津田は大凡の見當を立てた位であつた。
膳を彼の枕元へ置いた彼女はすぐ下へ降りなかつた。
「御退屈さま」と云つて、にや／＼笑つた彼女は、すぐ後を附け足した。
「今日は奧さんは御見えになりませんね」
「うん、來ないよ」
津田の口の中にはもう焦げた麵麭が一杯入つてゐた。彼はそれ以上何も云ふ事が出來なかつた。然し看護婦の方は自由であつた。
「其代り外の御客さまが入らつしやいましたね」
「うん。あの御婆さんだらう。隨分肥つてるね、あの奧さんは」
看護婦が惡口の相槌を打つ氣色を見せないので、津田は一人で喋舌らなければならなかつた。
「もつと若い綺麗な人が、どん／＼見舞に來て呉れると病氣も早く癒るんだがな」と云つて看護婦が笑

はせた彼は、すぐ彼女から冷嘲し返された。

「でも毎日女の方ばかり入らつしやいますね。餘つ程間が好いと見えて」

彼女は小林の來た事を知らないらしかつた。

「昨日入らしつた奥さんは大變御綺麗ですね」

「あんまり綺麗でもないよ。あいつは僕の妹だからね。何處か似てゐるかね、僕と」

看護婦は似てゐるとも似てゐないとも答へずに、矢つ張りにや〳〵してゐた。

百四十五

それは看護婦に取つて意外な儲け日であつた。下痢の氣味で何時もの通り診察場に出られなかつた醫者に、代理を頼まれた彼の友人は、午前の都合を附けて呉れた丈で、午後から夜へ掛けての時間には、もう顏を出さなかつた。

「今日は當直だから晩には來られないんださうです」

彼女は斯う云つて、不斷のやうな忙しい樣子を何處にも見せずに、ゆつくり津田の膳の前に坐つてゐた。退屈凌ぎに好い相手の出來た氣になつた津田の舌には締りがなかつた。彼は面白半分色々な事を訊いた。

「君の國は何處かね」

「栃木縣です」

「成程さう云はれて見ると、さうかな」

「名前は何と云つたつけね」

「名前は知りません」

看護婦は中々名前を云はなかつた。津田は其所に發見された抵抗が愉快なので、わざ／＼何遍も同じ事を繰り返して訊いた。

「ぢや是から君の事を栃木縣、栃木縣つて呼ぶよ。可いかね」

「えゝ可ござんす」

彼女の名前の頭文字はつであつた。

「露か」

「いゝえ」

「成程露ぢやあるまいな。ぢや土か」

「いゝえ」

「待ち玉へよ。露でもなし、土でもないとすると。――はゝあ、解つた。つやだらう。でなければ、常か」

津田はいくらでも出鱈目を云つた。云ふたびに看護婦は首を振つて、にや／＼笑つた。笑ふたびに、津田は又彼女を追窮した。仕舞に彼女の名がつきだと判然つた時、彼は此珍らしい名をまだ弄んだ。

「お月さんだね、すると。お月さんは好い名だ。誰が命けた」

看護婦は返答を與へる代りに突然逆襲した。

「あなたの奧さんの名は何と仰しやるんですか」

「中てて御覽」

看護婦はわざと二つ三つ女らしい名を竝べた後で云つた。

「お延さんでせう」

彼女は旨く中てた。といふよりも、何時の間にかお延の名を聞いて覺えてゐた。

「お月さんは何うも油斷がならないなあ」

津田が斯う云つて興じてゐる所へ、本人のお延がひよつくり顏を出したので、振り返つた看護婦は驚いて、すぐ膳を持つたなり立ち上がつた。

「あゝ、とう／＼入らしつた」

看護婦と入れ代りに津田の枕元へ坐つたお延は忽ち津田を見た。

「來ないと思つて入らしつたんでせう」

「いや左右でもない。然し今日はもう遲いから何うかとも思つてゐた」

津田の言葉に僞りはなかつた。お延にはそれを認める丈の眼があつた。けれどもさうすれば事の矛盾は猶募るばかりであつた。

「でも先刻手紙を御寄こしになつたのね」

「あゝ遣つたよ」

「今日來ちや不可ないと書いてあるのね」

「うん、少し都合の悪い事があつたから」
「何故あたしが來ちや御都合が悪いの」
津田は漸く氣が附いた。彼はお延の樣子を見ながら答へた。
「なに何でもないんだ。下らない事なんだ」
「でも、わざ〳〵使に持たせて御寄こしになる位だから、何かあつたんでせう」
津田は胡魔化して仕舞はうとした。
「下らない事だよ。何で又そんな事を氣に掛けるんだ。御前も馬鹿だね」
慰藉の積りで云つた津田の言葉は却て反對の結果をお延の上に生じた。彼女は黒い眉を動かした。無言の儘帶の間へ手を入れて、其所から先刻の書翰を取り出した。
「是をもう一遍見て頂戴」
津田は默つてそれを受け取つた。
「別段何も書いちやないぢやないか」と云つた時、彼の腹は漸く彼の口を否定した。手紙は簡單であつた。けれどもお延の疑ひを惹くには充分であつた。既に疑はれる丈の弱味を有つてる彼は、遣り損なつたと思つた。
「何も書いてないから、其理由を伺ふんです」とお延は云つた。
「話して下すつても可いぢやありませんか。折角來たんだから」
「御前はそれを聽きに來たのかい」

「えゝ」

「わざ〳〵」

「えゝ」

お延は何處迄行つても動かなかつた。相手の手剛さを悟つた時、津田は偶然好い嘘を思ひ附いた。

「實は小林が來たんだ」

小林の二字はたしかにお延の胸に反響した。然しそれ丈では濟まなかつた。彼はお延を滿足させるために、却て其所を說明して遣らなければならなかつた。

百四十六

「小林なんかに逢ふのは御前も厭だらうと思つてね。それで氣が附いたからわざ〳〵知らして遣つたんだよ」

斯う云つてもお延はまだ得心した樣子を見せなかつたので、津田は已むを得ず慰藉の言葉を延ばさなければならなかつた。

「御前が厭でないにした所で、おれが厭なんだ、あんな男に御前を會はせるのは。それに彼奴が又御前に聽かせたくないやうな厭な用事を持ち込んで來たもんだからね」

「あたしの聽いて惡い用事？　ぢや御二人の間の祕密なの？」

「そんな譯のものぢやないよ」と云つた津田は、自分の上に寸分の油斷なく据ゑられたお延の細い眼を

見た時に、周章てて後を附け足した。
「又金を強乞りに來たんだ。たゞそれ丈さ」
「ぢやあたしが聽いて何故惡いの」
「惡いとは云やしない。聽かせたくないといふ迄さ」
「するとたゞ親切づくで寄こして下すつた手紙なのね、是は」
「まあさうだ」
今迄夫に見入つてゐたお延の細い眼が猶細くなると共に、微かな笑ひが脣を洩れた。
「まあ難有い事」
津田は濟ましてゐられなくなつた。彼は用意を缺いた文句を擇り除ける餘裕を失つた。
「御前だつて、あんな奴に會ふのは厭なんぢやないか」
「いゝえ、些とも」
「そりや嘘だ」
「何うして嘘なの」
「だつて小林は何か御前に云つたさうぢやないか」
「えゝ」
「だからさ。それで御前もあいつに會ふのは厭だらうと云ふんだ」
「ぢや貴方はあたしが小林さんから何んな事を聽いたか知つていらつしるの」

「そりや知らないよ。だけど何うせ彼奴のことだから碌な事は云やしなからう。一體何んな事を云つたんだ」

お延は口へ出かゝつた言葉を殺してしまつた。さうして反問した。

「此所で小林さんは何と仰しやつて」

「何とも云やしないよ」

「それこそ嘘です。貴方は隱していらつしやるんです」

「御前の方が隱してゐるんぢやないかね。小林から好い加減な事を云はれて、それを眞に受けてゐるながら」

「そりや隱してゐるかも知れません。貴方が隱し立てをなさる以上、あたしだつて仕方がないわ」

津田は默つた。お延も默つた。二人とも相手の口を開くのを待つた。然しお延の辛防は津田よりも早く切れた。彼女は急に鋭い聲を出した。

「嘘よ、貴方の仰しやる事はみんな嘘よ。小林なんて人は此所へ來た事も何もないのに、貴方はあたしを胡魔化さうと思つて、わざ〳〵そんな拵へ事を仰しやるのよ」

「拵へたつて、別におれの利益になる譯でもなからうぢやないか」

「いゝえ外の人が來たのを隱すために、小林なんて人を、わざ〳〵引張り出すに極まつてるわ」

「外の人？外の人とは」

お延の眼は床の上に載せてある楓の盆栽に落ちた。

「あれは何方が持つて入らしつたんです」
津田は失敗つたと思つた。何故早く吉川夫人の來た事を自白して仕舞はなかつたかと後悔した。彼が最初それを口にしなかつたのは分別の結果であつた。話すのに譯はなかつたけれども、夫人と相談した事柄の内容が、お延に對する彼を自然臆病にしたので、氣の咎める彼は、まあ遠慮して置く方が得策だらうと思案したのである。
盆栽を振り返つた彼が吉川夫人の名を云はうとして、一寸口籠もつた時、お延は機先を制した。
「吉川の奥さんが入らしつたぢやありませんか」
津田は思はず云つた。
「何うして知つてるんだ」
「知つてますわ。其位の事」
お延の樣子に注意してゐた津田は漸く度胸を取り返した。
「あゝ來たよ。つまり御前の豫言が中たつた譯になるんだ」
「あたしは奥さんが電車に乘つて入らしつた事迄ちやんと知つてるのよ」
津田は又驚いた。ことによると自働車が大通に待つてゐたのかも知れないと思つた丈で、彼は夫人の乘物にそれ以上細かい注意を拂はなかつた。
「御前何處かで會つたのかい」
「いゝえ」

「ぢや何うして知つてるんだ」
お延は答へる代りに訊き返した。
「奥さんは何しに入らしつたんです」
津田は何氣なく答へた。
「そりや今話さうと思つてた所だ。――然し誤解しちや困るよ。小林はたしかに來たんだからね。最初に小林が來て、其後へ奥さんが來たんだ。だから丁度入れ違ひになつた譯だ」

百四十七

お延は夫より自分の方が急き込んでゐる事に氣が附いた。此調子で乘し掛かつて行つた所で、夫はもう壓し潰されないといふ見切りを附けた時、彼女は自分の破綻を出す前に身を翻へした。
「さう、そんならそれでも可いわ。小林さんが來たつて來なくつたつて、あたしの知つた事ぢやないんだから。其代り吉川の奥さんの用事を話して聽かして頂戴。無論只の御見舞でない事はあたしにも判つてるけれども」
「といつた所で、大した用事で來た譯でもないんだよ。そんなに期待してゐると、又聽いてから失望するかも知れないから、一寸斷つとくがね」
「構ひません、失望しても。たゞ有の儘を伺ひさへすれば、それで念晴らしになるんだから」
「本來が見舞で、用事は附けたりなんだよ、可いかね」

「可いわ、何方でも」

津田は夫人の齎した溫泉行の助言丈をごく淡泊り話した。お延にお延流の機略がある通り、彼には彼相當の懸引があるので、都合の悪い所を巧みに省略した、誰の耳にも眞率で合理的な說明が容易く彼の口からお延の前に描き出された。彼女は表向きそれに對して一言の非難を挾む餘地がなかつた。

たゞ落ち附かないのは互の腹であつた。お延は此單純な說明を透して、其奥を覗き込まうとした。津田は飽く迄もそれを見せまいと覺悟した。極めて平和な暗鬪が度胸比べと技巧比べで演出されなければならなかつた。然し守る夫に弱點がある以上、攻める細君にそれ丈の强味が加はるのは自然の理であつた。だから二人の天賦を度外に置いて、たゞ二人の位置關係から見ると、お延は戰はない先にもう優者であつた。正味の曲直を標準にしても、競り合はない前に、彼女は旣に勝つてゐた。津田にはさういふ自覺があつた。お延にも是と略同じ意味で大體の見當が附いてゐた。

戰爭は、此内部の事實を、其儘表面へ追ひ出す事が出來るか出來ないかで、一段落附かなければならない道理であつた。津田さへ正直ならば是程容易い勝負はない譯でもあつた。然し若し一點不正直な所が津田に殘つてゐるとすると、是程又落とし悪い城は決してないといふ事にも歸着した。氣の毒なお延は、否應なしに津田を追ひ出す丈の武器をまだ造り上げてゐなかつた。向うに關門を塞るより外に何の手段も講じ得ない境遇にある現在の彼女は、結果から見て殆ど無能力者と擇ぶ所がなかつた。

何故心に勝つた丈で、彼女は美しく切り上げられないのだらうか。何故凱歌を形の上に迄運び出さなければ氣が濟まないのだらうか。今の彼女にはそんな餘裕がなかつたのである。此勝負以上に大事なものが

まだあつたのである。第二第三の目的をまだ後に控へてゐた彼女は、此所を突き破らなければ、其後を何うする譯にも行かなかつたのである。

其のみか、實をいふと、勝負は彼女に取つて、一義の位をもつてゐなかつた。本當に彼女の目指す所は、寧ろ、眞實相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑ひを晴らすのが主眼であつた。さうして其疑ひを晴らすのは、津田の愛を對象に置く彼女の生存上、絶對に必要であつた。それ自身が既に大きな目的であつた。殆ど方便とも手段とも云はれない程重い意味を彼女の眼先へ突き附けてゐた。

彼女は前後の關係から、思慮分別の許す限り、全身を擧げて其所へ拘泥らなければならなかつた。それが彼女の自然であつた。然し不幸な事に、自然全體は彼女よりも大きかつた。彼女の遙か上にも續いてゐた。公平な光を放つて、可憐な彼女を殺さうとしてさへ憚らなかつた。

彼女が一口拘泥るたびに、津田は一足彼女から退いた。二口拘泥れば、二足退いた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだん／＼増して行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行爲を、遠慮なく蹂躙した。一歩ごとに彼女の目的を破壞して悔いなかつた。彼女は暗に其所へ氣が附いた。けれども其意味を悟る事は出來なかつた。彼女はたゞそんな筈はないとばかり思ひ詰めた。さうして遂にまた心の平靜を失つた。

「あたしが是程貴方の事ばかり考へてゐるのに、貴方はちつとも察して下さらない」

津田は遣り切れないといふ顔をした。

「だからおれは何も御前を疑つてやしないよ」

「當り前ですわ。此上貴方に疑られる位なら、死んだ方が餘つ程増しですもの」

「死ぬなんて大袈裟な言葉は使はないでも可いやね。第一何もないぢやないか、何所にも。もしあるなら云つて御覽な。さうすればおれの方でも辯解もしようし、說明もしようけれども、初手から根のない苦情ぢや手の附けやうがないぢやないか」

「根は貴方の御腹の中にある筈ですわ」

「困るなそれ丈ぢや。――御前小林から何かしやくられたね。屹度さうに違ひない。小林が何を云つたか其所で話して御覽よ。遠慮は要らないから」

百四十八

津田の言葉つきなり樣子なりからして、お延は彼の心を明瞭に推察する事が出來た。――夫は彼の留守に小林の來た事を苦にしてゐる。其小林が自分に何を話したかを猶氣に病んでゐる。さうして其話の內容は、まだ判然摑んでゐない。だから鎌を掛けて自分を釣り出さうとする。

其所に明らかな祕密があつた。材料として彼女の胸に蓄へられて來た是迄の一切は、疑ひもなく矛盾もなく、悉く同じ方角に向つて注ぎ込んでゐた。祕密は確實であつた。青天白日のやうに明らかであつた。同時に青天白日と同じ事で、何處にも其影を宿さなかつた。彼女はそれを見詰める丈であつた。手を出す術を知らなかつた。

惱亂のうちにまだ一分の商量を餘した利巧な彼女は、夫の掛けた鎌を外さずに、すぐ向うへ掛け返した。

「ぢや本當を云ひませう。實は小林さんから詳しい話をみんな聽いてしまつたんです。だから隱したつてもう駄目よ。貴方も隨分非道い方ね」

彼女の云ひ草は殆ど出鱈目に近かつた。けれどもそれを口にする氣持からいふと、全くの眞劍沙汰と何の異なる所はなかつた。彼女は熱を籠めた語氣で、津田を「非道い方」と呼ばなければならなかつた。反響はすぐ夫の上に來た。津田は此出鱈目の前に退避ぐ氣色を見せた。お秀の所で遣り損なつた苦い經驗にも懲りず、又同じ冒險を試みたお延の度胸は酬いられさうになつた。彼女は一躍して進んだ。

「何故斯うならない前に、打ち明けて下さらなかつたんです」

「斯うならない前」といふ言葉は曖昧であつた。津田は其意味を捕捉するに苦しんだ。肝心のお延には猶解らなかつた。だから訊かれても說明しなかつた。津田はたゞぼんやりと念を押した。

「眞逆溫泉へ行く事をいふんぢやあるまいね。それが不都合だと云ふんなら、已めても構はないが」

お延は意外な顏をした。

「誰がそんな無理をいふもんですか。會社の方の都合が附いて、病後の身體を囘復する事が出來れば、それ程結構な事はないぢやありませんか。それが惡いなんて無茶苦茶を云ひ募るあたしだと思つていらつしやるの、馬鹿らしい。ヒステリーぢやあるまいし」

「ぢや行つても可いかい」

「よござんすとも」と云つた時、お延は急に袂から手帛を出して顏へ當てたと思ふと、しく〳〵泣き出した。あとの言葉は、啜り上げる聲の間から、句をなさずに、途切れ〳〵に、毀れ物のやうな形で出て來

た。

「いくらあたしが、……我儘だつて、……貴方の療養の……邪魔をするやうな、……そんな……あたしは不斷からあなたがあたしに許して下さる自由に對して感謝の念を有つてゐるんです……のにあたしがあなたの轉地療養を……妨げるなんて……」

津田は漸く安心した。けれどもお延にはまだ先があつた。發作が靜まると共に、其先は比較的すら〳〵出た。

「あたしはそんな小さな事を考へてゐるんぢやないんです。いくらあたしが女だつて馬鹿だつて、あたしには又あたし丈の體面といふものがあります。だから女なら女なり、馬鹿なら馬鹿なりに、其體面を維持して行きたいと思ふんです。もしそれを毀損されると……」

お延は是丈云ひ掛けて又泣き出した。あとは又切れ〳〵になつた。

「萬一……もしそんな事があると……岡本の叔父に對しても……叔母に對しても……面目なくて、今はす顏がなくなるんです。……それでなくつても、あたしはもう秀子さんなんぞから馬鹿にされ切つてゐるんです。……それを貴方は傍で見てゐながら、……澄まして……澄まして……知らん顏をしていらつしやるんです」

津田は急に口を開いた。

「お秀が御前を馬鹿にしたつて？何時？今日御前が行つた時にかい」

津田は我知らず飛んでもない事を云つてしまつた。お延が話さない限り、彼は其會見を知る筈がなかつ

たのである。お延の眼は果して開いた。

「それ御覧なさい。あたしが今日秀子さんの所へ行つた事が、貴方にはもうちやんと知れてゐるぢやありませんか」

「お秀が電話を掛けたよ」といふ返事がすぐ津田の咽喉から外へ滑り出さなかつた。彼は云はうか止さうかと思つて迷つた。けれども時に一寸の猶豫もなかつた。もぢ〳〵してゐればゐる程形勢は危くなる丈であつた。彼は殆ど行き詰まつた。然し間髪を容れずといふ際どい間際に、旨い口實が天から降つて來た。

「車夫が歸つて來てさう云つたもの。大方お時が車夫に話したんだらう」

幸ひお延がお秀の後を追懸けて出た事は、下女にも分つてゐた。偶發の言葉が偶中の功を奏した時、津田は再度の胸を撫で下ろした。

百四十九

遮二無二津田を突き破らうとしたお延は立ち留まつた。夫がそれ程自分を胡魔化してゐたのではないと考へる拍子に氣が抜けたので、一息に進むつもりの彼女は進めなくなつた。津田は其所を覘つた。

「お秀なんぞが何を云つたつて構はないぢやないか。お秀はお秀、御前は御前なんだから」

お延は答へた。

「そんなら小林なんぞがあたしに何を云つたつて構はないぢやありませんか。貴方は貴方、小林は小林なんだから」

「そりや構はないよ。御前さへ確りしてゐて呉れゝば。たゞ疑りだの誤解だのを起して、それを無暗に振り廻されると迷惑するから、此方だつて默つてゐられなくなる丈さ」

「あたしだつて同じ事ですわ。いくらお秀さんが馬鹿にしようと、いくら藤井の叔母さんが疎外しようと、貴方さへ確りしてゐて下されば、苦になる筈はないんです。それを肝心の貴方が……」

お延は行き詰まつた。彼女には明瞭な事實がなかつた。從つて明瞭な言葉が口へ出て來なかつた。そこを津田が又一掬ひ掬つた。

「大方御前の體面に關るやうな不始末でもすると思つてるんだらう。それよりか、もう少しおれに憑り掛かつて安心してゐたら可いぢやないか」

お延は急に大きな聲を揚げた。

「あたしは憑り掛かりたいんです。安心したいんです。何の位憑り掛かりたがつてゐるか、貴方には想像が附かない位、憑り掛かりたいんです」

「想像が附かないかい？」

「えゝ、丸で想像が附かなんいです。もし附けば、貴方も變つて來なくつちやならないんです。附かないから、そんなに澄ましていらつしやられるんです」

「澄ましてやしないよ」

「氣の毒だとも可哀相だとも思つて下さらないんです」

「氣の毒だとも、可哀相だとも……」

これ丈繰り返した津田は一旦塞へた。其後で繼ぎ足した文句は寧ろ蹣跚として搖めいてゐた。

「思つて下さらないたつて。――いくら思はうと思つても。――思ふ丈の因縁があれば、いくらでも思ふさ。然しなけりや仕方がないぢやないか」

お延の聲は緊張のために顫へた。

「あなた。あなた」

津田は默つてゐた。

「何うぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させて下さい。貴方以外にあたしは憑り掛り所のない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまはなければならない心細い女なんですから。だから何うぞ安心しろと云つて下さい。たつた一口で可いから安心しろと云つて下さい」

津田は答へた。

「大丈夫だよ。安心おしよ」

「本當?」

「本當に安心おしよ」

お延は急に破裂するやうな勢で飛びかゝつた。

「ぢや話して頂戴。何うぞ話して頂戴。隱さずにみんな此所で話して頂戴。さうして一思ひに安心させて頂戴」

津田は面喰らつた。彼の心は波のやうに前後へ搖き始めた。彼はいつその事思ひ切つて、何も彼もお延の前に曝け出してしまはうかと思つた。と共に、自分はたゞ疑はれてゐる丈で、實證を握られてゐるのではないとも推斷した。もしお延が事實を知つてゐるなら、此所迄押して來て、それを彼の顏に叩き附けない筈はあるまいとも考へた。

彼は氣の毒になつた。同時に逃げる餘地は彼にまだ殘つてゐた。道義心と利害心が高低を描いて彼の心を上下へ動かした。すると其片方に溫泉行の重みが急に加はつた。約束を斷行する事は吉川夫人に對する彼の義務であつた。必然から起る彼の要求でもあつた。少なくともそれを濟ます迄打ち明けずにゐるのが得策だといふ氣が勝ちを制した。

「そんなくだ〳〵しい事を云つてたつて、御互に顏を赧くする丈で、際限がないから、もう止さうよ。其代りおれが請け合つたら可いだらう」

「請け合ふつて」

「請け合ふのさ。御前の體面に對して、大丈夫だといふ證書を入れるのさ」

「何うして」

「何うしてつて、外に證文の入れやうもないから、たゞ口で誓ふのさ」

お延は默つてゐた。

「つまり御前がおれを信用すると云ひさへすれば、それで可いんだ。萬一の場合が出て來た時は引き受けて下さいつて云へば可いんだ。さうすればおれの方ぢや、よろしい請け合つたと、かう答へるのさ。ど

うだい此邊の所で妥協は出來ないかね」

百五十

妥協といふ漢語が此場合如何に不釣合に聞こえようとも、其時の津田の心事を說明するには極めて穩當であつた。實際此言葉によつて代表される最も適切な意味が彼の腹にあつた事は慥かであつた。明敏なお延の眼にそれが映つた時、彼女の昂奮は漸く喰ひ留められた。感情の潮がまだ上りはしまいかといふ懸念で、暗に頭を惱ませてゐた津田は助かつた。今の彼には喰ひ留めた潮の勢を、反對な方向へ逆用する手段を講ずる丈の餘裕が出來た。彼はお延を慰めにかゝつた。彼女の氣に入りさうな文句を多量に使用した。沈着な態度を外部側に有つてゐる彼は、又臨機に自分を相手なりに順應させて行く巧者も心得てゐた。彼の努力は果して空しくなかつた。お延は久し振に結婚以前の津田を見た。婚約當時の記憶が彼女の胸に蘇つた。

「夫は變つてるんぢやなかつた。やつぱり昔の人だつたんだ」

斯う思つたお延の滿足は、津田を窮地から救ふに充分であつた。暴風雨にならうとして、なり損ねた波瀾は漸く收まつた。けれども事前の夫婦は、もう事後の夫婦ではなかつた。彼等は何時の間にか吾知らず相互の關係を變へてゐた。

波瀾の收まると共に、津田は悟つた。

「畢竟女は慰撫し易いものである」

彼は一場の風波が彼に齎した此自信を抱いてひそかに喜んだ。今迄の彼は、お延に對するごとに、苦手の感を何處かに起さずにゐられた事がなかつた。女だと見下ろしながら、底氣味の惡い思ひをしなければならない場合が、日毎に現前した。それは彼女の直覺であるか、又は直覺の活作用とも見做される彼女の機略であるか、或はそれ以外の或物であるか、慥かな解剖は彼にもまだ出來てゐなかつたが、何しろ事實は事實に違ひなかつた。しかも彼自身自分の胸に疊み込んで置くぎりで、未だ曾て他に洩らした事のない事實に違ひなかつた。だから事實と云ひ條、其實は一個の秘密でもあつた。それならば何故彼がこの明白な事實をわざと秘密に附してゐたのだらう。簡單に云へば、彼はなるべく己を尊く考へたかつたからである。愛の戰爭といふ眼で眺めた彼等の夫婦生活に於て、何時でも敗者の位地に立つた彼には、彼でまた相當の慢心があつた。所がお延のために征服される彼は已むを得ず征服されるので、心から歸服するのではなかつた。堂々と愛の擒になるのではなくつて、常に騙し打ちに會つてゐるのであつた。お延が夫の慢心を挫く所に氣が附かないで、たゞ彼を征服する點に於てのみ愛の滿足を感ずる通りに、負けるのが嫌ひな津田も、殘念だとは思ひながら、力及ばず組み敷かれるたびに降參するのであつた。此特殊な關係を、一夜の苦說が逆にして見せた時、彼のお延に對する考へは變るのが至當であつた。彼は今迄是程猛烈に、又眞正面に、上手を引く樣に見えて、實は僞りのない下手に出たお延といふ女を見た例がなかつた。弱點を抱いて逃げまはりながら彼は始めてお延に勝つ事が出來た。結果は明瞭であつた。彼は漸く彼女を輕蔑する事が出來た。同時に以前よりは餘計に、彼女に同情を寄せる事が出來た。

お延にはまたお延で波瀾後の變化が起りつゝあつた。今迄曾て斯ういふ態度で夫に向つた事のない彼女

は、一氣に津田の弱點を衝く方に心を奪はれ過ぎたため、つひぞ露はした事のない自分の弱點を、却て夫に示してしまつたのが、何より先に殘念の種になつた。夫に愛されたいばかりの彼女には平常から腕に依賴する信念があつた。自分は自分の見識を立て通して見せるといふ覺悟があつた。勿論其見識は複雜とは云へなかつた。夫の愛が自分の存在上、如何に必要であらうとも、頭を下げて憐みを乞ふやうな見苦しい眞似は出來ないといふ意地に過ぎなかつた。もし夫が自分の思ふ通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるといふ堅い決心であつた。のべつに此決心を實行して來た彼女は、詰りのべつに緊張してゐると同じ事であつた。さうして其緊張の極度は何處かで破裂するに極まつてゐた。破裂すれば、自分で自分の見識を打ち壞すのと同じ結果に陷るのは明瞭であつた。不幸な彼女は此矛盾に氣が附かずに邁進した。それでとう／＼破裂した。破裂した後で彼女は漸く悔いた。仕合せな事に自然は思つたより殘酷でなかつた。彼女は自分の弱點を曝け出すと共に一種の報酬を得た。今迄何んなに勝ち誇つても物足りた例のなかつた夫の樣子が、少し變つた。彼は自分の滿足する見當に向いて、一歩近づいて來た。彼は明らかに妥協といふ字を使つた。其裏に彼女の根限り掘り返さうと力めた祕密の潛在する事を暗に自白した。自白？彼女はよく自分に念を押して見た。さうしてそれが默認に近い自白に違ひないといふ事を確めた時、彼女は口惜しがると同時に喜んだ。彼女はそれ以上夫を押さなかつた。津田が彼女に對して氣の毒といふ念を起したやうに、彼女もまた津田に對して氣の毒といふ感じを持ち得たからである。

百五十一

けれども自然は思つたより頑愚であつた。二人は是丈で別かれる事が出來なかつた。妙な機から一旦收まりかけた風波がもう少しで盛り返されさうになつた。

それは昂奮したお延の心持が稍平靜に復した時の事であつた。今切り抜けて來た波瀾の結果は既に彼女の氣分に働き掛けてゐた。醉を感ずる人が、其醉を利用するやうな態度で彼女は津田に向つた。

「ぢや何時頃其溫泉へ入らつしやるの」

「此所を出たらすぐ行かうよ。身體のためにも其方が都合が好ささうだから」

「さうね。成るべく早く入らしつた方が可いわ。行くと事が極まつた以上」

津田は是でまづ可しと安心した。所へお延は不意に出た。

「あたしも一所に行つて可いんでせう」

氣の緩んだ津田は急にひやりとした。彼は答へる前にまづ考へなければならなかつた。連れて行く事は最初から問題にしてゐなかつた。と云つて、斷る事は猶六づかしかつた。斷り方一つで、相手は何う變化するかも分らなかつた。彼が何と返事をしたものだらうと思つて分別するうちに大切の機は過ぎた。お延は催促した。

「ね、行つても可いんでせう」

「さうだね」

「不可ないの」

「不可ない譯もないがね……」

津田は連れて行きたくない心の内を、次第々々に外へ押し出されさうになつた。もし猜疑の眸が一度お延の眼の中に動いたら事はそれ限りであると見て取つた彼は、實を云ふと、お延と同じ心理狀態の支配を受けてゐた。先刻の波瀾から來た影響は彼にもう憑り移つてゐた。彼は彼でそれを利用するより外に仕方がなかつた。彼はすぐ「慰撫」の二字を思ひ出した。「慰撫に限る。女は慰撫さへすれば何うにかなる。」彼は今得たばかりの此新しい斷案を提げて、お延に向つた。

「行つても可いんだよ。可い所ぢやない、實は行つて貰ひたいんだ。第一一人ぢや不自由だからね。世話をして貰ふ丈でも、貴方の都合が可いに極まつてるからね」

「あゝ嬉しい、ぢや行くわ」

「所がだね。……」

お延は厭な顏をした。

「所が何うしたの」

「所がさ。宅は何うする氣かね」

「宅は時がゐるから好いわ」

「好いわつて、そんな子供見たいな呑氣な事を云つちや困るよ」

「何故。何處が呑氣なの。もし時丈で不用心なら誰か頼んで來るわ」

お延は續けざまに留守居として適當な人の名を二三擧げた。津田は拒める丈それを拒んだ。

「若い男は駄目だよ。時と二人ぎり置く譯にや行かないからね」

お延は笑ひ出した。
「まさか。――間違ひなんか起りつこないわ、僅かの間ですもの」
「左右は行かないよ。決して左右は行かないよ」
津田は斷乎たる態度を示すと共に、考へる風もして見せた。
「誰か適當な人はないもんかね。手頃な御婆さんか何かあると丁度持つて來いだがな」
藤井にも岡本にも其他の方面にも、そんな都合の好い手の空いた人は一人もなかつた。
「まあよく考へて見るさ」
此邊で話しを切り上げようとした津田は的が外れた。お延は掴んだ袖を中々放さなかつた。
「考へてない時には、何うするの。もし御婆さんがゐなければ、あたしは何うしても行つちや惡いの」
「惡いとは云やしないよ」
「だつて御婆さんなんかゐる譯がないぢやありませんか。考へないだつて其位な事は解つてますわ。それより行つて惡いなら惡いと判然云つて頂戴よ」
せつぱ詰まつた津田は此時不思議に又好い云ひ譯を思ひ附いた。
「そりやいざとなれば留守番なんか何うでも構はないさ。然し時一人を置いて行くにした所で、まだ困る事があるんだ。おれは吉川の奧さんから旅費を貰ふんだからね。他の金を貰つて夫婦連れで遊んで歩くやうに思はれても、あんまり好くないぢやないか」
「そんなら吉川の奧さんから頂かないでも構はないわ。あの小切手があるから」

「さうすると今月分の拂ひの方が差支へるよ」

「それは秀子さんの置いて行つたのがあるのよ」

津田は又行き詰つた。さうして又危い血路を開いた。

「少し小林に貸して遣らなくちやならないんだぜ」

「あんな人に」

「御前はあんな人にと云ふがね、あれでも今度遠い朝鮮へ行くんだからね。可哀相だよ。それにもう約束してしまつたんだから、何うする譯にも行かないんだ」

お延は固より滿足な顏をする筈がなかつた。然し津田はこれで何うか斯うか其場丈を切り拔ける事が出來た。

百五十二

後は話しが存外樂に進行したので、程なく第二の妥協が成立した。小林に對する友誼を滿足させるため、かつは一旦約束した言責を果たすため、津田はお延の貰つて來た小切手の中から、其幾分を割いて朝鮮行の餞として小林に贈る事にした。名義は固より貸すのであつたが、相手に返す腹のない以上、それを豫算に組み込んで今後の的にする譯には行かないので、結果はつまり遣る事になつたのである。勿論其所へ行き着く迄にはお延にも多少の難色があつた。小林のやうな横着な男に金錢を惠むのはおろか、ちやんとした證書を入れさせて、一時の用を足してやる好意すら彼女の胸の何の隅からも出る筈はなかつた。のみな

らず彼女は動ともすると、强ひてそれを斷行しようとする夫の裏側を覗き込むので、津田は其度に少なからず冷々した。

「あんな人に何だつてそんな親切を盡くして御遣りになるんだか、あたしには丸で解らないわ」

斯ういふ意味の言葉が二度も三度も彼女によつて繰り返された。津田が人情一點張りでそれを相手にする氣色を見せないと、彼女はもう一歩先の事迄云つた。

「だから譯を仰しやいよ。斯ういふ譯があるから、斯うしなければ義理が惡いんだといふ事情さへ明瞭になれば、あの小切手をみんな上げても構はないんだから」

津田には此所が何より大事な關所なので、何うしてもお延を通させる譯に行かなかつた。彼は小林を辯護する代りに、二人の過去にある舊い交際と、其交際から出る懷かしい記憶とを擧げた。懷かしいといふ字を使つて非難された時には、仕方なしに、昔の小林と今の小林の相違に迄、說明の手を擴げた。それでも腑に落ちないお延の顏を見た時には、急に談話の調子を高尙にして、人道迄云々した。然し彼の口にする人道は遂に一個の功利說に歸着するので、彼は吾知らず自分の拵へた陷穽に向つて進んでゐながら氣が附かず、危くお延から足を取られて、突き落とされさうになる場合も出て來た。それを代表的な言葉でごく簡單に例で現はすと下のやうになつた。

「兎に角困つてるんだからね、內地に居たたまれずに、朝鮮迄落ちて行かうてんだから、少しは同情して遣つても可からうぢやないか。それに御前はあいつの人格を無暗に攻擊するが、其所に少し無理があるよ。成程あいつは仕樣のない奴さ。仕樣のない奴には違ひないけれども、彼奴が斯うなつた因をよく考へ

て見ると、何でもないんだ。たゞ不平だからだ。おや何故不平だといふと、金が取れないからだ。所が彼奴は愚図でもなし、馬鹿でもなし、相當な頭を持つてるんだからね。不幸にして正則の教育を受けなかつたために、あゝなつたと思ふと、そりや氣の毒になるよ。つまり彼奴が悪いんぢやない境遇が悪いんだと考へさへすれば夫迄さ。要するに不幸な人なんだ」

是丈なら口先丈としてもまづ立派なのであるが、彼は遂に其處で止まる事が出來ないのである。

「それにまだ斯ういふ事も考へなければならないよ。あゝ自暴自棄になつてる人間に逆らふと何をするか解らないんだ。誰とでも喧嘩がしたい、誰と喧嘩をしても自分の得になる丈だつて、現に此所へ來て公言して威張つてるんだからね、實際始末に了へないよ。だから今もしおれが彼奴の要求を蹴ね附けるとすると、彼奴は怒るよ。たゞ怒る丈なら可いが、乾度何かするよ。復讐を遣るに極まつてるよ。所が此方には世間體があり、向うにやそんなものは丸で無いんだから、いざとなると敵ひつこないんだ。解つたかね」

此所迄來ると最初の人道主義はもう大分崩れてしまふ。然しそれにしても、此所で切り上げさへすれば、お延は默つて點頭くより外に仕方がないのである。所が彼はまだ先へ出るのである。

「それも彼奴が主義としてたゞ上流社會を攻撃したり、又は一般の金持を悪口する丈なら可いがね。彼奴のは、さうぢやないんだ、もつと實際的なんだ。まづ最初に自分の手の届く所から段々に食ひ込んで行かうといふんだ。だから一番災難なのは此おれだよ。何う考へても此所でおれ相當の親切を見せて、彼奴の感情を美しくして、さうして一日も早く朝鮮へ立つて貰ふのが上策なんだ。でないと何時何んな目に逢ふか解つたもんぢやない」

斯うなるとお延は何うしても又云ひたくなるのである。

「いくら小林が亂暴だつて、貴方の方にも何かなくつちや、そんなに怖がる因縁がないぢやありませんか」

二人が斯んな押し問答をして、小切手の片を附ける丈でも、ものゝ十分はかゝつた。然し小林の方が極まると共に、殘りの處置はすぐ附いた。それを自分の小遣として、任意に自分の嗜慾を滿足するといふ彼女の條件は直ちに成立した。其代り彼女は津田と一所に温泉へ行かない事になつた。さうして温泉行の費用は吉川夫人の好意を受けるといふ案に同意させられた。

うそ寒の宵に、若い夫婦間に起つた波瀾の消長はこれで漸く盡きた。二人は一先別かれた。

百五十三

津田の辛防しなければならない手術後の經過は良好であつた。といふよりも寧ろ順當に行つた。五日目が來た時、醫者は豫定通り彼のために全部のガーゼを取り替へて呉れた後で、それを保證した。

「至極好い具合です。出血も口元丈です。内部の方は何ともありません」

六日目にも同じ治療法が繰り返された。けれども局部は前日よりは健全になつてゐた。

「出血は何うです。まだ止まりませんか」

「いや、もう殆ど止まりました」

出血の意味を解し得ない津田は、此返事の意味をも解し得なかつた。好い加減に「もう癒りました」と

いふ解釋をそれに附けて大變喜んだ。然し本式の事實は彼の考へる通りにも行かなかつた。彼と醫者の間に起つた一場の問答が其邊の消息を明らかにした。

「是が癒り損なつたら何うなるんでせう」

「又切るんです。さうして前よりも輕く穴が殘るんです」

「心細いですな」

「なに十中八九は癒るに極まつてます」

「おや本當の意味で全癒といふと、まだ中々時間が掛かるんですね」

「早くて三週間遲くて四週間です」

「此所を出るのは？」

「出るのは明後日位で差支へありません」

津田は難有がつた。さうして出たらすぐ溫泉に行かうと覺悟した。なまじい醫者に相談して轉地を禁じられでもすると、却て神經を惱ます丈が損だと打算した彼はわざと默つてゐた。それは殆ど平生の彼に似合はない粗忽な遣り口であつた。彼は甘んじて此不謹愼を斷行しようと決心しながら、肚の中で既に自分の矛盾を承知してゐるので、何だか不安であつた。彼は訊かないでも可い質問を醫者に掛けて見たりした。

「括約筋を切り殘したと仰しやるけれども、それで何うして下からガーゼが詰められるんですか」

「括約筋はとば口にやありません。五分程引つ込んでます。それを下から斜に三分程割り上げた所があるのです」

津田は其晩から粥を食ひ出した。久しく麵麭丈で我慢してゐた彼の口には水つぽい米の味も一種の新しみであつた。趣味として夜寒の粥を感ずる能力を持たない彼は、秋の宵の冷たさを對照に置く薄粥の暖かさを普通の俳人以上に珍重して啜る事が出來た。

療治の必要上、長い事止められてゐた便の疏通を計るために、彼はまた輕い下劑を飲まなければならなかつた。左程苦にもならなかつた腹の中が輕くなるに從つて、彼の氣分も何時か輕くなつた。身體の樂になつた彼は、寐轉んでたゞ退院の日を待つ丈であつた。

其日も一晩明けるとすぐに來た。彼は車を持つて迎ひに來たお延の顏を見るや否や云つた。

「やつと歸れる事になつた譯かな。まあ難有い」

「あんまり難有くもないでせう」

「いや難有いよ」

「宅の方が病院よりはまだ增しだと仰しやるんでせう」

「まあその邊かも知れないがね」

津田は何時もの調子で斯う云つた後で、急に思ひ出したやうに附け足した。

「今度は御前の拵へて吳れた褞袍で助かつたよ。綿が新しい所爲か大變着心地が好いね」

お延は笑ひながら夫を冷嘲した。

「何うなすつたの。なんだか急に御世辭が旨くおなりね。だけど、違つてるのよ、貴方の鑑定は」

お延は問題の褞袍を疊みながら、新しい綿ばかりを入れなかつた事實を夫に白狀した。津田は其時着物

を着換へてゐた。絞りの模様の入つた縮緬の兵兒帶をぐる〳〵腰に卷く方が、彼には寧ろ大事な所作であつた。それ程輕く褞袍の中味を見てゐた彼の愛嬌は、正直なお延の返事を待ち受けるのでも何でもなかつた。彼はたゞ「はあさうかい」と云つたぎりであつた。

「御氣に召したらどうぞ溫泉へも持つて入らしつて下さい」

「さうして時々御前の親切でも思ひ出すかな」

「然し宿屋で貸して呉れる褞袍の方がずつと好かつたり何かすると、いゝ恥つ搔きね、あたしの方は」

「そんな事はないよ」

「いえあるのよ。品質が惡いと何うしても損ね、さういふ時には。親切なんかすぐ何處かへ飛んでつちまふんだから」

無邪氣なお延の言葉は、彼女の意味する通りの單純さで津田の耳へは響かなかつた。其所には一種のアイロニーが顫動してゐた。褞袍は何かの象徴であるらしく受け取れた。多少氣味の惡くなつた津田は、お延に背中を向けた儘で、兵兒帶の先をこま結びに結んだ。

やがて二人は看護婦に送られて玄關に出ると、すぐ其所に待たしてある車に乘つた。

「さよなら」

多事な一週間の病院生活は、此一語で漸く幕になつた。

百五十四

目的の溫泉場へ立つ前の津田は、既定されたプログラムの順序として、先づ小林に會はなければならなかつた。約束の日が來た時、お延から入り用の金を受け取つた彼は笑ひながら細君を顧た。

「何だか惜しいな、彼奴に是丈取られるのは」

「ぢや止した方が可いわ」

「おれも止したいよ」

「止したいのに何故止せないの。あたしが代りに行つて斷つて來て上げませうか」

「うん、賴んでも可いね」

「何所であの人に御逢ひになるの。場所さへ仰しやれば、わたし行つて上げるわ」

お延が本氣か何うかは津田にも分らなかつた。けれども斯ういふ場合に、大丈夫だと思つてつい笑談に押すと、押した此方が却て手古摺らせられる位の事は、彼に困難な想像ではなかつた。お延はいざとなると口で云つた通りを眞面に斷行する女であつた。たとひ違約であらうとあるまいと、津田を代表して、小林を擊退する役割なら進んで引け受けないとも限らなかつた。彼は危險區域へ踏み込まない用心をして、わざと話しを不眞面目な方角へ流して仕舞つた。

「御前は見掛けに寄らない勇氣のある女だね」

「是でも自分ぢやあると思つてるのよ。けれどもまだ出した例がないから、實際何の位あるか自分にも分らないわ」

「いや御前に分らなくつても、おれにはちやんと分つてるから、それで澤山だよ。女の癖にさう無暗に

勇氣なんか出された日にや、亭主が困る丈だからね」

「ちつとも困りやしないわ。御亭主のために出す勇氣なら、男だつて困る筈がないぢやないの」

「そりや難有い場合もたまには出て來るだらうがね」と云つた津田には固より本氣に受け答へをする積りもなかつた。「今日迄それ程感服に値する勇氣を拜見した覺えもないやうだね」

「そりや其通りよ。だつて些とも外へ出さずにゐるんですもの。是でも内側へ入つて御覽なさい。なんぼあたしだつて貴方の考へていらつしやる程太平ぢやないんだから」

津田は答へなかつた。然しお延は已めなかつた。

「あたしがそんなに氣樂さうに見えるの、貴方には」

「あゝ見えるよ。大いに氣樂さうだよ」

此好い加減な無駄口の前に、お延は微かな溜息を洩らした後で云つた。

「詰らないわね、女なんて。あたし何だつて女に生れて來たんでせう」

「そりや己に掛け合つたつて駄目だ。京都にゐる御父さんか御母さんへ尻を持ち込むより外に、苦情の持つてきどころはないんだから」

苦笑したお延はまだ默らなかつた。

「可いから、今に見ていらつしやい」

「何を」と訊き返した津田は少し驚かされた。

「何でも可いから、今に見ていらつしやい」

「見てゐるが、一體何だよ」

「そりや實際に問題が起つて來なくつちや云へないわ」

「云へないのはつまり御前にも解らないといふ意味なんぢやないか」

「えゝさうよ」

「何だ下らない。それぢや丸で雲を攫むやうな豫言だ」

「所が其豫言が今に乾度中たるから見ていらつしやいといふのよ」

津田は鼻の先でふんと云つた。それと反對にお延の態度は段々眞劍に近づいて來た。

「本當よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始終さう思つてるの、何時か一度此御腹の中に有つてる勇氣を、外へ出さなくつちやならない日が來るに違ひないつて」

「何時か一度？だから御前のは妄想と同じ事なんだよ」

「いゝえ生涯のうちで何時か一度ぢやないのよ。近いうちなの。もう少ししたらの何時か一度なの」

「益惡くなる丈だ。近き將來に於て蠻勇なんか亭主の前で發揮された日にや敵はない」

「いゝえ、貴方のためによ。だから先刻から云つてるぢやないの、夫のために出す勇氣だつて」

眞面目なお延の顏を見てゐると、津田も次第々々に釣り込まれる丈であつた。彼の性格にはお延ほどの詩がなかつた。其代り多少氣味の惡い事實が遠くから彼を威壓してゐた。お延の詩、彼の所謂妄想は、段段活躍し始めた。今迄死んでゐるとばかり思つて、弄くり廻してゐた鳥の翅が急に動き出すやうに見えた時、彼は變な氣持がして、すぐ會話を切り上げてしまつた。

彼は帶の間から時計を出して見た。

「もう時間だ、そろ〳〵出掛けなくつちや」

斯う云つて立ち上がつた彼の後を追つて玄關に出たお延は、帽子掛けから茶の中折を取つて彼の手に渡した。

「行つて入らつしやい。小林さんによろしくつてお延が云つてたと忘れずに傳へて下さい」

津田は振り向かないで夕方の冷たい空氣の中に出た。

百五十五

小林と會見の場所は、東京で一番賑やかな大通の中程を、一寸横へ切れた所にあつた。向うから宅へ誘ひに寄つて貰ふ不快を避けるため、又此方で彼の下宿を訪ねてやる面倒を省くため、津田は時間を極めて其所で彼に落ち合ふ手順にしたのである。

其時間は彼が電車に乗つてゐるうちに過ぎてしまつた。然し着物を着換へて、お延から金を受け取つて、少しの間坐談をしてゐたために起つた此遲刻は、何等の痛痒を彼に與へるに足りなかつた。有體に云へば、彼は小林に對して克明に律義を守る細心の程度を示したくなかつた。それとは反對に、少し時間を後らせても、放縱な彼の鼻柱を挫いてやりたかつた。名前は送別會だらうが何だらうが、其實金を遣るものと貰ふものとが顏を合はせる席に極まつてゐる以上、津田はたしかに優者であつた。だから其優者の特權を出來る丈緊張させて、主客の位地をあらかじめ作つて置く方が、相手の驕慢を未前に防ぐ手段として、彼に

は得策であつた。利害を離れた單なる意趣返しとしても其方が面白かつた。

彼はごう／＼鳴る電車の中で、時計を見ながら、ことによると是でもまだ横着な小林には早過ぎるかも知れないと考へた。もし餘り早く行き着いたら、一通り夜店でも素見して、慾の皮で硬く張つた小林の豫期を、もう少し焦らしてやらうと迄思案した。

停留所で降りた時、彼の眼の中を通り過ぎた燭光の數は、夜の都の活動を目覺ましく物語るに充分な位、右往左往へちら／＼した。彼は其間に立つて、目的の横町へ曲がる前に、此等の燭光と共に十分位動いて歩かうか歩くまいかと迷つた。所が顔の先へ押し附けられた夕刊を除けて、四邊を見廻した彼は、急におやと思はざるを得なかつた。

もう大分待ち草臥れてゐるに違ひないと假定してかゝつた小林は、案外にも向う側に立つてゐた。位地は津田の降りた鋪床と車道を一つ隔てた四つ角の一端なので、二人の視線が調子よく合はない以上、夜と人とちら／＼する燭光が、相互の認識を遮る便利があつた。のみならず小林は眞面に此方を向いてゐなかつた。彼は津田のまだ見知らない青年と立談をしてゐた。青年の顔は三分の二程、小林のは三分の一程、津田の方角から見える丈なので、彼は略露見の恐れなしに、自分の足の停まつた所から、二人の模樣を注意して觀察する事が出來た。二人は決して餘所見をしなかつた。顔と顔を向き合はせた儘、何時迄も同じ姿勢を崩さない彼等の體が、あり／＼と津田の眼に映るにつれて、眞面目な用談の、互の間に取り換はされてゐる事は明瞭に解つた。

二人の後には壁があつた。生憎横側に窓が附いてゐないので、強い光は何處からも射さなかつた。所へ

南から來た自働車が、大きな音を立てて四つ角を曲がらうとした。其時二人は自働車の前側に装置してある巨大な燈光を滿身に浴びて立つた。津田は始めて青年の容貌を明らかに認める事が出來た。蒼白い血色は、帽子の下から左右に垂れてゐる、幾箇月となく刈り込まない毿々たる髮の毛と共に、彼の視覺を冒した。彼は自働車の過ぎ去ると同時に踵を回らした。さうして二人の立つてゐる鋪道を避ける樣に、わざと反對の方向へ歩き出した。

彼には何の目的もなかつた。はなやかに電燈で照らされた店を一軒ごとに見て歩く興味は、たゞ都會的で美しいといふ丈に過ぎなかつた。商賣が違ふにつれて品物が變化する以外に、何等の複雜な趣は見出だされなかつた。それにも拘らず彼は到る處に視覺の滿足を味はつた。しまひに或唐物屋の店先に佇つてあるハイカラな襟飾を見た時に、彼はとう／＼其家の中へ入つて、自分の欲しいと思ふものを手に取つて、ひねくり廻したりなどした。

もう可からうといふ時分に、彼は再び取つて返した。鋪道の上に立つてゐた二人の影は果して何處かへ行つてしまつた。彼は少し歩調を早めた。約束の家の窓からは暖かさうな光が往來へ射してゐた。煉瓦作りで窓が高いのと、模樣のある玉子色の布に遮られて、間接に夜の中へ光線が放射されるので、通り際に見上げた津田の頭に描き出されたのは、穩やかな瓦斯煖爐を具へた品の好い食堂であつた。

大きなブロックの片隅に、形容した言葉でいふと、寧ろひつそり構へてゐる其食堂は、大して廣いものではなかつた。津田が其所を知り出したのもつい近頃であつた。長い間佛蘭西とかに公使をしてゐた人の料理番が開いた店だから旨いのだと友人に教へられたのが原で、四五遍食ひに來た因緣を措くと、小林を

其所へ招き寄せる理由は他に何もなかつた。
彼は容赦なく扉を押して内へ入つた。さうして其所に案の如く少し手持無沙汰でもある樣な風をして、眞面目な顏を夕刊か何かの前に向けてゐる小林を見出だした。

百五十六

小林は眼を上げて一寸入口の方を見たが、すぐ其眼を新聞の上に落としてしまつた。津田は仕方なしに無言の儘、彼の坐つてゐる食卓の傍迄近寄つて行つて此方から聲を懸けた。
「失敬。少し遲くなつた。餘つ程待たしたかね」
小林は漸く新聞を疊んだ。
「君時計を有つてるだらう」
津田はわざと時計を出さなかつた。小林は振り返つて正面の壁の上に掛かつてゐる大きな柱時計を見た。針は指定の時間より四十分程先へ出てゐた。
「實は僕も今來たばかりの所なんだ」
二人は向ひ合つて席に就いた。周圍には二組ばかりの客がゐる丈なので、さうして其二組は雙方ともに相當の扮裝をした婦人づれなので、室内は存外靜かであつた。ことに一間程隔てて、二人の横に置かれた瓦斯煖爐の火の色が、白いものの目立つ清楚な室の空氣に、恰好な溫もりを與へた。
津田の心には、變な對照が描き出された。此間の晩小林の御蔭で無理に引つ張り込まれた怪しげな酒場

の光景があり〳〵と彼の眼に浮かんだ。其時の相手を今度は自分の方で此所へ案内したといふ事が、彼には一種の意味で得意であつた。

「何うだね、此所の宅は。一寸綺麗で心持が好いぢやないか」

小林は氣が附いたやうに四邊を見廻した。

「うん。此所には探偵はゐないやうだね」

「其代り美しい人がゐるだらう」

小林は急に大きな聲を出した。

「ありやみんな藝者なんか君」

一寸極りの惡い思ひをさせられた津田は叱るやうに云つた。

「馬鹿云ふな」

「いや何とも限らないからね。何處に何んなものがゐるか分らない世の中だから」

津田はます〳〵聲を低くした。

「だつて藝者はあんな服裝をしやしないよ」

「さうか。君がさう云ふなら確かだらう。僕のやうな田舍ものには第一其區別が分らないんだから仕方がないよ。何でも綺麗な着物さへ着てゐればすぐ藝者だと思つちまふんだからね」

「相變らず皮肉るな」

津田は少し惡い氣色を外へ出した。小林は平氣であつた。

「いや皮肉るんぢやないよ。實際僕は貧乏の結果其方の方の眼がまだ開いてゐないんだ。たゞ正直にさう思ふ丈なんだ」

「そんならそれで可いさ」

「可くなくつても仕方がない譯だがね。然し事實何うだらう君」

「何が」

「事實當世に所謂レデーなるものと藝者との間に、それ程區別があるのかね」

津田は空つ惚ける事の得意な此相手の前に、眞面目な返事を與へる子供らしさを超越して見せなければならなかつた。同時に何とかして、ゴツンと喰はして遣りたいやうな氣もした。けれども彼は遠慮したといふよりも、ゴツンと遣る丈の言葉が口へ出て來なかつた。

「笑談ぢやない」

「本當に笑談ぢやない」と云つた小林はひよいと眼を上げて津田の顏を見た。津田はふと氣が附いた。然し相手に何か考へがあるんだなと悟つた彼は、餘りに怜悧過ぎた。彼には澄まして其所を通り拔ける丈の腹がなかつた。それでゐて當らず障らず話しを傍へ流す位の技巧は心得てゐた。彼は小林に捕まらなければならなかつた。彼は云つた。

「何うだ君此所の料理は」

「此所の料理も何所の料理も大抵似たもんだね、僕のやうな味覺の發達しないものには」

「不味いかい」

「不味かない、旨いよ」

「そりや好い案配だ。亭主が自分でクッキングを遣るんだから、外よりや少しは増しかも知れない」

「亭主がいくら腕を見せたつて、僕のやうな口に合つちや敵はないよ。泣く丈だあね」

「だけど旨けりやそれで可いんだ」

「うん旨けりやそれで可い譯だ。然し其旨さが十錢均一の一品料理と同じ事だと云つて聞かせたら亭主も泣くだらうぢやないか」

津田は苦笑するより外に仕方がなかつた。小林は一人で喋舌つた。

「一體今の僕にや、佛蘭西料理だから旨いの、英吉利料理だから不味いのつて、そんな通を振り廻す餘裕なんか丸でないんだ。たゞ口へ入るから旨い丈の事なんだ」

「だつてそれぢや何故旨いんだか、理由が解らなくなるぢやないか」

「解り切つてるよ。たゞ飢じいから旨いのさ。其他に理窟も糸瓜もあるもんかね」

津田は又默らせられた。然し二人の間に續く無言が重く胸に應へるやうになつた時、彼は已むを得ず又口を開かうとして、忽ち小林のために機先を制せられた。

百五十七

「君の樣な敏感者から見たら、僕如き鈍物は、あらゆる點で輕蔑に値してゐるかも知れない。僕もそれは承知してゐる、輕蔑されても仕方がないと思つてゐる。けれども僕には僕で又相當の云ひ草があるんだ。

僕の鈍は必ずしも天賦の能力に原因してゐるとは限らない。僕に時を與へよだ、僕に金を與へよだ。しかる後、僕が何んな人間になつて君等の前に出現するかを見よだ」

此時小林の頭には酒がもう少し廻つてゐた。笑談とも眞面目とも片の附かない彼の氣焔には、わざと醉の力を藉らうとする鬱散の傾きが見えて來た。津田は相手の口にする言葉の價値を正面から首肯ふべく餘儀なくされた上に、多少彼の歩き方に附き合ふ必要を見出だした。

「そりや君のいふ通りだ。だから僕は君に同情してゐるんだ。君だつて其位の事は心得てゐて呉れるだらう。でなければ、斯う遣つて、わざ〳〵會食迄して君の朝鮮行を送る譯がないからね」

「難有う」

「いや嘘ぢやないよ。現に此間もお延に其譯をよく云つて聽かせた位だもの」

胡散臭いなといふ眼が小林の眉の下で輝いた。

「へえゝ。本當かい。あの細君の前で僕を辯護して呉れるなんて、君にもまだ昔の親切が少しは殘つてゐると見えるね。然しそりや……。細君は何と云つたね」

津田は默つて懷へ手を入れた。小林は其所作を眺めながら、わざとそれを止めさせる樣に追加した。

「はゝあ。辯護の必要があつたんだな。何うも變だと思つたら」

津田は懷へ入れた手を、元の通り外へ出した。「お延の返事は此所にある」といつて、綺麗に持つて來た金を彼に渡す積りでゐた彼は躊躇した。其代りの話頭を前へ押し戻した。

「矢張り人間は境遇次第だね」

「僕は餘裕次第だといふ積りだ」
津田は逆らはなかつた。
「さうさ餘裕次第とも云へるね」
「僕は生れてから今日迄ぎり／＼決着の生活をして來たんだ。丸で餘裕といふものを知らずに生きて來た僕が、贅澤三昧我儘三昧に育つた人と何う違ふと君は思ふ」
津田は薄笑ひをした。小林は眞面目であつた。
「考へる迄もなく此所にゐるぢやないか。君と僕さ。二人を見較べればすぐ解るだらう。餘裕と切迫で代表された生活の結果は」
津田は心の中で其幾分を點頭いた。けれども今更そんな不平を聽いたつて仕方がないと思つてゐる所へ後が來た。
「それで何うだ。僕は始終君に輕蔑される、君ばかりぢやない、君の細君からも、誰からも輕蔑される。――いや待ち給へまだいふ事があるんだ。――それは事實さ、君も承知、僕も承知の事實さ。凡て先刻云つた通りさ。だが君にも君の細君にもまだ解らない事が此所に一つあるんだ。勿論今更それを君に話したつて御互の位地が變る譯でもないんだから仕方がない樣なものゝ、是から朝鮮へ行けば、僕はもう生きて再び君に會ふ折がないかも知れないから……」
小林は此所迄來て少し昂奮したやうな氣色を見せたが、すぐ其後から「いや僕の事だから、行つて見ると朝鮮も案外なので、厭になつて又すぐ歸つて來ないとも限らないが」と正直な所を附け加へたので、津

る通りに、僕も君を輕蔑してゐるんだ」

「まあ未來の生活上君の參考にならないとも限らないから聽き給へ。實を云ふと、君が僕を輕蔑してゐる通りに、僕も君を輕蔑してゐるんだ」

「そりや解つてるよ」

「いや解らない。輕蔑の結果はあるひは解つてるかも知れないが、輕蔑の意味は君にも君の細君にもまだ通じてゐないよ。だから君の今夕の好意に對して、僕は又留別のために、それを說明して行かうてんだ。何うだい」

「よからう」

「よくないたつて、僕のやうな一文なしぢや外に何も置いて行くものがないんだから仕方がなからう」

「だから可いよ」

「默つて聽くかい。聽くなら云ふがね。僕は今君の御馳走になつて、斯うしてぱくぱく食つてる佛蘭西料理も、此間の晩君を御招待申して叱られたあの汚らしい酒場の酒も、どつちも無差別に旨い位味覺の發達しない男なんだ。そこを君は輕蔑するだらう。然るに僕は却てそこを自慢にして、輕蔑する君を逆に輕蔑してるるんだ。いゝかね、其意味が君に解つたかね。考へて見給へ、君と僕が此點に於て何方が窮屈で、何方が自由だか。何方が幸福で、何方が束縛を餘計感じてゐるか。何方が太平で何方が動搖してゐるか。僕から見ると、君の腰は始終ぐらついてるよ。度胸が坐つてないよ。厭なものを何處迄も避けたがつて、自分の好きなものを無暗に追懸けたがつてるよ。そりや何故だ。何故でもない、なまじひに自由が利くた

めさ。贅澤をいふ餘地があるからさ。僕のやうに窮地に突き落とされて、何うでも勝手にしやがれといふ氣分になれないからさ」

津田は天から相手を見縊つてゐた。けれども事實を認めない譯には行かなかつた。小林は慥かに彼より圖迂々々しく出來上がつてゐた。

百五十八

然し小林の說法にはまだ後があつた。津田の樣子を見澄ました彼は突然思ひ掛けない所へ舞ひ戻つて來た。それは會見の最初一寸二人の間に點綴されながら、前後の勢ですぐ何處かへ流されてしまつた問題に外ならなかつた。

「僕の意味はもう君に通じてゐる。然し君はまだ成程といふ心持になれないやうだ。矛盾だね。僕は其譯を知つてるよ。第一に相手が身分も地位も財產も一定の職業もない僕だといふ事が、聰明な君を煩はしてゐるんだ。もし是が吉川夫人か誰かの口から出るなら、それがもつとずつと詰らない說でも、君は襟を正して聽くに違ひないんだ。いや僕の僻みでも何でもない、爭ふべからざる事實だよ。けれども君考へなくつちや不可ないぜ。僕だから是丈の事が云へるんだといふ事を。先生だつて奧さんだつて、其所へ行くと駄目だといふ事も心得て置き玉へ。何故だ？何故でもないよ。いくら先生が貧乏したつて、僕だけの經驗は嘗めてゐないんだからね。況んや先生以上に樂をして生きて來た彼輩に於てをやだ」

彼輩とは誰の事だか津田にもよく解らなかつた。彼はたゞ腹の中で、大方吉川夫人だの岡本だのを指す

のだらうと思つたぎりであつた。實際小林は相手にそんな質問を掛けさせる餘地を與へないで、さつさと先へ行つた。

「第二にはだね。君の目下の境遇が、今僕の云つたやうな助言――だか忠告だか、又は單なる知識の供給だか、それは何でも構はないが、兎に角そんなものに君の注意を向ける必要を感じさせないのだ。頭では解る、然し胸では納得しない、是が現在の君なんだ。つまり君と僕とはそれ丈懸絶してるるんだから仕方がないと跳ね附けられゝばそれ迄だが、其所に君の注意を拂はせたいのが、實は僕の目的だ、いゝかね。人間の境遇もしくは位地の懸絶といつた所で大したものぢやないよ。本式に云へば十人が十人ながら略同じ經驗を、違つた形式で繰り返してゐるんだ。それをもつと判然云ふとね、僕は僕で、僕に最も切實な眼でそれを見るし、君は又君で、君に最も適當な眼でそれを見る、まあその位の違ひだらうぢやないか。だからさ、順境にあるものが一寸面喰らふか、迷兒つくか、蹴爪づくかすると、そらすぐ眼の球の色が變つて來るんだ。然しいくら眼の球の色が變つたつて、急に眼の位置を變へる譯には行かないだらう。つまり君に一朝事があつたとすると、君は僕の此助言を屹度思ひ出さなければならなくなるといふ丈の事さ」

「ぢやよく氣を附けて忘れないやうにして置くよ」

「うん忘れずに居玉へ、必ず思ひ當たる事が出て來るから」

「よろしい。心得たよ」

「所がいくら心得たつて駄目なんだから可笑しいや」

小林は斯う云つて急に笑ひ出した。津田には其意味が解らなかつた。小林は訊かれない先に說明した。

「其時ひよつと氣が附くとするぜ、いゝかね。さうしたら其時の君が、やつといふ掛け聲と共に、早變りが出來るかい。早變りをして此僕になれるかい」

「そいつは解らないよ」

「解らなかない、解つてるよ。なれないに極まつてるんだ。憚りながら此所迄來るには相當の修業が要るんだからね。いかに痴鈍な僕と雖も、現在の自分に對しては是で血の代を拂つてるんだ」

津田は小林の得意が癪に障つた。此奴が狗のやうな毒血を拂つて果して何物を攫んでゐる？　斯う思つた彼はわざと輕蔑の色を面に現はして訊いて見た。

「それぢや何のためにそんな話を僕にして聽かせるんだ。たとひ僕が覺えてゐたつて、いざといふ場合の役にや立たないぢやないか」

「役にや立つまいよ。然し聽かないよりも增しぢやないか」

「聽かない方が增しな位だ」

小林は嬉しさうに身體を椅子の背に靠せ掛けて又笑ひ出した。

「其所だ。さう來る所が此方の思ふ壺なんだ」

「何をいふんだ」

「何も云やしない、たゞ事實を云ふのさ。然し說明丈はして遣らう。今に君が其所へ追ひ詰められて、何うする事も出來なくなつた時に、僕の言葉を思ひ出すんだ。思ひ出すけれども、ちつとも言葉通りに實行は出來ないんだ。これならなまじひあんな事を聽いて置かない方が可かつたといふ氣になるんだ」

津田は厭な顏をした。

「馬鹿、さうすりや何處が何うするんだ」

「何うもしないさ。つまり君の輕蔑に對する僕の復讐が其時始めて實現されるといふ丈さ」

津田は言葉を改めた。

「それ程君は僕に敵意を有つてるのか」

「何うして、何うして、敵意どころか、好意精一杯といふ所だ。けれども君の僕を輕蔑してるのは何時迄行つても事實だらう。僕がその裏を指摘して、此方から見ると其君にも亦輕蔑すべき點があると注意しても、君は乙に高く留まつて平氣でゐるぢやないか。つまり口ぢや駄目だ、實戰で來いといふ事になるんだから、僕の方でも已むを得ず其所迄行つて勝負を決しようといふ丈の話だあね」

「さうか、解つた。――もうそれぎりかい、君のいふ事は」

「いや何うして。是から愈本論に入らうといふんだ」

津田は一氣に洋盃を脣へあてがつて、ぐつと麥酒を飲み干した小林の樣子を、少し呆れながら眺めた。

百五十九

小林は言葉を繼ぐ前に、洋盃を下へ置いて、先づ室内を見渡した。女伴れの客のうち、一組の相手は洗指盆の中へ入れた果物を食つた後の手を、袂から出した美しい手帛で拭いてゐた。彼の筋向うに席を取つて、先刻から時々自分達の方を偸むやうにして見る二十五六の方は、珈琲茶碗を手にしながら、男の吹か

す煙草の煙を眺めて、しきりに芝居の話をしてゐた。兩方とも彼等より先に來た丈あつて、彼等より先に席を立つ順序に、食事の方の都合も進行してゐるらしく見えた時、小林は云つた。

「やあ丁度好い。まだゐる」

津田はまたはつと思つた。小林は屹度彼等の氣を惡くする樣な事を、彼等に聽こえよがしに云ふに違ひなかつた。

「おいもう好い加減に止せよ」

「まだ何も云やしないぢやないか」

「だから注意するんだ。僕の攻撃はいくらでも我慢するが、緣もゆかりもない人の惡口などは、ちつと愼んで吳れ、斯んな所へ來て――」

「厭に小心だな。大方場末の酒場と此所と一所にされちや堪らないといふ意味なんだらう」

「まあ左右だ」

「まあ左右だなら、僕の如き無賴漢を斯んな所へ招待するのが間違ひだ」

「ぢや勝手にしろ」

「口で勝手にしろと云ひながら、內心ひや〳〵してゐるんだらう」

津田は默つてしまつた。小林は面白さうに笑つた。

「勝つたぞ、勝つたぞ。何うだ降參したらう」

「それで勝つた積りなら、勝手に勝つた積りでゐるがいゝ」

「其代り今後益貴樣を輕蔑して遣るからさう思へだらう。僕は君の輕蔑なんか屁とも思つちやゐないよ」
「思はなけりや思はないでも可いさ。五月蠅い男だな」
小林はむつとした津田の顏を覗き込むやうにして見詰めながら云つた。
「何うだ解つたか、おい。是が實戰といふものだぜ。いくら餘裕があつたつて、金持に交際があつたつて、いくら氣位を高く構へたつて、實戰に於て敗北すりや夫迄だらう。だから僕が先刻から云ふんだ、實地を踏んで鍛へ上げない人間は、木偶の坊と同じ事だつて」
「左右だ左右だ。世の中で擦れつ枯らしと醉拂ひに敵ふものは一人もないんだ」
何か云ふ筈の小林は、此時返事をする代りに又女伴れの方を一順見廻した後で、云つた。
「おや愈第三だ。あの女の立たないうちに話してしまはないと氣が濟まない。好いかね、君、先刻の續きだぜ」
津田は默つて横を向いた。小林は一向構はなかつた。
「第三にはだね。卽ち換言すると、本論に入つて云へばだね。僕は先刻彼所にゐる女達を捕まへて、ありや藝者かつて君に訊いて叱られたね。君は貴婦人に對する禮儀を心得ない野人として僕を叱つたんだらう。よろしい僕は野人だ。野人だから藝者と貴婦人との區別が解らないんだ。それで僕は君に訊いたね、一體藝者と貴婦人とは何所が何う違ふんだつて」
小林は斯う云ひながら、三度目の視線をまた女伴れの方に向けた。手帛で手を拭いてゐた人は、それを

合圖のやうに立ち上がつた。殘る一人も給仕を呼んで勘定を拂つた。

「とう〳〵立つちまつた。もう少し待つてゐると面白い所へ來るんだがな、惜しい事に」

小林は出て行く女伴れの後影を見送つた。

「おや〳〵もう一人も立つのか。ぢや仕方がない、相手は矢つ張り君丈だ」

彼は再び津田の方へ向き直つた。

「問題は其所だよ、君。僕が佛蘭西料理と英吉利料理を食ひ分ける事が出來ずに、糞と味噌を一所にして自慢すると、君は相手にしない。高が口腹の問題だといふ顏をして高を括つてゐる。然し內容は一つものだぜ、君。此味覺が發達しないのも、藝者と貴婦人を混同するのも」

津田はそれが何うしたと云はぬばかりの眼を翻して小林を見た。

「だから結論も一つ所へ歸着しなければならないといふのさ。僕は味覺の上に於て、君に輕蔑されながら、君より幸福だと主張する如く、婦人を識別する上に於ても、君に輕蔑されながら、君より自由な境遇に立つてゐると斷言して憚らないのだ。つまり、あれは藝者だ、これは貴婦人だなんて鑑識があればある程、其男の苦痛は增して來るといふんだ。何故と云つて見給へ。仕舞には、あれも厭、是も厭だらう。或は是でなくつちや不可ない、彼でなくつちや不可ないだらう。窮屈千萬ぢやないか」

「然し其窮屈千萬が好きなら仕方なからう」

「來たな、とう〳〵。食物だと相手にしないが、女の事になると、矢つ張り默つてゐられなくなると見えるね。其所だよ、其所を實際問題に就いて、是から僕が論じようといふんだ」

「もう澤山だ」
「いや澤山ぢやないらしいぜ」
二人は顔を見合はせて苦笑した。

百六十

小林は旨く津田を釣り寄せた。それと知つた津田は考へがあるので、小林にわざと釣り寄せられた。二人はとうとう際どい所へ入り込まなければならなくなつた。
「例へばだね」と彼が云ひ出した。「君はあの清子さんといふ女に熱中してゐたらう。一しきりは、何でも彼でもあの女でなけりやならないやうな事を云つてたらう。そればかりぢやない、向うでも天下に君一人より外に男はないと思つてるやうに解釋してゐたらう。所が何うだい結果は」
「結果は今の如くさ」
「大變淡泊してゐるぢやないか」
「だつて外に仕様がなからう」
「いや、あるんだらう。あつても乙に氣取つて澄ましてゐるんだらう。でなければ僕に隱して今でも何か遣つてるんだらう」
「馬鹿いふな。そんな出鱈目を無暗に口走ると飛んだ間違ひになる。少し氣を附けて呉れ」
「實は」と云ひ掛けた小林は、其後を知つてるかと云はぬばかりの様子をした。津田はすぐ訊きたくな

つた。

「實は何うしたんだ」

「實は此間君の細君にすつかり話しちまつたんだ」

津田の表情が忽ち變つた。

「何を？」

小林は相手の調子と顏附を嚙んで味はひでもするやうに、少時間を置いて默つてゐた。然し返事を表へ出した時に、もう態度を一變してゐた。

「噓だよ。實は噓だよ。さう心配する事はないよ」

「心配はしない。今になつて其位の事を云附けられたつて」

「心配しない？さうか、ぢや此方も本當だ。實は本當だよ。みんな話しちまつたんだよ」

「馬鹿つ」

津田の聲は案外大きかつた。行儀よく椅子に腰を掛けてゐた給仕の女が、一寸首を上げて眼を此方へ向けたので、小林はすぐそれを材料にした。

「貴婦人が驚くから少し靜かにして呉れ。君の樣な無頼漢と一所に酒を飲むと、どうも外聞が惡くて不可ない」

彼は給仕の女の方を見て微笑して見せた。女も微笑した。津田一人怒る譯に行かなかつた。小林は又すぐ其機に附け込んだ。

「一體あの顚末は何うしたのかね。僕は詳しい事を聽かなかつたし、君も話さなかつた、のぢやない、僕が忘れちまつたのか。そりや何うでも構はないが、ありや向うで逃げたのかね、或は君の方で逃げたのかね」

「それこそ何うでも構はないぢやないか」

「うん僕としては構はないのが當然だ。又實際構つちやゐない。が、君としてはさうは行くまい。君は大構ひだらう」

「そりや當り前さ」

「だから先刻から僕が云ふんだ。君には餘裕があり過ぎる。其餘裕が君をして餘りに贅澤ならしめ過ぎる。其結果は何うかといふと、好きなものを手に入れるや否や、すぐ其次のものが欲しくなる。好きなものに逃げられた時は、地團太を踏んで口惜しがる」

「何時そんな樣を僕がした」

「したともさ。それから現にしつゝあるともさ。それが君の餘裕に祟られてゐる所以だね。僕の最も痛快に感ずる所だね。貧賤が富貴に向つて復讐をやつてる因果應報の理だね」

「さう頭から自分の拵へた型で、他を評價する氣ならそれ迄だ。僕には辯解の必要がない丈だから」

「ちつとも自分で型なんか拵へてゐやしないよ僕は。是でも實際の君を指摘してゐる積りなんだから。分らなけりや、事實で敎へて遣らうか」

敎へろとも敎へるなとも云はなかつた津田は、つひに敎へられなければならなかつた。

「君は自分の好みでお延さんを貰つたらう。だけれども今の君は決してお延さんに滿足してゐるんぢやなからう」

「だつて世の中に完全なもののない以上、それも已むを得ないぢやないか」

「といふ理由を附けて、もつと上等なのを探し廻る氣だらう」

「人聞きの惡い事を云ふな。失敬な。君は實際自分でいふ通りの無頼漢だね。觀察の下卑て皮肉な所から云つても、言動の無遠慮で、粗野な所から云つても」

「さうしてそれが君の輕蔑に値する所以なんだ」

「勿論さ」

「さうね。さう來るから畢竟口先ぢや駄目なんだ。矢つ張り實戰でなくつちや君は悟れないよ。僕が豫言するから見てゐろ。今に戰ひが始まるから。其時漸く僕の敵でないといふ意味が分るから」

「構はない。擦れつ枯らしに負けるのは僕の名譽だから」

「强情だな。僕と戰ふんぢやないぜ」

「ぢや誰と戰ふんだ」

「君は今既に腹の中で戰ひつゝあるんだ。それがもう少しすると實際の行爲になつて外へ出る丈なんだ。餘裕が君を煽動して無益の負戰をさせるんだ」

津田はいきなり懷中から紙入を取り出して、お延と相談の上、餞別の用意に持つて來た金を小林の前へ突き附けた。

「今渡して置くから受取つておけ。君と話してゐると、段々此約束を履行するのが厭になる丈だから」

小林は新しい十圓紙幣の二つに折れたのを廣げて丁寧に、枚數を勘定した。

「三枚あるね」

百六十一

小林は受け取つたものを、赤裸の儘無雜作に背廣の隱袋の中へ投げ込んだ。彼の所作が平淡であつた如く、彼の禮の云ひ方も橫着であつた。

「サンクス。僕は借りる氣だが、君は呉れる積りだらうね。如何となれば、僕に返す手段のない事を、又返す意志のない事を、君は最初から輕蔑の眼をもつて、認めてゐるんだから」

津田は答へた。

「無論遣つたんだ。然し貰つて見たら、如何な君でも自分の矛盾に氣が附かずにはゐられまい」

「いや一向氣が附かない。矛盾とは一體何だ。君から金を貰ふのが矛盾なのか」

「左右でもないがね」と云つた津田は上から下を見下ろすやうな態度をとつた。「まあ考へて見給へ。其金はつい今迄僕の紙入の中にあつたんだぜ。さうして轉瞬の間に君の隱袋の裏に移轉してしまつたんだぜ。そんな小說的の言葉を使ふのが厭なら、もつと判然云はうか。其金の所有權を急に僕から君に移したものは誰だ。答へて見ろ」

「君さ。君が僕に呉れたのさ」

「いや僕ぢやないよ」
「何を云ふんだい禪坊主の寢言見たいな事を。ぢや誰だい」
「誰でもない、餘裕さ。君の先刻から攻撃してゐる餘裕が呉れたんだ。だから默つてそれを受け取つた君には、口で無茶苦茶に餘裕を打ちのめしながら、其實餘裕の前にもう頭を下げてゐるんだ。矛盾ぢやないか」
小林は眼をぱち／＼させた後で斯う云つた。
「成程な、さう云へばそんなものか知ら。然し何だか可笑しいよ。實際僕はちつとも其餘裕なるものの前に、頭を下げてる氣がしないんだもの」
「ぢや返して呉れ」
津田は小林の鼻の先へ手を出した。小林は女の様に柔らかさうな其掌を見た。
「いや返さない。餘裕は僕に返せと云はないんだ」
津田は笑ひながら手を引き込めた。
「それ見ろ」
「何がそれ見ろだ。餘裕は僕に返せと云はないといふ意味が君にはよく解らないと見えるね。氣の毒なる貴公子よだ」
小林は斯う云ひながら、横を向いて戸口の方を見つゝ、又一句を附け加へた。
「もう來さうなものだな」

彼の樣子をよく見守つた津田は、少し驚かされた。
「誰が來るんだ」
「誰でもない、僕よりもまだ餘裕の乏しい人が來るんだ」
小林は裸のまゝ紙幣を仕舞ひ込んだ自分の隱袋を、わざとらしく輕く叩いた。
「君から僕に是を傳へた餘裕は、再び是を君に返せとは云はないよ。僕よりもつと餘裕の足りない方へ順送りに送れと命令するんだよ。餘裕は水のやうなものさ。高い方から低い方へは流れるが、下から上へは逆行しないよ」
津田は略小林の言葉を、意解する事が出來た。然し事解する事は出來なかつた。從つて半醒半醉のやうな落ち附きのない狀態に陷つた。其所へ小林の次の挨拶がどさく〳〵と侵入して來た。
「僕は餘裕の前に頭を下げるよ、僕の矛盾を承認するよ。君の詭辯を首肯するよ。何でも構はないよ。禮を云ふよ、感謝するよ」
彼は突然ほたく〳〵と涙を落とし始めた。此急劇な變化が、少し驚いてゐる津田を一層不安にした。先達ての晩手古摺らされた酒場の光景を思ひ出さざるを得なくなつた彼は、眉をひそめると共に、相手を利用するのは今だといふ事に氣が附いた。
「僕が何で感謝なんぞ豫期するものかね、君に對して。君こそ昔を忘れてゐるんだよ。僕の方が昔の儘でしてゐる事を、君はみんな逆に解釋するから、交際が益面倒になるんぢやないか。例へばだね、君が此間僕の留守へ外套を取りに行つて、其序に何か妻に云つたといふ事も——」

津田は是丈云つて暗に相手の樣子を窺つた。然し小林が下を向いてゐるので、彼は丸で其心持の轉化作用を忖度する事が出來なかつた。

「何も好んで友達の夫婦仲を割くやうな惡戲をしなくつても可い譯ぢやないか」

「僕は君に關して何も云つた覺えはないよ」

「然し先刻……」

「先刻は冗談さ。君が冷嘲すから僕も冷嘲したんだ」

「何方が冷嘲し出したんだか知らないが、そりや何うでも可いよ。たゞ本當の所を僕に云つて呉れたつて好ささうなものだがね」

「だから云つてるよ。何も君に關して云つた覺えはないと何遍も繰り返して云つてるよ。細君を訊き糺して見れば解る事ぢやないか」

「お延は……」

「何と云つたい」

「何とも云はないから困るんだ。云はないで腹の中で思つてゐられちや、辯解も出來ず說明も出來ず、困るのは僕丈だからね」

「僕は何も云はないよ。たゞ君が是から夫らしくするかしないかが問題なんだ」

「僕は――」

津田が斯う云ひ掛けた時、近寄る足音と共に新しく入つて來た人が、彼等の食卓の傍に立つた。

百六十二

それが先刻大通の角で、小林と立談をしてゐた長髪の青年であるといふ事に氣の附いた時、津田は更に驚かされた。けれども其驚きのうちには、暗に此男を待ち受けてゐた期待も交じつてゐた。明らさまな津田の感じを云へば、斯んな人が此所へ來る筈はないといふ斷案と、もし此所へ誰か來るとすれば、此人より外にあるまいといふ豫想の矛盾であつた。

實を云ふと、自働車の燭光で照らされた時、彼の眸の裏に映つた此人の影像は津田に取つて奇異なものであつた。自分から小林、小林から此青年と、順々に眼を移して行くうちには、階級なり、思想なり、職業なり、服裝なり、種々な點に於て隨分な距離があつた。勢ひ津田は彼を遠くに眺めなければならなかつた。然し遠くに眺めれば眺める程、强く彼を記憶しなければならなかつた。

「小林はあゝいふ人と交際つてるのかな」

斯う思つた津田は、其時さういふ人と交際つてゐない自分の立場を見廻して、まあ仕合せだと考へた後なので、新來者に對する彼の態度も自ら明白であつた。彼は突然胡散臭い人間に挨拶をされたやうな顏をした。

上へ反つ繰り返つた細い鍔の、ぐにや／＼した帽子を脫つて手に持つた儘、小林の隣へ腰を卸ろした青年の眼には異樣の光があつた。彼は津田に對して現に不安を感じてゐるらしかつた。それは一種の反感と、恐怖と、人馴れない野育ちの自尊心とが錯雜して起す神經的な光に見えた。津田は益厭な氣持になつた。

小林は青年に向つて云つた。

「おいマントでも取れ」

青年は默つて再び立ち上がつた。さうして釣鐘のやうな長い合羽をすぽりと脱いで、それを椅子の背に投げ掛けた。

「是は僕の友達だよ」

小林は始めて青年を津田に紹介せた。原といふ姓と藝術家といふ名稱が漸く津田の耳に入つた。

「何うした。旨く行つたかね」

是が小林の次に掛けた質問であつた。然し此質問は充分な返事を得る暇がなかつた。小林は後からすぐ斯う云つてしまつた。

「駄目だらう。駄目に極まつてるさ、あんな奴。あんな奴に君の藝術が分つて堪るものか。いゝからまあ緩くりして何か食ひ給へ」

小林は急にナイフを倒まにして、やけに食卓を叩いた。

「おい此人の食ふものを持つて來い」

やがて原の前にあつた洋盃の中に麥酒がなみ／＼と注がれた。

此樣子を默つて眺めてゐた津田は、自分の持つて來た用事のもう濟んだ事に漸く氣が附いた。斯んな御附合ひを長くさせられては大變だと思つた彼は、機を見て好い加減に席を切り上げようとした。すると小林が突然彼の方を向いた。

「原君は好い繪を描くよ、君。一枚買つて遣り給へ。今困つてるんだから、氣の毒だ」
「さうか」
「何うだ、此次の日曜位に、君の家へ持つて行つて見せる事にしたら」
津田は驚いた。
「僕に繪なんか解らないよ」
「いや、そんな筈はない、ねえ原。何しろ持つて行つて見せて見給へ」
「えゝ御迷惑でなければ」
津田の迷惑は無論であつた。
「僕は繪だの彫刻だのの趣味の丸でない人間なんですから、何うぞ」
青年は傷つけられたやうな顔をした。小林はすぐ應援に出た。
「嘘を云ふな。君位鑑賞力の豐富な男は實際世間に少ないんだ」
津田は苦笑せざるを得なかつた。
「又下らない事を云つて、——馬鹿にするな」
「事實を云ふんだ、馬鹿にするものか。君のやうに女を鑑賞する能力の發達したものが、藝術を粗末にする譯がないんだ。ねえ原、女が好きな以上、藝術も好きに極まつてるね。いくら隱したつて駄目だよ」
津田は段々辛防し切れなくなつて來た。
「大分話しが長くなりさうだから、僕は一足先へ失敬しよう。——おい姉さん會計だ」

給仕が立ちさうにする所を、小林は大きな聲を出して止めながら、又津田の方へ向き直つた。

「了度今一枚素敵に好いのが描いてあるんだ。それを買はうといふ約束で、其所へ値の相談に行つた歸り掛けに、原君は此所へ寄つたんだから、旨い機會ぢやないか。是非買つて遣り給へ。藝術家の足元へ附け込んで、無暗に價切り倒すなんて失敬な奴へは賣らないが可いといふのが僕の意見なんだ。其代り乾度買手を周旋して遣るから、歸りに此所へ寄るがいゝと、先刻彼所の角で約束して置いたんだ。實を云ふと。だから一つ買つて遣るさ、譯やないやね」

「他に繪も何も見せないうちから、勝手にそんな約束をしたつて仕様がないぢやないか」

「繪は見せるよ。――君今日持つて歸らなかつたのか」

「もう少し待つて吳れつていふから置いて來た」

「馬鹿だな、君は。仕舞にロハで捲き上げられてしまふ丈だぜ」

津田は此問答を聽いてほつと一息吐いた。

百六十三

二人は津田を差し置いて、しきりに繪畫の話しをした。時々耳にする三角派とか未來派とかいふ奇怪な名稱の外に、彼は今迄曾て聞いた事のないやうな片假名をいくつとなく聽かされた。その何處にも興味を見出だし得なかつた彼は、會談の圈外へ放逐される迄もなく、自分から埒を脫け出したと同じ事であつた。是丈でも一通り以上の退屈である上に、津田を厭がらせる積極的なものがまだ一つあつた。彼は自分の眼

前に見る此二人、ことに小林を、無暗に新しい藝術を振り廻したがる半可通として、最初から取扱つてるた。彼は此偏見の上へ、乙に識者ぶる彼等の態度を追加して眺めた。此點に於て無知な津田を羨ましがらせるのが、殆ど二人の目的でもあるやうに見え出した時、彼は無理に一旦落ち附けた腰を又浮かしに掛かつた。すると小林が又抑留した。

「もう直きだ、一所に行くよ、少し待つてろ」

「いや餘り遲くなるから……」

「何もそんなに他に恥を搔かせなくつても宜からう。それとも原君が食つちまふ迄待つてゐると、紳士の體面に關るとでも云ふのか」

原は刻んだサラドをハムの上へ載せて、それを肉叉で突き差した手を止めた。

「何うぞ御構ひなく」

津田が輕く會釋を返して、愈立ち上がらうとした時、小林は殆ど獨りごとのやうに云つた。

「一體この席を何と思つてるんだらう。送別會と號して他を呼んで置きながら、肝心の御客さんを殘して、先へ歸つちまふなんて、侮辱を與へる奴が世の中にゐるんだから厭になるな」

「そんな積りぢやないよ」

「積りでなければ、もう少し居ろよ」

「少し用があるんだ」

「此方にも少し用があるんだ」

「繪なら御免だ」
「繪だつて無理に買へとは云はないよ。吝な事をいふな」
「おや早く其用を片附けて呉れ」
「立つてちや駄目だ、紳士らしく坐らなくつちや」
仕方なしに又腰を卸ろした津田は、袂から烟草を出して火を點けた。不圖見ると、灰皿は敷島の殘骸でもう一杯になつてゐた。今夜の記念として是程適當なものはないといふ氣が、偶然津田の頭に浮かんだ。是から吞まうとする一本も、三分經つか經たないうちに、灰と煙と吸口丈に變形して、役にも立たない冷たさを皿の上に留めるに過ぎないと思ふと、彼は何となく厭な心持がした。
「何だい其用事といふのは。眞逆無心ぢやあるまいね、もう」
「だから吝な事を云ふなと、先刻から云つてるぢやないか」
小林は右の手で背廣の右前を摑んで、左の手を隱袋の中へ入れた。彼は暗闇で物を探るやうに、しばらく入れた手を、背廣の裏側で動かしながら、其間始終眼を津田の顏へぴつたり附けてゐた。すると急に突飛な光景が、津田の頭の中に描き出された。同時に變な妄想が、今吞んでゐる烟草の烟のやうに、淡く彼の心を掠めて過ぎた。
「此奴は懷から短銃を出すんぢやないだらうか。さうしてそれを己の鼻の先へ突き附ける積りぢやないかしら」
芝居じみた一刹那が彼の豫感を微かに搖振つた時、彼の神經の末梢は、眼に見えない風に弄られる細い

小枝のやうに顫動した。それと共に、妄りに自分で拵へた此一場の架空劇を餘所目に見て、その荒誕を冷笑ふ理智の力が、もう彼の中心に働いてゐた。

「何を搜してるんだ」

「いや色々なものが一所に入つてるからな、手の先でよく搜してた上でないと、滅多に君の前へは出されないんだ」

「間違へて先刻放り込んだ札でも出すと、厄介だらう」

「なに札は大丈夫だ。外の紙片と違つて活きてるから。斯う遣つて、手で障つて見るとすぐ分るよ。隱袋の中で、ぴち／＼跳ねてる」

小林は減らず口を利きながら、わざと空しい手を出した。

「おやないぞ。變だな」

彼は左胸部にある表隱袋へ再び右の手を突き込んだ。然し其所から彼の撮み出したものは皺だらけになつた薄汚い手帛丈であつた。

「何だ手品でも使ふ氣なのか、其手帛で」

小林は津田の言葉を耳にも掛けなかつた。眞面目な顔をして、立ち上がりながら、兩手で腰の左右を同時に叩いた後で、いきなり云つた。

「うん此所にあつた」

彼の洋袴の隱袋から引き摺り出したものは、一通の手紙であつた。

「實は此奴を君に讀ませたいんだ。それももう當分君に會ふ機會がないから、今夜に限るんだ。僕と原君と話してる間に、一寸讀んで呉れ。何譯ぢやないやね、少し長いけれども」

封書を受取つた津田の手は、殆ど器械的に動いた。

百六十四

ペンで原稿紙へ書きなぐるやうに認められた其手紙は、長さから云つても、無論普通の倍以上あつた。のみならず宛名は小林に違ひなかつたけれども、差出人は津田の見た事も聞いた事もない全く未知の人であつた。津田は封筒の裏表を讀んだ後で、それが果して自分に何の關係があるのだらうと思つた。けれども冷やかな無關心の傍に起つた一種の好奇心は、すぐ彼の手を誘つた。封筒から引き拔いた十行二十字詰の罫紙の上へ眼を落とした彼は一氣に讀み下した。

「僕は此所へ來た事をもう後悔しなければならなくなつたのです。貴方は定めて飽きつぽいと思ふでせう、然し是は貴方と僕の性質の差違から出るのだから仕方がないのです。またかと云はずに、まあ僕の訴へを聞いて下さい。女ばかりで夜が不用心だから銀行の整理のつくまで泊りに來て留守番をしてくれ、小説が書きたければ自由に書くが可い。圖書館へ行くなら辨當を持つて行くがいゝ、午後は畫を習ひに行くが可い。今に銀行を東京へ持つて來ると外國語學校へ入れて遣る、家の始末は心配するな、轉居の金は出してやる。――僕は斯んな難有い條件に誘惑されたのです。尤も一から十迄當てにした譯でもないんですが、其何割かは本當に違ひないと思ひ込んだのです。所が來て見ると、本當は一つもないんです、頭から

尻迄嘘の皮なんです。叔父は東京にゐる方が多いばかりか、僕は書生代りに朝から晩迄使ひ歩きをさせられる丈なのです。叔父は僕の事を「宅の書生」といひます、しかも客の前でです、僕の居る前でです。斯んな譯で酒一合の使から緣側の拭き掃除までみんな僕の役になつてしまふのです。金はまだ一錢も貰つたことがありません。僕の穿いてゐた一圓の下駄が割れたら十二錢のやつを買つて穿かせました。叔父は明日金を遣ると云つて、僕の家族を姉の所へ轉居させたのですが、越してしまつたら、金の事は噫にも出さないので、僕は歸る宅さへなくなりました。

叔父の仕事は丸で山です。金なんか少しもないのです。さうして彼等夫婦は極めて冷やかな極めて吝嗇な人達です。だから來た當座僕は空腹に堪へかねて、三日に一遍位姉の家へ歸つて飯を食はして貰ひました。兵糧が盡きて燒芋や馬鈴薯で間に合はせてゐたこともあります。尤もこれは僕丈です。叔母に極めて感じの惡い女です。萬事が打算的で、體裁ばかりで、いやにこせ〳〵突つ附き廻したがるんで、僕はちく〳〵刺されどうしに刺されてゐるんです。叔父は金のない癖に酒丈は飮みます。さうして田舍へ行けば殿樣だなどと云つて威張るんです。然し裏側へ入つて見ると驚く事ばかりです。訴訟事件さへ澤山起つてゐる位です。出發のたびに汽車賃がなくつて、質屋へ驅けつけたり、姉の家へ行つて、苦しい所を算段して來て遣つたりしてゐますが、叔父の方ぢや、僕の食費と差引にする氣か何かで澄ましてゐるのです。

叔母は最初から僕が原稿を書いて食扶持でも入れるものとでも思つてるんでせう、僕がペンを持つてゐると、そんなにして書いたものは一體何うなるの、なんて當て擦りを云ひます。新聞の職業案内欄に出てゐる「事務員募集」の廣告を突き附けて謎を掛けたりします。

斯ういふ事が繰り返されて見ると、僕は何しに此所へ來たんだか、丸で譯が解らなくなる丈です。僕は變に考へさせられるのです。全く形を成さない此家の奇怪な生活と、變幻窮まりなき此妙な家庭の內情が、朝から晩迄恐ろしい夢でも見てゐるやうな氣分になつて、僕の頭に祟つてくるんです。それを他に話したつて、到底通じつこないと思ふと、世界のうちで自分丈が魔に取り卷かれてゐるとしか考へられないので、猶心細くなるのです、さうして時々は氣が狂ひさうになるのです。といふよりももう氣が狂つてゐるのではないかしらと疑ひ出すと、堪らなく恐くなつて來るのですよ。土の牢の中で苦しんでゐる僕には、日光がないばかりか、もう手も足もないやうな氣がします。何となれば、手を擧げても足を動かしても、四方は眞黑だからです。いくら訴へても、厚い冷たい壁が僕の聲を遮つて世の中へ聞こえさせないやうにするからです。今の僕は天下にたつた一人です。友達はないのです。あつても無いと同じ事なのです。幽靈のやうな僕の心境に觸れて呉れる事の出來る頭腦を有つたものは、有るべき筈がないからです。僕は苦しさの餘りに此手紙を書きました。救ひを求める爲に書いたのではありません。僕は貴方の境遇を知つてゐます。物質上の補助、そんなものを貴方の方角から受け取る氣は毛頭ないのです。たゞ此苦痛の幾分が、貴方の脈管の中に流れてゐる人情の血潮に傳はつて、其所に同情の波を少しでも立てて呉れる事が出來るなら、僕はそれで滿足です。僕はそれによつて、僕がまだ人間の一員として社會に存在してゐるといふ確證を握る事が出來るからです。此惡魔の重圍の中から、廣々した人間の中へ屆く光線は一縷もないのでせうか。僕は今それさへ疑つてゐるのです。さうして僕は貴方から返事が來るか來ないかで、其疑ひを決したいのです」

手紙は此所で終つてゐた。

百六十五

其時先刻火を點けて吸ひ始めた卷烟草の灰が、何時の間にか一寸近くの長さになつて、ぽたりと罫紙の上に落ちた。津田は竪横に走る藍色の枠の上に崩れ散つた此粉末に視覺を刺激されて、不圖氣が附いて見ると、彼は烟草を持つた手をそれ迄動かさずにゐた。といふより彼の口と手がいつか烟草の存在を忘れてゐた。其上手紙を讀み終つたのと烟草の灰を落したのとは同時でないのだから、二つの間にはさまる茫乎したたゞの時間を認めなければならなかつた。

　その空虚な時間は果して何の爲に起つたのだらう。元來をいふと、此手紙ほど津田に縁の遠いものはなかつた。第一に彼はそれを書いた人を知らなかつた。第二にそれを書いた人と小林との關係が何うなつてゐるのか皆目解らなかつた。中に述べ立ててある事柄に至ると、丸で別世界の出來事としか受け取れない位、彼の位置及び境遇とは懸け離れたものであつた。

　然し彼の感想は其所で盡きる譯に行かなかつた。彼は何處かでおやと思つた。今迄前の方ばかり眺めて、此所に世の中があるのだと極めて掛かつた彼は、急に後を振り返らせられた。さうして自分と反對な存在を注視すべく立ち留まつた。するとあゝあゝ是も人間だといふ心持が、今日迄まだ會つた事もない幽靈のやうなものを見詰めてゐるうちに起つた。極めて縁の遠いものは却て縁の近いものだつたといふ事實が彼の眼前に現はれた。

彼は其所で留まつた。さうして徘徊した。けれどもそれより先へは一歩も進まなかつた。彼は彼相應の意味で、此氣味の惡い手紙を了解したといふ迄であつた。

彼が原稿紙から烟草の灰を拂ひ落とした時、原を相手に何か話し續けてゐた小林はすぐ彼の方を向いた。用談を切り上げるためらしい言葉がたゞ一句彼の耳に響いた。

「なに大丈夫だ。そのうち何うにかなるよ、心配しないでも可いや」

津田は默つて手紙を小林の方へ出した。小林はそれを受け取る前に訊いた。

「讀んだか」

「うん」

「何うだ」

津田は何とも答へなかつた。然し一應相手の主意を確めて見る必要を感じた。

「一體何のためにそれを僕に讀ませたんだ」

小林は反問した。

「一體何の爲に讀ませたと思ふ」

「僕の知らない人ぢやないか、それを書いた人は」

「無論知らない人さ」

「知らなくつても可いとして、僕に何か關係があるのか」

「此男がか、此手紙がか」

「何方でも構はないが」

「君は何う思ふ」

津田は又躊躇した。實を云ふと、それは手紙の意味が彼に通じた證據であつた。もつと明瞭にいふと、自分は自分なりに其手紙を解釋する事が出來たといふ自覺が彼の返事を鈍らせたのと同樣であつた。彼はしばらくして云つた。

「君のいふ意味なら、僕には全く無關係だらう」

「僕のいふ意味とは何だ？」

「解らないか」

「解らない。云つて見ろ」

「いや、——まあ止さう」

津田は先刻の繪と同じ意味で、小林が此手紙を自分の前に突き附けるのではなからうかと疑つた。何でも彼でも彼を物質上の犧牲者にし終せた上で、後から樣を見ろ、とう／＼降參したぢやないかといふ態度に出られるのは、彼に取つて忍ぶべからざる侮辱であつた。いくら貧乏の幽靈で威嚇したつて其手に乘るものかといふ彼の氣概が、自然小林の上に働き掛けた。

「それより君の方で其主意を男らしく僕に說明したら可いぢやないか」

「男らしく？ふん」と云つて一旦言葉を句切つた小林は、後から附け足した。

「ぢや說明して遣らう。此人も此手紙も、乃至此手紙の中味も、凡て君には無關係だ。但し世間的に云

へるだぜ、可いかね。世間的といふ意味をただ誤解すると不可ないから、序にそれも説明して置かう。君は此手紙の内容に對して、俗社會に所謂義務といふものを帶びてゐないのだ」

「當り前ぢやないか」

「だから世間的には無關係だと僕の方でも云ふんだ。然し君の道德觀をもう少し大きくして眺めたら何うだい」

「いくら大きくしたつて、金を遣らなければならないといふ義務なんか感じやしないよ」

「さうだらう、君の事だから。然し同情心はいくらか起るだらう」

「そりや起るに極まつてゐるぢやないか」

「それで澤山なんだ、僕の方は。同情心が起るといふのは詰り金が遣りたいといふ意味なんだから。それでゐて實際は金が遣りたくないんだから。其所に良心の鬪ひから來る不安が起るんだ。僕の目的はそれでもう充分達せられてゐるんだ」

斯う云つた小林は、手紙を隱袋へ仕舞ひ込むと同時に、同じ場所から先刻の紙幣を三枚とも出して、それを食卓の上へ並べた。

「さあ取り給へ。要る丈取り給へ」

彼は斯う云つて原の方を見た。

百六十六

小林の所作は津田に取つて全くの意外であつた。突然毒氣を拔かれた所に十分以上の皮肉を味はせられた彼の心は、相手に向つて躍つた。憎惡の電流とでも云はなければ形容の出來ないものが、咄嗟の間に彼の身體を通過した。

同時に聰明な彼の頭に一種の疑ひが閃めいた。

「此奴等二人は共謀になつて先刻からおれを馬鹿にしてゐるんぢやないかしら」

斯う思ふのと、大通の角で立談をしてゐた二人の姿と、此所へ來てからの小林の擧動と、途中から入つて來た原の樣子と、其後三人の間に起つた談話の遣り取りとが、何方が原因とも何方が結果とも分らないやうな迅速の度合で、津田の頭の中を仕懸花火のやうにくる／＼と廻轉した。彼は白い食卓布の上に、行儀よく順次に竝べられた新しい三枚の十圓紙幣を見て、思はず腹の中で叫んだ。

「是が此摺れつ枯らしの拵へ上げた狂言の落所だつたのか。馬鹿奴、さう貴樣の思はく通りにさせて堪るものか」

彼に傷つけられた自分のプライドに對しても、此不名譽な幕切れに一轉化を與へた上で、二人と別かれなければならないと考へた。けれども何うしたら斯う最後迄押し詰められて來た不利な局面を、今になつて、旨くどさりと引繰り返す事が出來るかの問題になると、豫め其邊の準備をして置かなかつた彼は、全く無能力者であつた。

外觀上の落附きを比較的平氣さうに保つてゐた彼の裏側には、役にも立たない機智の作用が、はげしく往來した。けれどもその混雜はたゞの混雜に終る丈で、何等の歸着點を彼に示して呉れないので、むら

くとした後の彼の心は、徒らにわく〳〵する丈であつた。其わく〳〵が何時の間にか狼狽の姿に進化しつゝある事さへ、殘念ながら彼には意識された。

此危機一髮といふ間際に、彼は又思ひ懸けない現象に逢着した。それは小林の並べた十圓紙幣が青年藝術家に及ぼした影響であつた。紙幣の上に落とされた彼の眼から出る異樣の光であつた。其所には驚きと喜びがあつた。一種の飢渇があつた。摑み掛からうとする慾望の力があつた。さうして其驚きも喜びも、飢渇も慾望も、一々眞其物の發現であつた。作りもの、拵へ事、馴れ合ひの狂言とは、何うしても受け取れなかつた。少なくとも津田にはさうとしか思へなかつた。

其上津田の此判斷を確めるに足る事實が後から續いで起つた。原はそれ程欲しさうな紙幣へ手を出さなかつた。と云つて斷然小林の親切を斥ける勇氣も示さなかつた。出したさうな手を遠慮して出さずにゐる苦痛の色が、あり〳〵と彼の顏附で讀まれた。もし此蒼白い青年が、遂に紙幣の方へ手を出さないとすると、小林の拵へた折角の狂言も半分は打ち壞しになる譯であつた。もし又小林が一旦隱袋から出した紙幣を、當初の宣告通り、幾分でも原の手へ渡さずに、再び故へ收めたなら、結果は一層の喜劇に變化する譯であつた。何方にしても自分の體面を繕ふのには便宜な方向へ發展して行きさうなので、其所に一縷の望みを抱いた津田は、もう少し默つて事の成行を見る事に極めた。

やがて二人の間に問答が起つた。

「何故取らないんだ。原君」

「でも餘り御氣の毒ですから」

「僕は僕で又君の方を氣の毒だと思つてるんだ」
「君の前に坐つてる其男は男で又僕の方を氣の毒だと思つてるんだ」
「えゝ、何うも難有う」
「はあ」
原はさつぱり通じないらしい顏をして津田を見た。小林はすぐ說明した。
「其紙幣は三枚共、僕が今其男から貰つたんだ。貰ひ立てのほや／＼なんだ」
「ぢや猶何うも……」
「猶何うもぢやない。だからだ。だから僕も安々と君に遣れるんだ。僕が安々と君に遣れるんだから、君も安々と取れるんだ」
「さういふ論理になるかしら」
「當り前さ。もし是が徹夜して書き上げた一枚三十五錢の原稿から生れて來た金なら、何ぼ僕だつて、少しは執着が出るだらうぢやないか。額からぽた／＼垂れる膏汗に對しても濟まないよ。然し是は何でもないんだ。餘裕が空間に吹き散らして呉れる淨財だ。拾つたものが功德を受ければ受ける程餘裕は喜ぶ丈なんだ。ねえ津田君さうだらう」
忌々しい關所をもう通り越してゐた津田は、却て好い所で相談を掛けられたと同じ事であつた。鷹揚な彼の一諾は、今夜此所に落ち合つた不調和な三人の會合に、少なくとも形式上體裁の好い結末を附けるのに充分であつた。彼は醜陋に見える自分の退却を避けるために眼前の機會を捕へた。

「さうだね。それが一番可いだらう」
小林は押し問答の末、とう〳〵三枚のうち一枚を原の手に渡した。殘る二枚を再び故の隱袋へ收める時、彼は津田に云つた。
「珍らしく餘裕が下から上へ流れた。けれども此所から上へはもう逆戻りをしないさうだ。だから矢つ張り君に對してサンクスだ」
表へ出た三人は濠端へ來て、電車を待ち合はせる間大きな星月夜を仰いだ。

百六十七

間もなく三人は離れ〳〵になつた。
「おや失敬、僕は停車場へ送つて行かないよ」
「さうか、來たつて可ささうなものだがね。君の舊友が朝鮮へ行くんだぜ」
「朝鮮でも臺灣でも御免だ」
「情合のない事夥しいものだ。そんなら立つ前にもう一遍此方から暇乞ひに行くよ、可いかい」
「もう澤山だ、來て呉れなくつても」
「いや行く。でないと何だか氣が濟まないから」
「勝手にしろ。然し僕は居ないよ、來ても。明日から旅行するんだから」
「旅行？何處へ」

「少し靜養の必要があるんでね」
「轉地か、洒落てるな」
「僕に云はせると、是も餘裕の賜物だ。僕は君と違つて飽く迄も此餘裕に感謝しなければならないんだ」
「飽く迄も僕の注意を無意味にして見せるといふ氣なんだね」
「正直の所を云へば、まあ其所いらだらうよ」
「よろしい、何方が勝つかまあ見てゐろ。小林に啓發されるよりも、事實其物に戒飭される方が、遙かに覿面で切實で可いだらう」
是が別かれる時二人の間に起つた問答であつた。然しそれは宵から持ち越した惡感情、津田が小林に對して日暮れ以來貯藏して來た惡感情の發現に過ぎなかつた。是で幾分か溜飲が下りたやうな氣のした津田には、相手の口から出た最後の言葉などを考へる餘地がなかつた。彼は理非の如何に關らず、意地にも小林如きものの思想なり議論なりを、切つて棄てなければならなかつた。一人になつた彼は、電車の中ですぐ溫泉場の樣子などを想像に描き始めた。
明くる朝は風が吹いた。其風が疎らな雨の絲を筋違に地面の上へ運んで來た。
「厄介だな」
時間通りに起きた津田は、緣鼻から空を見上げて眉を寄せた。空には雲があつた。さうして其雲は眼に見える風のやうに斷えず動いてゐた。
「ことによると、御午位から晴れるかも知れないわね」

お延は既定の計畫を遂行する方に贊成するらしい言葉つきを見せた。

「だつて一日後れると一日徒爲になる丈ですもの。早く行つて早く歸つて來て頂いた方が可いわ」

「おれも其積だ」

冷たい雨によつて亂されなかつた夫婦間の取極めは、出立間際になつて、始めて少しの行き違ひを生じた。箪笥の抽斗から自分の衣裳を取り出したお延は、それを夫の洋服と並べて澁紙の上へ置いた。津田は氣が附いた。

「御前は行かないでも可いよ」

「何故」

「何故つて譯もないが、此雨の降るのに御苦勞千萬ぢやないか」

「もつとも」

お延の言葉があまりに無邪氣だつたので、津田は思はず失笑した。

「來て貰ふのが迷惑だから斷るんぢやないよ。氣の毒だからだよ。高が一日と掛からない所へ行くのに、わざ／＼送つて貰ふなんて、少し滑稽だからね。小林が朝鮮へ立つんでさへ、おれは送つて行かないつて、昨夜斷つちまつた位だ」

「さう、でもあたし宅にゐたつて、何もする事がないんですもの」

「遊んでおいでよ。構はないから」

お延がとう／＼苦笑して、爭ふ事を已めたので、津田は一人俥を驅つて宅を出る事が出來た。

周圍の混雜と對照を形成る雨の停車場の侘びしい中に立つて、津田が今買つたばかりの中等切符を、ぼんやり眺めてゐると、一人の書生が突然彼の前へ來て、舊知己のやうな挨拶をした。

「生憎な御天氣で」

それは此間始めて見た吉川の書生であつた。取次に出た時玄關で會つた餘所々々しさに引き換へて、今日は鳥打を脫ぐ態度からしてが丁寧であつた。津田は何の意味だか一向氣が附かなかつた。

「何方かどちらへか入らつしやるんですか」

「いゝえ、一寸御見送りに」

「だから何方を」

書生は弱らせられたやうな樣子をした。

「實は奧さまが、今日は少し差支へがあるから、これを持つて代りに行つて來て呉れと仰しやいました」

書生は手に持つた果物の籃を津田に示した。

「いやそりや何うも、恐れ入りました」

津田はすぐ其籃を受け取らうとした。然し書生は渡さなかつた。

「いえ私が列車の中迄持つて參ります」

汽車が出る時、默つて丁寧に會釋をした書生に「何うぞ宜しく」と挨拶を返した津田は、比較的込み合はない車室の一隅に、ゆつくりと腰を卸ろしながら「矢つ張りお延に來て貰はない方が可かつたのだ」と思つた。

百六十八

お延の氣を利かして外套の隱袋へ入れて吳れた新聞を津田が取り出して、何時もより念入りに眼を通してゐる頃に、窓外の空模樣は段々惡くなつて來た。先刻迄疎らに眺められた雨の絲が急に數を揃へて、見渡す限りの空間を一度に充たして來る樣子が、比較的展望に便利な汽車の窓から見ると、一層凄まじく感ぜられた。

雨の上には濃い雲があつた。雨の橫にも眼界の遮られない限りは雲があつた。雲と雨との隙間なく連續した廣い空間が、津田の視覺を一杯に冒した時、彼は荒涼なる車外の景色と、其反對に心持よく設備の行き屆いた車内の愉快とを思ひ較べた。身體を安逸の境に置くといふ事を文明人の特權のやうに考へてゐる彼は、此雨を衝いて外部へ出なければならない午後の心持を想像しながら、獨り肩を竦めた。すると隣に腰を掛けて、ぽつり／＼と窓硝子を打つたびに、點滴の球を表面に殘して碎けて行く雨の絲を、ぼんやり眺めてゐた四十恰好の男が少し上半身を前へ屈めて、向う側に胡坐を搔いてゐる伴侶に話し掛けた。然し雨の音と汽車の音が重なり合ふので、彼の言葉は一度で相手に通じなかつた。

「非道く降つて來たね。此樣子ぢやまた輕便の路が壞れやしないかね」

彼は仕方なしに津田の耳へも入るやうな大きな聲を出して斯う云つた。

「なに大丈夫だよ。なんぼ名前が輕便だつて、さう輕便に壞れられた日にや乘るものが災難だあね」

是が相手の答であつた。相手といふのは羅紗の道行を着た六十恰好の爺さんであつた。頭には唐物屋を

探しても見當たりさうもない變な鍔なしの帽子を被つてゐた。煙草入だの、唐棧の小片だの、古代更紗だの、そんなものを器用にきちんと竝べ立てて見世を張る袋物屋へでも行つて、わざ〳〵注文しなければ、到底頭へ載せる事の出來さうもない其帽子の主人は、彼の言葉遣ひで東京生れの證據を充分に擧げてゐた。津田は服裝に似合はない思ひの外濶達な此爺さんの元氣に驚くと同時に、何方かといふと、べらんめえに接近した彼の口の利き方にも意外を呼んだ。

此挨拶のうちに偶然使用された輕便といふ語は、津田に取つてたしかに一種の暗示であつた。彼は午後の何時間かを其輕便に搖られる轉地者であつた。ことによると同じ方角へ遊びに行く連中かも知れないと思つた津田の耳は、彼等の談話に對して急に鋭敏になつた。轉席の餘地がないので、不便な姿勢に圖拔けた大聲を忍ばなければならなかつた二人の云ふ事は、一々津田に聞こえた。

「斯んな天氣にならうとは思はなかつたね。これならもう一日延ばした方が樂だつた」

中折に駱駝の外套を着た落附きのある男の方が斯ういふと、爺さんはすぐ答へた。

「何高が雨だあね。濡れると思やあ、何でもねえ」

「だが荷物が厄介だよ。あの輕便へ雨曝しの儘載せられる事を考へると、少し心細くなるから」

「ぢやおいらの方が雨曝しになつて、荷物丈を室の中へ入れて貰ふ事にしよう」

二人は大きな聲を出して笑つた。其後で爺さんが又云つた。

「尤も此前のあの騷ぎがあるからね。途中で汽罐へ穴が開いて動けなくなる汽車なんだから、全くの所心細いにや違ひない」

「あの時や何うして向うへ着いたつけ」

「なに彼方から來る奴を山の中程で待ち合はせてさ。其方の汽罐で引つ張り上げて貰つたぢやないか」

「成程ね、だが汽罐を取り上げられた方の車は何うしたつけね」

「違えねえ、此方で取り上げりや、向うは困らあ」

「だからさ、取り殘された方の車は何うしたらうつていふのさ。まさか他を救つて、自分は立往生つて譯もなからう」

「今になつて考へりや、それも左右だがね、あの時や、てんで向うの車の事なんか考へちやゐられなかつたからね。日は暮れかゝるしさ、寒さは身に染みるしさ。顫へちまはあね」

津田の推測は漸く慥かになつて來た。二人は其輕便の通じてゐる線路の左右にある三箇所の溫泉場のうち、何處かへ行くに違ひないといふ鑑定さへ附いた。それにしても是から自分の身を二時間なり三時間なり委せようとする其輕便が、彼等のいふ通り亂暴至極のものならば、此雨中何んな災難に會はないとも限らなかつた。けれども其所には東京ものの持つて生れた誇張といふものがあつた。そんなに不完全なものですかと訊いて見ようとして其所に氣の附いた津田は、腹の中で苦笑しながら、質問を掛ける手數を省いた。さうして今度は清子と其輕便とを聯結して「女一人でさへ樂々往來が出來る所だのに」と思ひながら、面白半分にする興味本位の談話には、それぎり耳を藉さなかつた。

百六十九

汽車が目的の停車場に着く少し前から、三人によつて氣遣はれた天候が次第に穩やかになり始めた時、津田は雨の收まり際の空を眺めて、其所に忙しさうな雲の影を認めた。其雲は汽車の走る方角と反對の側に向つて、ずん／＼飛んで行つた。さうして後から後からと、恰も前に行くものを追懸けるやうに、隙間なく詰め寄せた。其内動く空の中に、稍明るい所が出來てきた。外の部分より比較的薄く見える箇所が次第に多くなつた。就中一角はもう少しすると風に吹き破られて、破れた穴から青い輝きを洩らしさうな氣配を示した。

思つたより自分に好意を有つて呉れた天候の前に感謝して、汽車を降りた津田は、其所からすぐ乘り換へた電車の中で、又先刻會つた二人伴れの男を見出だした。果して彼の思はく通り、自分と同じ見當へ向いて、同じ交通機關を利用する連中だと知れた時、津田は氣を附けて彼等の手荷物を注意した。けれども彼等の雨曝しになるのを苦に病んだ程の大嵩なものは何處にも見當たらなかつた。のみならず、爺さんは自分が先刻云つた事さへもう忘れてゐるらしかつた。

「難有い、大當りだ。だから矢つ張り行かうと思つた時に立つちまふに限るよ。是で愚圖々々して東京にゐて御覽な。あゝ詰らねえ、斯うと知つたら、思ひ切つて今朝立つちまへば可かつたと後悔する丈だからね」

「さうさ。だが東京も今頃は此位好い天氣になつてるんだらうか」

「そいつあ行つて見なけりや、ちよいと分らねえ。何なら電話で訊いて見るんだ。だが大抵間違ひはないよ。空は日本中何處へ行つたつて續いてるんだから」

津田は少し可笑しくなつた。すると爺さんがすぐ話し掛けた。

「貴方も湯治場へ入らつしやるんでせう。何うも大方さうだらうと思ひましたよ、先刻から」

「何故ですか」

「何故つて、さういふ處へ遊びに行く人は、様子を見ると、すぐ分りますよ。ねえ」

彼に斯う云つて隣にゐる自分の伴侶を顧た。中折の人は仕方なしに「あゝ」と答へた。

此天眼通に苦笑を禁じ得なかつた津田は、それぎり會話を切り上げようとした所、快豁な爺さんの方で中々彼を放さなかつた。

「だが旅行も近頃は便利になりましたね。何處へ行くにも身體一つ動かせば澤山なんですから、難有い譯さ。ことに此方徒等見たいな氣の早いものには御誂向きだあね。今度だつて荷物なんか何も持つて來やしませんや、此合切袋とこの大將のあの鞄を差し引くと、殘るのは命ばかりといひたい位のものだ。ねえ大將」

大將の名をもつて呼ばれた人は又「あゝ」と答へたぎりであつた。是丈の手荷物を車室内へ持ち込めないとすれば、彼等の所謂「輕便」なるものは、餘程込み合ふのか、左もなければ、常識をもつて測るべからざる程度に於て不完全でなければならなかつた。其所を確めて見ようかと思つた津田は、すぐ確めても仕方がないといふ氣を起して默つて仕舞つた。

電車を降りた時、津田は二人の影を見失つた。彼は停留所の前にある茶店で、寫眞版だの石版だのと、思ひ／＼に意匠を凝らした温泉場の廣告繪を眺めながら、晝食を認めた。時間から云つて平常より一時間

以上も後れてゐた其晝食は、膳を貪る人としての彼を思ふ存分に發揮させた。けれども發車は目前に逼つてゐた。彼は箸を投げると共にすぐまた輕便に乘り移らなければならなかつた。

基點に當たる停車場は、彼の休んだ茶店のすぐ前にあつた。彼は電車よりも狹い其車を眼の前に見つゝ、下女から支度料の剩錢を受取つてすぐ表へ出た。切符に鋏を入れて貰ふ所と、プラットフォームとの間には距離といふものが殆どなかつた。五六歩動くとすぐ足を掛ける階段へ屆いてしまつた。彼は車室のなかで、又先刻の二人連れと顏を合はせた。

「やあ御早うがす。此方へ御掛けなさい」

爺さんは腰をずらして津田の爲に、彼の腕に抱へて來た膝掛を敷く餘地を拵へて呉れた。

「今日は空いてて結構です」

爺さんは避寒避暑二樣の意味で、暮から正月へ掛けて、それから七八二月に渉つて、此線路に集まつてくる湯治客の、何んなに雜沓するかを左も面白さうに例の調子で話して聽かせた後で、自分の同伴者を顧た。

「あんな時に女なんか伴れてくるのは實際罪だよ。尻が大きいから第一乘り切れねえやね。さうしてすぐ醉ふから困らあ。鮨のやうに押し詰められてる中で、吐いたり戾したりさ。見つともねえ事つたら」

彼は自分の傍に腰を掛けてゐる若い婦人の存在を丸で忘れてゐるらしい口の利き方をした。

百七十

輕便の中でも、津田の平和は動ともすると年を取つたこの樂天家のために亂されさうになつた。是から目的地へ着いた時の樣子、其樣子次第で取るべき自分の態度、そんなものが想像に描き出された旅館だの山だの溪流だのの光景のうちに、取り留めもなくちら／＼動いてゐる際などに、老人は急に彼を夢の裡から叩き起した。

「まだ假橋のまゝで遣つてゐんだから、呑氣なものさね。御覽なさい、土方があんなに働いてゐるから」

本式の橋が去年の出水で押し流された儘まだ出來上がらないのを、老人はさも會社の怠慢でもあるやうに罵つた後で、海へ注ぐ河の出口に、新しく作られた一構の家を指して、又津田の注意を誘ひ出さうとした。

「あの家も去年波で浚はれちまつたんでさあ。でもすぐあんなに建てやがつたから、輕便より少しや感心だ」

「此夏の避暑客を取り逃がさないためでせう」

「此所いらで一夏休むと、大分應へるからね。矢つ張り慾がなくつちや、何でも手つ取り早く仕事は片附かないものさね。この輕便だつて左右でせう、貴方、なまじひ彼の假橋で用が足りてるもんだから、會社の方で、何時迄も横着を極め込みやがつて、掛け易へねえんでさあ」

津田は老人の人生觀に一も二もなく調子を合はすべく餘儀なくされながら、談話の途切れ目には、眼を眠るやうに構へて、自分自身に勝手な事を考へた。

彼の頭の中は纒まらない斷片的な映像のために絶えず往來された。其中には今朝見たお延の顏もあつた。

停車場迄來て吳れた吉川の書生の姿も動いた。彼の車室内へ運んで吳れた果物の籃もあつた。其蓋を開けて、二人の伴侶に夫人の贈物を配たうかといふ意志も働いた。其所作から起る手數だの煩はしさだの、此方の好意を受け取る時、相手の遣りかねない仰山な挨拶も鮮やかに描き出された。すると爺さんも中折も急に消えて、其代り肥つた吉川夫人の影法師が頭の闥を排してつか／＼這入つて來た。連想はすぐ是から行かうとする湯治場の中心點になつて居る清子に飛び移つた。彼の心は車と共に前後へ搖れ出した。

汽車といふ名を附けるのは勿體ない位な車は、すぐ海に續いてゐる勾配の急な山の中途を、危かしくがたがた云はして驅けるかと思ふと、何時の間にか山と山の間に割り込んで、幾度も上がつたり下がつたりした。其山の多くは隙間なく植ゑ附けられた蜜柑の色で、暖かい南國の秋を、美しい空の下に累々と點綴してゐた。

「あいつは旨さうだね」

「なに根つから旨くないんだ。此所から見てゐる方が餘つ程綺麗だよ」

比較的嶮しい曲がりくねつた坂を一つ上がつた時、車は忽ち留まつた。停車場でもない其所に見えるものは、多少の霜に彩どられた雜木丈であつた。

「何うしたんだ」

爺さんが斯う云つて窓から首を出してゐると、車掌だの運轉手だのが急に車から降りて、しきりに何か云ひ合つた。

「脫線です」

此言葉を聞いた時、爺さんはすぐ津田と自分の前にゐる中折を見た。
「だから云はねえこつちやねえ。屹度何かあるに違ひねえと思つてたんだ」
急に豫言者らしい口吻を洩らした彼は、愈自分の駄辯を弄する時機が來たと云はぬばかりに乾燥ぎ出した。
「何うせ家を出る時に、水盃は濟まして來たんだから、覺悟はとうから極めてるやうなものゝ、いざとなつて見ると、こんな所で辨慶の立往生は御免蒙りたいからね。といつて何時迄斯う遣つて待つてたつて、中々元へ戻して呉れさうもなしと。何しろ日の短かい上へ持つて來て、氣が短かいと來てるんだから、安閑としちやゐられねえ。――何うです皆さん一つ降りて車を押して遣らうぢやありませんか」
爺さんは斯う云ひながら元氣よく眞先に飛び降りた。殘るものは苦笑しながら立ち上がつた。津田も獨り室内に坐つてゐる譯に行かなくなつたので、みんなと一所に地面の上へ降り立つた。さうして黄色に染められた芝草の上にあつけらかんと立つてゐる婦人を後にして、うん〳〵車を押した。
「や、不可ねえ、行き過ぎちやつた」
車は又引き戻された。夫から又前へ押し出された。押し出したり引き戻したり二三度するうちに、脱線は漸く片附いた。
「又後れちまつたよ、大將、御蔭で」
「誰の御蔭でさ」
「輕便の御蔭でさ。だが斯んな事でもなくつちや眠くつて不可ねえや」

「折角遊びに來た甲斐がないだらう」
「全くだ」
津田は後れた時間を案じながら、教へられた停車場で、此元氣の好い老人と別かれて、一人薄暮の空氣の中に出た。

百七十一

靄とも夜の色とも片附かないものの中にぼんやり描き出された町の樣は丸で寂寞たる夢であつた。自分の四邊にちら／＼する弱い電燈の光と、その光の屆かない先に横たはる大きな闇の姿を見較べた時の津田には慥かに夢といふ感じが起つた。

「おれは今この夢見たやうなものの續きを辿らうとしてゐる。東京を立つ前から、もつと几帳面に云へば、吉川夫人に此溫泉行を勸められない前から、いやもつと深く突き込んで云へば、お延と結婚する前から、——それでもまだ云ひ足りない、實は突然淸子に背中を向けられた其刹那から、自分はもう既にこの夢のやうなものに祟られてゐるのだ。さうして今丁度その夢を追懸けようとしてゐる途中なのだ。顧ると過去から持ち越した此一條の夢が、是から目的地へ着くと同時に、からりと覺めるのかしら。それは吉川夫人の意見であつた。從つて夫人の意見に贊成し、またそれを實行する今の自分の意見でもあると云はなければなるまい。然しそれは果して事實だらうか。自分の夢は果して綺麗に拭ひ去られるだらうか。自分は果してそれ丈の信念を有つて、此夢のやうにぼんやりした寒村の中に立つてゐるのだらうか。眼に入る

低い軒、近頃砂利を敷いたらしい狹い道路、貧しい電燈の影、傾きかゝつた藁屋根、黄色い幌を下ろした一頭立の馬車、――新とも舊とも片の附けられない此一塊の配合を、猶の事夢らしく粧つてゐる肌寒と夜寒と闇暗、――すべて朦朧たる事實から受ける此感じは、自分が此所まで運んで來た宿命の象徴ぢやないだらうか。今迄も夢、今も夢、是から先も夢、その夢を抱いてまた東京へ歸つて行く。それが事件の結末にならないとも限らない。いや多分はさうなりさうだ。おや何のために雨の東京を立つてこんな所迄出掛けて來たのだ。畢竟馬鹿だから？　愈馬鹿と事が極まりさへすれば、此所からでも引き返せるんだが」

此感想は一度に來た。半分と掛からないうちに、是丈の順序と、段落と、論理と、空想を具へて、抱き合ふやうに彼の頭の中を通過した。然しそれから後の彼はもう自分の主人公ではなかつた。何處から來たとも知れない若い男が突然現はれて、彼の荷物を受け取つた。一分の猶豫なく彼をすぐ前にある茶店の中へ引き込んで、彼の行かうとする宿屋の名を訊いたり、馬車に乘るか俥にするかを確めたりした上に、彼の豫期してゐないやうな愛嬌さへ、自由自在に忙しい短時間の間に操縱して退けた。

彼はやがて否應なしにズックの幌を下ろした馬車の上へ乘せられた。さうして御免といひながら自分の前に腰を掛ける先刻の若い男を見出だすべく驚かされた。

「君も一所に行くのかい」

「へえ、御邪魔でも、どうか」

若い男は津田の目指してゐる宿屋の手代であつた。

「此所に旗が立つてゐます」

彼は首を曲げて御者臺の隅に插し込んである赤い小旗を見た。暗いので中に染め拔かれた文字は津田の眼に入らなかつた。旗はたゞ馬車の速力で起す風のために、彼の座席の方へはげしく吹かれる丈であつた。彼は首を縮めて外套の襟を立てた。

「夜中はもう大分御寒くなりました」

御者臺を背中に背負つてる手代は、位地の關係から少しも風を受けないので、此云ひ草は何となく小賢しく津田の耳に響いた。

道は左右に田を控へてゐるらしく思はれた。さうして道と田の境目には小河の流れが時々聞こえるやうに感ぜられた。田は兩方とも狹く細く山で仕切られてるるやうな氣もした。

津田は帽子と外套の襟で隱し切れない顏の一部分丈を風に曝して、寒さに抵抗でもするやうに默想の態度を手代に示した。手代も其方が便利だと見えて、强ひて向うから口を利かうともしなかつた。

すると突然津田の心が搖いた。

「御客は澤山ゐるかい」

「へえ難有う、御蔭さまで」

「何人位」

何人とも答へなかつた手代は、却て辯解がましい返事をした。

「只今は生憎季節が季節だもんでげすから、あんまり御出でが御座いません。寒い時は暮から御正月へ掛けまして、それから夏場になりますと、まあ七八二月ですな、繁昌するのは。そんな時にや臨時の御客

さまを御斷りする事が、毎日のやうに御座います」
「おや今が丁度閑な時なんだね、さうか」
「へえ、何うぞ御緩くり」
「難有う」
「やつぱり御病氣のためにわざ〳〵御出でなんで」
「うんまあ左右だ」
清子の事を訊く目的で話し始めた津田は、此所へ來て急に痞へた。彼は氣がさした。彼女の名前を口にするに堪へなかつた。其上後で面倒でも起ると惡いとも思ひ返した。手代から顏を離して馬車の背に倚りかゝり直した彼は、再び沈默の姿勢を回復した。

百七十二

馬車はやがて黑い大きな岩のやうなものに突き當たらうとして、其裾をぐるりと廻り込んだ。見ると反對の側にも同じ岩の破片とも云ふべきものが不行儀に路傍を塞いでゐた。臺上から飛び下りた御者はすぐ馬の口を取つた。
一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えてゐた。星月夜の光に映る物凄い影から判斷すると古松らしい其木と、突然一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都會の中を出なかつた津田の心に不時の一轉化を與へた。彼は忘れた記憶を思ひ出した時のやうな氣分になつた。

「あゝ世の中には、斯んなものが存在してゐたのだつけ、何うして今迄それを忘れてゐたのだらう」
不幸にして此述懐は孤立の儘消滅する事を許されなかつた。津田の頭にはすぐ是から會ひに行く清子の姿が描き出された。彼は別かれて以來一年近く經つ今日迄、いまだ此女の記憶を失くした覺えがなかつた。斯うして夜路を馬車に搖られて行くのも、有體に云へば、其人の影を一途に追懸けてゐる所作に違ひなかつた。御者は先刻から時間の遲くなるのを恐れる如く、止せば可いと思ふのに、濫りなる鞭を鳴らして、しきりに痩馬の尻を打つた。失はれた女の影を追ふ彼の心、其心を無遠慮に翻譯すれば、取りも直さず、此痩馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いてゐる憐れな動物が、彼自身で、それに手荒な鞭を加へるものは誰なのだらう。吉川夫人？いや、さう一概に斷言する譯には行かなかつた。では矢つ張り彼自身？此點で精確な解決を附ける事を好まなかつた津田は、問題を其所で投げながら、依然としてそれより先を考へずにはゐられなかつた。
「彼女に會ふのは何の爲だらう。永く彼女を記憶するため？會はなくても今の自分は忘れずにゐるではないか。では彼女を忘れるため？或はさうかも知れない。けれども會へば忘れられるだらうか。或はさうかも知れない。或はさうでないかも知れない。松の色と水の音、それは今全く忘れてゐた山と溪の存在を憶ひ出させた。全く忘れてゐない彼女、想像の眼先にちら／＼する彼女、わざ／＼東京から後を跟けて來た彼女、は何んな影響を彼の上に起すのだらう」
冷たい山間の空氣と、其山を神秘的に黑くぼかす夜の色と、其夜の色の中に自分の存在を呑み盡くされた津田とが一度に重なり合つた時、彼は思はず恐れた。ぞつとした。

御者は馬の轡を取つたなり、白い泡を岩角に吹き散らして鳴りながら流れる早瀬の上に架け渡した橋の上をそろ／＼通つた。すると幾點の電燈がすぐ津田の眸に映つたので、彼は忽ちもう來たなと思つた。或は其光の一つが、今清子の姿を照らしてゐるのかも知れないとさへ考へた。

「運命の宿火だ。それを目標に辿りつくより外に途はない」

詩に乏しい彼は固より斯んな言葉を口にする事を知らなかつた。けれども斯う形容して然るべき氣分はあつた。彼は首を手代の方へ延ばした。

「着いたやうぢやないか。君の家は何れだい」

「へえ、もう一町程奥になります」

漸く馬車の通れる位な溫泉の町は狹かつた。御負けに不規則な故意とらしい曲折を描いて、御者をして再び車臺の上に鞭を鳴らす事を許さなかつた。それでも宿へ着く迄に五六分しか掛からなかつた。山と谷がそれ程廣いといふ意味で、町はそれ程狹かつたのである。

宿は手代の云つた通り森閑としてゐた。夜の爲ばかりでもなく、家の廣いためばかりでもなく、全く客の少ない爲としか受け取れない程の靜かさのうちに、自分の室へ案内された彼は、好時季に邂逅はせて呉れた此偶然に感謝した。性質から云へば寧ろ人中を擇ぶべき筈の彼には都合があつた。彼は膳の向うに坐つてゐる下女に訊いた。

「晝間も此通りかい」

「へえ」

「何だか御客は何處にもゐないやうぢやないか」
下女は新館とか別館とか本館とかいふ名前を擧げて、津田の不審を説明した。
「そんなに廣いのか。案内を知らないものは迷兒にでもなりさうだね」
彼は清子のゐる見當を確めなければならなかつた。けれども手代に露骨な質問が掛けられなかつた通り、下女にも率直な尋ね方は出來なかつた。
「一人で來る人は少ないだらうね、斯んな所へ」
「さうでも御座いません」
「だが男だらう、そりや。まさか女一人で逗留してゐるなんてえのはなからう」
「一人いらつしやいます、今」
「へえ、病氣ぢやないか。そんな人は」
「さうかも知れません」
「何といふ人だい」
受持が違ふので下女は名前を知らなかつた。
「若い人かね」
「えゝ、若い御美しい方です」
「さうか、一寸見せて貰ひたいな」
「御湯に入らつしやる時、此室の横を御通りになりますから、御覧になりたければ、何時でも――」

「拜見出來るか、そいつは難有い」
津田は女のゐる方角丈敎はつて、膳を下げさせた。

百七十三

寢る前に一風呂浴びる積りで、下女に案内を賴んだ時、津田は始めて先刻彼女から聽かされた此家の廣さに氣が附いた。意外な廊下を曲がつたり、思ひも寄らない階子段を降りたりして、目的の湯壺を眼の前に見出だした彼は、實際一人で自分の座敷へ歸れるだらうかと疑つた。
風呂場は板と硝子戸でいくつにか仕切られてゐた。左右に三つ宛向う合せに竝んでゐる小型な浴槽の外に、一つ離れて大きいのは、普通の洗湯に比べて倍以上の尺があつた。
「是が一番大きくつて心持が可いでせう」と云つた下女は、津田の爲に擦硝子の篏まつた戸をがら〳〵と開けて呉れた。中には誰もゐなかつた。湯氣が籠もるのを防ぐためか、座敷で云へば欄間と云つたやうな部分にも、矢張り硝子戸の設けがあつて、半分程透かされた其二枚の間から、冷たい一道の夜氣が、縕袍を脫ぎにかゝつた津田の身體を、山里らしく襲ひに來た。
「あゝ寒い」
津田はざぶんと音を立てて湯壺の中へ飛び込んだ。
「御緩くり」
戸を閉めて出ようとした下女は一旦斯う云つた後で、又戻つて來た。

「まだ下にも御風呂場が御座いますから、もし其方の方が御氣に入るやうでしたら、何うぞ」
來る時もう階子段を一つか二つ下りてゐる津田には、此浴槽の階下がまだあらうとは思へなかつた。
「一體何階なのかね、此家は」
下女は笑つて答へなかつた。然し用事丈は云ひ殘さなかつた。
「此所の方が新しくつて綺麗は綺麗ですが、御湯は下の方がよく利くのださうです。だから本當に療治の目的で御出での方はみんな下へ入らつしやいます。それから肩や腰を瀧で御打たせになる事も下なら出來ます」
湯壺から首丈出した儘で津田は答へた。
「難有う。おや今度そつちへ入るから連れてつて呉れ玉へ」
「えゝ。旦那樣は何處か御惡いんですか」
「うん、少し惡いんだ」
下女が去つた後の津田は、しばらくの間「本當に療治の目的で來た客」といつた彼女の言葉を忘れる事が出來なかつた。
「おれは果してさういふ種類の客なんだらうか」
彼は自分をさう思ひたくもあり、又さう思ひたくもなかつた。何方本位で來たのか、それは彼の心がよく承知してゐた。けれども雨を凌いで此所迄來た彼には、まだ商量の隙間があつた。躊躇があつた。幾分の餘裕が殘つてゐた。さうして其餘裕が彼に教へた。

「今のうちならまだ何うでも出來る。本當に療治の目的で來た客にならうと思へばなれる。ならうとなるまいと今の御前は自由だ。自由は何處迄行つても幸福なものだ。其代り何處迄行つても片附かないものだ、だから物足りないものだ。それで御前は其自由を放り出さうとするのか。では自由を失つた曉に、御前は何物を確と手に入れる事が出來るのか。それを御前は知つてゐるのか。御前の未來はまだ現前しないのだよ。御前の過去にあつた一條の不可思議より、まだ幾倍かの不可思議を有つてゐるかも知れないのだよ。過去の不可思議を解くために、自分の思ひ通りのものを未來に要求して、今の自由を放り出さうとする御前は、馬鹿かな利巧かな」

津田は馬鹿とも利巧とも判斷する譯に行かなかつた。萬事が結果如何で極められようといふ矢先に、其結果を疑ひ出した日には、手も足も動かせなくなるのは自然の理であつた。

彼には最初から三つの途があつた。さうして三つより外に彼の途はなかつた。第一は何時迄も煮え切らない代りに、今の自由を失はない事、第二は馬鹿になつても構はないで進んで行く事、第三は彼の目指す所は、馬鹿にならないで自分の滿足の行くやうな解決を得る事。

此三ヶ條のうち彼はたゞ第三丈を目的にして東京を立つた。所が汽車に搖られ、馬車に搖られ、山の空氣に冷やされ、煙の出る湯壺に漬けられ、愈目的の人は眼前にゐるといふ事實が分り、目的の主意は明日からでも實行に取り掛かれるといふ間際になつて、急に第一が顏を出した。すると第二も何時の間にか、微笑して彼の傍に立つた。彼等の到着は急であつた。けれども騷々しくはなかつた。眼界を遮る靄が、風の音も立てずにすうと晴れ渡る間から、彼は自分の視野を着實に見る事が出來たのである。

思ひの外に浪漫的であつた津田は、また思ひの外に着實であつた。さうして彼は其兩面の對照に氣が附いてゐなかつた。だから自己の矛盾を苦にする必要はなかつた。彼はたゞ決すれば可かつた。然し決する迄には胸の中で一戰爭しなければならなかつた。――馬鹿になつても構はない、いや馬鹿になるのは厭だ、さうだ馬鹿になる筈がない。――戰爭で一旦片附いたものが、又斯ういふ風に三段となつて、最後迄落ちて來た時、彼は始めて立ち上がれるのである。

人のゐない大きな浴槽のなかで、洗ふとも摩るとも片の附かない手を動かして、彼はしきりに綺麗な溫泉をざぶ／＼使つた。

百七十四

其時不意にがら／＼と開けられた硝子戸の音が、周圍を丸で忘れて、自分の中にばかり頭を突込んでゐた津田をはつと驚かした。彼は思はず首を上げて入口を見た。さうして其所に半身を現はしかけた婦人の姿を湯氣のうちに認めた時、彼の心臟は、合圖の警鐘のやうに、どきんと打つた。けれども瞬間に起つた彼の豫感は、また瞬間に消える事が出來た。それは本當の意味で彼を驚かせに來た人ではなかつた。生れてからまだ一度も顏を合はせた覺えのない其婦人は、寢掛けと見えて、白晝なら人前を憚るやうな愼みの足りない姿を津田の前に露はした。尋常の場合では小袖の裾の先にさへ出る事を許されない、長い襦袢の派手な色が惜し氣もなく津田の眼をはなやかに照らした。

婦人は溫泉烟の中に乞食の如く蹲踞る津田の裸體姿を一目見るや否や、一旦入り掛けた身體をすぐ後へ

引いた。

「おや、失禮」

津田は自分の方で詫るべき言葉を、相手に先へ奪られたやうな氣がした。すると階子段を下りる上靴の音が又聽こえた。それが硝子戸の前で留まつたかと思ふと男女の會話が彼の耳に入つた。

「何うしたんだ」

「誰か入つてるの」

「塞がつてるのか。好いぢやないか、込んでさへゐなければ」

「でも……」

「ぢや小さい方へ入るさ。小さい方ならみんな空いてゐるだらう」

「勝さんはゐないかしら」

津田は此二人づれのために早く出て遣りたくなつた。同時に是非彼の入つてゐる風呂へ入らなければ承知が出來ないといつた調子の何處かに見える婦人の態度が氣に喰はなかつた。彼は此所へ入りたければ御勝手に御入んなさい、御遠慮には及びませんからといふ度胸を据ゑて、又浴槽の中へ身體を漬けた。

彼は脊の高い男であつた。長い足を樂に延ばして、それを溫泉の中で上下へ動かしながら、透き徹るもののうちに、浮いたり沈んだりする肉體の下肢を得意に眺めた。

時に突然婦人の要する勝さんらしい人の聲がし出した。

「今晩は。大變御早う御座いますね」

勝さんの此挨拶には男の答があつた。

「うん、あんまり退屈だから今日は早く寝ようと思つてね」

「へえ、もう御稽古は御濟みですか」

「御濟みつて譯でもないが」

次には女の言葉が聽こえた。

「勝さん、其所は塞がつてるのね」

「おやさうですか」

「何處か新しく拵へたのはないの」

「御座います。其代り少し熱いかも知れませんよ」

二人を案内したらしい風呂場の戸の開く音が、向うの方でした。かと思ふと、又津田の浴槽の入口ががらりと鳴つた。

「今晩は」

四角な顔の小作りな男が、又斯う云ひながら入つて來た。

「旦那流しませう」

彼はすぐ流しへ下り立つて、小判なりの桶へ湯を汲んだ。津田は否應なしに彼に背中を向けた。

「君が勝さんてえのかい」

「えゝ旦那はよく御承知ですね」

「今聽いたばかりだ」

「成程。さう云へば旦那も今見たばかりですね」

「今來たばかりだもの」

勝さんはゝあと云つて笑ひ出した。

「東京から御出でですか」

「さうだ」

勝さんは何時の下りだの、上りだのといふ言葉を遣つて、津田に正確な答をさせた。それから一人で來たのかとか、何故奥さんを伴れて來なかつたのかとか、今の夫婦ものは濱の生絲屋さんだとか、旦那が細君に毎晩義太夫を習つてゐるんだとか、宅の御上さんは長唄が上手だとか、色々の問を掛けると共に、色色の知識を供給した。聽かないでも可い事迄聽かされた津田には、勝さんの觸れないものが、たつた一つしかないやうに思はれた。さうして其觸れないものは取りも直さず清子といふ名前であつた。偶然から來た此結果には、津田に取つて多少の物足らなさが含まれてゐた。勿論津田の方でも水を向ける用意もなかつた。そんな暇のないうちに、勝さんはさつさと喋舌る丈喋舌つて、洗ふ方を切り上げてしまつた。

「何うぞ御緩くり」

斯う云つて出て行つた勝さんの後影を見送つた津田にも、もう緩くりする必要がなかつた。彼はすぐ身體を拭いて硝子戸の外へ出た。然し濡手拭をぶら下げて、風呂場の階子段を上がつて、其所にある洗面所と姿見の前を通り越して、廊下を一曲り曲がつたと思つたら、果して何處へ歸つて可いのか解らなくなつ

た。

百七十五

最初の彼は殆ど氣が附かずに歩いた。是が先刻下女に案内されて通つた路なのだらうかと疑ふ心さへ、淡い夢のやうに、彼の記憶を暈すだけであつた。然し廊下を踏んだ長さに比較して、中々自分の室らしいものの前に出られなかつた時に、彼は不圖立ち留まつた。

「はてな、もつと後かしら、もう少し先かしら」

電燈で照らされた廊下は明るかつた。何方の方角でも行かうとすれば勝手に行かれた。けれども人の足音は何處にも聽こえなかつた。用事で往來をする下女の姿も見えなかつた。手拭と石鹸を其所へ置いた津田は、宅の書齋でお延を呼ぶ時のやうに手を鳴らして見た。けれども返事は何處からも響いて來なかつた。不案内な彼は、第一下女の溜りのある見當を知らなかつた。個人の住宅と殆ど區別の附かない、植込の突當りにある玄關から上がつたので、勝手口、臺所、帳場などの所在は、凡て彼に取つての祕密と何の擇ぶ所もなかつた。

手を鳴らす所作を一二度繰り返して見て、誰も應ずるもののないのを確めた時、彼は苦笑しながら又石鹸と手拭を取り上げた。是も一興だといふ氣になつた。ぐる〳〵廻つてゐるうちには、何時か自分の室の前に出られるだらうといふ醉興も手傳つた。彼は生れて以來旅館に於ける始めての經驗を故意に味はふ人のやうな心になつてまた歩き出した。

廊下はすぐ盡きた。其所から筋違に二三段上がると又洗面所があつた。きら〲する白い金盥が四つ程並んでゐる中へ、ニツケルの栓の口から流れる山水だか清水だか、絶えずざあ〲落ちるので、金盥は四つが四つとも一杯になつてゐるばかりか、縁を溢れる水晶のやうな薄い水の幕の綺麗に滑つて行く樣が鮮やかに眺められた。金盥の中の水は後から押されるのと、上から打たれるのとの兩方で、靜かなうちに微細な震盪を感ずるものの如くに搖れた。

水道ばかりを使ひ慣れて來た津田の眼は、すぐ自分の居り場所を彼に忘れさせた。彼はたゞ勿體ないと思つた。手を出して栓を締めて置いて遣らうかと考へた時、漸く自分の迂濶さに氣が附いた。それと同時に、白い瀨戸張りのなかで、大きくなつたり小さくなつたりする不定な渦が、妙に彼を刺激した。

あたりは靜かであつた。膳に向つた時下女の云つた通りであつた。といふよりも事實は彼女の言葉を一一首肯つて、大方此位だらうと暗に想像したよりも遙かに靜かであつた。客が何處にゐるのかと怪しむどころではなく、人が何處にゐるのかと疑ひたくなる位であつた。其靜かさのうちに電燈は隈なく照り渡つた。けれども是はたゞ光る丈で、音もしなければ、動きもしなかつた。たゞ彼の眼の前にある水丈が動いた。渦らしい形を描いた。さうして其渦は伸びたり縮んだりした。

彼はすぐ水から視線を外らした。すると同じ視線が突然人の姿に行き當たつたので、彼ははつとして、眼を据ゑた。然しそれは洗面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の影像に過ぎなかつた。鏡は等身と云へない迄も大きかつた。少なくとも普通床屋に具へ附けてあるもの位の尺はあつた。さうして位置の都合上、やはり床屋のそれの如くに直立してゐた。從つて彼の顏、顏ばかりでなく彼の肩も胴も腰も、彼と

同じ平面に足を置いて、彼と向き合つた儘で映つた。彼は相手の自分である事に氣が附いた後でも、猶鏡から眼を放す事が出來なかつた。湯上りの彼の血色は寧ろ蒼かつた。彼には其意味が解せなかつた。久しく刈込を怠つた髪は亂れた儘で頭に生ひ被さつてゐた。風呂で濡らしたばかりの色が漆のやうに光つた。何故だかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされた後の庭先らしく思へた。

彼は眼鼻立の整つた好男子であつた。顏の肌理も男としては勿體ない位濃やかに出來上がつてゐた。彼は何時でも其所に自信を有つてゐた。鏡に對する結果としては此自信を確める場合ばかりが彼の記憶に殘つてゐた。だから何時もと違つた不滿足な印象が鏡の中に現はれた時に、彼は少し驚いた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽靈だといふ氣が先づ彼の心を襲つた。凄くなつた彼には、抵抗力があつた。彼は眼を大きくして、猶の事自分の姿を見詰めた。すぐ二足ばかり前へ出て鏡の前にある櫛を取り上げた。それからわざと落附いて綺麗に自分の髪を分けた。

然し彼の所作は櫛を投げ出すと共に盡きてしまつた。彼は再び自分の室を探す故の我に立ち返つた。彼は洗面所と向ひ合せに附けられた階子段を見上げた。さうして其階子段には一種の特徴のある事を發見した。第一に、それは普通のものより幅が約三分一程廣かつた。第二に象が乘つても音がしまいと思はれる位巖丈に出來てゐた。第三に尋常のものと違つて、擬ひの西洋館らしく、一面に假漆が塗つてゐた。

胡亂なうちにも、此階子段丈は決して先刻下りなかつたといふ慥かな記憶が彼にあつた。其所を上つても自分の室へは歸れないと氣が附いた彼は、もう一遍後戻りをする覺悟で、鏡から離れた身體を横へ向け直した。

百七十六

すると其二階にある一室の障子を開けて、開けた後を又閉て切る音が聴こえた。階子段の構へから見ても、上にある室の數は一つや二つではないらしく思はれる程廣い建物だのに、今津田の耳に入つた音は、手に取るやうに判切してゐるので、彼はすぐ其確的さの度合から押して、室の距離を定める事が出來た。下から見上げた階子段の上は、普通料理屋の建築などで、人の屢目撃する所と何の異なる所もなかつた。其所には廣い板の間があつた。目の届かない幅は問題外として、突き當りを遮る壁を目標に置いて、大凡の見當を附けると、疊一枚を竪に敷く丈の長さは充分あるらしく見えた。此板の間から、廊下が三方へ分かれてゐるか、或は二方に折れ曲がつてゐるか、其所は階段を上らない津田の想像で判斷するより外に途はないとして、今聴こえた障子の音の出所は、一番階段に近い室、即ち下から見える壁のすぐ後に違ひなかつた。

ひつそりした中に、突然此音を聞いた津田は、始めて階上にも客のゐる事を悟つた。といふより、彼は漸く人間の存在に氣が附いた。今迄丸で方角違ひの刺激に氣を奪られてゐた彼は驚いた。勿論其驚きは微弱なものであつた。けれども性質からいふと、既に死んだと思つたものが急に蘇つた時に感ずる驚きと同じであつた。彼はすぐ逃げ出さうとした。それは部屋へ歸れずに迷兒ついてゐる今の自分に附着する間拔けさ加減を他に見せるのが厭だつたからでもあるが、實を云ふと、此驚きによつて、多少なりとも度を失つた己の醜さを人前に曝すのが恥づかしかつたからでもある。

けれども自然の成行はもう少し複雜であつた。一旦歩を回らさうとした刹那に彼は氣が附いた。

「ことによると下女かも知れない」

斯う思ひ直した彼の度胸は忽ち回復した。既に驚きの上を超える事の出來た彼の心には、續いて、なに客でも構はないといふ餘裕が生れた。

「誰でも可い、來たら方角を教へて貰はう」

彼は決心して姿見の横に立つた儘、階子段の上を見詰めた。すると靜かな足音が彼の豫期通り壁の後で聽こえ出した。其足音は實際靜かであつた。踵へ跳ね上がる上靴の薄い尾がなかつたなら、彼は遂にそれを聽き逃がして仕舞はなければならない程靜かであつた。其時彼の心を卒然として襲つて來たものがあつた。

「是は女だ。然し下女ではない。ことによると……」

不意に斯う感附いた彼の前に、若しやと思つた其本人が容赦なく現はれた時、今しがた受けたより何十倍か强烈な驚きに囚はれた津田の足は忽ち立ち竦んだ。眼は動かなかつた。

同じ作用が、それ以上强烈に淸子を其場に抑へ附けたらしかつた。階上の板の間迄來て其所でぴたりと留まつた時の彼女は、津田に取つて一種の繪であつた。彼は忘れる事の出來ない印象の一つとして、それを後々迄自分の心に傳へた。

彼女が何氣なく上から眼を落としたのと、其所に津田を認めたのとは、同時に似て實は同時でないやうに見えた。少なくとも津田にはさう思はれた。無心が有心に變る迄にはある時が掛かつた。驚きの時、不

可思議の時、疑ひの時、それ等を經過した後で、彼女は始めて棒立ちになつた。横から肩を突けば、指一本の力でも、土で作つた人形を倒すより容易く倒せさうな姿勢で、硬くなつた儘棒立ちに立つた。

彼女は普通の湯治客のする通り、寐しなに一風呂入つて温まる積りと見えて、手に小型のタウエルを提げてゐた。それから津田と同じ様にニッケル製の石鹸入を裸の儘持つてゐた。棒のやうに硬く立つた彼女が、何故それを床の上へ落とさなかつたかは、後から其刹那の光景を辿るたびに、何時でも彼の記憶中に顏を出したがる疑問であつた。

彼女の姿は先刻風呂場で會つた婦人程縱ではなかつた。けれども斯ういふ場所で、客同志が互に默認しあふ丈の自由は既に利用されてゐた。彼女は正式に幅の廣い帶を結んでゐなかつた。赤だの青だの黄だの、色々の縞が綺麗に通つてゐる派手な伊達卷を、寧ろする〳〵に卷き附けた儘であつた。寢卷の下に重ねた長襦袢の色が、薄い羅紗製の上靴を突掛けた素足の甲を被つてゐた。

清子の身體が硬くなると共に、顏の筋肉も硬くなつた。さうして兩方の頰と額の色が見る〳〵うちに蒼白く變つて行つた。其變化があり〳〵と分つて來た中頃で、自分を忘れてゐた津田は氣が附いた。

「何うかしなければ不可ない。何處迄蒼くなるか分らない」

津田は思ひ切つて聲を掛けようとした。すると其途端に清子の方が動いた。くるりと後を向いた彼女は止まらなかつた。津田を階下に殘した儘、廊下を元へ引き返したと思ふと、今迄明らかに彼女を照らしてゐた二階の上り口の電燈がぱつと消えた。津田は暗闇の中で開けるらしい障子の音を又聽いた。同時に彼の氣の附かなかつた、自分の立つてゐるすぐ傍の小さな部屋で呼鈴の返しの音がけたゝましく鳴つた。

やがて遠い廊下をばた／＼馳けて來る足音が聽こえた。彼は其足音の主を途中で喰ひ留めて、清子の用を聽きに行く下女から自分の室の在り所を教へて貰つた。

百七十七

其晩の津田はよく眠れなかつた。雨戸の外でするさら／＼いふ音が絶えず彼の耳に附着した。それを離れる事の出來ない彼は疑つた。雨が來たのだらうか、谿川が軒の近くを流れてゐるのだらうか。雨としては庇に響かないし、谿川としては勢が緩漫過ぎると迄考へた彼の頭は、同時にそれより遙か重大な主題のために惱まされてゐた。

彼は室に歸ると、何時の間にか氣を利かせた下女の暖かさうに延べて置いて呉れた床を、わが座敷の眞中に見出だしたので、すぐ其中へ潛り込んだ儘、偶然にも今自分が經過して來た冒險に就いて思ひ耽つたのである。

彼は此宵の自分を顧て、殆ど夢中歩行者のやうな氣がした。彼の行爲は、目的もなく家中彷徨き廻つたと一般であつた。ことに階子段の下で、靜中に渦を廻轉させる水を見たり、突然姿見に映る氣味の悪い自分の顏に出會つたりした時は、事後一時間と經たない近距離から判斷して見ても、慥かに常軌を逸した心理作用の支配を受けてゐた。常識に見捨てられた例の少ない彼としては珍らしい此氣分は、今床の中に安臥する彼から見れば、恥づべき狀態に違ひなかつた。然し外聞が惡いといふ事を外にして、何故あんな心持になつたものだらうかと、たゞ其原因を考へる丈でも、說明は出來なかつた。

それはそれとして、何故あの時清子の存在を忘れてゐたのだらうといふ疑問に推し移ると、津田は我ながら不思議の感に打たれざるを得なかつた。

「それ程自分は彼女に對して冷淡なのだらうか」

彼は無論左右でないと信じてゐた。彼は食事の時、既に清子のゐる方角を、下女から教へて貰つた位であつた。

「然し御前はそれを念頭に置かなかつたらう」

彼は實際廊下を烏鷺々々歩行いてゐるうちに、清子を何處かへ振り落とした。けれども自分の何處を歩いてゐるか知らないものが、他が何處にゐるか知らう筈はなかつた。

「此見當だと心得てさへゐたならば、あゝ不意打ちを食ふんぢやなかつたのに」

斯う考へた彼は、もう第一の機會を取り逃がしたやうな氣がした。彼女が後を向いた樣子、電氣を消して上り口の案内を閉塞した所作、忽ち下女を呼び寄せるために鳴らした電鈴の音、是等のものを綜合して考へると、凡てが警戒であつた。注意であつた。さうして絶縁であつた。

然し彼女は驚いてゐた。彼よりも遙か餘計に驚いてゐた。それは單に女だからとも云へた。彼には不意の裡に豫期があり、彼女には突然の中にたゞ突然がある丈であつたからとも云へた。けれども彼女の驚きはそれで説明し盡くせてゐるだらうか。彼女はもつと複雜な過去を覿面に感じてはゐないだらうか。

彼女は蒼くなつた。彼女は硬くなつた。津田は其所に望みを繫いだ。今の自分に都合の好いやうにそれを解釋して見た。それから又其解釋を引繰り返して、反對の側からも眺めて見た。兩方を眺め盡くした次

には何方が合理的だらうといふ批判をしなければならなくなつた。其批判は材料不足のために、容易に纏まらなかつた。纏まつてもすぐ打ち崩された。一方に傾くと彼の自信が壞しに來た。他方に寄ると幻滅の半鐘が耳元に鳴り響いた。不思議にも彼の自信、卑下して用ひる彼自身の言葉でいふと彼の己惚れは、胸の中にあるやうな氣がした。それを攻めに來る幻滅の半鐘は又反對に何時でも頭の外から來るやうな心持がした。兩方を公平に取扱つてゐる積りでゐながら、彼は常に親疎の區別を其間に置いてゐた。といふよりも、遠近の差等が自然天然屬性として二つのものに元から具はつてゐるらしく見えた。結果は分明であつた。彼は叱りながら己惚れの頭を撫でた。耳を傾けながら、半鐘の音を忌んだ。

斯くして互に追つつ追はれつしてゐる彼の心に、靜かな眠りは來ようとしても來られなかつた。萬事を明日に讓る覺悟を極めた彼は、幾度かそれを招き寄せようとして失敗つた揚句、右を向いたり、左を下にしたり、たゞ寐返りの數を重ねる丈であつた。

彼は烟草へ火を點けようとして枕元にある燐寸を取つた。其時袖疊みにして下女が衣桁へ掛けて行つた縕袍が眼に入つた。氣が附いて見ると、お延の鞄へ入れて呉れたのは其儘にして、先刻宿で出したのを着たなり、自分は床の中へ入つてゐた。彼は病院を出る時、新調の縕袍に對してお延に使つた御世辭を忽ち思ひ出した。同時にお延の返事も記憶の舞臺に呼び起された。

「何方が好いか比べて御覽なさい」

縕袍は果して宿の上が上等であつた。銘仙と絲織の區別は彼の眼にも一目瞭然であつた。縕袍を見較べると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考へた當時の事が再び意識の域上に現はれた。

「お延と淸子」

獨り斯う云つた彼は忽ち吸殼を灰吹の中へ打ち込んで、其底から出るじいといふ音を聽いたなり、すぐ夜具を頭から被つた。

強ひて寐ようとする決心と努力は、其決心と努力が疲れ果てて何處かへ行つてしまつた時に始めて酬いられた。彼はとう〱我知らず夢の中に落ち込んだ。

百七十八

朝早く男が來て雨戸を引く音のために、一旦破り掛けられた其夢は、半醒半睡の間に、辛うじて持續した。室の四角が寐てゐられない程明るくなつて、外部に朝日の影が充ち渡ると思ふ頃、始めて起き上がつた津田の瞼はまだ重かつた。彼は楊枝を使ひながら障子を開けた。さうして昨夜來の魔境から今漸く覺醒した人のやうな眼を放つて、其所いらを見渡した。

彼の室の前にある庭は案外にも山里らしくなかつた。不規則な池を人工的に拵へて、其周圍に稚い松だの躑躅だのを普通の約束通り配置した景色は平凡といふより寧ろ卑俗であつた。彼の室に近い築山の間から、谿水を導いて小さな瀧を池の中へ落としてゐる上に、高くはないけれども、一度に五六筋の柱を花火のやうに吹き上げる噴水迄添へてあつた。昨夜彼の睡眠を惱ました細工の源を、苦笑しながら明らさまに見た時、彼の聯想はすぐ此水音以上に何倍か彼を苦しめた淸子の方へ推し移つた。大根を洗へばそれも此噴水同樣に殺風景なものかも知れない、いやもしそれが此噴水同樣に無意味なものであつたら堪らないと

彼は考へた。
彼が衝へ楊枝の儘懐手をして敷居の上にぼんやり立つてゐると、先刻から高箒で庭の落葉を掃いてゐた男が、彼の傍へ寄つて來て丁寧に挨拶をした。
「御早う、昨夜は御疲れ樣で」
「君だつたかね、昨夕馬車へ乘つて此所迄一所に來て呉れたのは」
「へえ、御邪魔樣で」
「成程君の云つた通り閑靜だね。さうして無暗に廣い家だね」
「いえ、御覽の通り平地の乏しい所でげすから、地ならしをしては其上へ建て建てして、家が幾段にもなつて居りますので、――廊下丈は仰せの通り無暗に廣くつて長いかも知れません」
「道理で。昨夕僕は風呂場へ行つた歸りに迷兒になつて弱つたよ」
「はあ、そりや」
二人が斯んな會話を取り換はせてゐる間に、庭續きの小山の上から男と女が是も二人つれで下りて來た。黃葉と枯枝の隙間を動いてくる彼等の路は、稻妻形に林の裡を拔けられるやうに、又比較的急な勾配を樂に上られるやうに作つてあるので、つい其所に見えてゐる彼等の姿も中々庭先迄出るのに暇がかゝつた。それでも手代は凝として彼等を待つてゐなかつた。忽ち津田を放り出した現金な彼は、すぐ岡の裾迄驅け出して行つて、下から彼等を迎ひに來たやうな挨拶を與へた。
津田は此時始めて二人の顏をよく見た。女は昨夕艶めかしい姿をして、彼の浴室の戸を開けた人に違ひ

なかつた。風呂場で彼を驚かした大きな髷を何時の間にか崩して、尋常の束髪に結び更へたので、彼はつい同じ人と氣が附かずにゐた。彼は更に聲を聽いた丈で顏を知らなかつた伴の男の方を、餘所ながら初對面といつた風に、女と眺め比べた。短かく刈り込んだ當世風の髭を鼻の下に生やした其男は、成程風呂番の云つた通り、何處かに商人らしい面影を宿してゐた。津田は彼の顏を見るや否や、すぐお秀の夫を憶ひ出した。堀庄太郎、もう少し略して堀の庄さん、もつと詰めて當人のしば〳〵用ひる堀庄といふ名前が、如何にも妹婿の樣子を代表してゐる如く、此男の名前も乾度其髭を虐殺する樣に町人染みてゐるはしまいかと思はれた。瞥見の序に纏められた津田の想像は此所に留まらなかつた。彼はもう一歩皮肉な所迄切り込んで、彼等が果して本當の夫婦であるかないかをさへ疑問の中に置いた。從つて早起きをして食前浴後の散歩に出たのだと明言する彼等は、津田に取つての違例な現象に外ならなかつた。彼は楊枝で齒を磨きながらまだ元の所に立つてゐた。彼が餘所見をしてゐるにも拘らず、番頭を相手に二人のする談話はよく聽こえた。

女は番頭に訊いた。

「今日は別館の奧さんは何うかなすつて」

番頭は答へた。

「いえ、手前はちつとも存じませんが、何か——」

「別に何つて事もないんですけれどもね、何時でも朝風呂場で御目にかゝるのに、今日は入らつしやらなかつたから」

「はあ左樣で――、ことによるとまだ御休みかも知れません」
「左右かも知れないわね。だけど何時でも兩方の時間がちやんと極まつてるのよ、朝御風呂に行く時の」
「へえ、成程」
「それに今朝御一所に裏の山へ散歩に參りませうつて御約束をしたもんですからね」
「ぢや一寸伺つて參りませう」
「いゝえ、もう可いのよ。散歩は此通り濟んぢまつたのだから。たゞもしや何處か御加減でも惡いのぢやないかしらと思つて、一寸番頭さんに訊いて見た丈よ」
「多分たゞの御休みだらうと思ひますが、それとも――」
「それともなんて、さう眞面目腐らなくつても可いのよ。たゞ訊いて見た丈なんだから」
二人はそれぎり行き過ぎた。津田は齒磨粉で口中を一杯にしながら、又昨夜の風呂場を探しに廊下へ出た。

百七十九

然し探す抔といふ大袈裟な言葉は、今朝の彼に取つて全く無用であつた。路に曲折の難はあつたにせよ、一足の無駄も踏まずに、自然昨夜の風呂場へ下りられた時、彼の腹には、夜來の自分を我ながら馬鹿々々しいと思ふ心が更に新しく湧いて出た。
風呂場には軒下に嵌めた高い硝子戸を通して、秋の朝日がかん／＼差し込んでゐた。其硝子戸越しに岩

だか土堤だかの片影を、近く頭の上に見上げた彼は、全身を溫泉に浸けながら、如何に浴槽の位置が、大地の平面以下に切り下げられてゐるかを發見した。さうして此崖と自分のゐる場所との間には、高さから云つて隨分の相違があると思つた。彼は目分量で其距離を一間半乃至二間と鑑定した後で、もし此下にも古い風呂場があるとすれば、段々が一つ家の中に幾層もある筈だといふ事に氣が附いた。

崖の上には石蕗があつた。生憎其所に朝日が射してゐないので、時々風に搖れる硬く光つた葉の色が、如何にも寒さうに見えた。山茶花の花の散つて行く樣も湯壺から眺められた。けれども景色は斷片的であつた。硝子戸の長さの許す二尺以外は、上下とも全く津田の眼に映らなかつた。不可知な世界は無論平凡に違ひなかつた。けれどもそれが何故だか彼の好奇心を唆つた。すぐ崖の傍へ來て急に鳴き出したらしい鵯の、聲が聽こえる丈で姿の見えないのが物足りなかつた。

然しそれはほんの附けたりの物足りなさであつた。實を云ふと、津田は腹のうちで遙かそれ以上氣にかかる事件を捏ね返してゐたので、彼は風呂場へ下りた時から既にある不足を暗々のうちに感じなければならなかつた。明るい浴室に人影一つ見出さなかつた彼は、萬事君の跋扈に任せるといつた風に寂寞を極めた建物の中に立つて、廊下の左右に並んでゐる小さい浴槽の戸を、念のため一々開けて見た。尤も是は其うちの一つの入口に、スリッパーが脱ぎ棄ててあつたのが、彼に或暗示を與へたので、それが機緣になつて、彼を動かした所作に過ぎないとも云へば云へない事もなかつた。だから順々に戸を開けた手の番が廻つて來て、愈スリッパーの前に閉て切られた戸に掛かつた時、彼は急に躊躇した。彼は固より無心ではなかつた。其上失禮といふ感じが何處かで手傳つた。仕方なしに外部から耳を峙てたけれども、中は森と

してるので、それに勢を得た彼の手は、思ひ切つてがらりと戸を開ける事が出來た。さうして外と同じ樣に空虛な浴室が彼の前に見出だされた時に、まあ可かつたといふ感じと、何だ詰らないといふ失望が一度に彼の胸に起つた。

旣に裸になつて、湯壺の中に浸かつた後の彼には、此引續きから來る一種の豫期が絕えず働いた。彼は苦笑しながら、昨夕と今朝の間に自分の經過した變化を比較した。昨夕の彼は丸髷の女に驚かされる迄は寧ろ無邪氣であつた。今朝の彼はまだ誰も來ないうちから一種の待ち設けのために緊張を感じてゐた。

それは主のないスリッパーに唆かされた罪かも知れなかつた。けれどもスリッパーが何故彼を唆かしたかといふと、寐起きに横濱の女と番頭の噂の上つた淸子の消息を聽かされたからであつた。彼女はまだ起きてゐなかつた。少なくともまだ湯に入つてゐなかつた。若し入るとすれば今入つてゐるか、是から入りに來るか何方かでなければならなかつた。

鋭敏な彼の耳は、不圖誰か階段を下りて來るやうな足音を聽いた。彼はすぐざぶ〳〵やる手を止めた。すると足音は聽こえなくなつた。然し氣の所爲か一旦留まつた其足音は今度は逆に階段を上つて行くやうに思はれた。彼は其原因を想像した。他の例にならつて、自分のスリッパーを戸の前に脫ぎ捨てて置いたのが惡くはなかつたらうかと考へた。何故それを浴室の中迄穿き込まなかつたのだらうかといふ後悔さへ萌した。

しばらくして彼は又意外な足音を今度は浴槽の外側に聞いた。それは彼が石蕗の花を眺めた後、鵯鳥の聲を聽いた前であつた。彼の想像はすぐ前後の足音を結び附けた。風呂場を避けた前の足音の主が、わざ

と外へ出たのだといふ解釋が容易に彼に與へられた。すると忽ち女の聲がした。然しそれは足音と全く別な方角から來た。下から見上げた外部の樣子によつて考へると、崖の上は幾坪かの平地で、其平地を前に控へた一棟の建物が、風呂場の方へ向いて建てられてゐるらしく思はれた。何しろ聲は其方の見當から來た。さうして其主は、慥かに先刻散歩の歸りに番頭と清子の話をした女であつた。

昨夕湯氣を拔くために隙かされた庇の下の硝子戸が今日は閉て切られてゐるので、彼女の言葉は明らかに津田の耳に入らなかつた。けれども語勢其他から推して、一事は慥かであつた。彼女は崖の上から崖の下へ向けて話し掛けてゐた。だから順序を云へば、崖の下からも是非受け應への挨拶が出なければならない筈であつた。所が意外にもその方は丸で音沙汰なしで、互ひ違ひに起る普通の會話は決して聽かれなかつた。喋舌る方はたゞ崖の上に限られてゐた。

其代り足音丈は先刻のやうに留まらなかつた。疑ひもなく一人の女が庭下駄で不規則な石段を踏んで崖を上つて行つた。それが上り切つたと思ふ頃に、足を運ぶ女の裾が硝子戸の上部の方に少し現はれた。さうしてすぐ消えた。津田の眼に殘つた瞬間の印象は、たゞうつくしい模樣の翻る樣であつた。彼は動き去つた其模樣のうちに、昨夕階段の下から見たと同じ色を認めたやうな氣がした。

百八十

室に歸つて朝食の膳に着いた時、彼は給仕の下女と話した。

「濱の御客さんのゐる所は、新しい風呂場から見える崖の上だらう」

「えゝ。あちらへ行つて御覧になりましたか」
「いゝや、大方さうだらうと思つた丈さ」
「よく當たりましたね。ちと御遊びに入らつしやいまし、旦那も奥さんも面白い方です。退屈だ退屈だつて毎日困つてらつしやるんです」
「よつぽど長く居るのかい」
「えゝもう十日許りになるでせう」
「あれだね、義太夫を遣るつてえのは」
「えゝ、よく御存じですね、もう御聴きになりましたか」
「まだだよ。たゞ勝さんに教はつた丈だ」
彼の訊くがまゝに、二人に就いての知識を惜し氣もなく供給した下女は、それでも分を心得てゐた。急所へ來るとわざと津田の問を外した。
「時にあの女の人は一體何だね」
「奥さんですよ」
「本當の奥さんかね」
「えゝ、本當の奥さんでせう」と云つた彼女は笑ひ出した。「まさか噓の奥さんてのもないでせう、何故ですか」
「何故つて、素人にしちやあんまり粋過ぎるぢやないか」

下女は答へる代りに、突然清子を引合に出した。

「もう一人奥にいらつしやる奥さんの方が御人柄です」

間取りの關係から云つて、清子の室は津田の後、二人づれの座敷は津田の前に當たつた。兩方の中間に自分を見出だした彼は漸く首肯いた。

「すると丁度眞中邊だね、此所は」

眞中でも室が少し折れ込んでゐるので、兩方の通路にはなつてゐなかつた。

「其奥さんとあの二人の御客とは友達なのかい」

「えゝ御懇意です」

「元から？」

「さあ何うですか、其所はよく存じませんが、――大方此所へ入らしつてから御知合におなんなすつたんでせう。始終行つたり來たりして入らつしやいます、兩方とも御閑なもんですから。昨日も公園へ一所に御出掛けでした」

津田は問題を取り逃がさないやうにした。

「其奥さんは何故一人でゐるんだね」

「少し身體が御惡いんです」

「旦那さんは」

「入らつしやる時は旦那さまも御一所でしたが、すぐ御歸りになりました」

「置いてき堀か、そりや非道いな。それつきり來ないのかい」
「何でも近いうちにまた入らつしやるとかいふ事でしたが、何うなりましたか」
「退屈だらうね、奥さんは」
「ちと話しに行つて、御上げになつたら如何です」
「話しに行つても可いかね、後で訊いといて呉れ玉へ」
「へえ」と答へた下女はにや／＼笑ふ丈で本氣にしなかつた。津田は又訊いた。
「何をして暮らしてゐるのかね、其奥さんは」
「まあ御湯に入つたり、散歩をしたり、義太夫を聽かされたり、――時々は花なんか御活けになります、それから夜よく手習をしていらつしやいます」
「さうかい。本は？」
「本も御讀みになるでせう」と中途半端に答へた彼女は、津田の質問が餘り煩瑣にわたるので、とうとうあはゝと笑ひ出した。津田は漸く氣が附いて、少し狼狽てたやうに話しを外らせた。
「今朝風呂場へスリッパーを忘れていつたものがあるね、塞がつてゐるのかと思つてはじめは遠慮してゐたが、開けて見たら誰もゐなかつたよ」
「おやさうですか、ぢや又あの先生でせう」
先生といふのは書の專門家であつた。方々に掛かつてゐる額や看板で其落款を覺えてゐた津田は「へええ」と云つた。

「もう年寄だらうね」

「えゝ御爺さんです。斯んなに白い髯を生やして」

下女は胸のあたりへ自分の手を遣つて書家に相應はしい髯の長さを形容して見せた。

「成程。矢つ張り字を書いてるのかい」

「えゝ、何だか御墓に彫り附けるんだつて、大變大きなものを毎日少しづゝ書いていらつしやいます」

書家は其墓碑銘を書くのが目的で、わざ〳〵此所へ來たのだと下女から聽かされた時、津田は驚いて感心した。

「あんなものを書くのにも、そんなに暇が折れるのかなあ。素人は半日位で、すぐ出來上がりさうに考へてるんだが」

此感想は全く下女に響かなかつた。然し津田の胸には口へ出して云はないそれ以上の或物さへあつた。彼は暗に此老先生の用向きと自分の用向きとを見較べた。無事に苦しんで義太夫の稽古をするといふ濱の二人や、更に其傍に並べて見た。それから何の意味とも知れず花を活けたり手習をしたりするらしい清子も同列に置いて考へた。最後に、殘る一人の客、其客は話しもしなければ運動もせず、たゞぽかんと座敷に坐つて山を眺めてゐるといふ下女の觀察を聽いた時、彼は云つた。

「いろんな人がゐるんだね。五六人寄つてさへ斯うなんだから、夏や正月になつたら大變だらう」

「一杯になると何うしても百三四十人は入りますからね」

津田の意味をよく了解しなかつたらしい下女は、たゞ自分達の最も多忙を極めなければならない季節に、

此家へ入り込んでくる客の人數を擧げた。

百八十一

食後の津田は床の脇に置かれた小机の前に向つた。下女に賴んで取り寄せた繪葉書へ一口づゝ文句を書き足して、其表へ名宛を記した。お延へ一枚、藤井の叔父へ一枚、吉川夫人へ一枚、それで必要な分は濟んでしまつたのに、下女の持つて來た繪端書はまだ幾枚も餘つてゐた。

彼は漫然と萬年筆を手にした儘、不動の瀧だの、ルナ公園だのと、山里に似合はない變な題を附けた地方的の景色をぼんやり眺めた。それから又印氣を走らせた。今度はお秀の夫と京都にゐる兩親宛の分がまたゝく間に出來上がつた。斯う書き出して見ると、序だからといふ氣も手傳つて、あり丈の繪葉書をみんな使つて仕舞はないと義理が惡いやうにも思はれた。最初は考へてゐなかつた岡本だの、岡本の子供の一だの、其一の學校友達といふ連想から、又自分の親戚の方へ逆戻りをして、甥の眞事だの、色々な名が澤山竝べられた。初手から氣が附いてゐながら、最後迄名を書かなかつたのは小林丈であつた。他の意味は別として、たゞ在所を嗅ぎつけられるといふ恐れから、津田は何うしても此旅行先を彼に知らせたくなかつたのである。其小林は不日朝鮮へ行くべき人であつた。無檢束をもつて自ら任ずる彼は、海を渡る覺悟で既にもう汽車に搖られてゐるかも知れなかつた。同時に不規律な彼は又出立と公言した日が來ても動かずにゐないとも限らなかつた。繪端書を見て、（若し津田がそれを出すとすると）すぐ此所へ遣つて來ないといふ事は決して斷言出來なかつた。

津田は陰晴定めなき天氣を相手にして戰ふやうに厄介な此友達、もつと適切にいふと此敵、の事を考へて、思はず肩を峙てた。すると一旦緒口の開いた想像の光景は其所で留まらなかつた。彼を拉してずんずん先へ進んだ。彼は突然玄關へ馬車を横附けにする、さうして怒鳴り込むやうな大きな聲を出して彼の室へ入つてくる小林の姿を眼前に髣髴した。

「何しに來た」

「何しにでもない、貴樣を厭がらせに來たんだ」

「何ういふ理由で」

「理由も糸瓜もあるもんか。貴樣がおれを厭がる間は、何時迄經つても何處へ行つても、たゞ追掛けるんだ」

「畜生つ」

津田は突然拳を固めて小林の横つ面を撲らなければならなかつた。小林は抵抗する代りに、忽ち大の字になつて室の眞中へ踏ん反り返らなければならなかつた。

「撲つたな、此野郎、さあ何うでもしろ」

丸で舞臺の上でなければ見られないやうな活劇が演ぜられなければならなかつた。さうしてそれが宿中の視聽を聳やかさなければならなかつた。其中には是非とも清子が交じつてゐなければならなかつた。萬事は永久に打ち碎かれなければならなかつた。

事實よりも明瞭な想像の一幕を、描くともなく頭の中に描き出した津田は、突然ぞつとして我に返つた。

もしそんな馬鹿げた立ち廻りが實際生活の表面に現はれたら何うしようと考へた。彼は羞恥と屈辱を遠くの方に感じた。それを象徴するために、頬の内側が熱つて來るやうな氣さへした。

然し彼の批判はそれぎり先へ進めなかつた。他に對して面目を失ふ事、萬一そんな不始末をしでかしたら大變だ。これが彼の倫理觀の根柢に横たはつてゐる丈であつた。それを切り詰めると、遂に外聞が惡いといふ意味に歸着するより外に仕方がなかつた。だから惡い奴はたゞ小林になつた。

「おれに何の不都合がある。彼奴さへゐなければ」

彼は斯う云つて想像の幕に登場した小林を責めた。さうして自分を不面目にする凡ての責任を相手に背負はせた。

夢のやうな罪人に宣告を下した後の彼は、すぐ心の調子を入れ代へて、紙入の中から一枚の名刺を出した。其裏に萬年筆で「僕は靜養のため昨夜此所へ來ました」と書いたなり首を傾けた。それから「貴女が御出での事を今朝聽きました」と附け足して又考へた。

「是ぢや空々しくつて不可ない、昨夜會つた事も何とか書かなくつちや」

然し當り障りのないやうに其所へ觸れるのは一寸困難であつた。第一書く事が複雜になればなる程、文字が多くなつて一枚の名刺では事が足りなくなる丈であつた。彼は成るべく淡泊した口上を傳へたかつた。從つて小面倒な封書などは使ひたくなかつた。

思ひ附いたやうに違ひ棚の上を眺めた彼は、まだ手を附けなかつた吉川夫人の贈物が、昨日の儘でちやんと載せてあるのを見て、すぐそれを下へ卸ろした。彼は果物籃の蓋の間へ、「御病氣は如何ですか。是は

吉川の奥さんからの御見舞です」と書いた名刺を挿し込んだ後で、下女を呼んだ。

「宅に關さんといふ方が御出でだらう」

今朝給仕をしたのと同じ下女は笑ひ出した。

「關さんが先刻御話しした奥さんの事ですよ」

「左右か。おや其奥さんで可いから、是を持つて行つて上げて呉れ。さうしてね、もし御差支へがなければ一寸御目に掛かりたいつて」

「へえ」

下女はすぐ果物籃を提げて廊下へ出た。

百八十二

返事を待ち受ける間の津田は居据りの悪い置物のやうに落ち附かなかつた。ことにすぐ歸つて來べき筈の下女が思つた通りすぐ歸つて來ないので、彼は猶の事心を遣つた。

「まさか斷るんぢやあるまいな」

彼が吉川夫人の名を利用したのは、既に萬一を顧慮したからであつた。夫人とさうして彼女の見舞品、此二つは、それを屆ける津田に對して、清子の束縛を解く好い方便に違ひなかつた。單に彼と應接する煩はしさ、もしくはそれから起り得る嫌疑を避けようとするのが彼女の當體であつたにした所で、果物籃の禮はそれを持つて來た本人に會つて云ふのが順であつた。誰が何う考へても無理のない名案を工夫したと

信ずる丈に、下女の混ぜ返しを一層苦にしなければならなかつた彼は、吸ひ掛けた煙草を捨てゝ、縁側へ出たり、何のためとも知れず、默つて池の中を動いてゐる緋鯉を眺めたり、其所へしやがんで、軒下に寝てゐる犬の鼻面へ手を延ばして見たりした。やつとの事で、下女の足音が廊下の曲り角に聴こえた時、わざと取り繕つた餘裕を外側へ示したくなる程、彼の心はそは〳〵してゐた。

「何うしたね」

「御待遠さま。大變遅かつたでせう」

「なに左右でもないよ」

「少し御手傳ひをしてゐたもんですから」

「何の？」

「御部屋を片附けてね、それから奥さんの御髪を結つて上げたんですよ　それにしちや早いでせう」

津田は女の髷がそんなに雑作なく結へる譯のものでないと思つた。

「銀杏返しかい、丸髷かい」

下女は取り合はずにたゞ笑ひ出した。

「まあ行つて御覧なさい」

「行つて御覧なさいつて、行つても可いのかい。其返事を先刻から斯うして待つてるんぢやないか」

「おや何うも濟みません、肝心の御返事を忘れてしまつて。――どうぞ御出で下さいましつて」

漸と安心した津田は、立ち上がりながらわざと冗談半分に駄目を押した。

「本當かい。迷惑ぢやないかね。向うへ行つてから氣の毒な思ひをさせられるのは厭だからね」
「旦那樣は隨分疑り深い方ですね。それぢや奧さんも嘸―」
「奧さんとは誰だい、闇の奧さんかい、それとも僕の奧さんかい」
「何方だか解つてるぢやありませんか」
「いや解らない」
「さうで御座いますか」
兵兒帶を締め直した津田の後へ廻つた下女は、室を出ようとする背中から羽織を掛けて呉れた。
「此方かい」
「今御案内を致します」
下女は先へ立つた。夢遊病者として昨夕彷徨つた記憶が、例の姿見の前へ出た時、突然津田の頭に閃めいた。
「あゝ此所だ」
彼は思はず斯う云つた。事情を知らない下女は無邪氣に訊き返した。
「何がです」
津田はすぐ胡魔化した。
「昨夕僕が幽靈に出會つたのは此所だといふのさ」
下女は變な顏をした。

「馬鹿を仰しやい。宅に幽靈なんか出るもんですか。そんな事を仰しやると――」

客商賣をする宿に對して惡い洒落を云つたと悟つた津田は、賢く二階を見上げた。

「此上だらう、關さんの御室は」

「えゝ、よく知つてらつしやいますね」

「うん、そりや知つてるさ」

「天眼通ですね」

「天眼通ぢやない、天鼻通と云つて萬事鼻で嗅ぎ分けるんだ」

「丸で犬見たいですね」

階子段の途中で始まつた此會話は、上り口の一番近くにある淸子の部屋からもう聽き取れる距離にあつた。津田は暗にそれを意識した。

「序に僕が關さんの室を嗅ぎ分けて遣るから見てゐろ」

彼は淸子の室の前へ來て、ぱたりとスリッパーの音を止めた。

「此所だ」

下女は橫眼で津田の顏を睨めるやうに見ながら吹き出した。

「どうだ當たつたらう」

「成程貴方の鼻は好く利きますね。獵犬より慥かですよ」

下女は又面白さうに笑つたが、室の中からは此賑やかさに對する何の反應も出て來なかつた。人がゐる

かゐない、か丸で分らない内側は、始めと同じやうに森閑してゐた。
「御客さまが入らつしやいました」
下女は外部から清子に話しかけながら、建てつけの好い障子をすうと開けて呉れた。
「御免下さい」
一言の挨拶と共に室の中に入つた津田はおやと思つた。彼は自分の豫期通り清子をすぐ眼の前に見出し得なかつた。

百八十三

室は二間續きになつてゐた。津田の足を踏み込んだのは、床のない控の間の方であつた。黒柿の緣と臺の附いた長方形の鏡の前に横竪縞の厚い座蒲團を据ゑて、其傍に桐で拵へた小型の長火鉢が、普通の家庭に見る茶の間の體裁を、小規模ながら髣髴せしめた。隅には黒塗の衣桁があつた。異性に附着する花やかな色と手觸りの滑こさうな絹の縞が、折り重なつて其所に投げ掛けられてゐた。
間の襖は開け放たれた儘であつた。津田は正面に當る床の間に活け立てらしい寒菊の花を見た。前には座蒲團が二つ向ひ合せに敷いてあつた。濃茶に染めた縮緬のなかに、牡丹か何かの模様をたつた一つ丸く白に殘した其敷物は、品柄から云つても、また來客を待ち受ける準備としても、物々しいものであつた。
津田は席に就かない先にまづ直感した。
「凡てが改まつてゐる。是が今日會ふ二人の間に横たはる運命の距離なのだらう」

突然としてこゝに氣の附いた彼は、今此室へ入り込んで來た自分を咄嗟に悔いようとした。

然し此距離は何處から起つたのだらう？　考へれば起るのが當り前であつた。津田はたゞそれを忘れてゐた丈であつた。では、何故それを忘れてゐたのだらう？　考へれば、是も忘れてゐるのが當り前かも知れなかつた。

津田が斯んな感想に囚へられて控の間に立つたまゝ、室を出るでもなし、席に就くでもなし、うつかり眼前の座蒲團を眺めてゐる時に、主人側の淸子は始めて其姿を縁側の隅から現はした。それ迄彼女が其所で何をしてゐたのか、津田には一向解せなかつた。又何のために彼女がわざ／＼其所へ出てゐたのか、それも彼には通じなかつた。或は室を片附けてから、彼の來るのを待ち受ける間、欄干の隅に倚りかゝつてもして、山に重なる黄葉の色でも眺めてゐたのかも知れなかつた。それにしても様子が變であつた。有體に云へば、客を迎へるといふより偶然客に出つ喰はしたといふのが、此時の彼女の態度を評するには適當な言葉であつた。

然し不思議な事に此態度は、鹿爪らしく彼の着席を待ち受ける座蒲團や、二人の間を堰くためにわざと眞中に置かれたやうに見える角火鉢程彼の氣色に障らなかつた。といふのは、それが元から彼の頭に描き出されてゐる淸子と、全く釣り合はない迄に懸け離れた態度でもなかつたからである。

津田の知つてゐる淸子は決してせゝこましい女でなかつた。彼女は何時でも優悠してゐた。何方かと云へば寧ろ緩漫といふのが、彼女の氣質、又は其氣質から出る彼女の動作に就いて下し得る特色かも知れなかつた。彼は常に其特色に信を置いてゐた。さうして其特色に信を置き過ぎたため、却つて裏切られた。少

なくとも彼はさう解釋した。さう解釋しつゝも當時に出來上つた信はまだ不自覺の間に殘つてゐた。突如として彼女が關と結婚したのは、身を翻す燕のやうに早かつたかも知れないが、それはそれ、是は是であつた。二つのものを結び附けて矛盾なく考へようとする時、惱亂は始めて起るので、離して眺めれば、甲が事實であつた如く、乙も矢つ張り本當でなければならなかつた。

「あの緩い人は何故飛行機へ乘つた。彼は何故宙返りを打つた」

疑ひは正しく其所へ宿るべき筈であつた。けれども疑はうが疑ふまいが、事實は遂に事實だから、決してそれ自身に消滅するものでなかつた。

反逆者の清子は、忠實なお延より此點に於て仕合せであつた。もし津田が室に入つて來た時、彼の氣合を拔いて、間の合はない時分に、わざと縁側の隅から顏を出したものが、清子でなくつて、お延だつたなら、それに對する津田の反應は果して何うだらう。

「又何か細工をするな」

彼はすぐ斯う思ふに違ひなかつた。所がお延でなくつて、清子によつて同じ所作が演ぜられるとなると結果は全然別になつた。

「相變らず緩漫だな」

緩漫と思ひ込んだ揚句、現に眼覺ましい早技で取つて投げられてゐながら、津田は斯う評するより外に仕方がなかつた。

其上清子はたゞ間を外した丈ではなかつた。彼女は先刻津田が吉川夫人の名前で贈りものにした大きな

果物籃を兩手でぶら提げたまゝ、縁側の隅から出て來たのである。どういふ積りか、今迄それを荷厄介にしてゐるといふ事自身が、津田に對しての冷淡さを示す度盛にならないのは明らかであつた。それから其重い物を今迄縁側の隅で持つてゐたとすれば無論、一旦下へ置いて更に取り上げたと解釋しても、彼女の所作は變に違ひなかつた。少なくとも不器用であつた。何だか子供染みてゐた。然し彼女の平生をよく知つてゐる津田は、其所に如何にも清子らしい或物を認めざるを得なかつた。

「滑稽だな。如何にも貴女らしい滑稽だ。さうして貴女はちつとも其滑稽な所に氣が附いてゐないんだ」

重さうに籃を提げてゐる清子の樣子を見た津田は、殆ど斯う云ひたくなつた。

百八十四

すると清子は其籃をすぐ下女に渡した。下女は何うして可いか解らないので、器械的に手を出してそれを受取つたなり、默つてゐた。此單純な所作が雙方の間に行はれるあひだ、津田は依然として立つてゐなければならなかつた。然し普通の場合に起る手持無沙汰の感じの代りに、却て一種の氣樂さを味はつた彼には何の苦痛も來ずに濟んだ。彼はたゞ間の延びた擧動の引續きとして、平生の清子と矛盾しない意味からそれを眺めた。だから昨夜の記憶からくる不審も一倍に強かつた。此逼らない人が、何うしてあんなに蒼くなつたのだらう。何うしてあゝ硬く見えたのだらう。あの驚き具合と此落附き方、それ丈は何う考へても調和しなかつた。彼は夜と晝の區別に生れて初めて氣が附いた人のやうな心持がした。

彼は招ぜられない先に、まづ自分から設けの席に着いた。さうして立ちながら果物を皿に盛るべく命じ

てゐる清子を見上げた。

「何うも御土産を難有う」

是が始めて彼女の口を洩れた挨拶であつた。而して其御土産を持つて来た人から、其土産を呉れた人の好意に及ばなければならなかつた。もと〳〵嘘を吐く覚悟で吉川夫人の名前を利用した其時の津田には、もう胡魔化すといふ意識すらなかつた。

「道伴れになつた御爺さんに、もう少しで蜜柑を遣つちまふ所でしたよ」

「あら何うして」

津田は何と答へようが平気であつた。

「あんまり重くつて荷になつて困るからです」

「ぢや来る途中始終手にでも提げていらしつたの」

津田には此質問が如何にも清子らしく無邪気に聴こえた。

「馬鹿にしちや不可ません。貴方ぢやあるまいし、斯んなものを提げて、処々を彼方へ行つたり此方へ来たりしてゐられるもんですか」

清子はたゞ微笑した丈であつた。其微笑には弁解がなかつた。云ひ換へれば一種の余裕があつた。嘘から出立した津田の心は益平気になるばかりであつた。

「相変らず貴女は何時でも苦がなささうで結構ですね」

「えゝ」

「些とももとと變りませんね」
「えゝ、だつて同じ人間ですもの」
此挨拶を聞くと共に、津田は急に何か皮肉を云ひたくなつた。其時皿の中へ問題の蜜柑を盛り分けてゐた下女が突然笑ひ出した。
「何を笑ふんだ」
「でも、奧さんの仰しやる事が可笑しいんですもの」と辯解した彼女は、眞面目な津田の樣子を見て、後からそれを具體的に說明すべく餘儀なくされた。
「成程、さうに違ひ御座いませんね。生きてるうちはどなたも同じ人間で、生れ變りでもしなければ、誰だつて違つた人間になれつこないんだから」
「所が左右でないよ。生きてる癖に生れ變る人がいくらでもあるんだから」
「へえ左右ですかね。そんな人があつたら、ちつと御目に掛りたいもんだけれども」
「御望みなら逢はせて遣つても可いがね」
「何うぞ」といつた下女は又げら／＼笑ひ出した。「又是でせう」
彼女は人指し指を自分の鼻の先へ持つて行つた。
「旦那樣の是にはとても敵ひません。奧さまの御部屋なんかちやんと臭ひで嗅ぎ分ける方なんですから」
「部屋所ぢやないよ。御前の年齡から原籍から、生れ故鄕から、何から何迄中てるんだよ。此鼻一つあれば」

「へえ恐ろしいもんで御座いますね。――何うも敵はない、旦那樣に會つちや」

下女は斯う云つて立ち上がつた。然し室を出掛けに又一句の諛辭を津田に浴びせた。

「旦那樣は嘸御上手で入らつしやいませうね」

日當りの好い南向きの座敷に取り殘された二人は急に靜かになつた。津田は緣側に面して日を受けて坐つてゐた。清子は欄干を背にして日に背いて坐つてゐた。津田の席から向うに見える山の襞が、幾段にも重なり合つて、日向日裏の區別を明らさまに描き出す景色が手に取るやうに眺められた。それを彩どる黄葉の濃淡が又鮮やかな陰影の等差を彼の眸中に送り込んだ。然し眼界の豁い空間に對してゐる津田と違つて、清子の方は何の見るものもなかつた。見れば北側の障子と、其障子の一部分を遮る津田の影像丈であつた。彼女の視線は窮屈であつた。然し彼女はあまりそれを苦にする樣子もなかつた。お延ならすぐ姿勢を改めずにはゐられないだらうといふ所を、彼女は寧ろ落附いてゐた。

彼女の顏は、昨夕と反對に、津田の知つてゐる平生の彼女よりも少し紅かつた。然しそれは強い秋の光線を直下に受ける生理作用の結果とも解釋された。山を眺めた津田の眼が、端なく上氣した時の樣に紅く染まつた清子の耳朶に落ちた時、彼は腹のうちでさう考へた。彼女の耳朶は薄かつた。さうして位置の關係から、肉の裏側に差し込んだ日光が、其所に寄つた彼女の血潮を通過して、始めて津田の眼に映つてくるやうに思はれた。

百八十五

斯んな場合に何方が先へ口を利き出すだらうか、もし相手がお延だとすると、事實は考へる迄もなく明瞭であつた。彼女は津田に一寸の餘裕も與へない女であつた。其代り自分にも五分の寛ぎさへ殘して置く事の出來ない性質に生れ附いてゐた。彼女はたゞ隨時隨所に精一杯の作用を恣にする丈であつた。勢ひ津田は始終受身の働きを餘儀なくされた。さうして彼女に應戰すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗めなければならなかつた。

　所が清子を前へ据ゑると、其所に全く別種の趣が出て來た。段取りは急に逆になつた。相撲で云へば、彼女は何時でも津田の聲を受けて立つた。だから彼女を向うへ廻した津田は、必ず積極的に作用した。それも十が十迄樂々と出來た。

　二人取り殘された時の彼は、取り殘された後で始めて此特色に氣が附いた。氣が附くと昔の女に對する過去の記憶が何時の間にか蘇生してゐた。今迄彼の豫想しつゝあつた手持無沙汰の感じが、丁度其手持無沙汰の起らなければならないと云ふ間際へ來て、不思議にも急に消えた。彼は伸び／＼した心持で清子の前に坐つてゐた。さうしてそれは彼が彼女の前で、事件の起らない過去に經驗したものと大して變つてゐなかつた。少なくとも同じ性質のものに違ひないといふ自覺が彼の胸のうちに起つた。從つて談話の途切れた時積極的に動き始めたものは、昔の通り彼であつた。然も昔の通りな氣分で動けるといふ事自身が、彼には思ひ掛けない滿足になつた。

「關君はどうしました。相變らず御勉強ですか。其後御無沙汰をして一向御目に掛かりませんが」

津田は何の氣も附かなかつた。會話の皮切りに清子の夫を問題にする事の可否は、利害關係から見ても、

今日迄自分等二人の間に起つた感情の行き掛りの上から考へても、又それ等の纏綿した情實を傍に置いた、自然不自然の批判から云つても、實は一應遠慮しなければならない點であつた。それを平生の細心に似ず、一顧の懸念さへなく、たゞ無雜作に口頭に上した津田は、正に居常お延に對する時の用意を取り忘れてゐたに違ひなかつた。

然し相手は既にお延でなかつた。津田の其用心を忘れても差支へなかつたといふ證據は、すぐ清子の挨拶振で知れた。彼女は微笑して答へた。

「えゝ難有う。まあ相變らずです。時々二人して貴方の御噂を致して居ります」

「あゝさうですか。僕も始終忙しいもんですから、方々へ失禮ばかりして……」

「良人も同じよ、あなた。近頃ぢや閑暇な人は、丸で生きてゐられないのと同じ事ね。だから自然御互に遠々しくなるんですわ。だけれどもそれは仕方がないわ、自然の成行だから」

「さうですね」

斯う答へた津田は、「さうですね」といふ代りに「さうですか」と訊いて見たいやうな氣がした。「さうですか、たゞそれ丈で疎遠になつたんですか。それが貴女の本音ですか」といふ詰問は此時既に無言の文句となつて彼の腹の中に藏れてゐた。

然も彼は殆ど以前と同じやうに單純な、もしくは單純とより解釋の出來ない清子を眼前に見出だした。

彼女の態度には二人の間に關を話題にする丈の餘裕がちやんと具はつて居た。それを口にして苦にならない程の淡泊さが現はれて居た。たゞそれは津田の暗に豫期して掛かつた所のもので、同時に彼の曾て豫想

し得なかつた所のものに違ひなかつた。昔の儘の女主人公に再び會ふ事が出來たといふ滿足は、彼女が其昔の儘の鷹揚な態度で、關の話を平氣で津田の前にし得るといふ不滿足と一所に來なければならなかつた。

「何うしてそれが不滿足なのか」

津田は面と向つて此質問に對する丈の勇氣がなかつた。關が現に彼女の夫である以上、彼は敬意をもつて彼女の此態度を認めなければならなかつた。けれどもそれは表通りの沙汰であつた。偶然往來を通る他人のする批評に過ぎなかつた。裏には別な見方があつた。其所には無關心な通り掛りの人と違つた自分といふものが頑張つてゐた。さうして其自分に「私」といふ名を命ける事の出來なかつた津田は、飽く迄もそれを「特殊な人」と呼ばうとしてゐた。彼の所謂特殊な人とは卽ち素人に對する黑人であつた。無知者に對する有識者であつた。もしくは俗人に對する專門家であつた。だから通り一遍のものより餘計に口を利く權利を有つてゐるとしか、彼には思へなかつた。

表で認めて裏で首肯はなかつた津田の樣子に對する心持は、何かの形式で外部へ發現するのが當然であつた。

百八十六

「昨夕は失禮しました」

津田は突然斯う云つて見た。それが何んな風に相手を動かすだらうかといふのが、彼の覘ひ所であつた。

「私こそ」

清子の返事はすら〳〵と出た。其所に何の苦痛も認められなかつた時に津田は疑つた。
「此女は今朝になつてもう夜の驚きを繰り返す事が出來ないのかしら」
もしそれを憶ひ起す能力すら失つてゐるとすると、彼の使命は善にもあれ惡にもあれ、果敢ないものであつた。
「實は貴女を驚かした後で、濟まない事をしたと思つたのです」
「ぢや止して下されば可かつたのに」
「止せば可かつたのです。けれども知らなければ仕方がないぢやありませんか。貴方が此所に入らつしやらうとは夢にも思ひ掛けなかつたのですもの」
「でも私への御土産を持つて、わざ〳〵東京から來て下すつたんでせう」
「それは左右です。けれども知らなかつた事も事實です。昨夕は偶然御眼に掛かつた丈です」
「さうですか知ら」
故意を昨夕の津田に認めてゐるらしい清子の口吻が、彼を驚かした。
「だつて、わざとあんな眞似をする譯がないぢやありませんか、なんぼ僕が醉興だつて」
「だけど貴方は大分彼所に立つていらつしつたらしいのね」
津田は水盤に溢れる水を眺めてゐたに違ひなかつた。姿見に映るわが影を見詰めてゐたに違ひなかつた。最後に其所にある櫛を取つて頭迄梳いて愚圖々々してゐたに違ひなかつた。
「迷兒になつて、行く先が分らなくなりや仕方がないぢやありませんか」

「さう。そりや左右ね。けれども私には左右思へなかつたんですもの」
「僕が待ち伏せをしてゐたとでも思つてるんですか、冗談ぢやない。いくら僕の鼻が萬能だつて、貴女の溫泉に入る時間迄分りやしませんよ」
「成程、そりや左右ね」
清子の口にした成程といふ言葉が、如何にも成程と合點したらしい調子を帶びてゐるので、津田は思はず吹き出した。
「一體何だつて、そんな事を疑つていらつしやるんです」
「そりや申し上げないだつて、御解りになつてる筈ですわ」
「解りつこないぢやありませんか」
「ぢや解らないでも構はないわ。說明する必要のない事だから」
津田は仕方なしに側面から向つた。
「それでは、僕が何のために貴女を廊下の隅で待ち伏せてゐたんです。それを話して下さい」
「そりや話せないわ」
「さう遠慮しないでも可いから、是非話して下さい」
「遠慮ぢやないのよ、話せないから話せないのよ」
「然し自分の胸にある事ぢやありませんか。話さうと思ひさへすれば、誰にでも話せる筈だと思ひますがね」

單純な此の一言は急に津田の機鋒を挫いた。同時に、彼の語勢を飛躍させた。
「なければ何處から其疑ひが出て來たんです」
「もし疑るのが惡ければ、謝ります。さうして止します」
「だけど、もう疑つたんぢやありませんか」
「だつてそりや仕方がないわ。疑つたのは事實ですもの。其事實を白狀したのも事實ですもの。いくら謝つたつて何うしたつて事實を取り消す譯には行かないんですもの」
「だから其事實を聽かせて下されば可いんです」
「事實は既に申し上げたぢやないの」
「それは事實の半分か、三分一です。僕は其全部が聽きたいんです」
「困るわね。何といつて御返事をしたら可いんでせう」
「譯ないぢやありませんか。斯ういふ理由があるから、さういふ疑ひを起したんだつて云ひさへすれば、たつた一口で濟んぢまふ事です」
今迄困つてゐたらしい清子は、此時急に腑に落ちたといふ顏附をした。
「あゝ、それが御聽きになりたいの」
「無論です。先刻からそれが伺ひたければこそ、斯うして執拗く貴女を煩はせてゐるんぢやありませんか。それを貴女が隱さうとなさるから――」

「そんならさうと早く仰しやれば可いのに、私隠しも何もしませんわ、そんな事。理由は何でもないのよ。たゞ貴方はさういふ事をなさる方なのよ」
「待伏せをですか」
「えゝ」
「馬鹿にしちや不可ません」
「でも私の見た貴方はさういふ方なんだから仕方がないわ。嘘でも偽りでもないんですもの」
「成程」
津田は腕を拱いて下を向いた。

百八十七

しばらくして津田は又顔を上げた。
「何だか話しが議論のやうになつてしまひましたね。僕はあなたと問答をするために来たんぢやなかつたのに」
清子は答へた。
「私にもそんな氣はちつともなかつたの。つい自然其所へ持つて行かれてしまつたんだから故意ぢやないのよ」
「故意でない事は僕も認めます。つまり僕があんまり貴女を問ひ詰めたからなんでせう」

「まあさうね」
清子は又微笑した。津田は其微笑のうちに、例の通りの餘裕を認めた時、我慢しきれなくなつた。
「ぢや問答序に、もう一つ答へて呉れませんか」
「えゝ何なりと」
清子はあらゆる津田の質問に應ずる準備を整へてゐる人のやうな答へ振をした。それが質問を掛けない前に、少なからず彼を失望させた。
「何もかももう忘れてゐるんだ、此人は」
斯う思つた彼は、同時にそれが又清子の本來の特色である事にも氣が附いた。彼は駄目を押すやうな心持になつて訊いた。
「然し昨夕階子段の上で、貴女は蒼くなつたぢやありませんか」
「なつたでせう。自分の顔は見えないから分りませんけれども、貴方が蒼くなつたと仰しやれば、それに違ひないわ」
「へえ、すると貴女の眼に映する僕はまだ全くの噓吐きでもなかつたんですね、難有い。僕の認めた事實を貴女に承認して下さるんですね」
「承認しなくつても、實際蒼くなつたら仕方がないわ、貴方」
「さう。――それから硬くなりましたね」
「えゝ、硬くなつたのは自分にも分つてゐましたわ。もう少しあの儘で我慢してゐたら倒れたかも知れ

ないと思つた位ですもの」

「つまり驚いたんでせう」

「えゝ隨分吃驚したわ」

「それで」と云ひ掛けた津田は、俯向き加減になつて丁寧に林檎の皮を剝いてゐる清子の手先を眺めた。滴るやうに色附いた皮が、ナイフの刃を洩れながら、ぐる／＼と剝けて落ちる後に、水氣の多さうな薄蒼い肉が次第に現はれて來る變化は彼に一年以上經つた昔を憶ひ起させた。

「あの時この人は、丁度斯ういふ姿勢で、斯ういふ林檎を剝いて呉れたんだつけ」

ナイフの持ち方、指の運び方、兩肘を膝とすれ／＼にして、長い袂を外へ開いてゐる具合、ことごとく其時の模寫であつたうちに、たゞ一つ違ふ所のある點に津田は氣が附いた。それは彼女の指を飾る美しい二個の寶石であつた。若しそれが彼女の結婚を永久に記念するならば、其ぎら／＼した小さい光程、津田と彼女の間を鋭く遮るものはなかつた。不斷に動く彼女の手先を見詰めてゐる彼の眼は、當時を回想するうつとりした夢の消息のうちに、燦然たる警戒の閃きを認めなければならなかつた。

彼はすぐ清子の手から眼を放して、其髪を見た。然し今朝下女が結つて遣つたといふ其髪は通例の庇であつた。何の奇も認められない黑い光澤が、櫛の齒を入れた痕を、行儀正しく竪に殘してゐる丈であつた。

津田は思ひ切つて、一旦捨てようとした言葉を又取り上げた。

「夫で僕の訊きたいのはですね――」

清子は顔を上げなかつた。津田はそれでも構はずに後を續けた。

「昨夕そんなに驚いた貴女が、今朝は又何うしてそんなに平氣でゐられるんでせう」
清子は俯向いた儘答へた。
「何故」
「僕にや其心理作用が解らないから伺ふんです」
清子は矢っ張り津田を見ずに答へた。
「心理作用なんて六づかしいものは私にも解らないわ。たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。それ丈よ」
「説明はそれ丈なんですか」
「えゝそれ丈よ」
もし芝居をする氣なら、津田は此所で一つ溜息を吐く所であつた。けれども彼には押し切つてそれを遣る勇氣がなかつた。此女の前にそんな眞似をしても始まらないといふ氣が、技巧に走らうとする彼を何處となく抑へ附けた。
「然し貴女は今朝何時もの時間に起きなかつたぢやありませんか」
清子は此問を掛けるや否や顏を上げた。
「あら何うしてそんな事を御承知なの」
「ちやんと知つてるんです」
清子は一寸津田を見た眼をすぐ下へ落とした。さうして綺麗に剝いた林檎に刃を入れながら答へた。
「成程貴方は天眼通でなくつて天鼻通ね。實際好く利くのね」

冗談とも諷刺とも眞面目とも片の附かない此一言の前に、津田は退避いだ。

清子は漸く剝き終つた林檎を津田の前へ押し遣つた。

「貴方いかゞ」

百八十八

津田は清子の剝いてくれた林檎に手を觸れなかつた。

「貴女いかゞです、折角吉川の奥さんが貴女のためにといつて贈つてくれたんですよ」

「さうね、さうして貴方が又わざ〳〵それを此所迄持つて來て下すつたんですね。その御親切に對しても頂かなくつちや惡いわね」

清子は斯う云ひながら、二人の間にある林檎の一片を手に取つた。然しそれを口へ持つて行く前に又訊いた。

「然し考へると可笑しいわね、一體何うしたんでせう」

「何が何うしたんです」

「私吉川の奥さんに御見舞を頂かうとは思はなかつたのよ。それから其御見舞をまた貴方が持つて來て下さらうとは猶更思はなかつたのよ」

津田は口のうちで「さうでせう、僕でさへそんな事は思はなかつたんだから」と云つた。其顏を眤と見守つた清子の眼に、判然した答を津田から待ち受けるやうな豫期の光が射した。彼は其光に對する特殊な

記憶を呼び起した。

「あゝ此眼だつけ」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景が、あり／＼と津田の前に浮き上がつた。其時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じてゐた。だから凡ての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を擧げて、彼の上に投げ掛けるやうに見えた。從つて彼女の眼は動いても靜かであつた。何か訊かうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼は其輝きを一人で專有する特權を有つて生れて來たやうな氣がした。自分があればこそ此眼も存在するのだとさへ思つた。

二人は遂に離れた。さうして又會つた。自分を離れた以後の清子に、昔の儘の眼が、昔と違つた意味で、矢つぱり存在してゐるのだと注意されたやうな心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。

「それは貴女の美しい所です。けれどももう私を失望させる美しさに過ぎなくなつたのですか。判然教へて下さい」

津田の疑問と清子の疑問が暫時視線の上で行き合つた後、最初に眼を退いたものは清子であつた。津田は其退き方を見た。さうして其所にも二人の間にある意氣込の相違を認めた。彼女は何處迄も逼らなかつた。何うでも構はないといふ風に、眼を餘所へ持つて行つた彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落とした。

眼で逃げられた津田は、口で追つ掛けなければならなかつた。

「なんぼ僕だつて唯吉川の奥さんの使に來た丈ぢやありません」

「でせう、だから變なのよ」

「ちつとも變な事はありませんよ。僕は僕で獨立して此所へ來ようと思つてる所へ、奥さんに會つて、始めて貴女の此所にいらつしやる事を聽かされた上に、つい御土産迄頼まれちまつたんです」

「さうでせう。さうでもなければ、何う考へたつて變ですからね」

「いくら變だつて偶然といふ事も世の中にはありますよ。さう貴女のやうに……」

「だからもう變ぢやないのよ。譯さへ伺へば、何でも當り前になつちまふのね」

津田はつい「此方でも其譯を訊きに來たんだ」と云ひたくなつた。然し何も其所に頓着してゐないらしい清子の質問は正直であつた。

「それで貴方も何處か御惡いの」

津田は言葉少なに病氣の顚末を說明した。清子は云つた。

「でも結構ね、貴方は。さういふ時に會社の方の御都合が附くんだから。其所へ行くと良人なんか氣の毒なものよ、朝から晩迄忙しさうにして」

「關君こそ醉興なんだから仕方がない」

「可哀相に、まさか」

「いや僕のいふのは善い意味での醉興ですよ。つまり勉強家といふ事です」

「まあ、御上手だ事」

此時下から急ぎ足で階子段を上つて來る草履の音が聽こえたので、何か云はうとした津田は默つて樣子

を見た。すると先刻とは違つた下女が其所へ顏を出した。

「あの濱の御客さまが、奥さまに御午から瀧の方へ散歩に御出でになりませんか、伺つて來いと仰しやいました」

「御供しませう」清子の返事を聽いた下女は、立ち際に津田の方を見ながら「旦那樣も一所に入らつしやいまし」と云つた。

「難有う。時にもう御午なのかい」

「えゝ只今御飯を持つて參ります」

「驚いたな」

津田は漸く立ち上がつた。

「奥さん」と云はうとして、云ひ損なつた彼はつい「清子さん」と呼び掛けた。

「貴女は何時頃迄御出でです」

「豫定なんか丸でないのよ。宅から電報が來れば、今日にでも歸らなくつちやならないわ」

津田は驚いた。

「そんなものが來るんですか」

「そりや何とも云へないわ」

清子は斯う云つて微笑した。津田は其微笑の意味を一人で說明しようと試みながら自分の室に歸つた。

——未完——

昭和四年九月一日印刷
昭和四年九月五日發行

漱石全集第十卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　東京市神田區南神保町十六番地　漱石全集刊行會

右代表者　岩波茂雄

印刷者　東京市本所區番場町二番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町二番地　凸版印刷株式會社本所工場

（大森製本）

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03172 2077